

# 王子な姫君の国王救出 物語【水晶戦記】

本丸 ゆう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔王の《王族狩り》から奇跡的に生き残ったオリアンナ姫は、身分を隠し辺境の城塞都市で領主家の男子オーリンとして育った。

屍食鬼に覆われたエステラーン王国から、年に一度、聖鳥の助けを借りて会いに来る婚約者であるセルジン王に恋心を抱くが、王の時間は十五年前から止まったまま。

ようやく王の影が迎えに来るも、婚約を破棄され、最後の《王族》として女王となるよう要求、王配候補を宛がわれる。

王の婚約者に戻るため、何より愛する王を助けるためには、《ソムレキアの宝剣》を手に入れ、魔王のいる王城へ行かなければならない。

それなのに父の故国、隣国アルマレーク共和国から勝手に決められた婚約者がやって来て、オリアンナ姫を連れ去ろうとする。

多くの罟が仕掛けられ、ありえざる者達の介入、オリアンナ姫自身も知らない生存の秘密が救出劇を歪めていく。

王国の暗黒の歴史に絡め取られながら、愛する国王を人間に戻す為、国王軍と竜騎士達の助けを借りて、国王救出のために男装の姫君が頑張るファンタジー物語。

「小説家になろう」「アルファポリス」で重複投稿しています。

更新は不定期です。

画像は自作しています。

# 目次

## 第一章 レント城塞

### プロローグ

### 第一話 影の王の婚約破棄



9

### 第二話 《聖なるレントの泉》

### 第三話 僕の役割

### 第四話 運命の竜騎士

### 第五話 異国の婚約者

### 第六話 王の婚約者？

### 第七話 竜と特使

### 第八話 滅びの予兆

### 第九話 姫君の眼差し

1

第十話 僕は負けない

第十一話 義兄ハラルド

第十二話 《王族》の魔力

第十三話 魔王の罠

第十四話 《契約者》ハラルド

147

第十五話 竜の指輪

第十六話 もう一人のオーリン

168

第十七話 宝剣は何処にある？

181

第十八話 テオフィルスの脅威

192

105

115

126

136

157

95

85

75

65

55

44

33

21



第二話	計画の実行	388
番外編	彼女を口説く十の方法(一)	
398	彼女を口説く十の方法(二)	
番外編	彼女を口説く十の方法(二)	
408		
第三話	大学図書館	419
第四話	黄金の本の首飾り	429
第五話	謎の部屋	441
第六話	呪の魔法	450
第七話	揺れる心	460
第八話	竜騎士の血	470
第九話	ハンカチの意味	479
第十話	モラスの騎士総隊長ルデイ	

	ナ	
	第十一話	白い闇に潜む者
	第十二話	霧の中の正義
	第十三話	〈成人の儀〉
	第十四話	《聖なるメイダールの泉》
527		
	第十五話	手掛かり
	第十六話	希望の魔剣
	第十七話	守りの風
	第十八話	霧に映る者
	第十九話	書箱の秘密
	第二十話	部屋への入口
	第二十一話	ウロポロス
		循環する
		490
		500
		509
		518
		536
		545
		554
		564
		574
		584

	第二十二話	王の決断	605	第九話	イリの望み	722
	——	第二章の登場人物	618	第十話	竜の葬列(一)	733
	第三章	トレヴダール		第十話	竜の葬列(二)	745
	第一話	くちづけ	623	第十一話	王の怒り	755
	第二話	招かざる来訪者	635	第十二話	魔力の流れ	767
	第三話	七竜の意志	646	第十三話	幻惑の罫	778
	第四話	イリの竜騎士	658	第十四話	障壁	789
	第五話	モラスの騎士エラン	673	第十五話	分裂の兆し	800
	第六話	《聖なるトレヴダールの泉》		第十六話	魔法使いの意思	811
685				第十七話	救出	823
	第七話	エランの戦い	698	第十八話	本当の名前	833
	第八話	国王と魔王	710	第十九話	王の姿	844
				第二十話	七竜の目	855





第九話 モラスの騎士の代行者

1051

第十話 最強の騎士の脅威

第十一話 かつての友

第十二話 告白

第十三話 魔法制御

第十四話 竜騎士の呼び笛

第十五話 人質

第十六話 聖なる泉の門

第十七話 生き残った仲間たち

1126

1116110710981088107810691060



## 第一章 レント城塞

### プロローグ

遠い記憶の中にある母は、僕を守るために傷付き血にまみれていた。

美しい栗色の長い髪を伝って、赤い血が僕の頬に滴り落ちる。

母の異変に、僕は怯えた。

「オリアンナ、あなたは生き延びるのよ。何があっても生きてお兄様を……、セルジン王を助け出して。あなたにしか出来ない事なの！」

僕と母が隠れ住む広いけど質素な館に、屍肉に飢えた屍食鬼ししよくきが入り込んだ。

突然の襲来に人々は成す術も無く、醜い翼の生えた屍肉喰いの長い爪に殺され、餌食となった。

阿鼻叫喚の中を潜り抜け、護衛達、召使い達と共に広間まで来たところで、母が屍食鬼に襲われたのだ。

助けようとした護衛達も、多勢に無勢の状態で一人、また一人と倒されてゆく。

僕は狭い隠し通路の入口に押し込まれ、瀕死の母の鬼気迫る要求に、訳も分からずただ頷うなずくしか出来ない。

「お願い、行くのよ。必ず生き延びるのよ！」

「母さまも、行くこう？」

僕は母の手を掴み放さない。

母は涙を流しながら僕を突き飛ばし、扉を閉めた。

「母さま！」

幾つもの蠟燭に照らされた室内と違って、隠し通路は暗い。

暗闇は恐怖だ。

扉を開けようとしたが、固く閉ざされ幼い少女の力ではビクともしない。

扉を叩いて、必死に母に呼びかける。

「母さま、開けて！ オリアンナ、怖い。母さまも、来て！ 一人は嫌あ！」

「一人で行くの！ いい子だから、早く逃げて！」

その直後。

「きゃああああ——」

母の魂切る絶叫が聞こえ、その後は母の声がしなくなった。

「母さま……？」

僕は恐怖に震え、その場から動く事が出来ない。

手に大きな細長い包みを抱え、それを抱きしめたまま石の床に蹲うずくまり動けない。心の中で母を呼び続けた。

母さま、母さま、母さま——っ。

『いつまで、そうしているつもりかな？』

背後の暗闇から、男の声が聞こえた。

隠し通路の明り取り窓から差し込む月明りが逆光になり、男の顔は見えない。

涙に溢れた目では、余計に見えない。

男はゆっくり近づいてくる。

僕は怯えて母の閉じた扉に、助けを求めるようにしがみ付く。

不思議な事に願いが通じ、扉はゆっくり開き、僕はそのまま転がり細長い包みを抱え、板床に広がる血の海の中に横たわる。

混乱した幼い子供には、それが母の流した血だと認識出来ない。

ただ恐怖から逃れるために、血の床を這いずり何度も転んだ。

男は狭い隠し通路の入口から姿を現し、ゆっくり剣を抜きながら残酷な笑みを浮かべる。

エステラーン王国を壊滅へと導いた男——魔王アドランと呼ばれる母の異母兄、その男の顔ははつきり覚えていない。

ただ残酷な口元だけが、妙にくつきり印象に残っている。

『そなたが死ねば《ソムレキアの宝剣》は、再び私のものになるだろう。母と共に死ね！』  
男は剣をわざと恐怖を煽るあおるように、ゆっくり確実に僕の心臓に突き下ろす。

僕は細長い包みを抱えたまま、激しい痛みに訳も分からず死を迎え、魔界域という奈落の底へ墮とされた。

——悪夢は、いつもそこで終わる。

「うああああ……」

恐怖に叫びながら、冷や汗まみれで飛び起きる。

鼓動は激しく高鳴り、息遣いは荒く震えが止まらない。

胸に貫かれた痛みの感覚が残る。

「夢だ。これは夢……」

視覚はいつもと同じ、窓から差し込む月明りに照らされた一人ぼつちの薄暗い僕の部屋を映す。

静かに扉を叩く音がした。

「オーリン様、大丈夫ですか？」

僕の叫び声が聞こえたのだろう、部屋の外から護衛が静かに声をかけてくる。

「あ……、ああ、大丈夫だ。怖い夢を見たんだよ」

護衛は納得したように、それ以上聞いてはこない。

悪夢にうなされるのは、よくある事だ。

僕は、少し冷静さを取り戻す。

うなされていた事は、養父である領主ハルビン・ボガードに報告されるだろう。

そうして必要以上に心配した領主が、医師を従えやってきて、治療と称して血を取り、変な薬を飲まされる。

この悪夢は、治療しても治らないよ。

過保護な養父のやり方に溜息を吐きながら、ベッドの横にある小卓の引き出しから小

袋を取り出し、中から小さな石を取り出した。

月光石——月の光を凝縮したような、小さい範囲を短時間だけ照らす希少石だ。それを手に乗せ、裸のままそつとベッドから離れた。

護衛に気付かれないように足音を忍ばせて、あらかじめ用意してあつた服を手に取り、

もうすぐ夜が明ける。

鏡が月光石の光を反射して、僕の痩せた身体を露わに映す。

少し膨らんだ胸に、顔をしかめる。

また膨らんできた。

あんまり膨らむと、女だと気付かれる。

その胸元の醜い傷痕が目につく。

胸元から背中にかけて剣で貫かれた傷痕、普通だつたら完全に生きてはいられない痕だ。

《王族狩り》と言われる悪夢のようなあの出来事から、もう八年が経つ。

この傷は醜い。



八年前に僕は死んでいるはずだ、それなのに生きています。

なぜ、生きています？

理由は誰も教えてくれない。

ただ、あれ以来、男子として生きる事を強要された。

名前もオリアンナ・ルーネ・ブライデインから、オーリン・ボガードに変えられ、《王族》である事は隠され、レント領主の養子として存在してきた。

それが《王族狩り》を繰り返さないための最良の策だと、幼い僕にも理解出来たから、割り切って生きてきた。

男なら傷痕は気にせず生きていられる。丁度いいじゃないか。

僕は晒さらし手に取り胸にきつく巻き、いつもより少し派手な男子の服を身に着ける。

今日はセルジン王に会う、僕の婚約者に……。

そう思うと、嬉しくなって自然に心が舞い上がり、鏡に向かってにつこり微笑んだ。

その微笑みはどう見ても女子のもの、男子を装っていても、それは隠す事が出来ない。少しウェーブのある短い金髪が、彫り深い顔立ちに明るさを添え、抜けるような白い肌、薄紅色の頬の赤みが健康的な女子の華やかさを醸し出す。

どこことなく印象的な灰色の瞳が、僕を見つめ返す。

それだけならまだ良いけど、僕には自分でも嫌いな特徴がある。

上腕と上腿がエステラーン人より長い、父から受け継いだ異国人の特徴。

僕の中の最大のコンプレックス。

これがある限り、僕は不必要に目立ってしまい、女だと悟られない努力を必要以上に強いられる。

その努力も、もうすぐ必要がなくなるのだ。

国王軍の中では、男子を装う必要がない。

なぜなら《王族》が残り少ない今、僕は秘かに王の婚約者とされたからだ。

セルジン王が大好きな僕には嬉しくて、時々男子を装えなくなる。

「今日は僕の、〈成人の儀〉だよ、オリアンナ。おめでとう、これからずっと陛下と一緒にだよ」

鏡に映る少女の僕に、そっと呟いた。

# 第一話 影の王の婚約破棄 ★

僕の住むエステラーン王国は、往古いにしへに天界の神々から賜った二つの水晶玉を王都に据え、それを中心に大きな円球を描くように平和と繁栄の魔力に守られ成り立った、とても古い歴史を持つ国だ。

北の海運王国ダザールが攻めてきても、南の大王国イミルに侵攻されかけても、西の空の覇者アルマレーク共和国の竜騎士が攻めてきても、東のジェイルダン共和国の狡猾な元首が言いがかりをつけてきても、今までの歴史において《王族》が許可しない限り、彼等は魔力の円球の中に一歩たりとも立ち入る事が出来なかった。

二つの水晶玉を扱あつかえるのが《ブライデインの王族》、つまり僕の一族。  
《王族》の祈りにのみ、二つの水晶玉は魔力を発動した。

でも、それはもう、過去の話だ。

レント城塞の北東方向の空が、青空に黒く揺らめいている。

エステラーン王国の空を覆い尽くす屍食鬼の群れが、この辺境の地のすぐそこまで迫っているように見える。

陛下と会う時は、いつもこんな空だよ。

僕は暗い空を見上げながら、これから会うセルジン王の事を思った。

すると暗闇を切るように、待ちわびていた光り輝く聖鳥が、ゆつくりと優雅に僕に近づき、目の前を飛んでゆく。

長い孔雀の尾羽を風になびかせ、四枚の燃えるような夕日色の翼、そして灰色の女人の顔を持つ、美しくも奇怪な生き物。

シモルグ・アンカ。

天界の巨大樹に巣を持つ、聖なる鳥。年に一度だけ、セルジン王を運んでやって来る。会えるんだ、陛下に。

そう思うと、自然に笑みが湧き出た。

エステラーン王国は十五年前に、魔王アドランが呼び寄せた、屍食鬼の襲撃により壊

滅した。

二つの水晶玉の一つが、国の滅亡を望む魔王アドランに支配されてしまったからだ。水晶玉の魔力の届く範囲は、今は死の地と化し、魔力から逸れた辺境都市だけが、辛うじて生き延びている。

魔王は僕の伯父らしいけど、多くの《王族》を殺した彼を、伯父と認識するのは難しい。

僕にとって魔王は、恐怖そのもの。

母を殺し、僕も殺されかけて、憎しみより恐怖が上回る、絶対に近寄りたくない存在だ。

「もっと早く走らせてくれ、エラン！」

「二人乗りで、これ以上は無理だ！ なんだったら、僕が下りようか？」

「それは、困る。一人で、騎乗出来ないよ」

「情けないなあ、騎士見習い。早く上達しろよ、今日で成人だろ？」

「うるさいな、解ってるよ！」

幼馴染みのエラン・クリスベインは、自分より早く成人する年下の僕に、少しやきもちを焼いている。

彼は従騎士で、僕はまだ騎士見習い、そりや面白くないよね。

昨日、セルジン王からの使者が来て、急遽きゆうきょ、僕の〈成人の儀〉を行う事が決まった。「大切な儀式なのに、何の準備も出来ていない！」と、養父ハルビインが怒っていたけど、僕は嬉しかったんだ。

これで、陛下の側にいられるんだ。

僕達の後から、養父とレント騎士隊が追いかけて来る。

子供二人の方が軽く、馬は早く走れるから、騎乗の上手いエランが選ばれた。

そうして迎えに来た聖鳥を、僕達は追いかけている。

走っているのは馬だけど、僕も馬から落ちないように必死なんだ、これでも。

シモルグに案内されて来た場所は、《レントの聖なる泉》へ続く森の道、早朝の靄もやの向こうに、国王軍の兵の姿が見えた。

「エラン、馬を止めてくれ。ここから、走る」

「わかった」

道幅が狭くなるので、走る事にした。

兵達の手前で馬から下りると、伝令が声を上げる。

「殿下がお通りになるので、道を開けて、敬礼！」

赤い長衣の騎士達が一齐に道を開け、左膝を立てひざまず、剣を置いて《王族》に対する

礼の姿勢を取る。

従者も、それに倣った。

そんな中を、《王族》扱いに慣れてない僕は、顔を引き攣らせながら必死に走る。

国王軍の中では、《王族》である事を隠す必要がない。

ううつ、緊張するう。

荒い息を吐きながら、《聖なる泉》の前広場にたどり着く。

兵達が広く空間を開けて跪く場所に、シモルグは優美に舞い降りた。

僕はなんとか追いつき、息を整えながら、ゆっくり近づく。

「やあ、シモ……ルグ」

平静さを装おうとしても、つい声が上がってしまった。

聖鳥に会う時はいつもそう、神聖さに心が畏怖いふしてしまうんだ。

聖鳥の周りの空気が、魔力に満ちている。

輝く美しい四枚の翼をはためかせ、灰色の魅惑的な女の顔が微笑んだ。

『会いたい?』

人の声とも、鳥のさえずりともつかぬ声。

直接、心に響く声。

僕の顔が、熱くなる。

「もちろん！ 今すぐ、会いたい！」

鳥は笑い小さく口を開け、日陰になった草地に、虹色の息を吹きかけた。

息は虹色の霧きりが固まったように次第に大きくなり、それは黒い影になる。

ぼんやりと人の形を取り始め、やがてはつきりとした一人の男の姿になった。

歳の頃は二十二、三歳。

一瞬黒ずくめに見える彼は、黒紫色の布地の裾すそに、銀系の豪華な刺繍かじゅうが施された衣装を身にまとう。

彫深い顔立ちに整った長い真直ぐな黒髪、深い緑の瞳が愁いを含み、僕を見つめる。

エステラーン王国の王、セルジン・レティアス・ブライデイン。

「国王陛下！」

僕は笑顔で王の腕の中に飛び込んだ、幼い頃からそうしてきたように。

王は微笑みながら抱きとめる。

「オリアンナ姫、一年ぶりだ」

彼の身体は温かい、魔法で出来た影とは思えないくらいだ。



この世で強い魔力を持つ者だけが、実体のある影を作り出せるという。彼の影は美しく、僕を魅了する。

「しばらく見ない間に、ずいぶん背が伸びたな。それに、美しくなった」

王の手が、優しく僕の髪をなでる。

それだけで、一年間の孤独な心が満たされていく。

彼の温もりに、自然と鼓動が早くなる。

それは、ふわふわと心地よい。

母の兄であるセルジン王の姿は、出会った頃から変わらない。

彼の時間は、水晶玉の中で止まったままだ。

魔王アドランの使う水晶玉の魔力を抑え込むため、王はもう一つの水晶玉の主あるしとなつた。

そうして永遠に若者のまま、時を重ね生きている。

その事が、僕を苦しめる。

王は魔法で出来た影。

人間の实体は遠く王国の中心、王都ブライデインの白亜の塔にある水晶玉の中に封じ

込められ、誰も助ける事が出来ない。

婚約者が影だなんて、あんまりだよね。

僕の後ろに領主ハルビインとレント騎士隊、そしてエランが、騎士の礼の姿勢で跪く。  
王は僕の肩を抱きながら、彼等に告げる。

「レント領主ハルビイン・ボガード。今日ここで、貴殿の、《王族》の養父としての任を解く。健やかに成長したオリアンナ姫の姿を見て、貴殿の親としての愛情を感じ入る。王として、感謝する」

その言葉に、僕は微笑みながら、養父を振り返る。  
微笑みで返す養父の表情は、少し寂し気に見えた。

「私には息子ばかりで、娘がおりません。姫君をお預かり出来て、この上ない幸せでした。感謝させていただくのは、私の方です、国王陛下」

「義父上……」

いつも反抗ばかりしていた僕は、養父の言葉に申し訳ない気持ちが入り込んでくる。

娘というより、やっぱり息子だったよね。

娘らしい事は、何一つもしてないよ。

少し寂しい気がした。

「国王軍はしばらくレント領に滞在させてもらうが、異存はないか？」

「戦時故、大したおもてなしは出来ませんが、心より歓迎させていただきます」

領主以外のレント騎士隊の全員が、王の前で頭を下げたままの姿勢だ。

王と領主の会話が進む中、僕は無意識にエランの赤い髪を見て微笑んだ。

いいな、僕も金髪じゃなくて、エランみたいに、綺麗な赤い髪で生まれたかった。

不意に王の言葉が、耳に飛び込んでくる。

「その赤い髪の従騎士、こちらへ来い」

「え？」

エランが驚き、顔を上げた。

僕は王の顔を見ながら、エランに何か問題でもあったのかと不安になる。

レント騎士隊の緊張も伝わってくる。

従騎士エランの主君であるロイ・ベルン指揮長官が注意を促し、戸惑いながら礼を失

する事のない姿勢で、彼は王の前に進み出た。

「そなたがエラン・クリスベインか？」

「はい」

「なるほど、外見は母親に似の美男だな。腕は父親譲りかな？ トキ・メリマン」

「（こちらに）」

王の後ろに控える、怖そうな三十代半ばの騎士が進み出た。

「トキは近衛騎士隊長だ。以前、そなたの父の元で、従騎士をしていた。トキ、彼の腕を磨け」

「承知！」

僕は事の成り行きに、王の腕を取って聞いてみた。

「エランを、知っているの？」

「当然だろう。そなたは小さい頃から、エランの話ばかりしていた」  
「え？」

まったく記憶に無い。

「エランは王配候補だ。だから皆、会うのを楽しみにしていた」

「……王配？」

エランと二人、何の事か解らず、呆然と王を見る。

レント騎士隊から、驚きの声が聞こえる。

領主が戸惑い、異論を唱える。

「ですが、オリアンナ姫は、陛下の婚約者ではないのですか？」

「我が異母弟おとうとドウラスが死んだ」

「そんな、ドウラス王太子殿下が……」

領主の悲嘆の声が響き、王は悲しい目で領<sup>うなづ</sup>く。

「オリアンナ姫がただ一人の《王族》となった今、実体のない影の私の婚約者よりも、未  
来の女王として存在する方が相応しい。そう思わぬか？」

「……………」

領主は項垂れ、それ以上言葉を返す事が出来なかった。

嫌な予感に、僕は顔を歪めながら、ぼそりと呖<sup>つぶや</sup>く。

「何ですか、王配って？」

王は優しく微笑み、元気づけるように僕の頭をくしゃくしゃと撫でた。

まるで子供扱いだ。

「女王の配偶者の事だ。そなたの未来の夫だよ」

エランの顔が真っ赤に染まり、戸惑いがちに王を見る。

「あの……、僕で、良いのでしょうか？」

「構わぬ。そなたはトルエルド公爵家の次期領主、亡き父は私の友だった、問題はない。

何よりオリアンナと仲が良い」

エランが嬉しそうに微笑んだ。

「ただし、あくまで候補だ、決定ではない。他にも何人か候補がいる事を、忘れるな」

「……………はい」

エランの喜びが半減したのを見て、僕の不安は増大した。  
他にも何人か候補？

なんだよ、それ！

僕は不貞腐れた表情で、セルジン王を睨み付ける。

「それって、つまり陛下との婚約は、破棄して事ですか？」

「そういう事だ」

僕は王の前であんぐり口を開けたまま、ぶつ倒れそうになった。

## 第二話 《聖なるレントの泉》

そりや、男子として育ったんだから、僕が女らしくないって思われても仕方ないけど……。

いきなり婚約破棄って、あんまりだよね。

そう思うと、目にいっぱい涙が溢れてきて、完全に落ち込んだ状態で〈成人の儀〉に臨まなければならなくなった。

僕の横を歩く近衛騎士隊長トキ・メリマンが、横柄な口調でこっそり伝えてくる。

「安心しろ、国王軍の誰一人として、セルジン王の退位など望んでいない。陛下はドウラス殿下を亡くされたばかりで、絶望感から言っているだけだ。人に戻る希望を見失っている」

トキは僕を守る役割を言いつけられ、王から離れて、僕と一緒に《聖なる泉》の入口へと歩いていった。

「陛下を助けるのは《王族》にしか出来ないのと、以前、ドウラス殿下が言っていた。今はオリアンナ姫にしか出来ない。だから、しっかりしてくれ！俺達は、殿下が国王軍に加わるのを、待っていたんだ」

「……………」

慰めるために、言っている訳じゃないよね。

僕にしか出来ない？

どういう事だろう？

僕は涙を拭つて、トキを見上げた。

真直ぐ前を向いている彼は厳しい人に見え、優しさから慰めている訳ではないと解る。

「陛下を人間に戻す方法を、見つけ出してくれ。それが解れば、きっと陛下の希望も戻し、婚約者としてのオリアンナ姫の必要性も痛感するはずだ。俺達は陛下が人に戻るためなら、どんな協力も惜しまない」

少なくとも僕が歓迎されている事と、この近衛騎士隊長が味方になってくれる事は理解出来た。

おずおずと、僕は頷く。

「僕にしか出来ないなら、やるしかないよね」

強面のトキが、口角を上げて微笑む。

「ああ、やるしかない！」



トキとその部下の近衛騎士達に連れられて、《聖なる泉》の門にたどり着く。

「分かっていると思うが、〈成人の儀〉は、聖なる泉から水を汲んで帰ってくるだけの儀式だ。ここで成人と認められなければ、行軍参加は出来ないぞ」

「うん、知ってる」

「気を付けなければいけないのが、目の前にいる〈門番〉だ。彼はこの世で最強の騎士。入場許可出来ない相手には、容赦なく切りかかって来るから、気をつけろ」

「……………」

土壇場で言うのは、止めてくれ。

《聖なる泉》の〈門番〉は、全身豪華な銀色に輝く鎧よろいを装着し、面鎧めんよろいを下ろし顔は見えないが、まるで強そうな騎士人形のようなようだ。

この人……、人間か？

溢れ出る殺気に、逃げ出したくなる。

『名を告げよ』

〈門番〉が、重々しく尋ねる。

「オリアンナ・ルーネ・ブライデイン」

本当の名前を、恐々伝える。

緊張に、見えない顔をじつと見る。

『入場を許可する』

全員がホツと胸を撫で下ろした。

「殿下、門へ進むんだ」

トキの指示に頷き、警戒しながら一人で〈門番〉の横を通り過ぎた。

〈門番〉は身動き一つしない。

トキと近衛騎士は、刺激しないように徐々に後退していった。

不安と孤独に後ろを振り返ると、見送る人々の中にセルジン王の姿があった。

彼は心配そうに、僕を見ている。

僕は……、婚約破棄されても、あなたが好き。

悲しくなつて、涙が出そうになつた。

王太子と言われても、まったく実感が湧かない。

まして女王になるなんて、考える気にもなれない。

僕にとつての王は、あなた、ただ一人だけだよ。

僕は、あなたの側にいたいだけ。望みはただ、それだけなんだ……。

だから、この儀式は絶対に乗り越える！

一瞬で場の空気が変わったのを、肌で感じた。聖域へ入ったのだ。

後ろを振り返っても目に映るのは深い森の木々、王も騎士達も、どこにも姿が見えず、歩いてきた道すらない。

目の前には森をくり抜いたように立つ、白亜の巨大なアーチ門。

それは光り輝くように荘厳で、向こう側は虹色にぼやけて見えないが、微かに水の流れる音が聞こえた。

この先が、《聖なる泉》なんだ。

深呼吸しながら門に入ろうとした時、ふと誰かの視線を真上から感じ見上げると、高いアーチの天辺てっぺんに不思議な形の楔石。

なんだろう？

あの石に、見られている気がする。

花のような、人のような、動物のような……、不思議な楔石はかなり高い位置にあり、はつきりとした形が判らない。

気のせいかな？

石に見られるなんて、変だよ。

不思議に思いながら、門を通り抜けた。

虹色に見えていた門内には、手入れの行き届いた広大な庭園があった。

中央に広い道があり、両側に綺麗に刈り込まれた生垣や、幾何学的に並べられた花壇が連なる。

見渡す限り人の姿は無いのに、そこでも多くの視線を感じる。

なんだか、怖い。

満ち溢れる思念から、逃げるように走り出す。

突然景色が変わり、今度は一面の花園。

そこでも同じ無数の視線。

どうなっているんだ？

聖域つてもつと優しい所だと思っていたのに、凄く怖い。

花園の次は水路と石柱庭園、次は朽ち果てた石像が緑に浸食された廃園。

次々と変わる景色を見ないようにして、多くの視線から逃れ、無我夢中で走り続けた。

息が苦しく、もう走れなくなった頃、大きな水音に混じって声が聞こえた。

『……………ソナ、……………オリアンナ姫、ようやく会えましたね』

「ええ？」

顔を上げ声の主を捜したが、人影は見あたらない。

心に直接響く声は、シモルグ・アンカに接している時と同じだ。

目の前には、いつの間にか大きな円形状の階段庭園が現れ、緩やかな幅広の階段が中央の四本の石柱で囲まれた泉へと続いていた。

僕はなんとか息を整えて、恐る恐る段差を下りてみる。

歩いても景色は変わらず、異様な気配も感じない。

やっと、《聖なる泉》に辿り着いたんだ。

安心感と疲れから、脱力して階段に座り込む。

『あなたを待っていました。ずっと、昔から……』

中央の泉の湧水が大きな音を立て、勢い良く吹き上がる。

しばらく見つめているとそれは形を成し、人とも魚とも思える透明な美しい姿を現した。

「泉の精霊？」

『オリアンナ姫。父君の伝言を、湧き出る泉から受け取りなさい』

「……え？ 父上の伝言？」

思ってもみない言葉に、耳を疑った。

遠い昔に家族を置いていなくなった父が、僕に伝言を残しているのだ。

慌てて立ち上がり、階段を駆け下りる。

泉の水が、円形の四方に流れ出る階段の水路を駆け上っている。その不思議さよりも、父の伝言欲しさに激しく揺れる水面を覗き込む。

……何も映らない。

「父上は？ 父上は、どこにいるの？」

『泉を、汲むのです』

「そうか、〈成人の儀〉だね」

僕は腰から下がる水袋を手に取り、清らかな泉の中に手を入れた。

すると……。

目の前の泉の上に、男が現れた。

二十二・三歳、セルジン王の外見と同じぐらいの年齢だろうか。

日に焼けて浅黒い肌に真青な瞳、金色の長い髪を後ろに束ね、僕と同じ、上腕と大腿が少し長いアルマレーク人の体型で、見た事のない軽装の鎧を装着している。

エドウィン・ルーザ・フィンゼル。

父が真つ直ぐ、僕を見つめ返してくる。

「父……上……」

鼓動が高鳴る。

初めて父の姿を見たのだ。

「オリアーナ、私の事を恨んでいるだろうな。突然いなくなったのだから」

首を横に振る。

母を亡くしてから、父を捜しに行く夢を何度も見てきた。

今、目の前にその父がいる。

「恨んでなんかいません！ 僕は……」

「よく成人まで、育ってくれた。母上に感謝しよう」

「え？ 僕は……」

成人より少し前だけど、そう見えるのかな？

「父上？ あの……」

父の目が何も映していない事に、ようやく気が付いた。

「私は今日、二歳の君と母上に別れを告げた。理由は聞いているだろうか？」

「……」

返事をして父に聞こえないのは理解出来る、これは過去の伝言なのだ。

母が《王族狩り》で殺された事を、父は知らない。

「君の目の前に、《ソムレキアの宝剣》が現れたからだ」

驚愕した！

いつも悪夢の中に出てくる《ソムレキアの宝剣》の事を、父が口にするとは思ってもみなかった。

父は厳しい顔で、経緯を告げる。

「《ソムレキアの宝剣》が、君を主あるじに選んでしまったからだ」

……主って、僕を？

何の事だ？

僕はそんな物、持ってないよ。

訳が分からず、呆然と父を見つめた。

「《ソムレキアの宝剣の主》だけが、水晶玉に取り込まれた《王族》を解放し、消滅出来る」



「……………え？」

身体から力が抜ける感覚に襲われる。

解放し……………、消滅？

「君はアドラン王子から、命を狙われる事になるだろう」

まさか、僕の手でそれを、やるんじゃないよね？

「王都ブライデインにある、二つの白亜の塔へ行って、アドラン王子とセルジン国王を解放し、消滅させるのだ。そうでなければ、この世は滅亡する！」

……………陛下を、消滅？

あまりの要求に、父が何を言っているのかまったく聞き取れない。

「私は君を助けるために、レントの泉、メイダールの泉、トレヴダールの泉、デイスカールの泉にそれぞれ導<sup>しるべ</sup>を残す予定だ」

一方通行の父の姿が、徐々に歪んで見えた。

「導は君を守る、泉の精の魔力だ。全て受け取ってブライデインの《聖なる泉》へ来てほしい」

僕が知りたいのは、陛下を人に戻す方法だよ。

消滅なんかじゃない！

「私はそこで待っている。いつまでも……………、待っている」

父は目を瞑り、やがて消えた。

「愛するオリアンナ……」

泉を囲む石柱の前で、僕はただ呆然と《聖なる泉》を見ていた。

## 第三話 僕の役割

『あなたの王は今、絶望の中で、もがいています』

「……………え？」

父が消えた泉の水中に、人とも魚ともつかない泉の精が姿を現した。

混乱する僕の心に冷や水を浴びせるように、清らかな声でセルジン王の苦しみを伝えてくる。

『エステラーン王国の宝玉ほうぎよくに触れた《王族》は、命と引き換えにこの世を支配する強大な魔力を手に入れます。あなたの王はその魔力に支配され、止まった時の中で苦しんでいる。《王族》の減少が彼を弱らせ、水晶玉の魔力に心を蝕まれているのです。今のままで、彼も魔王と化すでしょう』

「嘘だ！ 陛下が魔王になんて、なるはずがない！」

いつも優しいセルジン王からは、想像も出来ない推測に、僕は断固として否定した。

『最後の《王族》のあなたの存在が、彼の理性を繋ぎつなとめているのです』

「……………」

『セルジン王を救えるのは、《ソムレキアの宝剣》の主である、あなたしかいないのです、

オリアンナ姫』

「それは……、父上が言った通り、陛下を消滅させるって事か？」

『彼の理性があるうちに、水晶玉から解放するのです。エドウインの言う通り、消滅させた方が彼の救いになると、私達には思えます』

僕の目から、大粒の涙がポロポロと零れ落ちた。

「そんなの、嫌だ！　なんで僕が、陛下を消滅させなきゃいけないんだ！　僕は陛下を助けたいんだ。人に戻したいんだ！　消滅なんて、絶対にさせない！」

僕は《聖なる泉》の前で、身を屈めて泣き続けた。

涙はまるで湧き続ける泉のように、僕の目から流れ続け止まらない。

どのくらい時間が経ったのか解らなくなった頃、泉の精の優しい声が僕を現実に戻した。

『嘆かないで、オリアンナ姫。私達が、あなたを助けます』

清らかな泉の精が、揺らめく水の中から、僕に手を差し伸べる。

僕は泣いて赤くなった目を、おずおずと泉の精へ向けた。

『王を助ける望みは、きつと叶えられるでしょう。あなたをよく見れば、解ります』

望みが叶う？

あまりの驚きにそれまでの嘆きが、一気に僕の中から吹き飛んだ。

「本当に？ 本当に叶うの？ どうやって、助けられるの？ 方法は？」

涙を拭いながら、期待を込めて尋ねる僕に、泉の精は警戒するように首を横に振る。

『私達が教えなくても、いずれそれはやって来ます。その時まで、エドウィンが全てを犠牲にしてあなたに残したものを、どうか否定しないで下さい』

「父上が、犠牲？ どういう事？」

急に不安が頭をもたげてる。

父エドウィンは、今どういう状況にあるのか？

王都ブライデインは、屍食鬼の巣窟になっていると聞いている。

そんな場所で、どうやって生き延びているのか？

『《ブライデインの聖なる泉》で、彼に会えば解ります、オリアンナ姫。契約の代償は、彼が払いました。あなたは導を受け取るだけです』

「え？」

突然、泉から強烈な光が噴出し、周りの全てを呑み込み膨れ上がった。

あまりの眩しさに、手で目を覆い隠す。

「わあっ！」

訳が分からないまま、身体が宙に浮く感覚に声を上げた。

光が身体中に侵入し、焼き尽くされる感覚に足掻いて、必死に振り払おうとした手は、虚しく宙を掻く。

世界も僕も消えてなくなる恐怖に怯えた。

「止めろっ——！」

——突然光は消え、浮遊感も消えた。

恐る恐る目を開けると、《聖なる泉》は何事も無かったように静かで、湧き出る水の音だけが聞こえる。

僕の荒い息遣いが、不協和音のように木霊した。

「何だ……、今の？」

不意に違和感を覚え見ると、左手の周りを水が取り巻いていた。

冷たさも濡れた感覚もないのに、視覚は意志を持って蠢く水うごめを映している。

「うわあああっ！」

慌てて振り払ったが、それは左手に吸い込まれ、水の紋様を左手全体に刻み込む。違和感が体中を駆け巡り、左手だけが僕とはかけ離れたものを感じる。

「止めてくれ、泉の精！」

その瞬間、紋様は消えた。

『それは「生命の水」という私達の魔法です。あなたの命の灯が消える時まで、命を守り続けます。あなたが立ち向かうのは、人の魔力の及ばぬ者達です。オリアンナ姫、全てはあなたに掛っています』

「え？」

『《聖なる泉》が消えれば、魔界域の扉が開くでしょう。そうなれば、この世は滅びます』  
「……………」

魔界域……、その言葉に言いようのない恐怖が、胸の痛みを伴って沸き起こった。

魔王アドランの剣で胸を貫かれ殺された僕は、魔界域へ堕とされたはずだ。

魔王に殺された者が堕ちる場所、魔界域。

僕にはその時の記憶がまったくない。

それでも胸から背に残る傷痕が、切り裂くような痛みを訴えている。

僕は、なぜ生きている？

いつもの疑問が、痛みと共に頭を占める。

『エステラーン王国の、各地の泉が枯れ始めています。魔王が魔界域を呼び寄せ、ブライデインに近付いているのです』

「だから僕に、魔王を消滅させろって言うのか？」

『その通りです。あなたにしか出来ない事です』

いきなり肩が重くなり、身動きが出来なくなる。

世界を背負う重責に打ちのめされ、足元も見えない程、この世が暗く感じる。

どうして、僕に？

僕は《ソムレキアの宝剣》なんて、持ってないのに……。

心を読んで、泉の精は答えた。

『ただ前へ進みなさい、オリアンナ姫。《ソムレキアの宝剣》は必ず現れます』

「どうして……、僕なんだ！」

『生まれた事に役割があるなら、あなたはそれが定めです。乗り越えるのです。そうすれば、望みは叶うでしょう』

「陛下を人に戻す方法は、あるんだね？」

『……あなた次第です』

僕、次第？



王の姿を思い浮かべた。

希望という火が、心の中に灯った気がする。

この世の生存より、セルジン王の生存の方が大事に思えた。

僕次第で、陛下を人に戻す事が出来る？

すべて乗り越えれば、望みが叶う？

自分の思考に呆れながら、魔力を秘めた左手を見つめた。

ただの左手にしか見えないが、まるで剣を手にした心強さを感じる。

この手で、陛下を人に戻す。

まだ方法は解らないけど、必ず戻す！

希望を掴みとるように、左手を握りしめる。

『メイダール、トレヴダール、ディスカール、それぞれの《聖なる泉》を見つけ出し、四つの導を受け取ってエドウィンの会いなさい。彼の遺産を受け取るかは、あなた次第です』

「遺産？ 父上は、生きているんじゃないのか？」

泉の精は一瞬、悲し気な表情で僕を見つめ、ブライデインの方角を指差した。

『行くのです、エドウィンの待つ《聖なるブライデインの泉》へ。会えば、全てを理解出来るでしょう』

そのまま突き放すように泉の精は交信を絶ち、湧水の中に姿を消した。  
《聖なる泉》の光は消え、湧き出る泉の音だけが大きく木霊する。

あまりの出来事に呆然としながらも、ただ一つの考えだけが心を占める。  
前へ進めば、陛下を人に戻す方法に行きつく！

僕は前を向き、突き動かされるように《聖なる泉》に背を向けた。

緩やかな泉の階段を駆け上る。

すると急速に景色が動いている感覚に囚われ、軽い眩暈めまいがした。

倒れそうになるのを、必死に堪えながらなんとか頂上まで辿り着く。

めまぐるしく変わる景色を想像していたのに、目の前には巨大なアーチ門。

僕の考えを、読み取っているみたいだ。

ありがたい……。

早くセルジン王に会いたい、心の中にはそれだけしか無い。

微笑みながら飾り門を潜り抜けようとした時、その声は聞こえた。

『天界の罫に、気を付けて……』

「え？」

また視線を感じて、アーチの頂きを見上げた。  
明らかに楔石くさびいしから声がする。

泉の精とは違う意志が、僕に呼びかけている。

「……誰？」

答えはなく、楔石はただの石にしか見えない。

気のせい？

何かに気を付けてって聞こえた。何に……？

疑問に思いながら、アーチ門を抜けるとそこは深い森の木々、そして目の前に泉の〈門番〉が立っていた。

『聖なる水を、一滴所望しよう』

「え？ は……、はい」

戸惑いながら水袋に汲んだ聖なる水を、差しだされた〈門番〉の籠手こてのてのひら、皮の手袋に一滴垂らす。

すると〈門番〉の全身が薄ら光りだし、喜んでるように見えた。

うわっ！

この人、本当に人間？

初めて会った時と同様の疑問が、心に浮かぶ。

『退場を許可する』

そう言つて〈門番〉が消え、途端に閉ざした森の木々が、生き物のように蠢き道を開けた。

不思議な光景を、今日一日で一生分体験したように思えた。

〈成人の儀〉とは、この世とは別の世界に行つて、帰つてくる儀式なのだろうか？  
日常から離れた聖なる場所で、僕は心に希望を焼き付けて帰つて来た気がした。

開かれた木々の先に、セルジン王の姿があつた。

黄昏時の薄暗がりと松明の灯りに、他の者達の姿は霞んで見える。

「陛下！」

王は優しく微笑みながら両手を広げ、出迎えてくれた。

よろけ縫れる足を心の中で鞭打ちながら、王の元まで長く思える距離を走る。  
そうして彼の腕の中に飛び込んだ。

「よく無事で戻つた。あまりにも遅いから、心配したぞ」

「陛下」

安心感に涙が流れた。

婚約を解消されても、王はいつものように優しく、僕を抱きしめる。

嬉しくて涙で霞む目に、微笑む彼の姿がグラついて見えた。

「オリアンナ?」

「僕は……」

支えるセルジン王の腕の中で、なぜふら付いているのか意味が分からない。

王が耳を触り、顔を近付けて額に手を当てる。

彼の手は冷たく心地良い。

「薬師を呼べ! 高熱を出している。早く、手当を!」

「あ………なた………を………」

王の緊急の声が、遠くに聞こえる。

彼が、僕の身体を抱き上げる。

その心地よさに微笑みながら意識を失った。

「必ずあなたを、人に戻します、陛下………」

## 第四話 運命の竜騎士

カランという何かが落ちた音で、僕は目を覚ました。

身体がだるく、かけられた毛布が重く感じる。

熱を出して、倒れた事を思い出した。

蠟燭の薄明かりから、今が夜である事が分かる。

狭い僕の部屋に、三人の大人、ベッドの横に男が一人うたた寝をし、入口に護衛騎士が一人、そして長持ちを確認しようとする女が一人。

「ねえ、水をくれないかな」

突然の呼びかけに、女は驚き振り向いた。

見た事のない侍女、二十歳くらいの可愛い感じの顔が、につこり微笑む。

「はい！ オリアンナ様」

水差しから杯に水を移しながら、女は音がした長持ちの方を気にしている。

警戒心が強いな。

バレないといけれど……。

長持ちに仕込んである仕掛けは、エランが秘密基地にいる時の呼び出しの合図で、早め

に紐を引かないと帰ってしまふ。

僕の部屋は、改築前の古い城の三階にあり、領主でさえ把握していない抜け道がある。三年前に見つけて以来、たびたび内緒で城を抜け出していた。

この三人を、部屋から追い出さなきゃ。

それとも、合図に気付かなかつた事にするか……。

いずれにしても落ちた板を、元に戻さなければ次の合図が分からなくなる。

侍女はうたた寝をしている男の肩を揺り起こし、男は飛び起きて反射的に僕の熱の確認をする。

服装から医師の弟子なのだろう、看護に慣れていて、すぐに席を立ち部屋から出て行った。

医師を呼びに行ったな。

あと二人。

女が僕の肩を持って抱き起こし、甘い水を飲ませてくれる。

キラの蜜入り、美味しい……。

少し元気が出た。

「見かけない顔だね。国王軍の人？」

「はい。ミア・メリマンと申します」

「え？ メリマンって、トキさんの……、妹？」

「いえ、妻ですわ」

あの怖そうな人に、奥さんがいるんだ。

こんなに可愛い女ひとが？

怪訝な顔をしていると、嬉しそうに笑った。

「ふふ、意外でしょ。結構優しい男ひとなんですよ」

「そう……なんだ」

想像がつかない。

不意に追い払う方法を思いついた。

「あのさ、ベイメって侍女を呼んできてくれない。僕の元侍女なんだけど」

「ベイメさんですか？ ……どちらに？」

「義母ははうえ上の部屋近くの侍女部屋だよ。ちよつと遠いけど……」

「分かりました。お呼びしますわ」

ミアは礼を取って、急いで部屋を出て行った。

ベイメは元侍女だけど、二年前に病死している。

入れ替わりの激しい侍女達の間で、ベイメを知る者も少なく、養母サフィーナの部屋はここからは遠いので時間を稼げる。



あと一人、二十代半ばの近衛騎士が、抜かりない様子で長持を気にしている。真面目そうな騎士だな。

毛布をマント代わりに裸の身体に巻き付け、熱でよろけながら無理にベッドから下りる。

騎士は慌てて支えようと近寄ったが、毛布が肩から肌蹴た事のためらい立ち止まった。

安易に《王族》の若い女性に触れるのは、不敬罪に問われる危険がある。

「大丈夫だよ、着替えたいだけだ。外に出てくれないかな」

毛布を肩に掛け直しながら、少し大げさに辛そうにしてみせた。

騎士は戸惑いながら、反論する。

「しかし、殿下を守るように命令されております。お一人になるのは危険です！」

「ここは安全だよ。僕の部屋なんだから」

「魔王相手に、安全はありません！」

その通りだ。良い近衛騎士だが、長引くと医師がやって来る。

僕は顔を顰め辛そうに頭を抱え、騎士を困らせた。

「あなたがいると、毛布を取る事が出来ないんだ。着替えられないよ」

「……………判りました。外にも騎士達がいいますから、何かあれば必ず声掛けして下さい

！　すぐ別の侍女を呼んできます」

困り顔の騎士は、慌てて出て行った。

よろけながらすぐに扉の鍵を掛け、しばらく誰も入れないようにする。

急いで着替えて長持の蓋を開け、底板を外した。

下には抜け道になる空間が、通路の天井近くの小さい窓から入る月明りに照らされて

広がる。

なんだか、陛下にバレたら怒られそうだ。

セルジン王の事を考えると、胸が締め付けられた。

合図になる紐ひもの付いた板が、倒れている。

エランの呼び出しの仕掛けだ。

僕が熱を出しているの、知ってるはずなのに呼び出すなんて、何か急用かな？

王配候補って言われて、変に勘違いしてないといいけど……。

動いたせいで熱が上がり、だるさが増す。

外からは見えない壁の裏側の抜け道に、縄梯子を使って降りようとした。

熱のせいで身体がふらつく。

なんとか縄梯子にしがみ付き、少し降りたところで眩暈めまいがして、縄梯子から手が離れ

た。

しまった！

後ろ向きに身体が落ちてゆく。

床は粗削りな石畳、頭から落ちれば大怪我、運が悪ければ死んでしまう。

一瞬の恐怖の後、誰かが僕を抱きとめた。

人がいるはずのない場所に、人がいたのだ。

先程の騎士の言葉を思い出した。

《魔王相手に、安全はありません！》

僕を抱きとめた者が、耳元に低い声で囁いた。

「この程度の高さから落ちるなんて、情けない奴。まるでヘタレ小竜だな」

エステラーン語ではない聞き覚えのある言語、僕には意味も解る。

……アルマレーク語だ！

隣国アルマレーク共和国の言語で、家庭教師以外から聞いたのは、初めてだ。

百年ほど前にエステラーン王国とアルマレーク共和国は敵対し、それ以来、両国に国

交はない。

僕の父の国。

なぜ秘密の抜け道にアルマレーク人がいるのか、どうやって入り込んだのか、僕は緊張しながら、抱きとめた相手を見上げる。

薄明りの中で確認できるのは、背が高い、エランより少し年上の男。腕の筋肉の付き具合から、戦士と分かる。

「お前、熱があるのか？」

今度は流暢なエステラーン語で話かけてきた。

高い教育を受けてきた証明。

僕は慌てて着替えてここまで来たので、胸の晒さらしを巻き忘れていた事に気が付き、驚愕した。

抱き留められた時、男がどこを触ったのか、まったく覚えていない。

厚手の服だから、大丈夫な可能性もある。

女だと知られたら、厄介だ。アルマレーク人じゃ、なおさらに！

必死にもがいて、男の腕から逃れ、もう一つの出入り口へ走る。

「待て！ 呼んでおいて、逃げるな！」

呼ぶ？

何の事だ？

気にはなるが、アルマレーク人とは関わらない。

父の国に連れ去られる危険があるからだ。

僕の父エドウィン・ルーザ・フィンゼルは、隣国アルマレーク共和国の領主家の一人息子で、次期領主だった。

でも、エステラーン王国の《王族》である僕の母オアイヴと恋に落ち、故国を捨てた。

アルマレーク共和国が、僕を連れ戻しに来る可能性は十分ある。

やつと陛下と一緒にいられるのに、アルマレークに連れ去られてなるものか！

背後から突然、強烈な光が湧き起こった。

僕は眩しさに目がくらみ、熱のせいもあり、走る速度が落ちる。

後を追ってきた男に、左手を掴まれた。

「うわっ！」

男が驚きの声を上げて、すぐに手を離れたため、反動で僕は地面に倒れ、熱の苦しきもあり、起き上がる事が出来なくなった。

見下ろす男が手にしているのは、僕の持っている物より大きい月光石。僕の全身ぐらいは、簡単に照らし出す。

「お前は、アルマレーク人だな。泉の精と取引したのか？ 危ない事を……。その左手

……。魔力が強すぎて身体が拒否している。熱があるのは、そのせいだ」

男が真剣な眼差しで、全てを見通すように見つめてくる。

「七竜の許可が必要だ」

何の事か意味が分からないが、泉の精の魔力を理解している事は確かだ。

「お前の竜がまだ見えないが、呼ばれた理由は理解出来た。お前は、竜騎士だ」

「な、何の事だ……、あつー！」

僕の熱くなった額に、男が左手を当てる。

「お前の七竜に代わって、泉の精の魔力の受け入れを、許可する！」

アルマレーク語で呪文のように唱えられた瞬間、何かが身体の中を通り抜けた。

それは熱を拭い去り、身体が軽く気分が良くなる不思議な言葉。

七竜——アルマレーク共和国を支配する、墮天した竜神達。

元は天界の神々と戦い破れ邪竜とされた一匹の竜神を、七つに引き裂き生まれた。

アルマレーク人は、その神々を崇めている。

「魔法使い？」

接触を取らないつもりでも、あまりの不思議さに思わず聞いてしまった。

男は無表情で見つめ返す。

「魔法使いじゃない。俺の名はテオフィルス・ルーザ・アルレイド。アルマレーク共和国  
リンクルクラン領の竜騎士だ」

「……竜騎士」

昔、アルマレークの竜騎士が、レント領に攻め入った。

城のあちこちにある浮彫には、多くの竜騎士の脅威が描かれている。

僕は警戒した。

「ありがたい、身体が楽になったよ。でも、なぜアルマレーク人がここにいる？」

緊張しつつ、照らし出されたテオフィルスと名乗る男を観察する。

異国の鎧を装着し、背に弓矢、腰に中剣と小型の盾。

浅黒い肌に真青な瞳は、強い意志を持つ、精悍な顔付きの美形だ。

吸い込まれそうな、綺麗な瞳……。

なんだか、かっこいい。

不本意だけど、そう思う。

「俺の七竜が、ここで待つように伝えてきて、そうしたらお前が現れた。竜騎士の体型を  
持つ、お前の名は？」

「オーリン・ボガードだよ。僕はエステラーン人だ、アルマレーク人じゃない」

「オーリン・ボガード、それだけ？ 名前の後ろに、ルーザかルーネが付いてないのか？」

鳩尾みぞおちの辺りが、緊張した。

僕の本当の名前は、オリアンナ・ルーネ・ブライデイン。

ルーネが付いている！

「付いてないよ。でも……、もし付いてたら、どうする？ アルマレークに、さらって行くのか？」

好奇心から、聞かずにはいられなかった。

テオフィルスは微笑む。

「その通りだ。アルマレーク人は子が生まれると、体形を見て名付ける。竜に乗れる者には、竜騎士の運命を名づける」

「え？ 竜騎士の運命？」

「そう、竜騎士だ！ 男であればルーザ、女であればルーネ。ルーザとルーネは必ず竜騎士になる、例え異国せんにに生まれてもだ！」

僕の背筋に、戦慄せんりつが走った。



## 第五話 異国の婚約者

父が竜騎士だとは、僕も知っていた。

エステラーン王国の危機に、母と僕を守るため、レント城に保管されていた多くの浮彫を研究し、百年前のアルマレーク戦での対空戦法と防衛方法を、自分の竜を敵に見立てて、レント騎士隊に体得させた。

この領内では、アルマレーク人でも父は英雄的な存在だ。

おかげでレント領は、今も屍食鬼の侵入を防いでいる。

侵入されたのは、八年前に魔王アドランが《王族狩り》に来た時だけだ。

竜騎士……、僕が？

父は僕に、竜騎士の運命を名づけていた！

僕は動揺した。

上腕と大腿が長いのは、アルマレーク人の特徴だと思っていたけど、竜騎士の特徴なのだ。

テオフィルスはすかさず僕の腕を掴み、引き寄せる。

「俺の従者にしてやる。お前は、竜騎士になるんだ！」

「な、何を……。そんな名前、付いてないって！ 僕は竜騎士じゃない」  
彼は構わず、僕を支配するように、その強い眼光で射抜く。

「異国人でも竜騎士になれるよう、俺が後ろ盾になってやろう。俺に、ついて来い！ お前に、世界を見せてやる！」

鮮烈な驚きに、彼の印象的な青い青い瞳に魅入られる。

—— お前に、世界を見せてやる！ ——

感動する反面、心の片隅で「アルマレークへ、連れ去られるぞ！」と警鐘が鳴る。

彼の腕を振り払い、僕は飛び退いた。

「僕は竜騎士にはならない。アルマレーク人は敵国人だ、城のこんな場所に入り込むなんて怪しすぎる。君は、密偵か？ それとも、魔王の手先か？」

「本名を名乗る密偵が、どこにいる？ まして魔王の手先では、絶対じゃない！ 俺はレント領主に会いに来た、アルマレーク共和国からの特使だ」

そう言つて首から下げている共和国の国章を見せた。

山と竜が刻まれている。

アルマレーク共和国は山系の国、エステラーン王国の西方より遙か先に見えるトルカ

ンデイラ山脈の中にある。

「争いは百年以上前の事、今はお互い手を取るべきじゃないのか？」

「……」

「俺はあの屍食鬼の群を、打ち破る！ だから竜騎士を集めている。お前は奴等に、支配されたままでいいのか？」

彼は、本気で言っているのだ。

共に戦うために、他国が手を差し伸べている。

竜が味方になれば、大きな戦力になるだろう。

でも、協力を受け入れるかは、セルジン王が判断する事だ。

「打ち破る？ 竜騎士にそんな事が出来るのか？ 百年前に、エステラーン王国に大敗した国が？」

「ああ、出来る！ 今は、俺がいる」

強気な発言に、僕は不信感を覚える。

この男は、何者なのか？

「……………君は竜騎士隊の隊長なのか？ ずいぶん強気だな」

テオフィルスは不敵に笑い、背を屈めて僕の顔を覗き込む。

「そのような者だ」

「竜騎士を受け入れるかは、国王陛下がお決めになる。今、この城に滞在中だから、僕に話すより陛下に直接話すべきだ」

「ああ、そうする」

彼は微笑み、頷いた。

「お前は領主家の人間だな、オーリン・ボガード。その身なりと物言い、お前なら知っているだろう」

「……」

話過ぎだと気付き、僕は緊張が増す。

テオフィルスが確信を突いてくる。

「人を探している。名前はオリアンナ・ルーネ・フィンゼル。レント領で生まれた、お前ぐらいの歳の姫君だ」

アルマレークだと、フィンゼルの家名が付くんだ。

なんだか、変な感じ……。

「オリアンナ姫？ 誰それ？ 聞いた事がないよ」

「レント領にいるはずだ。お前が、オリアンナ姫じゃないのか？」

ほら、来た！

当然、他人のふりを決め込み、自然に呆れる演技をする。

「僕が女に見えるのか？ 失礼だな。僕は男で、親は二人ともエステラーン人だよ！  
確かに体型は、変わっているかもしれないけど、エステラーン人！」

「それじゃあ、捜すのを手伝ってくれないか。オリアンナ姫は、俺の婚約者なんだ。連れ  
帰らないと、大変な事になる」

「ええつつ？」

驚きのあまり、思わず飛び退いてしまった。

婚約者！

他国で勝手に婚約者を決められている事に、驚き以上に猛烈な反発心が湧き起こる  
が、それを表面に出してはいけないと、理性が必死に止める。

テオフィルスは僕の反応に一瞬目を見開き、その後何でもないように無表情。  
僕は気付かれたかと、必死に冷静さを取り繕う。

「会った事もない婚約者を、こんな危険な国まで捜しに来るなんて、馬鹿じゃないのか  
？」

「ああ、捜しに来た」

嬉しそうに、彼が笑う。

僕の心臓が勝手に暴走を始め、顔が真っ赤になっている事を恐れ、心の中で自分を罵る。

しつかりしろ、悟られるぞ！

「協力してくれるのなら、お前にいいものをやる」

そう言つて彼は空いた方の手で、腰に着けた鞆から見慣れた物を取り出し、僕に差し出す。

それは馬に取り付ける二つの鏡あぶみ、馬の乗り降りや騎乗時に足を入れて安定させる馬具だ。

なぜこんな物を持ち歩く？

「魔法の鏡あぶみだ。これがあれば、どんな馬でも乗りこなせる」

「はあ？」

どう考えても、ただの鏡にしか見えない。

僕をからかっているのか？

月光石の灯りに映し出された彼の顔は、皮肉っぽく映る。

「竜騎士の体型を持つ者は、これがないと馬に乗れない」

「いらない！」

僕は鏡の受け取りを拒否して、視線を逸らす。

テオフィルスが冷たい目で、値踏みするように睨み付けてくる。

「尖がった奴だな、反抗期か？ 馬に乗りたくないのか？」

「乗りたいさ！ でも、いない姫君を、どう捜せって言うんだ。協力出来ないから、いら  
ないよ」

彼は不満を露わにしながら、無理やり僕の手を鎧を押し付け、顔を近付けて囁く。

「それじゃあ、お前は一生、馬にも乗れないな。せつかく竜騎士の体型で生まれてきたの  
に、俺の従者になればそれが生かせるのに、自分の才能を無駄にするなよ！」

月光石の灯りに照らされた、目の前の彼の顔は、少し拗ねた表情をしている。

僕の心が妙に騒いでいるのは、なぜだろう？

美形は、危険だ！

その感覚を振り払うように、僕は突っぱね、鎧を彼に押し戻す。

「しつこいな。君に協力は出来ないし、従者にもならない！」

「お前は竜騎士だ、いずれ竜の呼び声が聞こえるだろう。その時まで、せめて馬に乗れる  
ようになっておけ。協力はしなくていいから、これはお前にやるよ」

「……」

僕は鎧を手にしながら、怪訝な顔で彼を見つめる。

これが本当に魔法の鎧で、本当に馬に乗れるようになるなら、僕には絶対に必要な

物だ。

王太子が行軍参加するには、馬に乗れないと話にならない。

思わず鎧を握りしめた。

「ありがとう、これは受け取るよ。でも、僕は竜騎士にはならないよ」

「お前の意志は関係ない、竜の意志が、お前を選ぶ。その時が来れば解る」

彼の真剣な眼差しに、僕は背を向け、拒否の意志を伝えるように歩み去ろうとした。

「ふん、ヘタレ小竜め。そんなに竜に乗るのが、怖いのか？」

「……なんだよ、ヘタレ小竜って？」

「まともに飛べない小竜の事だ。お前はヘタレ小竜にそっくりだ」

あまりの侮辱ぶじよくに僕は振り返り、彼を睨み付ける。

こんな口の悪い男が婚約者だなんて、絶対にごめんだ！

彼の向こうに、秘密基地に向かう明り取り用の縦長窓が見えている。

呼び出しの合図である板に付けられていた紐が、その窓の中に消えていた。

そこから、エランの助けを借りて設置した、縄梯子が下がっている。

「あの、紐を引いたのは君なのか？」

「え？ ああ、俺だ。人が通った跡と、そこだけ埃が被ってない紐があれば、引いてみた

くなるだろ？ ここはお前だけの秘密通路だな」



秘密を見破った子供のように、彼は不敵に笑う。

訳の分からない理屈で、僕を呼び出したのかと思うと、ますます腹が立ってきた。エランが熱の出ている僕を、簡単に呼び出したりしないのは、解っていたはずだ。

医師がそろそろ到着するし、あの近衛騎士も別の侍女を連れて、開かない扉に困っているだろう。

僕は急いで引き返そうとした。

次の瞬間、テオフィルスが僕を引き寄せ、彼の唇が僕の頬に触れた。

「なっ……っ！」

「おっと、大声を出すと、内緒で抜け出したのがバレるぜ」

僕は彼に後ろから抱きしめるように捕らえられ、身動き出来ない。

「放せっ！」

彼は僕の要求を無視して、右手で暴れる僕の身体を押さえ、左手は僕の左手を捕らえた。

すると、彼の左手の何かが、柔らかい光を放ったのだ。

「え……っ？」

それが何を意味するのか、僕には解らない。

テオフィルスは楽し気に笑いながら、僕を放した。

意味か解らないまま、今の接触で女だと知られたかと不安になり、僕は急いで彼から逃げた。

「じゃあな、ヘタレ小竜！」

そう言ってテオフィルスは、僕とは反対側の通路の暗闇へと消えた。

## 第六話 王の婚約者？

どうしよう……、絶対に女だってバレた。

あんな事をするなんて……。

テオフィルスと名のるアルマレーク人に、後ろから抱きしめられた感触が、まだ身体中に残っている。

驚きと恐怖と怒りに、僕の身体は小刻みに震え、速い鼓動の音が、頭の天辺から足先にまで鳴り響いている。

ただ無我夢中で、あの男から逃げた。

秘密の抜け道から部屋までたどり着き、長持の底板を敷いて、誰も下から入れないように、重い板を何枚も乗せその上から服を置き、長持の蓋を閉め鍵もかけた。

それでも、不安が付きまとう。

あの通路からこの部屋に、魔法を使って鍵をこじ開けて、勝手に入ってくるかもしれない。

僕をオリアンナだと、気付いたかもしれないんだ。

自分の婚約者だって……。

セルジン王に言うべきだと理性が訴える反面、城から自由に出入り出来るこの部屋を、手放したくない気持ちが強くなる。

どうしたらいいんだ、僕は……。

部屋のドアを激しく叩く音に、僕は飛び上がり、意識は現実に取り戻された。

「オーリン様、大丈夫ですか？ 鍵をお開け下さい！」

部屋の外の護衛の声が、まるで緊急事態のように騒ぎ立てる。

僕は慌てて鏡の前へ行き、埃だらけの抜け道で転んだ汚れを叩き落とし、深呼吸をしてなんとか冷静さを取り戻す。

この部屋の秘密を、知られたくない。

誰にも、気づかれちゃ駄目だ。

思い切つて鍵を開けて、困っている大人達と対応するべく、平静さを取り繕いながらドアを開けた。

部屋の前には薬師の服装の男と先程の弟子、国王軍に割り当てられた侍女と護衛二人が、僕を見て安心したように溜息を吐く。

開口一番に薬師が、僕の具合を確認する。

「大丈夫ですか？ 倒れているんじゃないかと、皆で心配していたんですよ」

「ごめん、着替えに手間取ったんだ。熱は下がったみたいだよ」

「……そうなんですか？ 失礼」

薬師が怪訝な顔をして僕の額に手を当て、首をひねった。

「どこの癒し手に、治してもらいました？」

一瞬、アルマレーク人と会った事を見抜かれた気がして、僕は息を飲んだ。

この薬師は鋭い。

「ふふ、そんな癒し手がいたら、私は職を追われますね、医師も兼ねておりますから。草茶が効いたのでしよう。後で美味しいスープを届けさせます。召し上がってからです、もう少しお休み下さい」

薬草茶を飲んだ記憶が無いが、熱にうなされている時に飲まれたのだろう。

「ありがとう。薬師さん、名前を聞いていい？」

「私はマール・サイレス、国王陛下の薬師を務める者です。どうぞ、お見知りおきを」  
優しそうに微笑む三十代半ばのマールは、整った髭ひげが顔の輪郭を覆い、綺麗な琥珀色こはくの瞳で、金色の長い髪を束ねた、賢そうなのに人懐っこい好印象の男だ。

僕は嬉しくなって、微笑みながら頷いた。

不意に彼の後ろで待っていたミアが、頬を膨らませ僕を見ている事に気付く。

無駄足を踏ませたんだから、怒るのは当然だよね。

この女ひと、なんだか可愛い。

とても年上と思えない。

「ベイメさんは、いませんでしたわ。二年前に……」

「そうだよ。僕の侍女になるのなら、ベイメの事を知っておいてほしかった。良い侍女だったからね」

さらつと言つて、微笑んでみせる。

ベイメは自由を優先してくれるとても良い侍女で、彼女がいなくなつてから、僕は他の侍女を拒否してきた。

ミアが自由をくれるとは思えないが、国王軍相手に「侍女はいらない！」と、我が儘を通す勇氣は無い。

「はい！ ベイメさんに負けないように、しっかりと務ませて頂きますわ！ オリアン様」

ミアが明るく言つて微笑み、彼女を出し抜く方法を考えながら、僕は作り笑いをした。侍女と薬師の弟子と護衛が部屋に入り、不安と緊張を抱えながら後に続こうとした時、廊下の向こうから、僕を包み込む春の日差しのような、優しい何かが近付いてきた。僕はその方向へ自然に身体を向け、必死に保つていた平常心が溶け出すのを感じる。

近衛騎士を引き連れて、国王セルジンが現れたのだ。

「陛下……」

テオフィルスが与えた影響は思ったより大きく、セルジン王と引き離される恐怖心が、僕を王の元へと走らせた。

王は優しく微笑んで、僕を受け止める。

「どうした？ 何かあったのか？」

そう言つて僕を抱きしめながら、トキに僕の部屋に向かう指示を無言で出す。

先程の近衛騎士が、長持の下から聞こえた呼び出しの合図を、トキに報告したのだらう。

僕を心配そうにチラツと見ながら、トキの後に続き部屋に入つて行く。

「この部屋は、侍女や護衛が入ると狭く感じるだろう。私のいる貴賓室の隣に、そなたの部屋を用意させた。そちらに移るのだ」

抜け道は簡単に見つかり、この部屋は閉鎖され、僕の自由は無くなる。

少し残念な気もするけど、セルジン王に嘘は吐けない。

これで、いいんだ……。

貴賓室の隣の広い豪華な部屋で、用意された美味しいスープが、高熱から冷めたばかり

りの僕の身体を満たしてくれた。

病後だというのに、不思議なほど体力を消耗した感じがしないのは、アルマレーク人の魔法のおかげなのか？

それとも泉の精の魔力、〈生命の水〉のおかげ？

僕が寝込んでいる間に、歓迎の宴が終わってしまったのが残念だった。

食後に僕は、テオフィルスから聞いた事を、セルジン王に話した。

「婚約者……、その男がそう言ったのか？」

円卓の対面の椅子に座っている王は、アルマレーク人が現れるのを予想していたように、穏やかに問い掛ける。

僕は不安を隠しながら頷いた。

抱きしめられ性別を知られたかもしれない事は言わなかった。

魔法の鏡わづみを試してみたいのに、外出禁止にされる可能性が高く、今以上に自由を制限されるのは嫌だからだ。

それにアルマレークの特使が不敬罪で処罰されれば、また両国の亀裂が深まる。

腹は立つけど、父の国人は守りたい。

関わらないのが一番だ、相手は魔法使い、どこにでも入り込める。

なんとかアルマレークへ帰らせる方法はないのか……。



セルジン王を助けるため旅立つ矢先に、余計な邪魔が入った事で、僕は苛立ちを覚えた。

王の横に立つ白髪の四十歳ぐらゐの男が、静かに進言する。

「我が国と姻戚関係を結ぶつもりなのでしよう。《王族》の減少を機に、国の乗っ取りを考えていても可笑しくはありません」

灰色の鋭い眼光は、どこことなく白い鷹を思わせる。

「紹介しよう、エネス・ライアスだ。デイスカール公爵であり、宰相も務めている」

「オリアンナ様、お会いできる日を楽しみにしておりました」

エネスは僕に、《王族》に対する優雅な礼を取った。

怖そうな人が、また増えた。

僕は微笑んで、静かに頷く。

王は僕に説明するように、静かに語り始めた。

「王国の乗っ取りか……。だが、子は父の国と身分に従うものだ。本来オリアンナ姫はアルマレーク人、婚約者を決められていても仕方がない」

憂いを含んだ王の瞳が、僕を通して別のものを見つめている事に、どこことなく反発を感じた。

僕を見つめてほしくて、否定するように叫ぶ。

「僕はエステラーン人です、アルマレーク人じゃありません！」

「エドウィンが国を捨てたから、そなたはエステラーン人となった。だが、アルマレーク人は、そうは思わないだろう」

僕の横に立つレント領主ハルビインが、遠慮がちに話に割り込む。

「先日お話ししました通り、陛下が到着される一日前に、アルマレーク人からオリアンナ姫に、謁見要請がありました。正式な使者として三人の男を、城下街に留め厳重な監視を付けております」

王が領きながら、顔をしか擡めた。

「その話を聞いて、私も彼等に影の監視を付けた。その影の監視をくぐり抜けて城に入り込んだその男、おそらく次期領主だろう。オリアンナ、その者は左手に、竜の指輪をはめていなかったか？」

「え？ ……分かりません」

まったく記憶にない。

「アルマレークの領主家の次期領主は妙な魔法を使う。そなたの父がそうだった。竜の指輪から、竜の影を呼び出し、『王族狩り』で危機に陥った我等を、何度も救ってくれた。だからこそ、そなたの母、我が妹のオアイーヴを預けたのだ。なにより、二人は惹かれ合い、引き離す事はできなかった」

僕の知らない両親の話を、王から聞けるのが嬉しくて、僕はにっこりと微笑んだ。

「だが、そなたはアルマレーク共和国にはやれぬ！ 私は、『ソムレキアの宝剣の主』である、そなたの成長を待っていた。そなたがいなければ、魔王を消滅させる事はできない」

「僕は、アルマレークなんかには行きません！僕は陛下の婚約者です。陛下のお側にあります」

「……………」

王は一瞬、面食らったように僕を見つめて、すぐに視線を外す。

「それが歯止めになるなら、そう思えばいい。アルマレーク人には、決して近付いてはならぬ。オリアンナ姫と知られないように、レント領主の養子オーリンである事を徹底するのだ」

僕は領きながら、嬉しさに心が弾んだ。

陛下の婚約者って、思っただけでもないんだ。

僕の単純な喜びを読み取った王は、腕組みをして僕を見下ろし、品定めするように上から下までじっくり眺めている。

「そなた、ドレスを着て、姫君として行動出来るか？」

「…………ドレスですか？無理です！」

王が突然何を言い出したのか、訳も分からず僕は否定した。

ドレスを着ていたのは遠い昔だ、着られる訳がない。

「彼の注意を、オーリンから逸らさなければならぬ。そのためにはオリアンナ姫と思える、別の人物が必要だ」

エネスが考え込む。

「なるほど……、架空の人物を姫君が演じる。少し危険な気もしますが、目は逸らす事が出来ませぬ」

「その姫君が私の婚約者であれば、いくら次期領主でも下手な手出しは出来まい」

「え?」

僕は耳を疑った。

体温が一気に上昇し、不安が吹き飛び、心が舞い上がる。

王の婚約者に、一時とはいえ復帰できるのだ。

「私はその男と会ってみようと思う。そなたも彼との接見せっけんに立ち会うのだ」

「いいんですか? また、陛下の婚約者に戻っても……」

「架空の人物を演じるだけだが、少しはドレスを着る気になったか?」

まるで心をほんろう翻弄するように、王が微笑む。

「着ます! ドレスでも、なんでも!」

## 第七話 竜と特使

本当はあの男に会うのは、避けたかった。

抱きしめられた事で、女だと知られているかもしれないからだ。

ドレスを着る危険を、王に伝えるべきだと理性が訴えるが、感情はドレスを着てセルジン王の側にいたいと願う。

きっとあいつは、僕だと気付かない！

そう思い込んで、理性を封じ込めた。

「そなたの偽名はエアリス・ユーリア・ブライデイン、曾祖母の名を名乗るのだ。明後日までに、私の婚約者を演じる自信はあるかな？」

「頑張ります！」

王は優しく微笑んで頷いた。

長い栗色の髪を被り、その上から長いレースのヴェールで、顔も身体も覆い尽くす。

煌めく宝石の付いた髪飾りでヴェールを留め、体型はふんわりとした薄紫色のドレスで隠し、上腕の特徴を肩から袖口にかけて幅広の袖が隠す。

いいドレスだ。

これなら竜騎士の体型も判らない。

動きづらいが安心出来る。

「頑張ります！」と王には言ったものの、姫君を演じる自信は微塵もない。

僕の横にいる新しい侍女のミアが、ヴェールを持ち上げながら訳知り顔で微笑む。

「素敵なドレスですわ。サファイーナ様が毎年、オリアンナ様の体型に合わせてドレスをお作りになられていたようですね」

「義母<sup>ははうえ</sup>上<sup>が</sup>？」

養母サファイーナは昔から僕にドレスを着せたがり、それが嫌で今まで彼女を避けてきた。

それなのに、毎年ドレスを新調してくれていたのだ。

心の中で申し訳ない気持ちと、妙な敗北感を味わった。

ミアが僕と母上とのギクシャクした関係を知っているように思えて、嫌な予感に気が重くなる。

「サファイーナ様に、お礼をお伝え下さいね。まもなく御出でになりますから」

「……………うん」

待ち構えていたように部屋の扉が開き、小柄な女性が姿を見せた。

年の頃は三十五、六。決して美女ではないが周りの空気を和ませる、不思議な魅力を持った女だ。

住民達から奥方様と慕われ愛されている、レント領主夫人サファイーナ・ボガード。

「まあ、思った通りよく似合っているわ、オリアンナ姫。着て下さって、嬉しいわ」  
僕の全身が総毛立つ。

男子の僕の心が、サファイーナの言葉に反抗の叫びを上げる。

義母上に、見られたくない！

僕は真つ赤になって俯うつむき、拳を握る。

サファイーナに対して反抗心が剥き出しになるのが何故なのか、自分でもよく解らなかつた。

横でミアが、お礼を促うながす。

「義母……上、素敵な……ドレス、あり……がとう」

養母の顔を見ようとしぬ僕に、ミアが肘で合図を送る。

僕は仕方なく顔を上げ、久しぶりにサファイーナと目を合わせた。

いつの間にか、僕の身長が彼女より高くなっている事に気付き、驚きを感じた。

小柄な養母が、ますます小さく見える。

僕、そんなに身長伸びたのかな？

いつも一緒にいるエランがどんどん伸びていくので、僕はそんなに成長していないように感じていたのだ。

「姫君をお預かり出来て、私はこの上なく幸せでした。八年間、ありがとう、オリアンナ姫」

「僕は……」

「何もしていない」そう言おうとしたが、ミアに優しく止められる。

形式的な言葉かもしれないがサフィーナから言われると、突然自分がとてもつまらない人間に思えた。

女の身体を持ちながら、心は男である事を意識してきた。

結局どちらにもなりきれず何も身に付いていない僕に、サフィーナはどんな幸せを感じてきたのだろう。

「……ありがとう、義母上」

僕には、微笑みで返す事が出来なかった。

本番さながらの姫君としての訓練に四苦八苦しながら、なんとかドレスを着て歩くところまでは出来るようになった。



時間はあっという間に過ぎ、アルマレーク人との接見の日がやって来る。

アルマレーク人が城の正門を通った合図の鐘が、鳴り響く。

緊張と不安を抱えながら、騎士の大広間の扉の前に僕は立った。

「いいですね、オリアンナ様。何があっても、陛下のお顔だけを見ていて下さい。アルマレーク人は、見ないようにして下さいね」

「ミア、ぼ……………、私はオリアンナではなく、エアリスですわ」

言いながら慣れない言葉使いに、舌を噛みそうになる。

「はい。では、なるべくお話にならないように、エアリス様」

ほとんど棒読みの言葉使いに、ミアはにっこり笑って注意を促し、優しく背中を押してくれた。

付け焼き刃の女装で、アルマレーク人を騙せるのか不安が過る<sup>よき</sup>。

扉が開き、大勢の国王軍の騎士達の赤い長衣が、目に飛び込んできた。

緊張が頂点に達し呆然と立ち止まり硬直していると、目の前に優しく微笑んだセルジン王が現れ手を差し伸べてくる。

おずおずと手を伸ばし温かい手にのせると、何かが重ねた手を通して伝わってくる。

それは心に安らぎをもたらし、自然と王が心を占めた。

整列する近衛騎士達の間を導かれ、大勢の騎士達の前に出る。

楽師達が奏でる緩やかで美しい音楽が流れる中、中央の雛壇にある玉座の横に立つ。

王が繋いだ手にくちづけをした。

女性に対しての挨拶と解つてはいても、心臓が激しく鼓動を打ち、急に恥ずかしくなつた。

僕は、きつと真つ赤になつてゐるぞ。

王が微笑む。

「アルマレーク人を呼ぶ。何があつてもそなたは、私の婚約者を演じるのだ」

「はい」

少し悲しくなる。

本当の婚約者に、戻れたらいいのに……。

王が玉座に着席したと同時にファンファーレが鳴らされ、異国の使者との接見が始まつた事を、騎士の大広間内外に知らせた。

騎士達が玉座と外への扉の間に整列し、道が出来る。

外の扉が開かれ、見慣れない服装の男が三人現れた。

テオフィルスはアルマレーク共和国の公人としての服装なのだろう、少し丈の高いつばの無い帽子を被り、長衣とマントには豪華な金糸の刺繍が施され、まるで若い国王の

ように見える。

あれが特使としての服装なら、相当に身分の高い人物だよ。

半透明のヴェール越しに、見ない振りをしてしながらしつかり観察する。

一昨日に会った彼とは別人に見えた。

彼に続く左横の一人は、二十代半ばの精悍な身体つきの男で、明らかに護衛だろう。

もう一人は、賢そうな老人。

三人は慣れた様子で騎士達の間を進み、雛壇の少し手前でひざまず跪き頭を垂れる。

王はしばらく黙ったまま、じつと彼等を見つめていた。跪く者達は王が声をかけるまで、身動き一つせず待っている。

「アルマレーク共和国の特使の者、顔を上げ、名を告げよ」

王の言葉に、三人の使者達は揃って顔を上げる。

「私はアルマレーク共和国リンクルクラン領主テオドル・ルーザ・アルレイドの長子、テオフィルス・ルーザ・アルレイドと申します。後ろに控える随行者は、マシーナ・ルーザとトムニ・ルーザ。いずれも竜騎士でございます」

テオフィルスの言葉に、王は訝いぶかしんだ。

「竜はどこにいる？ 危険な竜など、我が国に立ち入らせる事は出来ぬ」

「竜二頭はアルマレークの国境に待機させ、貴国に立ち入らせてはおりません」

「二頭？ もう一頭はどこにいる？」

「……私の、竜の指輪の中に」

そう言つてテオフィルスは左手を顔の前に持ち上げ、王に中指にはまる指輪を見せた。

指に巻き付く黒銀に煌めく竜は、まるで生きていようような存在感がある。

「指輪の中に隠れているという事か？ 貴殿は魔法を使うのだな。では、その竜を見せよ」

王が知っているはずの事を、知らぬ素振りで要求するのは、僕を含めた見た事のない者達に、竜と次期領主が持つ魔力を見せるためだと理解出来た。

「屋内でお見せするには暑苦しい生き物です。屋外に出しましょう」

「ここで構わぬ、見せよ」

騎士の大広間に緊張と、驚異を見る期待が溢れ出し、人々の目はテオフィルスの指輪に集中した。

彼は不敵に微笑み、左手を高く掲げた。

「リンクル、小さくなって出でよ」

竜の指輪から何かが飛び出し、宙に舞う。

それは大鷹ほどの大ききで、長い翼を羽ばたかせ、高い天井の梁まで飛んでぶら下が

り、長い首を曲げて下を見下ろし人々を威嚇した。

その姿に僕は可愛らしさを感じる。

「貴殿はあのような小さな竜に乗れるのか？」

王が促す。テオフィルスは無表情に頷き、低い声で呟いた。

「リンクル、元の姿に」

その言葉と同時に、猛烈な熱気が大広間を駆け抜けた。

人が熱気から身を守っている間に、馬の三倍は大きい凶暴な姿の竜が、梁から床に降り立った。

あまりの威圧感に皆は後退り、剣に手をかける。竜はセルジン王に怒りの唸りを発し、横に控える僕に気が付き長い首を向けた。

竜の顔が僕に迫って来る。

凶暴な牙が大きな口の中に見え、その口から出る熱気に咽る。

僕は恐怖と共に不思議な懐かしさを感じ、魅入られたように立ち尽くす。

遠い昔、思い起こす事も出来ない昔に、確かに僕は竜といた。

きつと、父の竜だ。

竜の斜め横にいるテオフィルスが、青い瞳に優しさを浮かべて僕を見つめていた。

彼の心の声が、聞こえた気がする。

——  
君は、オリアーナ姫だろうか？

## 第八話 滅びの予兆

アルマレーク人との接見の場で、テオフィルスの竜の指輪から現れた竜が、僕に向かって何かを話しかけてくる。

でも、僕には意味が解らない。

聞き取ろうとした時、目の前にセルジン王と近衛騎士が、僕を庇い立ちふさがる。

王は皆に解らせるように、テオフィルスへ話しかけた。

「それは竜の影だな。私と同じように魔力で構成された実体を持つ影だ。噂に聞くアルマレーク共和国の神、七竜の一神か？」

テオフィルスが頷く。

「七竜リンクル神、リンクル克蘭領を守護する竜です」

王は僕の肩を抱き、ヴェール越しに額にくちづけする。

「私のエアリス姫が怖がっている。もう充分だ、その神を指輪に戻してもらおう」

僕の偽名に、テオフィルスが怪訝な顔をしながら、七竜を指輪に戻した。

窓が開けられ、騎士の大広間に充満した熱気が一気に冷えて、皆が一樣にホツとした。

王が玉座に戻り、テオフィルスに問い掛ける。

「我が国内での、その指輪の使用を禁止したい。この場で我等に預けてもらおう。帰国時に必ず返す」

テオフィルスは静かに首を横に振った。

「この指輪は外せません。無理に外せば、竜の怒りを買って周り中が焼き尽くされる。私の場合、特に怒りが酷く現れるでしょう」

「……それは、貴殿が特別な存在という事か？ その若さでその衣装、貴殿はただの領主候補ではないようだな？」

テオフィルスは無表情に王を見つめ、両手の甲を外にして顔の前<sup>こゝろ</sup>に上げた。

その瞬間、彼の指に六つの竜の指輪が現れた。

「私は〈七竜の王〉と呼ばれる者です」

「王？ 共和国に王はいないと聞いているが？」

「共和国が王制だった頃の名残りです。アルマレークに危機が訪れる時に現れる、七竜の魔力を扱い、国を救う宿命を持って生まれた者の事です」

「その指輪には、それぞれの七竜の魔力が秘められているという事か？ 恐ろしいな」

「むやみに使いはしませんから、ご安心下さい。本来は各次期領主の所有する物、こうして呼び出すだけで彼等に迷惑が掛かります。今お見せしているのは、私が〈七竜の王〉である証明のためです」



王はじつと彼の指輪を見つめ、納得したように頷く。

「指輪が一つ足りないな。貴殿の国に危機が訪れている証拠か？」

「はい。我が国にも、屍食鬼が現れました」

「なに？」

騎士の大広間が騒めいた。

屍食鬼のいる範囲は、王国の中心にある二つの水晶玉の魔力の圏内だけで、レント領のように魔力の圏外にある辺境には、滅多に現れないと思われていた。

まして国境を越えて他国に現れた事等、一度もないはず。

国王セルジンが水晶玉の中に入り十五年間、魔王の魔力を抑えているからだ、皆がそう信じていた。

テオフィルスの六つの竜の指輪は、いつの間にかリンクルの指輪以外が消えている。

「それは本当の事か？」

「本当の事です。目撃した者は大勢おり、私も確かに見ました」

「……………」

《王族》の減少が、セルジン王を弱らせている。

それは王自身が一番感じているはずだ。

王が弱れば国を守る魔力も弱まり、魔王の魔力が上回って、屍食鬼が王国の外へ出沒

し始めてもおかしくはない。

これは、大変な事態だ。

僕は《聖なる泉の精》の言葉を思い出し、愕然としながら王の横顔を見つめた。

《《王族》の減少が彼を弱らせ、水晶玉の魔力に心を蝕まれているのです。今のままでは、彼も魔王と化すでしょう》

王は少し憔悴の表情を浮かべていた。

僕は彼の横で膝を折り、玉座の肘掛けに置かれている手に手を重ねた。

セルジン王が優しく微笑む。

陛下には《王族》が必要なんだ。

僕が……、必要なんだ。

絶対に、魔王になんか、させない！

「我が国には十五年前から、エステラーン王国の避難民を受け入れてまいりました。これまで問題なく彼等と共存していたのです」

「……それは、感謝する」

テオフィルスの表情が、暗く陰る。

「つい一月ほど前、レクーマオピオン領の高官達が、貴国の避難民に殺される事件が発生し、今現在あの領地は大変な危機に直面しております」

「高官達が……？ なぜ彼等がそんな事を？」

「分かりません。殺されたのは次期領主であるエドウィン・ルーザ・フィンゼル様の親族達です」

父上の親族？

会った事もない親族の死に、心に緊張が湧き起こる。

なぜ父の親族が殺されたのか？

僕は思わず、テオフィルスを見入ってしまった。

「レクーマオピオン領の七竜レクーマが十年ほど前から弱り始め、レクーマの領地は荒廃し領民達は苦しい生活を送っております」

「……七竜は神であろう？ 神が弱る事等あるのか？」

「原因は不明ですが、次期領主の竜の指輪が戻ってきません。指輪が戻らないのは生きている証拠ですが、エドウィン様に何か異変が起きているのではないかと思われます」

《聖なる泉》で見た父の姿を思い出した。

導しんを残すと言っていた。

ブライデインの《聖なる泉》で待っていると……。

異変つて、父上は何をしているんだ？

《エドウィンが全てを犠牲にしてあなたに残したものを、どうか否定しないで下さい》

泉の精の言葉が、心を切り裂くように浮かび上がり、呼吸が自然に荒くなる。

緊張から王の手を強く握った。

察した王が落ち着くと、手を握り返してくる。

アルマレーク人に悟られてはいけないのだ。

「私は〈七竜の王〉として、レクーマオピオン領で数年を高官達と共に過すごしておりました。その彼達が殺され、七竜レクーマの声を聞く者が僅わずかかとなりました」

「領主の担う仕事が滞り始めたのだな」

頷くテオフィルスに、苦痛の表情が浮かび上がる。

築き上げた友情が、一瞬で奪われたのだろう。

彼も心に傷を負っているのだ。

「事件が起きる前後に屍食鬼が目撃され、尋常でない事件の有り様から、エステラーン王国の魔王の仕業と判断されました」

「……」

「念のため他国に同様の被害が無いか確認したところ、予想通り事件が発生しております」

「アドランが他国に手を伸ばし始めた……」

王が深い溜息を吐いた。

横にいる宰相エネス・ライアスが王に耳打ちし、王は頷き、彼は一礼してその場を離れた。

確認の指示を出しに行つたのだろう。

「領主家の人間がいなくなれば、七竜レクーマが死ぬ事態も起こりえます。七竜が欠ければ、アルマレーク共和国は滅びると言われております」

「……魔王が、それを知っていたと?」

「そうとしか思えません!」

テオフィルスが訴えるように、僕を見つめてくる。

まるでエドウインの娘オリアーナである事に気付いているように。

「エドウイン・ルーザ・フィンゼル様とそのご家族の、早急なご帰還を要請しに参りました!」

僕は父の国の事を知りたいと、秘かに思っていた。

でも現実甘い想像を完全に打ち砕く、父を原因とした滅びの予兆だったのだ。

父が戻らない事で、アルマレーク共和国が危機に陥っている。

それは娘である僕を守るために、父が作り出した事態だ。

父上はブライデインの《聖なる泉》で、本当に生きているのか？

屍食鬼しかいない場所で、どうやって生きている？

僕はヴェール越しでも、テオフィルスを見ないようにした。

彼の心の声が嫌という程感じ取れる、「君はオリアンナ姫だろうか？ 領主家の責務を

果たせ！」と。

でも……、僕がアルマレークへ行ったら、魔王はきつと追いかけてくる。

危機が増えるだけだ。

助けを求めるように、玉座に座る王を見つめたが、つないだ手とは裏腹に王は視線を

返さない。

テオフィルスにオリアンナ姫がいる事を、悟らせないためだ。

「残念だがエドウィン殿は、レント領にはいない。十一年前に旅立ち、その後の連絡はな

いそうだ」

「どちらへ？」

「判らぬ。レント領主ハルビンが聞いたのは、妻と娘の保護、そしてアルマレーク共和

国との、一切の関わりを断つという事だ」

「……………確かに連絡は、十一年前から途絶えております。何があったか、ご存じでは？」

王は首を横に振った。

僕が二歳の頃、僕の前に《ソムレキアの宝剣》が現れた。

魔王の来襲を予想し、父は故国が巻き込まれるのを避けるために、一切の連絡を絶った。

初めて聞く話に父の覚悟が伝わり、胸が痛んだ。

「エステラーン王国は十五年前から、我が兄アドランとの戦いによつて混乱が続いている。当時レント領に魔王が現れた報告は受けておらぬ。何があったのかは、知らぬ」

「……………では、ご家族は？ オリアンナ姫がいるはずです」

「残念だが姫は八年前に、母と共に《王族狩り》の犠牲になった」

「亡くなつた？」

「そうだ」

テオフィルスは一瞬ショックを受けながらも、疑惑の目を僕に向けてくる。

王の言葉を信じて、このまま帰ってくればいい。

アルマレークの問題は自国で解決すればいいのだ、僕がそう思った時。

「そちらの姫君は、オリアンナ姫なのではありませんか？ 先程のリンクルの反応から、

「そうお見受けしますか？」

彼の低い声が、騎士の大広間に響き渡った。

僕の鼓動が、大きく脈打ち始める。



## 第九話 姫君の眼差し

緊張感を出さないように平静を装いながら、僕はひたすらセルジン王の横顔を見つめた。

周りの騎士達も同様に、テオフィルスを見ないふりをしながら警戒を強める。

王が少し不機嫌な様子で、彼の質問に高圧的に答えた。

「竜の反応など、我等には知らぬ事。ここにいるのは、私の婚約者のエアリス姫だ、亡くなった姫君と同一視されては困る。エアリス、顔を見せてあげなさい」

「はい、セルジン」

この時だけは王を名前で呼ぶよう言われていて、緊張しながらも、嬉しさに自然と微笑みが湧き起こる。

付き添っていたミアに手を取られ、立ち上がる。

少し高めの靴底で実際より長身で年上に見せ、顔の輪郭を柔らかい濃い栗色の髪が覆い、同じ色合いに睫毛と眉も染めた。

「母のオアイーヴにそっくりだ」と王に言われた、凄く嬉しくなる変装だ。

ミアがヴェールを持ち上げた。

視界が鮮明になり、アルマレーク人が食い入るようにつめてくるのが分かる。

テオフィルスの冷静な青い瞳が、問いかけるように直視している。

微笑んで、彼に貴婦人の礼を取った。

「エアリス・ユーリア・ブライデインと申します」

彼は優しく微笑み、胸に手を当て挨拶を返す。

「美しい姫君、あなたに良く似た少年と、レント領で会いました。ご親族の方でしょうか？」

「……………どなたですか？」

僕は一瞬、言葉に詰まった。

彼の鋭さに、顔が強張る。

さり気なく王が立ち上がり寄り添い、頬にくちづけをするふりをして耳元で囁く。

「落ち着け、オーリンとは似ていない。鎌掛けだ、気にするな」

王にそのまま抱きしめられた。

「それは未来の私の妃が、少年に見えるという事かな？」

「いいえ。私はこの国でアルマレーク人に会ったのです。姫君の印象的な灰色の眼差しと、とても良く似ていたのでお聞きしました」

いくら変装しても、瞳の色や眼差しまでは変えられない。

彼は鋭い観察眼を持つ、怖い存在だ。

「領王家の養子の事か。確かにアルマレーク人の体型だが、彼はエステラーン人だ。《王族》の落胤らくいんであるが、母親にアルマレーク人の血が混じっていたようだな」

王はあえてオーリンの名前を出さず、養子としての表向きの出自を教えた。

オーリンへ意識を向けさせるのを避けるためだ。

「その母親に、お会いできますか？ 確認したい事があります」

「無理だな。《王族狩り》で、やはり殺されている」

「では、彼をアルマレーク人として、もらい受ける事は可能でしょうか？ 良い竜騎士になると思います」

テオフィルスの考えに、僕は驚きを覚えた。

王に願ひ出るといふ事は、よほど真剣なのだ。

そんなに僕を、竜騎士にしたいのか、どうして？

それとも、やはり僕が、オリアンナだと気付いているのか？

馬に乗るのも下手なのに、竜に乗れるとは思えず、理解に苦しむ。

王が即座に否定した。

「残念だが、それは不可能だ。《王族》の血を引く者は、国外に出る事は許されない」

「それは、なぜでしょうか？」

「当然、国を守るためだ。《王族》はそのために存在している。貴殿の国でも、領主家の血統は大切なのではないか？」

「確かに、その通りですが……」

彼は考え込むように、王を見ていた。

アルマレークの領主家は、竜騎士の血統だ。

国外に出るのは当然の環境で育つが、血統が絶えた事は一度もない。

絶えそうになった時は、事前に《七竜の王》が生まれ危機は回避される。

「もしオリアンナ姫がご存命であった場合、やはり出国は叶わないでしょうか？」

「当然、無理だな。母親は我が妹、つまり《王族》では無理に決まっている」

テオフィルスは王を睨みつけた、まるで諸悪の根源でも見るように。

王の意図が理解出来たのだ、「《王族》に近付くな！」という意図が。

やんわりと微笑みながら、王が釘を刺す。

「貴殿の国と我が国の常識は違う、まして我が国は戦時下にある。不用意な行動は、命に係わるという事を心得よ」

「解りました。では、エドウィン様の住居に、立ち入る許可を頂きたい。何か手がかりが残されているかもしれません」

王の腕の中で、僕の身体が強張った。

父の館は今も、第一城壁内のレント城から少し離れた場所に存在している。

惨劇の後、セルジン王の命令により立ち入りが禁止され、誰も近付く事が出来なくなつた。

今では幽霊屋敷のように誰もが避けて通る場所、そこにテオフィルスが立ち入ろうとしてゐる。

僕は姫君の表情が保てず、身体が小刻みに震え始める。

あの館に人が入る！

彼なら忍び込める。

八年前の惨劇が心の中で甦り、息が苦しくなつた。

王は異変に気付き、秘かに抱きしめる力を強める。

テオフィルスに気付かれれば、オリアンナ姫と知られてしまう。

解つてはいても、恐怖を心から追い出す事が出来ない。

「残念だが館はもう何年も前から、別の人間の住居だ。エドウィン殿の持ち物は存在しない」

王は嘘を吐いた。

それを彼が信じたかは解らない。

「そうですか。レント領主様は、何か預かつてはいませんか？」

王の横に参列しているレント領主ハルビインは、首を横に振りながら否定する。

「お預かりしたのは、陛下の妹君と姫君だけです。他にはございません。……お二人を、私は守る事が出来ませんでした。今でもその悔しさに、悪夢にうなされます」

恐怖に震える僕は、王の抱きしめる温もりに、徐々に冷静さを取り戻し、領主の言葉が心に届いた。

僕を必要以上に過保護にしたのは、その悔しさが原因なのだ。

義父<sup>ちちうえ</sup>上も《王族狩り》で、心に傷を受けた一人だ。

僕だけじゃない、きっと他にも大勢いる。

そう思うと、身体の震えが止まった。

王はそれを感じ取り、抱きしめる力を緩めた。

「気に病むな、ハルビイン、悔いても二人は戻らぬ。それより今以上に警備を強化せよ。侵入者は容赦なく殺して構わぬ」

「承知しました」

王の言葉は、城へ安易に入り込んだテオフィルスに対しての警告でもある。

「エドウィン殿はアルマレークとの関わりを断った。レント領には何も残してはいない」

「……そうですか。では我等を、国王軍に参戦させていただけませんか？ アル

マレーク共和国には、エステラーン王国へ協力する用意がございます」

テオフィルスの真剣な申し入れに、王は声を上げて笑った。

「ハハハ、屍食鬼に覆われた王国の戦いに、どうやって参戦する？ 竜の炎で空一面を焼き尽くしても、魔界域から次々湧いて出て限きりがないぞ」

「承知しております。ただ、空を飛べるのは我等の強み、戦い以外でもお役に立てる事がきつとあると思います」

彼の後ろで控えていたアルマレーク人二人が、真剣な眼差しで王に頷く。

アルマレーク共和国は、本気で魔王と戦うつもりなのだ。

それは、テオフィルスの意志なのだろう、初めて会った時もそれを口にしていた事だ。

《俺はあの屍食鬼の群を、打ち破る！》

竜が協力してくれば、王国の各地との連絡が容易になり、国王軍には有利に働くはずだが、僕という存在がアルマレークの協力を阻んでいる。

どう持ちかけても、二国は協力し合えない。

僕がいる限り。

王は暗い表情で、首を横に振った。

「参戦は断る！ アルマレーク人とは百年前に戦った経緯がある。昔の遺恨は、軍の規律を乱す」

「規律は乱しません。必ずお役に立ちます！」

「肝心な事を忘れているな。エドウィン殿下が我が国に留まっていると思うか？　こんな危険な地に、十一年も？　他国を搜索した方が、可能性があるのではないか？」

「……………」

王は笑つて扉を指し、接見の終了を促す。

出入り口の兵士達が、終了の合図と見なし外への扉を開く。

少し暖かい春の風が、騎士の大広間に流れた。

「国外の事態を知らせてくれた事には感謝するが、貴殿達の要請には答えられぬ。新たな血筋を見つけ出し領主に据えればいい、テオフィルス殿」

二人のアルマレーク人が王の前で再び跪くが、テオフィルスは反抗するようにその場に立ち動こうとしない。

青い瞳に厳しさが表れる。

「新たな血統等、ありえませぬ！」

「なに？」

「竜の指輪は領主となるフィンゼル家の人間を引き寄せる。私が欠けた指輪に引き寄せられ、エステラーン王国まで来たように！」

それは王国に父がいる事を確信している物言い、彼は王ではなく僕をじつと見つめ



ていた。

僕は連れ去られるかもしれない恐怖に、王にしがみ付く。

「領主家の直系はいずれ七竜レクーマの声を聞き、指輪をはめる。その時に私が必要となるのです」

僕がオリアンナ姫だと、確信しているように。

「貴殿の思い込みに、私のエアリス姫が怯えている。もう少し表情を和らげてもらえぬか？ 使者として相応しくなかるう？」

王の言葉にテオフィルスは、僕から視線を逸らした。

彼の苛立ちが、手に取るように解る。

エアリス姫を自分の婚約者だと確かめたいから、父の指輪の話をしているのだ。

七竜レクーマの声？

そんなの僕には聞こえないよ。

王の影に隠れ、彼を見ない事にした、怖い存在から身を隠すように。

「何度も言うが、オリアンナ姫は亡くなっている。貴殿の言う欠けた竜の指輪が、王国のどこかに在るとしても、私は参戦を許可しない」

「なぜですか？」

「貴殿の思い込みは、周りの者達を危険に晒すと判断したからだ。国に帰り別の方法を

考えられよ、その方が賢明だ」

「……」

立ち尽くす彼の後ろで、ひざまず跪く随行者が注意を促す。

「若君、ご挨拶を……」

敗北感を滲にじませながらテオフィルスは跪き、肩を落として礼を取った。

「陛下に拝謁はいえつを賜り、感謝致します。別の方法を考えたいと思います」

「貴国にこれ以上迷惑が掛らぬように、こちらもアドランの動きを今以上に阻む努力をしよう。それだけは約束する」

「ありがとうございます」

そう言つて顔を上げた彼は、今まで以上に無表情だ。

三人のアルマレーク人は一礼した後、踵を返して騎士の大広間を出て行つた。

## 第十話 僕は負けない

アルマレーク人が騎士の大広間から姿を消した直後、僕の緊張が緩み、膝がガクガク震え始めた。

とんでもないミスをして、オーリンと知られてしまったのではないか、不安で息が荒くなる。

セルジン王が安心させるように、軽く抱きしめてくる。

「申し訳ありません。……たぶん、オーリンだと気付かれました」

「それはないだろう。オーリンをもらい受けたと言っていたのは、気付いていないからだ」

「そう思われますか?」

顔を引き攣らせながら恐る恐る王を見上げると、彼は優しく頷いていて、僕はほんの少し落ち着く事が出来た。

同時に周りの大勢の国王軍の騎士達が、僕と王を見ている事に気付き、急に恥ずかしくなる。

僕は領主の下で騎士見習いをしているので、この騎士の大広間には何度も出入りして

いるが、今はまるで別の場所にいるような錯覚を覚える。

窓から斜めに差し込む日の光と、高い天井近くの窓からの光は、領主家とレント騎士隊の紋章旗や盾とは別に、国王旗と国王軍旗を照らし出す。

いつもある長机や椅子は姿を消し、広く華やいだ広間に、国王軍の赤い長衣の多くの騎士達が、まるで陣形を成すように整列し、王の命令を待っていた。

レント領騎士隊の黄褐色の長衣は領主の側近だけ、まるでここがレント領でないように思える。

レント騎士隊で僕の正体を知るのは、最初に国王軍を迎えた、口の堅いごく一部の者達だけだ。

オーリンの正体は、完全に隠されている。

それでも不安が付きまとうのは、あの秘密通路で彼に抱きしめられ、僕が女だと知られたかもしれない不安のせいだろう。

「でも、あの男は普通の人間じゃない、魔法使いです。どこにでも忍び込めるんですよ」「私がいる」

「陛下……？」

セルジン王が、不安を払拭するように微笑む。

緑色の優しい瞳に、新たな魔法をかけられたように僕は魅入られる。

「私が常にそなたの側にいる。それでも、安心出来ぬか？」

体温が一気に上昇し、鼓動が勝手に騒ぎ始める。

あまりにも簡単な自分の反応に呆れながら、即座に首を横に振った。

「本当に？ ずっと、陛下のお側に？」

「そうだ。そなたは私の側で、学ばねばならぬ事が多くある。アルマレーク人の事等、気に掛ける余裕もない程に」

王の表情が、突然厳しくなる。

「これはそなたが判断を下す、第一歩だ」

「……陛下？」

王が騎士達に向かって命じた。

「アレインを呼べ！」

その一言で騎士の大広間に緊張が走った。

皆が一斉に動き始める。外へ出る者が多く、残った騎士たちは王の近くへ集まり、誰かのために道を作る。

その先に一人の男が、外から現れ立っていた。

二十歳ぐらいの精悍な顔付きの男は、ほかの騎士達を圧倒する程の存在感を放っている。

騎士達の反応がそう見せているのかもしれない。

羨望と嫉妬、畏怖と尊敬とが彼に集中し、それを当然の如く自分の輝きとして身にならしている。

通り過ぎる彼に、騎士達が礼を取る。男の視線は、まっすぐセルジン王を捉えていた。この男は、国王軍にとって重要な人物だぞ。

なんだか……、圧倒される。

男は王の前で跪き、《王族》に対する礼の姿勢を取った。

「アレイン、異国の使者達を見たか？」

「はい。竜騎士の身体能力は、優れていると見えます。特に随行者の若い方は、倒すには騎士二十人程は必要かと」

「なるほど、あの人数の少なさは、彼が賄まかっているという事か。後ろに軍が控えている可能性もあるな」

「相手は竜騎士の軍です、空への警戒も怠ってはおりません」

まるで今すぐアルマレークと戦いが起きそうに聞こえる。

父の故国を、敵と捉えているの？

不安に王の横顔を見つめると、何でもないように微笑みを返してくる。

「そなたを巡って、いつ争いが起きても可笑しくはない。そのための準備はしておく」

領きながら、迂闊な行動は取れないと感じた。

王の側にいるというのは、そういう事だ。彼は絶対的な権力者、王太子の意志は気にもしない権力者だ。

嬉しい反面、自由は無い。

いつの間にか王に手を取られ雛壇を下り、男の前まで導かれた。

「紹介しよう。彼はアレイン・グレンフィード。ノルダイン公爵であり、国王軍の大將を務める。そなたの王配候補だ」

アレインは優しい微笑みを浮かべて、貴婦人に対する礼をする。

「お会いできるのを、楽しみにしておりました。オリアンナ姫」

儀礼的ながら、心をしっかりと捉えようとする彼の瞳に、反抗心を覚えた。

付焼刃の貴婦人の礼を、怪訝な表情でぎこちなく返す。

彼が悪い訳ではない、僕の気持ちが悪セルジン王以外を否定しているだけだ。

絶望的な気持ちで、王の顔を睨み付けた。

「また王配候補？ でも、エランは？」

「エランもその一人だが、私はアレインを薦める。彼なら国のために、的確にそなたを補助してくれるだろう」

王が本気でそう言っている事に、憤りを感じる。

どうあつても自分以外に、目を向けさせたいのだ。

王配候補等いません！

あなたの側にいるだけ満足です！

心の中ではそう叫ぶ。

でも、それを告げれば、王はますます王配候補を増やすだろう。

自分がいない未来にしか、彼は意識を向けていない。

「僕は……」

「私と言ってくれ、その姿でいる時は」

苦笑いしながら、睨み付ける相手に顔を近付けた。

「言ったはずだ、判断するのはそなただ。どう対応する、王太子は？」

王の緑色の瞳が、面白がるように回答を待っている。

判断をするのは、僕？

陛下は僕の意志を、優先してくれるのか？

戸惑いながらアレインを見つめた。

彼は国王軍の騎士隊の頂点にいる人物、騎士達が注目する中で、恥をかかせる訳には  
いかない。

でも、王配候補として受け入れる事が出来ないのは、エランはかわ躲す事が出来ても、こ



の男は無理だと思えるからだ。

僕は今、姫君の姿をしている。

きつとオーリンの姿を見ていない騎士も多いはずだ。

本当は長い髪かみの鬢を取り除きたかったが、しっかりとピンで留められ一人で外すのは不可能だ。

仕方がないので姫君の姿のまま、極力少年らしく振舞う。

「アレイン殿は剣の腕が、国王軍の中で一番強いのか？」

少年口調の話しぶりにも、アレインは驚かず微笑みを崩さない。

「……私より強い者は、陛下の近衛騎士に配属されます。オリアンナ姫の近衛になる者も、私よりは強いでしょう」

「ふふ、謙遜するな。アレインより強いのは、トキ・メリマンぐらいだ」

王の後ろでトキが無表情に頷いた。

本当にそうなのだろう。

「アレイン殿に、僕の剣技を鍛えてほしい。僕は国王軍の足手纏いにならないためにも、強くならなければならない！」

その場にいる者達が、不思議なものでも見るように僕を注視した。

おおよそ似つかわしくない物言いに、違和感と面白さを覚えるのだろう。

「強くなる！」とは、姫君が言うセリフではない。

なんとか解つてほしくて、真剣な顔付きでアレインに訴える。

「魔王を倒すまで、王配候補を決める気はない！ オリアンナに戻るのは後の事、今はオーリン・トゥール・ブライデインとして存在する！」

その言葉に、アレインは儀礼的ではない微笑みを向けてきた。

「私は剣に關して容赦のない男ですよ。宜しいのですか？」

「構わない！ よろしく頼む」

王が額に手を当て呆れている。

やがて深い溜息をつき、保護者のように睨み付けてくる。

「エランも保留にするつもりか？」

「はい！」

「オリアンナ姫、王太子の未来をある程度決定しておかなければ、国は安定しない！ アルマレークに付け入られるぞ！」

「……付け入られる事はありません。陛下が王として存在される限り、僕はアルマレークとは関わりは持ちません」

「……………私は間もなく消える身だ。そなたの未来は、国の未来であるから、王配選びは最重要事項なのだ。あの男が婚約者である限り、エステラーン王国はアルマレーク共和

国に併合される危険がある！」

その言葉に衝撃を受けた。

テオフィルスの満面の笑みと言葉と青い瞳が、危機感をいつそう駆り立てる。

《オリアンナ姫は、俺の婚約者なんだ》

あの時、それが国の危機だと、なぜ気が付かなかった？

僕は狼狽<sup>うろた</sup>え、後先考えずに本心を口にした。

「僕は陛下の妃になる以外の未来を、考えられません。陛下を人に戻す方法を、必ず見つけ出します！ だから消えるなんて、思わないで下さい」

「方法は十五年探して見つからなかった。淡い期待は苦しみを深めるだけだ。今すぐには言わないが、もっと現実を見て自分で判断するのだ。良いな？」

僕は仕方なく頷く。

王は手を上げ、騎士達の解散を指示し、僕をトキに預け去って行った。

怒らせたかもしれない……、そう思うと陛下に嫌われたようで怖くなった。

立ち尽くす僕の隣で、まだアレインが僕を見ている事に気付いた。

「殿下のご意志に、賛同します」

「え？」

アレインが僕に微笑み、胸に手を当て、誓いを立てるように僕に告げる。

「十五年探して見つからなかった事も、宝剣の主である殿下になら、見つけ出せるかもしれません。陛下を人に戻す方法を、陛下に負けないで探し出して下さい」

彼の横で、トキが頷く。

僕には同じ目的を共有出来る仲間がいる、そう思うと勇気が湧いてくる。

「……うん。ありがとう、アレインさん。僕は、負けないよ！」

## 第十一話 義兄ハラルド

エラン・クリスベインはレント城の門内で、君主であるロイ・ベルン指揮長官の元、城付きの新任務に就いていた。

国王軍の中で王配候補とされている事は、レント騎士隊のほんの一部の人間だけが知る機密事項とされ、国王軍の出発まで騎士隊の一員として仕事をしていた。

騎士隊は国王軍に協力する形で、城外と門外を隊列組んで巡回し、指揮長官のベルンの元には多くの人が立ち寄り、城内外の色々な連絡が入ってくる。

自然に、従騎士のエランも情報通になる。

もうすぐ、接見が終わる頃だ。

王配候補と知らされてから、オリアンナに会えずにいる。

高熱を出したのは知っているが、回復した直後にアルマレーク人との接見に参列している情報を知った。

しかも女装して！

幼い頃から一緒にいるが、彼女の女装は見た事がない。

大事な接見の場で、馴れない女装に失敗してないか心配になる。

騎士の大広間の扉が開き、接見終了のラツパが吹き鳴らされ、アルマレーク人が姿を現した。

国王軍が一齐に警戒する中、三人の異国人が外階段を下りてくるのが遠目に見える。異国の立派な身なりをしたどこことなく美形の男が、オリアンナにどう映ったのかエランは気になった。

父親がアルマレーク人の彼女は、連れ戻される可能性も口にしていた。

それが現実になるかもしれないのだ。

彼女を取られてなるものか！

そう思うと、どす黒い何かが心の中に沸き起こる。

長い足で足取りも速く、アルマレーク人達はあつという間に近付き、エランの前を通り過ぎた。

憎しみに満ちた目で睨み付けていると、ある事に気が付く。

通り過ぎた立派な身なりの男が、二重になって見えるのだ。

目がおかしくなったのかと擦ってみたが、彼の姿は同じ人物が二人いるように見える。

なんだ、あいつ……？

一人は使者達の先頭を歩き、門を通り抜け、もう一人は城へ引き返す。

「あいつ！」

思わず城へ向かう方の後を追いかけてようとして、ベルン長官に腕を掴まれた。

「どこへ行く！ 持ち場を離れるな」

「アルマレーク人が城へ入ろうとしているんです。止めないと！」

「……アルマレーク人ならもう門の向こうだ。何を言っている？」

「え？」

長官には見えていない。

これだけ警戒しているのに、誰一人城へ向かう異国人を止めようともしない。

誰にも見えていないのだ。

怪しい行動をする男は、騎士の大広間とは別の入り口へ、迷う事無く近付いている。

城へ侵入しようとしているのだ。

「あれは見間違いないじゃない！ 陛下に知らせなきや……」

尋常ではないエランの様子に、長官も城周りを警戒し見渡す。

焦るエランの気持ちを余所に、テオフィルスは通用口から城内へと入って行った。

接見が終わり、エアリス姫からオーリンに戻るため着替え部屋へ入った直後、まるで

追いかけるように部屋の扉がノックされた。

部屋の安全を確認させていたトキが、用心しながら扉を開けるよう指示を出す。

前室から騎士が姿を見せ、報告した。

「レント辺境伯ハルビーン・ボガード様が、姫君にお会いしたいとお出です」

「義父上ちちうへが？」

トキが頷いた。

領主が直属の騎士達を引き連れて入室し、恭うやうやしく僕に要求する。

「出来れば姫君の姿のまま、サファイーナに会ってくれませんか？ エアリス姫」

僕は一気に、気が重くなる。

「君が上手く女装出来たか、気になっているのだ。安心させてやってくれないか？」

トキは納得出来ないように、首を横に振った。

「陛下の到着を待つてからにした方がいい。私を含め騎士達は魔法が使えない。もし、

城内に魔王が潜んでいたら？ 先程のアルマレーク人が潜んでいたら？ 相手は強力

な魔力を持つ者達だ。ウル、陛下にお知らせしろ」

セルジン王はアルマレーク人が知らせた魔王の動向について、側近達と会議中だ。

トキの従者が部屋を出ようとしたが、領主の一言で立ち止まった。

「陛下になら許可は取つてある。部屋に直接向かわれるはずだ。警戒するのは解るが、



「ここは私の城。心配は不要に願う！」

「……」

トキが怪しむように顔を顰める。

領主ハルビーンが妻の意志を優先するのは、昔からの事だ。

《王族》の遠縁にあたるサフィーナは、ハルビーンにとつて願ってもない結婚相手だった。

何があつても、僕を連れて行くだろう。

義父とトキが言い争うのも、見たくはない。

「いいよ。僕、義母<sup>ははうえ</sup>上に挨拶してくる」

レント領主の奥方サフィーナの部屋は、三階の一番奥にある。

宮廷風の城は、旧城塞の城に比べ開放的で明るい。

領主と奥方、その息子達はここに暮らしていた。

僕だけが自由を求めるように、旧城塞の部屋を選んだのだ。

多くの召使達が広い廊下を歩き来し、皆が通り過ぎる領主と直属のレント騎士隊に礼を取る。

直属の騎士は、領主家の血縁者が多い。

召使い達は領主の後に続く見知らぬ姫君にも礼を取りながら、不思議そうな顔で見送る。

誰もそれが養子オーリンだとは、思わないだろう。

領主の後に従い静々と廊下を進んでいた時、前方の扉が開き一人の男が姿を現した。

領主も含め、皆が一斉に緊張する。

エランと同年齢の彼は、少し太めの身体にとても豪勢な服を身に付け、父である領主ハルビインに不敵に笑いかける。

ハラルド・ボガード。

僕の義兄。

幼い時から僕を憎み、彼の計略にはまって殺されかけた事が幾度となくある。

養父が僕に護衛を付けた理由は、過保護さばかりからではない。

彼の犠牲になり、命を落とした僕の友達も何人かいる。

僕は彼が、大嫌いだ！

オーリンとバレないように、ヴェールの中で俯うつむいた。

トキがさりげなく僕の前に立ち、彼から隠す。

「ハラルド、なぜここにいます？ 総指揮官の家に行つたんじゃないのか？」

ハルビインが狼狽えながらも、不機嫌そうに彼に問いかける。

「行つてない。ずっとこの部屋に潜んでいた。父上が俺を遠ざける理由を探るためにね。国王陛下が滞在中だつて？ 俺は次期領主なんだろう？ 挨拶くらいしても良いじゃないか」

「お前はまだ陛下に会える立場にない。控えている、ハラルド」

彼は狂暴さを剥き出しにして、父に嘔みつかんばかりに大声を上げた。

「オーリンは陛下に会つていそうじゃないか！ 父上はあいつを次期領主にするつもりだろう？ 俺を廃嫡はいちやくするつもりなんだ！」

「何を馬鹿な事を！ オーリンが会つたのは、必要があつたからだ。彼は《王族》ではないが、陛下の遠縁にあたる。母上と似た立場だ、だから会えるんだよ」

領主は僕の養子としての表向きの設定を、あらためて伝えた。

「俺だつてそうじゃないか！ 母上は《王族》の血をひく者だ。俺にも会う権利がある！」

「残念だが、お前は遠すぎる。権利はない！」

ハラルドは暴れだしそうなほど、顔を真っ赤にして父を睨み付けた。

「いつもそうやって、オーリンを特別扱いするんだ！俺よりあいつの方を優先する！」

「……………」

領主は無表情にハラルドを見つめていた。

僕は絶望感を覚えながら、小さく溜め息をついた。

ハラルドの気持ちは解らないでもない。

領主が僕を特別扱いした事で、僕と年齢の近い実子の彼は歪んでしまったのだ。

僕はトキの後ろから、そっとハラルドを見つめる。

不意に彼が視線を移し、目が合ってしまった。

僕は慌ててトキの後ろに隠れる。

「誰だよ、その女？」

「ハラルド、下がれ！」

父の警告も聞かず、彼はどんどん近付いて来る。

レント騎士達が止めようとするが、誰も彼に強く出る事は出来ない。

後でどんな目にあうか、分からないからだ。

彼は未来の暴君。

少しでも感に触れば、殺される危険もある。

彼等はハラルドに押し退けられた。

トキが小声で僕に伝えてくる。

「何があつても、声を出すな」

僕はヴェールの中で頷く。

オーリンが女である事を悟られてはいけないのだ。

トキがハラルドを阻むように一歩前へ出る。

彼の強靱な肉体と無表情な威圧感に、ハラルドは足を止めた。

「ハラルド、引け！ 部屋に帰るんだ」

領主が再び警告したが、それは無視された。

「誰だ、お前？」

「国王陛下の近衛騎士隊長トキ・メリマン」

国王の近衛騎士が如何に強いか、ハラルドも噂には聞いていたが、今の彼の興味は僕

に注がれている。

「国王陛下の近衛騎士？ じゃあ、そこにいる女は《王族》か？」

ハラルドの周りから、黒い渦が俄かに湧き起った。

僕が彼を嫌う、もう一つの理由。

おそらく《王族》にしか見えない黒い渦を、目の当たりにしただけで、僕は気分が悪くなる。

「退けよ、ここは俺の城だ！ いきなりやって来て、偉そうな態度を取るな！」

「俺がお守りする姫君の御前で、声を荒げるのは止めてもらおう、無礼者。怪我をしたくなければ、立ち去れ！」

彼は聞く耳を持たず、黒い渦を盛大に撒き散らしながら突進して来る。

僕は恐怖に、逃げ出したくなつた

「ハラルド、止せ！」

領主の声と、トキの素早い動きが同時に重なり、一瞬何が起こつたのか解らないまま、ハラルドがトキの前で床に倒れた。

トキの剣の柄頭は深く彼の鳩尾みぞおちに食い込み、瞬時に意識を失わせたのだ。

「ハラルド様！」

騎士達が駆け寄り、息がある事を確認して領主に報告する。

トキを敵とみなした騎士達は、剣に手を掛けて彼を囲んだ。

それを気にもせず、トキの視線は領主ハルピンを注視する。

「貴殿の手前、剣は抜かなかつたが、次に同じ事が起きれば容赦はしない」

レント騎士達が憤りを覚えたように、トキに詰め寄る。

今にも争いが起きそうな雲行きに、領主が溜息交じりに指示を出した。

「国王軍が去るまで、ハラルドは〈沈黙の獄〉に収容する」

「お館様、それは……」

「今のは、完全にハラルドが悪い。連れて行け！」

〈沈黙の獄〉は貴人を収容する牢獄の事で、豪華な内装とは裏腹に、誰とも面会出来ない苦しみに、精神を病む者が続出する場所の事だ。

騎士達は渋々トキの包囲を解き、領主の命令に従い、ハラルドは運ばれて行った。

辺境伯の領主より国王の近衛騎士隊長の方が、立場が上に見える出来事に、レント騎士隊の国王軍への反発が起きたりしないか、僕は心配になった。

## 第十二話 《王族》の魔力

領主の妻サファイーナの部屋の前に二人の護衛とは別に、もう二人男が立っていた。

僕の幼馴染みのエラン・クリスベインと、王の薬師マール・サイレスだ。

彼等は僕に微笑みながら、《王族》に対する礼を取る。

顔を上げたエランには、明らかに王配候補としての喜びが見て取れる。

僕はなんとなく腹が立ち、さりげなく彼に近寄り、小声で文句を言つてやった。

「どうしてここにいるんだよ？ 君はまだベルン長官の従騎士だろ？ 早く持ち場に帰れよ！」

彼にドレス姿を見られたくなくて、追い払おうと少し強めの口調で言った。

最もエランは一向に気にする様子がなく、逆に喜んでるように見える。

「エアリス姫の側にいるように、陛下に命じられたんだ。その姿で男言葉は変だよ。君は本当に姫君か？ 怪しいからヴェールを上げて、僕だけにこつそり顔を見せてくれよ」

「絶対に嫌だ！」

僕はヴェール越しに牽制しあい、睨みあう。



唐突に領主ハルベインが割って入り、彼に忠告した。

「クリスベイン、国王軍がレント領を出るまでは、君はまだ私の指揮下にある。仮初かりそめでもセルジン王の婚約者であるエアリス姫の横に立てるのは、国王陛下だけだ。君は一番後ろに就け！」

「……………は、い」

辺境伯である領主と、トルエルド公爵家の次期領主であるエランは、僕を廻って事ある毎に対立してきた。

僕は十歳までエランの館に暮らしていたので、養父として僕達の仲は面白くないらしく、城に僕が移り住んでからは、こじこじ尽くエランと引き離すように仕向けられた。

それでも彼とこつそり会っていたのは、僕にとって一番大切な親友だから。

親は王国中心部からの避難民だけど、僕達はこのレント領で生まれた。

親の身分はどうあれ共に孤児で、まるで兄弟のように育ったんだ。

今さら引き離そうたって、それは無理だよ。

…………でも、セルジン王への想いを、エランにすり替える事は出来ない。

不機嫌そうに最後尾に行く彼に、僕はヴェールの中で親しみを込めて手を振った。

不意に横から、太い威嚇するような声が聞こえてくる。

「なぜ、お前がここにいて、マール・サイレス？」

王の薬師に、トキが懽然と問い質す。

僕は一瞬、この二人の仲が悪いのかと心配になった。

マールは慣れた様子で、トキを睨み返す。

「陛下が到着なさるまで、部屋を守りを固めておくよう申し付けられた。魔法を使う騎士が場内に入つて行くのを、エランが目撃したらしい」

「エランが？」

トキが問うように視線を向け、エランはそれが本当であると、少し離れた場所から返事を返す。

「では殿下、極力姫君らしく振舞うように。どこで魔法使いが見ているか、判らない」

僕は苛立ちと同時に緊張し、辺りを見回しながら頷いた。

あの男——テオフィルスはどこにでも入り込める不思議な魔法を使う、まったく厄介な存在だ。

トキが皮肉に微笑みながら、マールの鳩尾に剣の柄を当てた。

「まずは、お前が魔法使いじゃないかを確認する。俺達が初めて会った場所を言ってみろ」

「……………」

マールが呆れ顔で、盛大な溜め息をついた。

「まだ根に持っているのか？　十年前、コトりのイルー河畔で、初めて会ったお前を打ち負かしたのは、私だ」

「薬師のお前が、なぜ俺より強い？　怪しいんだよ、お前は！」

「偶然に運が味方しただけと、何度も言っているだろう。薬師には薬師の戦い方がある。それ以降は負け続けているんだ、いい加減疑うのは止めろ」

「ふふんっ。だったら、その薬師の戦い方とやらを、もう一度見せてもらおうじゃないか」

そう言つてニヒルに笑い、扉を開けと指示を出した。

仲は悪くないのだと、僕は少しホッとした。

国王軍内の人間関係を、もっと知っておくべきだ。

前室の扉が開き、少しきな臭いけど良い香りが漂い始める。

サファイーナの部屋でこんな香りを嗅ぐのは初めてで、僕は違和感を覚えた。

義母はまだ息子ハラルドが、〈沈黙の獄〉に入れられた事を知らない。

領主がどう伝えるのか、彼女がどう反応するのか、緊張しながら領主の後に続き、部屋へ入った。

広い部屋にはサファイーナとお気に入りの侍女一人と護衛二人だけが、美しい調度品に囲まれ静けさの中に存在していた。

領主の奥方としては地味なドレスを装い、僕の姿に気を遣っているのが見てとれる。夫に挨拶のくちづけをしてから、楚々<sup>そそ</sup>と部屋に入る僕に微笑みかける。

ミアがヴェールを持ち上げ、変装した僕は姫君の意識を装う。

「まあ、素敵。お母様の若い頃にそっくりだわ。陛下もお喜びになられたでしょう。思つた以上に姫君の所作も身に付いていて。頑張りましたね、オリアンナ姫」

彼女は僕の母とは友達で、セルジン王とも親しい。

だから余計に、僕に執着している。

気持ちは解らなくもないけど、今は本当の名前を呼ばれるのはまずい。

「あの……」

「サファイーナ、エアリス姫だよ。間違えないでくれないか？」

領主の言葉に、彼女はやっぱり微笑み反論する。

「ここにアルマレーク人はいないと思えますわ」

「奥方殿、用心に越した事はない。相手は魔法使いだ」

強面のトキの低い声に、サファイーナは顔を曇らせた。

マールが苦笑いしながら説明する。

「サファイーナ様、彼は陛下の近衛騎士隊長トキ・メリマンという無骨者です、お気になさらずに」

睨み付けるトキを尻目に、マールはサファイーナに微笑む。

いつの間にか親しくなっているとところが、優秀な癒し手と噂される所以だろう。

僕は極力不自然にならないように気を付けながら、彼女に対して貴婦人の礼を取った。

「このドレスのおかげで、私はアルマレーク人との接見を、無事乗り越える事が出来ました。義母上に感謝いたします」

サファイーナは満足して頷き、僕の手を取った。

「陛下は今、ドウラス様を亡くされて、とても辛い思いをしておられるわ。陛下をお救い出来るのは、最後の《王族》である貴女にしか出来ない事です。どうかその事を忘れなさい」

サファイーナのこんな真剣な表情を、僕は見たことがなかった。

彼女の中に流れる《王族》の血を、初めて感じ取った気がした。

これまでの蟠りが少しずつ溶けてゆく。

「はい、養母上、お約束します。必ず陛下を、お救いします！」

彼女は僕の手を取り、力強く握りしめる。

そこから何かが、僕の中に流れ込む。

それは陛下の側にいる時に感じ取れる、勇気が湧き起こる波動。

僕はその息吹に、感動を覚えた。サファイーナが力強く頷く。

「オリアンナ姫、あなたは陛下の希望の光におなりなさい！」

それが《王族》の魔力だと気付いた時、彼女は手を放し少し眩暈めまいを起こしたようによろけた。

「義母上？」

僕と、隣にいた領主が支える。

「大丈夫か、サファイーナ？」

「駄目ね。陛下のように、上手く出来ないわ。《王族》の遠縁じや、これが精一杯よ」

「もう、十分です、義母上。無理しないで下さい、伝わりましたから」

陛下の希望の光になる！

とても難しい要求だが、サファイーナからもらった勇気で熟こなせそうに思えるから、《王族》の魔力とは本当に不思議だ。

初めてそれを認識出来た。

そんな僕達の間割って入るように、トキが低い声で僕に伝えてくる。

「姫君、領主夫妻と三人だけで、この部屋を出るんだ。マールの作ったコルの実の調合薬

が、屍食鬼を炙り出した。もうすぐ姿を見せ始める」

「え？」

「屍食鬼？ この城に入り込んでいるという事か？」

領主が信じられないという顔でトキを睨み付る。

部屋に充満するきな臭さが強くなったと気付いた時、部屋の隅から大きな呻き声が響き、皆が何事かと声の方向に目を向ける。

トキが剣を抜き、逆手に持ち替え、振り向きざま鋭く投げた。

広い部屋ながら、剣は目標を外す事なくレント騎士隊の一人を貫き、大きな音を立てて剣ごと壁に突き刺さる。

女達の悲鳴が上がる。

あまり出来事に、他の騎士達は逆上し、王の近衛騎士隊長に対して剣を向けた。

トキは腰にもう一本剣を下けているが、それを抜こうとせず堂々と騎士達に向き直る。

「レント騎士隊諸君！ あれがお前達の仲間か？」

腹の底から響く低い大声が、恫喝どっかつするように騎士達の動きを止めた。

トキの指差す方へ、警戒しながら目を向ける。

赤い血が流れる無残な仲間の死体を思い浮かべていた皆は、その姿に衝撃を受ける。

劍で打ち付けられた者は生きてもがき、黒い霞が薄つすら覆い人の形とは違う何かを形成していた。

醜く歪んだ顔は顎が徐々に迫り出し、背からは尖った骨のような翼が伸び始める。腹に受けた劍から緑色のドロツとした粘液が垂れているが、死ぬ様子は無い。

急速に形を取り始めた黒い翼をバタつかせ、顎木はんへんげから逃れようと必死に暴れている。「半変化だ、変化が早いぞ！ 屍食鬼に変わる前に、翼を切り取れ！ 飛ばば、凶悪化する」

トキの号令にレント騎士隊はかつての仲間だったそれを、迷う事無く切り付けた。

屍食鬼の脅威は八年前に経験している。

多くの人間が惨殺され、食べられた。

新鮮な死肉を求める翼の生えた悪魔は、見境なく殺戮を繰り返す。

ここで仕留めなければ、殺されるのは自分達だ。

僕は恐怖に打ちのめされた。

八年前に父の館で起こった悲劇が、サフィーナの部屋で再現されようとしている。

僕の身体は震え、呼吸が乱れた。

母の悲鳴が耳元で聞こえ、耳を塞ぐ。

もう、恐怖に動く事が出来ない。



「姫君、しつかりするのです！ 早く、部屋の外へ！」

マールが駆け付け、僕を連れ出そうと肩を抱き、無理やり移動させる。慣れないドレスに足がもつれ、僕は混乱する部屋の中で転倒した。

「殿下！」

僕を助け起こそうとするマールの側に、近衛騎士やレント騎士が駆け付けた。

多くの者が、僕に近づく。

その中に異常に長く爪が伸び、身体から黒い渦が吹き出しているレント騎士隊の男がいた。

屍食鬼に変化し始めているのだ。

あまりの恐怖に、僕は声を上げる事すら出来なかった。

## 第十三話 魔王の罫

転倒した僕に、半変化のレント騎士が近付いてくる。

あまりの恐怖に僕は声を上げる事も出来ず、まるで子供の頃を追体験している状態に陥る。

母上の悲鳴の後に訪れたのは、魔王とその手が持つ剣。

そして、僕の死だ。

もうすぐ、死が訪れる！

そう思った時、半変化が後ろに仰け反り、緑色の血を振り撒きながら僕から離れた。

後ろから斬り付けたのはエランだ。

のたうつ半変化を蹴り飛ばし、他の騎士が対処し始めたのを確認してから、エランはマールと一緒に僕を助け起こした。

「大丈夫？」

心配するエランの顔を見て、ほんの少し冷静さが戻ってくる。

安心したと同時に気が緩み、泣きながら彼に抱き着いた。

転んだ拍子にヴェールは外れ、顔が露わになっているのも構わず、エランに弱音を吐

く。

「怖い……。屍食鬼は嫌だ」

「大丈夫だよ、僕が全部やつつけてやるから」

明らかに軽口だが、今の僕には必要な言葉だ。

幼馴染みのエランは、それを知っている。

僕は微笑んで、完全に冷静さを取り戻した。

「ありがとう、エラン。もう、大丈夫だ」

「もう少し、抱き着いていてもいいよ。ドレス、凄く似合ってるね」

嬉しそうなエランの言葉に、僕は慌てて彼から離れ、外れたヴェールを拾い上げてミ

アに渡した。

「早く、ここを出よう。この格好じゃ、足手まといになるだけだ」

広い部屋とはいっても、室内戦である事に変わりはない。

最初にトキが壁に打ち付けた半変化は、凶悪化する前に醜い翼を切り取られ、火を放たれて塵の如く消滅した。

良い香りに嫌な臭いが混ざり、室内の居心地が悪くなる。

「アレル、正気に戻れ！」

先程僕に近付こうとした騎士は、レント騎士隊の中でも余程信頼の厚い騎士だったのである。

一人が変化を止めようと彼にしがみ付き、激しく暴れる半変化の爪に、首を引き裂かれ絶命した。

周りに飛び散った血の匂いを嗅いで、半変化は急速に顎と翼を伸ばし、屍食鬼へと変化が早まる。

「あれは、アレルではない！ 翼を切り取れ！」

領主ハルビインが命じ、騎士達が戸惑いを振り捨て切り付ける。

もともと体格の大きい優秀な騎士だったため、攻撃は悉く跳ね返される。

そうする間にも黒い翼が大きく広がり、目付きは凶暴な屍食鬼へと変化する。

その目で絶命した友の死体を見、涎よだれを垂らしているのだ。

「国王軍を呼べ！ 近衛騎士、姫君と領主夫妻を守れ！」

トキの号令に、近衛騎士は迅速に動く。

部屋の中にいる、トキ以外の近衛騎士は四人。

僕を守りながら、サファイーナ達と共に扉へ移動する。

マールは従者の持つ鞆から何かを取り出し、いち早く扉に向けて走り出す。

トキはレント騎士隊を押し退けて、半ば屍食鬼と化し今にも飛び立ちそうな半変化の



投げ、それを突き破った。

その瞬間、屍食鬼は声を出す間もなく盛大な炎に包まれ、灰と化し、炎と共に消えた。騎士達は、慌てて水瓶に殺到する。

炎が盛大過ぎて、部屋に燃え移ったのだ。

「お前の戦い方は、過激過ぎる！ 屋外でやれっ」

「一瞬で消える。屋内でもイけるはずだが、火炎石の量が、多すぎた！ 半量にするべきだ、貴重な物を無駄にした……」

呆れ返るトキの言葉に、火事になった事より、火炎石を使った実験に失敗した事に、マールは顔を顰<sup>しか</sup>めている。

砂利状の火炎石を、革袋に入れて量を調整し、特定の金属で衝撃を与えると、爆発的に燃え上がりすぐ消える。

試作段階だが、屍食鬼消滅の有効性は非常に高い。

部屋中に煙が充満し、嫌な臭いに咳き込みながらレント騎士が、扉を開けようとして慌てて叫ぶ。

「鍵が掛かっている。閉じ込められているぞ！」

「何？ 前室の者達はどうした？」

トキが扉を叩いて呼んでも、何の反応も返ってこない。

「この部屋以外でも、半変化が出たんじゃないのか?」

マールの言葉に、トキは振り返る。

部屋に充満する視界を遮る煙の濃さ、鎮火されているはずなのに、異常な煙の量だと気付いた。

「マール、また分量を間違えたのか?」

「まさか! コルの実の調合薬から、煙は出ない」

二人は顔を見合せ、魔王が身近に迫っている事を認識した。

扉が開かないと知った僕とエランは、充満する煙の中を咳込みながら移動し、扉近くの窓に駆け寄った。

窓を開ければ煙も消え、助けも呼べると考えたのだ。

鍵を開錠しても、窓はなぜか開ける事が出来ない。

エランの力でも開かないのだ。

「駄目だ、ビクともしない」

「どうして? どうなっているんだ、これは?」

重いドレスを引き摺りながら、別の窓に移動し開錠しても、やはり開かない。

レント騎士達も同じように窓を開けようと必死になる。

近衛騎士が二人、顔を顰めながら警告する。

「エアリス様、あまり動かない方が良いです。視界が悪すぎて、守れなくなりますが」  
「分かっている」

突然、僕は何かの違和感を覚え、窓辺から煙る室内へと、視線を移した。

広い部屋に充滿した白っぽい煙の向こうから、何かの気配が近付いて来るのだ。

それは背筋を凍らせるような、強烈な憎悪。

「姫君を守れ！ 魔王が、来るぞ！」

マールの叫びが、部屋に響く。

違和感は僕の目の前で、徐々に姿を現した。

白っぽい煙の中に細い黒、清らかな水に滴った汚水のようなものが、大きく渦巻き邪気を放ち僕に近付いて来る。

気分が悪くなり、僕は立っている事が出来ない。

エランが僕を支えながら、見えない敵に向かつて剣を抜く。

黒いの渦の中で、何かが蠢うごめいていた。

「ぎゃあああああああ——

！」



魂切る絶叫が、僕の耳を劈く。<sup>つんぜ</sup>

トキが駆け付け、近衛騎士達と共に僕の前に立ち防御の構えを取る。

マールがエランに変わって僕を支え、エランも近衛の一員に加わった。

「大丈夫ですか、姫君？」

マールの問い掛けに、震える声で伝えるのが精一杯だ。

「誰かが、殺された。この中で……」

指差した場所の異変は、大方の人間には見えない。

「魔王か、マール？」

「そうだ！　すぐに実体化する、気を付けろっ」

黒い渦は収縮し凝縮して、徐々に人間の形を取り始めた。

倒れている少年に見える、それは騎士達にも見えるようになった。

「ハラルド？」

黒い影は完全に実体化し、捕らえられたはずのハラルドの姿になった。

白目をむき苦悶の状態で皮膚は青ざめ、完全に死んでいるように見える。

サフィーナが悲鳴を上げる。

「ハラルド！」

領主ハルビインが息子の状態を確認しようと近付きかけたが、周りのレント騎士に止

められる。

〈沈黙の獄〉に監禁されたはずが、突然、扉も通らず部屋に現れるのは異常だ。

トキが叫ぶ。

「近付くな、これは罠だ！」

急にハラルドが白目の状態のまま起き上がり、僕に顔を向ける。

『最後に死人が生き残っていたとは驚きだ。ただの《王族》ではない……、何者だ？』

ハラルドの声ではない。

遠い昔に聞いた声、魔王アドランの声だ！

セルジン王の声と、驚く程よく似ている。

アドランはセルジン国王の腹違いの兄、似ているのは当然だが、僕を混乱させる。

死人と呼ばれて恐怖はいや増す。

八年前、僕は魔王に殺されているのだ。

身体が震えて、思うように動く事が出来ない。

マールが僕を庇い、抱きしめると、ほんの少し冷静さが戻ってきた。

「ハ……、ハラルドを殺したな！」

『この男が我が魔力を欲しいと言った。だから〈契約者〉として生き返り、我が僕しもべとなる

望みを叶えてやった』

領主が悲鳴にも似た呻き声を上げる。

後継者を魔王に奪われ、国王軍の敵となってしまうのだ。

レント騎士隊もシヨックを隠せない。

「そんな……」

僕の中に、魔王に対する憤りが湧き起こる。

ハラルドは大嫌いだだったが、その身体を乗っ取り〈契約者〉と伝える事に、憤りを感じるのだ。

養父母を苦しめる魔王が許せなかつた。

「何のために、そんな事をする？ それはハラルドの身体だ、放れろ！」

「姫君、魔王に聞いてはいけません！」

マールが慌てて、僕の言葉を遮ろうとする。

魔王に操られたハラルドの顔が、白目を向きながらニタリと笑った。

『《ソムレキアの宝剣》を持って、そなたが死んだ場所に来い。《ソムレキアの宝剣》を渡せば、ハラルドは解放してやろう』

「死んだ場所……」

僕の全身が、痛みを覚えた。

胸から背中にかけて心臓を貫かれた傷痕が、強烈な痛みを訴えてくる。

父エドウインの館を想像しただけで身体が震え、息が上がる。

『《ソムレキアの宝剣》だ。必ず、一人で持つて来るのだ!』

そう言った瞬間にハラルドは倒れ、苦悶の表情も消えた。

魔王が去ったのだ。

それと同時に僕の痛みも消え、思考が動き疑問が湧き起こる。

《ソムレキアの宝剣》なんて……、僕は持つていないのに？

## 第十四話 〈契約者〉ハラルド

《ソムレキアの宝剣》……、それがないとハラルドを魔王から解放する事が出来ない。  
い。

でも、その宝剣は僕の手元には無い。

いったい、何処にある？

「姫君、魔王のいう事を真に受けてはいけません！ 彼は約束など守らない！」

僕の肩を揺さぶるマールは、とても怖い顔をしている。

僕は嫌でも現実に立ち返った。

「解っているよ。《ソムレキアの宝剣》は、魔王を滅ぼして、陛下を水晶玉から解放するための武器だ。僕だけが、使える武器だよ。でも……、それって、どこにあるの？」

「それは、分かりません。ただ、時が来れば必ず姫君の前に出現すると、陛下が仰おっしゃっておられました。どうか、その言葉を信じて待つのです」

《聖なる泉の精》と同じ事を、陛下が言っている。

強い魔力を持つ者には、未来が見えるのだろうか？

「時が来れば……、陛下がそう仰ったんだ。……うん。だったら、僕は待つよ」

マールはホツとした表情を一瞬見せたが、すぐに厳しい顔付きで周りに注意を払う。「いいですか、姫君。これから何が起ころうと、絶対に私の側を離れないで下さい」

「……解った」

マールは薬師であって、戦闘員ではない。

それなのに自分の側を離れるなどは、先程のような特殊武器でも持っているのだろうか。

国王軍は非戦闘員でも、戦う事に慣れている。

行軍参加とは、そういう事なのだろう。

魔王が去ったせいか、部屋に充満していた煙が薄らいできた。

マールが僕の視界を塞ぐように立っているが、ハラルドが気になり横から覗いてみる。

そうして、また気分が悪くなった。

横たわるハラルドの周りを黒い渦が激しく取り巻き、彼の姿が見えないほどだ。

まるでハラルドに侵入して、〈契約者〉に作り変えている、そんな動きに見える。

「気分が悪いのでしたら、私にお掴まり下さい」

「……マールさんにも、あれが見えるの？」

僕にしか見えないと思っていたのに、王の薬師には見えている。

不思議に思い、問い掛けるように彼を見上げていると、察したようにマールが明かした。

「私にも少しだけ《王族》の血が流れているらしいですよ。だからあれが見えるのです」  
「……………他にも、そういう人はいる？」

「いますが、少ない。殿下の周りでは、サフィーナ様がそうでしょう」

サフィーナの名が出て、僕は驚愕した。

ハラルドが黒い渦を纏わりつかせていたのは、子供の頃からだ。

自分の子供を、彼女は脅威に思っていたのではないか。

今の状況に、彼女の恐怖心を思うと、サフィーナの姿を捜さずにはいられなかった。

彼女は夫ハルビンを、息子に近付かせないように、必死に止めていた。

領主には、息子の変化が見えないのだ。

「ハラルド！」

領主の呼びかけに、一瞬、黒い渦を纏うハラルドの身体が、微かに動いたように見えた。

領主もそれに気付き近寄ろうとしたが、トキが一喝する。

「近寄るな！ 彼は〈契約者〉だ、殺されるぞ！ レント騎士、領主を止めろ」

「私の息子だぞ！ まだ生きています。今、動いたじゃないか」

領主が反論した直後、ハラルドは緩やかに身を起こし、父親に顔を向けた。黒い渦が少し薄くなる。

『父上……、助けて』

「ハラルド！　今、助ける」

「駄目……」

サフィーナに抱き着かれ、騎士達に止められ、領主は息子に近付く事が出来ない。

『父上……、もう、駄目……、ああ、ああああああ……』

ハラルドが異常な声を上げ始め、黒い渦は全てハラルドに入り込む。

口を大きく開け苦しみの表情を見せながら、蛇のように首を異常に長く伸ばし、身を振り動かし始めた。

身体は長く醜く変形し、鼻と口が前にせり出す。

口から長い牙が生え、背から黒い翼が現れる。

その爪は長く鋭く、命ある者を切り裂くために伸びる。

僕はあまりの恐怖と気分の悪さに、マールにしがみつく。

ハラルドは急激に、屍食鬼へと変身した。

半変化の状態がまるで無く、国王軍に打ち取る暇も与えず。

領主が悲鳴を上げる。



「ハラルドオ！」

「屍食鬼だ！ 撃ち落とせっ」

トキの号令に、部屋の護衛が矢を射るが、どれも弾かれ中らない。

ハラルドだった屍食鬼は、醜い翼を広げ部屋の中空へと飛び立つ。

その口から歓喜の声が溢れ出る。

『ふふふ、これが魔王の魔力か。なるほど……、悪くない』

次の瞬間、黒い翼はそのままに、屍食鬼は元のハラルドの姿に変化した。

「〈契約者〉になった！ 奴等は屍食鬼を呼び寄せるぞ、討て！ 屍食鬼を呼ぶ前に！」

「止めろ、止めてくれ！」

領主がレント騎士達の腕を振り払いハラルドに近付こうとするが、トキに連れ戻された。

「近付くな、殺されるぞ！ あれはハラルドじゃない。見て分かるだろう、魔王の魔力を使う〈契約者〉だ！」

ハラルドは壮絶に微笑みながら、周りを見回す。

『あははは……、僕は魔力を手に入れたんだ。見える。見えるぞ、《王族》が！』

ハラルドの視線が、僕一人に注がれた。

その視線が魔王の視線と重なり、僕は恐怖に震える。

マールが僕の肩を抱きながら、もう片方の手で腰鞆から何かを取り出す。「大丈夫。奴の思い通りにはさせません！」

ハラルドの周りから、爆発的に黒い渦が現れる。

僕はあまりの気分の悪さに、立っている事が出来ず膝をつく。

それはサファイーナも同様で、領主の前で意識を失っていた。

ハラルドの手から長い爪が伸び、高い天井付近から僕の頭上に急降下する。

僕を庇うマールの手が何かを掲げ、周りに優しい光が満ちた。

『ちっー！』

ハラルドの舌打ちが聞こえ、翼の音が遠退く。

僕は顔を上げて、マールの手にした物を確認する。

〈契約者〉を遠ざけたのは、僕の持つ物より少し大きい月光石だ。

こんな効果があるなら、月光石を有効活用すれば……、そう思いかけた時。

「普通の月光石では追い払えません。これは私だけが持つ希少石、真似をしても死ぬだけですよ」

僕の心を読んだように、マールが否定する。

彼の琥珀色の瞳は、依然〈契約者〉を睨み付けたままだ。

僕の表情を読み取ったわけでもなく、心を見抜く。

それが《王族》の魔力なのかは分からないが、希少石を一人で所有していること自体、彼が国王軍の中でも特別な存在である事の証明に見える。

「マール。気を付けろ、また来るぞ」

「解っている。トキ、サファイーナ様の元に移動するぞ。手を貸せ！」

「任せろ」

トキはマールの防衛方法に慣れた素振り、部下達に移動を命じた。

領主を守るレント騎士隊は、素早く飛び回るハラルドの攻撃を受け、防戦に集中するあまり、倒れているサファイーナに気を回す事が出来ずにいる。

彼女を守っているのは、息子だった〈契約者〉を攻撃する気になれない領主ハルビインだけだ。

ハラルドは再度、僕達に攻撃を仕掛けてきたが、屍食鬼との戦いに慣れている近衛騎士達に阻まれ、僕に近づく事が出来ない。

彼を阻む矢は的を外し、サファイーナの美しい部屋を破壊する。

飛び散る破片を掻き潜り、マールは僕を窓側から壁伝いに少しずつ移動し、暖炉の側にいる領主達の元へと僕を導く。

彼は希少石で意識のないサファイーナも守ろうとしているのだ。

足に絡まるドレスを持ち上げ、転ばないように必死にマールの動きに合わせて移動し

ている時、不意に上を飛ぶハラルドが急降下して領主を攻撃しようとしている事に気付いた。

「危ない、義父上！」

「いけません、姫君！」

マールの制止も聞かず、僕は咄嗟に走り出す。

レント騎士達の何人かが、攻撃を止めようと身を犠牲にして倒された。

領主はようやくやく剣を抜き、ハラルドと対決しようとした。

その瞬間、ハラルドは進路を変え、僕の目の前に突進する。

近づく彼の長く鋭い爪が、頭上から振り下ろされた。

「姫君！」

マールの叫び声が聞こえる。

持前に反射神経の良さで、飛び退く事は出来たが、慣れないドレスのせいでよけきれず、爪が僕の皮膚を切り裂く。

顔面と胸に強い痛みが走った。

「ああ……」

反動で後ろへ倒れかけたところへ、ハラルドが不気味な笑みを湛<sup>た</sup>えて迫り来る。

マールが希少石を振りかざし、僕を助けようと駆け寄る。

突然、部屋の扉が吹き飛び、強烈な光が人々と〈契約者〉の目を眩ませる。

『汚らわしき者は、立ち去れ!』

部屋中に響く国王セルジンの声が出たと同時に、ハラルドは憎しみに顔を歪めた。  
あきらかにダメージを受けたのだ。

光の中に立つセルジン王は、朧気にしか見えない。

光に目が眩んでいるからなのか、セルジン王が影のせいなのか。

痛みと苦しみの中で見るその姿は、僕には救いに映った。

「陛下……」

ハラルドは閃光にかき消される前に、魔王と同じ言葉を僕に言い放つ。

『あの館へ、来い。《ソムレキアの宝剣》を持って……、一人で来い!』

怨念のこもった彼の声が、魔王の声と重なり、痛みと共に僕の耳にこびり付く。

最後に力を振り絞るようにハラルドは、長い爪で僕の肩を掴み、そのまま三階の窓を突き破る。

盛大にガラスの割れる音が響いた。

義母上の大好きな窓が壊れた……。

〈契約者〉は僕を掴んだまま空へと飛び立ち、王の魔力から逃れるように消えた。空中に放り出された僕は、真つ逆さまに落下する。

「姫君！」

人々の叫びが遠くに聞こえる。

落下はほんの一瞬、そして死を迎える。

セルジン王の姿が、暗闇に飲まれる僕の意識の中で、悲しく孤独に佇たたずんでいる。

僕の目から涙が、空中に舞った。

まだ死にたくない、陛下を助けたい。

落下の感覚に恐怖しながら、僕は意識を失った。

## 第十五話 竜の指輪

何かにつつかつた衝撃で、僕は意識を取り戻した。

顔面と胸の痛みが酷い。

落下しても、一瞬では死ねない。

残酷な痛みに苦しめられ、弱り果てて死ぬ。

そう思うと、絶望感が増した。

「リンクル、城の上空で待機」

低い男の声が、すぐ側で聞こえる。

僕の身体を抱き抱え、落とさないように必死に位置を変えている。

動かされる度に痛みが増した。

強風が鬢の髪をはためかせ顔に当たり、それだけで痛い。

生温かい何かが、首筋と胸に流れ、髪が張り付く。

「あああ……」

顔面に柔らかい何かが当てられ、激しい痛みで悲鳴を上げた。

「我慢しろ、出血が酷い。すぐに手当てをしないと、お前は死ぬ」

「あ……」

僕を抱き抱えているのがテオフィルスだと、ようやく気付いた。

移動する何かは、きつと竜だ。

翼を緩やかに動かし空中で停止し、上空の風に妙な熱気が入り混じる。

「今、降ろしてやるが、その前に聞きたい」

僕は痛みの無い方の片目を開け、彼を確認する。

いつの間にか左手を待たれ、握りしめる彼の左手にはまる指輪が、柔らかい光を放っている。

セルジン王が気にしていた、アルマレークの七領主家の、次期領主だけが持つ竜の指輪だ。

「この国には、七領主家の人間が二人もいるのか？ 竜の指輪に触れて平気でいられるのは、七領主家の人間だけだ。お前とオーリン。でも、エドウィンの子が双子とは聞いていない。お前はオリアンナ姫だな」

「違う……」

苦しい状態の中で思考が回らず、それだけ言うのが精一杯だ。

僕はあの指輪に、触れた事があつたのか？

秘密の抜け道で彼に捕まった時、何かが光つたのを思い出した。



あれは竜の指輪だったのだ。

七領主家の人間と確認されていた。

もう、完全に同一人物と見抜かれている。

でも、死に瀕している今、全ての意識が痛みに薄れる。

テオフィルスは容赦がない。

「俺の婚約者だ、必ずアルマレークに連れ帰る。これは避ける事が出来ない、お前は俺の花嫁になるんだ」

勝手な彼の言葉に、嫌と伝える気力もない。

「左手に《聖なる泉の精》との契約の魔力を持っているが、七竜の許可を出したのはオーリンにだけだ。お前はもう魔力を使える状態にある。その魔力が、お前を救うだろう」  
全てを見抜く彼の観察眼に怯えながら、小さく首を横に振る。

死が間近に迫っている今は、どうでもいいようにも思えた。

僕は弱弱しく彼の手を振り払い、痛みに堪えながら朦朧とした意識で呟く。

「陛下……」

もう会えないかもしれないと思うと、再び涙が出てきた。

そんな様子を愛おしむように、テオフィルスの唇が優しく額に触れ、アルマレーク語の囁きが聞こえた。

「必ずお前を、迎え入れる」

風を切り裂いて、何か二人の側を通り過ぎる。

城の上空にいる竜を狙って、城壁の兵士達が、次々と矢を放つ。

「攻撃を止めろ！ 姫君が乗っておられるぞ！」

窓から身を乗り出し大声で叫ぶトキの言葉に、兵士達は攻撃を止めた。

別の部屋の窓からつながる広い空中庭園に、怒りを身にまとったセルジン王が姿を現した。

王は竜に向かって、両手を広げる。

「私の婚約者を返してもらおう、テオフィルス殿」

彼は王の言葉に従い、素直に空中庭園の石畳の道に竜を舞い降りさせた。

強風に芽吹いた花の子葉が、根こそぎ吹き飛ばされる。

テオフィルスが負傷した僕を横抱きにして、器用に竜から降り立つ。

周りを国王軍の兵と王の近衛騎士達が囲み剣を向ける。

それを気にもしないで彼は、腕の中の僕を大事そうに王に渡した。

「酷い怪我です。早く手当てを……」

「分かっている。助けてくれた事には感謝するが、なぜ城にいる？ 無断の侵入は、罪を

犯した者と見做す！」

兵達がテオフィルスを拘束し、七竜リンクルが怒りの唸り声を上げる。

「リンクル、止め！」

竜を制しながら、彼は不敵な笑顔で答える。

「忘れ物を取りに戻りました。オーリン殿に、貸した物です」

混濁する意識の中で、魔法の鏡あぶみの事だと分かったが、それは口実に過ぎない。

彼が何を目当てに入り込んだのか、左手を握りしめられた事でよく解る。

僕がオリアンナである事は、完全に知られている。

でも王にその事を伝える気になれない。

言えば父の国人達は、確実に殺される。

それが僕には、耐えられない。

「苦しむ……」

緊迫した空気の中、まるで人々の気を逸らすように小さく呟く。

王は怪我の状態を冷静に確認し、傷の無い額にくちづけを落とす。

横にいるマールに預けられそうになり、離れたくない気持ちから王にしがみつく。

王は微笑み、抱き上げた状態のまま、傷に触れないように、今度は僕の唇に優しく唇を重ねた。

驚きと喜びに、朦朧とした意識がはつきりしてくる。

温かい形の無い何かが、傷を癒すように入り込み、痛みが薄れていく。

《王族》の癒しの魔法だと気付いた。

陛下……。

優しい時間は短い。

「痛みは少し薄れただろうが、傷が塞がった訳ではない。早く手当てした方が良い」  
頷きはしたものの、それでも王にしがみつく。

王は苦笑いしながら、捕らえられているテオフィルスに向き直った。

「貴殿の持つ、竜の指輪を外してもらおう」

「お断りします」

テオフィルスは少し不貞腐れたように、視線を外しながら拒否する。

王に逆らう彼に対し、捕らえている兵達が憤り、彼の頭を激しく地面に押しつける。

苦しい体勢でも、魔法を使い逃げようとしなのは、自分に非が無いと知らしめるためか。

あの竜の指輪は、真実を白日の下に曝す危険な代物、セルジン王の警戒と疑念が、僕には嫌というほど良く解る。

城の上空で二人だけになった理由を、王は知りたいはずだ。

僕の身体から急に力が抜け、抱き上げられた状態で眩暈がした。痛みは薄らいだが、出血しているのだから当然だろう。

王は僕の様子を見て、交渉ではなく決着を求めた。

「アレイン！ 討つて構わぬ」

いつの間にか空中庭園内は、国王軍の赤い長衣で埋め尽くされていた。

大盾の間から、防護用の槍を長く伸ばす槍兵と、その後ろに弓兵が矢を番えて七竜リ  
ンクルを狙っている。

「目を狙い、放て！」

中央に立ったアレインが、采配を振った瞬間、無数の矢が竜目掛けて放たれた。

リンクルは威嚇し大きく翼を広げ、棘状鱗を広げて叫んだ。

その振動で矢は悉く落ち、人々は吹き飛ばされそうになる。

想像以上の間近での竜の威嚇に、屈する事なく兵達は新たな矢を番え放つ。

皆、魔物との戦いに慣れているのだ。

「止めて……」

竜が攻撃されている事に僕の神経は耐えられなくなり、小声で王に抗議する。

再び意識が遠のきそうになる。

「マール！」

僕は地面に敷かれた柔らかい毛布の上に下ろされ、王の薬師が的確に傷の手当を施していく。

テオフィルスは、自分を捕らえている兵士が、剣を取ろうと片手を放した瞬間に、掴んだ土を顔に投げつけ、怯んで力が緩んだ隙を突いて、上体を起こし顔面に肘鉄を食らわした。

意識を失った兵の身体を、下半身を押しさえつける兵に投げつけ、拘束から逃れた。

幅広の刀剣で切り殺そうとする騎士達の間をすり抜け、三階にある空中庭園の胸壁から飛び降りる。

「アルマレーク人が、逃げたぞー！」

人々が胸壁から身を乗り出して下を見た時には、彼の姿はどこにもなく、七竜リンクルの影も掻き消えていた。

「捜せ！ まだ城の中にいるはずだ」

アレインの冷静な声が響き渡る。

人々が慌しく移動する中、僕は安堵しながら意識を失った。

——水の音が聞こえる。

それは波紋のように響き、僕の全身に広がる。

安らかな音色に、なんの抵抗もなく身を任せた。

音は導しるを受けた左手から流れ出している。

泉の精の言葉が、音色に絡む。

『私達が、あなたを助けます』

「凄いですね。出血が止まって、傷口が塞がってゆく。〈生命の水〉の魔力で、傷痕も残らないでしょう」

「そうか、良かった。痕が残れば、エアリス姫とオーリンが同一人物という証拠になるところだ。《聖なる泉の精》と、エドウィン・ルーザ・フィンゼルに感謝しよう」

意識を取り戻した時、セルジン王とマールの会話がすぐ側で聞こえた。

あれからどのくらい時間が経っているのか、部屋の燭台の灯りから夜なのだと分かる。

会話の内容で、聖なる泉で見た父の姿を思い出した。

「陛下……、父上の計画を知っていたの？」

「気が付いたか、オリアンナ。そう、直接エドウィンから聞いた。危険過ぎるから私は反

対したが、彼の意志は変えられなかった。結果的には、彼が正しかったのかもしれない」

王は少し悲しい表情をしながら、優しく僕の頬を撫でた。

透き通る王の向こうに、燭台の灯りが揺らめいて見える。

父はブライデインの《聖なる泉》で、僕を待ち続けている。

普通の人間が、聖域で長年生きていられるのだろうか。

「……父上は、生きているの?」

「それは、分からない。私に《聖なる泉》を見る事は出来ない」

「国王軍は父上の計画通り、王都へ進軍する?」

「そうなるが……、あのアルマレーク人が邪魔をしそうだ。そなたはあの竜の指輪に、触れたか?」

予想通りの質問をされ、僕は一瞬押し黙った。

「触れたのだな」

「分からない……、憶えてません」

そう言っておくのが、アルマレーク人にも僕自身にも、一番安全に思えた。

セルジン王は最高権力者、迂闊な発言は無用な死をもたらす。

マールが助け船を出してくれた。

「このような酷い怪我なら、記憶が無くなるのも当然です。でも、アルマレーク人に知ら



れたとして対処した方が良いでしょう」

「そうだな。少し危険だが、その腕輪を使うしかない」

王が視線を向けた先に、小卓に置かれた見慣れない腕輪があった。

優美な装飾が施された薄い金属に、六角柱状の水晶が一つ、光り輝くようにはまっている。

溜息が出得るような美しさだ。

「泉の精の魔法を抑制する腕輪だ。マールの妻の所有物だが、今のそなたには必要だろう」

「そんな物があるんですか……」

マールが微笑みながら、腕輪を取り上げた。

「相手は魔法使い、エアリス姫の泉の精の魔法を感知したはずです。オーリン殿下の泉の精の魔力を抑制してしまえば、別人と思うはず」

僕は驚きながら、〈抑制の腕輪〉を受け取った。

もう知られている場合でも、これで偽いつわれるのか大いに興味を湧いっわいたのだ。

強気な発言を繰り返すテオフィルスの驚く顔を、別人の振りをして見てやりたいと思っただ。

## 第十六話 もう一人のオーリン

《これは避ける事が出来ない、お前は俺の花嫁になるんだ》

誰があんな傲慢男ごうまんおとこの花嫁になるだつてえ？

冗談じゃない！

テオフィルスの言葉を思い出し、僕は憤りのあまり、今すぐ抑制の腕輪をはめそうになつた。

セルジン王が僕の手を掴んで止める。

「待て！ 死にかけてののだぞ、傷痕が完全に消えて、体力が戻つてからだ。今は休んだ方がいい」

王はそう言つて、僕から腕輪を取り上げ、薬師マールに渡した。

唯一の盾を取り上げられたような不安に、僕は抗議する。

「でも、彼が来るかも……」

「私がいる隣室で、好き勝手はさせぬ。だから、今は眠れ」

「……………はい」

王には逆らえない。

僕は項垂れ、ぼんやりとハラルドから受けた傷を見つめた。

長い爪で切り裂かれた皮膚が、赤みを帯びてひきつれている。

顔の傷は見れないけど、似たようなものだろう。

泉の精の魔力で、しばらくすればその痕も消える。

でも、その少し下にある魔王から受けた古傷は、泉の精の魔力でも消える様子がない。

毛布を引き上げて、醜い傷痕を隠した。

「僕はなぜ、生きているの？ こんな傷じゃ、普通は死んでいるよ……」

俯き落ち込む僕を慰めるように、王は頭を撫でて横たえる。

「……そなたが死にかける度に、私の影は揺らぎ始める。水晶玉の魔力に負けそうになって、人の形を保てなくなる」

「陛下？」

王の姿は、今にも消えそうに見える。

彼は悲しく笑った。

「そなたを失えば、私も魔王になるだろう。だが、そうなる前にいつも、助け手が現れる」

「助け手？」

王の手が僕の額に触れた瞬間、意識に何かが流れ込む。

僕は怯みながら、彼を見つめた。

「恐れるな、これは私の記憶だ」

——どこかへ落ちている。

抱き抱えている何かが、抗えない力で引っ張られ、共に急激に落ちて行く。

『オリアンナ、死んではならぬ！』

セルジン王の切迫した声が聞こえた。

腕に抱き抱えてているのは、幼い僕。

剣で貫かれた胸からは、大量の血が流れ、完全に死んでいるように見える。

その僕が異常な重さで、地の底と思える場所を落ちて行く。

必死に抱き抱えなければ、王は振り放されてしまうだろう。

彼の焦りが伝わってくる。

『オリアンナを、魔界域へ連れ去られて良いのか！ 《ソムレキアの宝剣》の主だぞ！』

誰かに向かって、彼が叫ぶ。

こんな慌てている王は、見たことがない。

これは僕が魔王に殺された直後の、王の記憶だ。僕達は魔界域の入り口に吸い寄せら

れている。

魔王に殺された者は魔界の深淵しんえんに墮ち、救いの無い苦しみの沼から出る事が出来ないと聞く。

僕は、王の恐怖心を感じた。

『見捨てるのなら、私も魔界域へ墮ちるぞ！ 天の神ラーデイスよ！』

王が天空神の名を口にし、僕は驚愕した。

王都で育つ事が出来なかった僕は、レント領にいる家庭教師に学んだ。

今は天の神を崇める者は少なく、地に降りた神々の方が身近だと聞いて育った。

だから、王が口にする神の名が天空神である事に、強烈な違和感を覚えたのだ。

《王族》が古い存在とは知っていたが、その知識を僕は学び損ねている。

突然、目の前に小さな光が現れた。

暗闇に浮かぶその光は、不思議なほど鮮明で、意志を持ち話しかけてくる。

『お助けします、父上』

『……………』

父上？

陛下の子供？

ほんの小さな光なのに近付いたそれは、強い力で僕と王の魂を包み込み、急速に魔界

域から遠ざかる。

『そなたは……、オーリン?』

オーリン!

……誰?

王の驚きと安堵あんどが伝わる。

なぜ僕の通り名と同じ名前なのか、意味が解らず戸惑いと不安が増す。

『僕はオリアンナの生命の光になります。だから僕の意識は、消える……』

『オーリン……』

王が悲しんでいるのが分かる。

突然何かが僕の身体に入り込込み、自然と一体となった。

身体から強烈な光が湧き出し、魔王から受けた傷が見る見る塞がってゆく。

追い継る暗い魔手を吹き飛ばし、僕と王は魔界域から逃れた。

僕は、そうして生き返ったのだ。

「オーリンって、誰?」

いつの間に眠ってしまったのか、気が付くと僕は朝の光の中にいた。

〈生命の水〉のおかげで、すっかり元気になり飛び起きた。  
胸の傷も、綺麗に消えている。

「お目覚めになられましたか、殿下」

「おはよう、マールさん。オーリンって、誰？」

再度の質問に、マールが苦笑いをする。

「ご説明する前にお着替えを、それから食事にしましょう」

渡された服を受け取ろうと伸ばした僕の左上腕に、美しい抑制の腕輪がはまっていた。

それは重さを感じさせないほど、腕になじんでいる。

「これ、奥さんの物でしょ？ 僕なんかが借りて、嫌がったりしない？」

マールの表情が、一瞬曇った。

何か聞いてはいけない事を、聞いてしまったようだ。

「……嫌がりはいらないでしょう。昔、妻が私を助けて消えた時に、残っていた物ですから」

「……奥さんの形見？ 駄目だよ、そんな大事な物を人に渡したら！」

外そうとしたが、つなぎ目がどこにあるのか分からない。

マールが優しく微笑む。

「私には宝の持ち腐れです。アルマレーク人から正体を隠すためには、それが必要でしよう?」

「そうだけど……」

「では、遠慮なくお使いください。妻も殿下なら、納得するでしょう。陛下は今、大事な会議中ですから、ご説明は私からいたします」

「うん、ありがとう」

マールの微笑みが、少し悲しそうに見えた。

王太子の服に着替えようと肌着を取った時、はらりと美しい布が足元に落ちた。

見慣れない文様に僕は顔を顰<sup>しか</sup>める。

重なり合う二枚の翼の中に、飛び立つ竜の姿。

テオフィルスのハンカチ?

「怪我の止血に、アルマレーク人が使った物でしょう。廃棄するよう指示が出たはずですが、行き届きませんでしたね」

気付いたマールが取り上げようと手を伸ばしたが、僕はそれを握りしめ脇に置いてある腰鞆に入れた。

綺麗に血を洗い落とされたハンカチは、とても高価な物に見える。



あんな傲慢男でも命の恩人、お礼と一緒に返したい。

「姫君、捨てた方がよろしいですよ。陛下の傍に居たいのであれば」

「解っているよ、僕が捨てる。着替えるから、ちよつと出てくれない？」

いぶか訝しむマールに、僕は微笑んで要求した。

戻ってきたマールと一緒に、食事に取り掛かる。

美味しいパンを頬張りながら僕は、少し離れた場所に立つ彼が話すのを待っていた。

ある程度の食事が済み人払いがなされ、二人きりになった。

僕は少し緊張する。

おもむろ徐にマールが話始める。

「陛下を助けられるのは、殿下しかいません」

何度も聞いた言葉に、僕は頷く。

「うん、僕が《ソムレキアの宝剣》の主だからでしょ？ でも、陛下を消したりなんて、

絶対にしないよ」

「そう願います。それとは別に、《王族》同士は惹かれあうのです。殿下が生きている限

り、陛下は簡単に死を望まないでしょう」

「……………」

惹かれあうの一言に、僕は真つ赤になった。

僕がセルジン王に惹かれているのは確かだけど、婚約破棄した彼はどうだろう。

「陛下は……、僕にはきつと惹かれないよ」

「まだ、幼いままの印象なのでしょう。いつか、気が付かれます」

僕は少し、不貞腐れ気味にボソリと呟いた。

「誰か、好きな女ひとでもいるのかな？」

聞いた直後に、あまりにも素直すぎる質問に恥ずかしくなった。

「陛下は影ですから、それはありませんよ。水晶玉に入る前に、ご寵愛された方はいらしたようですが……」

「え？」

マールが暗い顔で、遠くを見る。

「アミール・エスペンダという寵姫です。陛下との御子が生まれる直前に、『王族狩り』で殺されたとか。それがきっかけで、水晶玉に入られたのです。陛下は人である事を捨てられた」

「……………」

「生まれる御子が男子であればオーリン、女子であればオリアンナ、そう名付けるつもりだったそうです」

悲しい話だ。

生まれる事の出来なかった王子オーリンが、僕を蘇らせたのだ。

セルジン王はどんな気持ちだっただろう。

「全部、僕が名前を貰<sup>も</sup>つちやっただ。陛下は僕をオーリンと思ってるから、婚約破棄を？」

「関係ないと思いますよ。殿下を助けた光は、意識を持たなくなつたと聞いています。陛下はただ、人に戻る希望を失っているだけでしょう」

「そうなのかな……」

王の心は読めない。

会う時はいつも、悲しみは微塵も見せないから。

彼の心の傷は、癒えたのだろうか。

僕は陛下の事を、何も知らないんだ。

「人に戻す方法って、あると思う？」

「思います。殿下なら見付けられます」

「皆そう言うけど、僕は宝剣すら持ってないんだよ、どうしたら……」

マールが僕の肩に手を置く。

顔を上げると、彼らしくない怖い表情で見下ろしていた。

「十六年前、メイダールの大学図書館とトレヴダールの侯爵私設図書館に、ブライディンの王立図書館からある物を運び入れました」

「……何？」

「《王族》の関係書物と極秘文書類、それと謎めいた遺物です」

「……………」

マールがなぜそんな事に関わったのか、疑問が湧き起こる。

王立図書館は、《王族》の中でも王位継承権六位までの成人と、王の側近と政治を担う一部の高官のみが、入館を許された場所と聞いている。

薬師が立ち入れる場所ではない。

「マールさんって、何者？」

僕の聞き方に、彼は苦笑いした。

「昔、カドル公爵ベイデル家で薬師見習いをしていましたですよ。ベイデル家の二男が大変優秀な高官で、王族符当時のせいで人手が足りず、手伝わされたのです」

「ふーん」

「運び入れた物の中に、《王族》にしか開けない物が入っていました」

驚きに目を見開いて、マールを見た。

《王族》にしか見せられない事柄が、隠されている！

背筋を、何かが這い登った。

「それ、大事な手掛かりかも！」

「私も、そう思います。ずっと姫君に、この事をお伝えしたかった」

「陛下には、伝えてあるの？」

マールは急に黙り込み、しばらくして悲しそうに首を横に振った。

「一度お伝えしましたが、姫君がいるレント領に近い事から却下されました」

「もう一度、話すべきだよ」

「消える気でのいるの？ 禁止されませんか？」

「あ……」

確かに、婚約解消をして僕に王配候補を選ばせようとしている王は、禁止するかもしれない。

生きる希望を見つけない限り、王は僕を女王に据<sup>す</sup>えたがる。

「レント領を出たら、メイダールに向かうの？」

「その予定です。大学街に着いたら、私達だけで大学図書館を訪ねましょう」

「そうしよう。きっと何かが、隠されているんだ。それで、何時レント領を出発するの

「？」

「《ソムレキアの宝剣》が、殿下の手元に戻ったら」

「え？ でも、いつ現れるか分からないのに？」

マールが頷き、言いたい事を飲み込むように黙り込んだ。

僕にはその言いたい事がよく解る。

待つてないで、僕自身で見付け出さなきゃいけないって事が。

## 第十七話 宝剣は何処にある？

《ソムレキアの宝剣》を、探し出さなければならぬ。

宝剣が僕の手に戻らない限り国王軍は留り続け、大好きなレント城塞が再び《王族狩り》に巻き込まれる。

僕が死ぬか、ここから去るかしない限り、危機は去らない。

せつかく掴んだ手掛かりに、たどり着く事も出来ない。

いずれ魔王とは対峙する事になる。

僕が《ソムレキアの宝剣》の主である限り、それは避ける事が出来ない宿命だ。

魔王を水晶玉の魔力から切り離せる《ソムレキアの宝剣》を、彼は自分の物にしたいのだ。

宝剣は何処にある？

馬に乗れない僕は騎士見習いから従騎士へ昇格出来ないでいる。

従騎士や騎士にならないと、剣を持って戦う事が出来ない。

どうやって魔王と対峙出来る。

《ソムレキアの宝剣》が手に入れば、魔王と戦う武器になるのではないか。

もし、それが僕でも扱える重さの剣であれば、何としても手に入れるべきだ。何処にあるんだろう？

僕が殺されかけた場所？

父の館の何処を捜しても、宝剣は見当たらなかったとセルジン王が言っていた。

あの館には惨事が起きた日から結界が張っており、王と同等の魔力を持つ者、それと僕以外、結界を破る事は出来ない。

だから、盗まれた可能性はない。

魔王も欲しがっているから、持つてはいないのだ。

宝剣は何処にある？

何処に消えた？

《ただ前へ進みなさい、オリアンナ姫。《ソムレキアの宝剣》は必ず現れます》

泉の精の言葉が、頭の中で繰り返し反響する。

前へ進むつて、どうすればいい？

父の館へ僕が入れば、宝剣は現れるんじゃないのか？

そう考えただけで、背筋に寒気が這い上がる。



魔王はあの場所に一人で来いと言った。  
あきらかに罨だ。

あそこへ、行くのか？

身体から冷や汗が流れる。

惨劇があつた父の館に入れる気がしないし、足を運ぶ事すらしたくない。

それでも、僕の中の何かが、あの場所だと確信する。

父の館へ行くと、心が叫ぶ。

突然、爽やかな香りが、僕を現実に取り戻した。

マールが杯に淹れたお茶を、僕の顔の前に差し出している。

「あまり思い詰めないで下さい。運び込んだ物は、大切に保管されていますから、焦らなくて良いですよ」

僕は頷きながら杯を受け取り、口に含む。

蜜の甘さではない、お茶本来の甘味は、大人の味覚で僕の口には合わず、緊張感は一気に吹き飛んだ。

顔をしかめていると、マールが微笑みながら、杯に蜜を注ぎかき混ぜる。

「ひとりで無茶な行動はしない。必ず陛下か、私にお伝え下さい、良いですね」  
「うん、解ってるよ」

心を見透かすような彼の忠告に、決意とは裏腹な微笑みを、無意識に返していた。

マールが仕事で部屋を出た後、僕は侍女のミアにお願いして、エランと交代してもらった。

部屋に入ってきたエランは、僕をゆっくり眺め、水色の瞳が優しく微笑む。

「良かった、本当に綺麗に治ってる。安心したよ」

幼馴染みの彼は、〈契約者〉になったハラルドに襲われた僕を、心配していたのだ。

緊張が緩みそうになり、僕はわざと彼を睨み付けながら、目の前に立つ。

「君は今から、僕のお気に入りの従者だ。皆の前で王太子扱いしてくれ。今までのオーリンとは別人の印象を付けさせるんだ」

「僕はまだ、ベルン長官の従騎士だよ。今だって仕事を放置して来てるのに、どうやって君の従者をやれるんだ？ 暇じゃない！」

僕は睨み合った。

「ベルン長官には、僕から話す。アルマレーク人を誘き出した<sup>おび</sup>んだ、協力してくれ」

「それは君の仕事じゃないだろ。あいつを誘き寄せて何がしたいんだ？ 危険を冒す意

味は？」

さすがにエランは遠慮なく、目的を聞いてくる。

「……父上の館へ行く」

エランは驚き、僕の腕を強く掴んで引き寄せ、首を横に振る。

「駄目だ！ あの館に入れないだろう？ 一度、試したじやないか。君は足が<sup>すく</sup>竦んで動けなくなった。館へ近づくと事さえ、出来なかつたんだ！ 忘れたのか？」

幼い頃にエランと二人で、父の館に行こうとした事があつた。

話の弾みで喧嘩になり、意地を張つて館を見せるつもりで行つたのだ。

でも、途中で僕の気分が悪くなり断念した。

異常なほどの恐怖心に捉われ、動く事も出来なくなり、護衛に背負われてレント城に行き、医師の診察を受けた。

エランはその時、領主ハルピインに酷く怒られ、二度とあの館に僕を連れて行かないよう厳命されたのだ。

「だから、あのアルマレーク人が必要なんだ！ あいつは父上の館を見せるように、謁見中に陛下に要求した。あの館には陛下の結果が張つてあつて、僕と陛下以外入れないはずなんだ。でも、僕はあの館に近付きたくないし、近付けない。彼だつたら、僕を無理にでも連れて行く」

「馬鹿な事を！ アルマレークへ連れ去られるぞ！」

「だから、アルマレーク人を欺くために別人になるんだ。協力してくれ」

エランが怖い顔で、僕を睨む。

「何のために館へ？ 君、あそこで殺されかけたんだろ？ また、動けなくなるに決まっている。何のために館へ行く？ 陛下と行けばいいじゃないか！」

「《ソムレキアの宝剣》が、あの館にある。陛下が捜しても見つからなかった。きつと……、僕が行かないと現れないよ」

「……よく解らないけど、その宝剣って何？ 君は、それを手に入れて、どうしたいんだよ？」

僕は全ての事情を、エランに打ち明けた。

彼は頭を抱えて、しばらく黙り込んだ。

今のエステラーン王国の現状は、彼だつて認識している。

それを解決するのが、僕にしか出来ない事に呆然としているのだ。

「……わかつたよ、オリアンナ。君、よく今まで生きてこれたね」

「オーリンにされたから、欺あざむけたんだ。こんな事情、僕だつて知らなかったよ。でも、早くレント領を出たいし、陛下を助けたい。僕を男扱いするのは、お手の物だろ？ 君に

しか頼めないよ、エラン」

「魔王の……、罨だと思わないのか？」

「思うよ！ でも、他の場所じゃない。あそこにあるんだ、きっと……」

彼は黙って僕を見詰め、深く頷いた。

部屋に理髪師を呼び、印象を変えるために少し髪を短くした。

エランは不服そうだった。

その日一日を僕は、極力部屋の外で過ごした。

僕を守るトキに頼み、男子としての所作の指導を受けながら、寝込んでしまった養母<sup>ははうえ</sup>上の見舞いに行き、その後、養父<sup>ちちうえ</sup>上の手伝いをした。

エランは始終、僕を王太子扱いし、領主も当然のようにそれに合わせたため、城中の人間が僕を別人のように扱い始めた。

少し寂しい気もするけど、レント領を守るためにはそうするしかない。

屍食鬼の炙り出しをするべく、各部屋の暖炉の薪に屍食鬼の嫌いな臭いを出すコルの実の調合薬を投げ込んで、周りの者達に警告を出す。

必然的に注目を浴びる手伝いだ。

幸い屍食鬼も魔王も、テオファイルさえ現れはしなかった。

いつの間にか夕食時になり、セルジン王の滞在する貴賓室で食事を共にする事になった。

王は影だから、食事を取る必要がない。

マールが淹れたお茶を、皆の付き合いで飲んでいただけだ。

王が何かを口にしないと、皆が遠慮して食べ始めないのでそうしていると聞いた。

王がお茶を飲み始めたので、僕も目の前のスープを口にした。

今日一日、城中を移動して、男子の王太子を演じていたので、お腹はいつも以上に空いている。

細長い食卓を挟んで、王と少し距離を感じながら、僕は遠慮なくパンを千切り口にする。

いつもは少ししか食べない腸詰肉を、パクパク食べる。

自分でも不思議なくらいの食欲だ。

王は僕の食べっぷりを、微笑んで見詰めていた。

ひよつとして、彼にお腹が空く魔法をかけられている？

そんな風を感じる。

「エドウインの館へ、行くのか？」

突然の王の言葉に僕は驚き、口にした煮梨を危うく喉に詰まらせそうになった。慌ててお茶で流し込み、難を逃れた。王の前で、みつともない真似はしたくない。僕は手拭きで口を拭いながら、首を横に振った。

「い……、行きません！ どうしてですか？」

きつと、トキかエランが僕の行動を王に報告したのだろう。

あえて口止めしなかったのは、魔王に一人で立ち向かう勇気が無いからだ。

僕の中途半端な行動を、心の中ではセルジン王に助けてほしかった。

でも、王の助けが《ソムレキアの宝剣》の出現を阻む可能性もある。

僕が殺されかけた時、王はいなかった。

宝剣が消えた瞬間を、再現する必要があるのを、僕はなぜか確信していたのだ。

「そうか、それなら良い。王太子としていずれ皆には周知するが、アルマレーク人を欺くあざむ

には良いタイミングだ。こちらも警備は万全にする、今日は安心して眠るといい」

「……………はい」

僕の計画を完全に悟られている気がして、安心していいのか複雑な気持ちで食事を終えた。

何か幸せな夢を見ていた。

僕を呼ぶ、優しい声。

最初それはシモルグ・アンカの声かと思つたが、少し違つている。

僕は夢の中で、その声の方へ行こうと一歩踏み出した。

それが聞き覚えのある、低い男の声で破られたのだ。

「起きろ、へタレ小竜」

覚醒したばかりの意識でも、テオファイルスが来たのだとすぐに理解出来た。

計画通りだが、さすがに緊張する。

部屋の燭台の灯りを背に受け、青い瞳の彼が暗い表情で、僕を見下ろしていた。

服装は最初に出会つた時の、旅装に戻っている。

「誰だ、君は？」

初対面のふりをして、僕は彼を睨み付ける。

部屋を見回すと、エランも侍女も床に倒れ意識を失つていて、僕は咄嗟にベッド脇に吊るした護身用の短剣を取ろうとしたが、彼が素早くそれを蹴り、手の届かない場所へと飛ばされた。

テオファイルスは不敵な笑みを浮かべ、僕を見下ろす。



「俺を忘れるとは心外だな、二度も助けたのに。テオフィルス・ルーザー・アルレイド、お前の婚約者だ」

僕は皮肉っぽく顔を顰<sup>しか</sup>め、彼を跳ね除け起き上がろうとした。

「婚約者？ 男の婚約者を持った記憶はないな。別人だろう、君とは初対面だ」

彼の腕が僕の肩を掴み、ベッドに仰向けに戻された。

覆いかぶさるように腰を下ろし、冷たい青い目で見下ろす表情は、謁見時の若き国王然とした彼とはかけ離れたものだ。

「服を着て寝ていたのか、裸だったら性別を確かめられると思ったのに。エアリス姫が、どこにもいない。あれはお前だ、オーリン。お前が女なら、間違いなくオリアンナ姫だ」  
危機感に冷や汗が流れる。

彼に身体を調べられたら、女だと知られたら……、すべてが終わるのだ。

## 第十八話 テオファイルスの脅威

「正直に言え、お前は女だろ？ 言わないと、服を剥いで確かめるぞ！」

僕をベッドに押さえ付けるテオファイルスが、顔を近付け容赦ない言葉で脅しをかける。

「何の事か、解らない。君は、誰と勘違いしている？ 僕は、男だ！ 放せ、無礼者！」  
僕は怒りの表情を浮かべ、彼を押しつけようとともがいたが、長身で鍛え上げられた身体はビクともしない。

左手を掴ませて、魔力が無い事を認識させれば、別人と思うだろう。

それなのに暴れる両手は、いとも簡単に頭上に押さえつけられ、彼の手が身体をまさぐり始めた。

厚手の服に阻まれて、体形が露わになる事は無い。

胸は晒さらできつく巻き、股は男子を装う為の股袋があり、触れたぐらいで気付かれる事はない。

だが、服を剥ぎ取られれば成す術がない。

仮にも婚約者かもしれない相手に、よくこんな事出来るな！

嫌ってやるぞ！

自分で招いた事態だが、本能的な恐怖と憤りを覚える。

この危機を回避出来るものなら……、そんな勢いで精一杯睨み付け、虚勢を張る。

「別にお前を陵辱する訳じゃない、確かめただけだ。お前とエアリス姫は同一人物だろうか？ お前は……、俺を惹き付ける、その理由が知りたい。オリアンナ姫なのか？」

僕の表情を読み取ろうとするテオフィルスの瞳には、不思議な熱が垣間見える。

まるで愛の告白のような彼の言葉に、僕の鼓動が大きく脈打つ。

その熱に吞まれないように、冷静になろうと必死に歯を食いしばる。

彼の手が腰のベルトに手を掛けた。

簡単には剥ぎ取れない服を着ているが、僕は恐怖と憤りに声を荒げる。

「別人だつて、言っているだろう！ それは、エアリスだ。僕に変装して城を脱け出し、

僕の名を語る。昔から彼女の悪ふざけだよ！」

テオフィルスは息がかかる程顔を近づけ、脅すように笑う。

「嘘をつくな！ オリアンナ姫が死んだというのも嘘だ。ただの領主の養子が、国王軍の何重もの警備の中にいるのはなぜだ？ お前がオリアンナ姫だからだ！」

彼の手がベルトを外し始めた。

国王軍に追い詰められているのが、目に見えて解る。

危険を冒してここまで来たのだ、見付け出すまで、どんな事でもするだろう。

肩を掴む手に力が入り、僕は痛みに顔を歪める。

「そんな事をしたら、間違いなく王に殺されるぞ！」

「構うものか、嘘つきめ！ アルマレーク人の体型は、誤魔化せないぞ」

彼は完全に僕のベルトを外してしまった。

僕はあからさまに嫌悪の表情を浮かべながら、別人を装い叫んだ。

「知らないのか、異国人！ 僕のような体型は、普通に国民の中にもいる。君は今の行為で、完全に処刑される。王太子に対する不敬罪だ、覚悟しろ！」

「王太子？」

テオフィルスが一瞬手を止め、焦燥感を滲ませながら疑念に僕の外見を再確認する。

訝しむ彼の顔に、隙を衝くように頭付きを食らわせ、押さえられた両手が自由になり、

左手で拳を突き出す。

咄嗟に避けた彼は、右手で僕の左手を掴み、反撃の拳を振り上げた。

だが、拳は振り下ろされなかった。

気が付いたのだ、僕の左手に魔力を感じ取れない事に。

「お前は、誰だ？」

それでもまだ、僕の身体の上から退こうとしない。

「僕は、オーリン・トウル・ブライディン。この国の王太子だ！」

テオフィルスは驚愕に青ざめ、僕から離れた。

完全に別人だと、信じたのだ。

次期国王では、警備の嚴重さも意味が通る。エステラーン王国の根幹を大いに揺るがした事に、王の容赦無い怒りを受け止める覚悟を、彼は必死に心の中でかき集めている。「エステラーン王国の《王族》は、純血を貴ぶと聞いている。でも、お前にはアルマレーク人の血が入っている。本当に王太子なのか？」

「純血は、ほとんど殺された。父は《王族》で、母はエステラーン人だ。なぜ僕にアルマレーク人の姿が現れたのかは判らない。でも、セルジン王から王太子として扱われているのは確かだ！」

王太子オーリンとして与えられた設定を、もっともらしく伝える。

父が《王族》であれば、アルマレークと関わりはなくなる。

テオフィルスは目に見えるほど失望を露わにし、ベッドから離れた。

僕は恐怖の余波で、身体が小刻みに震えるのを悟られないようしながら、乱された服を整えベルトを締め直した。

ベッドから起き上がり、床に飛ばされた短剣を取り、彼を警戒して鞘から抜き構える。「アルマレークへ、今すぐ帰れ！ この状況は、僕がもみ消す」

「……俺に恩を売つても、何も出ないぜ」

「君はエアリスを助けた。だから、見逃してやる」

そう言う僕を、彼は無表情で見つめている。

引き込まれそうな青い瞳には、救国と情念の炎が宿り、暗く揺らめく。

「エアリス姫は、何処にいる？」

「知らない。陛下が何処かで治療させているはずだ。命に係わる大怪我で、死んでしまいかもしれない」

「……俺なら治せる、会わせてくれ」

僕は呆れた素振りで、首を横に振り否定する。

「そんな事をすると思うのか？ 僕を人質に取つても、陛下はエアリスを優先する。二人は愛し合っているんだ、君は近寄る事さえ許されないよ」

「そうりたい」という願望の入った発言だが、テオファイルスには打撃だったらしく、苦しみの表情で僕から視線を逸らした。

本気で僕を、連れ帰るつもりなんだ。

彼は素早く剣を抜き、僕の持つ短剣を簡単に剣先で跳ね飛ばし、悲しむような顔つきで切っ先を僕の喉元に突きつける。

ここで竜の指輪で確認されたら、元の木阿弥だ。

僕は左手を彼から遠ざけた。

「エドウィンの館を知りたい。竜騎士の住まいは特殊だ、たとえば他人が住んでいように行先は必ず残していく、俺達はそういう習慣だ。お前に危害を及ぼす気はないが、一緒に来てもらおう」

望み通りの展開だが、僕の身体は恐怖に総毛立った。

父の館へ、行かなければならない、《ソムレキアの宝剣》を見つけ出すために。

「俺はアルマレークの為なら、どんな事でもする。命がけなんだ、これでもね。案内してもらおう、エドウィンの館へ」

テオフィルスは僕に剣を突き付けながら、左手の指輪を頭上にかざしアルマレーク語で命じた。

「リンクル、安全な道を示せ」

竜の指輪が光り、その光が暖炉の上の燭台を右回りに二回まわり、その後、壁に飾つてある大きな肖像画の中に消えた。

テオフィルスは光の後を追うように、僕を引き摺りながら、燭台を右に二回まわす。すると、光が吸い込まれるように消えた肖像画が、下の腰板と共に扉のように開いた。隠し通路の入口だ。

テオフィルスは、竜の魔法を使って城に出入りしていたんだ。

絶望的な気持ちで僕は、剣を突きつけるテオフィルスに、部屋の外へと連れ出された。床に倒れるエランが、意識を取り戻す気配はない。

部屋の外にいるはずの護衛も、中の異変に気付かないのか、とても静かだ。

騒ぐべきじゃない、これは僕が望んだ事だ。

そう思いながらも、徐々に恐怖が心を蝕んでいった。

物々しい警備をすり抜け、月明かりの中を城から離れ、第一城門内で最も人の近寄らない場所へ、僕は悪夢に引きずり込まれるように進まされる。

父の館は第一城壁内の、レント城から南に少し離れた所にある。

元はレント城の南の小宮だったが、領主が提供し、母オアイーヴが気に入り、父エドウィンと二人で住み始めたのだ。

《王族》が住むにはとても質素であったため、後に一部増築され侍従や侍女達が不都合



なく住めるまでとなり、美しい庭園と日当たりの良い環境は、平和そのものの暖かさがあつた。

今——、荒れ果てた庭園の木々に囲まれた館は、幽霊屋敷として人々から避けられている。

八年前、ここで大勢の人が惨殺された。

内部はもちろん綺麗に片づけられているが、人々に刻まれた恐怖心が、この場所を歪ませていた。

《王族》オアイーヴがレント領にいた事は、絶対的な秘密とされたため、ここで《王族狩り》が行われた事を、知る人は少ない。

それでも、セルジン王の結界が無くても、この館には誰も近寄らない。

重く暗い空気が、レント領に残る重石のように、僕の行く先に存在していた。

僕は恐怖心に足が震え、息も上がり気分が悪くなる。

まるで死にかけているように、周りの景色が回り始める。

館に近づくと、生気が吸い取られ動けなくなつた。

「早く歩け！」

彼に引きずられ、無理やり歩かされる。

「嫌だつ……、あそこへ行きたくない！ 離せ！」

僕は《ソムレキアの宝剣》を捜す目的も、父の館には王の結界が張ってありアルマレーク人達が入れない事も、恐怖心から思い出す事さえ出来なくなっていた。

「若君、守備兵がいます。……気付かれた!」

守備兵達の松明たいまつが、こちらに向かう。

途中で合流したアルマレーク人の随行者は、剣を抜き迎え撃つ姿勢を取った。

「待てマシーナ、戦うな! 眠らせる」

テオフィルスは近づく数名の守備兵に向かい、左手を突き出す。

「リンクル、眠らせろ!」

黒い影が指輪から飛び出し、守備兵達の松明が地面に落ちた。

兵達が眠らされた事に、僕は失望する。

助けて、誰か……。

「若君、魔力の使い過ぎです! 寿命が縮みますよ」

「エステラーン人を傷つけるよりマシさ。縮むのは俺の寿命だから、気にするな」

「若君を失ったら、アルマレークは終わりです!」

「判った、使わない」

マシーナという随行者は、鼻息を荒げ忠告する。

僕は隙についてテオフィルスの手を振り払い逃げようとしたが、長身で運動神経の優

れた男に敵うはずもなく、すぐに捕えられる。

「離せ！ 嫌だ、こんな……、こんな怖い所は……」

「おいつ、騒ぐな！」

テオフィルスは暴れる僕の首筋に、拳を振り降ろす。

悪夢に吸い込まれるように、僕は意識を失った。

倒れた相手を抱き抱えながら、彼の心に一抹の不安が過ぎる。

怖い所、……どういう事だ？

夜気と共に言い知れぬ何かの気配が、一陣の風に乗って通り過ぎる。

月明りの中に建つ、暗く沈む荒れ果てた館が不気味さを増した。

## 第十九話 《ソムレキアの宝剣》

—— 歌声が聞こえる。

優しい女の声。

子をあやし、包み込み、抱きしめる温かな腕。

思いつきり甘えられる存在に身を預け、その胸に顔を擦り付ける。

なんて幸せなんだろう——

目が覚めたら、血まみれの書齋に横たわっていた。

目の前に、半分喰いちぎられ片方の眼球が飛び出した男の片目が、僕を見つめている。

恐怖に悲鳴を上げたいのに、声が出ない。

猿轡さるくつわを噛まされ、両手を後ろ手に両足共縛られているからだ。

くぐもった悲鳴を聞きつけ、月光石を持ったテオフィルスが、死体を踏みつけやって来る。

「この館が他人の住居というのは嘘だな。お前の王は、嘘つきだ。しばらくそのままです、騒がれると厄介だ。用件が済めば立ち去る。置き去りにするが、お前はそううち

誰かが見つけるだろう」

「若君、ありました。「サリタの隠し絵」です。老トムニ、解読願います」

「ふむふむ、「サリタの隠し絵」を使うとは、エドウィン様らしい。ご家族に気を使わ  
れての事じゃ」

テオフィルスは、模様に見える暗号文を確認するために、仲間の元に戻って行つた。

三人の男達が手がかりに夢中になっている間に、恐怖から逃れようと泣きながら這い  
ずり、部屋の入り口に向かう。

血が全身を汚した。

夜なのに白昼夢のように、この館の惨劇の全てが見える。

屍食鬼に殺された者達の魂は地獄につながれ、永遠の責苦に遭うという。

惨殺された者達の、うめき声が聞こえる。

ただ違うところは、殺戮する屍食鬼達の姿が無い事だが、僕にはその事に気付く余裕  
も無い。

書斎の入り口の扉は開いていて、何かの気配が向こうにある。

呼んでいる……。

入り口近くの廊下に、喰いちぎられ血にまみれた女の背中が見える。

それを見ないようにしながら、扉を抜ける。

怯える狭い視界で、不意に進む頭が、何かに当たった。恐怖を噛み殺しながら見上げる。

セルジン王が立っていた。

王は口元に人差し指を当て、静かにするように動作で伝える。

僕の目から、安堵の涙が溢れ出す。

猿轡と両手両足の戒めが解かれた。

「王さま……」

王にしがみ付き、声を噛み殺して泣いた。

彼は優しく抱きしめる。

「そなたに、ここは無理だ。早く館の外へ」

「血が……、ここ、血まみれ……。オリアンナ……、ここ、嫌」

意識が、幼いの子供に戻っている。

王は横抱きに僕を抱き上げ、優しく語りかける。

「そうだな、ここは血塗れた記憶がこびり付いている。そなたは記憶の中にいるのだ、目を閉じ、耳を塞いでいろ。何も感じ取るな。必ず守る、安心するのだ」

言われた通り、目と耳を塞ぐ。

何も感じ取らないはずだった。

……何かが聞こえた。

それは昼と夜の狭間、黄昏時の鳥達の喧騒にも似た、帰巢本能の叫び。人とも鳥ともつかぬその叫びは、僕を求めている。

「呼んでる……」

「耳を傾けるな、何も考えるな。ここはただの館だ」

王は足早に二階の書斎を離れ、吹き抜けの廊下を渡り、階段から玄関ホールに降りた。

「あそ……」

目を開け、一階のホールの中央を指差す。

そこは僕が、公開処刑のように殺された場所だ。

王は見ない。

「ならぬ！ 感じ取るな」

「光ってるの……、剣が。血の中で呼んでる、オリアンナって……」

彼は足を止めた。

「……剣？」

ゆっくり、その方向を見る。

そこは八年間の埃と、蜘蛛の巣が厚く積もった床、夜目が利く王でも、何も見えない。

「剣は、光っているのか？」

「うん。おいでつて、呼んでるの。あれで母さまを助けられる?」

王に降ろされ、そのまま彼の手を引つ張りそこへ行く。

王は導かれるまま、その手から手へ魔力を送り込む。

僕の見ている過去の記憶を、映し出す魔力を……。

「或いは、そうかもしれない。その光を手にしてみよ、オリアンナ。ただ、見るのは光の剣だけだ。それ以外は感じ取るな」

僕の周りに、血で染まったホールが現れ、やがてそれは館全体へ広がっていった。

この館の惨状を再度目の当たりにした王は、一瞬目を背ける。

妹の無残な姿を、捉えてしまったのだ。

王の目に、悲しみが浮かぶ。

「何も見てはならぬ、見るのはただ光の剣だけだ。呼び声に答える事だけを考えるのだ」

まるで自分に言い聞かせるように、王が言う。

書斎から、恐怖の叫び声が上がった。

突然現れた血の海のような惨状に、アルマレーク人達が書斎から駆け出して来る。

館全体に広がる惨劇の跡に、吐き気を催しながら、テオフィルスは懸命に冷静になろうと努力した。

「怖い所」の意味が、嫌という程理解出来る。



王は怒りの目を彼等に向け、腰に下がる長い剣を鞘から抜いた。

(オリアンナ……)

内なる呼び声に意識を集中させ、僕は光る剣に近付く。

横たわり絶命した五歳の僕の、背の血だまりに、光り輝く剣が浮かび上がる。

剣に手を伸ばそうとした時、反対側から異様な人型の手が伸びてくる。

手だけで他が見えないそれは、光り輝く剣を取ろうとしていた。

王は長剣をかざし、切っ先で魔物の手を突く！

叫び声が木霊した。

「早く、手に取るのだ。魔王が来る！」

王の切羽詰まった声に即されて、血の中から輝く剣を拾い上げた。

突然、眩しい光が館全体を覆い、惨劇の跡を清める。

《ソムレキアの宝剣》から歓喜の意識が流れ込み、幼い時に味わった僕の心の痛みが、消えていくのを感じた。

僕は今の意識で、王に告げた。

「ああ、待っていたんだ……、僕を！ 陛下、《ソムレキアの宝剣》を見つけました！」

僕の目から涙が溢れ、宝剣を抱きしめる。

親友に巡り合えたように、喜びが心を満たす。

視界から惨劇の記憶が消え、館は埃を被りながらただ存在していた。

セルジン王に《ソムレキアの宝剣》を見せようと、振り返って驚愕する。

輝く宝剣の光の前で、王は消えそうになっていた。

「陛下?」

「構うな、私は影だ。輝く光の前では、影は保てぬ。姿が見えなくなるだけで、ここにいて、心配は無用だ。それより、その光を決して消してはならぬ!」

「え?」

「魔王がいる。待っていたのだ、宝剣が現れる時を……」

恐怖に顔を引き攣らせながら、魔王の姿を捜す。

暗闇の床から蠢く者の姿が見えた。

それは先程まで見えなかった者達……、八年前に殺戮をもたらした屍食鬼達だ。

人間達を喰いつくし、物足りない者達はお互いを喰い合っていた。

人型でありながら、飛び出し尖った顎と長い首、伸びた鍵爪と歪んだ黒い翼は、醜く変形していったハラルドを思い起こさせる。

嫌だ、こんなの見たくない!

元は人間だと思うと、恐ろしさが倍增した。

身体が震え、宝剣を持つている事を苦痛に感じ始める。

宝剣の光が陰り始め、それを同時に屍食鬼の姿がより鮮明に、暗闇の中に現れ始める。

目の前に、ゆらりと一人の男が立っていた。

王より少し年上に見えるその男は、残酷なまでに美しい。

長い金髪は緩やかに肩にかかり、国王と同じ緑の瞳は残忍で涼やかな侮蔑を交えて僕を見据えている。

魔王アドランが目の前にいたのだ。

セルジン王と同じように、半透明な影の状態ながら邪悪な黒い渦で身を覆っている。

『やはり、そなたが必要なのだな。天界人！』

僕は、ハツとした。

魔王が見ているのは僕ではなく、僕の命の光となった王の子オーリン・トゥール・ブライデインそのものだ。

『《ソムレキアの宝剣》ごと、そなたを魔界域に封じ込める！』

まるで黒い渦を操るように、暗闇が宝剣の光を消そうと襲い来る。

全身を覆い尽くされそうになった瞬間、風が吹くように押し返された。

『兄上の好きにはさせぬ！』

セルジン王が宝剣の光に消えそうになりながら、目に見える霧状の渦で黒い渦の悪意を追い返す。

魔力のぶつかり合いの勢いに、僕の身体が持ち堪えられず弾き出された。

気が付くと屍食鬼に囲まれ、恐怖感から光る宝剣を振り回す。

普通の剣より軽く、腕に負担が掛からない。

宝剣に触れた屍食鬼は、まるで火傷でもしたように悲鳴を上げて倒れ消失した。

この宝剣、凄い！

ほんの少し触っただけなのに、屍食鬼が消えた！

嬉しくなつて振り回すうちに、セルジン王から離れてしまった事に気付いた。

背後から屍食鬼が襲い来る。

素早く避けて振り返つた瞬間、屍食鬼の首が切り飛び、胴が真っ二つになった。

緑色の粘液が降りかかるのを、横跳びに飛んで辛うじて避ける。

テオフィルスが剣に付いた粘液を振り落としながら、僕と背を合わせて後ろに立つ。

王の結界で入れないはずの彼が、なぜ居るのか顔を引き攣らせながら考えた。

結界が解かれたのか？

「ふん、お前は意外と素早いんだな。それで剣をもつと鍛えれば、俺の従者にしてやって

もいこ」

「何を言いたいのか解らないな、僕は王太子だぞ！ 僕を誘拐した君は、完全に王国の敵だ！」

あくまで別人を装い、光る宝剣の切っ先を彼の顔に向ける。

光越しに見る彼は、不敵に笑っている。

先程切られた屍食鬼が首と下半身の無い状態で長い爪で攻撃してくる。

テオフィルスは容赦なく腕を切り落とす。

炎で燃やさない限り、屍食鬼は死なない。

「竜の炎で焼けばいい。屍食鬼の弱点ぐらい知っているだろう？」

「お前の王に聞け！ ここでは竜の魔法は使えない！」

「え？」

竜の魔法が使えないという事は、王の結界が解かれていない。

アルマレーク人は王によって、結界内に入れられたという事になる。

宝剣を再び屍食鬼に向けながら、アルマレーク人が王に捕らえられた事実を驚愕する。

「ここは人の住める場所じゃない。お前の王は、なぜ嘘を吐く？ なぜ隠す？」

「若君、危ない！」

マシーナの警告で、彼はセルジン王の剣を辛うじて受け止め突き返す。

王は容赦なく剣を繰り出し、素早い攻撃にテオフィルスはじわじわと追い詰められる。

いつの間にか僕から引き離され、剣も遠くへ弾き飛ばされた。

屍食鬼のいる中で、この状況は死を意味する。

「竜の魔力を使ったらどうだ、貴殿は魔法使いだろうか？」

王は皮肉に笑って、僕の元へ戻ってくる。

止めを刺さなくても屍食鬼に食べさせれば、アルマレーク共和国に対し事故で片付けられると考えているのだ。

残酷だ。

僕の心の片隅が眩く。

テオフィルスは拳と蹴りで自分に群がる屍食鬼達をなぎ倒すが、屍食鬼の長い爪に傷付き身体のうちから血を流していた。

## 第二十話 宝剣の威力

血に塗れたテオフィルスの手から、月光石が滑り落ちた。

彼の着る旅装が屍食鬼の爪に切り裂かれ、下に着ている鎖帷子くさりかたびらに似た防護服が辛うじて彼を守っているが、いずれ倒れ動けなくなるのは時間の問題に見える。

彼が屍食鬼に殺されてしまう事が、僕にはとても許せない事に思え、咄嗟に内懐から自分の月光石を取り出した。

「テオフィルス、受け取れ！」

丸腰で戦う彼に、剣を見つけやすくするために、僕は月光石を彼に向けて投げた。

すると、月光石が飛んだ先にいる屍食鬼が、柔らかい光を恐れるように逃げ始めたのだ。

テオフィルスの周りから屍食鬼がいなくなり、彼は月光石を拾い上げた。

僕は呆然と、自分の投げた石を見詰めた。

あれは、マールさんが持っていた希少石？

セルジン王が僕の腕を掴み、怒りの表情で睨み付けてくる。

「余計な事を、あの者は葬り去るべきだ！ それなのにマールの希少石を渡すとは！」

「申し訳ありません、マールさんの石とは知らずに……。でも、エアリスの恩人は、生かして返すべきです」

「そなたは、誰の味方だ？」

王を怒らせたのは何度目だろう、そのうち本当に嫌われてしまうかもしれない、そう思うと苦しくなる。

でも、父の国人を守らなければ、僕の中の何かが死んでしまう気がするのだ。

僕は泣きそうになりながら、王に縋り付く。

「もちろん、陛下の味方です、信じて下さい。僕は……。あなたが好きです」

涙が頬を伝う。

こんな緊急時に、僕は何を言っているんだろう。

セルジン王は怒りの表情を緩めて、僕の心を確かめるように僕の頬に手を添え、顔を覗き込む。

「では、私に従うのだ。あの者の処刑命令は出してある。そなたはそれを止めてはならぬ。これは王命だ！」

「……………はい」

僕がこの館に入るのに、テオフィルスを利用した。

恐怖に動けなくなる僕を、この館まで連れて来るだけの目的で。



でも、館の中にいるセルジン王が彼を迎え入れ、魔法を使えない状態にして閉じ込めたのだ。

僕はアルマレーク人の死なんて望んでない。

でも、王には逆らえない。

気が付くと王と僕の周りに、黒い渦が蜷局とくろを巻くように集まり、視界が利かなくなっていた。

「私から離れるな！」

僕は《ソムレキアの宝剣》を片手に抱え、もう片方の腕を王の胴に回し、今度は魔力で吹き飛ばされないように、必死に抱き着く。

黒い渦から槍やりのような鋭い物が、僕めがけて突き出て殺そうとする。

王が剣を一払いすると、周りのすべての槍が叩き落とされ消えた。

すると蜷局の中から人の形をした影が浮き上がり、再び魔王アドランが現れた。

セルジン王と距離を取りながら、揺れ動く魔力が次の攻撃の形を取り、魔王の背後に現れる。

それは巨大な屍食鬼の爪のような刃だ。

『そなたは魔力が落ちたな、我が愚弟ぐていよ。《王族》が減ったせいかな？ あの手鹿なドウラスが死んだせいかな？』

「ドウラスほど優れた《王族》はいない！ 私より王に相応しい存在だった。だから、兄上が殺したのだ。私は兄上、あなたを許さない！」

セルジン王の周りから、凄まじい怒りを伴った魔力が湧き起こる。

暗い思念の入り混じったそれは、魔王の放つ黒い渦にとてもよく似て、僕の氣力を蝕む。

僕は王にしがみ付く事が出来なくなつた。

「陛下……」

手が放れる寸でのところで、王が僕の腕を掴む。

その隙に魔王の背後の巨大な刃が、鎌首をもたげ王に襲い来る。

王の前に透明な盾が現れ、刃を弾いた。

「兄上の、思い通りにはさせない！」

テオフィルスは王太子の投げた不思議な月光石を使って、自分の月光石と剣を探し当てた。

マシーナが剣で屍食鬼を切り付けながら、彼の元までたどり着く。

「若君！ 大丈夫ですか？ ああ、酷い、血塗れじゃないですか」

「早くここを出よう。館全体に王の結界が張つてあるから、竜の魔法が使えないし、

傷も治せない」

「逃げましょう。もう手がかりは掴んだのです、早く！」

襲い来る屍食鬼と戦いながら二人は、血路を開こうと必死になる。

幸い王太子の月光石のおかげで、屍食鬼が集団で襲ってくる事がなくなり、移動は前より容易くなった。

「若君、竜の乗り場があります。早く来て下され！」

随行者の老トムニが、隠されていた竜騎士の脱出口を見つけ出す。

テオフィルスが視線を向けた瞬間、月光石に照らされて見慣れた物が目に飛び込んできた。

竜と指輪の紋章——フィンゼル家の紋章旗だ。

そして横に並ぶ王冠と聖鳥の紋章旗は、謁見の際に目にしたエステライン王国プライ  
デイン王家のもの。

急に止まった彼に、マシーナが警告する。

「若君、早く！」

「……………」

テオフィルスの心に、何かが引つかかった。

あきらかに惨劇があったこの館に、自国の紋章旗がなぜ今も残されているのだろう。

敵対している自分達とは裏腹に、その紋章旗は愛の象徴のように国という概念を超えて存在していた。

上りかけた階段から、彼は後ろを振り返る。

多くの屍食鬼の向こうで、セルジン王と王太子が、魔王と対峙している。

その戦いぶりは、魔力のぶつかり合いのせいで、はつきりと目にする事は出来ない。

それでも、何か引つかかる。

先程、王太子が手にしている光る剣が、屍食鬼を消滅させた。

ここへ連れて来た時には、王太子はあの剣を持っていなかった。

「どこにあつたんだ、あんなもの？」

王の側から弾き飛ばされた王太子の前に、黒い渦が現れ、蠢き始める、まるで清らかなものが汚されてゆくように……。

テオフィルスは、なぜか無性に沸き起る怒りの感情に突き動かされ、階段から屍食鬼達の中へ飛び降りた。

「いけません、若君！」

魔力でセルジン王から引き剥がされた僕の目の前に、魔王アドランが勝ち誇ったように立っている。

先程より影が濃く、くつきり見えるのは、セルジン王を魔力で打ち負かしたからだろうか。

反対に《ソムレキアの宝剣》の光が弱まっているのは、王に加勢出来ない自分を、情けなく思っているのが原因かもしれない。

僕も魔法が使えたら、王の足手まといにはならないのに……。

『思った以上に体力を消耗したようだな、天界人。永遠に生きるそなた達は、疲れとは無縁なのかと思っていたが』

僕は恐怖に動く事が出来ない。

魔王の手が喉にかかり、足が宙に浮くぐらい持ち上げられる。

息が出来ず、苦しみに宝剣を落としそうになる。

魔王の足元から黒い渦が湧き上がり、僕の身体中を覆い尽くす。

セルジン王が反撃の魔力で僕を取り戻そうとしているが、黒い渦が強固に立ちはだかる。

『魔界域へお連れしよう、天界の御仁』

怒りが、僕の心に沸き起こる。

僕の命の光となってくれた王の子を、魔王の邪悪な手に掛けさせてなるものか！

守りたい気持ちが、力を与えた。

《ソムレキアの宝剣》が、強烈な光を放ったのだ。

苦しみの中で光輝く宝剣を振りかざし、魔王の手を切り付ける。

衝撃を受けたように、魔王は手を離れた。

黒い渦が霧散する。

「天界人じゃない！ 僕はオーリン・トゥール・ブライデイン。この国の王太子であり、《ソムレキアの宝剣の主》だ！ お前を討つ！」

まるで誰かが憑依したように僕は宣言し、紫水晶で出来た宝剣は猛烈な輝きを放ち、魔王の影を一刀両断に切り裂く。

『これが、宝剣の威力か……？ 影が保てぬ、これほどに……？ あああ……、ぎやあああ  
ああ———！』

魔王から壮絶な悲鳴が上がり、影は屍食鬼の残像と共にかき消えた。

僕は手にしている宝剣の光に、心も身体も覆い尽くされ何も考えらずにいた。

今、僕を衝き動かしたのは誰なのか。自分の意志とは思えない。

王の子の意志か？

それとも、宝剣の意志なのか？

身を包む大きな光の翼を、背に感じた気がした。

そして、姿の見えない国王の声が聞こえる。

「オーリン……、我が子。そなたは……、や はり……………」

王の声が消え、不安が押し寄せる。

セルジン王の影が消えたのが、僕には嫌という程理解出来た。

眩しい光の中に、王の姿は見えない。

「陛下？ ……………国王陛下！ ……国王陛下！」

王のいない喪失感を、叫びに変えた。

僕の唯一の肉親であり心の支えである、愛するセルジン王が消えてしまったのだ。

目の前が真っ暗になり、僕の不安を感じ取るように《ソムレキアの宝剣》の光が急速に衰える。

父エドウインの館に暗闇が戻ろうとした時、誰かが宝剣を持つ手を掴んだ。

「まだだ！ ……まだ、その剣を光らせていろ」

「えっ？」

テオフィルスの血にまみれた手が、僕の細い手首を握りしめ宝剣を掲げる。

彼は興奮した目で笑っている。

「離せ！ 君は敵だ！」

「そんな事はどうでもいい、冷静に周りを見ろ！ ここで殺された者達が、その光で浄化されていく。シモルグ・アンカがこんな室内に現れるなんて……、お前、凄い事をしてるんだぞ。もつと光らせろ！」

言われて周りを見ると、小さな丸い光があちこちの床から浮かび上がり、館の中にシモルグ・アンカが夕陽色の翼を飛ばたかせ、長い孔雀の尾をなびかせて、灰色の女人の顔で、死者の魂を優雅に宝剣の光へと導いてゆく。

「シモルグがこんな所に……。浄化？ これって、魔界域に閉じ込められた魂を、解放しているって事か？」

「そうだ！ 一度見た事がある。アルマレークにも呪術師がいて、不慮に亡くなった者達を浄化した。その時もシモルグ・アンカが現れたんだ、同じだ」

「……」

「天界の門が開いている、死者の魂が天に迎え入れられているんだ。こんな事が出来るなんて……。お前凄いな！」

彼の声が、僕には半分も聞こえなかった。

他より大きな丸い一つの光が、別れを惜しむように僕の周りをゆっくり廻っている。

温かく優しい、懐かしい光。



遠い昔、僕はこの光に抱きしめられていた。

その球体は包み込むように近づき、やがて宝剣に吸い込まれていった。

とめどなく涙が流れ、彼に聞こえないように小さな声で呟く。

「さようなら、母上……」

後は何も解らなくなった。

幾つもの光が宝剣に吸い込まれていく、その光の中で泣き続けた。

——やがて最後の魂が宝剣に吸い込まれた後、光は役目を終えたように、シモルグと共にスツと消えた。

## 第二十一話 唯一の希望（新）

《ソムレキアの宝剣》の光が消え、テオフィルスの持つ月光石の柔らかい光が、辺りを照らし出す。

館は惨劇の残滓ざんしから解放され、分厚い埃と張り巡らされた蜘蛛の巣に人が立ち入った形跡だけを残し、何事も無かったように静まり返っている。

「お前のおかげで命拾いした。屍食鬼を追い払う貴重な石だ、凄い物を持っているな。ありがとう、これは返すよ」

マールの希少石を受け取り、割れてないか確認する。

希少石とは知らずに投げてしまったが、月光石に似て簡単には割れない石のようだ。僕はホツとして、内懷に仕舞った。

「ここはお前にとって、つらい場所だったんだな。無理やり連れてきて、本当に悪かった」

不意にテオフィルスに優しい声で話しかけられ、小さい声で呟いたつもりだったのに、すっかり聞かれていた事に驚く。

謝った？

意外な反応に戸惑いながら、僕は宝剣を鞘に納め、わざと強がるように彼を睨みつける。

「君には処刑命令が出ている、僕を誘拐した罪だ。捕まったら確実に殺されるぞ、早く逃げろ」

それだけ言つて、僕は出口に向かつて走る。

外には国王軍が待機しているはずだ。

テオフィルスの危険性はよく判つた、故国を救うためなら何でもするだろう。

王太子を人質に、自分達の要求を通そうとするかもしれない。

だが、扉に到達する前に、マシーナに阻まれた。

「残念ですが王太子様、まだ解放する訳にはまいりません。私達が無事逃げ延びるまで、お付き合い願います」

それでも逃げようとする、宝剣を持つ腕を背後からテオフィルスが掴んだ。

興奮が冷めやらぬように、青い目がキラリと輝く。

「この剣は何だ？ 凄い魔力を持つている。これがあれば、俺にも屍食鬼を追い払えるんじゃないのか？」

彼は宝剣を取り上げようとする。

両手で必死に宝剣を掴み彼と揉み合ったが、鍛え上げられた男の力に敵うはずもな

く、振り払われそうになる。

あまりの横暴さに怒りを覚え、傷だらけの左手に思いつきり噛み付く。

これには彼も余裕を失い、容赦なく僕を床に蹴り飛ばす。

宝剣はテオフィルスの手へ渡った。

「このっ！」

彼は痛みと怒りに、思わず自分の剣を抜く。

マシーナとトムニは緊張しながらお互いの顔を見、様子を見る。

相手は一国の王太子、無用な争いは避けるべきだが、へ七竜の王であるテオフィルスに口答えするのは、もつと勇氣がいる。

腹を蹴られ痛みながら、僕は訴える。

「その剣は、僕以外は扱えない！」

「だったらお前ごと、さらってやる。お前も竜騎士の体型だ、鍛えれば竜騎士になれる。アルマレークの竜騎士として魔王に立ち向かう方が、より早く打ち破れる。お前にとつても効率的だろう？」

彼の自分勝手な意見に、僕は憤った。

「そうして、王国を自分の物にするつもりか！ 僕は王太子として、そんな事は絶対に許さない！」

「ふんつ、エステラーン王国等いらん！ 俺は空に屍食鬼がいる事が許せないだけだ。アルマレーク防衛のために、屍食鬼と戦った竜騎士が何人死んだか知っているのか？ エステラーン王国だけの問題じゃないと、なぜ判らない！」

セルジン王の対応への怒りを、ぶつけるように言い放つ。

傷だらけの痛みに堪え、彼は剣を僕に突き付けた。

「一緒に来てもらおう。この宝剣を取り戻したければ、俺に従え！」

生れながらの執政者の傲慢さで、見下すように命じた。

僕はその剣を手で振り払い、怒りを込めて脅した。

「僕を王国から連れ去れば、魔王はアルマレークへ向かうぞ。その宝剣を、喉から手が出るほど欲しがっているんだ。地の果てまでも、追いかけてくるぞ！」

「……」

テオフィルスは一瞬躊躇ちゆうちゆうした。

先程、宝剣の魔力を見せつけられたばかりで、王太子の言葉には説得力がある。

魔王がこの剣を恐れ封じたがるのは当然、そしてこの剣を扱える者を抹殺したいと思うだろう。

マシーナが恐る恐る進言する。

「若君、悪い事は言わない……、これ以上、エステラーン王国に関わらない方がいい。」

我々の目的はエドウィン様を捜し出す事で、アルマレークに魔王を呼び込む事ではないはず」

「そんな事は、判っている」

彼はまるで評価でも下すように、僕をじつと見詰めている。

戦いで服がボロボロになったのは僕も同じで、女だと知られる可能性に緊張する。

「お前が、唯一の希望か？」

「え？」

意外な言葉に驚いていると、彼は蹲る僕に合わせて膝を折り、剣を置いて顔を覗き込む。

「魔王を打ち破れるのは、お前とこの剣だけなのか？」

真実を見極めるように問質す。

彼の中で何かが変化してきている事を感じ取り、僕は意外に思った。

この男<sup>ひと</sup>、本気で魔王を倒したいんだ。

僕は蹴られて痛む腹を押さえながら立ち上がり、頷き答えた。

「そうだよ！ 僕は《ソムレキアの宝剣》を持って王都ブライデインへ行き、魔王を打ち

破るために存在している！ ……そのために、生まれてきた」

正確には生まれ変わったのだろう。

王の子オーリンが、僕の命を生まれ変わらせた。

オリアンナではなく、オーリンとして暗黒を打ち破るために。

そしてセルジン王を助け出すために生きる。

テオフィルスは領き立ち上がり、自分の剣を鞘に収め、宝剣を返しながら薄笑いを浮かべて言った。

「判った。ではその旅に、俺も同行しよう」

「……はあ？」

宝剣を手にした僕と、マシーナ、トムニは絶句した。

「君には処刑命令が出ているって、言っただろう！ 行軍参加以前の問題だ！」

からかわれている気がして、僕は憤りながら否定する。

「若君、冗談じゃありません！ 何かあったら、父君にどう説明すればいいんですか？

だいたいこれだけの罪を犯して、国王が許すと思えますか？ 絶対に反対です！」

「お前とトムニ爺は帰れ！ 俺一人で行く」

「若君！」

マシーナは僕の側を離れ、彼に詰め寄る。

「もう決めたんだ。こんなひ弱な王太子に、自分達の未来を預けるくらいなら、俺がブライデインへ、こいつを送り届ける！ それにエドウインは、ブライデインの《聖なる泉》にいるかもしれない。丁度いいじゃないか、彼と指輪も見つけられる。帰って父にそう伝えろ」

「絶対に、駄目です！」

父の居所を知られている事に愕然としながらも、マシーナが離れた事で逃げるチャンスが出来た。

テオフィルスにこれ以上付きまとわれないためには、逃げるしかない。

僕は館の入口に向かって走る。

彼がそれに気付き、僕を捕らえようと走り出す。

「待て！ マシーナ、追え！」

負傷しているテオフィルスは、素早く動けない。

マシーナにもう少しで追いつかれそうになったところで、僕の手がドアに触れる。すると……、

バン！

という大きな炸裂音がして、扉が勢いよく開いた。

セルジン王の結界が破れたのだ。



テオフィルスは即座に、撤退を命じる。

「お前達は、逃げる！ 王の結界が破られた、国王軍が来るぞ！ リンクル、俺の傷を癒せ！」

彼の竜の指輪から光が溢れ出し、全身を包んだ。

テオフィルスは竜の魔法を使えるようになったのだ。

僕は急いで、館の外へ出る。

マシーナは素早くテオフィルスの腕を引つ張り、引き摺りながら走り出す。

「離せ！ 俺は残る。お前達だけ、逃げる！」

「そんな事をしたら、私がお館様に殺されますよ！ だいたい今度こそ処刑されます。

自分が何をしたらか、解っていますか？ 逃げるんですよ！」

次の瞬間、数か所の出入口から国王軍が堰を切ったようになだれ込む。

無数の松明の灯りで、館内部が急に明るくなった。

「誘拐犯を捕えよ！ 抵抗する者は、討つて構わん！」

待ち構えていた王の近衛騎士隊が館に入り、兵達の指揮を取る。

竜の魔法で、彼等は逃げ果せるだろう。

国へ父エドウィンの情報を持ち帰られるが、彼等に成す術はない。

屍食鬼に覆われたエステラーン王国の奥深くへ、入り込むのは至難の業だ。

「ご無事で何より、オーリン様」

トキ・メリマンが《王族》に対する礼を取り、僕に近付いた。

心に引つかかる疑念を、僕は彼にぶつける。

「この罠を張ったのは、陛下？ 護衛の数を減らした？」

「御意。陛下のご指示は、的確にアルマレーク人を討つ事にあります」

大勢の部下達の手前、彼の口調が《王族》に対するものになっている。

「城内で彼を捕える事が難しかったため、結界に閉じ込める策です。護衛は殿下の部屋の隠し部屋で、待機しておりました」

「僕も彼を巻き込んだから、覚悟の上だったけど。……隠し部屋？ つまり、あの部屋は

監視されているって事？」

「《王族》の部屋は、警護のため全てそのように」

「……………」

少し怒った調子でトキを睨み付ける。

近衛騎士隊長は無表情に胸に手を当て、頭を下げた。

僕はげんなりしながら、トキの元を離れた。

多くの松明が焚かれ、外は明るい。

物々しい数の国王軍とレント騎士隊が集結している。

夜の冷たい風に、松明のきな臭さが混じる。

「オリアンナ！」

夜目にも判るほど、青ざめた顔のエランが立っていた。

彼は僕の腕を掴み、館から少し離れた場所まで無言で連れ出す。

鬱蒼とした木々に囲まれて松明の灯りに浮かび上がる父の館は、その幽霊屋敷ぶりを際立たせている。

不意にエランに抱きしめられ、その腕の力に息を詰まらせる。

心配していたのを察して、僕は優しく言った。

「……エラン、離してくれ。苦しいよ」

「アルマレークに、連れて行かれたかと思った。気を失っている間に、君がいなくなっていて……」

腕の力を緩めた彼の顔が、苦悩に歪んでいる。

「なんとか、やり過ぎしたよ。君こそ、大丈夫か？ あの魔法使いに、眠らされていたんだと思うけど」

「僕は大丈夫だよ。オリアンナ、守れなくて、ごめん」

エランの腕の中で、身体が震え始める。

テオフィルスの襲撃、父の館での《王族狩り》の再体験。どれも間一髪のところを何とか切り抜けた。

心の張り詰めた糸が緩むように、目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「……怖かった」

「うん」

エランが再び優しく抱きしめる。

兄弟のように、幼馴染のように、幼い恋人のように。

王に即そくされる王配候補の事は心から締め出し、エランの腕の中でいつもの自分に戻る。

涙は次々溢れ、心に受けた沢山の傷を洗い流すように泣き続けた。

「僕が守るよ、この先ずっと……、オリアンナ」

## 第二十二話 レント城塞の危機（新）

エランの腕の中で泣き続け、不安と恐怖を心から追い出した頃、彼の背に回した手に宝剣を握りしめている事に気付く。

運命を切り開く《ソムレキアの宝剣》は今、僕の手の中にある。

セルジン王が描く戦略図に、ようやく参加出来るのだと感じ冷静さが戻る。

「エラン……、僕は陛下を助きたい」

「うん、解ってる。王配候補を決める気は無いんだろ？ アレインさんから聞いたよ」

「会ったんだ」

「うん、握手した。大将だって、ちよつと怖そうな人だね」

彼は、まるで気にしていないように笑った。

「陛下を助けたいのなら、協力するよ。先の事なんて分からないんだからさ」

「……うん、ありがとう。ごめんね、エラン」

「謝らなくていいよ。僕は成人したら、君に求婚するつもりだから」

「え？」

僕は彼の腕の中から、警戒するように飛び退いた。

彼はにやにや笑いながら、偉そうに腕組みをする。

「王配候補の話が無くて、元々そうするつもりだったよ。僕は君が好きなんだから」  
僕は呆然としながら、彼を睨み付ける。

エランは僕の親友で、幼馴染みで、お互いの理解者だから、解っていると思っていた。  
それが、今の一言で崩れたのだ。

「……………僕は、陛下の婚約者だよ」

「知ってる。でも、婚約破棄された。それに陛下は影だよ、君には不釣合いだ」

その言葉に、僕は腹を立てた。

一番言われたくない言葉を、一番親しい相手に言われたのだ。

僕の目から、涙が再び溢れ出した。

「だから、陛下を人に戻そうと、必死になっているんじゃないか！」

「そうだよ、だから君に協力するって言っているんだ。相手が影じゃ、僕にとっても戦い  
ようがない。陛下には対等に、人に戻ってもらおう」

「……………え？」

国王陛下相手に、公明正大なあまりにもエランらしい言葉で、僕の怒りは拍子抜けし  
たように拭い去られた。

彼が握手を求めて手を差し出し、毒気を抜かれた僕は涙を拭い、首を捻りながら握手

した。

エランはやはり、ちよつと変わっている。

喧嘩を回避出来たところで、トキが割って入った。

「殿下、国王陛下はどちらに？」

父の館にセルジン王の姿が無かったため、トキは急ぎ確認をしに来た。

国王陛下の言葉が出た瞬間、脳裏に消えゆく王の姿がまざまざと蘇り、不安が一気に押し寄せて来る。

「トキさん、陛下は……、陛下は宝剣の光を浴びて、消えてしまった」

「宝剣？」

彼は驚き、僕が手に持つ《ソムレキアの宝剣》を注視した。

時期が来れば必ず出現するという王の言葉通り、魔王を打ち破る武器が出現したのだ。

王都ブライデインへ旅立つ時が来た。

十五年の悲願を達成する切り札が、魔王に渡ることなく持ち主の手中にある。

トキは微笑み、満足そうに頷いた。

「では、陛下は数日でお戻りになる。今までも陛下の影が消えた事は何度もあつたが、ドウラス殿下が亡くなられた後は、国王軍は士気を欠いた状況で戦う事になり、我々は

大変な状況に陥っていた。でも、今は殿下がいる。《王族》がいるだけで我々の士気が高まる。陛下が戻るまで、殿下が国王軍を指揮し、私達がサポートする。よろしいかな？」

《王族》の存在は、エステラーンの国民にとって必要不可欠だ。

《王族》がいるだけで、兵の士気が高まり戦いを有利に導く。

今の状況で成人したばかりの僕が、王の代わりを務める事になる。

「……本当に陛下は、数日で戻ってくるの？」

「戻ってくる。今までも、陛下は必ず戻られた」

不安と希望が、同時に湧いてくる。

王が戻るまで、僕が出来る限りの役目を果たせばいい。

自然と顔が緊張に引き締まる。

「判った。陛下が戻られるまで、サポートを頼みます！ 出来れば、すぐにでもレント領

を離れたい。ここを戦場に、したくない」

「では、出来るだけ早く出立の……！」

トキの返事に重なるように、北東方向から魔物の来襲を知らせる緊急ラツパが遠く聞こえた。

国王軍から発せられたもので、城壁の外に駐留する兵が、魔物に接触した合図だ。

次に第三城壁からもレント領のラツパが吹き鳴らされ、間を置かず城下街にある鐘楼



が、緊急事態を知らせる速さで打ち鳴らされる。

レント領民達は一瞬で事態を悟り、飛び起きる。

レント城塞都市の一番外側を守る第三城壁には、長年の魔物との戦いで出来たひび割れ箇所がある。

そこに魔物が集中して押し寄せれば、簡単に城壁は崩されレント領は窮地に追い込まれるだろう。

それを実証するように地を揺るがす大きな振動が、城塞中に鈍く響き渡った。

大地が揺れ、何かが崩れる轟音が、嫌な予感を連想させる。

僕とトキは顔を見合わせた。

「オーリン様、私の馬へ！」

敵の来襲を警戒し僕の腕を掴んで、父の館から離れた所に留めてある馬の元へトキは向かう。

周りにいる近衛騎士達も集合し、エランも同行した。

父の館は一度襲撃を受けている、侵入経路は空からだ。

上空からこの場所は、入りやすいのかもしれない。

館から大きな羽ばたき音と、人々の怒声が聞こえる。

三人のアルマレーク人が逃れたのだ。

テオフィルスが去った事に、僕はホツとした。

行軍の同行なんて、冗談じゃない。

「取り逃したようだな」

「奴等に父の居所を知られた。きつと王国に入り込むよ」

「奴等だけでは無理だ。王国は陛下と魔王の魔力が拮抗する形で、ブライデインを中心に水晶玉の魔力の中にある。簡単には入り込めない」

予想通りの回答に、僕は少し安心出来た。

「だったら早く第三城壁へ、演習場近くの壁に亀裂があるんだ。そこを魔物に打ち破られたら、このレント領は終わりだ」

「亀裂に関しては、守りは固めてある。オーリン様は我らと共に城へ」

僕は驚きに目を見開いた。

「でも、僕が国王軍の指揮をするって……」

「《王族》は大局の指揮をし、細かい指揮は各将が出す。オーリン様は騎士見習いの身だ、城を守るのが務めだから、城へ戻る」

皆が戦っている中、僕だけ安全な場所です不安を抱えて待つという事だ。

たとえ《王族》でなくとも、騎士見習いは戦場に立つ事は出来ない。

戦えるのはエランのような従騎士になってからだ。

トキの言う通り、騎士見習いは城の人々を守る任務に就くべきだ。

何の為の《ソムレキアの宝剣》なんだ？

僕の修行不足のせいで、肝心な時に役に立てる事が出来ないなんて……。

宝剣を握りしめ、歯噛みし俯いた。

「判った、城に……！」

突然、大きな羽ばたき音と共に、上から突風が吹きつけてきた。

目を庇いながら見上げると、何かが茂みを押しつけて舞い降りようとしている。

トキは僕を庇いながら、大声で叫ぶ。

「敵襲！ 近衛騎士隊、守護の陣形を取り、全力でオーリン様を守れ！ 射手、上空の魔

物を射て！」

近衛騎士達は皆に伝わるように命令を叫びながら剣を抜き、弓兵は上空の魔物に向け

矢を放つ。

月の薄明かりの中、木々をなぎ倒し、魔物がその黒い姿を現し舞い降りる。

大きな翼を広げ、人々を威嚇する。

硬い鱗は矢を跳ね返し、凶暴な口は唸り声を発して人々に牙を剥きながら熱風を吹き

付ける。

口の奥には炎を湛え、赤暗く揺らめく。

暗い分恐怖感がいや増す、七竜リンクルの姿だ。

「あれはアルマレークの竜だ、火を吹くぞ！」

「攻撃止め、全員撤退！」

下手に攻撃すれば、こんな至近距離では全員が焼け死ぬ。

火を避けられる遮蔽物から攻撃する方が得策だ。

トキが走り出し後を必死に付いて行きながら、恐怖心から竜を振り返らずにはいられなかった。

なぜ、戻ってきた？

追い払われた腹いせに、攻撃するつもりか？

テオフィルスは竜から飛び降り、松明の灯りの元に姿を現し、低い大声で呼びかけた。

「待て！ 聞け、王太子。屍食鬼の大群が、レント領上空に近付いている！」

いち早く反応したのはトキだ。

立ち止り僕を後ろに庇いながら、彼に向って叫ぶ。

「屍食鬼が上空に？ 我が国の王太子を誘拐した罪人のいう事を、信用出来ると思うのか」

テオフィルスはその言葉を無視して、僕を説得するために見つめる。

「屍食鬼を追い払う有効な手を思いついた。オーリン、お前が竜に乗ってその剣を輝か

せれば、屍食鬼がレント領に到達する前に追い払える！」

「何を言っているのか、解らんぞ！ 殿下を攫う口実だ！」

「地上の犠牲者を減らせるんだ。そう思わないか？」

竜に乗る？

馬にも乗れない僕が？

「その竜は影じゃないか！ 宝剣の光を浴びたら陛下のように消えてしまう」

「相手にするな。竜に乗る等、論外だ！ アルマレークへ連れ去られる」

トキは顔をしかめ、小声で止めた。

「領主とその後継者がなぜ竜の指輪を持ち歩くか知っているか？ 七竜と竜を呼び寄

せ、指揮するためだ」

「……」

恐怖を感じながら、彼の提案に心が動く。

八年前、屍食鬼が殺戮を繰り返した《王族狩り》の恐怖を、また繰り返す事は絶対にしたくない。

幼い僕が屍食鬼に喰われなかったのは、この宝剣の守りとセルジン王が寸前で追いついたからだ。

《ソムレキアの宝剣》——その魔力で魔王アドランとセルジン国王は、影も出せな

いほど魔力が弱まった。

魔王がレント領を襲撃するために、弱まった魔力でも屍食鬼を呼び寄せた可能性は大きい。

竜に乗るのか？

テオフィルスの言う通り、竜に乗って宝剣の魔力を使えば被害は最小限で済むかもしれない。

でも、その後無理な要求をしてくるかもしれないのだ。

僕は彼を睨み、真意を確かめる。

「君を、信用できない！」

「信用していい！ 俺達は共通の敵と戦っているんだ。アルマレークもエステラーンも、魔王のせいで窮地に陥っている」

「信用できない！」

「お前が魔王を打ち破る唯一の手段だというのなら、俺は命を懸けてお前を守る！ 俺を信じろ！」

心に冷たいものが広がる。

彼は自国のためなら、どんな事でもする人間だ。

旅の同行は僕を守るより、父を探し出す目的が垣間見える。

察したトキが、割って入る。

「どんな綺麗事を並べても、罪人である事に変わりはない！ 本当に殿下を守りたいのなら、その竜の指輪を外して、我等と同じ魔力を持たない者になつてはどうだ？ それなら、王に取り成すぞ」

「……………」

トキは冷たく微笑んだ。

テオフィルスは迷いながら指輪を触る、すると七竜リンクルが姿を消した。

## 第二十三話 王に逆らう決意（新）

「甘言に乗ってはいけません、若君！」

「お前はトム二爺を連れて逃げろ！ 呼び笛で、お前達の竜を呼び寄せるんだ」

マシーナが警告する中、テオフィルスは竜の指輪を左手中指から外し、トキの足元に放り投げた。

彼は七竜の魔法が使えなくなったのだ。

テオフィルスを庇いマシーナが前に立ち、トキに向かって剣を構える。

老トム二まで、剣を抜いた。

トキは不敵な笑みを浮かべながら、答えるように剣を構える。

「面白い。貴殿に、私の相手が務まるかな？」

「マシーナ、立ち向かうな！ お前達は逃げるんだ！」

「それを許す相手じゃないでしょう！ 若君が逃げるなら、そうしますよ」

テオフィルスは顔を顰<sup>しか</sup>めながら、トム二を守るため剣を抜いた。  
緊急事態でも争いは避けられない。

トキは僕を他の近衛騎士に預け、低い声で命じる。



「王命により、罪人とその随行者の処刑を行う！ その男は、私が殺る」

騎士達と兵は、一斉に三人のアルマレーク人に飛掛かる。

マシーナは他の騎士達を薙ぎ払い、一直線にトキに向かう。

トムニは老齢ながら元は竜騎士、武器を取りテオフィルスだけでも逃がそうとする。

トキとマシーナの剣が、激しくぶつかる。

僕は王の言葉を思い出しながら、緊急事態を知らせに戻った三人のアルマレーク人を見ている。

《信じて下さい。僕は……、あなたが好きです》

《では、私に従うのだ。あの者の処刑命令は出している。そなたはそれを止めてはならぬ。これは王命だ！》

《……………はい》

僕は陛下が好きだ。

でも……、父の国人の死なんて望んでない。

葛藤が苦しみを生む。

テオフィルスを利用してたのは僕。

父の館まで同行させ、僕の意志で知らずに彼を罠に陥らせた。こうなる事が解っていたはずなのに、なぜ竜の指輪を投げた？なぜ命を危険に晒しても、屍食鬼の襲来を知らせに戻った？

《お前は奴等に、支配されたままでいいのか？》

良いわけないだろう！

僕の足元に転がる竜の指輪を見詰めた。

これに触れば、僕が七領主家の血を引く人間と知られてしまうだろう。せつかくあんな危険を冒して別人と信じ込ませたのに、すべてが無駄に終わる。でも、彼等が殺されてしまえば、レント領を救う手段の一つが失われる。

《お前に、世界を見せてやる！》

僕は、竜に乗れるのか？

馬にも乗れないのに？

父から竜騎士の血を受け継いでいるから、もしかしたら乗れるのか、竜に？

竜に乗らなければ、屍食鬼を追い払えない！

レント領を救えないんだ！

戦うテオフィルスの真青な瞳を見つめた、父と同じ空を映した青い瞳を。

心の中でセルジン王の姿が、悲しみを浮かべ僕を見る。

王命に逆らったら、どんな目に遭うか分からない。

たとえ最後の《王族》でも、僕の事を許さないかもしれない。

完全に嫌われてしまう、そう思うと息も出来なくなる。

それでも、僕は……………。

「待て！ 戦闘を止めろ！」

鐘楼の鐘と警告のラッパが響き渡る中、甲高い声が人々の動きを止めた。

「オーリン様？」

トキがマシーナから距離を取り、不満そうに振り向き睨み付けてくる。

「彼等を今だけ協力者とする。レント領を守るために、共に屍食鬼と戦う。皆にそう伝えるんだ！」

「殿下、王命に逆らうつもりか！」

僕は青ざめながら、怖い顔をして睨むトキの説得を試みる。

「空からの協力があれば、レント領の犠牲を防げる！」

「それを陛下が望むか？ 我等だけで屍食鬼を打ち破る事は可能だ。アルマレーク人の協力など必要ない！」

「この宝剣は屍食鬼を消すんだ。これが無いと、屍食鬼は追い払えない！ それにアルマレーク人は、もう僕を誘拐したりしない。魔王を呼び寄せる事になるって、知ってしまったからね」

「……………それでも、王命は絶対だ！」

意見が噛みあわない中、誰かが叫ぶ。

「あれを見ろ、火が出ているぞ！」

兵士が指差す方向を見て、皆が驚愕した。

荒れた庭園の樹木越しに、北東の空が真っ赤に燃えている。

魔物が城壁内に侵入した可能性が強い。

「第三城壁が破られた、魔物が領内に侵入したんだ！」

レント騎士達は騒然となる。

城塞内に火の手が上がった事に耐えられなくなり、僕はトキに詰め寄る。

「トキさん、全ての責任は僕が負う、あなたに類が及ばないよう取り計らう。だから、彼に竜の指輪を返して下さい！」

「殿下、私を誰だと思ってる？ 王の近衛騎士を侮るな！ あの男は誘拐犯、王命通り処刑する！」

トキは僕を振り払い、長剣を手に今度はテオフィルスの元へ向かう。

マシーナが止めに入り再度、剣と剣が激しい音を立ててぶつかり合う。

このまま彼が殺されれば、竜の協力が得られずレント領が壊滅する。

エランが僕を抱え込むように腕を回して肩を押さえつける。

騎士達には腕を掴まれ身動きが取れない。

「止めろ、トキさん！ 離せ、離せっ！」

「あいつは敵なんだ、手を組まない方がいい！」

僕は怒りに身を振ると、エランと騎士の手を何か弾き飛ばした。

「うわっ！」

僕は彼等の手を逃れ、落ちていた竜の指輪を拾い上げて、トキの横を素早く通り過ぎる。

「オーリン様！」

戦闘に集中している者の側に寄る危険は、重々承知している。

味方の兵と騎士達の間を決死の覚悟ですり抜け、テオフィルスに近づく。

彼の劍の技量が少しでも未熟であれば、僕は斬り付けられる。

幸い彼は優秀な剣技の持ち主、戦闘中でも僕を認識して近づくのを手助けした。

僕は素早く、彼に竜の指輪を差し出す。

「早く、竜を呼べ！」

「お前……」

「早く！」

周りの騎士達は僕を引き摺り、彼から引き剥がす。

竜の指輪は、彼の前で落ちた。

暴れる僕を数名の騎士が覆い被さり取り押さえる。

まるで罪人扱いだ、王命に背いているのだから、当然の対応だ。

「レント領を、助けて……」

テオフィルスを囲む兵達は、指輪を取らせまいと必死に攻撃する。

彼は目の前に転がっている指輪まで、劍と斧の刃をすり抜け、持ち前の運動神経で身体を動かし、指輪に触れた瞬間に叫んだ。

「リンクル、出でよ！」

その瞬間、全てを吹き飛ばして竜の影が現れたのだ。

彼を阻んでいた騎士は吹き飛ばされ、僕も他の騎士達と共に吹き飛ばされた。

怒りを溜めた竜の出現に慣れているアルマレーク人だけが、身の守り方を知っている。

テオフィルスは立ち上がり、竜の指輪を左手中指に嵌めトキに向き直る。

「射手、あの男を射て！」

トキの命令が飛び、射手は即座に体勢を立て直し、狙いを定める。

次の瞬間、竜が国王軍目掛けて炎を吐いた！

国王軍の頭上すれすれに炎が伸び、皆が身を低くして避ける。

高温の熱気が皮膚を焼き、体毛の焦げる臭いが恐怖を煽る。

炎の直撃を受けた木々が燃え上がり、至近距離で受ける竜の炎の威力に、皆が度肝を抜いた。

敵に回すには、恐ろしい相手だ。

僕はトキと他の騎士達の隙を突いて、炎の中を武器も持たずにテオフィルスの元に走る。

「攻撃を止めろ！」

「こつちのセリフだ。協力を申し出ているのに、和解する気が無いだろう？ こうして  
いる間にも、屍食鬼が到着する！ 俺達はアルマレークへ帰るぞ！」

彼は怒りを漲らせて睨みつけてくる。

「待て！ 僕が協力を受け入れる。和解する！」

テオフィルスは怒りの表情のまま、僕を値踏みするように観察する。

金色の髪が炎で焼かれ縮れて、白い皮膚も赤く火傷を負っている。

誰もが身を縮める中、一人炎を恐れずここまで走り抜けたからだ。

竜の指輪を素手で持って平気でいられるのは、七領主家の血を引く者の証。

左手に魔力を感じ取れないので、エアリス姫ではない、正体不明の王太子。

「誰が何と言おうと、和解する！」

「……………お前は、どの領主家の血統だ？」

「え？」

「まあ、いい。和解に応じよう」

彼は怒りの表情を緩め、周りを見る。

「リンクル、怒りを静めろ。攻撃を止めて、火を消せ」

七竜リンクルは大きく息を吸い、国王軍に向けて吐き出す。

皆が今度こそ死を覚悟し、身を縮める。



何かが通り過ぎた後、熱気も火傷の痛みも木々の炎もまるで幻のように消えた。

人々は茫然と凶暴な竜を見る。

竜の表情など読み取れないが、その様子から攻撃は止んだのだと理解出来た。

「百年前のアルマレークに、へ七竜の王」は存在しなかった。だから魔力を持つ七竜は参戦していない。だが、今は違うぞ！」

彼はトキを睨みつけながら、低い声で静かに告げる。

「俺に攻撃する時は、七竜が怒りを持ってエステラーンへ攻め入る事を、王に伝えておけ！」

その警告を冷静に受け止め、深く溜息を吐きながらトキは剣を鞘に収めた。

これ以上の争いは王国に災厄さいやくを招く。

王命に反しても、それは避けねばならない。

トキは騎士の礼を取り、剣を自分の前の地面に置いた。

「殿下の御意思に従う」

強面なトキの顔に、心配気な表情が見て取れた。

その事に気付いた途端、僕の心にセルジン王の言葉が甦る。

《あの男が婚約者である限り、エステラーン王国はアルマレーク共和国に併合される危険がある！》

王を裏切っている事に迷いを感じる。

彼の失望した顔が目には浮かび、手で額を押さえた。

断続的に聞こえてくる破壊の振動が、心臓を苦しめるように響く。

レント領に八年前の悪夢が甦る——大勢の人間が殺され、多くの血が流れた。

母の無残な姿が目には浮かぶ。

再び魔王の剣が僕に付き下ろされた気がして、呼吸が荒くなる。

父の館を見た。

幽霊屋敷と呼ばれる館は、荒廃した姿を晒し続けている。

こんな悲劇を繰り返したくない！

たとえ陛下に嫌われても……。

王の姿が脳裏から離れず、心を苦しめる。

涙が滲む思いを堪えながら、テオフィルスを睨みつける。

「早く、竜を呼べ」

「ふん、偉そうな王太子、誰にでも命令出来ると思うな！俺は自分の意思で動く、お前

の命令は聞かない」

彼の蔑んだ青い目が、棘のように心に突き刺さる。

この男を動かすのは容易ではない、あまりの焦燥に項垂れる。

「……お願いです。竜を、呼んで下さい！」

「人にものを頼む時は、目を見るものだ」

憤りを感じて顔を上げ、彼を睨みつけた。

すると意外なほど優しい表情を浮かべて僕を見ている。

「竜を呼ぶ前に、条件がある」

やはり、そう来た……。

## 第二十四話 竜の指輪の約束（新）

僕は思いっきり嫌そうな顔をして、テオフィルスを睨み付けた。

父の居場所を知ってしまった彼は、旅の同行を願い出るだろう。

今以上に付きまとわれる。

「いくら《王族》で王太子でも、僕の意見は通らないぞ。条件は国王陛下に直接言え！」

「お前との約束が必要だ」

「約束？」

彼は左手を差し出し、左手中指にはまる指輪を見せた。

竜が絡みついたための銀色の指輪で、異様な存在感を放っている。

まるで七竜リンクルの威厳が、そのまま凝縮されたような。

「俺の竜の指輪に約束しろ。左手を置け」

「え？」

魔法にかげられるとかの、畏じやないのか？

竜の指輪の約束の意味が解らない以上、不安要素は増やしたくない。

「何の約束だ？ 場合によっては断る！」

「それじゃあ、竜は呼べないな」

主導権は彼にある。

僕は顔を顰めながら、戸惑いがちに指輪に左手を近付けた。

どこことなく熱気を感じ、躊躇っていると低く安心させる声が出た。

「竜の指輪の約束は、人間同士の約束だ。七竜の魔力は介入しないし、この約束にアルマレークは関与しない。俺個人のものだ」

「……本当に?」

彼は無表情に頷く。

僕は真青な瞳を見つめ、嘘ではない事を感じ取る。

思い切って竜の指輪に、手のひらを乗せた。

熱気を感じていたのに、触ると感触は普通の指輪だ。

どこことなく安心した。

「俺達は手を組む。お前はオリアンナ姫を捜し、俺はお前に協力する。共に約束する。お前もアルマレーク語で約束しろ、王太子なら語学堪能だろ?」

確かに語学は堪能だが、この場でオリアンナ姫の名前が出るとは思わなかった。

僕は知らない素振りを通す。

「そのオリアンナ姫って、何者だ? 知らない存在を捜す事は出来ない」

「エドウィン・ルーザ・フィンゼルの娘で、七竜が定めた俺の婚約者だ」

七竜が定めた婚約者とは、初めて聞いた。

七竜——アルマレークの神が決めたという事になる。

僕の中で、例えようのない警戒心が芽生えた。

僕は竜の指輪から、手を離す。

「婚約者？」

「そうだ。セルジン王は、オリアンナ姫は《王族狩り》で亡くなったと伝えてきたが、死んだ人間を七竜が婚約者に定めると思うか？ エアリス姫がおそらくオリアンナ姫だ」

僕は露骨に嫌そうな顔をした。

「エアリスはオリアンナ姫じゃない。陛下の未来の妃だ、君の婚約者じゃない！ 亡くなった姫君を、どう捜せて？ 約束なんて出来ない！」

「彼女は生きています。俺には解る」

テオフィルスに見詰められ、僕の鼓動はなぜか激しく高鳴る。

僕は怒った素振りです、横を向く。

「そんな約束は出来ない！」

「では、勝手に滅びろ。マシーナ、トム二爺、帰るぞ！」

彼は踵を返し、随行者達はホツとしながら、共に竜の影に向かう。

僕は拳を握りしめながら、約束を受け入れるしかない事に憤る。

「待て、約束する！」

テオフィルスはまるで楽しんでる様子で振り向いた。

左手を握りしめ、竜の指輪を僕に向けて見せびらかし要求する。

「では、竜の指輪に誓え」

ほんと、嫌な奴！

僕は渋々彼の左手に、左手を乗せ、先程の続きをアルマレーク語で口にした。

「共に約束する」

竜の指輪がまるで祝福するように光り始めた。

驚き手を離そうとしたが、彼に手首を掴まれる。

「安心しろ。七竜リンクルが約束を認めた、それだけだ」

いつも無表情なテオフィルスは、引き込まれるような程満面の笑みを浮かべた。

こんな顔をするんだと、どこことなく心を動かされながら、気が付かないふりをした。

「若君、殿下を守るって約束、それは旅に同行する意味じゃないですね？」

マシーナがわざとエステラーン語で質問する。

他のエステラーン人に、抗議してほしいからだ。

トキとエランが、共に怖い顔で睨み付けてくる。

「当然、同行する約束だ。お前達は帰って、父よろしく伝えてくれ」

「何がよろしくですか！ 私も、もちろんついて行きますとも！ 老トムニ、お館様に必ず連れ戻しますとお伝えください」

「しょうがないのお、わしが怒られ役か」

テオフィルスの旅の同行は、両国にとつて負担にしかならない。

接点を持つべきでない二人が、竜の指輪の約束という繋がりを持ってしまった。

僕とテオフィルスを引き裂くように、エランが繋いだ手を引き離す。

「お前の同行は認めない！ そんなもの、誰も望まない！」

庇うように僕の目の前にエランが立ち、まるで喧嘩を始めそうな様子に、僕は彼の腕を掴んだ。

「エラン、レント領を救うには彼等の協力が必要なんだ。解つてくれ」

テオフィルスは皮肉な笑いを浮かべる。

「なんだ、お前？ 王太子の腰巾着か？」

嘲りの言葉にエランは剣を抜あきこうとする。

その右手を僕は素早く押さえ、テオフィルスに警告した。

「口を慎め！ 問題を起おこす奴は、連れて行かないぞ！」

テオフィルスは薄笑いを浮かべながら、右手を胸に当て素直に謝る。



不服そうに睨むエランを無視して、テオフィルスの前に立つ。

「旅の同行は認める！ でも、何処の配属になるかは陛下が決める事だ。僕は関与出来ない。最前線に送られる覚悟はあるんだろうな？」

脅しとも取れる言葉に、彼は声を出して笑い始める。

「最前線？ 望む所だ。俺の大切な仲間を奪い去った屍食鬼共に、目に物見せてやる！」  
 テオフィルスは復讐の鬨志を漲らせて同行の覚悟を伝え、マシーナはがっくり項垂れ頭を抱えた。

「早く竜を呼べ、テオフィルス！」

故意に彼の名を呼び捨てにし、周りに仲間になった事を悟らせた。

彼は満足げに微笑みながら頷き、随行者達に指示を出す。

マシーナは大きな溜息を吐き、不承不承大声で警告する。

「今から竜が咆哮します。近くでまともに聞くと耳が聞こえなくなる、合図をしたら全員耳を塞いで下さい。馬にも耳栓をして逃げ出さないように、馬止めにしつかり繋いで下さい」

警告を受け、トキは大声で部下達に指示を出す。

僕が仲間と認めた以上、従わざるを得ない。

アルマレークの竜を討たぬよう、早馬を各所に出す指示もする。

周りの騎士達は迅速に指示に従い、臆病な馬達に耳栓をする。不機嫌なエランは背を向け、トキの元へ引き返そうとした。

そんな彼に追いつがるように腕を取る。

「エラン、僕を守ってくれ」

なんてわがままでと自嘲しながらも、心の不安を打ち明けられるのは彼だけだ。

竜に乗る恐怖感、そしてテオフィルスに対応する不安感に苦しむ。

不満そうなエランが言葉を呑み込むのが見て取れる。

嘲りでもいいから彼の言葉が欲しかった。

僕の腕を掴み引き寄せ、エランが耳元で囁く。

「当然、守るさ！ だから、絶対に悟られるなよ」

心配そうに顔を覗き込まれ、不安げな笑顔で頷き返した。

アルマレーク人三人で打ち合わせした後、テオフィルスは大声で竜を呼ぶ事を告げる。

「全員背を低くして、耳を塞げ！」

「リンクル、竜を呼べ！」

テオフィルスに頭を押さえられ、共に片膝を付きながらしやがみ、耳を塞ぐ。反発心

が無性に沸き起こる。

竜は大きな翼を広げ、地上から浮き上がった。

羽ばたきで巻き起こす強風が、土埃と枯れ枝を吹き飛ばし、松明の灯りを消した。

人々は目も開ける事が出来なくなり、気配と耳を塞いでも聞こえる音でこれから何が起きるかを想像し、より姿勢を低くする。

竜は思いつきり息を吸い込み……、

そして地を揺るがす大音量の雄叫びが、人々を倒す勢いで発せられた。

凄まじい咆哮を間近に浴びて吹き飛ばされ、危うく耳から手を離しそうになるのを誰かが支えた。

薄ら目を開けると、テオファイルスが抱え込むように守ってくれている。

弱い月明かりの中、彼の耳のある位置に羽のような文様飾りが髪の間から見えてい

る。  
彼がいつもしている、首飾りと同じ模様だ。

あれは、耳栓だったのか？

ぼんやりそんな事を考えている間に竜の咆哮が止み、今度は遠くから別の竜の応えが返ってくる。

七竜の影は満足そうに地上に足を着け、テオファイルスを見る。

彼が立ち上がり褒めるように竜の足を叩くと、竜は小さく炎を吐く。

それが合図でマシーナ達は人々に終了を伝え、皆は汚れを払いながら立ち上がった。吹き消された松明に、再び火が灯される。

竜の影が松明に色濃さを増し、騎士達の目に脅威となつて映る。

あんなものに攻め入られたら、王国は一溜りも無い。

皆が一様に緊張した。

中でも一番緊張しているのは僕だと思える。

竜に乗った経験等、もちろん無い。

テオフィルスの提案が一番有効に思えたから受け入れたが、竜の咆哮の激しさは予想以上だ。

竜に乗れるのか不安が大きく芽生えた頃、本物の竜がやって来た。

芽吹き始めたばかりの木々の枝をへし折り、二頭の竜がリンクルの横に舞い降りた。

その圧迫感に人々は後退り、剣に手を掛けながら警戒する。

二頭はリンクルより幾分小柄な竜だ。

一頭はまるで礼を取るように頭を下しリンクルを見上げ、もう一頭は頭こそ下げないが明らかにリンクルを恐れ、身を縮めている。

不意に竜達の影から、横柄な子供の声が出た。

「やい、テオフィルス！ こんな夜中に、呼び出しなんかすんな！ いきなり竜が叫ぶから、耳が痛くてしょうがない」

「ルギー！ 若君を呼び捨てにするなど、何度言えば分かる？ お前も竜騎士見習いになったんだ、礼儀を弁えろ！」

マシーナが身を縮める竜に向って怒鳴る。

するとその方向から、小石が投げつけられた。

慣れているのかマシーナは難なく避けたが、小石は国王軍の騎士に当たり、彼は謝る羽目になる。

テオフィルスは低い声で笑いながら、竜に向って叫ぶ。

「ルギー、降りて、こいつの横に立て」

僕の横を指した。

ルギーと呼ばれた少年は、竜から飛び降りる。

僕より明らかに年下だ。

黒い目で悪戯っぽく、好奇心剥き出しに上から下までジロジロ観察している。

「誰？ こいつ、竜騎士……、じゃないよな。俺様の子分にでもしてくれんの？」

「いいから、横に立て」

そう言つてテオフィルスは、二人を見比べる位置まで移動した。

背丈は丁度同じくらい、彼は満足げに微笑む。

「ルギー、お前の鎧をこいつに渡せ」

事の成り行きに、悪い予感を覚えた。

僕はこの場で、竜の鎧に着替えるという事なのか？

## 第二十五話 オリアンナと竜（新）

「なんだとお、冗談じゃない！俺のだよ、竜に乗れなくなる。絶対に、嫌だ！」  
今、装着している鎧を渡せと言われ、ルギーはテオフィルスに飛掛かり猛抗議する。  
テオフィルスは笑いながら、彼の振り上げた拳を軽く掴む。

「その代り、俺が十一歳の時に使っていた鎧をやる。リンクルの抜け殻で出来た一品物だ。俺が使っていたんだ、余計高値で売れるぜ」

「若君つ、何という事を！あれはアルレイド家の家宝になる代物ですよ」

「よし、乗った！約束だけ、忘れんなよ！」

そう言つてルギーは渋顔で睨みつけるマシーナをしり目に、自分の竜騎士の鎧を外し始めた。

僕はテオフィルスに、思いつきり嫌そうに尋ねる。

「まさか、それを着るのか？」

「当然だ。着ないと竜に振り落とされる。竜の脱皮した抜け殻で造られた鎧だから、背に乗つても警戒しない。堅くて軽い、矢も跳ね返す、これを碎けるのは竜の牙だけだ。今のお前には必要だろ」

「……」

この場で着替えるという事は、僕の体形を彼の目に晒す事になり、女だと知られてしまふ危険がある。

緊張で青ざめた顔色を悟られないように彼に背を向け、助けを求めてトキを見る。

「それみた事か！」と言わんばかりに、トキは視線を逸らした。

助けて……。

「早く服を脱げ、俺が装着してやる」

鎧を持ったテオフィルスが、後ろから肩を掴む。

緊張で鼓動が高まった。

性別を確かめるために、こんな手を打ってきたのだ。

彼の手を叩き落とし、僕は精一杯の虚勢を張る。

「自分で装着する！」

「それは無理だな。装備の着用は慣れた者がしないと危険だ」

そう言つて鎖帷子くさりかたびらに似た細かい薄茶色の殻が縫い合わされた上下の服を渡してくる。

「服を脱いで早く着替えろ。屍食鬼が迫っているんだ」

「《王族》の素肌を人目に晒す等、言語道断！ そんな事は許さん！」

トキが仕方なく僕を庇かばい、割つて入った。



「何、このおっさん」

「ルギー、口を慎め」

「安全のためには、胴衣の上から装備するのが通常だ」

トキが無言で睨み付ける。

説明しても聞く気の無い相手に溜息を吐いて、テオフィルスは妥協した。

「それじゃあ、王太子は服の上からの着用でいい。少し危険だが、俺が後ろから支える」

「王太子つて、こいつがあ？ むがつ……」

片言のエステラーン語しか解らないルギーでも、王太子という言葉は解ったようだ。

マシーナが口を塞ぐ、これ以上の状況悪化を防ぐため。

トキがアルマレーク人に睨みを利かせている間に、急いで渡された鎖帷子を着る。

服の上から着るには窮屈だが、仕方なく靴を脱ぎ、足を通し、頭から被る。

思った以上に軽いが、独特の臭いに顔を顰めた。

彼が察して苦笑する。

「竜の臭いだ、すぐに慣れる」

そう言つて、持っていた竜の抜け殻を加工した簡素な胸甲、背甲、肩甲と、籠手、肘

と膝当て、拍車と思える角状の物を取り付けようとすする。

触られまいと、咄嗟に身を引く。

「待て、自分でやる……」

その言葉を無視してテオフィルスは、有無を言わず腕を持ち上げ胸甲から着け始める。

緊張に冷や汗が出る。

悟られない事を祈りながら黙って耐えた。

「お前、もう少し太った方がいい。貧民街育ちのルギーと同じ細さなんて、《王族》なのに何を食べて生きてきたんだ？ レント領の食糧需給はそんなに厳しいのか？」

「違う、余計なお世話だ！ 太れない体質だから、仕方が無いだろう」

彼が鼻で笑ったように思え、緊張も相まって僕の不機嫌さが頂点に達しかけた。

太れば体形が露わになる事から、無意識に食が細くなつていったのかもしれない。

今はエランの食べる量の半分も食べられない。

竜騎士の鎧は重装甲なのに信じられないくらい軽く、手足の装備は最小限に抑えられ動きも悪くはない。

これなら、確かに竜に乗れる。

全ての装備の装着が終わり、剣の位置を教えられ、宝剣を腰の左側に吊り下げた。

これで両手の自由も利く。

「トム二爺、竜を借りる。マシンナ、お前の竜エーダで参戦しろ」

「レクーマの竜じゃが、へ七竜の王」には従うじやろう。ご随意に、若君  
テオフィルスの言葉に、二人は頷いた。

彼は先程ルギーが乗っていた竜の前に立つ。

竜が礼を取るように頭を低く下げるのを見て、満足げに頷き振り向いた。

「オーリン、来い」

呼ばれて竜に対する恐怖心を悟られまいと、勇気をかき集めた。

本当は逃げ出したいくらい竜が怖い。

ゆつくりと彼の横へ行き、緊張した面持ちで竜の前に立つ。

リンクルより小柄な竜は見知らぬ者に警戒し、威嚇するように頭を上げ、翼を広げた。

怒ってる！

一歩身を引こうとしたが、テオフィルスに強く腕を掴まれる。

「毅然としていろ、竜に侮あなどられたらダメな」

斜め上から聞こえる彼の冷静な声に、不思議と心は落ち着きを取り戻す。

恐怖心を追い出すために深呼吸をし、毅然と竜の金色の目を見つめた。

すると、竜と心が通じあうように思えてくる。

警戒していた竜の縦に細長い瞳孔は、見つめるうちに少しずつ丸みを帯び始める。

あれ……、可愛くなってきた？

心の変化を感じ取つてか、竜は増々可愛い表情を見せ始める。

今や竜の瞳孔は真ん丸になり、笑っているように見える。

僕は新しい友達と出会つたように嬉しくなつた。

そして思わず竜の口先に手を伸ばす。

「止せつ、焼かれる！」

テオフィルスは驚き、慌てて手を下ろそうとしたが竜の方が早かつた。

口と両方の鼻の穴を閉じ、籠手に鼻面をそつと付ける。

火傷をする程の温度ではなかつたが、籠手越しの右手に優しい熱をもたらした。

竜が甘えてきたのだ。

竜の鼻面を撫でながら、僕は満面の笑みで答えた。

「お前、可愛い」

テオフィルスは信じられないものを見るように、王太子を見つめた。

竜が初対面の人間に甘えているのだ、レクーマオピオンの人間でもない異国人に。

そして竜の指輪の件も含め、導き出せる答えは一つしかない。

王太子は、レクーマオピオン領主家の血を引く人間だ！

テオフィルスは高鳴る鼓動を深呼吸して抑え、冷静さを取り戻し何気無い振りを装つ

て質問する。

「その竜は、雄に見えるか？ それとも雌に見えるか？ オーリン、答えろ」

「そりや、雌に決まつてるだろ、こんなにかわいいんだから」

僕は、何も考えずに答えた。

テオフィルスは微笑む。

七竜に支配された段階で、アルマレークの竜に性別はない。

単為生殖で卵が産まれる事はあっても、どれも性別無く生まれてくる。

そして竜騎士は初めて自分の竜に出会った時、誰もが自分の性別を投影させて竜を捉える。

故にオーリンは、女という事になる！

「ああ、まったく可愛いお姫様だ」

「えっ？」

僕の竜を撫でる手が、凍り付いたように動きを止めた。

お姫様と言わなかったか？

今の受け答えの意味が解らず、何かオリアンナである事に気付かれた気がして、恐怖を覚えつつ彼を見る。

目の端に満面の笑みで僕を見つめる彼が見えたが、瞬間にいつもの無表情に戻り、冷たく言い放つ。

「いい加減、竜の鼻を撫でるのは止めろ、息が出来ない。熱を放出しないと、死ぬぞ」  
「あ……」

慌てて手を引っ込める。

竜は溜め込んだ熱を上空に吐き出し、木々の一部を燃やす。

周囲の者は驚き、マシーナと竜エーダが燃える木の枝をその強固な翼で折落とし、兵士達が火を消す。

「危うく火事になるところだ。竜に対応する時は気を付けろ、彼等は他の生き物とは違う。来い、ヘタレ小竜！」

ヘタレ小竜という呼びかけに、やはり気付かれたのだと確信し、僕は血の気が引いたように立ち尽くす。

彼は振り向き察したように、僕にだけ聞こえる小声で伝えてきた。  
「安心しろ、お前の立場は守る。早く来い、屍食鬼が来るぞ」

僕は警戒しながら、竜の真横に立つ彼に並んだ。

何がいけなかったのかまったく解らないが、気付かれた事を誰にも悟られてはいけな  
いと強く思う。

特にセルジン王にだけは、知られてはいけけないのだ。

大好きな王に嘘を吐かなければならない苦しみを思うと、なんとしてもテオフィルス  
を切り離さねばならない。

協力するのは、今だけだ！

行軍参加なんて、絶対にさせちゃいけない！

テオフィルスは僕の思考などまったく気にする様子もなく、次々指示を出す。

僕は考える間もなく、その指示を頭に叩き込む。

「耳栓は鎧の肩甲に取り付けてある、それを使え。さあ、乗れ」

彼の指示通りの場所に足を置いて、何とか竜によじ登る。

思った以上に高く、馬の倍くらいありそうだ。

胴幅も太く、馬のように跨って、扶助が出来るのか疑問に思った。

竜の鱗は堅い、鎧に拍車は着いているけど、人間が足で蹴って感じ取れないと思える。  
それに僕の体形が竜の騎乗にどう有利なのか知りたかった。

馬のキ甲に当たる部分——首と背のつなぎ目辺りと、翼の前面部分の間に、背<sup>せびれ</sup>を跨ぐ形で鞍<sup>くら</sup>が二つ取り付けられている。

斜めに竜の首に幅広の飾り帯で繋ぎ止められた鞍は、背鰭を跨ぐ形なので馬の鞍より高くあがみ、あがみ鑑が無い。

「乗れ」

先に後ろ側の鞍に跨りながら、彼が手を差し伸べる。

その手を無視して、前面の鞍にまたが跨った。

「鑑が無い。振り落とされる」

「安心しろ」

「イリ、固定！」

指示の直後、竜の鱗の間から膜状の触手が伸び、鞍から下に伸びている二人の上肢から下全体を絡め取った。

「うわあああああ——！！」

あまりの感触と恐怖から、叫び声を上げる。

「ふふふ……、初めての時は皆ここで叫ぶんだ。大丈夫、イリはお前を気に入っている、振り落としてはしないさ」

面白がるようにテオファイルスが言う。

顔を引き攣らせながら、僕は振り返る。

「イリ？」



「ああ、この竜の名だ。呼んでやれ、喜ぶ」

竜の後頭部の棘状鱗に向けて、僕は名を叫ぶ。

「イリ！」

竜イリは太く長い首を振り、嬉しそうに振り返る。

可愛い！

心の底から、そう思える。

僕の竜に対する恐怖心は、綺麗に消えていった。

## 第二十六話 空中戦と地上戦（新）

「竜騎士の体形でないと、高い鞍から膝下が出ない。触手の触る範囲が狭くて、竜に振り落とされる」

テオフィルスの言葉に、僕の足がどの位鞍から出ているのか確認し納得する。

触手はギリギリで僕の足を捕えていた。

「膝下で触手に指示を出す。竜騎士の体型に拘るのが解るだろう？」

領きながらも、鞍くらを変えれば良いのではないかとも思うが、何か変えられない理由があるのだろうか。

彼は鞍と身体を結ぶ安全帯を二人の腰にある金具に取り付けながら、気掛かりな事を警告した。

「お前はリンクルやエーダ……、マシーナの竜の事だが、あの二頭からは好かれない。イリと同じと思って近づくなよ」

「なぜ？」

微笑みながら、彼は答える。

「お前の母方の血が、レクーマオピオンの流れだからだ。レクーマの竜は領内の人間し

か乗せない。他の領地の人間は敵だ。リンクルとエーダは、リンクルクラン領の人間以外は敵と思っている」

敵という言葉が、竜の獯猛さを伺わせた。

それ以上に、彼の言葉が引つかかる。

オリアンナだと気付いているはずなのに、オーリンの設定で注意点を伝えてくる。

本当は母方ではなく、父方の血がレクーマオピオンの流れなのだ。

王太子としての立場を、本気で守ってくれる気なんだ。

安心出来ない相手なのに、少しホツとしている自分に不安を感じる。

気を許しちゃ駄目だ！

「僕が領内の血を引いてなかったら、イリに振り落とされるのか？」

「その時は、俺がイリに乗せるよう命じる。俺はへ七竜の王だ、全ての竜は俺に従う」

無表情に僕を見下ろす彼に、どことなく孤独な陰りを感じる。

生まれた時から、彼はへ七竜の王として存在していたのだ。

その特別さから、彼に心を許せる存在はいたのだろうか。

セルジン王とは対照的な空気を身に纏い、人々を遠ざけているように見えた。

左手を持ち上げ、彼が叫ぶ。

「リンクル、戻れ！」

巨大な竜の影は、素早く指輪に吸い込まれる。

「耳栓をし、これを被れ。ここから先は、会話は出来ない。鞍の前面の取手に掴まれ」僕は素早く肩甲にある簡素な耳栓を耳に嵌め、渡された軽い兜を被り、面頬を下ろした。

面頬は半透明で、周りの景色が透けて見える。

そして指示通り、鞍の取手を握る。

テオフィルスが足で竜の触手を叩き、拍車をかけた。

イリは翼を大きく広げ、空に羽ばたき地上から浮き上がる。

「うわっ！」

恐怖に僕は叫びを上げる。

鞍のすぐ後ろに翼があるため、筋肉の動きが直に振動となって伝わってくる。

土煙が巻き上がり強風が上体を浮上げるが、イリの触手と安全带のお蔭で吹き飛ばされずに済んでいる。

やっぱり、怖い！

テオフィルスが包み込むように両腕を前面に伸ばし、イリの首の一番後ろにある特に長く伸びた二本の棘状鱗の先端を、まるで手綱のように掴かむ。

恐々見下ろすとトキが馬に乗り、全員に第三城壁へ向かうよう指示しているのが見え

る。

エランは高く飛び立った竜を見上げていた。

「エラン！」

僕の視線に気付いたのか、彼は手で上げ大きく城門の方向を指し、その後すぐに馬に乗りトキの後を追った。

エランが指した城門の方向を見て、心が凍り付く。

第三城壁の内側に燃え上がっていた炎が、高い第二城壁の塔——騎士隊の支部の辺りに飛び火し、勢いよく燃え上がっている。

炎は丈高く、真つ赤な魔物の舌のように暗闇を舐め照らしていた。

その炎の光に浮かび上がる、羽の生えた魔物の影！

「屍食鬼だ！ レント領に攻め入って来た！」

テオフィルスも気付き、すぐ竜への指示を変える。

初心者と国王軍に氣遣って、緩やかに竜を上昇させていたが、すぐに急上昇させる。慣れぬ感覚に恐怖で冷や汗が出たが、そんな事を構っている場合では無い。

木々の枝を突き破り、マシーナの竜共々レント領の上空に躍り出る。

澄み渡る月明かりの夜空に、異様な光景が目飛び込んできた。

王都ブライデインを中心にエステラーン上空に広がる暗黒から、細長い隊列が蛇行し

ながらレント領に延びている。

暗黒の隊列は細い先端がようやくレント上空に辿り着いたばかりで、後方に行く程その尾は太さを増す。

それら全て屍食鬼なのだ。

あんな数の屍食鬼がレント城塞に押し寄せれば、間違いなく壊滅する。

恐怖と憤りが同時に湧き起る。

「冗談じゃない！」

鞍の取手から右手を離し宝剣を抜こうとした時、その手は後ろから掴まれた。

振り返ると、テオフィルスが首を振っている。

「まだだ！」

掴んだ右手を離し、その手で前方上空を指した。

明るい月光を背景に、何かがちらに向けて飛んでくる。

屍食鬼と思い身構えた時、イリが不思議な声を上げた。

それに答える叫び声が、その方向から届く。

「竜騎士だ！」

援軍の到着に、嬉しくなった。

五騎の竜騎士が、こちらに全速で駆けつけている。

それぞれが挨拶のように、イリの横をすれすれに飛びかう。

テオフィルスは手を上げ、全ての挨拶に答えた。

そして前方の蛇行する屍食鬼の隊列を指差し、各竜騎士に手で各々の配列を指示し、再び屍食鬼の隊列を強く指差し、攻撃開始の合図を送る。

イリを含め合計七騎の竜は、それぞれの方向へ飛び、勢いよく敵に炎を放つ。

乗り手に熱を浴びせないよう、旋回する直前に横向きに炎を吐き、すぐにその場を飛び退く。

「凄いや、イリ！」

よく訓練された竜イリに、僕は嬉しさを感じる。

燃えながら墜落していく屍食鬼達。

だが敵の数は多く、切りが無い。

敵は一斉に反撃を開始する。

竜はすぐに側を離れ、別の角度から炎を吐く。

しばらくそれを繰り返していると、屍食鬼の隊列が乱れ、切れ切れに各所で固まった状態になった。

それを見届けテオフィルスは、イリを屍食鬼の大群に向けて飛ばす。

僕の右手を掴み持ち上げ、彼が宝剣を抜くように要求する。

目の前に近づくと無数の屍食鬼が、竜を覆い呑み込むように迫ってくる。それぞれの個体から黒い渦が噴き出し、僕は恐怖に身を縮める。

怖い……。

身体にぶつかってくる様子に臆した事を知り、テオフィルスはイリを反転させた。無理もない、あんな数の屍食鬼を目の前にすれば、大人でも恐怖に震える。

まして、初めて竜に乗ったばかり、まともに乗れている事さえ、奇跡に近い。せつかく散った魔物の隊列が、好機を逃した事で元に戻ろうとしている。

イリが魔物から遠ざかる。

宝剣を抜かなかった僕が、テオフィルスの目論見を失敗させた事に気付き、顔を引き攣らせながら彼を見る。

意外な事に、彼は笑っていた。

風と耳栓のせいで聞こえないが、何かを言っている。

笑うと物凄く好青年に見える、国王然とした彼より好感が持てる。  
……気にするなって事かな？

彼の笑顔に見とれながら、臆していた自分に言い聞かせる。

きつと「落ち着け、ヘタレ小童！」って言われたぞ。

しつかりするんだ。ヘタレなんて呼ばせないぐらいにしつかり。



屍食鬼の大群に対しての、恐怖心は大きい。

でもレント領を守りたい気持ちは、それ以上に強かった。

宝剣の柄に手を掛け、屍食鬼の押し寄せてくる方向を見た。

あの大群の遙か先の王城に、陛下がいる。

たった一人で全てと戦いながら、僕が来るのを待っている！

そう思った途端、宝剣が薄ら輝き始めた。

テオフィルスはその動きを察知し、邪魔にならないように右手を棘状鱗から離す。

僕は《ソムレキアの宝剣》を抜いた。

突然現れた強烈な光に、屍食鬼は悲鳴を上げた。

黒い渦に包まれた身体を、鋭い光の矢が射抜くように貫く！

屍食鬼は灰塵のように、光の中で影も残らず消失する。

イリの周りにいた屍食鬼は悉く消え去り、離れていた者は醜い悲鳴を上げながら四散した。

僕はあまりの眩しさに目を開ける事が出来ず、右手で宝剣を掲げたまま何を起こしているのか判らなかつた。

瞬時に兜の面頬を遮光用の細い隙間のあるものに切り替え、テオフィルスは辛うじてイリに指示を出す事が出来た。

イリは魔物の渦に向けて突進する。

自分の背に強烈な光が出現しても、竜は動じる事が無い。

後退していく魔物を追って、ブライデイン方向に突っ込んでいく。

テオフィルスは感動で鼓動が高まるのを感じた。

今まで屍食鬼と遭遇し戦い死んでいった多くの竜騎士達と、殺されたレクーマオピオンの高官達に見せてやりたいと思つた。

笑いながら、誰に聞かせるとなく呟く。

「最高の武器だ！ まったく、お前は凄いや、オリアンナ・ルーネ・フィンゼル」

レント領の城塞都市は城を中心に、背の高い城壁が三重に囲み人々を守る。

第一城門内は領主と高官達の住む政治の中心、第二城門内は城下街、第三城門内は農耕、酪農などの生産拠点だ。

それらを守るのは、分厚い七十基の城門塔と、鐘楼、城の尖塔含め、計九十八基の丈高い塔。

百年前、アルマレーク共和国の竜騎士を迎え撃つための設計だが、現在それらは屍食鬼を迎え撃つため、大いに役立つている。

多くの松明たいまつが掲げられる第一城壁内は、避難してきた人々でごった返していた。

それをかき分けながら、王の近衛騎士隊は馬を進める。

第一城門を出た辺りから、エランは異様な光景を目にした。

あれは、半変化？

薄明りの第二城壁内に自警団や武器を取れる者、また消防団、桶で水を運ぶ人々等が走り抜ける中、時々黒い翼を生やした者達がいるのだ。

彼等は空を飛ばず、人々に襲いかかりもしない。

最初は見間違いかと思ったが、トキの一言がそれを現実として認識させた。

「半変化はんへんげだ！ 今のうちに、翼を切り取れ。飛んで凶悪化する前に、殲滅せよ！」

やはり、そうだ。

どれだけの人が、やられたんだ？

騎乗した騎士達は一斉に剣を抜き各々が目標を定め、屍食鬼に変身する者達を切り付け始める。

エランも剣を抜き参戦しようとした時、一人が彼に向って突進してくる。醜く歪んではいるが、その顔には見覚えがあつた。

「ザーリ……う？」

ハラルドと一緒に悪さを繰り返していた、同じ学校で学んだ嫌いな男の一人だ。なぜ半変化になつて目の前にいるのか、エランは混乱した。

ザーリは憎しみをむき出しにして、彼の足に掴みかかり襲つて来た。

「離せ！」

## 第二十七話 レント城塞の戦い（新）

馬上のエランは咄嗟に鎧あぶみから片足を外し、腰を上げて半変化になったザーリの頭を蹴り、馬から遠ざける。

側に来たトキが、ザーリに何かを投げつけると、一瞬で燃え上がり跡形も無く消えた。「マールの武器は、完成したようだな。あっけなき過ぎて、つまらん！」

まるで遊んでいるように、何かの革袋を手に行っている。

エランは気分が悪くなり、顔を背けた。ザーリには嫌な思いばかりさせられてきた。大嫌いな奴の死に同情はしたくない。

それなのに……、何だろう、この不快感。

「なぜ、切らなかつた？ 顔見知りでも、屍食鬼に情けは無用だ！ 奴等に喰われたくなければな」

「……………」

トキは厳しい顔付きで、青ざめたエランの顔を睨みつける。

「短剣投げは得意か？」

「はい、得意です」

「では、これをやる。革袋を敵に投げて、この短剣もと擬きで突き刺せ。一つしか無いから、窮地の時に使えよ」

彼はそう言つて次の標的を探しながら、第二城門に向つて前進していった。

渡された革袋を手にしてエランは、ザリーの消えた跡に視線を戻し、トキの言葉を復唱した。

「屍食鬼に、情けは無用なんだ」

第二城門に近づくにつれて、半変化が数を増す。

その中にハラルドの手下が何人も含まれているのを、エランは確認した。

友人を皆、犠牲にしたのか？

そう思うと、ますます気分が悪くなる。

半変化はただ第二城門に群がり、何かを求めようように上に飛ばうとしている。

自警団が彼等に襲いかかり、城門の兵達も上から火矢で半変化を殺す。

上空には屍食鬼が飛び交い、多くの火矢が城門塔から放たれている。

人々は矢に当たる事を恐れず、果敢に目の前の敵と戦っていた。

「火を放て！ 燃やさないと、死なないぞ」

国王軍兵の叫びに従い、あちこちで火の手が上がる。

血を流し倒れる者達に足を取られながら、かつての隣人だった者が屍食鬼に変わる前に、皆が必死に半変化の殲滅せんめつを目指す。

半変化は数を減らしながらも、徐々に変化が進み屍食鬼として飛ぶ者達が現れた。

長く伸びた黒い太い首、せり出した獣じみた顎に、口から出た牙は隠す事が出来ない程、凶暴で血に飢えて見える。

耳を劈つんく奇声を発し、身体から黒い渦が沸き起こるのがエランには見える。

「国王軍に任せろ！」

屍食鬼に完全変化し飢えた獣となつて襲い来る。

屍食鬼相手に戦闘の素人が敵う訳もなく、人々は逃げ惑い騎士達が対峙する。

「火矢を放て！」

一斉に火矢が放たれ、上空の屍食鬼が燃え上がる。

長く尖った爪で急所を狙ってくる屍食鬼に、一人の騎士が慣れた剣捌けんさばきでかわしながら腹を切り裂く。

緑の粘液が飛び散るが浴びても身体に害が出ないのは、セルジン王の魔力を秘めた護符のおかげだ。

腹を裂かれ動きの鈍った屍食鬼に、瞬時に火矢が襲う。

「メリマン隊長！ 奴等、第二城門塔内に入り込むつもりです」

高所にある兵士用入り口に、屍食鬼が群がっている。

別の屍食鬼を殺したばかりのトキは、即座に大声で指示を出す。

王の近衛騎士は精鋭揃い、守るべき王がいない時は、戦場で屍食鬼の殲滅に従事する。

「持ち場を離れるな！ レント騎士隊の戦い方がある」

第二城門からラツパが鳴らされ、城門近くにいる者達が撤退する。

城門の兵士用入り口に群がる屍食鬼は数を増やし、燃え上がる炎に照らされ、そこだけ蠢く黒い染みのように見えた。

それが突如、落下し始めたのだ。

塔の頂上に設置された板囲いから、熱せられた油の入った袋が投げられ屍食鬼を直撃。

次の瞬間、近くの矢狭間から火矢が放たれる。

屍食鬼達は爆発的に燃え上がった。

目の端でそれを捕えながら、トキはエランを呼ぶ。

「半変化を何体殺した？」

何体という死体を数えるような言葉に、元人間だと思おうとエランはまた気分が悪くなる。

「三体です」



「三体か。未成年の初陣にしてはまあまあか。ここの屍食鬼も数が減ってきた。上空は、オーリン様が追い払ったんだろう」

上空に疎まぼろらに居る屍食鬼の黒い影のその上に、光り輝く何かが見えた。竜の真上が光っている。

あれが《ソムレキアの宝剣》の輝きなのだろう。

「今から第三城門内へ行くが、お前は残れ。向こうは隠れる場所が無い」

「屍食鬼なら、四体殺やりました。僕も行きます！」

どう考えても初心者扱いに、エランはムツとしながら答えた。

トキは驚き、面白がるように彼を見る。

「合計七体か。やるじゃないか、お坊ちゃんかと思っていたのに」

「十二の時から特例で魔物狩りに出ているんです。屍食鬼は魔物に見えて、半変化より殺りやすい」

エランは不敵に笑った。

第三城壁内は赤く染まっていた。

炎の赤、血の赤、そして国王軍の長衣の赤。

城門塔から第三城門内の様子を見ていた大将アレイン・グレンフィードは、不思議な光景に出くわしていた。

戦場の真ん中に戦衣を身に着けない無防備な姿で、一人の青年がポツンと立っている。

「何だ、あの若者は？」

その青年はどう見ても、自分を睨みつけている。

断続的に鳴り響く振動は元大型草食獣だった魔物オオガが、城壁の外から亀裂を破るために体当たりしている音だ。

弩弓の矢ではまるで効かず、投石器で狙いを定めて倒すが、数が多く過ぎて間に合わない。

亀裂のある城壁周りの水掘りでオオガが死んだため、死体が堀を埋め水掘りは効果を失った。

「城壁を守れ！」

亀裂は広がり始めている。

破られるのは時間の問題だ。

城壁外の兵にも死者が出て、屍食鬼が屍肉に群がっている。

屍食鬼に変化しない者を、屍肉として貪り食うのだ。

兵士達は習慣のように予め遺体に油を撒き、屍食鬼が群がったところで火矢を入り、屍食鬼ごと吊いのように遺体を焼く。

戦友が喰われる事を兵達は何より嫌い、いつの間にかそれは暗黙の約束事となった。アレインはあちこちで上がる吊いの火を冷静に見ながらも、その青年が気になって仕方が無い。

首の後ろの毛が逆立つような危機感が、魔王と対峙した時の感覚を甦らせる。

〈契約者〉か、王が不在な時に厄介だな。

今まで幾度となく、〈契約者〉に国王軍は悩まされてきた。事前にトキから王の不在と、竜を撃つなど連絡を受けている。

困難な状況でありながら、彼の顔は口角を上げ微笑む。

アレインは危機的な状況をも楽しめる、将として冷静な男だ。

「射手、あの若者を撃て」

近くにいたレント領兵士に指示を与える。

兵士は矢を番え、狙いを定めるが、戸惑い弓矢を下ろした。

「あれはハラルド様です。〴〵領主の子息……、撃てません」

他の兵達も、領主の息子を確認し動揺した。

アレインはその場を制するように、わざと大きな声を発する。

「なるほど、魔王が取りそうな手だ。奴が屍食鬼を操っているんだぞ、君はレント領が滅ぼされてもいいのか？」

兵士は青ざめた顔をハラルドに向けた。

「ハラルド・ボガードは、魔王と取引した〈契約者〉だ。魔力を使う強敵であり、屍食鬼を呼び寄せる厄介な存在だ。甘く見るな！ レント領の兵士達、騎士達、この城塞を守る事に命を懸ける！ 城門内側射手、ハラルドに掃射！」

若き国王軍の大将の命令に、レント領の兵士達は迷いを捨て一斉に矢を放つ。

〈契約者〉ハラルドは不気味に笑う。

『レント騎士隊、僕に歯向かうな！』

矢はハラルドに刺さる直前に、弾かれ地に落ちた。

それと同時に矢を射たレント騎士隊兵士の手に、目に見える黒い渦が現れる。

「モラスの騎士、防御が甘い！」

アレインの言葉に、大将付きのモラスの騎士が剣を上げ、魔力を強化し黒い渦を消した。

モラスの騎士とは魔力に対する感に優れた騎士を選びすぐり、王が鍛え上げた対魔防の戦士達だ。

敵の魔法防御の隙を突き攻撃、また敵の魔法を事前に察知し防御する。

射手達はようやくハラルドが人間ではない事を認識する。

アレインは側近に指示を出す。

「モラスの騎士第二隊と第三隊で、あの敵の頭かしらを討て！」

側近は伝令に命じ、彼等は迅速に行動した。

魔王と契約者を専門に攻撃するモラス騎士隊は、城門の歩廊ほろうで兵士達の防御を手伝いながら出番を待っていた。

「やつと来たようね、噂に聞く領主の馬鹿息子？」

「しばらく経っているから、強くなっているだろうね」

「お手並み拝見とどうか」

朱色の特徴のある服を身に着け、同じ剣を持つ彼等は、国王軍の中でも特別視されていた。

エランは王の近衛騎士達と共に、第二城門塔に入ろうとしていた。

兵士用出入口から縄梯子が下され、近衛騎士達の後に縄梯子に取り付く。

油が飛び散り火矢が飛ぶ危険な中を、数が減ったとはいえ屍食鬼を避けながら、梯子を登るのは勇気がいった。

「うわっ」

火矢を受けて墜落した屍食鬼が、彼の真下で燃え上がる。

もう少しで縄梯子の一番下に、火が燃え移りそうだ。

「大丈夫か、エラン」

「大丈夫です！」

慌てて縄梯子を上った。

高所にある兵士用出入り口は狭く、大人の男が屈んで何とか潜り込む程の幅しかない。

皆が登り終えた後、すぐに重い扉が閉められ、門が掛けられた。

ここを突破されれば、城塞防護の要の一つを失う事から、警備は嚴重だ。

戦う兵士達の間をすり抜け、階下への狭い階段を降り、城門裏側にある戸口から第三城門内へ抜けた。

この戸口も高い位置にある。

扉を細く開けた途端、屍食鬼の飛び交う姿が目に入り、皆警戒しながら地面へ飛び降りた。

トキの言った通り、第三城門内は農地で隠れる場所が少ない。

エランは飛び降りて、すぐ剣を抜いた。

第二城門内に比べて、国王軍の数が圧倒的に多い。

あちこちの板囲いから火が出て、国王軍の兵士が必死に消火している。

そして屍食鬼の数も、第三城壁内の上空を埋め尽くしているようにエランには見え  
た。

察したトキは笑いながら言う。

「まだ少ない方だ。空が見える」

言われてみれば屍食鬼の飛び交う間に、綺麗な星空が見えた。

月が先程より、ずいぶん西に移動していて夜明けが近い。

「エラン、ここは危険だ。絶対に、私から離れるな」

「はい！」

トキの頭上すれすれに屍食鬼が飛んで行く。

彼は手にした剣を立て、すぐに切りかかれる体勢で移動する。

エランと近衛騎士達も屍食鬼と交戦しながら、後に続いた。

## 第二十八話 〈ありえざる者〉

時々、ドンという酷い振動が場内に響く。

嫌な予感を抱きながら、エランは第三城門の亀裂に目を向ける。

案の定亀裂は大きく広がり、分厚い城壁の上部の石灰石は崩れ、中の混凝土コンクリートも大きくひびが見え崩れ始めていた。

城壁が倒壊しかけている。

「エラン、よそ見をするな！ 目の前の敵に、集中しろっ」

トキの叫びに彼は、目の前に屍食鬼が舞い降りた事によく気付いた。

屍食鬼は長く尖った爪を、首筋に振り下ろす。

辛うじて剣で受け流し、素早く剣を反対側へ振りきる。

屍食鬼の右腕を切り付け、反動を利用して屍食鬼の腹を貫く。

緑色の粘液を浴びながら屍食鬼から剣を抜き、動きの遅くなった敵に落ちていた火矢を投げつける。

乾燥した屍食鬼の身体は瞬く間に燃え上がり塵となって消えた。



戦いながら第三城門塔を目指すトキの後に続く。

城壁の各塔から多くの矢が飛び交い、エランは自分に当たりそうになる矢を剣で薙ぎ払いながら、徐々に城塞の正門となる第三城門塔に近づいた。

その時、爆発するような空気の振動が起こる。

前方で人が弾き飛ばされ、空を舞っている。

何だ、今の？

彼は他の近衛騎士同様、進む速度を上げる。

すると再び爆風を浴び、今度は目の前に人が弾き飛ばされ落ちてきた。

朱色の変わった服装をしている。

「モラス騎士隊だ。近くに〈契約者〉がいるー」

トキの緊迫した声に、彼は周りを見回す。

先程より屍食鬼が増えていると感じるのは気のせいか。

まるで呼び寄せられているように、屍食鬼がこちらに集まって来ている。

「間が悪いな、陛下が不在な時に……。モラスの騎士が押されている。強敵だ、近くにいるぞー！」

近衛騎士達は未成年のエランを、無意識に守る陣形を取る。

突然、どこか聞き覚えのある叫びが聞こえた。

それを合図に屍食鬼が、一斉に近衛騎士達に襲いかかる。

近衛騎士も周りにいる国王軍も必死に防戦したが、数の多い屍食鬼に押され徐々に後退した。

エランも自分に伸びてくる屍食鬼の爪に、少しずつ傷を負いながらも必死に防戦する。

「うわっ」

後ろも見ずに後退し何か足を取られ、ひっくり返ってしまふ。

助け起こそうとした近衛騎士が、屍食鬼に襲われ血を流してエランに覆い被さる。

その血肉を目掛けて、屍食鬼が集まって来る。

「エランを守れ！」

トキの指示が聞こえる。

防戦している騎士よりも屍食鬼の方が多く、倒れているエランまで辿り着く事が出来ない。

覆いかぶさる近衛騎士から身体を引き出すべく、必死に身体を振り後ろを向く。

誰かの足が見えた。

先の尖った黒い靴を履いている。

その足は思いつきり、エランの顔面を何度も蹴りつけた。

痛みと衝撃で意識を失いそうになる。

頬の何か所かと口から血を滴らせながら、彼は懸命に顔を上げその人物を確認した。黒い屍食鬼の大きな翼をゆっくり動かしながら、冷笑を浮かべたハラルドが立っていた。

『よお、無様なエラン・クリスベイン。いつもお前とオーリンを半殺しにして、苦しむ様を楽しみたいと思っていたんだ。半分願いが叶ったよ』

「ハラルド……」

何かこの状況で反撃出来る手を、必死に考えた。

不意に右手が腰に下げた革袋に当たる。

先程トキからもらった、王の薬師マールの武器だ。

『お前の次は、オーリンだ。死なせてくれと懇願したくなる程の苦しみを、味合わせてやる。あははは……』

残忍な笑いに口を歪ませながら、ハラルドはもう一度思いつきり彼の頭を蹴ろうとした。

次の瞬間、盛大な炎が湧きおこる。

間一髪で投げた革袋に、短剣が突き刺さったのだ。

その猛烈な炎熱に、仕掛けたエランも軽い火傷を負う。

すぐに炎は、跡形も無く消えた。

殺ったか……？

確認は取れないが、あれ程の炎を浴びて生きていられるとは思えなかった。

なんとか覆い被さる近衛騎士から脱出する事に集中し、周りへの警戒が疎かになる。

何かが頭に当たり再び倒された。

エランの赤い髪の間から、もつと赤い血が流れ出る。

上空からハラルドが舞い降りる。

『あんな武器で、僕を殺せるとでも思ったのか？ 〈契約者〉を甘く見るなよ』

マールの武器は、〈契約者〉には効かない。

ハラルドは彼の髪を掴み、気絶しそうな血だらけの顔を持ち上げて、楽しそうに囁いた。  
た。

『くくくく、楽に死ぬると思うなよ。お前達は、もつと苦しむんだ。お前の命は、僕の手の中で転がしてやる』

自分の何かが、ハラルドに奪い取られていったのを感じた。

『はははは、苦しめエラン。あははははは……』

薄れていく意識の中で、オリアンナ姫の姿が思い浮かんだ。

(君が……、巻き込まれなくて 良かった……た。オリ アン…… ナ……)

エランは暗黒に吞まれるように、意識を失った。

暗闇が薄らいで、星々が消えていく。

僕は竜に乗りながら、東の地平線がほんのり白み始めているのを見た。

夜明けの前兆が、空の上ではより明確に判る。

綺麗だ……。

《ソムレキアの宝剣》の輝きを止めても、屍食鬼の大群は後退したまま戻っては来なかった。

宝剣は彼等にとって、余程脅威なのだろう。

竜のイリが、残っている屍食鬼に炎を吐く。

蛇行する屍食鬼の大群を見た後では、薄暗闇の中散り散りになった屍食鬼を探するのが困難に思えるのに、竜達は躊躇なく捕える。

きつと夜目が利くのだ。

竜騎士達もそうなのか？

後ろを振り返って薄明かりの中、テオフィルスの顔を確認しようとした。

すると彼の手の指が、目の前で一点を指す。

指し示す方向を確認し、僕は息を呑んだ。

レント城塞の第三城門内に、屍食鬼が渦を巻くように集まっているのだ。

あんなに……？

あれじゃ、皆死んでしまう！

恐怖に身が固くなる。

塔のあちこちに火の手が上がり、炎の赤い光を屍食鬼の渦が黒く明滅させ覆っている。

僕は憤りを覚え、再び《ソムレキアの宝剣》を抜く。

——すると、宝剣から声が聞こえた。

『オリアンナ、《王族》の祈りだ。宝剣に強く願いながら、唱えよ「ラディウス」と……』  
「陛下？」

それは明確に、セルジン王の声だ。

強烈な光を浴び消えてしまった影である王が、宝剣を通して語りかけてくる。

『そなたの今の願いは何か、オリアンナ？』

「僕の願い……？」

願いは一つだ。

「レント領を、守りたいです！」

躊躇する暇は無い。

第三城門内で多くの人が殺されている。

僕は宝剣を高く掲げ、夢中で王の教えてくれた「祈り」を叫んだ。

「ラデイウス！」

突然、《ソムレキアの宝剣》は全てを呑み込む爆発的な光を発する。

あまりの光の渦に、僕は意識が吹き飛び何も解らなくなった。

第三城壁内の上空で、突然閃光が起こった。

屍食鬼は光に焼き尽くされ一瞬で消失し、人間は訳も判らず身を守る。

エランの髪を掴み、より強力な暗黒の魔力で、彼を染め上げようとしていたハラルドは、魔術が中途半端になった事に舌打ちしながら身を守るために消えた。

レント領を守るオリアーナ姫の意志は、光源となる《ソムレキアの宝剣》を中心に領内全体に広がる。

地上の生き物は何が起こったのか判らないまま、その光を浴びる。

城壁を打ち壊そうと体当たりしていたオオガは、凶暴な姿が一変し元の穏やかな草食獣に戻り、森へ逃げ帰った。

イリの後に続いていた六騎の竜は、竜騎士の制御を受け付けず光源から逃げ去る。一番驚愕したのは、テオフィルスだ。

突然の閃光に目も開けられず、イリは制御不能な状況で失速した。

何も見えない、竜も、人も……。

このままじゃ、墜落する！

竜の墜落に巻き込まれて、助かった竜騎士はいない。

竜に押し潰され、死ぬだけだ。

こんな状況を引き起こしたのはオリアンナ姫、止めさせようと彼女を掴んだ。

目の見えない状態で、籠手に触れたのは羽のようなもの。

何だ？

これは……、翼？

何かが、彼の手を跳ね返した。

訳が判らず、自分に魔法をかける危険を承知で、七竜リンクルに命じる。

「リンクル、魔力で俺の目を見えるようにしろ！」



竜の指輪からリンクルの魔法が、目を支配した。

——目の前に存在したのは、大きな翼だ。

それがオリアンナ姫の背から生え、全身を覆っている。

テオフィルスは翼の間に手を伸ばし、彼女の肩を掴んだ。

「もう止める！ イリが墜落する。光を止めるんだ！」

オリアンナは振り返った。

髪が黒く見えるのは、光源で影になったせいだと思つたのに、そうではない。

顔は彼女のものだが、まったくの別人だ。

髪は黒く、右の瞳は緑、左は紫。

オツドアイの瞳は、強烈な意志を持って彼に警告する。

『この娘に近づくな！ 七竜の眷属。神と竜の争いを、再び地上に引き起こしたくなければ、この娘に関わるな！』

テオフィルスの背筋を、恐怖が走った。

神威に満ちた者の肩から、すぐに手を離す。

自分は触れてはいけない者に、触れてしまったのだと気付く。

七竜リンクルの声が聞こえる。

『逃げろ！』

こんな恐怖感は初めてだ。

〈ありえざる者〉

——それはアルマレークが国になる前、山岳の民に伝わる暴れる竜と天界が争う神話。

それに巻き込まれ、大勢の人間が犠牲になった。

争いを終結させたのは、〈ありえざる者〉達と呼ばれる神でも人でもない者。

彼等が七竜と七領主を人に与え、竜は牙を抜かれたように大人しくなる。

〈ありえざる者〉達は人型ではない、唯の球体の光のほず。

なぜ彼等だと判るのか、不思議に思いながらそう確信する。

身体が震えている事を、嫌でも意識した。

「竜と俺達の身の安全を、保障してくれ。その娘には、……関わらない」

『良いだろう』

〈ありえざる者〉は微笑み、光は消えた。

突然訪れた暗闇に、テオフィルスは意識を失いそうになる。

人外の者に接触を取る事が、これほど気力も体力も消耗するのだと初めて知った。  
震えが止まらない。

目の見えないイリは飛行不能な状態で、城門外の耕作地に不時着しようとしている。  
オリアンナ姫の意識はない。

テオフィルスは複雑な思いで彼女を支えた。

やつと見つけ出した婚約者は、〈ありえざる者〉の支配下にある。

近寄っては、駄目だ！

全身が警告する。

テオフィルスは彼女を抱きしめながら、イリに命じる。

「イリ、固定解除！ 翼と尾を水平に保て。リンクル、出でよ！」

混乱するイリは、なんとか彼の要求を聞き入れた。

婚約者を抱きしめた状態で体勢を立て直し、彼はイリの身体を斜めに走り空に飛ぶ。

即座にリンクルが姿を現し彼等を一瞬受け止めたが、テオフィルスが意識を失った事でリンクルもまた消えた。

イリは斜めに地面に突入し、身体の損傷は最小限に止められた。

そして意識の無い二人の人間は、地面に墜落したにも関わらず無傷ですんだ。

〈ありえざる者〉の意志による。

——二人共、しばらく意識が戻らなかった。

## 第二十九話 大切な者（新）

その日の昼、アルマレーク共和国からリンクルクランの領主テオドールが、竜騎士を引き連れレント領に降り立った。

竜の制御を立て直し何とかアルマレークに帰り着いたマシーナを含む竜騎士達が、事の詳細を知らせたのだ。

屍食鬼との戦いに傷付いたレント領に再び緊張が走ったが、竜騎士達が一切の武器を所持していなかったため、争いが起きる事はなかった。

「我が子がご迷惑をかけた事を、お詫びに参りました」

戦いで失われた人命を悼み、荒れてしまった耕作地の足しにと、多くの物資がアルマレークから運び込まれる。

竜を使って採石場から石を運び入れ、竜騎士達が城壁の修復も手伝った。

息子が犯した王子誘拐という罪を、少しでも軽くしたい気持ちもあつたのだろう。

商才に長けたテオドールは莫大な富を有し、息子である「七竜の王」を高額な身代金を支払って引き取る。

「このお金はエステラーン王国への謝罪です。どうぞ魔王討伐にお役立て下さい。息子

には今後勝手な行動を取らせないよう、アルマレークにて嚴重に処罰致します」

アルマレークの竜騎士達が彼と共に、一斉に謝罪の姿勢を取る。

「非礼を、お詫び致します」

レント領主ハルビンは不在のセルジン王に代わり快く受け取り、感謝を述べる。

国王軍の一部には不満を漏らす声もあつたが、王の側近達は領主の意志を尊重し賛意を表した。

オリアンナ姫の存在を隠し遂せたと信じ、無用の争いは避けるべきと判断したのだ。アルマレーク人は丸一日レント領に滞在し、出来うる限りの手助けをして帰国する。テオフィルスは彼の意志とは無関係に、エステラーン王国を離れた。

〈七竜の王〉は夢を見ていた。

光り輝く翼の生えた、美しい姫君の夢……。

温かい何かが唇に触れた事で、僕は目を覚ました。

目の前にセルジン王の顔がある。

「国王……陛下……」

王の腕に抱きしめられ、身を横たえていた。

身体に力が入らず、動く事が出来ない。

あれから何日か経っているのだろう。

宝剣の光を浴びて消えたはずの、セルジン王の影が戻ってきている。

「これを飲むのだ、少し楽になる」

マールから渡された杯を、王が唇に添える。

少し甘い液体を口にし、身体の気怠さが少し改善されたが動く事は出来ない。

「危険な事を教えてしまったようだ。宝剣でも祈りが行えると知ってはいたが、これほど祈禱者を消耗させてしまうとは……。許せ、オリアンナ。この術はもう使ってはならぬ」

「……レント領は？」

「大丈夫だ、ここは屍食鬼の近づけぬ地になった。今のエステラーン王国で一番安全な土地だ、そなたのお蔭だな」

それを聞いてホツとしたと同時に、周りが見えた。

ボガード家の紋章旗と多くの盾、石柱のアルマレーク人との戦いの浮き彫り等が、こ

こが騎士の大広間だと教えてくれた。

「テオフィルスは？」

「そなたと同じだ。消耗がひどく意識の無い状態で、父君がアルマレークへ連れ帰った」  
「帰った……」

「どことなく、がっかりした。」

もうイリに乘れない……、そう思うと悲しくなった。

僕の中の竜騎士の血が、竜に乗りたがっている。

そのためには、彼が必要なのだ。

「オリアンナ、横を見るのだ」

セルジン王は暗い表情で、抱き抱えている僕の身体を横に向けさせた。

大勢の負傷した兵士、騎士達が横たわっている。

ここに運び込まれた者は、命の危険が差し迫っている者達なのだろう。

マールとその弟子達、看護にあたる召使達が忙しそうに立ち働いている。

王も《王族》の魔力を使い、人々を癒すためにいるのだと気付いた。

「横にいるのが、誰だと思う？」

横の簡易ベッドに、顔と頭、腕に包帯を巻いた人物が寝かされている。

「エランだ。私にも、意識が戻せない。このままでは、死んでしまう。そなたにも、力を



貸して欲しい」

僕は恐怖のあまり、飛び起きた。

眩暈が起き、王にしがみ付きながら、立ち上がろうと必死になる。

エランの側にいきたかった。

察した王に横抱きにされ、エランのベッドまで運ばれる。

彼の心臓の辺りに耳を当て、鼓動を確かめる。

弱弱しく、生きている。

あまりの事態に、僕は涙を流した。

「嫌だよ。目を覚ませよ、エラン。エラン！」

負傷したエランは、ピクリとも動かない。

まるで死んでいるようだ。

包帯の巻かれた顔を触り、額にくちづける。

動く気配がない。

「エラン、君のいない世界は嫌だ。戻ってくれよ！」

とめどなく涙が流れ落ちる。

その涙はエランの、包帯の巻いてない首筋に落ちた。

そつと唇にくちづける。

……彼の唇が、微かに動いた。

「エラン！ エラン、目を覚ませ！」

彼の耳元で囁く。

震える唇で、彼は答える。

「オリア……ンナ……」

エランは意識を取り戻したのだ。

僕は彼に抱き着き、泣きながら動けずにいた。

目覚めさせるために、無意識に《王族》の魔力を使ったからだ。

消耗が激しく、気を失いそうになる。

彼はゆっくり片方の腕を動かし、弱弱しく抱きしめてくる。

「エラン……」

安心感に微笑みながら、僕は意識を失った。

王はマールと顔を見合わせ頷く、後は薬師の仕事だ。

再び気を失ったオリアンナ姫を、王は優しくエランから引き離れた。

あれから、もう一か月以上経つ。

僕は〈生命の水〉の魔力のおかげで比較的早く回復出来たが、一番回復出来なかったのは、やはりエランだった。

〈契約者〉ハラルドに掛けられた呪いは、エランを蝕み、度々意識が混濁した。

黒い渦を撒き散らし、身体が屍食鬼に変化しそうになった段階で、セルジン王が呪いを見極め、彼に銀色の美しい額飾りをはめた。

それ以降、エランは徐々に回復し、今はこうして僕と一緒に騎乗訓練をし始めた。体力を元に戻さなければ、行軍参加は不可能だ。

彼の銀色の額飾りが赤い髪に映えて、まるで王子様みたいだ。

「あぶみ 鐙を付け替えるって、どうして？」

「……………魔法の鐙なんだって。初心者でも馬に乗れるって」

「うさんくさ 胡散臭いな、それ買ったのか？ 君、騙されたんじゃないの？」

「うん、そうかもしれない」

さすがにテオフィルスからもらったとは言えない。

胡散臭い贈り物を試してみる気になったのは、エランがふ臥せている間に騎乗訓練しても、どう頑張っても乗れなかったからだ。

胡散臭くても、藁わらにも糲すがるだ。

にやにや笑いながらエランが、鎧の付け替えを手伝ってくれている最中、大勢の臣下を引き連れてセルジン王が現れた。

「国王陛下」

僕達と護衛達は、国王に対する礼を取った。

第三城門内は戦いで農耕地も酪農地も壊滅状態になったが、今はすっかり整えられ新たな作付けが行われた。

第二城門の影になる場所に、レント騎士隊の演習場がある。

馬場も広く設けられているが、雑然として王が足を運ぶ場所としては相応しくない。

「陛下、どうしてこちらに……？」

「そなたの騎乗能力の確認と、処罰が決まったので知らせに来た」

「は……、はい」

僕の緊張が一気に高まった。

騎乗能力は言わずもがなの駄目さで、王命に背いた処罰まで言い渡されるのだ。

最後の《王族》だから、処刑はされな**い**と思いたい。

僕は真つ青になりながら、セルジン王を見詰めた。

「まずは、王命に背いた罰として、今ここで王配候補を決めよ。私はアレインを押すが、

そなたは誰を選ぶ？」

僕は顔を引き攣らせながら、王に抗議の視線を送った。

あの言い方では、アレインを選べという王命に近い。

僕は恐る恐る横にいるエランに視線を移した。

彼は少し肩を落として、足元を見詰めていた。

僕は無意識に肘で合図を送り、小声で囁いた。

「ねえ、約束を覚えている？」

「約束？ 陛下を助けるって事？」

「そうだよ、本気？」

「もちろん」

僕はエランに微笑み、決断した。

「陛下、僕はエラン・クリスベインを、王配候補に選びます！」

臣下達から批判的な声が上がったが、王が手を上げ黙らせた。

「ではエラン、そなたは〈契約者〉から呪いを受けているが、それを解く自信はあるか？」

エランはまっすぐセルジン王を見詰め、まるで夜の闇を打ち破るように答えた。

「もちろん、あります！」

王は微笑み、条件を付けて合意した。

「では、我等がブライデインを取り戻すまでに、そなたは呪いを解くのだ。それが叶わぬ場合は、アレインが王配候補となる。良いな」

「はいー」

僕は彼の手を強く握りしめた。

呪いを解く方法は唯一つ、掛けた術者を掛けられた者が殺す事だ。

ハラルドをエランが殺さない限り、呪いは残る。

エランはやり遂げる。

必ず、呪いを解く。

僕は彼の手を、離さない。

そんな僕の気を逸らすように、王が次の難問の答えを求めてくる。

「良いだろう。ではオリアンナ、馬に乗って走らせてみよ。出来ない場合は、馬車を用意する」

僕は顔を歪ませながら頷き、エランの手を離し、先ほど魔法の鎧に付け替えた馬の元へ行く。

戦馬は大きく、逞しく、気性が荒い。

細い僕をあつという間に振り落し、馬に馬鹿にされる経験を何度もしてきた。

正直に言う、馬を操る自信はまったく無い。

でも、一応騎士を目指している身で馬車に乗るのは、余りにもかっこ悪い。エランが僕についてくる。

「落ち着けよ、この馬を友達だと思うんだ」

簡単に言うけど、僕には無理難題だ。

緊張のあまり、鼓動が速くなり、手が汗ばむ。

不意にテオフィルスの言葉を思い出した。

《魔法の鎧だ。これがあれば、どんな馬でも乗りこなせる》

本当に乗りこなせるのか？

《お前は竜騎士だ、いずれ竜の呼び声が聞こえるだろう。その時まで、せめて馬に乗れるようになっておけ》

イリに乗った時の記憶が、鮮明に甦る。

かわいい、イリ。

もう一度、竜に乗りたい。

そう思うと自然に手が、馬の手綱と鞍を掴んだ。

鎧に足を掛け、身体を馬上に持ち上げる。

不思議な事に、羽の生えたように身体が軽く感じる。

今までになく、落ち着いて馬に指示を出せた。

馬はゆつくりと歩き始め、エランと一緒に自分の馬で並走する。

馬場を一周し、少し速度を上げて二周しても、振落される事は無かった。

魔法の鎧だ！

僕の心が歓喜に満ちる。

臣下達が安堵あんどの溜め息を漏らし、王が頷く。

「馬車は必要ない。では、王都に向け出発の準備を始めよ」



## 番外編 魔物狩り前夜

「ねえ、もぐり込めないかな、エラン」

ボソリと可愛い声が言う。

疲れ切った僕は返事をするのも億劫で、横も見ずに否定した。

「込めない！」

目の前のスープに顔を突っ込んでこのまま寝てしまいたい、そんな誘惑に駆られる。

今日のロイ・ベルン指揮長官の従騎士に対する訓練は、とてもキツかった。

月に一度、騎士隊で行われる魔物狩りの前日は、地獄の一日と言われている。

猛特訓を何とか乗り切り、明日は本番の魔物狩りだ。

寝過ごしして遅刻したら、懲罰を受ける事になる。

その事を考えると憂鬱になり、早く横になって寝たい、ただそれだけを願って、食事をしている。

肉を切るナイフを手にしたつもりが、スプーンで肉を切っていた……、切れる訳がない。

もはや何を食べているか、判らない。

「なんで？ エランだって見習い騎士の時にもぐり込んだじゃないか。僕だって参加したいよ、魔物狩り！」

オリアンナがワクワクと目を輝かせているのを無視しながら、大きな溜息を吐く。

毎月魔物狩りが近づくと、彼女は騒ぎ始める。

「エランがもぐり込めたのに、なぜ僕はダメなんだ？」

毎度お馴染みの質問。

それに対する答えも、毎回同じだ。

それなのに、聞き入れない。

トルエルド公爵家に仕える大勢の召使達がいる広間で、全員での食事は楽しい……、

ただし元気な時は。

突然の来訪を嫌な予感と共に受け入れた僕は、脳天気に機嫌の良い彼女を、今すぐ館

から追い出したい衝動に駆られた。

魔物狩りの凄まじさを、知らないのだ。

「あの時はもぐり込んだんじゃない、ベルン長官に特別に許可されたんだ。君は騎乗が

下手だから許可は出ないよ、オーリン」

疲れて機嫌の悪い僕は、遠慮なく欠点を指摘する。

彼女は動じる事無く、にっこり笑った。

「へへへ……、これ、義父上ちちうえからもらったんだ。後はエランに頼めだって」

義父上と聞いて僕は眉を吊り上げ、彼女の手にした書類を引っ手繰った。

第三城門の通行許可証！

養父である領主ハルビインが、魔物狩りへの参加を認めたのだ。

僕の書類を持つ手がワナワナと震え、許可証を握りつぶす。

オリアーナを巡って事有る毎に対立してしまう、トルエルド公爵クリスベイン家とレント領辺境伯ボガード家。

無理も無いと、平常時の僕だっと思ったら思う。

領地内に目の上のたんこぶのように、大貴族の後継者が館を構えているのだから。

だが、今の僕には余裕がない。

食卓の椅子を蹴飛ばして立ち上がり、大声で領主に対する怒りを叫ぶ。

「正気か、あのバカ領主！ どこまで、オーリンに甘いんだっ。僕に責任転嫁するなっ  
！」

「エラン様！」

家令デインの叱責が飛んだ。

「やあ、クリスベイン。来ると思っていたよ」

豪華な書齋に、涼しい顔をした領主ハルビインが立っていた。

僕は怒りで顔が真っ赤になる。

ラフな絹の半ズボンに上半身は胸毛が見えるほどラフに上着をひっかけた領主は、明らかに寝ていたのだ。

眠くて仕方ない僕が、未成年夜間外出禁止にもかかわらず、無理してここまで来ているというのに。

「来ると思っていたんなら、寝るな！」と言いたい。

「なんでオリアンナに、通行許可証を出したんだ！ 魔物狩りに参加させたいのかっ」

不機嫌な僕は、自然と語尾が荒くなる。

領主は余裕でにつこり笑いながら、軽く言った。

「仕様がないうだろう、通行許可証を出さないとすぐに城出するって言うんだ。最近、私や妻の言う事なんか聞いてくれないんだよ、いわゆる反抗期って奴だね。女の子は、難しいよ。ホント……」

困った風を装いながらも上機嫌の領主は、僕の肩にポンと右手を置いた。

「本気で城出されても行く先はどうせトルエルド公爵家だろう？ 君に止めてもらおうのが、一番だと思ったんだよ」

領主は口角を吊り上げたが、目はどう見ても笑っていない。

僕は顔をしかめて、睨みつけた。

「甘いんだよ！ 厄介事は僕に回せば、解決すると思ってるんだ。明日の朝、魔物狩りが始まって、僕は知らないよ！ オリアンナは、参加する気にいるんだ」

「あきらめさせればいいじゃないか、夜の内に。これは、君にしか出来ないよ、クリスベイン。共同戦線を張ろうじゃないか、対オリアンナ反抗期戦のな。」

そう言つて領主は「夜間演習場使用許可証」を、僕の目の前に差し出し微笑む。

僕は顔を引き攣らせて叫んだ。

「僕の寝る時間を、奪う気か？」

「オリアンナ姫が魔物に殺されるのと、どっちが大事だ？」

ひどい領主だ。

いつかあいつの所業の全てを、国王陛下に訴えて裁いてもらおう。

未成年者を夜に働かせて、自分は今頃高いびきで寝ているんだ。

そう思うと城に向つて石でも投げたくなってきた。

もつとも投げても届かない、ここは第三城壁内にある演習場だから。

眠いと訴えるオリアンナを引きずって、ついでに僕達の護衛六人も引き連れて、領主命令でこの演習場にやって来た。

事前に連絡を受けていた夜警たちは、より嚴重に見張りを強化している。

「今から、魔物狩りを再現する」

多くの松明で明るく照らされた演習場の片隅で、僕は怒ったように宣言する。

「え〜っ、明日魔物狩りするから、今やらなくてもいいよ。僕、眠いよ」

眠そうな彼女は、抱きしめたくなくなるくらい可愛い。

思わず手を伸ばしそうになるが、グツと堪えた。

心を鬼にして従騎士の鬼教官を演じるのだ。

そうでなければ明日の魔物狩りで、狩られるのは僕達になってしまう。

早く終わらせた。

「眠いのは、僕の方だ！ いいから今すぐ馬に乗って、全力で走れ。僕は魔物と同じ速度で、君を追う。追いつかれたら、魔物狩り参加はあきらめろ！」

「え〜、なんでエランが魔物なの？ エランはエランじゃないか、魔物に見えないよ」

「何でもいいから、僕を魔物と思つて逃げるんだ！ 魔物の走る速度を体感しておかないと、明日の魔物狩りで君は死ぬよ」

オリアンナは頬を膨らまして、ブツブツ文句を言いながら馬の横に立つ。

そのまま、しばらく動かず、鞍に手を掛ける様子もない。

「なんで乗らないんだ？ まさか…、怖いのか？」

先に騎乗した僕は、不思議に思って問いかける。

「だって、誰も補助してくれないじゃないか。僕、一人で馬に乗れないんだ」  
耳を疑った。

一人で馬に乗れない？

見習い騎士になる前、一人で台を使って乗れてたじゃないか。

今は身長も伸びて、台も必要ないはずだ。

「一緒に常歩なみあしの練習をしただろ、どうして……？」

「父上に禁止されたんだ、だいぶ前に。乗馬と下馬は、一人じゃ危ないって」  
不服そうに訴える。

「僕だって、このままじゃいけないって思ってるんだ。だから魔物狩りに参加したい。馬ぐらい、一人で乗りたいんだ！」

あのバカ領主っ！

過保護も、大概にしろっつ！

胸の奥底で憤りが、激しく沸き起こる。

彼女は単なる我儘から魔物狩りに参加希望した訳じゃない。

過保護になる周りと、距離を取りたいだけだ。

自分で出来る事を、自分の手でつかむために。

「判ったよ。じゃあ、左手で両手綱とたてがみを持って、右手で鐙を持って、左足を鐙に掛けるんだ。やってみなよ、覚えてるはずだよ」

僕は下馬してオリアンナの側に立つ、落ちた時に受け止めるためだ。

彼女は言われた通りやってみようとする。

意外と身体は覚えているものだ。

「そっだよ、右手で鞍を掴んで、勢いよく身体を持ち上げるんだ」

うまくいかない。

「勢いが足りないんだよ。鐙あぶみを少し長くして、後で調整すればいいから。今より乗りやすくなるよ」

僕は助言しても手助けはしない、やるのは彼女だ。

文句も言わず、オリアンナは指示に従う。

何回かの失敗の後、ようやく何とか乗馬出来た。

達成感で笑顔になる、その姿が僕の心に響く。

「よし、次は常歩。馬場を一周してみよう」

馬場といっても演習場の狭い範囲の円周だ、こんなものは簡単と思いきや、彼女の馬



は速歩で真直ぐ走り始める。

「なんで速歩はやあしになるんだよ。常歩だよ！」

「知らないよ！ わああああ、助けて——っ」

慌てて馬に飛び乗り、並走して彼女の馬を止めた。

下手だとは思っていたが、ここまでひどいとは……。

あまりの前途多難さに眩暈がした。

今日から毎日特訓だ、もうバカ領主家に任せておけない。

何度かそんな事を繰り返すうちに、白々と夜が明けてきた。

結局、完徹……。

世の中の明るさが目に染みて、涙が出てくる。

もう魔物狩りが始まる。

こんな状態で乗り越えられるほど、魔物狩りは甘くない。

僕の顔が、げっそりやつれている気がした。

「もういいよ……。僕は魔物狩りに、出ない。もう、寝る」

オリアンナが音ねを上げて、その場で寝ころび寝てしまう。

その言葉、もつと早く言え。

僕は彼女から第三城門通行許可証を奪い取り、ビリビリに破いて……、ぶっ倒れた。

——領主の声が聞こえた。

「甘いのは私ではなく君だよ、クリスベイン」

懲罰部屋の中で、扉を背に僕は真つ青になって固まった。

部屋に一人の男が立っている。

彼の名は、キース・オルトス。

一部変わった嗜好の者達から大人気の男色家で、地獄の拷問官の異名を持つ。

本当の拷問官ではない、彼は立派なレント領の騎士、第二城門守備隊長だ。

その嗜好から付いた異名は騎士達を震え上がらせ、規律を犯す者の数が減った。

「エラン・クリスベインね。ロイ・ベルンから話は聞いているわ。安心しなさい、あなたは好みじゃない。私の世界に引き込んだりしないわ、ロイに嫌われたくないもの」

その言葉にホツとした。

「私の好みはオーリン様よ。でもお館様に殺されたくないから、我慢してるの。彼に関わるのは、お館様に歯向うのと同じよ。だってオーリン様、あんなに愛されているんですもの」

何が愛されてるだ！

過保護を愛と勘違いするな！

そう思いながらもオーリンの名前が出た事で、別の緊張を覚えた。

彼はオーリンが女だと、知らないはずだ。

「あなたもバカね、お館様に張り合おうなんて十年早いわ。このレント領で一番恐ろしいのはお館様よ。最高権力者に逆らってどうするの？ もつとうまく、立ち回りなさい」

別に逆らったつもりはない。

共同戦線という名の、罠にはめられただけだ。

最後まで魔物狩りに参加するつもりでいたのに、まさか寝過ごして集合時間に遅れるとは考えてなかったのだ。

懲罰の免除を取り付けなかった、僕のミスだ。

そんな事は判っている……、判ってはいるはずだが……。

キースは鞭を取り、近寄ってくる。

彼は書類に目を通しながら、意外な事を口にした。

「鞭打ち十回……？ 懲罰としてはずいぶん軽いわね。あなた、実はお館様に気に入られてるんじゃないかって？」

その言葉に、僕は切れた。

「あんな奴に、気に入られたくない！」

「ほほほ……、気に入ったわ。あなた、よく見ると好みかも。綺麗な顔をしてるわね」  
鞭の端で僕の顎を持ち上げるキースは、残忍な笑みを浮かべている。

冷や汗を流しながら、僕はこれ以上後退できないのに後退る。

「オーリン様に近づきたいの。取り次いでくれない？」

「絶対に、ダメですっ！」

「言ったでしょ、もっと要領良く立ち回りなさいって」

——鞭打ちは、なぜか十一回に増やされた。

## 番外編 初体験? (一)

トルエルド公爵家のオリアンナの部屋で、僕は盛大な溜息を吐いた。

今年になってオリアンナの、ここを訪れる回数が格段に減っていたのだ。

何か隠し事がある時はいつもそう、そのくせ困った事になると僕を頼る。

今日の久しぶりの訪問は、予測通り呆れかえる内容だった。

相談しろよ、こうなる前に！

頭を掻きながら、そう思う。

「それで、君は？ ベラ・ゼノスになんて答えた？」

尋問のように怖い顔で睨みつけると、彼女は視線を逸らしながら木馬を手で揺らす。

小さい時から僕が怒ると、木馬に乗って拗ねた。

成長して乗る事が出来なくなっても、木馬は精神的な逃げ場だから片づけられない。

いつそ片づけてしまえば、厄介事に首を突っ込まなくなれるか？

だいたい僕と領主とで甘やかしすぎなんだ。

少しは痛い目に遭ってみろ！

そう思いつつも悩んでいる彼女を見ると胸が痛み、苦しむのは僕だと思えるから始末

に負えない。

なんで女が好きなんだ？

自分は女だつて、もつと自覚しろよ！

女と付き合うな！

半ば嫉妬混じりにそう思う。

このところ倒錯傾向にあるオリアンナは、今年四人目の女と付き合っていた。

世の中的には男子で、領主の養子で、婚約者が決まつてない美男、女にとつてはまさ

に理想の王子様だ。

本物の《王族》だつて知ったら簡単には近寄れないだろうが、それは秘密。

もちろん女である事も。

彼女は引く手数多を良い事に、言い寄る女と拒否する事なく付き合う。

「君は、何なんだ？」と、時々言つてやりたくなる。

レント領の若者たちは、皆早熟だ。

幼いうちから結婚相手を親に決められているが、自分の意志は持つている。

その意志を満足させるために、余計に早熟になる。

僕にも領主が何度も結婚話を持つてきたが、公爵家を盾に幼い頃から散々跳ね除けて

きた。

もし領主の話を受け入れていたら、僕も形振り構わず誰かを求めただろうか？

例えば目の前にいる、この相手を……。

「今夜……、行くつて」

「……………あ、そつ。ま、頑張れよ」

彼女は男だ、少なくとも精神的には。

無性に腹が立ち、部屋を出ようとすると慌てて縋り付く。

「見捨てないでくれよ、エラン！ 僕に初体験の相手なんて、務まる訳ないんだから！」

「だろうな、君の股袋の中身は空っぽなんだから！ あんなイケイケのベラなんかと付き合うから、そんな目に遭うんだ！ オーリンでいられなくなってもいいのか!!」

オリアンナは、真っ赤になった。

「だって、彼女……、可愛いんだもん」

「ああ、確かに可愛い。それに騙されて泣いた従騎士が何人いると思う？ 彼女が初体験？ は！ 君、騙されてるよ。もう少し見る目を養うんだな！ ふんっ」

吐き捨てるように言つてやった。

ベラの噂は、従騎士の間では有名だ。

自分より遙か年上の婚約者が嫌いで、男漁りをしているつて噂。

それが真実かは知らないが、派手な外見に惑わされる男は多い。

「騙されてるって……、ひどい事言うなよ。彼女泣くんだよ、僕に会えて嬉しいって。僕、彼女を抱きしめたくなるんだ。こんな気持ち、初めてなんだ」

「ああっ、じゃあ、行けばいいよ。好きなんだろ、思う存分抱いてくれば？」  
睨み合う。

「……………ばれる」

「……」

イライラは、頂点に達した。

「そう思うなら、すっぽかせっ!! 二度とペラに近づくな!」

「クリスベイン。これを第二城門守備隊長に渡してきてくれ」

第一城門内にある騎士隊本部で、ロイ・ベルン指揮長官が僕に指令書を指し出した。

第二城門守備隊長と聞いて、背中に痛みの記憶が甦る。

キース・オルトスに十一回鞭打たれたのは、つい四か月前の事だ。

以来、彼を避けてきた。

もちろん痛みの記憶も鮮明だがそれ以上に、オーリンへの取り次ぎを要求する彼に、押し切られる事を恐れたからだ。



絶対、取り次がない!

冗談じゃない!

危険人物には、近づかないのが一番だ。

ベルン長官は察したように苦笑いした。

「キースも悪い奴じゃないんだ、ただ自分の嗜好に正直すぎるだけだね。俺の同期で友達だ、許してやってくれ」

ベルン長官、許すも何も彼の狙いはオーリンなんです!

……つて言っても、事態の深刻さは判らないよなあ。

オーリンがオリアンナ姫である事を知るのは、領主とその妻、側近、そして僕と極一部の身近な接触を取る者だけだ。

キースはオーリンを女と知らずに、男色嗜好の対象としようとしている。

領主の怒りを買うのも承知の上で。

「それから、この指令書はクリスベインに持たせるよう、お館様の命令でね。行つてくれ」

お館様と聞いて、これ以上無い程眉が吊り上った。

お館様———領主ハルビインの罠にはめられて、鞭打たれたのだ。

領主の僕に対する風当たりは、最近かなり酷くなつてきている。

反抗期のオリアンナを持って余し、そのストレスを僕にぶつけている。

また、陥れる気だ！

今度は何を企んでる？

顔を引き攣らせながら、指令書を洩々受け取った。

いくら公爵家の嫡男でもレント領騎士隊の従騎士でいる限り、領主ハルピインの命令は絶対だ。

騎士隊の最高司令官なのだから。

嫌でもキースに、会いに行くしかない。

僕は肩を落としながら、騎士隊本部を出た。

冬の冷たい風が、僕の頬と頭を冷やす。

長い防寒用のマントを体に巻き付け、深くフードを被る。

こんな寒い日は、外出は短くしたい。

表通りから行くと遠回りになるので、裏道から第二城門に向う事にした。

狭い道だが、人通りは少ない。

派手な建物も無いし繁華な商店も無い。

全く面白味のない通りを足早に進むと、不意に二人の若者の横を通り過ぎる。

明らかに恋人同士が、熱い口づけを交わしていた。

邪魔だ、他へ行つてやれ!

不機嫌にそう思う。

彼等から少し離れた時、声が聞こえた。

「助けて、エラン!」

聞き覚えのある声に立ち止り、ゆっくり振り返る。

ベラに抱き付かれているオリアンナが、顔を引き攣らせてジタバタもがき助けを求めていた。

両者とも服は乱れ、明らかにどちらかが襲われている。

だから、近づくなど言つたのに!

オーリンの護衛は、何をしているんだ?

二人を引き剥がすと、ベラが怒りに睨みつけてくる。

「何するの? 邪魔しないで!」

「オーリンに付きまとうのは止める! 迷惑がっているのが、判らないのか?」

「迷惑がつてる? 彼が求めてきたのよ!」

質問すようにオリアンナを見ると、恐怖の表情を浮かべながら激しく首を横に振つて

いた。

「嘘を吐くな！ 彼はそんな事はしないよ。どう見ても、君が無理強いしたんだ」

「違うわ！」

「領主家に仲間入りしたいんだらうけど、どんな事があつてもお館様は君なんか絶対に認めない！ あきらめろんだな」

嘲るように言うと、ベラの平手が頬を打った。

わざと打たせたのだ。

「あなたなんか、大嫌いよ！」

ベラは涙を浮かべながら、走り去った。

怒りに満ちた彼女も可愛いと思える、外見に魅力があるというのは得な事だ。

叩かれた頬を撫でながら、ベラに少し罪悪感を覚えた。

一番罪深いのは、後ろで震えているこの男女だ。

そして彼女をこんな風に育ててしまった、領主ハルビインだ。

溜息を吐きながら、オリアンナに向き直った。

「護衛は？ いるんだろ？」

「……遠ざけた」

彼女の震えはまだ止まらない、よっほど怖かったのだろう。

頭をクシヤクシヤと撫でてやった。

「……じゃ、僕は仕事だから。服を正せ! 護衛を呼んで城に帰るんだ」

「……うん」

頬に涙が伝っていた。

本当にベラの事が好きだったのかもしれない。

僕は彼女を抱きしめて慰めてやりたい気持ちをグツと堪えた。

良い葉だ。

これで女と付き合うのも懲りただろう。

彼女の側を離れて、後ろを気にしつつ第二城門へ向かった。

「これ、本当にお館様からの辞令なの?」

キース・オルトスは第二城門内で、上半身裸の状態で指令書を読んだ。

厚い胸板に汗が流れ、男臭さが部屋中に充満している。

筋肉を鍛えていたのは明らかで、僕はあまり彼を見ないようにした。

「絶対に関わらない!」そう心に決めて、この質実剛健な隊長部屋に入ったのだ。

「そのようです。お館様から私指定で隊長に届けるように、ベルン長官からお預かりし

ました」

僕は極力、事務的に話す。

キースは汗を綺麗な刺繍付の布で拭き取り、香水を自分の身体に吹きかける。

今度は異常に甘い香りが部屋中を満たし、思わず手で鼻を覆った。

「あなたが取り成してくれたの？ お館様に？」

「え？ いいえ、お館様が勝手に……！」

いつの間にかキースが、目の前に立っている。

後退しようとした時、彼の腕が力強く僕を抱きしめてきた。

「ありがとう、願いを叶えてくれたのね。嬉しいわ」

「ちよつ、離してください！僕は知りません！何の事ですか？」

必死にキースの腕から抜け出そうとするが、未成年の従騎士より二十代半ばの隊長の

方が腕力は上だ。

どう足掻いても、身動き一つ出来ない。

彼の裸の胸の、甘すぎる香りにむせそうになる。

「オーリン様の護衛隊長を任されたの、これでお近づきになれるわ」

オリアンナの護衛隊長？

キース・オルトスが？

僕は頭が真っ白の状態で、彼からお礼のキスをたくさん頬に受けていた。

「やあ、エラン・クリスベイン。来ると思っていたよ」

豪華な書齋で領主ハルビルインは、麦酒を片手に上機嫌で貴重な本を開き眺めている。対する僕は食事もせず、仕事帰りの従騎士姿のまま面会を要求。

当然、領主は食事を理由に長時間待たせ、ようやく僕と対面した。

「どういう事ですか? なぜオルトス隊長を、オリアンナの護衛にしたんですか! 彼女を男として好んでいるのが、判らないんですか!」

僕の剣幕を鼻で笑いながら、領主は楽しげに本を眺める。

「だから良いのだよ。キースは地獄の拷問官の異名を持つ、皆から恐れられる存在だ。オリアンナの護衛に相応しいと思わないか?」

「襲われたら、どうするんですか!」

「それは無い、女だからね」

「そうは思っていないですよ!」

領主は杯を置き、別の杯にお茶を注いだ。

それを僕の前に置き、余裕で微笑む。

「最近、オリアンナは綺麗になってきた、そう思わないか？　もう、周りから隠せない。男も女も彼女の心を得ようと、群がっているように私には見える」

「……」

「実際、ベラ・ゼノスが彼女に迫ったそうじゃないか」

領主の情報収集能力に、内心驚く。

「偶然、君が通りがかったから良かったものの、そのまま襲われていたら女と知れ渡ってしまう」

「……本当に偶然なのか？」

ボソツと呟く。

それには答えず、領主は鼻で笑った。

「キース・オルトスは護衛には打って付けだ。男も女も皆が恐れて、オリアンナに簡単に近づけなくなる」

「でも……」

「君も、近づけなくなる」

ハツとした。

領主が鋭い目で、睨みつけている。

「今後、オリアンナに近づくのは止めてもらいたい！　彼女は《王族》だ、高嶺の花と思っ



てあきらめろー!」

「何を言っている? 僕は……」

「単なる幼なじみと、言い切れるのか?」

「……」

領主の狙いは、僕を彼女から遠ざける事だ。

それだけは嫌という程理解出来る。

「もつとも君が姫君の幼なじみとして、この先も存在していける唯一の方法がある」

「え?」

「婚約者を持つ事だ。丁度先日ゼノス伯爵家の次女が、婚約破棄されたという連絡を受けた」

ゼノス伯爵?

僕は茫然と領主を見た。

ベラ・ゼノスが伯爵令嬢とは、知らなかった。

レント領に避難してきた貴族の大部分は、身分を明かす事を禁じられている。

領内に無用な混乱が起きるのを恐れた領主がそう決めたのだ。

「私はベラのように上昇志向の強い気位の高い女性は、公爵家にこそ相応しいと思っ  
ている」

「まさか！ 僕の好みじゃありませんよ。大体、オリアンナが黙ってない！」

「ふん、彼女なら大丈夫だ、問題は君だよ。ベラと会ってみないか？ 正式なお見合いは初めてだろうか？」

「……それは、そうですが」

領主の意図に顔を顰めた。

どうあつても、僕をオリアンナから引き離すつもりだ。

「婚約者が決まればオリアンナ姫と、今まで通りの関係が続けられる。君にとつても素晴らしい事じゃないのか？」

言葉に詰まった。

ベラ・ゼノス……、外見は確かに魅力的だ。

伯爵家という身分も、悪くはない。

《あなたなんか、大嫌いよ！》

あの言葉……、ベラは領主の思惑を知っていたのだろうか？

オリアンナの姿が心に浮かんだ。

彼女と引き離されるのは、絶対に嫌だ！

「しびらぐ、……考えさせて下さい」

## 番外編 初体験? (二)

「エランは、いつから男が好きになったんだ?」

オリアンナが可愛い声でとんでもない事を口にした。

僕はお茶を盛大に吹出し、家令デインに怒られる。

トルエルド公爵家の広間にぎやかな夕食中の事だ。

「何を言ってる? 僕が男が好き? どうして?」

顔と服にかかったお茶を、デインに渡された布で拭き取りながら狼狽えた。

まだキース・オルトスは、彼女の護衛隊長にはなっていない。

感化されるには、距離がありすぎる。

「すごく噂になってるよ、ベラから僕を奪ったって。僕達は恋人同士なんだって、凄いい話だね」

ベラ・ゼノスだ!

あの女……、噂通り嫌な奴かも。

頭を抱えた。とても婚約者には出来ない、たとえ外見が可愛くとも。

領主ハルビインにはまだ返事をしていないが、断わろうと決意する。

「別に……、僕は君と恋人同士でも、構わないけどね」

軽く告白を交えながら、オリアンナを見つめる。

領主の言う通りだ、最近彼女は綺麗になった。

気が付くと、見惚れてしまう。

「え？ やっぱり、男が好きなのか？」

「違うだろ！」

面白がる彼女は、致命的に鈍感だ。

僕は何も聞かなかった事にして、羊の塩漬肉を頬張った。

噂の危険性を本当に思い知ったのは、その翌朝だ。

冬の朝の遅い陽射しが、ようやく顔をのぞかせる。

早朝の空気は冷たくて身が縮むけど、どことなく潔くて気持ちが良い。

館を後にした僕は、石畳の道を騎士隊本部目指して歩いていた。

白い息を赤い髪にまとわり付かせながら、マントのフードの端を首に巻き付ける。

今日はベルン指揮長官の武器と本部に置かれている備品の手入れを、従騎士が手分けして行う。

家から通っている従騎士は僕だけだ。

皆に迷惑を掛けないため、いつも予定時間より早く本部に到着している。

本部の敷地は意外と狭い。

避難民受け入れの際に削って提供したからだ。

正門のすぐ側に馬の厩舎と門番詰所と、騎士達が集まる広場があるだけの密集した作りになっている。

武器が多くあるため、警備は嚴重だ。

本部の門を通り抜けた直後に、キース・オルトスと二人のごつい男達に捕まった。

「おはよう、エラン・クリスベイン」

「おお、綺麗な男こじゃないか」

「好みのタイプよ」

僕の周りをあつという間に、ごつい男達を取り囲んだ。

門番も本部の守衛も、相手がオルトス隊長なので見て見ぬふりをする。

身の危険を感じながら、冷静にあくまで事務的に対応する。

「おはようございませす、オルトス隊長。僕に何かご用でしょうか?」

「ふふ、あなたの噂を聞いたの。だから私のお友達を紹介しようと思つて、待つてたのよ」

にっこり笑つた隊長の顔は、はつきり言つて怖い。

この男がオリアンナの護衛隊長になれば、誰もが迂闊に彼女に近づけなくなる。  
領主の人選は確かだ。

「お忙しい朝から、ありがとうございます。残念ながら、僕は噂通りの人間ではありません  
ん！ 女好きです!!」

「女好き」を強調して伝える。

「あら、そうなの？ その割に婚約者もいなければ、見合いすらしてないって話じゃない  
？ それとも、本当にオーリン様の恋人なの？」

最後の言葉は、嫉妬混じりのトスが利いた脅しだ。

同時に周りの男達が包囲を縮める。

男達のお厚い胸板に押し潰されそうになり、よろけて後退し壁に背を押し付ける姿勢  
で立たされる。

いわゆる、二人のごつい男による「壁ドン」だ。

これほど怖いものはない。

「み、見合いをします、今度。だからっ、本当に女の方がいい!」

「何よ、つまらないわね。どうも信じられないわ、相手は誰よ？」

「……ベラ・ゼノス」

咄嗟にベラの名前を言った。

他に思い浮かばなかったのだ。

「は！ あの女ね。止めた方がいいわ、あなた食い物にされるわよ」

それは同感と意思いつつ、首を横に振って否定するフリをする。

「そう。……じゃあ、私もその見合い参加するわよ」

「え？」

「日程が決まったら教えなさい。あなたを守ってあげる」

そう言つてキースは怖い微笑みを見せ、男達を引き連れて去つて行つた。

事の成り行きに茫然としながら、その後ろ姿を見送る。

「見合い……、する事になつちやつた」

頭を抱えて、身を屈める。

オリアンナには、絶対内緒だ。

ベラを好きだったのに、知ればショックで泣いてしまう。

そう思うと、胸が痛んだ。

その後何度かキースの友達に追い回されたが何とかやり過ごし、見合いの日はあつけなくやつて来る。

普通、婚約者は幼いうちに決められるため、見合いは親同士が会うのが定番なのだ。うだ。

当人同士が会うのは、ベラのように何かの事情で婚約破棄になった時と、身分が高すぎて政治的要素が強くなり周りが口出し出来ない時等だ。

家令のデインは僕が見合いしてみると切り出した時、泣いて喜んだ。

そんなに心配させていたのかと思うと、罪悪感が沸き起こる。

行きがかり上見合いする羽目になったけど、端から断る気満々だ。

悪いけどデイン……、ぬか喜びだ。

領主は婚約者を持てばオリアンナと、今まで通り幼なじみとしての付き合いを許すと言った。

でも、付き合いをどうするかは彼女が決める事だ。

領主が行動を制限しても、僕が来るなど言っても、彼女はここに来る。

なぜなら、トルエルド公爵家こそが、彼女の「家」なのだから。

僕は元より婚約者など、持つ気はない。

婚約したい相手は、いつも僕に寄り添っている。

それでも便宜上、領主との見合いの約束は果たさなければならぬ。

領主家の一室で、領主立ち合いで見合いが行われる。



まるで王子のような服装で、レント城に向う。

トルエルド公爵クリスベイン家の紋章を宝石であしらった首飾りは美しく黒天鷲絨の上着に映え、肩から飾りで留められた膝までのマントは、襟や袖、縁に毛皮があしらわれていた。

腰には飾り剣と、頭にはシウワという鳥の羽根が付いた黒天鷲絨の帽子が、僕の赤い髪を引き立てている。

「派手すぎだよ、デイン。いくらなんでも目立ち過ぎだ」

「良いんですよ、エラン様。相手は伯爵家、公爵家は負けてはいけません!」

デインは張り切っていた。

「見合いつて……、そんなものか」

平時なら貴族用の馬車を用意する所だろうが、今は戦時で馬は貴重なため、第一城門内での馬車の使用は荷物運搬時以外、禁止されていた。

道行く人々がちらちらと僕に向ける視線が、皮膚を突き刺すように痛い。

「エラン! どうしたんだよ、その服。かっこいい、似合うよ!」

突然背後から聞きなれた声が聞こえた。

オリアンナは領主の命令で、家庭教師に勉強という拘束をされているはずだ。

どうして、こんな所にいる?

今、一番会いたくない彼女に、向き直る気になれない。

僕はデインの腕を掴んだ。

「デイン、走るぞー！」

「え？ エラン様、私のような年寄りには走れません。お先に……」

デインを引きずり走ろうとした時、もう一つの声がする。

「オーリン様」

太い男の声の語尾に、どう考えてもハートマークが付いている。

僕は顔を引き攣らせながら振り返ると、キースの太い手が彼女の右手を取り、その指にくちづけをしている。

頭から「オリアンナに絶対内緒のお見合い」の意識が、瞬時にきれいさっぱり消滅した。

「ちよつと、待ったあ！」

デインの手を掴んだまま、僕は二人の間に割り込んだ。

「あら、クリスベイン、素敵な衣装ね。まるで王子様だわ」

「エ、エラン様……、てて、手を……、放して下さい。転びます」

「エラン、何？ 何かあるの？ 僕も参加する！」

「オーリンに、近づくな！」

四人同時にそれぞれの主張をする。

遠巻きに付いていたそれぞれの護衛が、何かと集まって来る。

キースは凄みを効かせた微笑みで、僕に手を伸ばした。

「あなた、やっぱり私に嘘を吐いていたわね。あなたは、オーリン様を……!」

その手を、彼女が素早く両手で掴んだ。

興奮でキラキラした綺麗な瞳で、キースにお願いする。

「ね、僕も参加していいよね。エランがこんなに着飾ってるんだ、きつとすぐく面白い事でしょ? 僕も一番いい服で、参加していい?」

「もちろんですとも、オーリン様。あなたが手を握って下さるなんて、私は幸せ者です

!」

キースは真つ赤になりながら、オリアンナの言いなりになった。

彼女はこれ以上無い程の、極上の微笑みを彼に向ける。

「ありがとう。僕、着替えて来るね。待ってて」

「はい、待ちます! いくらでも、待ちますとも……」

城へ向けて彼女は飛ぶように駆けて行く、その後ろ姿を僕は呆然と見送った。

キースは呆けたまま、幸せな余韻に浸っている。

何で……、こうなる?

レント城内の客間で一番困惑したのは、領主ハルビインだ。

目の前に僕と並んで、領主家の紋章付き、超豪華な衣装を着たオリアンナが立っている。

いったい誰の、お見合いだ？

絶対拘束しておけと言ったのに、あの家庭教師は首だ！

領主の心の声が聞こえてくる。

「父上、僕の家庭教師を首にしないでね。お茶に眠り薬混ぜて眠らせたんだ。首にするなら、僕をすればいい」

領主は虚ろに笑いながら、途方に暮れた。

《王族》の姫君を首にすれば、セルジン王に首を刎ねられるのは彼だ。

僕はどこことなく領主に同情を覚えた。

計画的に拘束から逃れたという事は、最初からこの見合いの事を知っていたのか。

豪華に着飾った彼女は、目の前のベラ・ゼノスを見ていた。

まさか、自分が見合い相手になる気じゃないよな？

彼女の倒錯度を量り兼ねる。

後ろには、キースが嬉しそうに立っている。

僕を守るって言ってたけど、守る相手が変わったようだ。

彼女をキースから守るにはどうしたら良いか、僕は眉間に皺を寄せて考えた。

ベラは、まるで綺麗な人形のように無表情に床を見ている。

白いレースのドレスの上に金糸で刺繍された赤い天鵝絨の胴着を着て、宝石を散りばめた腰帯が豪華さを際立たせている。

レースの手袋をして、羽毛の扇を持つ手はピクリとも動かない。

同行しているのは母親だろう、娘以上に豪華に着飾ってどこから見ても伯爵夫人だ。

「エラン！ 悪いけどこの見合い、ぶち壊す！」

オリアンナの言葉に、僕は吹き出した。

彼女が参加した時点で、既に壊れている。

「望むところだ！」

「……オリアン？」

領主が狼狽えて止めようとした時、彼女がベラに近づく。

「なぜ、此処にいる？ 彼の元に行きなよ」

「オーリン……、知ってたの？」

「あたり前だ、友達なんだから。貴族との結婚が嫌で、自分の悪い評判を立てたんだろ？」

もう、そんな事しなくていいよ。素直に、幸せになればいい」  
ベラの瞳から涙が溢れる。

「オーリン……」

オリアンナは扉を開け、ベラは素直に走り出る、平民である最愛な男ひとの元へ。

母親が追いかけてようとした時、彼女が立ち向かう。

「伯爵夫人！ 一人ぐらい本当に好きな人と、結婚してもいいだろ？ 伯爵家にはまだ

二人も、未婚の娘がいるんだ。ベラをこれ以上、苦しめるな！」

母親は怒りと恥辱で真っ赤になり、オリアンナに掴みかかる。

護衛達に取り押さえられた伯爵夫人は、しばらく怒りを喚き散らした。

領主の取り成しで何とかその場は収まった。

僕の見合い初体験は、有耶無耶のまま終了。

万歳！

領主の怒りがかつたオリアンナには、一週間部屋で謹慎処分が言い渡された。

普段彼女に甘い領主にしては、珍しい程の処分だ。

伯爵家の面子を潰したのだから、当然と言えば当然なのだが、大人の世界は難しい。

しばらく経ってから、オリアンナに連れられて城下街にいるベラを訪ねた。

外見の可愛さに落ち着き加わって、ベラは少し大人びて見える。

以前の尖がった素振りは微塵も無い。

母親の伯爵夫人の元から勘当同然で家を出てしまったが、時々その母から手紙が届くのだそうだ。

いつか許してもらえる事を、彼女は願っていた。

それから、キース・オルトスだ。

見合いの翌日、彼は仕事帰りに僕の館に立ち寄った。

「あなた、知っていたの? オーリン様が、《王族》の姫君だつて」

「はい、知ってまし……、あー!」

キースは僕に抱き着いて、泣きだした。

重いと感じながらも、しばらく黙って肩を貸す。

……失恋は悲しい。

その後キースはオリアンナの護衛隊長に正式に就任、護衛は相変わらず遠巻きに彼女を守っていたが、隊長が直接彼女に接触を取るのには、公式行事の時以外無くなったそうだ。

僕を追い回す男達も、姿を見せなくなった。

オリアンナの謹慎処分が解けた日、仕事から帰ると彼女が僕の部屋のベッドで寝ていた。

なぜ自分の部屋ではなく、僕の部屋……？

高鳴る鼓動を抑えきれない。

無防備に眠る彼女は可愛い。

彼女も失恋したはずだ。

ベラの事は本気で好きだったように見えたから。

傷を癒すために、僕を求めているのだろうか。

求めてくれれば嬉しい。

そんな願望に、鼓動は増々高鳴る。

そして彼女の唇に惹きつけられた。

許可なく、キスをするのは……、犯罪だろうか？

そう思いながらも、引き寄せられるように顔を近づける。

もう少しでお互いの唇が触れそうになった時、彼女が口走った。

「エラン、芋だ」



ギョツとして、彼女から飛び退いた。

寝言だと思っても、真剣に受け止めてしまう。

いも?

僕の事?

それとも、芋が食べたい?

心臓は、逆の意味でバクバクした。

すっかり気が削がれ、着替えを持って部屋を出ようとする。

すやすやと幸せそうに眠るオリアンナを見つめ、灯る蠟燭の火を吹き消す。

僕達に初体験は、当分訪れそうもない。

苦笑いしながら、部屋を出た。

## ——第一章の登場人物——

〔★は生存者 ☆は死者 ●は人間以外〕

★オリアンナ・ルーネ・ブライデイン……主人公 《ソムレキアの宝剣》の主 エステ  
 ラーン王国の最後の《王族》 男子として育てられたので、名前が多くある

オーリン・ボガード（養子名）

オーリン・トウール・ブライデイン（王子名）

オリアンナ・ルーネ・フィンゼル（アルマレーク人としての名前）

エアリス・ユーリア・ブライデイン（オリアンナの偽名）

★セルジン・レティアス・ブライデイン……エステラーン王国の国王 水晶玉に命を  
 囚われ、歳を取る事が出来ない

★エラン・クリスベイン……トルエルド公爵家の次期公爵 オリアンナの幼なじみ。  
 王配候補

★テオフィルス・ルーザ・アルレイド……《七竜の王》 アルマレーク共和国リンクル  
 クランの次期領主 アルマレークでのオリアンナの婚約者 オリアンナをヘタレ小竜  
 と呼ぶ

★アドラン・デイラス・ブライデイン……魔王 セルジン国王の腹違いの兄 水晶玉に命を囚われ、セルジン同様歳を取れない

★エドウィン・ルーザ・フィンゼル……オリアンナの父 アルマレーク人 レクーマオピオンの次期領主 娘を守るため、《聖なる泉の精》と契約する

★ハルビイン・ボガード……オリアンナの養父 レント領辺境伯ボガード家第五代領主

★サフィーナ・ボガード……オリアンナの養母 レント領主の妻 《王族》の遠縁にあたる

★ハラルド・ボガード……オリアンナの義兄 レント領主の息子 魔王の〈契約者〉となる

★トキ・メリマン……王の近衛騎士隊長 エランの父の従騎士だった

★マール・サイレス……王の薬師

★アレイン・グレンフィード……国王軍大将 ノルダイン公爵 王配候補の一人

★エネス・ライアス……宰相 デイスカール公爵

★マシーナ・ルーザ……テオフィルスの随行者 アルマレーク人 リンクルクランの竜騎士

★老トムニ……テオフィルスの随行者 アルマレーク人 レクーマオピオンの元竜

## 騎士

★ルギー……竜騎士見習い アルマレーク人の少年

★テオドール・ルーザ・アルレイド……テオフィルス之父 アルマレーク人 リンク  
ル克蘭領主

★ロイ・ベルン指揮長官……エランの主君 レント領騎士隊の武將

★ミア・メリマン……オリアンナの侍女 トキの妻

★モラスの騎士隊……対魔防戦士達 主に〈契約者〉と対峙

★ザーリ……ハラルドの子分

☆オアイーヴ姫……オリアンナ姫の母 エドウインの妻 セルジン王の同母の妹

☆ドウラス王子……セルジン王の腹違いの弟 王が最も信頼していた《王族》

☆アミール・エスペンダ……セルジン王の最愛の女性 セルジン王の子を産む直前に  
《王族狩り》で殺された

☆オーリン・トゥール・ブライデイン……セルジン王とアミールの子供 オリアンナ  
の命の光 〈ありえざる者〉

☆ベイメ……オリアンナの侍女 三年前に病死

● シモルグ・アンカ……魂を運ぶ聖鳥 天界の巨大樹に巣を持つ不死の鳥

● 〈ありえざる者〉……天界の使者 光る球体

● リンクル……七竜 テオフィルスの竜の影 アルマレーク、リンクルクラン領の守

### 護竜

● レクーマ……七竜 エドウインの竜の影 アルマレーク、レクーマオピオン領の守

### 護竜

● イリ……七竜レクーマの子 老トムニの竜 オリアンナと心を通わす

● エーダ……七竜リンクルの子 マシーナの竜

● 屍食鬼……翼な生えた屍肉を喰らう魔物 魔界域から発生

● 半変化……屍食鬼になりかけの人間 〈契約者〉が呼び寄せる

● 《聖なる泉》の〈門番〉……銀色の豪華な鎧を装着した謎の存在

● 《聖なる泉》の精霊……魔力を持つ水の精霊 オリアンナに魔力を与える

● オオガ……元草食獣だった魔物 大きく力が強く凶暴

### 番外編

★ デイン……トルエルド公爵家の家令

★ キース・オルトス……レント領の騎士 第二城門守備隊長 後にオリアンナの護

衛隊長

★ベラ・ゼノス……伯爵家の次女  
オリアンナの友達

## 挿絵 ★

「王子な姫君の国王救出物語」は作者が十代の頃になんとなく作り、二十代の頃に仕事しながら漫画にしてみました話です。

古い絵柄ですが見ても良いよという方のみ、スクロールお願いします。

挿絵が苦手な方は、このままスルーして下さいませ。

ちなみに「小説家になろう」で重複投稿の「挿絵」とは別の物を載せております。

挿絵が苦手な方は、ここから先に進まない事をお勧めします。

作者も実は小説に挿絵が入るのは、子供の頃から苦手な方でしたので、苦手な方の気持ちは解ります。

でも、漫画も描いていたので、つい載せたくなるというこの矛盾。

申し訳ありません！

見てやってもいい方のみ、スクロールしてみして下さい。

大昔の漫画とイラストが表示されます。



まずは漫画。セリフはネタバレがある為、消去しました。

オリアンナ姫ですが、小説の方ではイヤリングはしておりません。

少年っぽさを意識して、当時描いていた様に思います。

漫画では領主の養子ではなく、普通に村の子供として描いているんです。

今考えると、よく屍食鬼がやって来なかつたなと……、冷や汗ものです（笑）

次はセルジン王。

当時の漫画では、髪型が小説のイメージより短めで額飾りを付けております。

それから柄頭の部分だけ描いてありますが、《ソムレキアの宝剣》も当時はこんな感じ



で描いていたのですね。

紫水晶に見てやって下さい。あまり見えませんが……（冷汗）

上の漫画をデジタルでカラーのイラストにしてみました。ツイッター広告用に作ってみたのですが、色合いが割と地味になりました。デジタルで人物を塗るのは、実は初です。まだまだ勉強しないと解らない事だらけ、頑張つて色々描ける様になりたいです。

続いてこちらのセルジン王は「なろう」の方で切り抜きで載せたイラストの全体像です。

同じ「水晶戦記」の別話のイメージイラストなのですが、今の小説のセルジン王はこちらの方が近いので載せました。

女の子の方が、実はもっと幼いイメージなのですが……、当時幼い女の子が描けなかったという（苦笑）

これは一度ツイッターで載せたものです。

前のイラストの女の子と同一人物です。横向きのセルジンの顔がちよつと変。「王子な姫君」のイラストが少ないのは、漫画で描いたせいなのか別話のイラストの方が多いです。

以上です。

ここまで見ていただき、ありがとうございます。

また、デジ絵で描く機会があり、載せても良いかなと思えるものが出来れば、ひよっこり載せているかもしれません。

その前にデジ絵の練習をしないといけません……、先は長いです。

果たして描けるのかどうか？

頑張ってみます（笑）

## 第二章 メイダール大学街

### 第一話 霧魔

「オリアンナ姫、あなたは陛下の希望の光におなりなさい！」

養母サフィーナが、《王族》の魔力と共に僕に伝えた言葉が、清らかな水滴のように心に波紋を残す。

セルジン王を生きて助け出すため、僕の手で死なせないための手掛かりが、もうすぐ霧の中に現れる。

王の薬師マール・サイレスが十六年前に運び込んだという、《王族》に関わる書物と極秘文書、そして謎めいた遺物が隠された場所の一つ。

メイダール大学街——。

——レント領は僕が上空から放った《ソムレキアの宝剣》の輝きで、結界が張られたように魔物を寄せ付けなくなった。

その約一か月後、大勢の大人達に守られながら僕はレント城塞を旅立った。

多くの見送りの人々に手を振りながら、僕の意識はただ前だけを向いていた。レント城塞を出る事に、不安は無い。

最後に城塞を振り返り、城門の上から見送るサフィーナの姿を心に刻む。

反発ばかりで泣かせていたのに、いつも僕に笑顔を向ける養母。

「いつてきまず、ははうえ義母上」

僕は大きく叫びながら、彼女に手を振った。

テオフィルスからもらった魔法の鎧のおかげで、僕は馬に乗る事が出来、馬車での行軍参加だけは避けられた。

男装しているのに、姫君みたいに馬車移動だけは避けたい。

魔法の鎧を返せなかったけど、使っていいよね。

あと、ハンカチ……。

テオフィルスの紋章付きのハンカチを、僕はなぜか処分する事が出来ず持ち歩いている。

エアリス姫として女装している時に屍食鬼に襲われ、彼に助けられた。

傷の手当てに、彼が使ったハンカチだ。

これを見ると、感謝の気持ち湧いてくる。

もう、会えないのに……。

国王軍は僕の馬速に合せて、比較的ゆっくりと進んだ。

皆に遅れを取るまいと必死になるが、一日中の騎乗は初めてで、筋肉痛で泣きそうになった。

エラン・クリスベインが僕の横に並走する。

「情けないな、まだ二日しか乗ってないのに。姿勢が悪すぎるんだよ」

見兼ねたエランが乗馬訓練を始める。

容赦なく厳しい彼と危うく喧嘩になりそうになったが、周りの護衛騎士達が楽しげに訓練に参加してきて、それは免れた。

レント領にいる間は魔物も屍食鬼も襲ってこない。

国王軍全体が暫し平和を楽しんだ。

三日目には筋肉痛も治まってきたが、レント領を出た途端に霧が発生し始める。

騎士達に緊張が戻ってきた。

「霧魔が出るかもしれない。オーリン様、陛下のお側に移動を」

前を走っていた近衛騎士隊長トキ・メリマンが指示を出す。

「霧魔？ 聞いた事がある、霧に潜む魔物だよね」

「霧が意志と形を持つて人を襲う化物だ。捕まったら最後、遺体も見つからない。アルマレーク山の麓に多い化物だが、最近是我が国の平野部にも現れる。気を付けた方がいい」

トキの言葉に頷き、近衛騎士達と共にセルジン王の元に向う。冷たい霧は体温を奪うため、皆に厚手のマントの着用が言い渡された。

僕のマントが、霧の中を進むうちに湿気を含み、徐々に重くなる。

それ程、霧が濃くなってきたのだ。

視界が遮られ周りの大人達が朧おぼろに見える。

横を並走しているエランの顔も見えなくなる。

何かが、近付いてる……？

その気配に、不安が増した。

背後から……。

ドツドツドツと襲しゅう歩ほで駆け付ける馬の気配、そして黒い渦が僕に与える、独特の息苦しさい。

恐怖に耐えながら、バランスを取って後ろを振り返る。

白一色の霧の中に黒い染みが徐々に広がる。

そこに、見覚えのある顔があった。

「ハラルド！ ハラルドがいるぞ！」

大声で叫び周りに警戒を促すが、近衛騎士達に変化はない。

まるで霧の幕に阻まれ、僕とハラルドだけがいるように見える。

黒い霧の馬に乗った彼は、僕を嘲るように微笑み、急速に近づく。

『オーリン、お前に会いたかったよ』

ハラルドの声がすぐ耳元で聞こえ、戦慄を覚えた。

幼い頃から無意識に《王族狩り》を遂行し、僕と養母サフィーナを苦しめてきた義兄

ハラルド。

魔王アドランの〈契約者〉となり、レント領に屍食鬼を引き込み、エランを半殺しの

目にあわせた。

《ソムレキアの宝剣》を奪いに来たのか？

魔王を消滅出来る唯一の武器である《ソムレキアの宝剣》が、僕を主に選んだため、魔

王の配下が宝剣を奪おうと襲い来る。

僕は身を守るために短剣を抜く。

《ソムレキアの宝剣》は奪い取られないように、剣帯三本でしっかり装着してあるが、

〈契約者〉相手に慣れない馬上で、一人で戦うのは不利だ。

「陛下！ 陛下！」

側にいないセルジン王に、必死に助けを求めろ。

すると答えるように進行方向が輝き始めるが、その光は霧に覆われて届かない。

陛下、早く来て……。

ハラルドの乗る黒い霧の馬が、僕の馬の後ろに近付き、もう少しで触れそうになる。

僕の馬が後ろ足で攻撃を始めた。

馬を制御する事が出来ずに、僕は簡単に落馬した。

「うあー！」

その時、前方の光が霧を突き破り、ハラルドを飲み込む。

彼は僕に皮肉な笑みを残しながら、光の中に埋もれ消えた――。

ようやく異変に気付いたトキとエランが、馬を下り僕に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「何やってるんだよ！」

エランに助け起こされ、打ち付けた腰の痛みを耐えながら立ち上がる。

「痛つ……。ハラルドが……。僕の後ろにいたんだ」

その言葉に集まって来た近衛騎士達が警戒し、一斉に剣を抜く。

「守りを固めろ！ モラスの騎士の障壁を抜けてきているぞ。陛下とモラスの総隊長に

伝令を……」



「その必要はないが、そのまま警戒を怠るな！」

人垣が分かれセルジン王が姿を現した。

影である王の身体から無数の光が溢れ出し、半透明の王の姿がより薄く見える。

この世で絶大な魔力を持つ者だけが、実態のある影を作り出せる。

王はその魔力を使って、僕に近づくハラルドを追い払った。

「大丈夫か？ オリアンナ」

「は……、はい」

僕の心臓が高鳴る、セルジン王の側にいる時はいつもそうだ。

《王族》 同士は惹かれ合うのだという。

僕は子供の頃から彼に惹かれているのに、セルジン王は僕を婚約破棄し、女王にしよ  
うと王配候補を選ばせた。

王が僕に惹かれる事はない。

僕がエランを選んでも、この鼓動の高鳴りは治まらない……。

「エラン、オリアンナの側を離れるな。必ず守り通せ！」

「はいー！」

王配候補となったエランの責任は重い。

僕が彼を選んだ事で、国王軍の未来を左右する存在となった。

それでも彼が僕に向ける笑顔は変わらない。

その笑顔にどれだけ助けられているか、エランは知っているのだろうか？

僕達は、自然と手をつなぎ合った。

「夢魔が近くにいます。彼等に私の魔法は効かぬ！ 気を付けろ！」

「え？」

王の魔法が効かない魔物がいる事に恐怖を感じた時、突然霧の向こうから叫び声がかかる。

「霧魔だ、気を付けろ！ 松明を増やせ、霧魔を寄せ付けろな」

僕の足に、何かが当たったのを感じた。

足元を見ようとした瞬間、何かが両足を掴みあつという間に僕を引きずり倒す。

エランと握った手は、あっけなく引き解かれる。

僕を掴んだ何かは、そのまま凄い勢いで移動を始める。

「オリアンナ！」

エランの困惑の叫びが聞こえたが、霧に飲まれ遠ざかる。

足に絡みつく霧の塊を、引き摺られながら確認し、霧魔に捕まった事に戦慄を覚えた。

《霧が意志と形を持って人を襲う化物だ。捕まったら最後、遺体も見つからない》

トキの言葉を思い出し、恐怖から何かに捕まろうと必死に手を伸ばす。  
だが、虚しく空を掴むだけだ。

「……助けて」

僕の声は、誰にも届かない。

あつという間に国王軍から遠ざかる。

引きずられて身体のあちこちを打ち傷つき、気を失いそうになりながら、宝剣だけは離さないように身を締め抱え込んだ。

霧魔の恐ろしさが理解できた。

こうして身体が判別も出来ないほど傷だらけになり、どこかで朽ち果て屍食鬼の餌食になる。

死にたくない。

セルジン王を助ける前に、死にたくない！

そう願っても、どうする事も出来なかった。

どのくらい引きずられたのか、遠退く意識の中で聞き覚えのある声が聞こえた。

「リンクル！ 霧魔を吹き飛ばせ！」

竜の羽ばたきで霧が打ち払われ、中に潜む霧状の魔物は竜の放った炎によつて蒸発さ

せられた。

その炎は、僕をも焼き尽くそうとする。

「リンクル、人に炎を向けるな！」

竜の炎は不思議な事に、僕を避けた。

宝剣を守りながら傷つき限界がきて、僕は完全に意識を失った。

テオフィルスは誰か判別出来ない程傷付いた者を見て、もう死んでいると思った。

その死体を守り抱えている物に気付き、一瞬足を止める。

屍食鬼を打ち払う魔法の剣、それは紫水晶で作られている。

まさか……。

彼の鼓動が緊張で、速くなる。鼓動の音にかぶせるようにへありえざる者への声、頭の中で耳障りに木霊した。

《この娘に近づくな！ 七竜の眷属。神と竜の争いを、再び地上に引き起こしたくなければ、この娘に関わるな！》

テオフィルスは躊躇した。

なぜ目の前にオリアンナ姫が現れるのか、理解に苦しむ。

姫君に近づかない条件で、俺と彼女と竜イリの命を、へありえざる者へに救ってもらったのだ。

彼女は彼等の支配下にある。

近づかない約束を立てさせたのは、俺を苦しめるためなのか？

長年会いに行く事も叶わなかった婚約者。

亡くなっていると聞いた時の絶望感、彼女が竜イリと心の共鳴が出来た時の驚きと感動。

それら全てを、苦しみにはしたくなかった。

傷つき横たわる婚約者<sup>オリアーナ</sup>は、ひどく出血している。

テオフィルスは戸惑いながら彼女を抱き上げ、鼓動を確認する。  
生きている。

彼は安堵し、自分の服が血で汚れるのも構わず彼女を抱きしめた。

「近寄りほしくない……。今だけだ、オリアーナ姫」

誰に聞かせることなく呟き、彼女に額にくちづけをする。

叶う事ならこのまま、アルマレーク共和国へ連れ去りたかった。

## 第二話 計画の実行

目が覚めた時、僕は霞む目でぼんやり見慣れぬ天井を見ていた。

痛みと気分の悪さのせいで視界が狭い。

顔を擧<sup>しか</sup>めてみると、良い香りがしてくる。

マールの淹<sup>い</sup>れる薬草茶の香りだ。

僕を覗き込むセルジン王の顔が、微笑んでいる。

「……陛下」

「オリアンナ、気が付いたな。マール、意識が戻ったぞ。薬草茶のいい香りのおかげだ」

「恐れ入ります」

マールが微笑みながら淹<sup>い</sup>れた薬草茶を杯に注ぎ、スプーンを入れて王に渡す。

王はスプーンでお茶を自分の口に入れ、温度を測る。

「まだ熱いな」

そう言つて杯を揺らした。

薬草茶を冷ましているのだ。

「そなたの導の魔力は強力だ、こんなに早く治るとは……。泉の精に感謝せねば」

僕は身体を起こそうとしたが、あまりの痛みと気分の悪さに再び枕に顔を沈める。

「無理をするな、ゆっくり休むのだ。死にかけてただぞ」

「そうです、一時はどうなる事かと心配しましたよ」

マールが枕に布を置きながら、僕を上向きにさせた。

起きるにしても僕は包帯以外身に着けていない、王の前で肌が露わになる事に気がつき、痛む腕で慌てて毛布を被る。

王は再びスプーンでお茶を口に運び、温度を確かめた。

「もう良いだろう。オリアーナ、口を開けよ」

「え？」

「飲ませてやろう」

気分の悪さが吹き飛び、顔が赤くなり鼓動が跳ね上がる。

「じ、自分で、飲みます」

「遠慮するな、まだ気分が悪いだろう？ ほら……」

そう言つて王は、お茶の入ったスプーンを僕の口元に差し出す。

口を開けるのが恥ずかしいと思いつつながら、おずおずと口を開けた。

丁度良い温かさの薬草茶が、口に流れ込んでくる。

入りすぎてむせないよう、王は少しずつ流し込む。

甘く爽やかなお茶は、僕の気分を良くさせる。

いや、王にお世話されている段階で、気分はこれ以上無い程浮上しているのだ、ふわふわと……。

薬草茶を飲み終えた後、またしばらく眠った。

次に目が覚めた時に、エランが心配そうに僕を見ていた。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。……もう死ぬのかって思った。もう……、怖くて……」  
涙が出て来た。

今頃になって霧魔に捕まった恐怖感が甦ってきたのだ。

対応しているのがエランだから、素直に弱音が言えるのかもしれない。

彼は僕の涙を手で拭き取り、優しく頬に温かい手を添えた。

「ごめん、守れなくて」

エランの顔に苦悩が浮かんだ。

周りから何か言われたのかもしれない。

責任の重さに苦しんでいるような、そんな様子が見て取れる。

「エラン、霧魔は陛下でも防げない魔物なんだよ。君が気に病む事はないよ」



「そうだけど……」

僕は彼の手を取って、掌にくちづける。

「笑ってくれよ、エラン。僕は君の笑顔を見ていたいんだ」

「……………まるで、妻に言うセリフだ」

二人で吹き出した。

笑うと傷口が痛むからマールに止められたけど、笑っている方が幸せだ。

エランは僕の額に優しくくちづけをして、マールに促されるまま部屋を出て行った。

僕は見送りながら、また眠りに落ちる。

翌朝、僕は起き上がれるまでに回復した。

《聖なる泉》の精の魔力、《生命の水》のおかげだ。

侍女のミアに腕輪と新しい服を渡され、それらを身に着けた後《ソムレキアの宝剣》を腰に提げる。

失くさなくて、本当に良かった。

どうやって助かったのか、痛みの記憶と同様に思い出せない。

何か大事な事を見失ったまま、僕はマールに連れられて王のもとに向かった。

「本当に動けますか？ 無理はされていませんか？」

「大丈夫だよ。それより、僕は何日寝込んでいたの？」

「五日です」

「そうか……。それじゃあ、早く計画を実行しよう。いい手を思いついたんだ」

セルジン王のいる部屋の扉を開けた時、僕は不思議な感覚を味わった。

《聖なる泉》の門をくぐる感覚と似て、重厚な入り口の扉やそれを開けた先の部屋も、煌々と火の燃える暖炉やそこにいる召使達も、まるで全てが幻のように見えた。

何かの魔法の一環に、迷い込んだみたいに。

「オーリン、大丈夫なのか？」

「あ……、はい」

明らかに執務中のセルジン王に助けを求め、彼と目を合わせる。

王は安心させるように優しく微笑み<sup>うなず</sup>、僕はホツとして緊張を解く事が出来た。

王の側にいると心が安らぐ。

エランはどうだろうと思ひ彼を見るが、特に何も感じていないように王の執務を手伝っている。

レント領を出てから、彼は王に仕える従騎士になった。

オリアンナではなくオーリンという呼びかけは、近くにいる見知らぬ小柄な老人を気

遣つての事だ。

その老人は不思議な雰囲気を醸かもしている。

まるで掴み処のない霧が凝縮したような希薄な存在感だ。

僕は一瞬、幻を見ている気がした。

「お怪我は……、もう宜しいのですか？」

老人は優しい目をしながら、じつと僕を観察している。

早過ぎる回復を、不思議に思っているのだろう。

王がさり気なく二人の間に立ち、彼を紹介する。

「そなたは大怪我をした状態で、メイダール大学街に運び込まれた。彼は学長のヴァール・ケイデイス。我々に自宅を開放してくれたのだ」

「ご迷惑をお掛けしました、ケイデイス学長」

病院より個人邸の方が、僕を隠せる。

それに王の薬師は、優秀な医師でもある。

だが提供した方は迷惑だろう、僕は瀕死の状態で、血に塗れていたはずだ。

学長はなんでもないと首を振る。

「ゆつくりお休み下され殿下、無理は禁物ですぞ。もし本当にご回復されたのなら、細やかですが今夜にでも歓迎の宴を用意させましょう」

「ありがとうございます」

宴を断るのは失礼にあたるので、僕は嬉しそうに微笑み、頷いた。

学長は王に礼を取り、家令に指示を与えるために側を離れた。

僕はチャンスとばかりにエランの手を掴み、驚く彼を引きずり王の前に立つ。

「どうした？」

「歓迎の宴まで時間があるのなら、エランと二人で外を見て来ても良いでしょうか？」

「行きたい場所があります！」

「回復したばかりで、大丈夫なのか？」

「大丈夫です。マールさんが付いてきてくれますから」

事前にマールと打ち合わせしてある。

王は訝いぶかしむように、僕とエランを見つめている。

嘘がばれている気がして、僕の心臓は高鳴った。

「この大学の自治と自由は王権で保障している、だから《王族》の我儘は通じぬぞ。出来れば大人しくしていなさい」

「我儘なんて言いません！」

まるで我儘な《王族》と言われたようで、僕は意味が解らず王を睨む。

彼は微笑みながら、釘を刺す。

「大学街で起きた事は大学の法が裁く、つまり国王には手出し出来ないのだ。それでも行きたいのなら、私も同行しよう。そなたが行動する時は、私も付き合う事にする」

「デートです！ 二人で行きます、陛下はついて来ないで下さい！」

「オーリン様！」

王に対する口答えに、ミアが慌てて口を挟む。

エランは焦ったように僕の腕を引っ張る。

そんな打ち合わせはしていないので、戸惑うのは当然だ。

王は声を上げて笑った。

「なるほど、デートか。では、そなたのドレスを用意させよう」

「え？ いえ、僕はこの格好で構いません！」

「その格好で行くのなら、デートと認めぬ。私も同行する」

「……あの、僕はドレスを持ってきませんでした。だから、この格好で……」

「ドレスならあるな。サフィーナがこの一カ月で三着作らせた。そなたの荷物の中に入っている」

僕は驚愕して固まり、そのうち怒りで震え始めた。

どうして義母<sup>はは</sup>上<sup>は</sup>は、そんな余計な事ばかりするんだ！

養母サフィーナは男子として育った僕を昔から娘として扱い、ドレスを何着も作ら

せ、何度も着せようと画策してきた。

その度に僕は彼女に反発して、何度も泣かせてきたのだ。

「ドレスを着た場合、護衛の数を増やさないと外には出せぬが、それで良いか？」

「か……、かかかかまつ……、いません」

「僭越ながら、私もお供させていただいて宜しいでしょうか？」

王の近衛騎士隊長トキ・メリマンが、無表情に礼を取り王に願ひ出る。

彼も同じ目的で行動する協力者。

大学図書館へ行く僕達の行動を他の護衛達が疑問に思つても、彼がいると疑問を投げかけてくる兵達を抑え込める。

それはとても助かる事だ。

「ふむ、そなたがいるなら、心強いな。よかろう、同行を許す。必ず王太子を守れ」

「は！」

トキは礼を取った。

「大学街は霧が出ているが、妖魔は入り込めないように対策を施してある。安心して出かけるといい。では、侍女を呼べ」

王は側近に指示を出し、侍女達が集められた。

僕は強制的な衣装替えに目の前が真っ暗になり、いかに墓穴を掘ったかを思い知る。

計画を実行するためだ。

王がついて来るよりマシと思おう……。

僕がドレス姿になった後、セルジン王は念を押すように言う。

「そなたがドレス姿でいる時は、エアリス・ユーリア・ブライデイン以外を、名乗ってはならぬ。皆にも徹底させる、判ったな？」

「はい……」

僕は長い金髪の鬘かつらの髪を揺らしながら、がつくり項垂れる。

偽名であるエアリスを名乗るのは、別人にならなければならず好きではない。

町娘風の比較的身軽なドレス姿で、僕は顔を引き攣らせながら外に出た。

セルジン王を、人間に戻すための第一歩だ。

## 番外編 彼女を口説く十の方法（一）

「デートだ……、デート」

僕の心の底から、喜びの雄叫びが湧き起る。

思いがけずオリアンナの口から、デートの申し込みがあつたのだ。

彼女と、デートだあ——！

ここ、メイダール大学街のケイデイス学長の館の一室で、大声で叫ぶ訳にはいかない。叫びたい衝動を、無言で身体を使って表現する。

スキップ、ダンス、投げキッス、e t c.

「浮かれている場合か？」

水を差すように僕の随行者ローランドが、腰に両手を当てながら言い放つ。

彼はクリスベイン家に仕える、僕より六歳年上の騎士で、男爵家の次男だ。

元はレント城主ハルビイン・ボガードに仕える騎士だったが、父親が若い頃クリスベイン家に仕えていた事で、彼もそれを希望した。

僕の随行者として国王軍に参加してからは、まるで兄のように口うるさく偉そうになつた。



「デートに、その格好で行くつもりか？」

「え？ もちろん着替えるけど」

「デート用の服は？」

「……あ、置いてきた」

ローランドは浅く溜息を吐く。

来るぞ、説教！

デインの回し者め！

レント領にいるクリスベイン家の家令デインと重ねながら、僕は身構える。

二人共、説教が長い。

だが予想に反してローランドは、ニッと笑っただけだ。

「こんな事もあるうかと、家令殿が持たせてくれた。奥方様がオリアンナ姫のドレスを作らせていると聞いて、用意したんだ。ありがたく思え」

まるで彼が用意したみたいな口振りにムツとしながら、僕は受け取った服を目の前で広げてみる。

黒地の天鷲<sup>ビロード</sup>絨が角度によって青く煌めく、どんな織をしたらこんな綺麗な物が出来るのか想像もつかない。

デインの好みそうな派手な刺繍を散りばめた衣装と、かつこいい帽子にも同じ刺繍が

施され溜息が出た。

派手すぎる、このセンス。

目立ち過ぎだ。

「素晴らしい衣装じゃないか！　これでオリアンナ姫はお前に夢中だ」

「え、本当？」

「そうだ！　「女を口説く十の方法」その一、地味なお前にはイメチェンが必要だ！」

ローランドは僕の顔をビシツと指差し、指導者のように断言する。

「女を口説く……十の方法？」

僕は音を立てて、生睡を飲み込む。

彼は僕の両肩を掴んで、激しく揺さぶった。

「そうだ！　いいか、これはオリアンナ姫を口説き落とす絶好の機会だ。これを逃したら、

後は無いと思え！」

呆然自失の僕は言われるまま派手な服装に着替え、彼に思いつきり背中を叩かれながら部屋の扉を出る。

口説き落とすって、そんな大胆な事……、あのオリアンナに出来るのか？

気のせいかな鼓動が早くなる。

ローランドに後ろからど突かれながら、地に足が着かない状況でセルジン王のいる玄

関ホールへ向かった。

王と大勢の騎士達がいる中で、こんな派手な格好で、歩くのを恥ずかしく感じる。後ろからローランドが脅迫するように囁く。

「十の方法、その二だ。オリアンナ姫が着替えてきたら、すぐに褒める！ いいなっ」  
僕は反論したくて、ローランドを睨む。

普通の女の子にその方法は通用するが、男子として育ちの、ドレスを嫌がる彼女には逆効果だ。

彼はその事を知らず、僕が言おうとした時、オリアンナが侍女達に手を引かれて姿を現した。

町娘風のドレスは可愛らしく、長い金髪の鬘は愛らしく彼女を包む……が、その表情は目が座り、いかに我慢しているかが窺い知れた。

王が彼女を迎え、その姿を褒める。

彼女の顔は人形のように無表情に強張り、ますます暗く引き攣り、我慢が限界にきているのを僕は感じた。

王が止めを刺すように言う。

「そなたがドレス姿でいる時は、エアリス・ユーリア・ブライデイン以外の名を名乗ってはならぬ。皆にも徹底させる。判ったな？」

オリアンナの目は死んだ魚のようになった。

「はい……」

セルジン王は、彼女を僕に渡す。

「楽しんでまいれ」

「はい！」

僕は王に嬉しそうに微笑みながら、渡されたオリアンナの手を受け取り握りしめた。

そして玄関まで誘導し、扉を開ける。

彼女はチラッと僕を見る。

そのしぐさが愛らしくて、僕は嬉しくなった。

「デートだよ、楽しもうよ」

彼女は反発するように、プイッと反対側に顔を背ける。

その瞬間ローランドが僕の顔の真横に自分の顔を持ってきて、僕を真似て言った。

「そのドレス、凄く似合ってる。可愛いよ」

僕は驚き「何て事を言うんだ！」と、にやけるローランドを睨む。

間を置かず凄い形相で睨みつけてくる彼女に気付き、僕は真つ青になり首を振りながら「僕じゃない！」と言おうとしたが、思いつきり向う脛を蹴られた。

「……うぼぐじやあつ、ぬあいい……」

「ふんっ！」

向う脛を押さえてうづくまる僕を置いて、怒りに頭から湯気を出しそんなオリアンナは、数名の侍女を引き連れてさっさと外へ出て行ってしまった。

「お前が言わないから、彼女が気を悪くしたんだ。まったく、この鈍<sup>のろま</sup>間め！」

「ぢがぶうう……」

ローランドはうづくまる僕を無理やり立たせ、怒ったように言う。

「いいか、十の方法その三、笑顔だ！ 何があつても、優しい笑顔が心を掴む、笑えっ！」

こんなに痛いのに、笑える訳ないだろう！

痛む足を引きずり泣きそうになりながら、僕はヤケクソに引き攣った笑顔をしてみせる。

「もつと、爽やかな、いい笑顔をしろっ！ 姫君の心を鷲掴みにするような笑顔だ！」

彼女の心を鷲掴みに出来るのは、陛下だけだよ。

そう思うと僕の顔は、暗いニヒルな笑顔になる。

「まあ、それでも悪くはないけどな。お前、性格ネクラじゃね？」

それを聞いて、心の中にモヤモヤとしたものが湧き起る。

「エラン！ デートなんだろ、早く来い！」

オリアンナが今の姿に似合わない男言葉で僕を呼ぶ。

心の中のモヤモヤはその瞬間に吹き飛び、込み上げる面白さで満面の笑顔になる。

「オリアンナ、ドレスに似合わないよ、その言葉づかい」

「陛下の言葉を聞いてなかったのか？ 僕はエアリスだ！」

「僕じゃなくて、私だろ？ エアリス姫」

「うるさいっつ」

彼女は真つ赤になってぶりぶり怒りながら、学長の館の門の所まで行ったが、そこで立ち止まり動かなくなる。

不思議に思い門の外を見ると、騎士始め、歩兵、射手他、おおよそ一個小隊はいそうな護衛が並んでいるのである。

僕もポカんと口を開けたまま動けなくなった。

いくら何でも、大人数過ぎる！

僕は眩暈がして、オリアンナに小声で尋ねる。

「これって、デートだろ？ トキさんだけで良くない？ なぜ、こんな人数？」

彼女はキツと僕を睨みつけ、耳元で囁く。

「エラン、前に話しただろう、陛下を助ける方法が見つかるかもしれないんだ。君も協力してくれ！」

「そんな事かと、……思ってたよ」

僕はがっかり肩を落とし、少し涙目になった。

その肩をローランドが掴む。

「おい！ 十の方法、その四だ。プレゼント、これを渡せ！」

彼の手には花束が赤い愛らしいリボンで結ばれ、薄いレースの布に包まれて豪華に存在していた。

「ど、どうしたんだよ？ その花束……」

「学長の館の花瓶から、三本ずつ抜いてきた。レースは花瓶敷きでリボンはお菓子包みの奴だ。俺って天才だろ」

「……凄い、天才」

着いたばかりの学長の館で、花束を作る努力をいつの間にしていたのか僕には判らないが、その行動力と大胆さに頭が下がる。

もつとも「盗み」という言葉が頭を過ぎったが……、彼の努力に水を差す気にはなれず目を瞑る事にした。

花束を受け取ったが、咄嗟に彼女から隠す。

これを渡したら怒りを助長するのが目に見えていた。

デートコースの確認をしてきたトキに、彼女は不機嫌そうに糖果店の名前を口にす

る。

「糖菓の花束」だよ」

それを聞いた僕の身体が、自然に動いた。

「じゃあ、この花束と同じくらいに糖菓を買おう」

オリアンナの前に豪華な花束を差出す。

彼女は糖菓が大好きなのだ。

「えっ、この花束と同じくらいに糖菓？」

「そう、買おう！」

彼女は花束を受け取り、キラキラした目でそれを見つめる。

「これと同じくらいに糖菓……、よしっ、約束だぞ、買ってくれるんだな」

花束を受け取ってくれた事に気を良くして、懐の中身も確認せずに安請け合いました。

「もちろんだよ、エアリス姫」

彼女が花束を手に、僕に向けてにっこり微笑む。

あまりの可愛らしさに、彼女を抱きしめたくなった。

僕は優しく微笑みながら、機嫌の良くなった彼女に手を差出す。

「さ、行こう。デートだよ」

「うん」



オリアンナの手を引いて、ゆっくり霧の中を歩き始めた。

「ふんつ、十の方法その五は、言われなくても出来てるじゃないか。好きなだけ買ってやればいいさ、喜ぶ物を……」

そう呟きながらローランドは懐からお金の入った巾着袋を取り出し、中身を見て真っ青になる。

金貨袋と思つて持つてきた袋の中身は、金貨大の豆がぎつしり詰まった豆袋だった。

## 番外編 彼女を口説く十の方法（二）

霧の大学街を迷う事なく目的地に辿り着いたのは、一個小隊の護衛の中に案内人がいたからだ。

「さあ、辿り着きましたよ、エアリス様。ここが「糖菓の花束」です」

オリアンナの友人の一人がメイダール大学街出身で、お勧めの糖菓店は可愛らしい菓子子の家の風情だ。

糖菓の大好きなオリアンナは目をキラキラさせて、僕の渡した花束を握り潰しそうなほど胸元で握りしめている。

「花束のような、糖菓の束……」

彼女の喉から「ゴクリ」という音がしたが、僕は聞かなかった事にした。

「いらつしやいませくええええええ？」

人の良さそうな小柄なおばさんが、突然店にやって来た騎士集団を、驚きの声で出迎える。

大勢の護衛に囲まれて、お姫様が狭い店内に入って来たのだ、驚くのは当然だ。

オリアンナと一緒に店の中に入った僕は、ずらりと並ぶ糖菓の甘い香りと華やかさに

感心した。

そして急に気になったのが値段だ。

まるで宝石のように並ぶ糖菓に、値札は付いていない。

ここって、もの凄く高級な店じゃないよな？

学生街だし、王都じゃないんだから……。

彼女は入口近くにあつた籠を手に、量り売りの糖菓を大きめスプーンを使って、サクと籠に収めていく。

その表情は嬉しさに満ち溢れていて、それを見ているだけで僕は幸せを感じる。

少し懐具合が心配になって後ろを振り返り、ローランドに金貨袋を出させようとして驚愕する。

ローランドがいない！

彼がいないという事は、糖菓のお金を払えないという事だ。

僕は慌てて近衛騎士隊長トキ・メリマンにローランドを見なかったか聞いた。

「ああ、出発前に学長の館に戻って行つたな。この霧だ、後を追うのは難しいだろう」

僕は、真青になった。

どうするんだよ、糖菓のお金……。

探しに行こうにも街を覆う霧と、土地勘の無さで動きが取れない。

オリアンナは嬉しそうに、籠いっぱい糖菓を山盛りになっている。今さら払えないなんて……、口が裂けても言えない。

かっこ悪っ。

僕は頭を抱えた。

誰かに借りようか。

でも兵士に借りるの悪いし、トキさんにそんな事言えないし……、うぐん。

悩みながら視線を彷徨わせていると、店の奥の扉が開き店主と思える菓子職人が、店頭に出ているおばさんに向けて周りを見ずに声をかけた。

「お〜い、砂糖が足りないよ〜、買ってきて……てえ？」

店主は店内が騎士達で溢れている事に気付き、啞然として慌てて扉を閉めようとする。

「待って下さい！ その仕事、僕にやらせて下さい！」

「ええっ？」

店主とおばさんが同時に、人混みをかき分け凄いい勢いで駆け寄る僕に、驚きの声を上げる。

まるで王子様な華やかな服装の未成年者が、必死の形相で訴えてきたのだ。

「僕を働かせて下さい！ 彼女の籠の糖菓分だけ。金貨袋を持っていた者と逸れてし

まって、お支払出来るか判りません。だから働かせて下さい、お願いします！」

「あ、あの……」

「エラン、そのような事。私に言えば支払うのに」

驚いたトキが、僕を止める。

「ありがとうございます。でも僕のお金で払いたいです。だから、働かせて下さい」

「エランが働くなら、僕も働く！」

ドレス姿のオリアンナが、嬉々として声を上げた。

「……えええつ？……」

「僕う？」

騎士達が驚愕し、トキが頭を抱える。

店主とおばさんが不思議そうに、愛らしい姫君に目を向けた。

大勢の人間が驚きの声を上げるのは無理もない。

《王族》の姫君が公務以外の、まして肉体労働をしようとしているのだ。

侍女ミアが止めに入る。

「いけませんわ、エアリス様。せっかくのドレスが汚れてしまいます」

「そうだよ。君はここで待っていてくれ」

僕は必死で説得したが、好奇心の塊のオリアンナが言う事を聞く訳がない。

「嫌だ、働きたい！ 大丈夫だよ、汚れないようにするから。ね、ね、いいでしょ？ 僕も一度、職業体験してみたいと思つていたんだよ。お願い、働かせて」

キラキラした目で籠いっぱいの糖菓を両手に持った、大学街ではまず見る事のない高貴な姫君の要求と、周りの恐ろしげな騎士達の数に圧倒されて、店主とおばさんは訳も解らず頷くしかなかった。

こんな事がセルジン王に知れたら、大事おわじとになつてしまふ。  
騎士達は呆れて頭を抱え、トキとマールは面白がるように見ているだけだ。

砂糖の入った袋は重い。

それを二つ軽々肩に担いで、僕は意気揚々と糖菓店主に教えられた店から出る。

オリアンナも一つの砂糖袋を必死に抱えて、よろけながら店を出た。

彼女の細さでこの砂糖袋を抱えるのは大変そうだが、「僕が持つ！」と言つて聞かない。

周りの騎士達も侍女達も、心配するばかりだ。

「お、いいね、いいね。」「女を口説く十の方法」その六、共同作業だ。一つの事を共同でやる事で、愛が育まれる」

にやにや笑いながら、ローランドが砂糖店の前で待つていた。

「ローランド！ どこへ行っていた？」

「いや、金貨袋と間違えて豆袋持つて来ちまって、城門の外の荷馬車まで取りに帰っていったんだ。無事あつたよ、金貨袋」

ジャラツと音を立てながら、重そうな金貨袋を懐から出した。

「女の心を掴むには、金も重要なアイテムだからね」

僕は足早にローランドに近づき、六歳も年上の彼の胸座を掴んだ。

「いいか、絶対オリアンナの前でその十の方法を言うな！ 判ったな！」

「おや？ ひよつとして、口説き方を教えてもらっている事を恥ずかしく思っているのかな？ お坊ちやまのプライドって奴？」

「そうじゃない！ とにかく、絶対言うなつ、いいな！」

オリアンナが女を口説く十の方法なんて知ると、それを実践しようとするだろう。

ただでさえライバルが多いのに、女のライバルがこれ以上増えるのは困る。

子供の頃から一緒にいる彼女は、本当は男なんじゃないかと時々思える。

王配候補として僕を選んだのは、セルジン王を助ける協力を約束したからだ。

男として僕が好きじゃない、幼馴染みで一番素直になれる協力者だから。

僕はその事で、彼女に翻弄され続けている。

初デートなのに、少しは僕を好いてくれているのか？

僕は無意識にオリアンナを見る。

重い砂糖袋を抱えて、でも嬉しそうに僕の元に来ようとしている。

僕の事を、どう思っている？

勘ぐるような笑いを浮かべて、ローランドが言う。

「ふふん、さながら恋に悩む男の顔だな。いいか、十の方法その七、接触だ。手をつなぐ、抱きしめる、何でもいい。お前に気があるなら、頬を染めるなり反応があるはずだ。確かめろ！」

「……そんな事、昔からやってる。裸で寝てた事だつてあるんだ」

「馬鹿！ ガキの頃と、今じゃ反応が違うだろ。肝心なのは、今だよ、今！」

突き動かされるように、僕はオリアンナの元に向う。

彼女は少し微笑んで足を速めたが、重い砂糖袋を持ったまま慣れぬドレスでバランスを崩し転びそうになった。

重い砂糖袋二つ抱えた僕は、受け止めようとして膝を折り彼女を支える。

間一髪で受け止めた。

オリアンナの長い金髪が、僕の顔にかかる。

ホツとした彼女は、転びかけた事に少し頬を染めながら礼を言った。

「ありがとう、エラン」



僕はそのまま、オリアンナを抱き寄せた。

彼女の持つ砂糖袋が二人の間に入り、身体の接触を阻む。

それでも構わず言った。

「君が好きだよ。オリアンナ」

抱きしめられ僕に合せて膝を折ったオリアンナは、驚いたように彼の顔を見上げ覗き込む。

「どうしたんだ？ 急に……」

後ろで見ていたローランドは感心した。

おおく、言われなくても十の方法その八、告白を実践しているじゃないか。

彼は興奮し、心の中で叫んだ。

あと一押しだ！

十の方法その九、ロマンチックにくちづけだ！

雰囲気盛り上げて、キスをしろ。

僕の鼓動が高鳴る。

周りが見えず、大勢の騎士達に囲まれている事さえ気にならなくなった。

「僕は君を守る。何があっても……、君の側を離れない。例え君が、僕を拒んでも」  
「……僕は、拒んだりしないよ」

その言葉を聞いて、僕は彼女に深くくちづけをした。

周りの騎士達は笑いながら、見て見ぬふりをする。

一人盛り上がっているのはローランドだ。

「完璧だ〜！ エラン、女を口説く十の方法、その十、そのまま押しとお……」

最後までいう事が出来なかった。

僕がオリアンナを抱きしめていた時も大事に担いでいた二つの砂糖袋を、思いつきりローランドに向けて投げつけたからだ。

彼は二つの砂糖袋の直撃を受け、ぶっ倒れた。

「だから、絶対言うなど言っただろう！ 大体、僕を煽るような事ばかり言って、君はどうなんだよ！ その十の方法だかを、実践した事あるのかっ？」

怒り心頭の僕は、勢いでローランドの一番の弱点を責めてしまった。

彼は、独身だ。

投げつけられた砂糖袋が破け砂糖塗れになりながら、彼は不貞腐れたように真っ赤になりながら叫ぶ。

「ある訳ないだろ、だからお前で試したんだ！ 俺の妄想する女を口説く十の方法が、ど

れだけ正しいか！ ふんっ」

そのまま砂糖の山の中で、彼は僕に背を向けた。

「俺はお前みたいにご立派な身分じゃない！ 落ちぶれた男爵家の次男坊なんて、見向きもされないんだよっ」

吐き捨てるように、ローランドが言う。

「女と付き合いたいの？」

「当たり前だ！ あっ……」

姫君が彼を覗き込んで聞いた。

ローランドは真っ赤になり、その手を取ってオリアンナはにつこり笑った。

「レント領に戻れたら、僕の知り合いの女の子紹介してあげるよ」

「ほ、本当……、ですか？」

「うん。だから、教えてほしいんだ、僕にも……」

「え？」

「ふふ、女を口説く十の方法」

僕は真っ青になった。

「絶対に、ダメだ——っ！」

結局、僕は買った糖菓の二十倍近い金額を払う羽目になった。

砂糖の値段が思いの外、高額だったのだ。

怒りの任せて取った行動に、嫌気が差す。

オリアンナは僕が買った糖菓を、大事そうに両手に抱え微笑んだ。

その笑顔を見ていると、馬鹿な行動を取った事も何となく許せてしまえるから不思議だ。

彼女は糖菓を皆にあげるのだと張り切っている。

「エラン」

「ん？」

「また、デートしよう」

僕は、にっこり笑って頷いた。

## 第三話 大学図書館

「この後は、どちらへ？」

立ち寄った糖菓店を出た後、皆に知らせるようにマールが聞いてくる。

「大学図書館に行きたい。見たい装飾写本があるんだ」

「エアリス姫、もう少し姫君らしい言葉使いをした方が、そのドレスには似合うよ」

エランがわざと偽名を強調して、姫君らしさを要求してくる。

僕は少しムツとしながら、彼を睨みつけた。

「分かっておりますわ、婚約者殿。養父<sup>ちちうえ</sup>上からセイゲル教授宛に、お手紙を預かっていませぬの」

僕は舌を噛みそうになりながら、なんとか女言葉で目的を伝えた。

大学図書館管理者であるセイゲル教授に会い、希少本の閲覧の許可をもらえるよう、養父ハルビインに頼み込んで、手紙を書いてもらった。

セイゲル教授は彼の恩師でもあり、行軍参加で後衛部隊を率いるハルビインは、簡単に持ち場を離れる事が出来ないため、恩師への挨拶を手紙に認めた<sup>したた</sup>。

屍食鬼がレント領を襲撃した恐怖は、あまりにも生々しい。

レント領と近いメイダールの恩師を心配したのだ。

薄く霧が立ち込める中、案内人が目印を見失い完全に道に迷った頃、突然後ろから男の声があった。

「大学図書館に行きたいなら、真直ぐ行つた角を左に曲がるとありますよ、殿下」

一同は驚き、近衛騎士は警戒して剣に手を置く。

振り返るとそこには、レント領騎士隊の黄褐色の長衣と防具を身に着けた、二十代半ばの男が熟知り顔で立っていた。

「えつ、ベルン指揮長官？」

「よお、エラン、久しぶりだ。殿下、麗しいお姿、眼福に御座います。お館様に命じられて、このロイ・ベルンが道案内を承ります」

いつの間にか紛れ込んだレント騎士に、誰一人気が付いてなかった事に、マールとトキが眉根を寄せる。

簡単に紛れる事など出来ないはずだ。

エランは大喜びで元主君に近付く。トキと近衛騎士達はまだ警戒を解かず、ベルン長官を注視している。

「皆、彼はレント騎士隊のロイ・ベルン指揮長官だよ。エランの元主君だから、心配ないよ。ベルン長官は、この大学出身？ 案内は助かるよ、全員で迷子だから」

「出身ではありませんが、親族がおります。エアリス姫、言葉遣いとお姿が、ちぐはぐで面白いですよ」

にやにや笑うところは、エランそっくりだ。

僕は真つ赤になって、「助かりますわ」と言い直した。

「貴殿は国王陛下の許可を取って我々に紛れたのか？ 場合によつては、この場から立ち去つてもらう」

「トキさん！ 彼は大丈夫だから」

「国王陛下からは、殿下の護衛役を仰せつかつております」

ベルン長官は一礼した後、腰に提げた鞆から書類を取り出しトキに渡した。

受け取つた書類を一瞥し、長官に領きながらトキは剣から手を離した。

近衛騎士達も、それに倣う。

「彼はレント領主と国王陛下の許可を取つて、この任務に加わっている。信頼して良い。親族がいるのでは、この地に詳しかろう、道案内を頼む」

「御意」

僕とエランは喜んで、ベルン長官の横に並んだ。

養父ハルビインの配慮に嬉しくなる。

大学図書館は複雑な道の向こうにある。

丈の高い塔が付いた建物の二階部分までが、大学生に解放されているとベルン長官が教えてくれた。

マールが懐かしむように、霧に覆われた塔を見上げている。

「私も馬車で来て荷を運んだだけです。道までは覚えていませんでした。すっかり保管されていると良いのですが」

僕達はその古い図書館の敷地に、足を踏み入れた。

入り口に守衛が立っている、この街の自警団の服装だ。

大勢の護衛と侍女は、外で待機する事になった。

扉を開けて中に入った途端、独特の匂いが鼻に付く。

養父の書齋に入った時と、同じ本の匂いだ。

縦長の鉄格子がはまった窓がいくつもあり、多くの書架が書見台と合わせて並んでいる。

貴重な本は、どれも鎖で書架につながれている。

それを読む学生達、身形の良い年配の男達、本を管理している司書達が、静かにその場にいた。



。学生達は本を読みながら、何かを書き写している。

僕は小声でエランに聞いた。

「あの書いている板は何?」

「蠟版ろうばんだよ。君は使つてないの?」

「紙だよ」

「……」

「さすが《王族》》と言いたそうな視線を無視して、疑問をぶつける。

「蠟か。消えるだろ? 残すには何枚もいるし……」

「残さないよ。書きながら暗記して消すんだ。次に覚える事を、書くからね」

僕は目を見開いてエランを見た。

彼が賢いのは蠟版を使っているからだと思える。

今度、家庭教師が何と言おうと、僕も蠟版を使う!

妙な対抗意識を覚えながら、どう見ても場違いな自分の服装に、落ち着かなくなった。

ベルン長官が「静かに」と、口に指を当てる。

彼は近くにいた司書に何かを小声で話し、司書は奥の扉を指して国王軍の目立つ二団

を案内した。

扉の先は塔と直結していて急に天井が高くなり、円形の壁一面が本で埋められてい

る。

やはり縦長の大きな窓がいくつもあり、塔内は明るい。

窓の鉄格子は、どこことなく本の牢獄を思わせた。

本の修復をしている者、背の高い書架に梯子はしごが掛けられ、その上で大量に重そうな本を持つている男もいた。

落ちたら死にそうな高さだ。

迷う事無く長官は、塔の二階への階段を上る。

同じように本に埋もれた場所を想像していたのに、普通に部屋の扉があるだけだ。

三階へ続く階段は見当たらない。

ベルン長官は変なリズムで、部屋の扉をノックする。

「入りましたまえ」

中から不機嫌そうな男のぶっきらぼうな声が聞こえ、近衛騎士隊長トキ・メリマンの指示で護衛達は部屋の外で待つ事になり、五人だけで中に入る。

五十代ぐらいの男が、一枚の書類を手に机の周りをグルグル回っていた。

「レパート君、至急カテナ写本工房にいる小遣い稼ぎの学生達を、引き揚げさせたまえ。また値上げ要求だよ、毎回足元を見おつて！ 別の工房に変えてやる」

「今、羊皮紙は需要が少なくなつて値上がりしているから、どこに頼んでも同じですよ」

「そんな事は、解っておるわい！ ああ、腹が立つ。薄っぺらな紙なんかに写本したら、本が泣くわ。誰だ、紙なんて作った奴は」

「時代の流れです。今は紙がいくぶん値下がりがりしていますから。レント領でも製紙場が出来そうですよ」

「……レパート君じゃない？」

セイゲル教授は変わった形の鼻眼鏡を下げながら、声の主を確認した。

あまり視力が良くないようだ。

「なんだ、ロイじゃないか！ 久しぶりだな、お母さんは元気か？」

「はい、元気です。お祖父さんも、元気そうで何より」

「ベルン長官の親族って、セイゲル教授？」

長官はにやにや笑いながら頷いた。

領主が彼を指名した理由がよく解った。

「ところでお祖父さんにお客様ですよ、エアリス様、《王族》の姫君です」

教授は目を丸くして、僕を見る。

最敬礼をしようとして膝を折ったが、顔をしかめた様子から膝が悪い事と判り、僕は慌てて彼の腕を取った。

「無理しないで……下さい。私は《王族》として育っていませんから、最敬礼されても困

るんです」

舌を噛みそうになりながら、何とか女言葉を通す。

教授は膝を折らずに済んだ事に感謝を述べた。

「突然の来訪で驚かれた事でしょう。これはレント領主ハルビン殿からのお手紙です。私にはどうしても探したい物が、この図書館にあるのです。もし、許可をいただけるなら」

そう言つて、マールを見た。

彼は頷き、手紙を受け取ったばかりのセイゲル教授に礼を取る。

トキは部屋の隅で、周囲の様子を窺っている。

「私はマール・サイレスと申します。国王陛下の薬師を務めております。お見知りおきを」

マールは教授に一礼した後、ベルン長官に向き直り、厳しい顔付きで告げた。

「レント騎士殿、ここまでの案内を感謝します。ここから先は極秘事項故、あなたも外へ出てもらえますか？」

「はい、構いませんよ。じゃあ、お祖父さん、後で家に行くよ」

「あ、ああ、後で」

教授は緊張した面持ちで、ベルン長官を見送った。

「マールは何時になく厳しい表情を崩さない。」

「失礼ですが、十六年前、セイゲル教授はこの図書館の担当教授でしたか？」

「十六年前？ ブライデインの陥落前か。いや、私はその頃デイスカール公爵家の長男の家庭教師をしていたな。此処へ来たのは、ブライデイン陥落後だ」

「……では、その当時の担当教授をご存じですか？」

「そりや、学長だろう。ケイデイス様から、ここを引き継いだから」

僕とマールは顔を見合わせた。

小柄な学長の姿が、怪しげなイメージで心に浮かぶ。

「では、ブライデインの王立図書館の避難書物類の中に、この位の大きさの綺麗な浮彫を施した、鍵付の書箱はご存じありませんか？ 浮彫は確か、二つの白亜の塔が描かれています」

マールは肩の位置程に両手を広げ説明をする。

教授の表情は見る見る険しく、警戒するように彼を睨みつける。

「……薬師殿、《王族》に関する物は極秘とご存じなら、国王陛下の許可は取得済みですか？ 許可証が無ければ、あれに触れる事も叶いません！」

「……私の許可じゃダメ？ 一応<sup>王族</sup>なんですけど」

僕が明るく聞いてみたが、教授は首を横に振るだけだ。

「姫君、失礼ですがこれはお預かりした時の決まり事です。いくら《王族》でも、通用しません」

突然扉が開き、声がした。

「開閉を許可しよう。何が収められているか、私も興味がある」

「国王陛下！」

セルジン王が近衛騎士隊を引き連れ、全てを見透かすように立っていた。

僕達は凍り付いたように動けなくなり、トキは額に手を当てる。

陛下に絶対内緒でというマールの計画は、最初の段階で崩されたのだ。

「エアリス姫、このような場所でデートか？ 言ったはずだ、デート以外でそなたが行動する時は私も付き合おうと。薬師マール、何を計画している？」

王の緑の瞳が、楽しそうに笑う。

後を付けられていた事に、僕達はまったく気付いていなかったのだ。

僕は庇うように、マールの前に立つ。

「陛下を生きとお救いする方法を、探す計画です！」

セルジン王の顔から、楽しさが消えた。

## 第四話 黄金の本の首飾り

「姫君、いけません！ 陛下、姫君を巻き込んだのは私です。どうか、姫君はご容赦下さいー！」

マールは王の怒りを、一人で被るつもりでいる。

「生きて助ける方法か……、そんなものがあればな。マール、王立図書館の極秘文書の存在を、なぜそなたが知っている？」

「私は……」

薬師は言葉に詰まった。

「そなたは国王軍に入る前、カドル侯爵のバイデル家に仕えていた薬師と聞いている。ペイン・バイデル候はブライデイン陥落の前に、アドランによつて暗殺されたな」

「はい。あの頃、私は成人したばかりで、薬師見習いとして師の指示に従つて行動していました。ただ……」

「ただ？」

「師はおそらく密偵です。誰かの指示で隠密行動をしていた。私は疑問を持ちながら、その手伝いをしたのです」

「師の名は？」

「偽名だと思えますが……、アドラン・ブライン」

「アドラン？ 魔王と同じ名？ だから候に仕えていた頃の話を、伏せていたのか？」

「申し訳ありません」

王は考え込むように、彼を見る。

「師はどうなった？」

「判りません。ベイデル候の館が襲撃された夜、火事で亡くなられたものと……。私は辛うじて生き延びましたが、大火傷を負い生死を彷徨いました。その後はお会いしておりません」

「十六年前か……。畏かもしれぬ。私は一部の書物の避難は命じたが、極秘文書の避難等命じておらぬ」

「え？」

「数の多い極秘な物を外に持ち出すより、その場で自然消滅させた方が極秘に出来る。私ならそう考える。実際今も王立図書館は失われてはおらぬ、極秘文書類もそのままある。失われたのは人だけだ」

「では、あれは？ 私がここに運び込んだ物は、一体……」

王は跪き最敬礼ひざまずをするセイゲル教授を立たせ、無理をするなど告げた。



「その書箱を開けてはくれぬか？ それとも、私の許可証が必要かな？」

「とんでもございません。今すぐ、ご案内致します」

教授は部屋の奥の扉を開けた。

そこは上階へ続く階段へとつながっている。

僕はセルジン王に続いて、壁沿いに曲がった三階への階段を上る。

途中から何か違和感を覚えた。

それは《王族》に会ったような強烈な存在感、誰かの思考が上階に存在している、そんな心配だ。

「感じ取れるか？」

王が囁き、僕は頷く。

同じ気配を感じ取っているマールは、青ざめた顔で呻くように言う。

「誰か、上にいるのではありませんか？」

《王族》がいるのか？」

「……まさか、魔王では？」

マールのその言葉に近衛騎士隊長であるトキは、数名を先発として上階へ上らせた。

上階で作業をしていた者達が何事かと騒ぎ、それを制する騎士達の声が響く。

セイゲル教授は痛む足を押して、必死に階段を上っているがやはり遅い。

僕は彼の腰を横から持つて支えた。

「おお、優しい姫君、ありがとうございます」

「ベルン長官ほどの力はありませんが、代わりと思つてください」

僕は気さくに笑つて答え、教授と共に三階に辿り着く。

窓は風を通すための細長いものが二か所に付いていて、柔らかい光をもたらす。

壁一面の棚に分類整理された巻物と、中央の棚が仕切りのようになり、多くの書箱が置かれていた。

戸惑っている三人の司書達に、教授が下に降りるよう声をかけ、彼等は従う。

マールが運び込んだ極秘文書を収めた書箱は、仕切りの向こう側にあると教授は教えた。

仕切りには扉があり、教授が鍵の束をジャラつかせ、大きな錠前に合う鍵を探し始める。

心配はその扉の向こうにある。

何が飛び出すか緊張しながら見守るうちに、ガチャリと錠前の開く音がした。

王は僕を庇うように前に立つたが、開いた扉から何も飛び出してこなかった。

近衛達が踏み込んだ後、皆が入る。

そこにも二つの窓があり、壁沿いに積み上げられた書箱を優しく照らしていた。

埃に埋もれた床は、長年も誰も立ち入っていない証拠だ。

「これです、私が運んだ物は」

書箱は全部で三箱あった。

いずれも豪華な浮彫が施してあり、頑丈そうな鍵が掛けてある。

王と僕はそれには目もくれず、対面にある古びた一つの書箱を見ていた。

鍵は掛かつていないが、簡単には近づけそうもない。

《王族》の気配は、そこにあつた。

「エアリス、手を」

セルジン王が左手を僕に差し出し、意図が掴めないまま僕は右手を王の手に乗せた。

二人は向き合い、王の誘導により組み合わせた手を、古びた書箱に向ける。

「自分の手を針の先端だと思ひ、布に穴を開ける事を強く思い起こせ」

僕はその通りにした。

すると、まるで雷が鳴るような音が室内に響き渡り、周りの騎士達を驚かせる。

「何の音だ？」

「結界が破れた音だ、害はない」

王は皆を安心させるように、静かに微笑む。

「教授、これは何時頃から、ここにあつた？」

「私には判りませんが、これらは皆《王族》に関わる物と聞いております。おそらく記録が残されているはずですよ」

結界が破られた後、《王族》の存在感は消えた。

王は古い書籍の蓋を開けると、中には古布に包まれた何かがあった。

取り出し布を開き、王が手にしたのは首飾りだ。

それは黄金に輝く本の形をしていた。

「エアリス姫以外は、階下に降りよ。トキ、階下の扉のこちら側に近衛騎士を配置させ、何か異変をあった時はすぐに駆け付けよ。それ以外は教授の部屋へ戻れ」

「はっ」

トキの指示で全員が階下に降り、王と僕の二人だけになった。

「それは何ですか？ さっきの音……、結界？」

父の館でも大きな音がした後、テオフィルスがそう言ったのを思い出す。

「他人が近づけぬように、魔法で幕が張ってあった。《王族》以外、あの結界は破れぬ。これも《王族》以外見る事の出来ぬ、昔から玩具として高官達の目を欺いてきた伝達方法だ」

「《王族》の気配は……、結界？」

「そう、ここに《王族》を呼び寄せするための結界だ。何が隠されているかは見てみないと判らない、罨かもしれぬ。危ないと感じた時は外へ出て、トキに知らせるのだ」

僕は頷いた。

王は僕に黄金の本の首飾りを渡す。

「解除方法を教える、いずれそなたも使う日が来るかもしれぬ。まずは「開け」と強く念じながら息を吹きかける」

僕はその通り、右手に持った小さな本の首飾りに息を吹きかけた。

すると首飾りの黄金は消え失せ、掌より大きい本物の本が出現する。

驚きに目を見開き、危うく本を落としそうになった。

「次に「伝えよ」と念じながら、本を開く」

その通りにする。

今度は本から煙のようなものが立ち上る。

「ここで「映せ」と念じ、本を前へ投げる」

本を僕の前に床に放った。

そして、それは現れた。

見た事のない長い立派な長衣に王冠を被った姿は、誰が見ても国王と判る。年齢は三十代半ばだろうか、苦悩に満ちた顔はその人物を老けさせている。

《我は第十三代エステラーン国王、セイエン・ローウエル・ベイデル。後世の《王族》のために、この記録を残す》

男は言った。

セルジン王は衝撃を受け、古の王の顔を凝視する。

「ベイデル」は侯爵家の姓名だ、《王族》であるはずがない。

《今現在、我が弟マルシオンが水晶玉の中に入り、イミル王国からの侵略を阻止した。戦いは終わったが、《ソムレキアの宝剣の主》の我が娘ロレアーナが亡くなった》

宝剣の主の死！

僕は恐ろしさのあまり、王にしがみ付いた。

《マルシオンは魔物のように変化し、我が国は過去最悪の事態を迎えている。翼の生えた魔物が発生し、王都メイダールの人々を喰らい、それと同時に山系の竜が現れた。竜を追い払う、〈ありえざる者達〉がどこにもいない！》

苦悩する古の王の悲嘆が、僕の脳裏にこびり付く。

《出来ればマルシオンを元に戻したいが、方法が見つからぬ！》

セルジン王は無意識に、僕を抱きしめた。

《後世の《王族》に警告する。もし我が国が存続すればの話だが、これを見た者は今すぐ水晶玉を海中深くに沈めよ。《王族》は絶対あれに触れてはならぬ！ 国の守りだが、臣下や国民が何と言おうと、すぐに処分せよ！》

そう言つてセイエン王は消えた。

あまりの恐ろしさに、震えが止まらない。

二人は声を出す事も出来ず、ただ抱き合つたままお互いが落ち着くのを待った。

王が静かな声で囁く。

「オリアンナ……、そなたは死なないでくれ」

僕は小さく頷いた。

しばらくして冷静さが戻った時、多くの疑問が沸き起こる。

山系の竜と古の王は言っていたが、アルマレークの竜が攻めてきたのだろうか。その時代に、アルマレーク共和国は存在したのか？

竜イリを思い出す。

可愛い従順なイリが人を襲う姿等、想像も出来ない。

それから竜を追い払う、〈ありえざる者達〉？

聞いた事も無い存在だ。

何より宝剣の主が亡くなった後、水晶玉に捕らわれた者はどうなったのだろうか。今エステラーン王国が存在しているという事は、危機を回避できたという事だ。

《ソムレキアの宝剣》の魔力を借りずに、どうやって？

忙しく動き回る騎士達を見ながら、僕は考えに沈み動く事も出来なかった。

エランが心配そうに覗き込む。

「大丈夫？ 顔色が悪いよ」

僕は無理に作り笑いをして頷く。

セルジン王は、マールが運び込んだ書箱三箱を開けようとしていた。

セイゲル教授が多くの鍵を試している。

マールは対面にある古びた書箱を覗き込んでいた。

書箱の蓋にベイデル家の紋章が描かれ、埃に塗れ薄れたそれは魔王によつて滅ぼされ



た侯爵家の運命そのものに見える。

彼は深い溜息を吐いた。

「開きましたよ、国王陛下」

一つ目の箱が開いた。

覗き込むセルジン王の前で、開かれたそれは空だ。

マールは狼狽えた。

「そんな…、私は確かにこの目で見ました。この中には書物や、巻物、それから宝飾類が入っております。盗まれたのか？」

「そんな事は、ありえませんが！ ここは嚴重に管理されています。盗難など絶対にありえない」

「マール、入っていた物の中に、これと同じ物はあつたか？」

王は彼の目の前に、黄金の本の首飾りを指し出した。

「……ありました。こんな宝のような玩具がなぜここに入っているのか、侯爵様が不思議がつておられましたから」

「そうか。では是が非でも、見つけ出さねばならぬ。他の二つの箱は？」

他も鍵を見つけ出し開かれたが、同様に空だった。

マールは落胆し、教授はありえないと喚いた。

王はこの図書館全体で《王族》に関わる記録がないか丹念に確認した後、図書館から皆を引き揚げさせた。

学生達の勉強の邪魔をしたくなかったからだ。

僕は外に出た。

薄ら霧に覆われた街は、まるで僕の心の内と同じく先が見えず掴めそうで掴めない、不安で身も心も重く沈み込ませる……、そんな風に見えた。

## 第五話 謎の部屋

《王族》の結界があつた事で、僕達の取つた行動は不問とされた。

なにより黄金の本の首飾りに隠された古いにしへの王の言葉が、セルジン王の心を占めていた。

「あの書箱の中身が空ですか……、そんな事がありえますかな？　こここの図書館の警備は嚴重だと思えますが」

ヴァール・ケイデイス学長は訝いぶかしむように、セルジン王と男装姿いぶかに戻つた僕を交互に見て言った。

歓迎の宴は、始まつたばかりだ。

騎士の大広間とは程遠い広さだが、温かい雰囲気いぶかを醸すその晚餐室は、緩やかな楽の音に温かい料理と麦酒で食卓の椅子に座る人々を潤わせた。

雛壇いぶかに設置された豪華な食卓に、王を挟んで僕と学長が座っていた。

「まして《王族》に関わるあの空間は、立ち入り出来ぬ事になっております。盗難等ありえませんか」

王は考え込むように学長を見ながら、杯を口にしました。

彼の前の食卓に置かれている美味しそうなスープも、パンも、切り分けられた牛と羊の塩漬肉も、サラダも、全て外にいる兵士達に分配される。

王は一切手を付けず、マールの淹れる薬草茶だけを飲む。

影であるセルジン王には食べ物も飲み物も、本当は眠る事さえも必要ないのだ。

だが人と行動を共にする時に、何かを口にし、眠る習慣を王が忘れると、周りが王に従い無理をする事になる。

だからあえて口にし、眠るのだ。

王様は大変だと思いながら、僕はいつの間にか彼の横顔に見惚れていた。

「ヴァール、あれを受け取った時の記録は作ったか？」

「確か……、侯爵様に聞いた通りの記録は取りましたが、中身は確認しておりません。見ではならぬと言われ、鍵だけ預けられました」

「そうか。では後程、その目録を確認したい」

「<sup>かしこ</sup>畏まりました」

わずかな手掛かりでも確認したい。

国王救出に繋がるかもしれない物が、失われていたのだから。

僕は小さく溜息を吐いた。

「オーリン、そなたは食べなさい。それ以上細くなったら、旅に支障が出る」

「……はい」

僕はスプーンを手に取り、うさぎ肉の入ったシチューを口にした。

その美味しさに顔を綻ほころばせ、舌鼓を打つ。

これを作った料理人は、凄く腕がいい。

「この大学街は古くからあるが、それ以前は大都市だったと聞いた事がある」

「さすが陛下！ よく御存じでいらっしやる、その通りです。今のメイダールは、大昔に大火で消失した都市の一部です」

「石造りなのに、消滅する程の大火とはすごいな」

「竜が放った炎です。消失します」

僕は学長の言葉に、食べていた羊の塩漬肉を喉に詰まらせそうになった。

慌ててお茶で流し込む。

学長の話は、黄金の本の首飾りで伝えられた、セイエン王の話と符合する。

屍食鬼が現れ、山系の竜が現れ、大都市だったメイダールは消失したのだ。

《竜を追い払う、〈ありえざる者達〉がどこにもいない！》

セイエン王の苦悩に満ちた顔を思い出した。

王都を失った《王族》は、どうなったんだろう？

なぜエステラーン王国は存続出来たのだ？

水晶玉に捕えられた王弟……、なんて名前だっけ？

《我は第十三代エステラーン国王、セイエン・ローウェル・ベイデル》

突然、古の王の名の方を思い出し、僕は雷に打たれたように驚き立ち上がった。

「陛下、ベイデル……、ベイデルって……」

「オーリン、その話はならぬ！ 座りなさい！」

セルジン王は眼光鋭く、睨みつけてくる。

「……………」

僕は今頃気が付いた事柄に意識を囚われたまま、王の剣幕に押されて椅子に座りなおした。

《王族》の家名が「ベイデル」？

「ブライデイン」の《王族》ではない！

僕が家庭教師から習ったエステラーン王国の歴史は、《王族》は昔からブライデインの一族だった。

王都ブライデインの名前の元となった一族は、エステラーン王国建国の昔から変わらなと聞いていた。

それなのにあの記録は、一体何を意味する？

「竜にメイダールは滅ぼされたのか？ アルマレーク共和国はそんな昔から我が国と

争っていたのか？」

「アルマレーク建国以前の話でしょう。あの国が出来て、竜が大人しくなったと言われているから」

「ふん。なるほど、大人しくね」

王は鼻で笑った。

僕は七竜リンクルの影が放った魔法の炎を思い出した。

あれが本物の炎だと事を考えると、石造りでも持たないだろう。

アルマレーク建国以前、メイダールが王都だった頃、竜騎士はいなかったのだろうか。ただ竜だけが攻めてきたのなら、それは魔物と変わらず、都市は消失する。

「唯一消失を免れたのが、あの図書館の塔です。多くの蔵書が残り、そこに学生が集まり今の大学街が出来た。ですが、我々もあの塔の全容は判らんです」

「全容？」

学長は喋りすぎたと思ったのか、喉を潤すように麦酒を口にする。

セルジン王の優しい緑の瞳が、話の続きを促した。

「……塔の最上階へ上る階段がないのです。高さを計測すると、四階が存在しているはずですが、入り口がない」

「なるほど」

「二度、大工職人を呼んで塔の修理をした時、屋上から中への入り口が塞がれていると言  
うのです。壊して入るように言ったのですが拒否されまして、外側だけ修理して終わ  
りました」

王は頷きながら、微笑んだ。

「結界があるのだ……、何かが隠されている。明日、もう一度あの塔の探索をしても構わ  
ぬか？」

「もちろんです。《王族》の結界があつた以上、四階もその可能性はありますな」

王と僕は、お互いを見て頷いた。

歓迎の宴が終わつた後、割り当てられた休息場所へ皆が向かい始めた。

学長を手伝う学生達が、後片付けに勤しんでいる。

王は緩やかに晚餐室を出て、静かに僕に聞いた。

「そなたにはどう見える、この街が？」

彼の緑の瞳は愁いを含み、僕を見つめながら遠い過去を見ているように思える。

暫ししばの人払いを王はトキに告げ、周りの騎士達は遠巻きに、二人の会話を邪魔しない

位置まで後退し護衛する。



「……王都メイダール、あの王がそう言った。皆が知らないエステラーン王国が、かつてここに存在したのだ」

「どうして、隠したのか判りません。そんな事が出来るのか……。エステラーン王国の歴史が、捻じ曲げられている？ 一体、誰によって？」

王は深い溜息を吐いた。

「よくある事なのかもしれぬ、いつの世も権力者によつて歴史は捻じ曲げられる。ブライデインがバイデルの記録を消した可能性もある」

「でも、侯爵家の人々の記憶までは消せないと思います。バイデルの《王族》がいなくなつても、バイデルの血を引く者達が……」

「彼等には、《王族》としての能力が無くなつたのかもしれない」

「そんな事が……？」

水晶玉を扱う能力がある故に、ブライデインの《王族》は存在している。

《王族》としての能力が失われた場合、ブライデインも一貴族になるという事だ。

「では、《王族》は？ ブライデインの《王族》は、どうやってバイデルと入れ替わつたのですか？ 誰が認めるんです、……《王族》って？ 権力ではなく、必要なのは能力なのこ？」

「……私も、それが判らぬ」

僕は窓の外を見た。

霧に煙る中庭の木々が、枝葉を白く濁らせている。

「霧……、みたいですね」

「何が？」

「先程の陛下の質問です。この街がどう見えるかって」

「ああ」

「全て霧に覆われて、人も建物も実体もなく掴みどころがない。こんなに歓迎を受けているのに、まるで幻の中。何かが、変です」

「幻か……、そうだな。近いうちにこの霧は……、晴らさねばならぬ」

セルジン王は悲しげな表情を見せながら、窓の外を見ていた。

何か僕の言葉が、王を傷つけてしまったようで戸惑いを覚える。

「……オリアンナ、明日メイダールの《聖なる泉》から帰った後、図書館の塔の四階へ行く。結界を破るのはそなただ」

「え？」

僕は驚き、王の意図を探るように、緑の瞳を覗き込んだ。

「私は影だ、生きている《王族》は、そなただけ。そなた以外、あの結界は破れぬ」

「……はい」

「影もまた幻。オリアンナ、そなたは何があっても強くある事だ。幻も影も、いずれは消える」

まるで今すぐ王が消え入りそうので、僕は無意識に王の腕を掴んだ。

そして懇願するように囁く。

「僕が強くなれば、影は消えないでいてくれますか？」

「それが……、許されるならば」

その回答にもどかしさを感じた。

心の奥底に潜む王への思いは、行き場なく燻り続けている。

影の王は、ただ優しく微笑むだけだ。

胸の痛みを抱えながら、僕はゆっくりと王の腕を離れた。

## 第六話 呪の魔法

セルジン王と別れて、王の部屋の隣に割り当てられた部屋へ急ぐ。

エランに買ってもらった糖菓を、二人で小分けにする約束をしているのに、王との話が長引いて遅れてしまったのだ。

時間を守るエランを、待たせる訳にはいかない。

僕は慌てて部屋に戻った。

霧魔に襲われてから、僕への警護はますます厳重になった。

近衛騎士が四人付き添い、部屋に入るにも最初に二人の騎士が、部屋を確認してから入らなければならない。

「オーリン殿下、お入り下さい」

彼等は部屋の外で待機し、中には女騎士と侍女達が僕を迎える。

割り当てられた部屋は決して広いものではない。

学長の家とはいえ、城とは比べ物にならないくらいこじんまりした家だ。

僕が入室して片開きの部屋の扉が閉められた時、部屋付きの女騎士の横に、妙な違和感を覚えて振り返った。

「よお、ヘタレ小竜。死んだのかと思って来てみたけど、なんだ、動けるようになったのか?」

壁にもたれてテオフィルスが、微笑みながら僕を見ていた。

その瞬間に、霧魔に襲われながら、なぜ僕が助かったのかを、まざまざと思い出す。

《リンクル! 霧魔を吹き飛ばせ!》

テオフィルスに助けられたのだ。

僕は真つ青になって、幽霊でも見るように彼を見詰めた。

「俺はお前にしか見えないし、声もお前にしか聞こえない。そんな顔をしていると、変に思われるだろう?」

楽しんでるように彼は、壁から離れ僕の方へ来る。

確かに竜の指輪の約束で、不本意にも同行を許可してしまったけど、セルジン王の魔力の圏内である、エステルーン王国内部まで入り込んでしまった彼に、嫌な予感と脅威を感じる。

「お前の王は相変わらずだな。助けてやったのに、俺に霧魔を寄せ付けられないように頼んでおきながら、お前のその後の状態を教える気もない。だから俺の方から来てやったぜ、ありがたく思え!」

来なくていい!

顔を引き攣らせながら、僕はなんでも無い素振り、ミアの方へ逃げる。この男ひとに関わると、いつもろくな事にならない！

冗談じゃない、近付くな！

侍女のミアは手にした籠を、僕に差し出しながら微笑んでいる。

彼女が「オリアーナ」の名を呼ばないか、僕は緊張で冷や汗が出た。

「糖菓を包む布と飾り紐は、こちらでご利用いしました。あとはエラン様と仲良くお分け下さいね」

「う……、うん、喧嘩しないように気を付けるよ。そこに置いといてくれ」

幸い名前は呼ばないが、内容は明らかに女子向けだ。

テオフィルスには、僕がオリアーナだと、絶対に知られたくない。

婚約者としてアルマレーク共和国に、連れ去られる事になる。

僕はミアの横を通り過ぎ、窓の方へ向かう。

ミアが僕を見ているうちに、テオフィルスは彼女の持つ籠の糖菓を一掴み取り、布と飾り紐で繰るんだ。

ミアは彼に気が付かない。

彼の大胆さに、僕の心臓は爆発寸前。

「ふふん、糖菓ね。ま、助けた礼として、一掴みもらっていくぜ」

上機嫌のテオフィルスは糖菓を一つ口に入れ、残りを懐にしまいながらゆつくり僕に近付く。

早く、出ていけ！

僕は思いつきり窓を開けた。

霧に覆われた大学街から室内に、湿気が急激に流れ込む。

「霧が入ってきますわ」

「いいんだ、なんだか蒸し暑いよ」

「そうでございませうか？」

ミアは不思議そうに僕を見つめている。

この街に入ってから、霧の寒さに敏感になる者が多いが、暑いと窓を開けるのは僕ぐらいだろう。

「お前の部屋は女ばかりだな。年上の女が好みなのか？」

「そんな事はどうでもいい、早く出る！」

小声で窓に向かつて、呟く。

本当は叫びながら彼を叩き出したいが、僕は必死に堪えていた。

騒ぎになれば警護人数が増えて、ますます自由が利かなくなる。

それは嫌だった。

テオフィルスは僕の横に立ち、窓を乗り越える素振りを見せながら、挑発するように顔を近付ける。

「それとも、お前は女なのか？」

心の奥底を見透かすテオフィルスの青い瞳が、目の前にある。

僕は緊張を悟られないように無表情を装いながら、彼を睨み付ける。

すると僕の周りから、薄っすらと光が出ている気がした。

「ふん、へありえざる者」め

吐き捨てるように、彼が呟く。

「……………え？」

〈へありえざる者〉……、彼は今そう言わなかったか？

聞き返そうとした時、いきなり部屋の扉をノックして近衛騎士が現れた。

その後ろにエランの姿が見える。

僕の鳩尾みぞおちが、危機感ききかんに悲鳴みぎを上げる。

エランの目は、明らかに僕の横にいるテオフィルスを捉えていた。

「お前！」

近衛騎士を押し退けて、部屋に入ってきたエランの周りから、ハラルドと同じ黒い渦が強烈に吹出している。



黒い渦は揺らめく炎のように、彼の身体から這い上がる。

「なんだ？ あいつ……、屍食鬼か？」

テオフィルスのその言葉を、エランに聞かせたくなくて、僕は窓辺に腰掛ける彼を突き飛ばし、雨戸と窓を閉めた。

エランは今にも剣を抜こうとしている。

「駄目だ、エラン！」

僕は恐怖を感じながら彼の腕を掴み、最悪の事態を回避しようと必死にしがみ付く。

理由もなく剣を抜くのは、騎士としての道を閉ざす危険がある。

それ以上に、今の彼は普通ではない。

突然のエランの剣幕に護衛達は警戒し、僕達を引き離そうとしたが、僕は侍女と護衛達の退出を命じた。

「陛下をお呼びしてくれ！ 早く！」

侍女と護衛達は訳が解らず、戸惑いながら退出する。

事情を知っている一人は、即座にセルジン王の元へと走る。

彼等には見えない。

黒い渦が見えるのは《王族》とその血を引く者達だけだ。

エランは今にも半変化になりそうで、僕は黒い渦が纏わり付くのも構わず、必死に彼

に抱き着いた。

「正気に戻れ！ 僕は君の側を、離れたりしないから、エラン！」

エランはハラルドに殺されかけた時、呪の魔法を掛けられている。

あれ以来、時々黒い渦を身に纏わり付かせる。

ハラルドが持ち合わせ、屍食鬼が強烈に打ち出す、憎悪に満ちた黒い渦を。

僕は毒気に苦しみながら、必死にしがみ付いた。

「エラン、僕が判らないのか？ エラン！」

「……オリ……ア……ンナ」

「そうだよ、僕だよ。エラン、元に戻れ」

くちづけをして、《王族》の魔法を使い彼を癒す。

周りから黒い渦が消え始め、彼は徐々に正気に戻り始める。

お互いの唇が離れた時、エランは僕の青ざめた顔色に気が付いた。

「オリアンナ、どうしたんだ？ 真っ青だ」

「……なんでもない、少し疲れただけさ」

彼の放った毒気に当てられたとは、口が裂けても言えない。

僕は疲れきって彼にもたれかかり、彼は戸惑いながらそつと抱きしめる。

ハラルドの呪いを解く決意をした彼は、呪いの内容を本当には知らないのだ。

黒い渦を発する前後の記憶を、エランは持ち合わせない。

何が原因でそうなるのかを、彼は知る事が出来ない。

「僕は何かを見た。この部屋で……」

「何を？ 別に変わった事はなかったよ」

「……そうなのか？」

テオフィルスがいた事を、悟られては駄目だ。

あの竜騎士は彼の憎しみを増幅する。

エランは額に手を当て、必死に何かを思い出そうとしている。

水色の瞳が、不安に揺れ動いて見える。

額には銀色に輝く綺麗な額飾りがはまり、赤い髪が優しくその額飾りを覆っている。

王がなぜその額飾りを与えたか、彼は知らない。

それは彼の暗黒の渦を抑え、魔を呼び寄せぬ王の魔力が込められた額飾り。

それでも時々、こうして黒い渦は外に現れる。

その度にエランが魔物と化していくようで、僕は悲しい。

「……王配候補になれて嬉しかったけど、それ以上に自信が無いんだ。君の心が見えなく……」

心の中を見透かされ、戸惑いながら彼の腕を掴む。

「僕はいつも、君の側にいるよ。何度も言ってるじゃないか」

エランに対する気持ちが幼馴染みに対する同情なのか、恋愛感情なのか解らなくなっている。

王への想いを、彼は無意識に感じ取っているのだ。

それが伝わってきて、僕を責める。

「……それじゃあ、いつか僕のために、花嫁のドレスを着てくれる？」

「うん。君は僕の王配候補だよ」

僕は微笑んで答える、彼を守る事がいつまで出来るのか、不安を押し殺しながら。

彼の憎しみが、王に向くのが怖い。

それ以上にセルジン王が、いつまで呪の魔法を受けたエランを、擁護してくれるのか  
が怖かった。

彼を王配候補に選んだのは、周りから守るためだ。

大事な幼馴染みを、屍食鬼にはしたくない。

王への気持ちを切り捨てられないまま、彼の気持ちに答えている。

どちらも大事だと思い込みながら、結局、心は王を求めている。

「君のままでもいいくれ、頼むから。僕は側にいるから、君の側に、ずっと……」

「何を言ってるんだ？ 僕は、いつも僕だよ」

エランが微笑む。

彼に抱きつきながら、目の前が霞のかかったように見えなくなり、そのまま崩れ倒れた。

「オリアンナ？ オリアンナ！」

彼は驚き、僕を抱き留めながら、外にいる護衛を大声で呼んだ。

## 第七話 揺れる心

何か唇に触れた。

そこから僕の中の毒が中和されていき、苦しみが緩和される。

閉じた目蓋から、涙が溢れ出る。僕はゆっくり、重い目を開いた。

「怪我から回復したばかりなのに、無理をするな。見ているこちらまで、苦しくなる」

セルジン王が心配して覗き込んでいる。

王の長い黒髪が、もう少しで僕の頬に触れそうだ。

その事に心が喜んでいる。

こんな時に、僕は何を考えているんだろう……。

「弱つてきているな、皆が心配している。エランの事は私に任せただ方が良い。彼の黒い渦に触れて、正気付かせる毎に倒れては、そのうち悟られてしまうぞ」

浮上しかけた気持ちだが、また暗く沈んだ。

エランの状態を初めて聞かされた時、僕は宝剣の魔力を使った消耗から、完全に回復した状態にあった。

僕にならエランを治せるといふ、根拠のない自信を持っていたのだ。

彼の心を受け止めれば元に戻る、簡単にそう考えていた。

彼が死にかけていた時、心の底から失いたくないと思つたからだ。

僕はエランを好きなのだ、彼の心を受け入れようと思つたのだ。

でも、ハラルドの呪の魔法は、エランではなく僕をさいな苛んだ。

彼の黒い渦を受け止める度に、暗黒は僕に纏わり付く。

まるで蛇に絡みつかれるように、僕を支配する。

「大丈夫です、今度は倒れたりしません。だから……、エランを取り上げないで下さい」

セルジン王は、首をゆっくり横に振る。

「……今以上にそなたの状態がひどくなるようなら、私はそなた達を切り離す！」

残酷なまでに冷静に、王は告げた。

「止めて下さい。彼がいなかったら僕は……、一人ぼっちだ！」

エランと引き離されるのが嫌で、僕はなんとか起き上がり、泣きながら訴えた。

王に任せれば、エランは誰を傷つける事なく呪いから解放されるかもしれないのに、

身勝手な意見を口にする。

結局は自分が大事なのだ。

孤独が嫌だから、彼と離れる気になれない。

なぜ、エランに執着してしまうのか？

本当は王以上に、エランが好きなのではないのか？

「オリアンナ、彼だけが心の支えではないはずだ」

「エランを王配候補と認めたのなら、なぜ僕から取り上げるんですか？」

「そなたは彼といて、平気なのか？」

王の言葉は、信じられないほどの衝撃となつて心を傷つけた。

涙が止まり、非難するように王を睨みつける。

守りたいと思う以上にエランを恐れ、黒い渦を無意識に拒否し、避けたくてたまらぬ状態が外見に現れている。

それは普通に笑つて過ごす彼との日常を、覆い隠すほどに。

王の言う通り、いずれエランに悟られるだろう。

それでも首を激しく横に振り、否定する。

「平気です！ 僕はエランを屍食鬼にしたくない！ 半変化みたいに彼が殺されるのは、絶対に嫌だ！」

「銀の額飾りを彼自身が外さない限り、屍食鬼になる事はない」

「……本当に？」

王は頷く。

「だから、私に任せなさい。しばらく離れ離れになるだけだ、すぐにいつものエランが戻



る」

「……………」

肩を落として項垂れる。

結局、僕には彼を助ける事は出来ない、そう思うと再び涙が溢れてくる。

「私に任せてほしい。そなたが魔界域の穢れけがに触れる等、私には耐えられぬ！」

「え？」

意外な言葉に顔を上げ、涙でぼやけ王の表情を捉える事は出来なかったが、微笑んでいる事だけは解った。

「《王族》同士は惹かれあう、当然だろう？ そなたが苦しめば、否応なく私に伝わる。耐えられぬのだ、そなたが苦しむ事が」

《王族》の存在感が影響を与え合っている。

王の孤独を僕が苦しく感じるように、王もエランの黒い渦に触れる僕の苦しみを感じているのだ。

そんな事、考えてもみなかった……。

「唯一生き残った《王族》として、やはりそなたを妃にするべきなのだろう」

セルジン王の妃にと言われ、状況も構わず期待に胸が躍った。

婚約破棄されても、行動を共にして二か月。

近くにいるほどに、恋しさが募る。

エランを守りたい気持ちを押し退けて、王への想いが口をついて出そうになる。

「僕は……」

「だが、残念な事に私は影、釣り合う立場には無い。まして死が間近だ、そなたを傷付けずに済む方法を考えるだけで精一杯だな」

王がさり気なくかわす。

「助けます！ 必ず、陛下を助けます！」

僕は彼の手を取る。

その手を握り返しながら、王は自分の意志を通す。

「私の前に、自分自身を助けなければ。エランはそなたには荷が重すぎる、私に任せるのだ。良いな？」

王の話術に誘導され、戸惑いながら頷く。

「エランを……、助けて下さい。国王陛下」

僕は熱に浮されるように王を見つめ、彼は頷き、僕を横たえさせた。

「休むのだ、オリアンナ」

そう言つて手を離し、薬師マールに後を頼んで部屋を出て行った。

後ろに控えていたマールと目が合い狼狽えた。

セルジン王に対する感情の波に飲まれ、まだ鼓動の高鳴りが治まらない。

薬師マールは何事もないように、優しい笑顔で爽やかな香りのする薬草茶を出す。

彼の顔を覆う茶色の整った髭が、相変わらず輪郭をぼかし、謎めいて見せている。

「身を起こせますか？ お飲み下さい。元気になれますよ」

身を起こし渡された薬草茶を受け取る。

鼓動の高鳴りが治まらず、杯を持つ手が震えた。

彼は静かに笑って、僕の杯を取り上げる。

「元気の出るお茶より、心を静めるお茶の方が必要ですね。淹れ直します」

「す、すみません……」

僕は真つ赤になつて謝った。

《唯一生き残った《王族》として、やはりそなたを妃にするべきなのだろう》

王の言葉は不思議な作用をもたらした。

幸福感が全身を満たし、先程エランから吸い取った黒い渦の苦しみは、綺麗に消えて

痕も残さなかった。

こんな感覚は、初めてだ。

僕は陛下が、好きなんだ。

エランがいるのに、止められない感情が渦巻いた。鼓動は治まりそうもない。

目の前に新たな薬草茶を差出されても上の空で、マールは苦笑しながら僕の手に、杯を無理やり握らせた。

「しつかりしなさい！ 王を想うのなら、生きて助け出す方法を探す方が先決です。大図書館の書箱の中身を探すのではないんですか？」

「あ……」

僕の意識は、現実に戻される。

「まずは、薬草茶を飲んで落ち着いて下さい」

薬草特有の埃っぽい草の匂い……、心が落ち着くというより大人の飲み物すぎて辟易へきえきした。

甘みが欲しいと顔を顰しかめていると、マールが笑って糖菓をくれる。

それを口にして、ようやく冷静さが戻ってきた。

「僕を妃にするべきって、初めて聞いた。陛下の言葉で……」

マールと目を合わせないようにしながら、頬を赤く染めて言う。

薬師は微笑みながら穏やかに頷く。

「オリアンナ姫と陛下が結ばれるのが、一番自然な流れだと思います。それは皆が思っ

ている事。エランには可哀そうだが、彼では役不足です」

残酷な話をしている、そう思いながら、薬草茶を全て飲み干した。

「エランの事は、陛下にお願いされて正解です。彼を大切に思う気持ちは解りますが、お身体の事も考えて頂かないと。普通の人間なら、とつくに死んでいきますよ」

「普通の人間には、毒を吸い取るなんて出来ないよ。《王族》は変だ」

《王族》は人を癒すと言われているが、王からその方法を聞いて僕は少し躊躇ちゅうちよした。口から毒を吸い取る事を思い浮かべながら、相手にくちづけをする。

吸い取った毒は、《王族》の身体の中で消えるのだそうだ。

「エランは幼い頃、身体が弱かったそうです。十歳まで生きられないと見なされていたとか。でも姫君が公爵家に来るようになって、徐々に丈夫になられたと家令殿から聞きました。《王族》の魔力は、素晴らしいと私は思いますよ」

「そうなんだ……」

エランの身体が弱かったとは初耳だ。

そういえば、小さい頃から挨拶のくちづけを交わしていた。

いつの間にか、《王族》の魔力を使っていたのか？

少しは彼の役にたっていたのだと思うと嬉しかった。

「殿下には大切な役割がある。陛下を生きとお救いする、それは殿下にしか出来ない事

です」

僕は頷く。

「我々の計画に陛下が参加した以上、単独で動く事が出来なくなりました。だから、姫君にお願ひがあります」

「え？」

「陛下の側で、情報を収集して頂きたいのです。陛下は死を望んでいらつしやる。生きる方法が見つかつて、握り潰す可能性があります」

「そんなー」

僕は驚きにマールの腕を掴んだ。

その手を彼は右手で握りしめ、強い眼力で僕の心を支配するように囁いた。

「陛下を生きて助け出す方法を、あなたが掴むのです。陛下より前に！」

「僕に……、そんな事が出来る？」

「殿下にしか、出来ません！」

「……」

確かに王が死を望んで、情報を握り潰す可能性は大きい。

生きる希望をどうしたら取り戻せるのか、僕にはまだ方法が見えない。

マールが〈抑制の腕輪〉を、僕に渡した。

何かある度に腕輪を外し、〈生命の水〉の魔力で身体を急速に回復させていたのだ。腕輪を嵌めながら、王の孤独さを思った。

一人水晶玉の中で時を止め、影として国王軍の中で大勢の人の死を見送ってきた王は、自らの死を望んでいる。

徐々に荒廃していくエステラーン王国に、絶望しか見出せなくなっているのか、一番の理解者、王弟ドウラスを亡くしたせいかな。

理解者……。

僕は陛下の事を、何も知らない。

僕が、遙か年上のセルジン王の理解者になれるとは思えない。

まして身近に接し始めて、まだ一か月ぐらいだ。それでも《王族》同士だから、少しは理解出来るのかもしれない。

「陛下は、まだ会議？」

「ええ。ちよつと、大変みたいですよ」

マールは微笑みながら、王が出て行った扉を指した。

僕はその扉を見つめて、一人呟いた。

「陛下の事を、もつと知らなきや」

## 第八話 竜騎士の血

セルジン王の部屋は、僕の部屋の隣にある。

泉の精の魔力で回復した僕は、ゆっくり王の部屋の扉をノックした。

大事な会議中に入るのはとても勇気がいる事だが、何かに突き動かされるように僕は行動した。

ただ、王を助けない、それだけだ。

マールの言いたい事はよく解る。

セルジン王を助けない気持ちがあるから、生きる事を否定する王を欺こうとする。

養母サフィーナの言葉が、一番正しく思えてくる。

《陛下の希望の光に、おなりなさい！》

セルジン王の希望の光になる事は、今の僕には難しいかもしれぬ。

でも王の行動に寄り添う事は出来る。

「入りなさい」

扉を開けると、豪華な家具が並ぶ広い部屋が目飛び込んでくる。

応接室なのだろう。



中央の円卓には宰相エネス・ライアス、レント領主ハルビイン、大将アレイン、王の近衛騎士隊長トキはじめ、王の側近達が集まり、僕の来訪を珍しげに皆が見ていた。

一人離れて窓の外を眺めていた王が、優しい緑の瞳を僕に向ける。

長い黒髪が王の動きに合わせて、さらりと揺れる。黒紫色の長衣の裾の銀刺繍が、王が歩く度流れるように煌めく。

僕の鼓動が、自然と早くなった。

「寝てなくて、良いのか？」

「もう平気です。それより、何かあったのですか？」

「マールから聞いたのか？ 余計な事を……」

王はそう言いながらも、微笑んでいる。

彼のマールに対する信頼は厚い。

「僕にも、何か手伝わせて下さい」

「未成年者は、寝る時間だぞ」

まるで親のように言う。

僕は拗ねた顔で「子供扱いしないで下さい」と王に訴えた。

「もう充分寝ましたから、寝むれません。それに〈成人の儀〉で、僕は未成年ではありません」

「良いではありませんか陛下。姫君には良い機会です、我々の会議に参加して頂きましょう」

宰相エネスが、面白がるように助け舟を出してくれた。

「殿下、こちらへどうぞ」

アレインが気遣い、王の隣の席を譲ってくれる。

「ありがとうございます」

王が円卓を囲む席に戻った。

そして隣に座った僕を迎え入れるように、微笑みながら言う。

「そなたが参加すると、会議が華やかになるな」

僕は少し頬を赤く染めながらも、会議の進行を妨げないように緊張の面持ちで、円卓を囲む王の側近達の顔を見る。

養父ハルビインと会うのが、とても久しぶりに感じる。

「アルマレーク人の言っていた事が、真実と判明しました」

「え？アルマレーク人が言っていた事？」

エネスが僕にも解りやすく説明してくれた。

「はい。アルマレーク共和国で起きたレクーマオピオンの臣下達を、我が国の避難民が襲撃殺害した事件と、同様な事件が他国でも起きていたのです」

僕は緊張しながら呟く。

「それは、まずい。どこで?」

「イミル王国です。難民を受け入れた領地先で、領主達が襲撃されたのです。難民が起こした事として、かなりの人数が捕らえられ処刑されました」

僕は顔をしかめた。

「避難民が魔王に操られている?」

王は溜息を吐きながら、腕を組んだ。

「おそらく、そうであろう。私の魔力より、アドランの魔力の方が上回っていると言う事だ」

エネスは王の失望を気にしつつ、議論の要点を伝える。

「避難民達をレント領に引き上げさせる事になりました。ただ問題は各国に親書を出した時、信用してもらえるかどうかです」

僕は頷く。

「疑うと思います、暗黒に支配された国の言葉なんて」

「今まで幾度となく他国と交渉はしており、特にイミル王国は我らに傭兵と武器を提供し、協力的ではありませんでした。しかし魔王の手が伸びたとすると、どこまで信用してもらえるか疑問です」

トキがエネスの後を引き取る。

「アルマレーク共和国にはテオフィルスの様子から、引き上げの話は容易に伝わるが、問題は我が国に隣接する、イミル王国とダザール王国、ジェイルダン共和国だ」

アレインが提案するように手を上げる。

「イミル王国にはナルザ边境伯の奥方ベネー様に行つてもらつてはどうでしょう？ 奥方はイミル王家の血縁です」

「確かにイミル王家出身の方だが、高齢で荷が重すぎる。ご子息はどうでしょう？」

別の側近の意見に、王が顔をしかめる。

「彼に務まるか？ 行軍要請を、病気を理由に一度も応じた事がないぞ」

「……姉君はどうでしょう？ 才女で名高い、エイル伯爵家に嫁いでいるが、昔から弟君より領主向きと聞いております」

エネスの提案に、王は頷いた。

「ふむ、では彼女に王命で任じよう。ダザール王国は、適任がダーリア边境伯か……。彼は曲者だ、法外な要求をしてくるぞ」

「行軍にも参加しておりますし、他におりません。彼が適任かと……」

皆が頭をひねった。

「ジェイルダン共和国は、我妻の義妹が元首補佐官の元へ嫁いでおります。サファイーナ

が適任かと」

レント領主ハルビインが提案した。

「サファイーナは《王族》の血を引く者、国の外へ出る事は禁止されている。それに、ジェイルダンは徹底した貴族支配での共和制だ。あの国で避難民が問題を起こした報告はないが、国会の認証を得る事に時間がかかりすぎる。避難民受け入れ地で、レント領主夫人が長期不在になるのは問題なのではないか？」

王の反対意見に、ハルビインは頷いた。

「ジェイルダンで信用を得ている人物が同行すれば、解決は早いかとは思いますが……、適任が他に見当たりません」

僕は何となく頭に浮かんだ考えを、口にするべきか迷っていた。

対面に座っていたアレインが気付き、につこり笑いなから言う。

「殿下、お考えを聞かせて頂けますか？」

急に意見を求められて、僕は真っ赤になった。

「あ、あの……、テオフィルスに頼んでみたらどうでしょう？ 前もって親書を運んでもらえば、認証は早いと思います」

テオフィルスの名前を出した途端、皆が顔を顰めた。

予想通りの反応に、口にした事を後悔し項垂れる。

「すみません、軽率な意見でした」

「提案としては、悪くはない。そなた……、彼に助けられた事を、覚えていたのか？」

王が僕を見ないで尋ねる。

先程の件を話すべきか迷った末、エランの汚名を晴らすために切り出した。

「覚えてはいません。でも、先程、テオフィルスが僕の部屋に現れました。僕以外には姿も見えないし声も聞こえない。ただエランだけは、気が付きました。今は覚えてないと思いますか……」

「なるほど。エランは彼を見て、ああなった訳か」

「はい」

アレインとトキが無表情に、警戒し周りを窺い始める。

「モラスの騎士の障壁は、テオフィルスには通じないようだな。私の目も欺く、再度処刑命令を出したくなるほど侮れない存在だ。そんな輩を、そなたは信用出来るのか？ 交換条件にそなたを要請してくるかもしれないね」

「……………」

僕の中で、テオフィルスとの「竜の指輪の約束」が心に息づいていた。

《俺達は手を組む。お前はオリアンナ姫を捜し、俺はお前に協力する。共に約束する》

彼はきつと、これ以上の条件を出さないと思える。

「僕がアルマレークへ行けば、魔王が追いかけて来る事を伝えてあります。だから魔王がいる間は、僕を連れ去る事はしません」

「魔王がいる間は……だな」

セルジン王が一同を見渡す。

宰相エネスが頷き、賛同の意を示した。

「今のアルマレークは交易国として他国から信頼を得ています。竜騎士が前もって陛下の親書をお届けし、彼等の特使も同行すれば、信頼は増して解決が早くなる」

アレインも頷く。

「少し後が怖い方法ですが、早い解決を目指す場合は悪くありませんね。アルマレーク次第と言うところでしょうか」

セルジン王は額に手を当てながら、しばらく考え込んだ。

「事は急を要する、使える手は全て使おう。サフィーナは特例で、ジエイルダン共和国への出国を許可する」

僕の意見に賛同してくれた事に、王に微笑みかけると、答えるように彼も微笑みを返す。

「そなたがオリアンナ姫である事に気付きさえしなければ、彼等との交渉は問題ない。竜騎士が王国に入ったとしても、数の上では圧倒的に屍食鬼の方が多い。今のエステ

ラーン王国に、共和国も無謀な手段は取らぬだろう」

王の言葉に、一抹の不安が僕の心に過よぎる。

テオフィルスは、僕がオリアンナだと知っているはず、アルマレークは呼び込むべきでない、言いようのない不安が頭をもたげてくる。

セルジン王は感じ入るように、僕を見ながら言った。

「そなたの半分はアルマレーク人なのだ、それは否定するべきではないのかもしれないかもしれぬ」  
「え？」

「誰も竜騎士を使う等、考えもしなかった。空を飛ぶと考えが変わるものなのか？ それとも、それが本来のそなたなのか？」

「それは……」

竜イリに乗って、空を飛んだ時の感覚を思い出した。

イリの可愛らしさを思うと、無性に会いたくなる。

父エドウィンとテオフィルスの姿が、同時に心に思い浮かぶ。

二人の真青な瞳は、空を映している。

「僕は多分……、半分竜騎士なんです」

否定は出来なかった。



## 第九話 ハンカチの意味

翌朝早くに学長の館を後にし、メイダールの《聖なる泉》へ向けて出発する事になった。

僕は護衛達と共にケイデイス学長の館を離れ、集合場所へと歩いている。

昨夜の会議は深夜まで続き、気が付くと僕はベッドで朝を迎えていた。

どうやら会議の最中に寝てしまったらしい。

一体誰に運ばれたのか、寝ている状態を考えると恐ろしい。

まさか、陛下と皆の前で変な寝言……、言つてないよね？

朝一番に大慌てで、セルジン王に謝りに行く。

王は涼しい顔で笑いながら、僕を迎えた。

「気にするな。そなたが寝た後、会議は終わりにした。そなたは軽いから、運ぶのも楽だな」

「すすすす、すみません！」

僕は真つ赤になって謝った。

王には何度も運ばれているのに、今更その事に恥ずかしさを覚える。

王の側に居ても簡単に触れる事が出来ないくらい彼を意識し、鼓動はリズムを速め苦しい幸福感に思考は停止する。

王の横の席での朝食も、ほとんど何を食べたのか憶えていない。

今日は昨日より、霧が濃い。

学生達が霧の中を横切る姿は、輪郭が霞み幽霊じみて見える。

集合場所へ到着すると、先に来ていたセルジン王の姿だけは真っ先に見つける事が出来た。

「あの……、大学街の霧は、晴らさなくて良いんですか？」

やんわり聞くと、王は困った顔をしながら微笑む。

「必要な事を、終わらせてからだ。それより、アルマレーク人に助けられたお礼を言わなくて良いのか？」

「え？」

怪訝な顔で王を見つめた。

王は大学街を取り囲む城門方向に、顔を向けた。

その城門の向こうに、テオフィルスがいるのだろう。

「彼がそなたの部屋に現れたのは、怪我の状態が気になったからだろう。治っていないようなら、七竜の魔力で治すつもりだったのかもしれない」

「そう……ですな」

目的は解らないが元気なところを見られたのだから、礼に出向くのは当然。彼に出会ってなければ、霧魔に殺されていたかもしれないのだから。

「わかりました。嫌だけど、会ってきます」

僕は余程嫌そうに言ったのだろう、王が面白がるように笑った。

「その方が良いでしょう。今頃、アレインが彼にジェイルダン共和国への使者としての要請をしているところだ。彼の気分を害する事のないように気を付けてほしいが、何か条件を出してきたなら、私に直接言えと伝えよ」

「はい」

事は急を要する。

こうしている間にも、魔王が他国へ侵攻し始めているかもしれない。

「では、すぐに使者として出立を？」

「いや、《聖なる泉》から大学街までは同行してもらおう。こちらとしても、霧魔の脅威から守られる。心配なのは、そなたとエランだ」

「絶対に、悟らせません！」

本当はもう気付かかれています、そう思いながらも表には出さない。

鋭い王に知られるのが怖かった。

「そうだ、悟られてはならぬ。それから、エランと彼を会わせないよう気を付けるのだ。エランは特殊なものが見える。七竜の魔法を使うテオフィルスを、完全に見る事が出来るようだ」

「……はい」

エランはそんなに不思議な存在だったとは、あまりにも近くに居過ぎて、まったく気が付かなかった。

僕に付きまといっているテオフィルスに、彼は完全な憎悪を持っている。

「アルマレーク人はアレインと共に城門近くにいる。エランの注意は私が逸らしておこう」

僕は、頷く。

「今のエランを刺激するのは危険だ。アルマレーク人が出立するまでは……、良いな」

「はい」

王の側を離れ、僕は天幕に戻り、長持からテオフィルスのハンカチを取り出した。

〈契約者〉となつたハラルドに傷付けられ、傷の出血を防ぐためテオフィルスが当て布替わりに使つたハンカチだ。

これを持つている訳にはいかない。

縁に綺麗なレースが施され、おそらく彼の生家アルレイド家か本人の紋章であろう、

重なり合う二枚の翼の中に飛び立つ竜の姿が刺繍された高価そうなハンカチ。血に染まった時には気が付かなかったが、どことなく良い香りがするのは、匂いを漂わせる糸でも織り交ぜてあるのだろうか。

血を落すために丹念に洗われたのに、香りが残っている。その香りを嗅ぐと、彼の少し照れたような瞳を思い出す。

《俺の婚約者なんだ》

頬が染まるのを感じ、僕は頭を振った。

僕は、気が多すぎる！

これだから、エランが不安に思うんだ。

ハンカチを懐にしまい、テオフィルスの事を頭から追い出して天幕を出た。

その後、馬留めまで行き、僕の馬から魔法の鎧を取り外した。

残念だが、これも返した方がいい。

また、馬に乗れなくなるかもしれないけど。

この大学街はレント城塞に倣って、堅牢な城壁に囲まれ多くの塔に守られている。

屍食鬼の攻撃から大学街を守るため、自警団の数が軍隊並みに多いとアンから聞いていた。

学生達も貧富の差を問わず、最初に剣技を習う。

メイダール大学出身者は国王軍にも多く参加している。

その一人が僕を城門まで案内してくれた。

濃い霧が漂う中を土地勘のない僕が、一人でここまで来るのは不可能だ。

「ここって、いつもこんなに霧に覆われているの?」

「それは無いですね。珍しいですよ、ここまで濃い霧が続くのは」

「そうなんだ……」

「必要な事を終わらせてから」霧を晴らすとセルジン王が言っていた。

必要な事って何だろう?

この濃い霧は王が発生させているような口ぶりだ。

まるで何かを、人々の目から覆い隠している。

いったい、何を?

白い闇の中から、薄らと浮かび上がる城門の影。

それがまるで、救いみたいに僕には思えた。

城門を抜けると霧が晴れていると思ひ込んでいた僕は、軽い失望を覚えた。

深い霧は城門内と変わらない。

国王軍の大部分は城門外にいる。

大勢の兵達の間を通つて、アレインの元まで案内された。

テオフィルスと避難民引き揚げの件で、打ち合わせしているところだ。

アレインは僕が歩いて来る事に、少し驚いていた。

「オーリン殿下、馬はお使いにならないのですか？」

「うん。歩く方が好きなんだ」

魔法の鎧を取り外したから、馬に乗れないとはさすがに言えない。

「悪いけど、彼と二人にしてくれないかな、お礼が言いたいんだ」

アレインは一瞬間を<sup>しか</sup>擧めたが、すぐに頷き横を通り過ぎる時に小声で注意する。

「彼は感が鋭い、気を付けて下さい」

僕は「判つた」と、無言で頷く。

内心の緊張を隠しながら、テオフィルスに近づく。

彼は曇つた空を見上げながら、何でもない風を装つて話しかけてくる。

「今頃礼なら必要ないぜ、ヘタレ小竜。昨日、この糖菓をもらったからな。旨いぜ、これ」

そう言つて、糖菓の包みを懐から出し、一つ頬張る。

僕は彼に、微笑みかけた。

「ありがとう。君には助けられてばかりだ」

「ふん、偶然通りすがっただけだ。助けたつもりはない」

僕は懐からハンカチと鎧を取り出し、彼に差し出す。

アレインと護衛を去らせたのは、ハンカチを渡すところを見られたくないからだ。

高価なハンカチを異性に渡すのは、愛の証を渡すのと同じ意味。

実際に婚約した者達は、お互いのハンカチを愛の証として交換する。

エランがいるのに、彼のハンカチを持ち歩く訳にはいかない。

「エアリスから預かった。直接感謝を言えなくて、残念がっていた。それから、魔法の鎧も返す」

「……………」

エアリスと別人を装いながら、彼に渡した。

無表情でハンカチと鎧を受け取り、テオフィルスはしばらくそれを眺めていた。

早く懐にしまえ！

いらぬ誤解を受けたくない。

大人達が誤解しないかドギマギしながら、僕は周りを気にした。

濃い霧に囲まれ、見えるはずもないのに気になる。

男装して存在している事が、今の僕の頭からすっかり抜け落ち、女として焦っている。

「馬には乗れるようになったか？」



「え？ あ……、ああ、乗れるよ。魔法の鎧のおかげだ、ありがとう！」

彼は、にやつと笑う。

「これは、ただの鎧だ」

「は？」

「魔法の鎧なんて存在しない。お前は騙だまされて実力で馬に乗れたんだ。だから、これはもう必要ない」

「はあああああ？」

呆然とする僕の前で、彼は声を上げて笑った。

騙された！

魔法の鎧のおかげで安心して馬に乗れた感動と感謝は、全部僕の思い込みだったのだ。

真つ赤になって顔を顰しかめ、ぶりぶり怒りながら彼に背を向ける。

「おい、ハンカチは？」

「大声で言うな！」

僕は振り返り、彼を精一杯睨み付ける。

すると、あろう事かテオフィルスが受け取ったハンカチを口元に寄せ、僕を射抜く瞳で見つめながら、それにくちづけをした。

僕は心臓が飛び出すかと思う程驚く。

「あ……、あああああのっ」

僕は怒りとは別の意味で真っ赤になり、口を開けたまま硬直した。

彼はハンカチを僕の手に押し付け、吸い込まれるような青い瞳で夢見るように言う。

「エアリス姫に、渡してくれ」

僕の心臓は勝手に暴走し、口をパクパクさせながら言うべき言葉を、何とか搾り出す。

「ハ、ハハ、ハハハンカチの意味、わわわわわ判つて言っているのか？」

「ふふ、当然だ。俺は、お前みたいに子供じゃない」

彼は優しく微笑みかける。

「エエエ……エアリスは、王の婚約者だぞ！ 僕に罪の片棒を担がせるな！」

彼は声を上げて、清々しく笑った。

「フフンッ、小心者のヘタレ小竜め。絶対渡せ！ いつかお前が解放された時に」

最後の一言は、真剣そのものの表情だ。

大混乱する僕をその場に残し、彼はアレインの元へ去って行った。

解放された時って……、一体、何の事だ？

僕はただ呆然と彼を見送る。

手には愛の証のハンカチが、残されていた。

「どうするんだよ、これ……？」

## 第十話 モラスの騎士総隊長ルディーナ

「エラン・クリスベイン、今日はそなたの〈成人の儀〉だが、その前に、そなたの剣技の腕前を確認したい。トキ・メリマン、相手をしろ」

「はっ！」

「え？」

突然のセルジン王からの、近衛騎士隊長トキとの御前試合の命令に、エランは緊張した。

トキに剣技を度々鍛えられてはいるが、一度も勝てる気がしないのだ。

王の従騎士になってからは、忙しすぎて訓練もままならないが、久しぶりの試合でトキとの手合せ。

エランの中に、不安を払拭する程の、闘志が湧き起こった。

テオフィルスにハンカチを返し損ね、それを懐深くに隠しながら、僕が王の側に戻った。

丁度エランの剣がトキの剣に跳ね飛ばされるのも、十回目になるうかという頃だ。

薄い霧の中での剣技は相手の動きが見えにくく、重い湿気に身体の動きが鈍る、さすがのエランも息が上がりかけていた。

トキは容赦がなく、油断すれば目の前に剣を突き付けられる。

一分の隙も見せられない。

エランは僕が不在だった事に、気が付く余裕すらなかっただろう。

二人の御前試合をぼんやり見ながら、頭の中はあの訳の解らない竜騎士と、愛の証のハンカチの事でいっぱいだった。

エアリス姫に渡せって、そんな女いないんだよ。

あれは僕だって、解っているくせに……。

テオフィルスの真剣な眼差しが、余計に苛立ちを増幅させる。

信じられない！

王の婚約者の僕を、気に入っちゃったのか？

それで愛の証を渡すって、正気か、あの男？

考え過ぎて、頭が痛くなってきた。

どう考えても深刻な事態、連れ去る宣言をされたようなものだ。

どうしよう、このハンカチ……。

エランと陛下のいない所で、捨ててしまおうか。

テオフィルスには何度も助けられているが、王国の不利になる事態だけは避けなければならぬ。

「戻ったか、オーリン」

「あ……、はい。礼を言ってきました」

話しかけられるまでセルジン王が側に来た事すら気付かなかつた。

王は僕の表情に、悩みが浮き出ているのを鋭く見抜く。

「どうした？ まさか、悟られたのか？」

「それは、ありません。絶対に！」

無理に笑顔を作つて誤魔化した。

王に内緒にする事がまた一つ増えた事に、僕は気が重くなる。

「おはよう、オーリン」

出発の準備が出来た頃、聞きなれた優しい声が後ろからして振り向くと、エランの手が僕の頬に触れた。

抱き寄せる手は意外と強引で、抵抗する暇もなく唇を奪う。

「おはよう、エラン。男同士が朝からそんなキスするか？」

「霧で見えない」

「誤解を招く、離せ！」

僕は遠慮なく、彼の向う脛を蹴り飛ばす。

オーリンとして存在している以上、女扱いを人前でされては困る、たとえば王配候補でも。

それなのに何度言っても、エランは聞く気がない。

だから僕も、実力行使で抵抗する事に決めていた。

「……痛いなあ、そんなに暴れる事ないじゃないか。最近、倒れてばかりだから、心配しているんだよ。体調悪いんじゃないか？」

しやがみ込んで向う脛を痛そうに押さえ文句を言いながら、エランは心配そうに僕を気遣い見上げている。

昨夜の事を、気にしているのだ。

僕は腰に手を当てて、威勢を張る。

「そんな事はない、元気だ！ 何だったら、もう一暴れしようか？」

「いや、もういいよ」

エランは向う脛から手を離し、不服そうに立ち上がる。

やっぱり、絶対捨てよう、あのハンカチ！

そう決意した時、不意に霧の中からセルジン王が、数名の男達を連れて現れた。

「オーリン、出発する前に紹介しておこう。昨日ようやく国王軍に戻ってきたルディーナ・モラスだ。モラス騎士隊の総隊長で、外見はそなたと同じ年齢だ。友達になれるだろう」

セルジン王は後ろに隠れている、恥ずかしがり屋の総隊長を前に押し出した。

僕の目の前に、幾分小柄な銀色の髪の女騎士が現れた。

全体的に色素の薄いルディーナは、不思議な青紫色の瞳で恥ずかしそうに僕を見ている。

「かつ、可愛いー」

僕は頬に両手を当てて感動する。

エランは頭を抱えながら、悪い病気がまた出たと言わんばかりに、大きな溜息を吐いて首を横に振った。

僕は微笑みながら、彼女に握手を求めて右手を差し出す。

「僕はオーリン・トゥール・ブライディン。ルディーナ、よろしく」

握手の手が触れた時、誰かの思考が流れ込んでくる。

(オリアンナ様、側にいる男に気を付けて。彼を信用し過ぎてはダメよ)

僕は慌てて手を引っ込め、ルディーナを凝視した。

「私は……、オーリン様にお会いできて嬉しく思います」



恥ずかしそうな笑みなのに、外見と思考の違いに僕は戸惑う。

彼女は僕よりかなり年上である事が、握手をした瞬間に理解出来た。

それは敵を欺くためか、隠すべき事柄だと同時に判る。

《王族》と思える程、彼女の魔力は強く、でも外には現れない。

僕の側にいる男って……、エラン？

ルディーナは頷く、僕の思考を読んだのだ。

心が氷に触れたように緊張し、無意識にセルジン王に救いを求めた。

王の後ろには十代後半と思える若者達が、十数名並び僕を見つめていた。

「モラス第一隊の騎士達だ。レント城を出てから、そなたを遠巻きに護衛してきたが、今

日からルディーナもそなたの近衛騎士に加わり、モラス第一隊もそなたを守る、良いな

？」

「……はい」

エランが彼等に殺されてしまう気がして、僕は彼の手を握りしめた。

陛下にエランを任せるって約束したのに……、信じられないのか？

彼を守りたい気持ちと、王に従いたい気持ちとが相反して、僕は苦しんだ。

何も気づいていないエランは、呑気に笑っていた。

「何だ？ 珍しく、人見知りか？」

僕は不安を抱えながらモラスの騎士達に囲まれ、メイダールの《聖なる泉》を目指し  
大学街を出た。

濃い霧が視界を阻み、一行はゆっくりとしか進む事が出来ない。

所々に掲げられた松明の灯りが、霧の向こうに人がいる事を物語っていた。

しばらく行軍して森に入ったと思える頃に、一段と霧が濃さを増す。

横にいたエランの顔が、白く陰る。

冷たい湿気が意志を持つ生き物のように、体中にまとわりつき体温を奪う。

ルディーナが僕の手を取り、火のついた松明を渡した。

「お持ち下さい。それぞれの位置を確認するための物です」

「ありがとう。聞いていいかな……、ルディーナさんは何歳？」

「……忘れました」

「……………」

警戒心を持っているのは、お互い様なのか？

成長を止めるなんて、そんな事出来るのか？

そう出来たら、陛下の年齢を追い越さなくて済む。

僕の心の中で、モヤモヤとした嫌な気分が沸き起こる。

……まさか、この女はそれを実践したのか？

想像に過ぎないのに止めようとしても止まらない。

妄想からくる嫉妬心に、僕は頭を抱えた。

「皆、松明を持って！ 来るわ、味方を傷つけないで。オーリン様を守るのよ！」  
ルディーナの可愛い声が、どことなく心の緊張を解きほぐす。

僕は自分の嫉妬心に、違和感を覚えた。

気が付くと、一面白い闇の中だ。

隣にいるはずのエランが、どこにいるのかも判らない。

前方で悲鳴が上がり緊張で鼓動が高鳴る。

僕の荒い息遣いが、周りの音を遮断し始める。

「屍食鬼だ。霧の中に屍食鬼がいるぞ、気を付けろー！」

あちこちで戦いの雄叫びと悲鳴が上がり、不安が心を支配する。

黒い影が馬の足を走り抜けて行った。獣か、屍食鬼か区別もつかない。

霧魔の恐怖を思い出し、僕の身体は震え始める。

松明は役に立たず、火は今にも消えそうになっていた。

混乱が国王軍を支配する。

僕は《ソムレキアの宝剣》を抜こうとしたが、その手はいつの間にか馬を横付けにし

たセルジン王によって掴まれた。

「霧の中では宝剣の光は届かぬ、そなたの体力を取られるだけだ。それより宝剣を奪われないようにするのだ」

「は、はい！」

先程の馬の足元を通った黒い影は、姿を見せない。

戦いの音が周り中から聞こえているのに、屍食鬼の姿は現れない。

馬に乗ったセルジン王と馬の横に立つルディーナに挟まれて、何処か僕だけ別の空間にいる錯覚を覚える。

解る事は、僕が完全な守りの中にいる事だ。

突然、エランの声がした。

「うわあああ！ 助けて、オーリン、オーリン！」

「エラン？ エラン、どこだ」

王の腕が、僕の手を取る。

「惑わされるな。エランは何があっても、あのような情けない声でそなたを呼ばぬ！

そうであるう？」

「……はい」

「彼は安全だ、そなたと同様に」

確かに彼はあんな声は出さないし、少なくとも今まで聞いた事がない。僕は頭を振った。

惑わされるな！

「セルジン様、来ます！」

ルディーナの言葉に、僕は衝撃を受けた。

陛下の事を、名前で呼んでいるのだ。

いったい、どういう関係なんだ？

## 第十一話 白い闇に潜む者

「セルジン様、来ます！」

モラスの騎士総隊長ルディーナの王に対する名前での呼びかけが、僕にとっては衝撃的だった。

二人がとても仲の良いように見えて、嫌な気持ちになる。

そう思っていると、僕の横にいる王が顔を擡しかめて呼びかけた。

「オリアンナ、そなたの感情は外に漏れすぎだ。もう少し押さえてくれ、気が散る！」  
「え？」

何の事か、解らない。

「陛下、あの者です！」

ルディーナが王の呼び方を変えた。

二人の様子から、僕の心が読まれている事に狼狽える。

彼女の言葉と同時に目の前の霧が晴れ、背に黒い翼のある一人の少年が姿を現した。  
ハラルド・ボガードだ。

彼の歪んだ口元には、残忍な笑みが浮かんでいる。

『やあ、オーリン、ずいぶん嚴重な守られ方だな。お前に近づくのが、難しいよ』  
モラスの騎士達が剣を手に、彼を取り囲む。

ハラルドは一步前に進もうとして、まるで弾かれるようにその姿を歪める。

歪んだ彼の姿が片手を上げると、突き上げる振動が起こり、僕を乗せた馬が動揺する。  
白一面の霧の中で地の底から湧き上がる汚泥のような黒い渦が、足元から馬ごと僕を丸飲みした。

恐怖で、息が荒くなる。黒い渦から無数に飛び出る魔物の口が、一斉に僕に襲いかかる。

僕は馬上で身を縮め振り、バランスを崩して落ちそうになる。

「うわっ」

「幻覚だ、狼狽えるな！」

冷静な王の声が聞こえる。

王の姿を思い浮かべると魔物の口も暗闇も消え、王が僕の横に再び姿を見せた。

僕は青ざめた顔色で、肩に腕を伸ばし抱きしめようとすると王にしがみつく。

攻撃を受けているのが、嫌という程理解出来た。

モラスの騎士達と王がいなければ、僕はどうなっていただろう。

ハラルドが嘲るように笑う。

『アーハッハッ、オーリン、僕の義弟おとうと。お前は女なんだな。そうと知っていれば、僕わたくしの女にしてやったのに』

気分が悪くなる。

彼に陵辱され、なぶり殺された女を何人も知っているからだ。

ハラルドの残虐性は幼い頃からのものだ。

何度も殺されかけ奇跡的に生き残ってきた僕は、彼の挑発には乗らない。

「汚らわしい身で、本当にオーリンの姿が本当に見えるのか？ 闇に馴染んだ今のあなたの目は、光に包まれた者を見る事も出来まい。触れて傷付くのは、堕ちたそなたの方だ！」

セルジン王が逆に挑発を返す。

憎しみに満ちた表情を浮かべて、ハラルドが腕を振った。

するとその腕から屍食鬼の大群が飛び出し、こちらに襲い来る。

恐怖から、王にしがみ付く。

王は長剣を振るい、屍食鬼の幻覚は、一瞬で霧散した。

「そなたは元来、魔界域の住人。《王族》や天界人に憎しみを向けるのは当然だろう。幼い頃からの悪行に〈契約者〉となる予想はついていたが、領主の子として大目に見て来た。だが〈契約者〉となった以上、それも終わりだ！」



『ふん、僕は殺せないよ』

ハラルドの周りから、これまでにない憎悪の黒い渦が沸き起こる。

「……愚かな、子供だ。魔王が水晶玉から解放されれば、そなたも終わるものを！」

王が挑発を繰り返す。

そんなに刺激をしたら、攻撃が彼に集中するのではないかと、僕は心配になる。

黒い渦は蜷局を巻いて、槍の如く王を貫こうとする。

気味の悪い恐怖の塊が、凄く速さで近づく。

その時、セルジン王は僕を抱きしめる左手に剣を持ち替え、右手を黒い渦の進行を阻むように前面へ押し出す。

黒い渦が到着した瞬間、全て王の右手に吸い込まれ消えた。

ハラルドの顔が引き攣る。

『私はそなたの主と同じ、水晶玉の魔力の影だ、それは通じぬ。去れ！ 〈契約者〉、目障りだ！』

王の身体から一筋の光が躍り出て、ハラルドを貫いた。

彼はまるで拗ねた子供のような表情で、王を恨み睨む。

そして消える直前に、僕に歪んだ笑みを見せながら一点を指差した。

その一点——霧深い白い闇の中から、エランが現れたのだ。

ハラルドが消えた後に、別の恐怖がやって来た。  
エランと対峙する恐怖だ。

呪の魔法を掛けられた彼は、まるで誰かが憑依しているように、彼本来の表情を欠いて立っていた。

モラスの騎士達が、エランを取り囲む。

僕は馬を降りて駆け付けようとしたが、馬上で王に腕を掴まれ降りる事が出来ない。

「離して下さい、陛下」

「ならぬ！ 彼等に任せておくのだ。私の側を離れるな」

「でも、エランが……」

「オリアーナ、よく見るのだ」

「え？」

王は僕を、エランの方へ向かせた。

よく見ると彼の周りに黒い渦が取り巻き、それは一つの形を作り始めている。

翼のある人か獣か判らないものが、彼の周りを覆い同化したがっているように見え  
た。

「エランに掛けられた呪の魔法は不完全だ。額飾りの魔力が効いていても、屍食鬼になつてしまう者が多いというのに、彼の意志の抵抗が強い」

僕は愕然とした。

「まさか、あのまま屍食鬼に？」

「落ち着け、彼は屈しない、そなたが寄り添う限り。見るがいい、額飾りが光を帯びている。あんな状態でも希望を失っていない証拠だ。彼はいずれハラルドの呪を打ち破る、必ず！」

「……………」

王の言葉は希望を感じさせたが、実際のエランはとても苦しんでいるように見える。

「早く助けて下さい、苦しんでいる」

「まだ完全に現れていない。まだだ」

黒い渦は今やエランを乗っ取るように、完全に屍食鬼の形を取り始めている。

次の瞬間エランの周りに、緑色の光が輝き始めた。

「陛下ー！」

ルディーナが冷静に呼びかける。

王は右手を前に突出し、先程ハラルドの黒い渦を吸い取ったように、エランに覆い被さる黒い渦を吸収し始めた。

僕は王の魔力に驚き、また心配になる。

影とはいえ、黒い渦を二度も吸い取るのだ。

セルジン王の顔が苦痛に歪み、王の影の濃さが増した。今まで、どれだけの影を吸い取ってきたんだろう？

王の魔力が魔王のそれを下回ったのは、こんな事を繰り返してきたからじゃないのか？

屍食鬼の黒い渦をすべて吸い取り、王は大きな溜息を吐いた。

僕は支えたくて、王に触れた。

「構うな、私は影だ。苦痛は無い」

そう言いながらも、王の影の身体が揺らめいている。

心配している僕に、彼は微笑みを向ける。

「エランの心配をしなくて良いのか？ モラスの騎士達が彼の身体を守ったが、意識を戻させるのはそなたの役目だろう？」

僕は激しく首を振った。

最初に助けなければならぬのは、セルジン王だという事が嫌という程判る。

僕は王の首に片腕を回し引き寄せる。

彼は一瞬、僕が何をしようとしているのか判らなかつた。

「どっとうした？」

僕の唇が、王の唇と重なる。

王はすぐに僕を、引き離した。

「それは通じぬ！ 私は影だ、《王族》の魔力は効かぬ。早く、エランを……」

「あなたを、助きたい！」

王の瞳に、怒りが混じる。

「エランを助けたくないのか、死ぬぞ！ 早く行つて、彼を救え！」

憤る彼の命令に、僕は泣きながら馬を降りた。

王に《王族》の魔力は効かない、王の《王族》の魔力は普通に効くのに、逆はありえないのだ。

どうしたら王を救えるのか途方に暮れながら、エランの元へ走り寄る。

王に心を奪われながらも、やはりエランも大事だと思ふ。

僕は、子供だ。

ルディーナの横を通りながら、そう思った。

モラスの騎士達はエランを守る。

彼を殺す存在と捉えていた猜疑心を、僕は恥じた。

セルジン王は今のオリアーナの行為に、苛立ちを覚えていた。

自分を救おうとする彼女の心を、受け止める事は出来ない。

死は当然のように来るべきものだ、それを阻もうと彼女はしている。

自分の守るべき存在が、警戒するべき存在へと変わってしまった事に、王は苛立ちを覚える。

そして何より、無意識にオリアンナ姫に惹きつけられそうになる自分自身を、一番に警戒した。

## 第十二話 霧の中の正義

エランの横に跪き僕は涙を振り払いながら、彼の肩に腕を回す。

「エラン……、目を覚ませ」

彼の赤い髪が、柔らかに指に絡みつく。

胸に抱きしめ、額に唇を落す。

「エラン！ もう大丈夫だ、目を覚ませ」

彼にくちづける。

エランの目蓋が軽く痙攣し、開いた瞼から水色の瞳が僕を映す。

「やあ、オリアンナ……。あれ？ 僕、どうしたんだ？」

彼は驚いたように飛び起き、眩暈を起こしたので、僕が支えた。

「……気分、悪っ」

「あいにく、薬師は結界の外だ。エラン、これを噛むのだ」

王は薬袋から何かを取り出した。

僕は動けないエランの代わりに、王から受け取る。

半透明な黄色く小さな結晶で、良い香りがするキラの蜜の結晶だ。

エランはそれを口にして、少し回復した。

「そろそろ結界を解こう、外が心配だ。モラスの騎士、警戒を怠るな」

王はそう言つて右手人差し指を、結界を破るように突き出した。

自分の張つた結界に対しては、影である王も破れるのだ。

バン！

大きな音と同時に、圧倒的な霧が目の前に押し寄せて来る。

誰もが戦闘を予想し身構えていたが、屍食鬼の気配が消えている。

ハラルドが消えた事で、いなくなつたのだろうか。

「マールを呼べ！ トキ、状況を教えよ」

トキは霧の中からセルジン王の元に駆け付け、礼を取りながら説明する。

「陛下が結界を張られてすぐに、屍食鬼は消えました。怪我人はなし、幻覚を見せられて

いたと思われませう」

「ハラルドの狙いはオーリンだけか。それ以外には関心も示さない。余程恨んでいるのだ」

王は僕を見ながら、自分を振り返るように呟いた。

「《王族》は罪な存在だ。良きにつけ悪しきにつけ、人の心を無意識に惹きつけてしまうのだから」



僕はエランを支えながら、霧の中を歩いていた。

よろける彼の重みに一緒に倒れかけた時、駆け付けたマールとその弟子達が僕達を支える。

「無理をしては、いけません。もうしばらく安静に……」

「マール、ここに留まるのは危険だ。キラの蜜を食べさせた、すぐに元気になる」

セルジン王が急ぐように、薬師に伝える。

マールはエランを抱えて馬の元まで運び、他の騎士も手伝って何とか馬に乗せた。

「大丈夫か？ 本当に、一人で乗れる？」

「何とか、大丈夫だろ。君がお姫様座りで前に乗りたいんなら、乗せてあげてもいいけどね」

エランは明らかに無理をして、にやにや笑った。

僕はそんな彼を見ながら、胸の痛みに耐えていた。

心の中ではエランを裏切っていて、冗談で返す事が出来ない。

「……冗談が言えるんなら、大丈夫だよ」

項垂れながら彼の側を離れようとした時、突然霧の向こうから叫び声上がる。

「霧魔だ！ うわああああ……」

明らかに兵士が襲われた叫びが、霧の向こうで響き渡る。

僕の心に霧魔に襲われた時の恐怖が蘇り、息が上がって前に進む事が出来なくなる。ルディーナが僕の横で赤く光る剣を抜いた。

小柄で可憐な少女の姿にはおおよそ似つかわしくないその剣からは、異様な魔力が放出されている。

屍食鬼の放つ黒い渦に似たそれは、僕とルディーナを包む不思議な膜を作る。

凝縮した霧の化物が、地を這うように僕の足元に絡みつく。

恐怖に叫び声を上げそうになったが、霧魔は僕を認識しないで通り過ぎた。

「ルディーナ……」

「オーリン様には触れさせませんわ。あのような低級な魔物には」

ホツとしたのも束の間、僕の横を通り過ぎた霧魔は、まっすぐエランのいる方向へ向かう。

「エラン、危ない！」

僕は霧魔の後を追い、ルディーナが止めるのも構わず彼の元へと走る。

霧魔はエランの乗る馬に近付き、馬は気配を察し急に駆け出す。

体調の悪いエランは、馬から振り落とされ地面に落ちた。

セルジン王が即座に馬を下り、霧の中に踏み込む。

近衛騎士達も続こうとするが、王が許さない。

「全員松明をかざして、安全な場所まで退避！」

影である王は霧魔に襲われる事はない。

霧魔に捕らえられ、引き摺られ森の奥へ入り込むエランの後を追ひ、道から外れる。

エランと王を見失わないように僕も後を追ひ、ルディーナが僕への魔法維持のために  
続く。

エランが傷だらけになっている事を想像すると、気が気ではない。

僕には聖なる泉の精の魔力があり回復は早いが、エランにはその魔力が無い。

死んでしまうかもしれないのだ。

セルジン王の影が木々の間に見えた。

彼は立ち止まり、何かを見ている。

僕はやつと追いつき王のしているものを見て、ギョツと立ち止まる。

大きな竜が霧魔ごとエランを口に咥くわえて、低い唸り声を上げている。

霧魔は竜の口から逃れようと身を振るが、霧状にも関わらずがっちり押さえつけられ逃れる事は出来ない。

一緒に咥くわえられているエランの身体から、人間の赤い血が流れ竜の口から滴り落ちる。

まるで今にも、竜に食い千切られそうに見える。

『彼は呪いをかけられているだけだ。魔界域の者ではない、殺さないでほしい!』

王の説得に竜の凶悪そうな目が、ますます凶悪さを増した。

竜は大きく息を吸い、炎のようなものを口から吹き出した。

「エラン!」

凄まじい炎にまみれ、エランの姿が見えなくなった。

誰もが彼は死んだと思った時、炎が止み竜の口の中に意識を取り戻し身動きする彼の姿が見えた。

霧魔は一瞬で焼失し、エランは生き残った。

怪我をしている彼は、まだ状況が呑み込めない。

僕はホツとしたと同時に、別の不安が頭を過ぎる<sup>よ</sup>。

竜がいるという事は、テオフィルスが近くにいるという事だ。

エランと彼を会わせる訳にはいかない。

「陛下……」

「解っている。ルディーナ、オーリンの存在を隠せ」

「もう、隠していますわ。オーリン様、喋らないで下さいね」

エランは自分が魔物に啜えられている事に気付き、その口から脱出しようと痛む身体

を振り、今にも落ちそうになっている。

「リンクル、降ろしてやれ」

竜の横から低い声が響き渡る。

テオフィルスが低木を掻き分け霧の中から姿を現した。

エランは完全に彼を認識し、見守る者達に緊張が沸き起こる。

竜は口を地面に近付け、エランを落とす。

荒っぽい扱いに、怪我をしているエランが呻いた。

「大丈夫か？」

テオフィルスが近付き、エランの怪我の状態を診ようと肩に手をかけた。

「触るな、アルマレーク人！」

エランが手を振り払う。

彼の周りから薄っすらと黒い渦が沸き上がる。

「なんだ、お前か、王太子の腰巾着。お前……、いつから屍食鬼もど擬きになったんだ？」

テオフィルスの言葉に、僕は青ざめ思わず抗議しそうになったが、ルディーナに腕を掴まれ、動く事も声を上げる事も出来なくなった。

僕が側にいる事でエランを刺激してしまう。

昨夜のような事態になったら、霧魔のいる場所で野営をする事になるだろう。

危険極まりない事態を避けるため、ルディーナは僕に魔法をかけたのだ。焦燥を露わにしながら、僕にはただ見守る事しか出来ない。

何も知らないエランは、テオフィルスの言葉に疑問を投げかける。

「屍食鬼擬き？ 何の事だよ？」

「……………」

テオフィルスは黙って彼を睨み付けた。

七竜リンクルがエランを唾えたのは、霧魔同様に彼を魔物と判断したからだ。

だが彼には普通の人間としての意識があり、自分の状況を把握していない物言いをしている。

「国王軍にいて、よく今まで無事に生き延びてくれたな」

テオフィルスは剣を抜き、エランに向けた。

「今のうちに殺されておけ、あいつにとつて厄介な存在になる前に！」

「……………だから、何の事だ！」

霧魔に引き摺られ傷だらけのエランに勝ち目はない。

それでも戦うために立ち上がり剣を抜いた。

彼の周りに沸き起こる、どす黒い渦が濃さを増す。

徐々にエランの意志は黒い渦に飲み込まれ、人の形をした魔物のように変化してい

く。

僕はその姿を見るのが辛い。

テオフィルスの剣が、今にもエランを貫きそうになった時。

『待て！』

二人の動きを阻む大声が、天地に響き渡る。

セルジン王から発せられた声は、まるで戦意を挫く雷いかずちの如く二人を討ちつけた。

## 第十三話 〈成人の儀〉

セルジン王の魔力に、エランは意識を失い倒れ、テオフィルスは剣を地に落とし苦しみひびますに跪く。

辛うじて意識だけは保っていた。

「彼は私の従騎士だ。傷付ければ、唯では済まぬぞ！」

「……王は魔物を飼っておられる」

「呪いを受けているだけだ、魔物ではない！ いずれ自力で呪いを解く、彼はそういう男だ」

「……………」

テオフィルスは無様ぶざまに倒れているエランを見つめ、顔を顰しかめながら懐疑的な言葉を口にした。

「まだ、子供だ。自力で呪いを解くほど、意志の強い男には見えない！」

「貴殿といくらも変わらぬ、私の目から見ればな」

「……………」

セルジン王の外見年齢は二十代前半だが、実際の年齢は三十代後半、レント領主ハル



ビインと同じ年だ。

水晶玉の魔力に取り込まれてから、王は年を取る事が出来なくなつた。

テオフィルスはその事を知っているのだろうか。

「王太子が貴殿の行軍参加を認めようだが、私は貴殿の参加は認めぬ！ 今後、無用な王太子への接触は止めてもらおう。それが約束出来るなら、貴殿を一時的な協力者として認める」

昨夜、テオフィルスが僕の部屋にあらゆる警備をすり抜けて忍び込んだ事が、王には不愉快なのだ。

テオフィルスが不敵に口角を上げた。

色々協力を求めておきながら、今頃条件を提示する王への皮肉なのだろう。

彼が約束を守るとは、到底思えない。

「協力者として尽力を尽くす事を……、お約束致します」

苦しいなテオフィルスの言葉に、王は無表情で頷く。

お互いに相手を信用していないのは、誰が見ても明白だ。

王が魔力による拘束を解き、テオフィルスはおもむろに立ち上がり、剣を取り上げ鞆に納めた。

「この辺りにいる霧魔は、リンクルが消滅させました。魔界域の者達に操れる魔物でも

ないし、しばらくは安全なはず。アルマレークでは普通にいる魔物です。この国にも竜がいれば、簡単に退治出来る」

そう言つてテオフィルスは左手を上げ、七竜リンクルの影を竜の指輪の中に戻した。

「霧魔はメイダールから先へは入れぬ。入り込めるのは山系に近い辺境だけだ、竜は必要ない」

水晶玉の魔力の範囲内に、霧魔は入れない。

霧を伝つてくる霧魔には、極稀にしか遭遇しないのだ。

今回の発生が異常なだけで、竜を置く方が危険と王は判断したのだろう。

「……ではメイダールを出るまで、同行致します」

王は黙つて頷く。

テオフィルスは礼を取つて立ち去ろうと、踵きびすを返しこちらに來た。

僕の緊張が伝わつたのか、気配をルディーナの魔法で消されているのに、側を通り過ぎた時に、彼は挨拶でもするように僕に微笑みを見せた。

気付いているのか、僕がいる事に？

彼はそのまま木々を掻き分け、霧の中に消えた。

メイダールの《聖なる泉》に国王軍本隊が到着したのは、昼頃だった。

霧魔に引き摺られ傷を負ったエランは思ったより軽傷で、マールが手当をして動けるまでに快復した。

だが、心に持った疑念は、打ち消す事は出来ない。

僕の横を騎乗して並走する彼は、黙りこくつたまま心と身体の傷に耐えている。

後が大変でも、いつそ黒い渦に完全に飲み込まれていた方が、記憶を失うから良かったんじゃないのか？

心配でたまらないが、セルジン王からいつも通りの対応を要求されている。

《エランの事は、私に任せるのだ》

王の言葉に異議を唱える事は出来ない。

僕は深い溜息を吐きながら、馬の歩を進めた。

これからエランと二人で、《聖なる泉》に入る。

僕は新たな導を泉の精から受け取るため、彼は〈成人の儀〉のためだ。

本来この通過儀礼を終えなければ未成年者が旅に出る事は許されないが、王の特別の許可があつて彼はここまで来た。

「エランも、いよいよ成人だね」

僕が何気なく話しかけると、彼は暗い表情で、少し緊張気味に《聖なる泉》を見た。

「成人まで、一か月早いけどね。ここは心に邪心がある者は入れないんだろ？ 大丈夫

かな？」

「大丈夫だよ。僕が平気だったんだから」

「……………」

笑いながらそう言ってみたものの、エランの不安はよく解る。

《お前……、いつから屍食鬼擬きになったんだ？》

テオフィルスのあの言葉に、憤りを覚えずにはいられなかった。

エランを守るために必死で隠し通してきた努力を、彼は一瞬で打ち砕いたのだ。

ハンカチを渡す妙な言動に振り回されて、彼の危険性を忘れるところだった。

あんな奴、絶対に追い払ってやる！

僕はそう決意しながら馬を降りる。

国王軍は二人の儀式を待つ間、ここで昼食を取る事になっていた。

テオフィルスは後衛部隊に移動させられ、エランと会う事はない。

後方にいた薬師マールが、慌てて僕の元に駆け付ける。

「オーリン様、腕輪を外された方がいいです。泉の精が嫌がると思いますから、私がお預

かりします」

「あ……、はい」

マールが言う通りだ。

この腕輪をして《聖なる泉》に入るのは、泉の精に対し礼を欠く行為、せつかく与えた魔法を、抑制しているのだから。

僕は服の中に手を入れ、腕輪を簡単に外しマールに渡した。

「お気をつけて、オーリン様。《聖なる泉》といつても、こんな状況です。安全等どこにも無いと思つて、行動して下さい」

「その通りだな」

マールの後ろからセルジン王が現れ、薬師は礼を取つて後ろに下がる。

「何があつても冷静に行動するのだ。そなたは導を受け取るのが目的だからな」

王が念を押すように言う。

エランの状態に不安を持っているからだろう。

僕はエランに余計な心配をさせたくないので、明るく答えた。

「もちろんです。しっかりと受け取つて来ます」

王の緑の瞳が、一瞬陰りを帯びたように見えた。

「トキ、二人が無事〈門番〉の許可を取るまで同行せよ」

「はっ」

トキは数人の部下を引き連れて、僕達を囲む。

なぜそこまで嚴重に警護しなければならぬのか判つたのは、〈門番〉の姿を間近で見

た時だ。

レント領で見た〈門番〉とは、全く違っていた。

輝く青い甲冑は、まるで闇を纏まとっているように輪郭をぼかし、ピクリとも動かない姿勢は、古びた騎士人形のように年老いて覇気が感じられない。

僕はその〈門番〉から、不気味な気配を感じた。

魔界域の影響？

黒い渦のようなものが、薄らと〈門番〉から溢れ出ている。

このまま《聖なる泉》に入って、本当に大丈夫なのか心配になった。いったん中に入れば、僕達を助けてくれる大人は一人もいなくなる。

『名を告げよ』

〈門番〉が言った。

エランが「お先にどうぞ」という素振りを見せたので、僕は先に〈門番〉の前に立つ。「オリアンナ・ルーネ・ブライデイン」

〈門番〉はしばらく沈黙した後、僕に《聖なる泉》への入場許可を出した。

次はエランの番だ。彼は緊張した面持ちで、一步前に入る。するとトキが、彼と同じように前へ出た。

僕は不思議に思いながら、トキの様子を見ていた。

〈門番〉が重々しく問質す。

『名を告げよ』

「エラン・クリスベイン」

彼が名を告げたその時、〈門番〉が剣を抜き切りかかる。

『入場を拒否する！』

〈門番〉の後ろにいた僕は、悲鳴にも似た叫び声を上げる。

「エラン！」

〈門番〉の剣は、トキの剣で素早く受け止めた。

その間、同行した彼の部下が、エランを引きずるように後退させる。

〈門番〉とトキはしばらくの間剣を交えていたが、やがて〈門番〉は動かなくなった。

エランは青ざめた顔で、茫然と〈門番〉を見つめていた。

——心に邪心を持つ者は、《聖なる泉》へ入れない。

彼の〈成人の儀〉は、失敗に終わったのだ。

僕は彼の元へ駆け付けようとしたが、厳格なトキが遮る。さえぎ

「オーリン様は、《聖なる泉》へ！」

「でも……」

「ここはもうすぐ入れなくなる。〈門番〉が闇を帯び始めている、今しか受け取れなくな

る。早く！ エランなら、大丈夫だ！」

「……………」

僕はエランを見た。

項垂れ混乱している彼を、抱きしめたいと思う。

「早く！」

トキの言葉に僕は踵を返し、《聖なる泉》へと走った。



## 第十四話 《聖なるメイダールの泉》

僕は《聖なる泉》へ向けて、駈け出す。

レントの《聖なる泉》では物珍しきもあり、ゆっくり観察しながらの入場だったが、トキの言葉通りならそれどころではない。

ここが魔界域の闇に吞まれてしまったら、大変な事になる。

そして何よりエランの事が、心配でたまらなかつた。

〈門番〉に入場を拒否されたのは、ハラルドに掛けられた呪の魔法のせいだ。

混乱を来たして自暴自棄になるエランではないが、テオフィルスの言葉もあり苦しむ事は確かだ。

少しでも早く、彼の側に戻って支えたい。

門をくぐろうとした時、何かか聞こえて立ち止る。

見上げるとレントの《聖なる泉》では僕の身長の五倍近くあつた門が、半分ぐらいの高さになり一番上の楔石を明確に見る事が出来た。

存在を主張する不思議な楔石は、大きな花の中に女の人の顔が浮き彫られた物だ。

その浮彫は生きているように、僕を見下ろしている。

気にはなつたが行こうとした、その時……。

(マ………シ オン………)

「え？」

浮彫の想いが、僕の心に響いてきた。

誰かを待っている、ずっと昔から……。

浮彫を見直したが、目に映ったのは唯の白い石の像。

僕を見下ろしている気配は消えていた。

「……………」

気を取り直して《聖なる泉》へ、足を踏み入れる。

レント領の《聖なる泉》では、広大な庭園や、バラ園が一足ごとに入れ替わり現れたのに、この闇に染まりかけた《聖なる泉》で現れたのは、徐々に荒廃していく風景だ。

枯れた庭園、崩れた城壁、汚泥の溢れた泉、ひび割れた大地、渦巻く暗雲、城が砂のように崩れる。

一步踏み出す事にそれらを目にしては気持ちが悪くなるので、見ない事にして駆け抜ける。

どのくらい走ったのか判らないが、一向に水の流れる音が聞こえない。

僕の焦りは、徐々に恐怖に変わり始める。

このままの状態が続き、《聖なる泉》の外に出られなくなる恐怖に、僕は立ち止った。目の前には無数の壊れた石像が、まるで戦いに敗れた戦士達のように地面を覆っている。

巻き上がる石の塵、僕の頬をなぶる荒廃の冷たい風。

耐えられなくなって叫んだ。

「泉の精、いるんだろう？　なぜ、出てこない？　僕の入場を許可したんなら、声ぐらい聞かせろ！」

すると、目の前の景色が不意に揺らめく。

微かな声が聞こえた。

『……水……を……』

水？

僕は咄嗟に、腰に提げていた水袋を取り出し、栓を外して水を足元に垂らした。すると足元から強烈な光が出現し、僕は目を庇う。

何かを取り除かれるような気配がする。

荒廃の冷たい風が止み、繁茂の圧倒的な熱気が上昇した。

『ありがとう、オリアンナ姫。あなたを待っていました』

僕は手を離し、ゆっくり目を開いた。

放射状に伸びる階段庭園の途中に、僕は立っていた。  
レント領で見た物より、幾分大きい。

水が緩やかに上に流れていく音が、心地良く僕の耳に響く。

僕はホツとして階段を降り、中央の泉に辿り着いた。

ひざまず  
跪いて水袋に水を入れようとして手を止める。

「泉の精、なぜ姿を現さない?」

『オリアンナ姫、私達は水の中に存在する者。容かたちがあつて無い者です。仮初の姿が必要ですか?』

僕は泉の中を覗き込んだ。

清らかに湧き起る泉は激しく揺らぎ、僕の姿も、誰の姿も映さない。

「あなたは、ただ清らかな泉なんだね。出来れば、姿がある方が話しやすいけど」

泉の精の涼やかな笑い声が聞こえた。

覗き込む水中に、魚とも人とも思える透明な形が現れ、水面から顔を覗かせた。

『さあ、エドウインの伝言を受け取りなさい』

僕は頷き、水袋で水を汲んだ、すると……。

円形の泉の上に、十一年前の父エドウイン・ルーザ・フィンゼルの姿が現れたのだ。

レント領で見た時は、驚きの方が強く余裕がなかったが、今回は二度目のせいか、僕

は十一年前の父を觀察した。

緩やかな長い金髪は、僕の髪の色そのもの。

浅黒い肌と真青な瞳はテオフィルスを連想させる。

父の姿は、最初に見た時よりも、少し元気がないように見える。

彼は未来の娘に語りかけた。

「オリアンナ、ここまで無事に旅する事が出来ただろうか？ 君は今、セルジン国王陛下と行動を共にしているのだろうか？ 成人の君は、おそらく陛下の婚約者と目されるだろうな」

僕の心臓が跳ね上がった。

本当はまだ成人ではないが、既に婚約破棄されているから、父の予想を上回っていて少し悲しい。

僕をまた王の婚約者にと、望む者は多くいる。

エランという王配候補がいながら、心の中では僕自身が、一番それを願っている。

「だが、セルジン王は水晶玉に取り込まれた段階で、人間ではなくなつたのだ。《王族》同士は惹かれあうというが、私は君が国王の婚約者となる事には反対する！」

僕は驚きに身を硬くして、父を信じられない思いで見た。

父はただ前を見て話し、僕を見る事はない。

時間という壁が、二人を阻んでいた。

「成人の君がどんな気持ちでいるのか、私には量り兼ねるが、親として反対する」

「父上……」

僕は項垂れた。

過去の一方的な父ではなく、今を生きる父と話がしたい。

王に惹かれていく気持ちを、止める術があるなら教えてほしかった。

親に反対されたからといって、気持ちを変えられる程、単純な問題ではない。

「君にはアルマレークに婚約者がいる」

「え？」

知っている……、父上が？

《王族》は国外に出る事は禁じられている。

父がその事を知らないはずがない。

「この婚約は七竜が定めたもの。君の半分はアルマレーク人で、七領主家に生まれた以上は、君自身に作用する」

何の事だ？

「いずれへ七竜の王へテオフィルス・ルーザ・アルレイドが、君を迎えにエステラーン王国へ来るだろう。君達は出会った瞬間に、自然に惹かれあう」

「ええっ?」

僕には、父の言っている事が理解出来ない。

ただ驚き、父を見つめる事しか出来なかった。

惹かれあうって……。

突然、僕の心にテオフィルスの真青な優しい瞳が思い浮かび、首筋の毛が逆立つような感覚を覚えた。

僕は激しく首を横に振って、その感覚を打ち消す。

「七竜の定めた」<sup>いっつい</sup>対は、運命そのものだ。君達は国を越えて、結ばれる。私は君を、セルジン王に渡す気はない!」

驚愕の表情で、父を見た。

僕が生まれた時にエステラーン人として認めておきながら、今更アルマレーク人としての運命を告げる父が信じられなかった。

頭を抱えて地面に座り込み、激しい怒りに拳を握りしめた。

「勝手な事を、言うな!」

父に対する反抗心が、メラメラと湧き上がる。

アルマレーク人である父の目的は、エステラーン王国の征服にあったのではないかとすら思えてくる。

《王族》の姫君を奪い取り、王国に戦乱の嵐を巻き起こす。

そして百年前に果たせなかったアルマレーク共和国の領土拡張のために、国力の落ちた王国に攻め込む。

半分自国の血を引く《王族》を、傀儡かいらいの女王として据え、《七竜の王》を王配にして、エステラーン王国の《王族》の血を、アルマレーク共和国の血統とする。

そうして、強大な魔力を秘めた二つの水晶玉と領土を、完全に共和国の一部としてしまうのだ。

僕は十一年前の父を、憎悪を込めて睨みつけた。

「この事は、オアイーヴも承知している。私達が果たせなかった夢を、君に託す。愛する、オリアンナ……」

「……夢？」

父エドウインは、優しく微笑み消えた。

僕は父が消えた水面を、ただただ見つめた。

——私達が果たせなかった夢？

母を思った。

《王族》である事を捨てた母。

娘をエステラーン人として育てた母が、アルマレーク人としての運命も承知していた



とは。

《王族》の血が他国に流れる脅威を、一番理解しているはずの母が、水晶玉の魔力を一番知っているはずの母が、……承知したとは。

《……私達が果たせなかつた夢を、君に託す。愛するオリアンナ……》

父の館に今も並ぶ、二つの紋章旗が思い浮かんだ。

故国を捨てた父の想いは、あの紋章旗に示される、両国を結ぶ夢——。

僕の頬に涙が伝い、流れ落ちた。

## 第十五話 手掛かり

父エドウィンへの怒りが収まるまで、僕は湧き出る泉の畔ほとりに座り、ただ水の音を聞いていた。

混乱が頭の中で渦を巻き、架せられた運命に絶望する。

王国陛下を救うために僕は存在している、それなのに七竜の定めた運命は王国に危機をもたらし、あろう事か父がそれを薦めているのだ。

なぜ全てが僕一人に押し掛かって来るのか、その重石おもしに身動き一つ出来ずにいた。

僕はエステラーン人なのか？

それとも、アルマレーク人？

心の声を聴くために、胸に手を当てた。

——僕が王太子だから、国が関わるのは当然の事だ。

親が定めた婚約者は誰にでもいる。

父は僕が王太子になった事を知らない。

状況が変わったのだ、七竜の定めた運命は否定していい——

セルジン王の姿を思い浮かべた。

いつも近くにいるのに、決して手の届かない影という存在。

優しい笑みは僕を包み込み安心できるのに、死を望み僕の前からいなくなると宣言する存在。

「陛下……」

側に居て欲しい……。

今、ここに居て欲しい。

頬に何度目かの涙が流れた。

「セルジン……」

初めて名前を口にしてみる。

名で呼びかける事の出来ない存在。

僕は一体、誰に恋をしているのだろう。

苦しみばかり感じるのなら追いかけるのを止めてしまえば良いのに、それも適わない。  
い。

側に居る喜びがあまりにも大き過ぎて、離れる事は考えられないのだ。

あの男ひとを、失いたくない。

苦しみが増し、僕は胸を押さえた。

手に当たる感触に、ある物を思い出す。

懐ふとこの奥深くにしまった、テオフィルスの愛の証のハンカチだ。

僕は顔を顰しかめながら、それを取り出す。

エアリスがオリアンナ姫である事に、彼は気付いているのか分からない。

このまま捨ててしまおうと思った。

《小心者のへタレ小竜め。絶対渡せ！ いつかお前が解放された時に》

彼の言葉と真剣な眼差しが、心に浮かんだ。

解放された時とは、《王族》からの解放という事か。

母上と同じ道を辿り、国と《王族》を捨てろと……………。

お前まへが解放された時？

僕は青ざめた。

テオフィルスは、僕がオリアンナだつて完全に気付いている！

「捨ててしまえ！」と、心の片隅が叫ぶ。

ハンカチを持った手を前へ差出し、捨てようとした。

《俺は、お前みたいに子供じゃない》

子供？

こんな風に思う僕は……、子供なのか？

——ハンカチを捨てた。

白い彼のハンカチは、ゆっくりと石畳に落ちる。

なぜか心に痛みを感じた。

《……私達が果たせなかつた夢を、君に託す》

父の言葉が、心をかき乱す。

十一年前の父の姿が消えた泉に向けて呟く。

「勝手な事を言うな！ 僕を置いて行つたくせに……」

違うという事は解っていた。

両親は僕を守るために、犠牲になつたのだ。

《ソムレキアの宝剣》の主となつた僕を助けるために、父は泉の精と取引して自分を犠

牲にした。

「僕は……、子供だ」

涙を流しながら、捨てたハンカチを拾い上げた。

テオフィルスの言う通りだ。

彼は子供じゃない、王から奪い取る意志を、明確に僕に伝えたのだ。

《七竜の定めた一対は、運命そのものだ。君達は国を越えて、結ばれる》

「ふんつ、誰があんな奴と！ 僕の運命は、僕が決める。大体、僕はヘタレ小竜じゃない！」

涙を袖口で拭き取りながら、悪態を吐いて立ち上がった。彼の前で、オーリンとして存在すればいいだけの話だ。

このハンカチは、存在しないエアリス姫に渡すために持ち歩く、それ以外の意味はない、そう思つてハンカチを懐にしまった。

「泉の精、僕に渡すものがあるだろう？」

『エドウィンに怒りを持たないで、オリアンナ姫。あなたのために思つての事です』

心に突き刺さる、泉の精の言葉。

「解っている、もう、怒つてないよ。それより、急ぐんだ。エランの事が心配だし、この〈門番〉が黒い渦を帯びている。ここは大丈夫なのか？」

『オリアンナ姫、あなたの父上が私達に力を貸してくれています。だから泉が枯れる事はない。……でも、エドウィンがいつまで力を保てるかは疑問です』

「父上が？」

父は生きてブライデインの《聖なる泉》で、僕を待っている。

早く父上に会いたい。

会つて僕の意志を伝えるんだ、セルジン王と共に生きたいって。

反対されても、それが僕の意志だ！

「導をー！」

『判りました。この先の《聖なる泉》は聖域とはいえ安全とは言えない。気を付けなさい、オリアンナ姫。さあ、受け取るのです。私の導、《堅固の風》を！』

僕の足元から旋風が巻き起こり、僕を巻き込んだ。

旋風は僕を持ち上げ、左手に収束するようにその力を弱め、地に足を付けた時は風の導が左手に輝いているだけとなった。

二度目の受け取りは、恐怖を感じる事なく完了する。

『《堅固の風》はあなたを守り、ブライデインへ導く。エドウィン、約束は果たしましたよ』

そうやって泉の精は、消えようとした。

「あつ、待つて下さい！ 聞きたい事がある」

『……オリアンナ姫、エステラーンの《王族》は我らとは、互いに不可侵です。あなたの血の半分を、我らは否定する。これ以上助ける事は出来ません！』

否定という強い言葉に僕は挫折そうになりながら、それでも食い下がる。

「そんな……、セルジン王を助ける方法を教えて下さい。僕の手で彼を死なせたくない！ お願いです、どうしたら助けられるのですか？」

『《王族》を救う方法は《王族》にしか判らない。あなた達の歴史の中に答えがあるはず。見出しなさい、オリアンナ姫』

泉の精の姿が消えた。

泉の湧き出る音が、妙に大きく聞こえる。

「エステラーン王国の歴史の中に、答えがある……」

僕は茫然とした。

長い歴史のエステラーン王国の記録を、どう辿れば良いのか見当もつかない。

そうして僕が今、どこに滞在しているのかを思い出す。

「……そうか、大学図書館がある！ 教授もいるし、聞ける人はたくさんいるじゃない

か。ありがとう、泉の精」

希望が見えた気がした。

王を生きて助け出す、それを見つけれられる場所に僕はいる。

《聖なる泉》を出した後、大学図書館の四階にある謎の部屋を探索する事になっていた。

そこに何かがあるのか、誰も知らない。

結界を破れるのは、僕だけだ。

急いで帰ろうと振り返り、階段庭園の上を見て驚いた。

そこに二十代半ばぐらいの女が立っていたのだ。



僕と同じ金色の長い髪を風になびかせ、薄い白一色のドレスは、まるで死装束のように幽霊じみて見える。

この《聖なる泉》で、初めて人に会った。

「……誰？」

女はゆっくり僕に見せるように、自分の左手を胸の前まで持ってきた。

彼女の左手首には、見覚えのある腕輪が嵌っていた。

僕がマールから貰った腕輪とそっくりなそれは、明らかにへ抑制の腕輪だ。

「あ……、あなたはマールさんの？」

彼女は何かを訴えている。

僕に向けゆっくり首を横に振り、自分の左手首を腕輪ごと右手で掴んだ。

その瞬間、彼女は消え去り、僕はゾツとした。

「何だ？ ……何を、伝えたいんだ？」

体中に鳥肌が立つ。

あの腕輪が何かとても危険な物に思え、危機感が体中から湧き起る。

マールの姿が暗闇から浮き上がるように、僕の心を支配した。

綺麗に整えられた髭の下に、謎めいた彼の本当の顔を隠している。

彼から貰った腕輪は、消えた女に、どのように作用したのだろうか？

彼女は腕輪を掴んで、首を横に振っていた。

まるで、あの腕輪を嵌めてはいけないと訴えているように。

彼女は、マールの妻ではないのか？

マールの声が、頭の中に木霊する。

《陛下を生き返す助け出す方法を、あなたが掴むのです。陛下より前に》

僕は茫然と、彼女の消えた場所を見上げていた。

足元から地面が崩れていくような感覚を、拭い去る事が出来なかった。

## 第十六話 希望の魔劍

《入場を拒否する!》

エランの頭の中で、《聖なる泉》の〈門番〉のしわがれ声が何度も響き渡る。

心に邪心を持つ者は《聖なる泉》に入れず、〈成人の儀〉を終える事が出来ない、そう聞いたのは何時だっただろう。

多分、デインから聞いたんだ。

家令デインの顔を思い出し、無性に会いたくなつた。

孤児の彼にとって、親にも等しい存在だ。

王の天幕でマールから出された薬草茶の入った杯を手に、エランは先程から物思いにふけていた。

「お気に召しませんか?」

マールは優しく飲むように勧める。

エランは首を横に振りながら、杯に口を当てた。

少し酸味のある爽やかなお茶は、彼の気分を変えようというマールの心遣いだろう。

味わいながらも、心は別の思いに囚われたままだ。

自分の心に巢食う邪心って、どんなものだろう？

オリアンナの周りにいる、男達への嫉妬心か？

周りの大人達に、ついて行けない焦燥感か？

環境が変わった事へのストレスか？

考えると、きりが無い。

「エラン」

セルジン王が彼に向かって歩いて来る。

忙しい王の手には大量の書類と糖菓が持たれ、優雅な手付きでそれらを円卓に置いた。

「まあ、これでも食べて落ち着くのだ。こんな事は、良くある事だ」

「え？」

「ふふ、宰相エネスも拒否された一人だ。若い頃は悪さばかりしていたから、私より年上なのに成人していない」

「……陛下、そんな大昔の話は今更なしです！」

近くにいたエネスが、無然としながら国王を睨んだ。

王は笑いながらエランに糖菓を渡し、自分も椅子に座って書類を見ながらマールの出したお茶を飲んだ。

僕は、悪さなんてしていない。

王の軽口も、エランの心を軽くはしなかった。

彼は無意識に額飾りを触った。

冷たいそれは、考え過ぎて熱のこもった頭を冷やしているように思える。

「これを外したら、僕はどうなるんですか？」

「王配候補のままでしたければ、外してはならぬ」

エランは驚きながら、王を見た。

セルジン王は冷静な緑の瞳で、彼を見つめている。

「オリアンナ姫を欲しくはないのか？」

エランの心に痛みが走った。

王を前にして口にして良い言葉でないのは解っていたが、苦しみが大きすぎた。

「彼女の心は、別の男ひとのものです」

「……その男は、すぐにいなくなる。そなた以外、彼女を支えられない」

エランは首を横に振りながら、顔を擧あげて自分の異常を訴える。

「僕は……、呪われているんです。時々、記憶が無くなるし、オリアンナは倒れてばかりいる。僕が何かしているんじゃないですか？」

「……確かに今のままでは、オリアンナ姫を任せる事は出来ないな」

「教えて下さい。僕は何をしているんですか？ ……知りたい」

影の王が一瞬揺らめき、伝える事に迷いがあるのかとエランが思えた時、王の影が一層濃さを増した。

「ハラルドの呪の魔法は不完全だ、そなたの意志の方が強い」

「不完全？」

「そうだ。不完全な魔法ではあるが、その額飾りを外せばそなたは徐々に屍食鬼になる」  
「えっ？」

身体が沈み込むような衝撃を覚えた。

自分が屍食鬼になる……、考えられない事だった。

トキが半変化はんへんげの殲滅を指示したレント城塞での戦いで、彼は夢中で半変化を殺した。魔物じみた屍食鬼も、躊躇なく殺したのだ。

今度は自分が殺される側になる。

トキに殺されるイメージが、否応なく頭の中を支配した。

「僕の記憶が無くなっていった時、まさか……屍食鬼になっていたんですか？」

「いや、だが毒を放っていた。オリアンナがそれをくい止めていた」

「そんな……」

エランは頭を抱えて、身を縮める。

彼女が度々倒れていたのは、自分の放った毒のせいだったのだ。

「僕は……、オリアンナを苦しめた」

「エラン、自分を責めるな、そなたのせいではない。呪を解く方法はある」

エランは救いを求めるように、顔を上げて王を見る。

「……これを、授けよう」

セルジン王は一本の剣を腰の剣帯から外し、エランに差し出した。

「私の剣の一つだ。影の私が使っても効果は半減するが、生身のそなたには効果は絶大だろう。呪を解くにはこれを使ってハラルドを葬り去る、そなた自身の手で」

「僕の手で？」

王は頷く。

「そなたには出来るだろう。呪を解き、オリアンナ姫の元に戻るのだ」

エランは剣を受け取った。

剣は簡素な紋様が鞘に描かれたよくある剣に見えるが、薄らと朱の光を帯びて、それが魔劍である事を示している。

どこかで見た事があると思った。

モラスの騎士達が、帯びている剣？

彼は、剣を目の位置まで掲げた。

「ハラルドを葬り去る……」

「そうだ。《王族》の血を引く者である、そなたになら出来る！ 魔剣を扱うには、魔法を制御する事が必要だ」

エランは戸惑った。

魔法等、扱った事がない。

「ルディーナ・モラス」

「はい、セルジン様」

モラスの騎士の総隊長ルディーナ・モラスが、ちよこんとセルジン王の後ろから姿を現す。

自分と大して年齢が違わないのに、なぜこの娘が総隊長なのか、エランには意味が解らなかつた。

「エラン・クリスベインを、急ぎ鍛えろ」

ルディーナは恥ずかしそうに愛らしく彼を見つめ、まるで小悪魔のように言った。

「悪くない波動ね、真黒だわ。ふふ、あなた《聖なる泉》の〈門番〉に、よく殺されなかつたわね」

「ルディーナ！」

「闇の魔法が得意かも、騎士隊には珍しいタイプだわ。あなた一度死にかけた事がある



んじゃなくて？」

エランはハラルドに殺されかけた事を思い出し、嫌な気持ちになった。

「そんな波動を持つ人は、死の闇を覗いたのよ。だから余計強くなるわね。覚悟してね、私は厳しいから」

エランは得体の知れない彼女に警戒心を抱きながら、無表情に頷いた。

呪を解くためなら、何でもする！

今の彼にはそれ以外の選択肢はなかったのだ。

手にした希望の魔劍を、食い入るように見つめた。

行軍の前衛部隊から後衛部隊に移動させられた時、テオフィルスは霧の只中にいた。

竜を使って霧を吹き飛ばさないと、また霧魔に襲われる危険を主張しても、大将アレインは聞き入れない。

マシーナが怪訝な様子で怒っていた。

「どうなっているんでしょう？ ここの司令官は」

「知らん、王の判断だろ。それとも、俺達に見せたくない何かがあるのかもな」

「胡散臭いなあ、何を隠しているんだろう」

テオフィルスはマシーナの正直さを笑った。

リンクルクランの竜騎士の中でも精銳の彼は、信じられない程口数が多く常に弱腰だ。

言葉だけ聞いていると「お前は本当に精銳か？」と言いたくなるが、竜の扱い、乗りこなし、劍、弓、そして何より判断力は素晴らしい。

きつと彼は弱腰が自然体なのだろう。

最後尾に移動して、ずいぶん時間が経ったように思えた。

「本当に霧魔が出そうな程の霧の濃さですよ。その辺にいるんじゃないですか？」

丁度マシーナがそう言い始めた頃、心地良い風が吹き始め、霧が徐々に薄くなる。

全てを覆い隠していた霧が姿を消した。

そして、テオフィルスは周囲の異変に気が付いたのだ。

「おい、マシーナ。ここは、屍食鬼に襲われた場所じゃないのか？」

「え？」

燃え上がった木々の跡、木に残る爪のような鋭い物で傷つけられた痕、多くの弓の残骸、武器がいたる所に散乱し、それらには生々しい乾いた血の跡が大量に付いていた。

「これは……」

マシーナが茫然と辺りを見回した時、かけあし駆歩で走る三騎の馬が彼等目掛けて駆け付けて

来た。

アレインが優しく微笑みながら馬を降り、二人に話しかける。

「申し訳ない、アルマレークの御二方、状況が変わったようだ。出来れば今すぐレント領に向けて、出立してもらえないだろうか？ 親書はここに入っている」

そう言った後、前もって用意されていたのだろう、親書の入った鞆を差出した。

「一体、どのように状況が変わったのだ？ ここは屍食鬼に襲われた地だ、何か俺達がいると都合の悪い事でも？」

テオフィルスは食下がる。

「そう、都合が悪い。貴殿達にはエステラーン王国にとって、重要な役割を依頼した。それを果たしてもらったためにも、危機を回避して頂きたい。もうすぐここに屍食鬼が来るからだ」

テオフィルスはマシーナと顔を見合わせる。

屍食鬼が来るのなら、当然竜に乗って追いつまうべきだと目で語り合った。

彼は微笑みながら、手を差出した。

「判った。親書を受け取ろう」

## 第十七話 守りの風

僕は不安な気持ちを抱えながら、《聖なる泉》の門を抜けた。

濃い霧の中で〈門番〉は身動きもせず、生きているのか死んでいるのか判らない状態で、黒い渦を纏まとっている。

先程エランに襲いかかったのが、信じられないくらい静かだ。

レントの《聖なる泉》の〈門番〉は、水を所望してきた。

ひよつとして、この〈門番〉も……？

恐る恐る近付き、汲み取った《聖なる泉》の水を投げかける。

すると〈門番〉に纏わりついていた黒い渦が一瞬で消え、息を吹き返すように動きだした。

「退場を許可する」

厳格にそう言う〈門番〉が消え、風が吹いて霧が段々薄くなり周りの景色が見渡せるようになった。

なんとなくその景色に違和感を覚えたが、すぐに僕を迎えたセルジン王に気を取られ、気にならなくなる。

「無事戻ったな、オリアンナ。導<sup>しるべ</sup>はしつかり受け取ったか？」

優しい王の笑顔に、不安が消えかける。

「はい、〈堅固の風〉を頂きました」

「〈堅固の風〉か。では、急に霧が晴れてきたのは、そなたの魔力のせいだな」

「え？」

「マール！」

「はい」

「その腕輪の抑制力はどのくらいか？」

腕輪を手にした薬師マールは、首をひねる。

「……完璧に抑制するのは難しいと思います。ある程度は、というところでしょうか」

「では、腕輪を嵌<sup>は</sup>めるのだ、オリアンナ」

「……………」

マールに渡されて腕輪を手にしながら、《聖なる泉》で見た女を思い出し恐怖感を覚える。

本当にこの腕輪を嵌めて大丈夫なのか、不安は拭い去れない。

マールに対する不信感が、心の中に蟠<sup>わだかま</sup>りとなり居座り続ける。

「マールさん、奥さんは長い濃い金髪の方ですか？」

「そうです」

おそろくマールの妻だ。

「僕……、あなたの奥さんに会いました。この腕輪を嵌めている、濃い金髪の女の人」

「え？ 会えたのですか、どこで？」

僕は《聖なる泉》の門を見た。

マールはすぐに門へ向かおうとして、王に止められる。

《聖なる泉》へ入れるのは〈成人の儀〉を行う者と、泉の精と命を懸けて取引する者だけだ。

「馬鹿な真似は止め。〈門番〉に殺されたいのか？」

「妻が……」

「マール、ここがどんな状態か言っただはすだ。一刻を争う！」

「……はい」

マールは苦しむように項垂れる。

その様子を見て、僕は疑いを持つ事を止めた。

少なくとも妻に会いたがっているという事は、彼女の持っていた腕輪に疑いを持っていないという事だ。

彼に悪意があつて、僕に腕輪を渡した訳ではないと思える。

「オリアンナ、早く腕輪を嵌めるのだ」

「……」

僕は頷きながら、恐怖感を振り払い思いつきり腕輪を嵌めた。

すると消えたはずの霧が、まるで生きているみたいに緩やかに薄く辺りを覆い始める。

「エランは、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。エラン！」

王に呼ばれて、彼が薄い霧の中からこちらに近づいて来る。

僕はエランの元に走り寄り、王が見ているのも構わず彼の首に両腕を回して抱き付いた。

幼い頃から何かある度に、僕達はそうして寄り添ってきた。

彼は遠慮がちに僕を抱きしめる。

「王様が見ているよ」

小声で言う。

「いいんだ。心配した、君の気持ちを思うと。早く《聖なる泉》を出たくてたまらなかつたんだ」

「僕は……、君に近づかない方がいい。君を、苦しむ」

彼はそう言つて、僕を引き離す。

「エラン？」

「しばらく、会わない方がいいんだ。僕達は……」

「どうして？ 僕は苦しんだりしていないよ。君がいない方が嫌だ！」

「……僕は、苦しい」

顔を歪めて、彼が言う。

僕は訳が判らず、エランの腕を掴んで揺さぶつた。

彼の言葉が信じられない程ショックだ。

セルジン王がエランに呪の魔法の内容を伝えたのだと理解出来たが、彼が離れていくとは思つていなかったのだ。

「どうして？ エランと会わないなんて、僕は嫌だよ！ ねえ、そんな事言わないでくれ

よ、エラン！」

僕は必死に、溢れ出しそうになる涙を堪えた。

そんな僕の手を、彼は払いのける。

記憶に無い状態で黒い渦を出し、僕を苦しめた事が彼の心を傷付けているのだ。

だから僕と距離を置こうとしている。

「僕は、君を苦しめる。だから会いたくない！」



「嫌だー！」

僕は癩癩かんしゃくを起こしそうになった。

彼に精神的に完全な依存をして生きて来たのだ。

その事を嫌という程思い知らされ、ますます混乱が増す。

離れ離れになる等、考えられなかった。

見兼ねた王が、二人の間に立つ。

「オリアンナ、エランはモラスの騎士に組み込まれる。呪を解くための努力は、惜しまないだろう。いずれそなたの元に戻る、しばらくの辛抱だ」

「モラスの騎士……」

僕は王の側に控えていたルデイナーナを見た。

彼女は恥ずかしそうに頷く。

呪いに支配されそうになった時は、モラスの騎士達といる方が彼は安心出来るのだらう。

それは解るがエランを取られたような気がして、僕は腹が立った。

考えてみると、彼と離れ離れになるのは、レント城に部屋を設けられた時以来だ。

僕の目から涙が、溢れ出した。

「本当に戻ってくる？」

涙で彼が見えない。エランは僕の顔を見ずに頷いた。

「戻るよ、必ず……」

「……………じゃあ、待つてる」

僕は泣きながら、そしてルディーナに腹を立てながらも、全て一任する意志を伝える。

「エランを……、お願いします」

ルディーナはおずおずと僕の前に来て、そつと手を差し出した。

僕はまた大人の彼女の意志を伝えられると思い、躊躇しながら手を出す。

つないだ手から伝わってきたのは、柔らかく包み込むような意識だ。

《王族》の血を引く者達が使う魔力。

彼女に対する苛立ちが、優しい気持ちに包み込まれ溶け出す。

「あなたも、《王族》みたいだね。義母上ははうえやマールさんみたいだ」

僕はそう言いながら、増々子供みたいに泣いた。

ルディーナは僕の頭を、優しく撫で慰める。

エランは厳しい顔付きで僕の側を離れ、数名のモラスの騎士と共に霧に紛れた。

そうして僕の涙が止まる頃、王が冷静に指示を出す。

「さあ、大学街へ急ぎ帰ろう。図書館の探索をせねばならぬ」

国王軍は僕が出せる最高速度の馬脚に合せて、急ぎ大学街へ戻った。

セルジン王がなぜこんなに急ぐのか、僕には解らない。

大学街は相変わらず、深い霧に沈んでいた。

僕の到着と同時に、深い霧が薄れ始めたように見える。

〈堅固の風〉の影響だと感じたが、僕を驚かせたのは王の言動だ。

「まずい、このまま図書館へ直行せよ！」

王は何かを焦っている。

霧が晴れる事で、何か不具合が生じるのだ。

それに兵達が城門内に、入ってきている事も気になった。

通常兵は人数の多さから、城門内に入れない。

アレイン率いる前衛部隊が、図書館へ向けて先に動く。

学生やここに住む人達が、驚いてしまうのではないかと心配になる。

王のいる本隊も前衛部隊に続いた。

不思議な事に、大学街に人の気配がない。

どうしたんだ？

あんなにいた学生達の姿が無い。

授業の時間なのか？

国王軍を導いているのは、この大学の出身の騎士だろう。

深い霧が覆う迷路のような大学街の道を、迷う事なく馬で突き進む。

僕は自分の通った後の霧が薄れていく事に興味が湧いた。

この霧は何を隠しているのか、周りを見回す。

すると上空に黒い影が飛び交っている事に気が付いた。

あれは……、屍食鬼？

そう思った途端、前方に何かが燃えながら落ちてくる。

そして大きな翼の羽ばたき。

「気にするな、急ぎ図書館へ」

王の指示に、止りかけた騎士達が再び速度を上げる。

その後二度三度と燃える物体が落ちて来て、それが屍食鬼である事が解りかけた時、

獣の叫び声が聞こえた。

竜だ！

僕は慣れぬ駈歩かけあしを必死に熟こなしながら全力で王の後を追い、馬を走らせる。

「国王陛下、竜が……」

「判っている、しゃべるな、舌を噛む。レント領へ行くように伝えたのに、残ったのだ。」

屍食鬼に出くわしたのだろう」

その時、僕を乗せた馬のすぐ前に燃える屍食鬼が落ちてきた。

馬は棹立ちになり、僕は馬から落ちる。

無意識に魔力を使ったのだろう、旋風が落下する僕をゆっくり押し上げ、怪我する事なく地面に舞い降りた。

何か異常な事態が目に見え込んでくる。

王が隠したがっていた事が明らかになる。

旋風が僕の周りの霧を完全に追い払い、現れたのは乾いた血に塗れた武器と、引き裂かれた血まみれの衣類。

あちこちに散らばる戦闘の痕だ。

僕の背に、戦慄が走る。

そして、屍食鬼が降りてきた。

## 第十八話 霧に映る者

「オーリンを、守れ！」

王の指示が飛ぶ。

僕の目の前に舞い降りた屍食鬼が、長く鋭い爪を首筋めがけて振り下ろす。

咄嗟に脇に避けたが、屍食鬼の醸し出す黒い渦が、何よりも僕に痛手を与える。

苦しみに身動き出来なくなり蹲る。

周りの騎士達が僕を助けるために駆け寄り、襲いかかろうとする屍食鬼に剣で応戦し、戦闘が始まった。

上空から舞い降りる屍食鬼に向け、火矢が放たれる。

「大丈夫ですか？ オーリン様」

モラスの総騎士隊長ルディーナに助け起こされ、気分が悪さを振り切つて僕は叫ぶように聞いた。

「ルディーナさん、この街は襲われていたのか？ 屍食鬼に……」

「オーリン様、その事より殿下が果たすべき事に集中して下さい。陛下を助ける方法を探し出すんじゃないんですか？」

「マールが口にした事をそのままに、彼女が言うのに驚き、人形めいた美少女を見つめる。」

「陛下を助け出す方法を探すのは、薬師殿だけじゃありません。でも《王族》にしか出来ない事が多くて……。王弟ドウラス様が亡くなられてからは特に、皆が殿下を待っています」

青紫色のルディーナの目は、怖い程真剣に僕に訴えていた。

《王族》でない自分を齒痒く思っているのだろう。

強力な魔力を身の内に湛えていながら、なぜ彼女は《王族》ではないのか……。僕には不思議に思えた。

「ルディーナさん……。解ったよ、じゃあ皆で探そう」

彼女は可愛い顔でにっこり微笑み、僕は嬉しくなった。

「エランは、何処に？」

「彼は安全な場所にいます。アルマレーク人と会う事は、まずありません」

「……うん。でも、竜がいる事に気が付いてしまうね」

「モラスの騎士が、何とかします」

僕は頷く。

エランの事は、僕にはどうする事も出来ない。

焦燥感を感じても彼の役には立たず、返って苦しめるだけなのだ。落ち込もうとする心を叱咤しつたして、前へ進もうとした。

僕の馬が歩兵によつて手綱を掴まれ、戦場から逃れる事なく留まつていた。

馬の元へ行こうとした時、新たな屍食鬼が僕の行く手を阻み舞い降りる。

ルディーナはその屍食鬼を、赤く光る剣を使い一撃で倒す。火を使う事なく、屍食鬼が灰塵のように消えて無くなった。

《ソムレキアの宝剣》以外でも、それが出来る事に驚き、彼女の強さを感じる。

「凄い！ そんなに小柄なのに、一撃？」

「剣が良いんです、それだけです。さ、早く馬にお乗り下さい。陛下がお待ちです」

剣が良いだけではない、彼女の気迫と魔力が屍食鬼を消滅させたのだ。

モラスの騎士の総隊長が、如何に凄い存在であるかを目の当たりにした。

馬に乗った時に、向こう側に見える霧の中から火矢が飛び、霧の上空にいる屍食鬼に当たる。

まだ国王軍が到達していない先でも同じ光景が繰り広げられていた。

僕は王の側に駆け付け、その不思議さを聞く。

「彼等も、戦っているのだ。そなたは大学図書館の結界を解く事だけを考え、先へ進め！

後は霧が守る」



「……」

王が霧を消さない理由が、解る気がした。

霧がこの街への屍食鬼の侵入を阻んでいる。

この戦場を作り出したのが霧の晴れた事にあるのなら、僕の新たな魔力のせいだ。早く移動しなければならぬ。

「この大学街で……、生き残った人達もいるのですか？」

「それは後だ。 出立！」

王は先に立って霧の中に突入し、僕も後に続く。

戦闘中の騎士達も屍食鬼をやり過ぎ、それぞれの従者達が手綱を掴んでいた馬に跨り王の後を追った。

兵達の周りに薄らと霧が侵入してきたかと思うと、その中から影の兵達が屍食鬼に向けて火矢を射る。

その的確さに、地上にいた屍食鬼達は堪らず上空に舞い上がる。

上空には二頭の竜が待ち構え、炎を浴び墜落する屍食鬼。

上空の屍食鬼は、徐々に数を減らしていった。

王の前を進む案内役の騎士が、霧の中で突然叫び声を上げ馬から落ちた。

王は馬を止め、剣を抜きながら前方の敵を迎える体勢を取る。

僕が到着した事で、徐々に霧が薄くなっていく。

焦りが募る中、進行方向に一人の少年が現れた。

〈契約者〉ハラルド・ボガードだ。

「また、そなたか。今度は幻ではなく、本物の屍食鬼を引き連れているようだな」

セルジン王は蔑むさげすむように、彼に向かって言う。

霧の中の影の兵士達が、ハラルドに向つて矢を射るが、彼の手前で矢は全て消え失せ  
た。

そしてハラルドのいる上空で、黒い影が飛び交う。

彼が屍食鬼を呼び寄せているのだ。

霧の守りは〈契約者〉には効かず、上空を飛び交う屍食鬼に矢で撃つ影はいなくなる。

ハラルドの周りにバラバラと燃えた屍食鬼が降り注ぐ。

「ふん、また邪魔をするか、竜め！」

ハラルドは溜め込んだ怒りの波動を、一気に放出した。

何かが爆発したように、周りにいた歩兵達が吹き飛ばす。

僕はまた馬に振り落とされそうになり、手綱で馬を制御しながらバランスを取る。

一度目は何とか持ちこたえたが、二度目の波動でバランスを崩し、再び〈堅固の風〉を

使う羽目になる。

霧の守りが無くなったが、ハラルドの出現でどちらにしても霧の中の兵士達の攻撃は役に立たない。

視界が開け敵の数の把握に役立つたのかもしれない。

上空には旋回する屍食鬼の群が、薄くなった霧を汚すように黒々と存在を主張する。

ハラルドの放った波動をもともせず、二頭の竜は襲い来るそれらと戦っていた。

王が指示を出す。

「モラスの騎士の第二隊、第三隊は〈契約者〉を排除せよ。第一隊はオーリン王子を守れ。アレイン・グレンフィード、後は任せる」

「はっ」

「オーリン、馬に乗るのだ。ロイ・ベルン、こちらに参れ！」

「はい」

僕は驚き、振り返って声のした方を見る。

ベルン長官はハルビインの指揮下レント騎士隊と共に後衛部隊ではなく、王直属の部隊の中にいた。

王の前でひびく跪き最敬礼する彼は堂々としてとても目立つ。

「そなたはどの馬にも乗れるか？」

「もちろん乗れます、国王陛下」

「では私の馬の二頭を貸し与える。これに乗って、オーリンを大学図書館へ急ぎ案内せよ」

「畏まりました」

僕は馬に乗りながら、ベルン長官を不思議そうに見ていた。

僕の横に引き回された王の馬に、長官は颯爽と跨る。

これで朱色の国王軍の服装を身に着けていれば、皆は国王直属の部下だと思ひ疑わないだろう。

「さ、参りましょう。オーリン殿下」

「……ベルン長官、出世したんだね」

「一時的な事ですよ」

「レント領の優れた人材を、私が放っておくと思うか？ 最初から案内人として、そなたの後を追わせたのだ、私の目としてな」

セルジン王は微笑み、僕は頭を抱えた。

図書館に案内してもらった時から、長官は王の密偵だったのだ。

最初から案内人として付けてくれれば良かったのに……。

あ、あの時は陛下に内緒だったっけ。

ベルン長官は襲い来る屍食鬼を、馬上から剣と小型の盾で防ぎながら、王の近衛達の先頭の一団に紛れた。

何となく釈然としないままに、僕は馬を走らせる。

王とモラスの騎士第一隊が僕を守る。

大将アレインは王の一団が進む方向へ屍食鬼達を向かわせないよう陣形を組み、大量の矢が上空を飛んだ。

ハラルドを囲むモラスの騎士達。

僕は再び霧に紛れた。

霧の中に再び国王軍とは別の兵士達の影が浮かび上がる。

彼等は霧に侵入しようとする屍食鬼達に火矢を浴びせかけ、霧の中に入る事を阻む。

僕は安心しながら、長官の後を追った。

僕の未熟な技量のせいで、馬は王の集団から遅れがちになる。

モラスの騎士が馬足を合わせ共に後れを取り、道に迷いそうになった時、不思議な事に霧の中の影の兵が進む方向を指差し教えてくれる。

味方してくれている。

僕は感動しながら、心の中で影の兵士達にお礼を言った。

ようやく王とベルン長官の姿が見えた時、彼等が戦いの最中にある事に気付く。

モラスの騎士達が馬上で一斉に剣を抜いた。

王と対峙しているのは、屍食鬼を引き連れていないハラルドたった一人だ。

「逃すと思うか、オーリン」

ハラルドが再び怒りの波動を飛ばす。

僕は馬から振り落とされないように、手綱を操作し何とか持ちこたえた。

「ロイ・ベルン、オーリンを連れ図書館へ向かえ！ モラスの騎士も続け。ここは私が引き受ける。早く行くのだ、オーリン。やる事は解っているな？」

「はいー」

「では、行け。早くー」

王と近衛騎士達がハラルドを囲む。

ルディーナが僕を促した。

「早く参りましょう。この霧も長くは保ちません」

彼女の言う通りで、霧は徐々に薄くなりつつあった。

〈堅固の風〉の影響である事は確かだ。

セルジン王と離れる事に不安を感じながらも、ベルン長官と共に僕は大学図書館へ向かった。

そうしてその古い塔が薄い霧の向こうに影を現した時、上空に大きな羽ばたきが聞こ

えた。

二頭の竜が僕の頭上を掠めるように飛び、馬列が乱れる。

旋回する竜は、明らかに大学図書館前の広場に舞い降りていた。

僕は怒りを覚えながら、馬を進める。

誰よりも一番会いたくない、テオフィルスが待っているのだ。

## 第十九話 書箱の秘密

駆け付ける僕達を待つように、薄い霧の中で二人の男と一頭の竜が立っていた。

テオフィルスとマシーナ、そして竜エーダ。

大学図書館の前の小さな広場の入り口を、アルマレーク人が塞いでいる。

「よお、へタレ小竜」

テオフィルスは腕を組んで、無表情に僕を迎えた。

彼に会いたくない！

《君達は出会った瞬間に、自然に惹かれあう》

《七竜の定めた一対は、運命そのものだ。君達は国を越えて、結ばれる。私は君を、セルジン王に渡す気はない》

《聖なる泉》で父エドウィンが言った言葉を、僕は完全に否定した。

テオフィルスが運命の相手だなんて、僕は絶対に認めないぞ！

いつの間にか僕を引きずり回してしまふ目の前の男を、出来れば今すぐ消し去りたい  
と思えた。

セルジン王と僕を引き裂く、許せない存在に見えてくる。



案内役のソル・トルカが初めて間近に見る竜に驚きながら、恐怖に怯える馬を制御し僕を振り返った。

「どうしますか、殿下？」

「どけ、テオフィルス！ 先を急ぐ、竜を退けろ、時間が無いんだ」

僕は苛立ちを押しえながら、テオフィルスを睨みつける。

彼は全く応じる風もなく、意地悪く笑う。

「お前の動きは上空から丸見えだ。突然旋風を巻き起こし、お前の動きに合わせて霧が薄れる。一体、何の魔法だ？」

「そんな事はどうでもいい。早く退いてくれ！」

「なぜ、そんなに急ぐ？」

「……………え？」

彼に言われて、確かになぜ急がなければならないのか、解つてはいない事に気付く。

王が霧の晴れる前に、図書館の結界を解く事を望んでいるから急いだのだ。

この霧は大学街を守っているが、消えてしまった場合はどうなるのだろうか。

「と……………とにかく図書館に行かないといけないんだ。退いてくれ」

「俺も行こう、お前の周りは何か変だ。上空から動きは丸見えなのに、屍食鬼はお前を狙っている訳じゃない。狙いは王だ」

「なに?」

「……オーリン様、お急ぎ下さい。霧が晴れます」

ルディーナの言葉通り、緩やかに風が吹いて来た。

霧が消えて辺りの惨劇を露わにし、僕は顔を顰めた。

大学街は屍食鬼に襲われているのに、なぜケイデイス学長はその事を伝えてこない?

それにテオフィルスの言う事が本当なら、王を助けに行く方が良いんじゃないか?

「オーリン様、彼等と同行してもらいましょう」

「ルディーナさん?」

「陛下は霧が消える前に、結界を解く事を望んでおられます。足止めされる時間はあり

ません。陛下が負ける事はありませんから、ご安心を」

目的——それは陛下を助ける方法を探す事だ。

僕は嫌々ながら、ルディーナに頷いた。

テオフィルスは出来るだけ遠ざけておきたいが、同行を認めるしかない。

彼はマシーナに竜を退かす指示をし、僕達は大学図書館に辿り着く。

あんなにいた屍食鬼の姿は、どこにも無かった。

「ソルさん、守衛の自警団の人がいない、どうしたんだろう?」

「ええ、私もそれが気になっていました。本は高価だから、警備はいつも厳重なのです

が……」

マシーナは竜エーダと外で待機する事になり、テオフィルスのみが僕達と中に入った。

独特の本の匂いは変わりなく、ここが古い図書館の証明であるように整然と佇んでいる。

静かな中に特有の緊張感と活気があるのが図書館だと思っていたが、足を踏み入れた先はまるで死んだように誰一人いない。

ソルが狼狽える。

「どこへ行ったのでしょうか？ 司書も、守衛も、一人ぐらい居そうなのに……」

そう言つて彼は奥の塔へと通じる扉を開けた。

そこも無人。円形の壁に本がずらりと並んでいて、修復を行っている本が今まで人がいたように置かれていた。

突然、人だけが消えてしまった感じがして、緊張感が増した。

二階へ続く階段を上る。

「セイゲル教授、いますか？」

答えは何も返つてこず、僕達の到着が遅すぎたのかと不安になる。

セイゲル教授の部屋の前で、変なリズムのノックをしながらソルが叫ぶ。

「教授、入りますよ！」

答えも待たず扉を開けた。

「あ……」

「何事かね、ソル・トルカ君」

扉を開けた先に書見台に向つて本を手にしたセイゲル教授が、不機嫌そうに訪問者達を見ていた。

「この図書館に入つて初めて人に出会えた事に、僕はホツとする。

「一体どうしたんですか？ 図書館は、閉館しているんですか？」

「何を言つておるのかね、トルカ君。閉館？ こんなに人がいるのに？」

教授がそう言つた途端、突然人があちこちに現れた。

僕はケイデイス学長の館の門をくぐつた時と、同じ感覚に襲われた。

魔法を掛けられている……そう思ったが、その魔法に抵抗する事がどうしても出来ない。

突然現れた人々を、最初から存在していたと思ひ込む事を僕は受け入れた。

「勘違いだろう？ 図書館は今まで通りの運営だ。そうだろう？ トルカ君」

「……はい、セイゲル教授。今まで通りです」

ソルも自然と魔法に掛けられた。

教授は満足そうに頷いて、自分の後方にある上階への階段とつながる扉を開けた。

「陛下から四階の調査をする要請があつたと、ケイデイス学長から聞いております。お入り下さい、オーリン殿下」

教授は迷う事無く、僕を見つめながらそう言った。

「あ……、はい」

なぜ、オーリンの名前を知っているんだろう？

この前はエアリスとして会つたのに。

学長から聞いたのかな？

不思議に思いながらも、僕は四階へ続く階段を上った。

足の悪い教授は相変わらず上るのが遅く、僕は彼の腰ベルトを掴みながら上るのを手伝う。

僕と教授の後を、階段をゆっくり上りながらテオフィルスがついて来る。

後ろを気にする僕には、無表情な彼の感情は読み取る事が出来ない。

こんな所までついて来なくてもいいのに……。

大体、ここは《王族》以外立ち入り禁止の場所だつてある。

ルディーナさんはなぜこの男を止めないんだ？

「おい、後ろを見ながら階段を上ると転けるぜ。それとも俺に見惚れているのか？」

「ふんっ、誰が！」

彼の軽口に僕はぶりぶり怒りながら、教授を抱えて上るのを少し急いだ。

ルディーナは先に階上において安全を確認してから、僕と教授が来るのをまるで綺麗な女神像のように見守っている。

モラスの騎士達が、僕を囲むように階段を上る。

階上まで辿り着いた時、数人の図書館司書が本整理の手を止めて、教授の指示を待っている。

教授は階下に司書達を下ろし、鍵束を取り出して中央仕切りの扉に付いた錠前に鍵を突き刺した。

前回に比べて鍵に迷う事が無かったのは、きつと目印を付けておいたからだろう。

扉が開き、中にモラスの騎士が入り、異常が無いか確認する。

問題はその後だよ。

どうやって四階に行くんだ？

階段も無いし、まさかこの仕切りを登るって事ないよね。

僕は仕切りの向こう側の、マールが持ち込んだ空の書箱を眺めた。

分厚い埃は部屋中綺麗に片付けられ、木の床の木目が見えている。

細長い窓のガラスも磨き上げられ、日の光が差し込んでいた。

上空は霧が晴れているのだ、間もなく全ての霧が消えて無くなるだろう。僕は焦りを感じた。

こここの窓には、鉄格子が無い。

隣の窓の外をテオフィルスが眺めていた。

僕は何か手がかりが無いか、あちこちの壁を触りながら見て回る。

特に気になる所はないが、中央の仕切りの下にわずかな隙間がある事に気が付いた。

中央仕切りのこちら側には、前回結界を破った時からあつた、黄金の本の首飾りが入った書箱が置かれてある。

まさか……ね。

僕はその箱を覗き込む。

中身はセルジン王が持ち出し空だ。

綺麗に掃除された箱の蓋の上にはベイデル家の紋章なのだろう、首を絡ませ合う二頭のグリフォンが画かれている。

前にこの書箱を見た時は、埃のせいでこの紋章に気付く事も無かつた。

何気なくその書箱を、僕は動かそうとした。

通常の書箱では考えられないくらいに重さに、ほんの少ししか動かせない。

モラスの騎士の一人が僕の意図を汲み取って、書箱を横に動かす。

すると仕切りを床に繋ぐ二つの留め金が現れた。

よくよく見ると、多くの書箱が置かれている棚の二本の柱板に隙間があり、その隙間に目隠しのように書箱が置かれている。

「ルディーナさん！」

辺りを警戒していたルディーナが可愛らしく僕の横で膝を折り、現れた留め金を覗き込む。

「この仕切り……、可動式じゃないかしら？　騎士達、仕切りを調べて。どこかに蝶番が無いかしら？」

騎士達が仕切りを調べ始める。

「総隊長、ありました。こちらに」

「ルディーナ様、こちらにも！」

二人の騎士は共に仕切りのこちら側で発見した。

僕とルディーナは顔を見合わせ頷きあう。

僕は仕切りの二つの留め金を、床から外した。

ルディーナの指示で、騎士達は隙間にある重い書箱と棚板を取り除く。

隙間の書箱が全て取り除かれた時、柱板の中央部分にまた二つ留め金が現れた。

それを外すと、重い仕切りが動く事に、皆が驚きを覚えた。



騎士達が蝶番の部分を、そして反対側の柱板部分を別の騎士が押す。仕切りは重い音を立てながら、ゆっくりと動き始めた。

## 第二十話 部屋への入口

可動式の重い仕切りは分厚い埃を撒き散らしながら中央で二手に別れ、それぞれ二つ折りの状態で円形の壁に移動する。

部屋の中央に、空間が現れた。

「これ以上は動かないのか?」

「待つて下さい、ここにも蝶番があります」

僕が言う必要のないくらい、モラスの若い騎士達がまるで宝探しのように、率先して謎解きを始める。

仕切りの反対側の壁と仕切りの間に蝶番を発見したのだ。

「(こちらにも……)」

「留め金が(ここ)にもあります。仕切りを壁に付けられるんじゃないですか?」

二つ折りにされた仕切りの固定された方の柱板に、また留め金が付いて床に固定されている。

留め金が外され、今度は最初の重量の倍はある重さの仕切りが、若い騎士達総動員で動かされた。

仕切りの偏った重みで床が抜けるんじゃないかと、僕は心配になる。もう片側も同様に円形の壁に斜めにしまわれた。

丁度、壁の柵は仕切りが収まる位置だけ空間が開けてあったのだ。

広々とした空間が、三階に出現した。

長い間動かさされていない仕切りが動いた事で、埃が舞飛び、騎士達は口を押えながら四か所全ての窓を開ける。

すると爽やかな風が、埃を外に吹き飛ばした。

「ああ、窓は開けないでもらいたい。霧が入り込んで大事な巻物にかびでも生えたら大変じゃ」

セイゲル教授は騎士達が勝手に三階の間取りを変えた事に、憤りを感じているようだったが、《王族》がいる手前それを訴える事も出来ずにいたのだろう。

窓が開けられた事で、ついに抗議の声を上げたのだ。

「大丈夫だよ、アンのお父さん。こんな上空に霧なんて、もう……」

霧の消えている事を教授に伝えようとしたその時、窓から大量の霧がまるで生き物のように三階の部屋に侵入してくる。

「何だ？ この霧」

「だから言ったのだ。ここの霧は厄介だから……」

「なぜ、厄介なんだ？ お前の仕掛けた魔法が解けてしまうからか？」

突然、それまで静観していたテオフィルスが、低い声で問質す。

彼は窓際から僕の側へ、いつの間にか近づき、僕を後ろから引つ張り自分の元へ引き寄せる。

「な……、何をする！」

テオフィルスの唐突な行動に僕は逃げようとしたが、腕をしつかり掴まれ逃れる事が出来ない。

モラスの騎士も、ルディーナも、僕がテオフィルスに捕まった事に、なぜか気付きもしない。

「離せ！」

テオフィルスは抵抗する僕を後ろから抱きしめ、身を屈めて耳元にアルマレーク語で囁く。

「お前は一体、誰と話している？」

その瞬間、僕に掛かっていた魔法が全て解けた。

テオフィルスに抱きしめられながら、何かが綺麗さっぱり抜け落ち、身体が軽くなるのを感じる。

「あ……」

そして僕は、驚愕した。

今まで話していた目の前にいる相手は、足の悪い老教授ではなく、長身で艶やかな金の髪に国王と同じ緑の瞳を持つ、残酷なまでに美しい二十代の男——魔王の影であった。

「魔王アドラン！」

その言葉にテオフィルスは不敵に笑いながら、僕を自分の後ろへ庇うように隠した。

「やっぱりこいつが魔王なのか？ おかしな言動なのにお前達が従うし、エステラー人はこいつの魔法に掛かりやすいのか？」

「……これは、罠だ！」

「魔王アドランの影。俺はあんたに恨みがあるな、レクーマオピオンを襲撃された恨みが！」

テオフィルスは怒りを込めて、剣を抜き放つ。

『ふ……、アルマレーク人。我が愚弟も、力が及ばなくなつたものよ。竜の眷属ごときを、王国に入り込ませるとは』

突然四か所全ての窓が前触れもなく閉まり、霧が入り込まなくなつた。

魔王は強烈な波動を放ち、そこにいた者達を霧と共に吹き飛ばす。

霧は攻撃の盾になるように幕を作り、僕達を守つた。

『わずらわしい愚弟の仕掛けた霧の兵達め。我が魔力に勝てると思うか!』

魔王アドランの右手から大量の屍食鬼が飛び出す。

霧の中から影の兵達が現れ、屍食鬼と戦い始める。

モラスの騎士達はようやく魔王の魔法から解放され、ルディーナが僕の側に駆け付ける。

「大丈夫ですか? オーリン様」

「ルディーナさん、これは魔王が仕掛けた陛下と僕を切り離すための罠だ! だからハラルドが陛下を……」

モラスの騎士達が屍食鬼達と戦い、テオフィルスも吹き飛ばされた剣を拾い参戦した。

彼は屍食鬼達を剣で薙ぎ払いながら、真直ぐ魔王に迫る。

魔王アドランは彼と戦いながら、まるで呼び寄せるように徐々に僕とは反対側の壁際に寄っていく。

「オーリン様、図書館の外へ……」

ルディーナが僕を守りながら逃そうとした時、戦いの混乱の中に異変が起きる。

細長い四か所の窓が全て光を帯び、その光がまるで霧に乱反射するように、三階の部

屋中を光で満たす。

僕は眩しさに目を開けているのが難しくなり、左手で目を覆った。

屍食鬼達は光に薄れて消え去り、四か所の窓の光は部屋の中央で凝縮し固まり、やがてそれは繊細な光で出来た螺旋階段となった。

四階への階段が出来たのだ。

僕は驚き、その階段を上ろうと部屋の中央へ駆け出す。

入口の結界を破れば、セルジン王を助ける方法が見つかるかもしれない。

「いけません、オーリン様！」

ルディーナの警告が僕を正気付かせたが、既に遅かった。

目の前に魔王アドランが立っていたのだ。

テオフィルスは魔王との戦いに集中するあまり、僕から引き離されていた事に気がつき舌打ちした。

魔王の長い爪が、僕の首に突き付けられる。

僕は引きずられ光の螺旋階段を途中まで上らされた。

『得体の知れない《王族》よ。男であり、女である。純血でもないそなたが、なぜ天界の使者なのか？ 《ソムレキアの宝剣の主》なのか？ その身に聞きたいところだな』

首が閉まる感覚が、僕をじわじわと苦しめた。

「う、あ……」

あまりの苦しみに、僕の目から涙が流れる。

魔王は抵抗出来なくなった僕の腰に手を回し、《ソムレキアの宝剣》を奪い取ろうとした。

しかしその手は何かによつて弾かれる。

『何?』

どうしても宝剣を手にした魔王は、今度は魔法を使つて宝剣を手に入れようとしたが、その魔法が使えない。

『この螺旋か? これは、過去の時空だ。今の水晶玉の魔力以外の、水晶玉の魔力が働いている?』

魔王は天井を見上げた。

『結界か……、何を隠している?』

魔王は《ソムレキアの宝剣》を手に入れられない事に憤りを覚えながら、諦めて結界を解く事にした。

僕の首の苦しみはいつの間にか消え、半分意識が朦朧もろろとする状態で螺旋階段をさらに上らされる。

天井に手が届く位置まで来た時に、魔王が無理やり僕の手を持ち天井に付ける。



『さあ、結界を解くのだ。《王族》よ』

僕は半分気を失いそうになりながら、魔王に抵抗を試みた。

足を蹴り、顔を叩き、可能な限り暴れたが、何一つ効果は無かった。

『愚かな』

魔王アドランが持つ僕の手には、激痛が走る。

「うあああ……」

「オーリン様！」

ルディーナの悲鳴が聞こえる。

痛みが僕から抵抗する気力を奪った。

耐えかねたテオフィルスが七竜リンクルの影を出現させ、魔王めがけて突進させる。

ところが光の螺旋階段に触れる直前に、リンクルの影は消えた。

テオフィルスの指輪に七竜が逃げ込む。

彼は呆然としながら指輪を見つめた。

『ふん、七竜の影か。ここは水晶玉の領域だ。恐ろしい目に遭うのは竜の方だな』

冷たい緑の瞳は邪悪な光を帯びて異国の若者を睨みつけ、テオフィルスは憎しみを込

めて睨み返した。

『いずれ、思い知るがいい。さあ《王族》、結界を解け！』

僕は言われるまま、気力を振り絞って一本の指の先に意識を集中させた。

針の先を思い浮かべ、結界という幕を破る事を考える。

すると……。

バン！

音と共に、何かが僕の指先で爆発した。

僕の横に立っていた魔王が、悲鳴を上げて消え去ったのを感じる。

それは全てを吹き飛ばす勢いで、大学図書館が破壊されたかと思った。

ようやく静まり帰った頃、僕はゆっくりと目を開いた。

図書館の建物は何事もなかったように整然とそこに存在していて、巻物一つ床に落ちてもいない。

ただテオフィルスも、ルディーナも、モラスの騎士達も、全員が床に倒れていた。

まさか……、死んでないよね、

魔王アドランと屍食鬼の姿は、どこにもない。

ルディーナの元に駆け付けようとした時、階下から大勢の人が来る音が聞こえた。

不意にマールルの言葉が頭に甦る。

《陛下を生きても助け出す方法を、あなたが掴むのです。陛下より前に》

《陛下は死を望んでいらつしやる。生きる方法が見つかつて、握り潰す可能性がありません》

セルジン王より先に生きて助け出す方法を見つける、それが目の前にあるかもしれないのだ。

僕は天井を見上げた。

そこにはポツカリ開いた暗い入り口があり、螺旋階段は四階の部屋へとつながっている。

まるで魅入られたように弱った身体に鞭打って、僕は螺旋階段を上った。

## 第二十一話　ウロボロス　— 循環する輪 —

魔王アドランに痛めつけられた身体を引きずるように、僕は四階の入口をくぐり抜け謎の部屋に入った。

窓一つないその部屋は、真つ暗で何も見えない。

暗闇から何かが襲いかかって来そうで、僕は腰鞆から月光石を取り出した。

でも、月光石の光だけでは、部屋の中の様子が分からない。

階段を上り切り床に足を掛けた時、下の階から光が、まるで泉が湧き起るようになり暗闇を追い払う。

分厚い埃に覆われた宝物庫を想像しながら振り返ったが、そこに置かれていたのは、埃一つ被っていない膨大な量の巻物だった。

どこことなく拍子抜けしながら、巻物が並ぶ棚に近付く。  
当然か。

ここは大学街になる前からあった、大昔の図書館なんだから。

巻物の一つを取ろうとした時、足元から声が聞こえた。

『そなたはベイデルか？』

「うわっ」

僕は足元に何かうごめが蠢いているのに気付き、飛び上がり驚く。

よく見ると足元の床下が水面のように光を帯び、その中に大きな竜か蛇が分からない者がゆつくり泳いでいた。

『違うな……、そなたは天界の住人。なぜ地上にいる？ 〈ありえざる者〉が追い払う竜は、今はいないであろう？』

「……あなたは、誰？」

僕は柵に背を付けながら爪先立った。

床を踏んでいるのが、失礼な事に思えたからだ。

『わし等はウロボロスとベイデルが言っていたな。ここを守る二頭の蛇だ。そなたは誰だ？』

「僕はオリアンナ・ルーネ・ブライデイン。ベイデルじゃないブライデインだ」

僕は本当の名前で答える。

どこことなく《聖なる泉》の〈門番〉と接している感覚があったからだ。

《王族》名も訂正した。

『それは女性名だ。もう一人いるであろう？ 男が……』

「……オーリン・トウール・ブライデインの事？」

戸惑いながら、僕の命の光となった王の子の名を告げる。

『オーリン殿、その娘に姿を見せてはどうか？　ここでは、それが可能だ』

「え？」

僕の周りに光が浮かび上がった。

光は僕の目の前で凝縮し、一人の翼のある人間の姿を形作る。

僕は驚き、逃げ腰になる。

少し背の高い彼は僕より少し年上で、僕と同じくらいの短さの黒髪に、右は緑、左は紫の印象的なオッドアイの瞳を持っている。

白いドレープのある服は優雅に彼の身体に纏わり付き、大きな白い翼は彼を包み込み柔らかに光り輝いていた。

『いらん事をするなよ、ウロボロス。最後まで姿を見せる気はなかったのに』

『ははは……、その娘には知る権利があると思うてな。天界の住人にほんろう翻弄ほんろうされているように見えるからな』

『翻弄ね。この娘と父の願いを叶えるだけだよ、心外な言葉だ』

『人間とは、弱いものよ。不死の我らとは違うのだ』

「……………」

僕は会話について行けない。

『やあ、オリアンナ姫。僕の事は、名乗らなくても判るだろう？』

優しく微笑んだオーリンは、目の色を除けばセルジン王にそっくりで、僕は親しみを覚えて頷いた。

彼は急に、僕の額に人差し指を当てる。

『その姿は、姫君に相応しくないよ』

彼がそう言った途端、僕の髪は伸び、着ていた騎士見習いの服は長いレースが重なった緩やかなドレスに変わる。

縦ロールになった金髪が、ふんわり揺れた。

僕はなぜか抵抗なく、その姿を受け止める。

『今は僕の意志が君の中に入らないから、ドレスに抵抗はないだろう？』

不思議に思いながらも頷いた。

確かに抵抗は全く感じない。

『それが、本来の君の姿だよ』

そう言つて僕の手を取り、指にくちづけをする。

まるで若くなった王にくちづけされたようで、僕は頬を染めた。

「不思議だね、会えると思わなかった、オーリン」

『本当は会うべきじゃないんだ、僕と君は一心同体だからね。君の探し物はあそこにあ

る』

そう言って、図書館の奥を指差す。

僕はオーリンに手を引かれて、ドレスの裾を少し持ち上げながらゆっくり移動した。横を歩く彼は神々しい程美しく、夢を見ているのかと思えた。

導かれた先には、大きな木製の二匹の蛇が円を描きながらお互いの尾を食べる姿が飾られている。

これがウロボロスの姿なのか？

足元にいるウロボロスは大きく、巻物を収めた棚が邪魔をして全体像が見えない。彼等はゆっくり輪を描くように動いている。

木製の像の円の中心に、ぼっかり浮いている黄金の本の首飾りがあった。

オーリンはそれを手に取り、僕に渡した。

『バイデルの《王族》は、マルシオン・ティエム・バイデルが最後の王となった』  
聞いた事のある名だ。

「……その人、水晶玉に囚われた人？　じゃあ、やっぱり死なずに済む方法があるんだ  
！」

希望が湧いてきた。

オーリンは無表情に、黄金の本の首飾りを差し出した。



『いかに、全てがある』

僕は微笑みながら黄金の本の首飾りを、本当の本に戻した。

そしてセルジン王に教えられた通り、本を開き床に放った、映せと念じながら。

現れたのは三十歳ぐらいの男。

長い金色の髪は緩やかに肩にかかり、髪と同じ金色の目を持つ。

強い魔力をその身に纏わり付け、古の王は真直ぐ僕を見ていた。

誰かに、似ている……。

誰に似ているのか、すぐには思い出せない。

《私はマルシオン・ティエム・ベイデル。エステラーン王国、最後の王である》

僕は驚き、オーリンを見る。

彼は何でもないという風に微笑んだ。

《我が国はもはや修復の出来ない程の被害を受けた。山系の竜は王都メイダールを焼き尽くし、私は水晶玉の中で暗黒の王として国中を破壊した》

古の王は苦悩に顔を歪ませた。

《兄セイエンは竜との戦いの中で焼死し、業火に焼き尽くされる王宮を抜けて、我妻ロレ

アーヌが、《ソムレキアの宝剣》を使って、私を水晶玉から解放した》  
僕はセイエン王の言葉を思い出した。

《戦いは終わったが、《ソムレキアの宝剣の主》の我が娘ロレアーヌが亡くなった》

ロレアーヌという《ソムレキアの宝剣の主》は、亡くなったんじゃないのか？

マルシオン王は懐からある物を取り出した。

それは《抑制の腕輪》だ。

僕は、全身が総毛だった。

「あ……、ああ……」

マルシオン王が誰に似ているのか、よく判ったのだ。

マール・サイレスの髭を取り除くと、彼になる。

《私は彼女が運んだ《ありえざる者》の命の光で、不死の命を手に入れた》

僕は頭が熱くなり、マルシオンの言葉が耳に届かない。

オーリンにしがみ付き、荒い息で混乱する頭を必死に整理しようとした。

《ロレアーヌは《聖なる泉》の精霊と取引していた。彼女は《聖なる泉》を構成する一員

になり、会う事も叶わない》

マルシオン王は深い溜息を吐いた。

《私は《ありえざる者達》の意志により、水晶玉の《管理者》として、この世から水晶玉

が消え去る日まで、永遠に生きる事を受け入れた。山系の竜の牙を抜く事を条件にだ」  
僕は涙を流しながら、古の王……、昔のマール・サイレスを見た。

《この伝言を見る者よ。《王族》よ、気を付けるがいい。〈ありえざる者達〉は《王族》を復活させるだろう、水晶玉は二つあるのだから……》

セルジン王の姿が、僕の心の中に浮かんだ。

死を望む王に、こんな運命を強いる事は出来ない……、絶対に！

《私と同じ運命を辿りたくなければ、あれに触れてはならぬ。そして〈ありえざる者〉に  
関わるな！》

そう言つて、マルシオン王は消えた。

僕はオーリンを突き飛ばし、彼から飛び退いた。

「君は……、〈ありえざる者〉なのか！」

『ふ……、何を今さら。君と父上が望んでいた事じゃないか』

「違う！」

僕は《ソムレキアの宝剣》を抜いた。

『君は面白い娘だね。残念だけど、それは僕には効かないよ。水晶玉の魔力以外には、効果が無いからね』

オーリンは腕を組みながら、楽しむように告げた。

白い翼が興じるように、ゆっくり動く。

僕は無駄と解つていながら、宝剣でオーリンに切りかかる。

彼は翼を羽ばたかせ、ゆっくり天井近くまで飛んだ。

『天井が高くて助かるな。オリアンナ姫、君の命がもうわずかしか無い事に、気がついてないの?』

「え?」

『僕が父上の命の光になったら、《聖なる泉》の精霊と取引してない君は死んでしまうんだよ』

「……」

『君は、本当は死んでいるんだからね。水晶玉の〈管理者〉はどうしても、もう一人必要なんだ。父上はマルシオンに匹敵する能力者だからね。彼以外の適任者がいないから、彼を普通の人間に戻そうと思つても無理だからね』

僕は泣きながら頷れた。

ドレスの襜ひだが広がり、長く巻いた髪は森の中の木漏れ日のように煌めく。

上からオーリンは、無感情にそれを眺めていた。

『君は僕を運ぶ役割を終えたら、可哀そうだから仲間に頼んで天界の一員にしてもらおうよ。地上にいるより、幸せだと思うよ』

「陛下を永遠に地上に繋ぎ止めておきながら、僕がそんな事を望むと思うのか！」  
怒りを込めて叫ぶ。

『まあまあ、娘さん、こう考えないかね。自分達は循環する運命の輪の、外に解れてしまった糸だと』

それまで黙っていたウロボロスが、光る床下に円を描いて泳ぎながら言う。

『糸は運命の輪に弄ばれて、ゆっくり循環する輪にしがみ付かないといずれ引き千切れてしまう』

「僕はただ王を、普通の人間に戻したいだけだ……」

僕の頬に、涙が伝い流れ落ちた。

『果たして魔力に身を染めたあの王が、それを望むかね？ 真実を知った時、王がどんな風になるかを、輪にしがみ付きながら見届けるのが娘さんの役割のように、わし等には思えるがのお』

「……王が、変わる？」

『そうじゃ。人間は短い命を、自分を変化させながらしつかり生き抜く。それはわし等

には出来ぬ事じゃ。のお、天界人よ』

『まあね』

そう言つてオーリンは、僕の前に降り立つ。

僕の手を取り、立たせた。

『父が来るよ。オリアンナ姫、彼を今の絶望から助け出したいと思わないのか？』

オーリンは微笑みながら、スツと僕に同化する。

髪は元の短さに戻り、服も国王軍の騎士見習いの姿に変わった。

僕は涙を、振り払う。

そして入り口に現れた、セルジン王を見つめた。

## 第二十二話 王の決断

光で構成された螺旋階段を上って姿を現した影であるセルジン王は、部屋の光に薄れ半分以上透明に見える。

優しい緑の瞳は僕を探し部屋をさまよい、床下に蠢くウロボロスに気付く。

「なるほど、貴殿がこの図書館の守り主か？ 確か……、ウロボロスと伝えられているな」

『ふおつふお、わし等の事を知っておるとは光栄じゃな、エステラーン王国の最後の王よ』

「最後か。王国の命運は私で尽きるという事か？ この世が滅びるといふ事か？ 貴殿のような永続性は、どこにもないぞ？」

王は眉間に皺を寄せ、苦しむように言った。

『さて、それはどうじやろう？ お前さん次第じゃないかのお』

「私、次第？ ……どういう意味だ？」

僕は黄金の本の首飾りを見ながら、これを王に見せるべきか迷った。

「見せろ！」と、心の片隅でオーリンが言う。

マールの言葉が、僕を苦しめる。

《陛下は死を望んでいらつしやる。生きる方法が見つかつて、握り潰す可能性がありません》

その言葉はそのまま彼……マルシオン王の、心の声ではないか。

セルジン王とは別の意味で、死を望んでいるのではないか。

セルジン王は自分が魔物になる恐怖に耐えかねて、マルシオン王は無限に続く管理者としての使命に耐えかねて、それぞれが死を望む。

どちらがより過酷な状態か、僕には想像も出来なかつた

管理者……。

なぜ管理者がいるのに、《王族》が水晶玉に入り込んでしまったのだろうか？

《ありえざる者》が、セルジン王を管理者にするために仕掛けたのか？

エステラーン王国を滅ぼしても？

マールに会って話を聞かないと、解らない事ばかりだ。

僕が視線をセルジン王に戻した時、彼も黄金の本の首飾りを見つめている事に気付いた。

何も知らなければ、王はこのまま死を願う続ける……、それは良い事ではないだろう。

《彼を今の絶望から助け出したいと思わないか？》



オーリンの言葉が、僕の背中を押した。

王に、戸惑いながら微笑む。

「大丈夫か、オリアンナ？ 怪我はないか？」

「大丈夫です。陛下」

王は足早に僕に向けて、光る床を歩いて来る。

僕の心に、王への愛情が湧き起る。

あなたを、助けたい。

これを見て、どうか……、どうか絶望しないで。

僕は黄金の本の首飾りを、王に差し出した。

「……確かに、私次第だな」

古の王マルシオンの伝言を、セルジン王は冷静に受け止めていた、表面上は……。

「だが、永續性にも程がある」

そう言うと、入口の方へ歩いて行く。

僕は王が怒ったのかと思ひ、彼の後を追い腕に縋り付く。

「国王陛下？」

「心配するな。大丈夫だ」

王は安心させるように、僕の頬に手を添えた。

そして螺旋階段を下りて行った

階下では近衛騎士達が呼び寄せたマールの弟子達が、倒れて意識の無い者達を外に運び出すとしていた。

命に別状は無さそうだが何が起きたのか分からない以上、ここに寝かせておくのは危険と判断されたのだ。

そこにマールの姿は無かった。

外での戦闘は屍食鬼達が突然消えた事で終了し、図書館の周りには大勢の兵士達が警戒態勢を崩さず待機していた。

マールは外で負傷者の手当をしているのかもしれない。

そう思いながらセルジン王は、近衛騎士隊長トキ・メリマンに指示を出す。

「マール・サイレスを、今すぐ連れてまいれ！」

「はっ」

トキの指示で部下が、足早に階下へ下りて行った。

それを見届けた王が階上へ行くとした時、残ったトキが呼び止める。

「マールは、おそらく居りません」

「なぜ、そう思う？」

「これを、陛下にと……。それから私に、「死ぬな」と一言」

「……」

トキが差し出したのは薬草茶の配合を書いたメモで、下部に走り書きで「トレヴダール侯爵邸で待つ」とあった。

王はそのメモを、握り潰す。

「勝手な事を！」

「後を、追わせますか？」

後を追うという事は、国王軍が逃亡者と見なし制裁を加えるという事だ。

王は握り潰した、マールのメモを見つめた。

「ならぬ！ 追手の方が危険に晒される、マールの事は放っておけ。弟子達が全員残ったか確認しろ。次の薬師を決めねばならぬ、人選はエネスに任す」

「はっ」

王は螺旋階段を上りながら、自嘲気味に薄笑いを浮かべる。

今さら別の薬師等、必要ない。

マールだから身近に置いたのだ。

額を押さえ、熱くなった頭を冷やすために上を向く。

階上からオリアンナが心配そうに見つめていた。

「マールさんは？」

その姿を見てまるで心を洗われるように感じ、それが《王族》の魔力である事を承知しながら、彼女の必要性を再認識する。

これまでの彼女と、立場が逆転したように思えた。

オリアンナの死と同時にへありえざる者へオーリンが自分の命の光となり、水晶玉が葬り去られるまでこの世に生き続ける。

永続的な時間を《王族》のいない状態で生きる事が不可能に思えた。

永遠の孤独を想像すると死を選んだ方がましに思える。

私に選択の自由があるのか？

相手は天界人、神々の決定を覆すのは不可能に思えた。

なによりオリアンナを失う事が、心を傷つけている。

彼女を失わないで済む方法はないのか？

警戒し抑えていたオリアンナ姫に対する感情が、俄かに輝きを増し彼の心を満たし始めていた。

エランの姿が、心を掠める。

許せ、エラン……。

階段を上ってくる王は優しく微笑み、先程の怒ったような様子は消えていた。

最初のショックが和らいだのだろう。

「マールには逃げられた。自分で判断しろという事だ」

「……じゃあ、マールさんが運び入れた他の書箱の中身は？ この巻物の中から、捜し出すんですか？」

僕は後ろにある、膨大な量の巻物を見て途方に暮れた。

王を助け出す他の方法を探し出したい欲求が湧きおこっていた。

三階に上った王は僕の肩を抱き寄せ、ウロボロスの木像のある方へ導く。

「最初からそんな物は、存在していなかったのだ。これをそなたと私に見せるために、仕組んであったのだろう」

その言葉で、微かな希望は消えてなくなった。

王が生き、僕は死ぬ……、それを受け入れなければならぬ。

王は二つの黄金の本の首飾りを手にした。

それは十六年前から仕組まれていたという事になる、エステラーン王国の王都ブライ  
デインが陥落する前から。

「へありえざる者達」は……、最初からエステラーン王国を滅ぼすつもりで？」

僕は肩を落として呟いた。

王は僕の額に右手を当てた。

「私もそれが聞きたいな。オーリン、我が子よ。いい加減、意志のない振りをするのは止めよ！」

僕から柔らかい光の束が飛び出し、再び翼のある人間の形を取る。

『何だ、ご存じだったとは……、面白くない』

少し不貞腐れ気味にオーリンが、宙に浮き王を見下ろしながら言った。

セルジン王は笑いながら、我が子を見つめる。

「そなたはオッドアイなのだ、珍しい」

『僕は天界で生まれたからね、もつとも天界でも珍しいみたいだけど……』

「へありえざる者」とは、そなた達の事だろう？」

『そうだよ。長い人間界との関わりを持たずに来たけど、父上が生まれた時に天界が動いたんだ』

「……王国を滅ぼす事を、決めたのか？」

オーリンが含みを込めて笑う。

『元々、二つの水晶玉を封じ込めるためだけに創られた国だからね。あれは武器としては強力過ぎて、天界でも持て余す代物だよ。不思議と人間には悪影響はない、だから天界人と人間の能力両方併せ持つ《王族》が創られた。その中から、完全なる管理者が現れるのを待っていた。それまでは国の中に封じ込める、そう決めたんだ』

「……神代の話か、竜と神の戦い」

『ふふ、そうだよ。二つの水晶玉は、竜を滅ぼす最高の武器だからね。もともと、今の竜は七竜に治められている。水晶玉に近づくと、逆に支配が及ばなくなつて先祖返りしてしまうんだ。だからオーリンナ姫、アルマレーク人に近づいちゃダメだよ』

急に話題を向けられて、僕は戸惑った。

僕の半分はアルマレーク人なのに、オーリンはその事をどう思っているのだろう。

そんな疑問が心に浮かぶ。

「竜の牙を抜くのを条件に、マルシオン王は管理者としての条件を飲んだのか？」

『そう。わずかに生き残った竜が、水晶玉を攻撃に来たからね。神代が終わって竜は滅びたと思われていたのに、どこかに卵が存在していて、いつの間にか人間界で凶悪な竜として孵かえつたんだよ』

「では、私も条件を出そう」

「陛下?」

それはセルジン王が永遠の管理者となるのを、受け入れるという事だ。

僕は王に縋りついた。

「死ぬ事が叶わなくなるんですよ、永遠にこの世をさ迷う事になるんですよ、陛下!」  
「では、この世と共に滅びるか?」

僕の目から涙がこぼれた。

「……その方が、きつと楽です」

「そうかもしれない。……だが、私はそなたを失う気はない!」

「え?」

『その娘は僕が父上の命の光になった段階で、いずれにせよ死ぬんですよ、父上』  
「オリアーナを死なせない、それが条件だ。オーリン・トゥール・ブライデイン」

『……………』

「国王陛下、僕は死んでも構いません。陛下が一番いい方法を取って下さい! 僕の事は気になさらずに……、どうか……」

王は僕の言葉を、くちづけで遮る。

僕は驚きに大きく目を見開いたが、やがて王に身を委ねた。

「そなたは私の妃に、なりたくはないのか?」



僕は真つ赤になりながら、王の瞳を覗き込む。

そこに絶望の色はなかった。

優しい微笑みが、僕を包む。

「なりたいです……、あなたの妃に」

「では、決まりだ。オーリン、条件を呑むか？」

オーリンは空中で腕を組みながら、面白くなさそうに二人を見下ろしている。

『僕の一存では、決められないな』

「では、誰の承認が必要なのだ？ 神か？」

『……………』

『女神じゃよ、人間の王よ。彼女は嫉妬深い、気を付けた方がいい……………』

ウロボロスが床下から教えた。

『黙れ、ウロボロス！』

オーリンは憤り、ウロボロスの言葉を遮った。

苛立つ彼は、まるで何かに怯えるように王を見ながら告げる。

『トレヴダール侯爵家だ、そこに彼女がいる。後は彼女に頼め……、僕は知らない！』

そうしてオーリンは消えた。

セルジン王と僕は顔を見合わせる。

「マールが待つ場所だ。そこに女神がいる」

「陛下……」

不安が僕の中に蠢く。

それは僕の中に消えたオーリンが、感じている不安なのかもしれない。

「ウロボロス、我らが去ってもこの図書館を今まで通り守ってくれるか？」

『当然じゃ。ここは居心地が良い。この世が滅びても、ここは残るよ』

「そうか、ありがとう。聞いたか、ヴァール・ケイデイス？」

王がそう呼びかけた時、霧が四階に上り学長の姿を映す。

「我らの望みを叶えて下され、セルジン国王陛下」

「ああ、メイダール大学街は必ず復活させる。だから……、安らかに眠れ、我が恩師よ」

ケイデイス学長は微笑みを残し、霧散するように消えた。

僕は無表情な王が、悲しんでいるのを感じ取る。

「ヴァール・ケイデイスは……、私の家庭教師だった」

僕は王を慰めるように寄り添った。

僕が図書館の外に出た時、霧は完全に消え屍食鬼の姿も消えていた。

後に残るのは、死に絶えた者達の戦った痕ばかりだ。

ここは国王軍が到着した時から、死の街だった。

情報収集と死者の遺志を汲み取るために、セルジン王が霧の魔法で大学街を守っていたのだ。

「レント領に屍食鬼が現れた時に、ここも襲撃されたのだ。成す術がなかった……」

僕は、故国を失ったアンとソルの事を思い、胸が痛んだ。

上空に夕陽色に輝く鳥の姿が見えた。

死者の魂を天へと運ぶシモルグ・アンカが、ゆつくりと旋回している。

王は図書館を振り返る。

ウロボロスによって、結界が再び図書館を覆うのを感じた。

「英知は戦火によって、すぐに失われる。いつの世も、変わらずだ。だから守り受け継ぐ……、それが生きる者の務めだ」

セルジン王は、水晶玉の管理者として生きる事を選んだ。

## 第二章の登場人物

〔★は生存者 ☆は死者 ●は人間以外〕

★オリアンナ・ルーネ・ブライデイン……主人公 エステラーン王国の最後の《王族》  
《ソムレキアの宝剣》の主 男子として育てられたので名前が多い。

オーリン・ボガード（養子名）

オーリン・トウール・ブライデイン（王子名）

オリアンナ・ルーネ・フィンゼル（アルマレーク人としての名前）

エアリス・ユーリア・ブライデイン（オリアンナの偽名）

★セルジン・レティアス・ブライデイン……エステラーン王国の国王 水晶玉に命を  
囚われ、歳を取る事が出来ない

★エラン・クリスベイン……トルエルド公爵家の次期公爵 オリアンナの幼なじみ。  
王配候補 セルジン王の従騎士

★テオフィルス・ルーザ・アルレイド……アルマレーク共和国リンクルクラン領の次  
期領主 〈七竜の王〉 アルマレークでのオリアンナ姫の婚約者 オリアンナをヘタレ  
小竜と呼ぶ

★アドラン・デイラス・ブライデイン……セルジン国王の腹違いの兄 魔王 水晶玉に命を囚われ、セルジン同様歳を取れない

★エドウィン・ルーザ・フィンゼル……オリアンナの父 アルマレーク人 レクーマオピオンの次期領主 娘のオリアンナを守るため、《聖なる泉の精》と取引する 王都ブライデインの《聖なる泉》で、オリアンナを待つ

★ハルビイン・ボガード……レント領辺境伯ボガード家第五代領主 オリアンナ姫の養父

★サフィーナ・ボガード……レント領主の妻 オリアンナ姫の養母 王族の遠縁にあたる

★ハラルド・ボガード……レント領主の息子 アドランの《契約者》となる

★トキ・メリマン……セルジン国王の近衛騎士隊長

★マール・サイレス……セルジン国王の薬師

★アレイン・グレンフィード……ノルダイン公爵 国王軍大将 王配候補の一人

★エネス・ライアス……デイスカール公爵 宰相

★ルディーナ・モラス……モラス騎士隊の総隊長 少女人形のような外見 強力な魔力の持ち主

★モラスの騎士隊……対魔防戦士達 主に《契約者》と対峙

★ヴァール・ケイデイス……メイダール大学街の学長　セルジン国王の元家庭教師  
 ★アン・セイゲル……レント領にいるオリアンナの友達　メイダール大学街出身  
 ★セイゲル教授……メイダール大学街の図書館専任教授　アンの父  
 ★ソル・トルカ……アンの婚約者　レント領自警団で書記官　国王軍に参加　セイゲル教授の元教え子

★マシーナ・ルーザ……テオフィルスの随行者　アルマレーク人　リンクルクランの竜騎士

★デイン……トルエルド公爵家の家令

★ローランド……トルエルド公爵家の騎士　エランの随行者

★ロイ・ベルン指揮長官……エランの元主君　レント領騎士隊の武将

★ミア・メリマン……オリアンナの侍女　トキの妻

★レパート……メイダール大学図書館の司書

★アドラン・ブライン……ベイデル家に仕えた薬師　マールの師　密偵の疑いあり

☆オアイーヴ姫……オリアンナ姫の母　エドウインの妻　セルジン王の同母の妹《王族狩り》で犠牲となる

☆セイエン・ローウエル・ベイデル……いにしえ古のエステラーン王国、第十三代国王　ベイ

デルの《王族》

☆★マルシオン・テイエム・ベイデル……セイエン王の弟 古のエステライン王国の最後の国王 水晶玉の管理者 ベイデルの《王族》

☆ロレアーナ……マルシオンの正妃 セイエン王の娘 ベイデルの《王族》 マルシオンを助けるため、《聖なる泉の精》と取引する

☆ペイン・ベイデル……カドル侯爵 マールの元主君

☆ドウラス王子……セルジン王の腹違いの弟 王がもつとも信頼していた《王族》

☆アミール・エスペンダ……セルジン王の最愛の女性 王の子を産む直前に《王族狩り》の犠牲になった

☆オーリン・トゥール・ブライデイン……セルジン王とアミールの子供 オリアンナの命の光 〈ありえざる者〉

●シモルグ・アンカ……魂を運ぶ聖鳥 天界の巨大樹に巣を持つ不死の鳥

●《聖なる泉》の〈門番〉……豪華な鎧を装着した、最強の騎士 謎の存在

●《聖なる泉》の精霊……魔力を持つ水の精霊 オリアンナに魔力を与える

●〈ありえざる者〉……天界の使者 光る球体で現れる事が多い

●リンクル……七竜 テオフィルスの竜の影 アルマレーク、リンクル克蘭領の守

## 護竜

## 護竜

- レクーマ……七竜 エドウインの竜の影 アルマレーク、レクーマオピオン領の守
- イリ……七竜レクーマの子 老トムニの竜 オリアンナと心を通わせる
- エーダ……リンクルの子 マシーナの竜
- 屍食鬼……翼な生えた屍肉を喰らう魔物 魔界域から発生 〈契約者〉が呼び寄せ

- 半変化……屍食鬼になりかけの人間 〈契約者〉の呪で、屍食鬼になる
- 霧魔……霧に潜む魔物 霧が意志と形を持ち、人を襲う
- ウロボロス……尾を相食む二匹の蛇 不死な存在 神代の頃から、この世界に住ま

う



## 第三章 トレヴダール

## 第一話 くちづけ

最初にアドラン・デイラス・ブライテインの前に、それが現れたのは、今から二十六年前、十三歳の誕生日を迎えた日の事だ。

《ソムレキアの宝剣》が、目の前に出現したのが発端だった。

その日、彼は母イーリア王妃の敵であり、可愛げのない義弟セルジンを生んだ女エルザを毒殺すべく、父アルス国王の側近を買収して、後宮の彼女の部屋に刺客を送った。

アドランは後宮の一室に忍び込み、暗殺が成功するかを見届けるつもりで、友人エネス・ライアスと共に、普段使われていない部屋に忍び込んだ。

その部屋の真ん中に、薄ら紫の光を帯びて、《ソムレキアの宝剣》が浮かんでいた。見つけたのは、エネスの方。

「アドラン、変な物が浮いているぜ」

そう言つて、美しくも禍々しく光る剣を取ろうとしたが、剣は彼の手を回避し、アドランの元へ飛んでくる。

「ふん、俺は嫌われているらしいな」

エネスの周りに、黒い渦が薄っすら湧き出る。

その渦を心地良く見ながらアドランは、目の前に浮かぶ魔法の剣を取ろうとした。

その途端、彼の手の先に黒い渦が現れ、徐々に大きさを増した。

暗闇が彼を取り囲むように渦巻き、姿が見えなくなるほど増大する。

「アドラン！ 大丈夫か？」

「ああ」

落ち着いた声でそう呟くが、こんな塊になるのは初めてだ。

「なんだ、お前は？」

暗闇は、醜く蠢く。

『その剣に触れれば、お前は殺される』

「……殺される？ 誰に？」

『……』

暗闇は言い淀むように、大きく蠢く。

「ふん、言えないのなら消えろ。私は忙しい」

『守ってやろう』

「ふ、あはははは……。お前に何が出来る？ せいぜい私の嫌いな連中を遠ざけるくら

いだろう？ 得意の黒い渦で脅しをかける、そんな程度だろ？」

暗闇は急に凝縮して密度を増し、人の形を取り始め、徐々にその姿はアドラン——彼の形になった。

「何の冗談だ？ 悪趣味だな」

『守つてやろう。天界の使者から』

「……天界の使者？ ありえないな、《王族》は彼等に見捨てられている。今さら、何のために？」

黒い渦は壮絶な笑い声を上げ、嘲りながら言い放つ。

『セルジン・レティアス・ブライデインに、水晶玉を与えるためだ。最強な魔力を、奴は手に入れる』

「……水晶玉を？ 最強な魔力……、あの愚弟が？」

心の奥底から不快な蟠りわだかまが、猛烈な勢いで湧き起る。

父と周りの愛情を独占する彼を、幼い頃から殺してやりたいと思ってきた。

最強の魔力を手に入れる……、奴が？

そんな事は、絶対に許さない！

アドランの憎しみが増幅すればするほど、もう一人の影は暗さを増し、彼そのものとなった。

『私を受け入れれば、お前は守られる。簡単な事だ、奴に水晶玉が渡る前に、お前が水晶

玉の主になればいい。そして、お前以外の《王族》を殺せばいいのだ』

「《王族》を殺す？ 何を言っている！ そんな事をすれば、国が滅ぶ。私だって、《王族》だ！ 王太子の私が、そんな事を望むと思うか？」

『父王は、お前を廃太子にする』

「何だって？ ……父がそんな事を、するはずがない！」

もう一人のアドランは、嘲り笑う。

『まだ、あの男を信じているのか？ 気の弱い王は、あの愚弟の思うままに動いている。

廃太子の話は、王の心を占めている』

「馬鹿な。そんな事……、許さない！」

アドランは身を縮め、頭を抱えた。

魔法の剣が暗黒の中から浮かび上がり、アドランの目の前に再び現れる。

『私を受け入れれば、天界人の思い通りに事が運ばなくなる。お前は どうする？』

暗闇は勝ち誇ったように誘惑する。

『これは《ソムレキアの宝剣》といって、水晶玉の魔力に身を染めた者を、葬り去るための魔剣だ。お前は天界の意志と魔界の意志、どちらを取る？』

「……廃太子になるのは、嫌だ！」

『そうだろう。だがお前は、もうすぐそうなる』

《ソムレキアの宝剣》は暗黒の中に、異様な紫色の光を放っている。

紫は、《王族》の色だ。

アドランは毛嫌いするその色を、心の中で黒一色に塗り替えた。

『天界人はお前を、《ソムレキアの宝剣の主》に選んだ。お前は彼等の目的を果たすために……、セルジン・レティアス・ブライデインのために殺される運命だ』

「そんな事、させるものか！」

『私を受け入れるか？』

アドランは暗闇の自分を見た。

「受け入れる？ お前は、私そのものじゃないか。元々、私の分身……、そうだろ？」

暗闇は彼に近寄り、同じ顔をして微笑みながら彼にくちづけた。

そうしてアドランは時間をかけて、徐々に魔王へと変わっていったのだ。

何かが顔に触り、僕は目を覚ました。

長い黒髪が、頬に触れている。

「あ……、陛下？ えっ、ええっ？」

僕は王に横抱きに抱き上げられ、運ばれている事に気付き真っ赤になった。

降ろしてもらおうと身動きする僕を、王は笑いながら小声で制した。

「何を驚いている？ そなたは毎晩、私に運ばれているのだぞ。騒ぐな、皆を起こす。それに落ちるぞ」

「あ……」

王の天幕は不夜城のように煌々と明かりが灯り、会議はいつも夜遅くまで長引く。

その会議中に僕は、また寝てしまったようだ。

しかも、毎晩？

陛下に運ばれていたのか？

毎朝、僕の天幕のベッドで目を覚ます。

誰に運ばれたのか気にはなっていたが、まさか毎晩セルジン王とは思わなかった。

恥ずかしさに、鼓動が激しく主張し始める。

メイダール大学街が屍食鬼に襲われ、わずかに生き残った者達を、レント領へ向かうアルマレーク人と、ソル・トルカを含めた数人のレント騎士隊に託し、国王軍は広大なトレヴダール領内へと分け入った。

あれから、二十日あまり。

上空に渦巻く屍食鬼達の群に襲われる事なく、ここまで来られたのは国王セルジンの

放つ強力な魔力のお蔭だ。

エステラーン王国は天界人によって、滅ぼされる運命にあるという。

万が一の生き残る可能性を議論しなければならず、王の会議は長時間を費やすようになった。

あちこちに掲げられた松明の灯り、不寝番と王の側近や近衛以外の、皆が寝静まつている中、王に抱かれ運ばれる状態で、歩く音、松明の爆ぜる音よりも、大きく聞こえるのは鼓動の音だ。

僕は小声で、王にお願いする。

「あの……、降ろして下さい。自分で歩けます」

「もうすぐ、そなたの天幕だ。このまま、運ぶ」

は……、運ぶって……。

運ばれる先の事を考えると、身体が震えるのを感じる。

期待と不安の入り混じった感情に動揺し、鼓動はますます速く大きく全身を支配した。

王の来訪に慣れている天幕前の護衛が、入り口の幕を上げて待っている。

王が身を屈めて、僕を抱きながら入り口を通った。

中では侍女達が王に礼を取りながらも、僕が目を覚ましている事を確認し、微笑みで迎えた。

恥ずかしさも頂点に達して、身を振りながら王に訴える。

「降ろして下さい、国王陛下！」

王は聞く耳を持たず僕をベッドまで運び、ようやく優しく降ろした。

身を横たえさせられて、僕は身構える。

その様子に王は微笑み、やがてクスクスと笑い始めた。

僕も侍女達も、王の珍しいほどの楽しげな笑いに驚く。

笑ってる、陛下が……。

やっぱりオーリンと似ている、親子だから当然だけど。

オーリンは、セルジン王と彼の愛妾アミール・エスペンダとの子で、この世に生まれ

る前に、母親と一緒に死を迎え天界人となった。

〈へありえざる者〉である彼には翼があり、オッドアイの瞳は王とは違うものの、二人は

とても似ていた。

オーリンはメイダール大学図書館で姿を現してから一度も現れず、僕の意志に介入も  
しない。

僕はどこことなく、この似た者親子に少し腹が立つてきて、頬を膨らませて王を睨んだ。



「僕の事を、からかつてますか？」

「いや、すまない。そなたの反応が、あまりにも正直で。くくく……」

僕は恥ずかしさのあまり真っ赤になり、毛布を被って丸くなる。

セルジン王は、増々声を上げて笑った。

僕に気を使った侍女ミアが、やんわり進言する。

「あの、国王陛下……」

「ああ、解っている」

王は笑いを収め、僕の被った毛布を優しく取り除く。

僕は顔を枕に埋め、拗ねたように王を無視した。

金色の僕の髪を、王は優しく撫でる。

「笑って、悪かった。そなたといると楽しくて、自分が影である事を忘れるな」

僕はむくれた顔を上げて、視線を逸らす。

「どうせ、僕は子供です！ 笑いたければ、いつでも笑って下さい」

「大人になられても、影の私には対応出来ない。この身は所詮、魔法で作った幻影。そういう点では私はそなたを、からかっているのかもしれない」

「……陛下」

王は影、生身の人間ではない。

寝る事も食べる事も必要なく、その姿は半透明で体温も感触も全てが魔法で作られた虚構。

その王を人間に戻したいと、僕は思っている。

——自分の命と引き換えにしても。

王はベッドに腰掛け、僕の頬に右手を添えた。

「この先、私の事はセルジンと呼ぶのだ」

「え？」

僕は身を起こし、王を覗き込む。

「そんな、おそ畏れ多い！……出来ません」

「そなたは私の妃になる身だ、その資格がある。申してみよ、セルジンと」

僕が本当に望んでいた事だ。

それが実現しているのに、なぜこんなに尻込みしてしまうのか、王の顔を見つめながら不思議に思った。

「……セル……ジン……様」

「それでは、ルディーナと同じだ。様は必要ない」

「ルディーナさんは……、お妃候補ですか？」

あつさり心に引つかかっている疑問をぶつけて、自分でも驚いた。

「……聞いてないのか、本人から？ 彼女は人形だ」

「え？」

「私と同じ魔力で出来た幻影だ。十年ほど前、ツール領での戦いで死んだカリスマ的な女騎士がいた。強力な魔力を持ち合わせ、人々を率いた《王族》の血を持つ女傑」

「……」

「ルディーナが死ぬ直前に、私が魂を、人形の中に収めた」

「人形……、信じられない！ だって、生きている人に見えます」

「オリアンナ、私の側にいるという事はそういう事だ。全てが魔法で構築され、実体がない。水晶玉の魔力はこの国を支配している、その半分は私が構成している」

「……」

「すべてが虚構かもしれない。この姿も、王という身分も、《王族》である事も……。この国は水晶玉で守られているのではなく、水晶玉の中に囚われている。国民は魔法にかかけられ、水晶玉の言いなりに動く」

僕はセルジン王が、まるで魔王のように見えた。

「偽りに満ちた王国……、エステラーン王国はそんな国だ。昔から国民は騙されている。《王族》もそうだ」

「陛下は……、陛下はエステラーン王国が、嫌いになられたのですか？」

「……」

僕の言葉に、王は一瞬言葉を詰まらせた。

そして悲しむように微笑む。

「嫌いになれば良いのだが……、それが出来ない」

僕は微笑み、無意識に王の頬に手を添える。

「……セルジン」

自然に王の名を口にする事が出来た。

王は頬に当てられた手の上に、自分の手を添える。

「……立場が逆転したな。私は、そなたを失うのが怖い。たった一人のブライデインの《王族》として、永遠を生きるのが怖いのだ。すまなかつた。死を願いただけそなたを傷つけていたか、今ならよく解る」

僕の目から、涙が溢れ出す。

「セルジン……、セルジン」

王は僕を抱きしめ、くちづけする。

それを許される時間が限られてでもいるように、王は僕を離そうとしなかつた。

## 第二話 招かざる来訪者

「……アンナ様。オリアンナ様……、オーリン様、お起きになつて下さい！ 大変です、オーリン様っ」

侍女ミアの声が甲高く耳に障り、僕は重い目蓋を上げた。

ぼーっとした頭に、いつもの天幕内の景色とミアの姿が見えた。

無理やり起こされて、気分が良くない。

昨夜はセルジン王と共に過ごした。

それを思い出した瞬間に、はつきり目が覚め、僕は飛び起きる。

あまり、王との記憶がなかったのだ。

寝てしまったのか？

陛下といたのに？

そんな大切な事、覚えてないのはおかしい！

周りを見回して、王の姿を探す。

王の痕跡は、何処にもない。

身体に残る抱きしめられた感触だけが、胸を締めつけた。

「陛下は？」

「外においでです。それよりも、早くお支度を！ 竜が天幕の前にいるのです」

「竜？」

戦衣の下に着る衣服のまま寝ていると思っていたが、起き上がってみるとレースの施された綺麗な絹の肌着一枚の姿に気付き、僕は狼狽えて真っ赤になる。

「……ミア。陛下は昨日、お泊りになられたのか？」

「いいえ、オリアンナ様。陛下は姫君のお身体を気遣われて、お眠りになるよう仕向けられたのです。身支度は私が致しました」

「……そう」

安心したのか、残念なのか……、ミアから差し出された服に着替えながら、どここなくがっかりした。

王はどこまでも大人で、僕は彼に翻弄される子供、その構図はきつといつまでも変わらない。

溜息を吐いていると、ミアが僕の首にストールをかける。

「え、どうして？ 暑苦しいよ」

「首筋に痕あとが付いております。おかけになった方が、よろしいですわ」

ミアはにっこり笑って言った。

「痕って?」

「決まっております、くちづけの痕ですわ。陛下がお付けになられた」

「くちづけの、痕お……」

僕は頭が真つ白になり、恥ずかしさに全身真つ赤になって固まった。

ミアの成すまま暑苦しいストールを首に巻き、半分人形のように意識の固まったまま、入り口までミアに誘導された。

天幕の入口の幕が上げられ、目の前に見えたのは固い鱗うろこ。

「竜だ! どうして?」

僕が驚きの声を発した途端、その鱗の塊が動き始め、左上空の位置から凶暴な竜の頭が現れた。

細い金属的な甘えるような声を出し、顔を僕に近づけようとした時、低い大きな怒声がした。

「イリ! 動くなと言ったはずだ!」

聞き覚えのあるその声とアルマレーク語に、僕は嫌な予感を覚える。

メイダール大学街を出る時に別れて、もう会う事はないと思っていた男。

テオファイルス・ルーザ・アルレイド!

七竜が定めた父エドウィンが言っていた、僕のアルマレーク共和国での婚約者だ。

どうして？

せつかく陛下の名前を呼ぶ事が許されたのに……、あの男がいる限り呼べないじゃないか！

泣きたくなってきた。

父と僕、そしてレクローマの竜の指輪を探しているアルマレーク人には、オリアンナは死んだ事になっている。

彼等の前で、またオーリン王子として存在しなければならぬのだ。

テオフィルスは、僕がオリアンナ姫である事を知っているはず。

僕の女装姿での偽名エアリス姫へ、「愛のハンカチ」を渡すよう預けてきた。

その事をセルジン王に知られれば、大変な事になる。

絶対に、一つの間も見せられない。

僕の顔は引き締まり、オーリン王子としての意識に自然と変わった

「ミア、アルマレーク人は何時い時からいた？」

「判りませんが、朝には天幕の前に、これが……」

そう言つて、竜イリを指差す。

テオフィルスの命令に不満そうないりは、その細い瞳孔を僕に向け、長い舌をチロチ口見せている。



僕に触れてほしそうだ。

「オーリン！ お前には竜騎士の装備一式を渡してある、それを身に着けろ！」

まだお互い姿を見た訳ではないのに、命令口調の彼にムツとしながら、僕は天幕を出てイリの横を通り過ぎる。

ところがイリが顔を動かし、僕に触れようとする。

「イリ！ 命令が聞けないのかっ！」

テオフィルスの怒鳴り声が、事態の緊迫度合いを高めた。

僕のすぐ目の前に、イリの顔がある。

「イリ、久しぶりだね」

僕は微笑みながら竜に手を伸ばすが、その手は急ぎ駆け付けたテオフィルスによって掴まれた。

僕を守る護衛達とモラスの騎士達が、彼を引き離そうとしたが、イリが威嚇したため怯む。

彼は僕の手を右手で掴み、もう片方の左手をイリに向けて突き出した。

その左手の中指には、リンクルの指輪がはまっている。

「イリ、俺の命令が聞けないなら、七竜リンクルを呼び出すぞ！ いいのか？」

竜イリは怯み、蜷局を巻いた身体の中に頭を埋めた。

僕は意味が解らず、彼に食ってかかる。

「何だよ、それ！ イリが、怖がっているじゃないか!!」

「怖がって、当然だ！ 竜騎士の命令が聞けなくなつた竜は、七竜によつて排除される。それはアルマレーク共和国の、徹底された法律だ。そうでないと、竜によつて国が滅ぶ！」

僕はハツとした。

竜によつて滅ぼされた古のエステラーン王国、バイゼルの《王族》最後の王マルシオンの言葉が脳裏をよぎる。

《私は〈ありえざる者達〉の意志により、水晶玉の〈管理者〉としてこの世から水晶玉が消え去る日まで、永遠に生きる事を受け入れた。山系の竜の牙を抜く事を、条件にだ》  
僕は茫然とする。

その結果が、今のアルマレーク共和国だ。

山系の竜は、七竜によつて完全に支配されているんだ。

テオフィルスは僕を振り返り、憤りをぶつけるように言い放つ。

「イリがこうなつたのは、お前のせいだ！ お前がイリの背中であの宝剣を光らせてから、竜騎士の言葉を受け付けなくなつた！」

「え？」

僕は戸惑った。

彼の心の焦燥が、表情になって現れている。

「俺は、イリを殺さなければならぬ！」

僕の心に、まるで刃物で切り付けられたような衝撃が走る。

イリが殺される！

僕と初めて心を通わせた、可愛い竜が殺されようとしているのだ。

「止めろ！ そんな事は、許さない！ イリは悪くない。殺すなんて…、そんな事、絶対にさせない！」

「だったら、イリを制御しろ。竜騎士として！」

「……竜騎士？」

彼は僕を引き寄せるように、掴んだ右手に力を入れた。

「そうだ。イリはお前の言う事なら聞けるかもしれない。それもダメなら、俺はイリを殺す」

「……」

イリは彼を怖がり、蜷局に頭を埋めたまま動かない。

竜を警戒する国王軍の兵士と騎士達が竜を囲み、アルマレークの竜騎士の一団も自分の竜と共に、イリを警戒し配置に付いていた。

イリがアルマレークで、どれだけ問題になっているかが窺うかがい知れる。

そんな中、セルジン王がテオフィルスを見つめながら、ゆつくり歩いてくる。

「事情は分かかったが、我が国の王太子を巻き込むのは止めてもらいたい。テオフィルス殿」

王は彼の手を僕から引き剥がし、庇うように前に立った。

「オーリンはアルマレーク人ではない。我が国にとつては宝にも等しい存在だ。竜騎士の素養はあるのかもしれないが、そのように育ててはいない！」

「彼が必要です！」

「許可は出せぬ。竜を始末するのが一番平和的な解決と、私には思える」

テオフィルスの顔が、苦痛に歪んだ。

僕は茫然として、王の後姿を見ていた。

イリを……、殺す？

心臓が締め付けられるように痛んだ。

セルジン王は僕を守るためにそう言ったのだ、それでも心が反発する。

イリは怯えて身動き一つしようとせず、頑なに殻に籠っていた。

僕が王に進言しようとした時、セルジン王はゆっくり振り向く。

彼の重いマントが揺れ、長い黒髪が流れるように動く。

振り返る表情は涼しげでいて優しく、緑色の瞳に魔法を掛けられたように魅入られる。

逆らえないのだと、初めて実感した。

「そなたはどう思う、オーリンン？」

「僕は……」

王は僕の思考の全てを奪ってゆく。

それは不快ではなく、むしろ心地よく、頭の芯を熱くさせた。

「王のご意思に、従います」

僕の様子に愕然としたテオフィルスは、激しい怒りを露わにする。

「イリを殺していいのかつ、オーリンン！」

アルマレーク語での彼の叫びは、僕の心を現実に引き戻す。

僕を睨みつけるテオフィルスに、恐怖を感じた。

イリを殺す事に賛同したのだ、彼が怒るのは当然だが、どうにもならない。

どうしても、セルジン王に逆らう事が出来ないのだ。

王は僕の肩に手を置き、彼に微笑む。

「早く問題を解決して、ご帰国願おう。世の平和を願う使者としての役割には感謝するが、我が国に竜騎士の立ち入りを、許可した覚えはない！」

王の言葉に従い、近衛騎士達が彼と王の間に割って入った。

テオフィルスは王と僕を睨みつけたまま、リンクルの指輪をまるで僕に見せるように、顔の位置まで持ち上げた。

「承知した。イリを処分する」

僕はまるで雷に打たれたような衝撃を受けた。

彼は本気で言っているのだ。

イリが殺される！

まるで自分が殺されでもするような恐怖を覚え、身体が震えはじめる。

「オーリン、どうした？」

僕の肩に手を置いていた王は驚き、震えを止めるように抱き寄せた。

テオフィルスはイリの前に立ち、左手にはまるで指輪を高く掲げた。

「出でよ、リンクル！」

指輪から上空高くへ、黒い影が飛び出す。

影は屍食鬼に覆われた空に、ひとときわ大きな黒い竜の形を取った。

七竜リンクルの影は羽ばたき、地上に強風を巻き起こし、枯れた木々の枝を吹き飛ばす。

竜に慣れない国王軍の兵達が、警戒しながら目を覆った。

王は僕を守り、自分のマントの中に隠す。

僕は震え続け、まるでイリの恐怖心が乗り移ったように涙を流していた。

イリはピクリとも動かない。

「リンクル、イリを排除しろっ！」

僕は、悲鳴を上げた。

## 第三話 七竜の意志

「止めろ——っ！」

僕はセルジン王に抱きしめられた状態で、竜イリが殺される恐怖から悲鳴を上げていた。

テオフィルスの命令により、イリが今にも七竜リンクルの影に殺されようとしているのだ。

抱きしめる王の腕を逃れ、包み込むマントから僕は必死に抜け出した。

「止めろ、テオフィルス！ イリを殺すな！ なるから……、竜騎士にでも何でもなるから、イリを殺すな——！」

「オーリン！」

セルジン王が抑えようとしたが、僕が王の魔力を撥ね返した。

王は驚きに顔をしかめる。

「そなた……」

「陛下、お願いです。イリを殺させないで下さい！」

僕は泣きながら訴え、イリの元へ走る。



「オーリンを、捕えよ！」

王の命令に近衛騎士達が捕えようとしたが、僕の周りから渦巻く鋭い風が巻き起り、迂闊に近づく事が出来ない。

《メイダールの聖なる泉》の泉の精からもらい受けた《堅固の風》が、《抑制の腕輪》を上回ったのだ。

それ程に僕のイリを失う恐怖心は強く、魔力を増長させていた。

「泉の精の魔力か……、厄介な」

《王族》の魔力も水晶玉の魔力も、今の僕には効かない事にセルジン王は苛立ちを覚え、自ら僕の元に駆け付ける。

僕はイリの前に立ち、魔法の炎を吹出そうとするリンクルに向かって叫ぶ。

「イリは責任もって、僕が管理する！ だから、殺さないでくれ！」

七竜リンクルは口の中を光らせながら、じつと僕を見ている。

テオフィルスもリンクルを退かせようとはせず、ただ僕を見つめた。

セルジン王は僕の魔力を恐れる様子もなく、腕を掴もうと手を伸ばす。

影の王の手が、まるで風に切断されるように消えた。

僕はハツとして、王を見る。

「大事な、私は影だ。それより自分の言葉に、責任を持てるのか？」

「持ちます！」

王は溜息を吐き、小声で呟いた。

「判った。そなたの半分は、アルマレーク人だったな」

王の言葉は、僕の心を苦しめる。

一番嫌われたくない相手に、まるで罵られているように感じ、僕は項垂れた。

「テオフィルス殿、この竜の処分は見合わせてもらおう。オーリン王太子が面倒を見るそう。だが、貴殿以外は我が国から退去してもらおう」

「イリが王太子殿の言う事を聞くか、確認してからでの退去でよろしいか？　そうでないと、国王軍に迷惑がかかる」

「構わぬ」

テオフィルスは頷き、リンクルの影を戻すために左手を再び掲げた。

「リンクル、戻れ！」

ところがリンクルは竜の指輪には戻らず、上空から緩やかに僕の前の地上に降り立った。

「リンクル！　戻るんだ！」

七竜リンクルは無視し、テオフィルスは啞然とする。

王と近衛騎士は剣を構え、竜の攻撃に備えた。

リンクルは威丈高に、その金属的な声で叫ぶ。

周りにいた人間は、咄嗟に耳を覆い、聞こえなくなる被害を避ける。

その隙にリンクルは、顔を僕の側まで近づけ、耳を塞ぎ縮こまっていた僕は恐怖に後退る。

ところが……。

セルジン王はオリアンナを守り、長剣でリンクルの顔を切り付けようとした時、「声」が聞こえた。

王にしか聞こえない「声」。

『水晶玉の〈管理者〉候補よ、古の戦い<sup>いにしえ</sup>を再び地上で起こしたくなければ、七竜レクーマの指輪を見つけ出せ。それが出来なければ、全ての竜は制御を失う』

「……話せるとは、驚きだな。古の戦い？ それは神代の話か？ この世でそれが起こるといふ事か？」

『今のままでは、そうなる』

王は茫然と七竜リンクルを見つめた。

「……水晶玉の主が現れると、竜が正気を失うという事か？ 古のエステラーン王国が、

竜によつて滅ぼされかけたように？」

彼は竜イリと他の竜達を見る。

イリは蜷局を巻いて動かないが、他の竜達はリンクルの影がいるせいか、身を低くして平伏している。

七竜の魔力で支配されているのが見て取れた。

『水晶玉は竜にとつては脅威だ。その魔力の圏内に長く留まれば、竜は七竜の制御を受け付けなくなる。七竜の一体が弱つた状態では、我らの魔力は不完全となる』

「どこにあるかは、私も知らぬ！」

『水晶玉を支配している貴殿が、知らぬとは思えぬ』

「私が支配しているのは、半分だけだ。或いは魔王アドランの支配圏内にあるのかもしれぬ」

『判らないのは、《聖なる泉》の支配下にあるからか？』

「……《聖なる泉》？ だとしたら私に判らないのは当然ではないか。だいたい七竜が、なぜ私に話しかける？」

『貴殿が水晶玉の管理者となる事を、受け入れているからだ』

王はハツとして、七竜リンクルを睨む。

生きる事は受け入れたが、水晶玉の〈管理者〉になる事は未知数だ。

セルジン王にとって、オリアンナの死を避けるための条件として、水晶玉の〈管理者〉がある。

永遠に生きる……、それは死を願ひ長い年月を生きてきた彼にとつて、対極に位置する事柄だ。

それなのに七竜リンクルは、当然のように「受け入れている」と言う。

私に、永遠を生きる覚悟があるのか？

自問自答しても、今の彼に答えは出せなかつた。

そんな王の心の動き等、七竜には関心が無いように言い放つ。

『《聖なる泉》にエドウィンが捕えられているのなら、全ての鍵がその娘にかかつてくる。おそらくは《ブライデインの聖なる泉》にいるのだろう。七竜レクターマの指輪を見つけ出さなければ、戦いは回避出来ぬ！』

「その娘」と七竜が言った事に、王は訝いぶかしんだ。

七竜リンクルはオリアンナ姫が生きている事を、テオフィルスに知らせていないという事だ。

なぜだ？

「……判つた、伝えておこう。だがアルマレークには、やれぬ！」

『いずれ、その娘が選ぶ。それが貴殿の救いとなる』

「何の事だ？」

七竜リンクルの影は薄れた。

『もうすぐ、判る。あの女神に会えば』

「……」

竜の指輪にリンクルの影が吸い込まれて行くのを、王は茫然と見つめていた。

テオフィルスは無表情に、セルジン王とリンクルの会話を様子を見ていた。

「リンクルと……、会話した？」

「……貴殿は、出来ぬのか？」

王の言葉に苛立つ彼は、顔を横に向けた。

「一方的に少しの声を聞くだけで。七竜と話せる領主は……、もう何百年も現れていない」

なるほど、そういう事か。

七竜が彼にオリアンナ姫の所在を知らせないのは、彼自身が〈七竜の王〉として未熟だからだ。

「貴殿は〈七竜の王〉だ。その事を受け入れた時に、話せるようになるだろう」

「……なぜ、判る?」

王は微笑んだ。

「ふんっ、今の貴殿には教えぬ」

二人は激しく睨み合った。

そんな二人のやり取りに気付いてない僕は、イリに向き合う。

「イリ。イリ! もう、大丈夫だから。怖がらなくていいから。僕の声が聞こえるか、イリ?」

竜イリはゆっくり頭を動かした。

まるで今まで眠っていたように、大きな口を開けて欠伸をする。

緩やかな熱気はその口から溢れる。

「イリ!」

僕の呼びかけに、イリは首を伸ばし細い瞳孔は少し丸みを帯びる。

僕を認識し始めたのだ。

僕は嬉しくなって、イリに触れようとした。

「止せ、オーリン! 素手で竜に触るな! 鱗で手を切るぞ!」

僕は手を止めテオフィルスに振り返ったが、イリは止らなかつた。

「イリ、止まれ! もう一度、リンクルを呼び出すぞ!」

イリには彼の言葉等、耳には入らない。  
ただ僕に触れたい、その一心だ。

「イリ、止まれ」

僕は落ち着いた声で、目の前に近づいたイリに言う。

イリは動きを止め、その丸くなった瞳孔でじつと僕を見つめてくる。

テオフィルスはホツとしたように表情を和らげた。

「イリ、いい子だ」

僕はイリを撫でたかったが、先程の警告を心に留め自制した。

テオフィルスが僕に近づこうとしたが、近衛騎士達が阻む。

不満の溜息を吐きながら、彼が呼びかけてくる。

「オーリン、竜騎士の装備は持っているか？」

その問い掛けに、僕は振り返る。

「……置いてきたよ。エステラーン王国に、竜はいないからね」

彼は馬鹿にするように鼻で笑う。

「マシーナ！」

後ろに控えていた随行者マシーナが、近くにいた竜エーダから大きな箱を取り外し重

そうに持ってくる。



「イリと接触したければ、これを装着しろ！」

マシーナは装備の入った箱を持って僕に近付こうとした。ところが王の近衛騎士達が再び阻む。

「装着はこちらでしよう。しばらく待ってもらえるか？」

王はあくまで彼等が僕に近づくのを避けた。

テオフィルスは不承不承頷く。

装備の箱は数名の兵士達によつて僕の天幕に運び込まれ、王は僕を彼から隠すように

天幕に誘導した。

「無茶をするな。悟られてしまうぞ」

「申し訳ありません。でも、イリが殺されるのは嫌です！」

王は僕を射ぬくように見つめた。

「そなたを、あの男には渡さぬ」

セルジン王の真剣な表情に、僕の鼓動は跳ね上がる。

「もちろんです！ 陛下のお側を離れません。絶対に！」

王は僕の首に巻いたストールを外した。

「すまなかつた。痕が残ったな」

僕は昨夜の事を思い出し、真っ赤になる。

「これからは、気をつけよう」

「セルジン……」

王のくちづけに、僕は答える。

王が僕の反抗を受け入れてくれた事を、不思議に思いながら彼に身を委ねた。

その時、異変を知らせる兵士の声が上がった。

「何者だ！」

兵達が運び込んだ竜騎士の装備の箱から、甲高い声が響いた。

「離せ！ このやろお、俺様に触んなっ」

そのアルマレーク語の声に、聞き覚えがあった。

大柄の兵達に囲まれたその人物を見るため、僕は王の腕から離れ兵達に近づく。

近衛騎士達が僕の進む方向を開けさせ、大柄の兵達の間から姿を見せたのは黒髪の瘦せた少年だった。

「君は確か……、ルギー？」

レント領でテオフィルスと共にいた少年だ。

彼から竜の鎧をもらつた。

「呼び捨てにするな！ このへたれ小竜！」

「君にまでへたれ小竜呼ばわりされる、謂いわれはないよ！」

僕はムツとしながら、アルマレーク語で答える。

兵達はルギーが明らかに僕に生意気な口を利いているのを察して、彼を縛り上げようとした。

「お前なんかには、イリは渡さない！ 竜騎士じゃない、お前なんかには！」

ルギーは兵達の手を噛み付き、隙を突いて素手で僕に飛掛かろうとした。

近衛騎士達が剣を抜き、ルギーを切り付けようとする。

「止めろ、まだ子供だ！ 殺すな！」

僕は大人達を制し、首筋に掴みかかろうとするルギーの足に、蹴りを食らわせた。

軽い彼を兵達に向け突き飛ばす。

兵達はルギーの上に押し掛かり、取り押さえる。

僕は彼の前に立ち、王子然と見下ろした。

「ルギー、馬鹿な事をするな！ それじゃあ、イリにも嫌われるぞ」

彼は悔し涙を浮かべ暴れたが、兵達に引きずられ天幕の外に放り出された。

そして怒りを溜めこんだイリが、ルギーに抗議し大声で叫んだ。

## 第四話 イリの竜騎士

マシーナの拳骨が、思いつきりルギーの頭に降り下ろされた。

「つてーな、何すんだよー！」

「この馬鹿！ 付いて来るなど言っただらうがっ！ 王太子様に襲いかかるなんて、処刑されたいのか？」

「るせーっ！ イリは俺がもらうんだ！ あんな奴に絶対渡さないよー！」

マシーナは呆れかえつてもう一度、拳を彼の目の前に見せる。

見習い竜騎士のルギーには全く反省の色が無く、今にも目の前の拳に噛み付きそうな凶暴な表情をしている。

テオフィルスは鼻で笑った。

「ルギー、お前の賢明なところは、竜騎士の装備一式を捨てずに、他の荷物に紛れ込ませたところだ。それだけは褒めてやる」

ルギーはぼつが悪そうに、声の主を見た。

テオフィルスが怒っているのは、明白だ。

自分の取った行動のせいで、竜騎士達の立場を危険なものにしたのだから。

「エステラーン王から、竜騎士全員の即時退去の申し入れがあった。とんでもない事をしてくれたな、ルギー！」

「だって、イリが……」

「イリが王太子を選んだ、お前じゃない！ あきらめて、アルマレークへ帰れ！」  
ルギーの目から悔し涙が流れた。

老トムニの竜イリは、本来見習い竜騎士の彼が受け継ぐはずだったのだ。

イリが彼を選ばなかったという事は、また別の見習い先を探さなければならない。

「仕方がないだろう、イリはお前の指示を受け付けない。別の竜を探すんだ」  
ルギーは項垂れたまま、しばらく泣き続けた。

テオフィルスはマシーナに指示を出す。

「イリが王太子の指示も受け付けなくなったら、俺が処分する。マシーナ、竜騎士隊の指揮は頼んだぞ」

「私は残りますよ、若君。何があっても若君を守ると、お館様に誓いを立てたんです。異国で殺される覚悟が無くて、竜騎士が務まりますか？」

竜騎士は空を飛び、友好国を歩き来する。

異国で死を迎える者の方が多いのだ。

「妻と子供がいるんじゃないのか？」

「今回の任務が危険な事は知らせてあります、大丈夫ですよ」

「そうか……。ではあの王に、お前が残れるように頼んでみる」

テオファイルスは厳しい顔付きで頷き、他の竜騎士達に、低いが良く通る声で告げた。

「では、俺とマシーナ以外の、全員の退去を命じる！」

竜騎士達は命令に従う意思を、敬礼で表した。

ルギーは泣きながら、テオファイルスを見る。

長身の竜騎士は、微笑みながら言った。

「元気でいろよ。良い竜を見つげるんだ、ルギー」

それがまるで別れの言葉であるように聞こえ、ルギーは初めて気がついたのだ、テオファイルスが死を覚悟している事に。

竜騎士の装備を身に付けた僕は、それが以前着た物と、格段に違う事に驚きを感じていた。

違和感が全然無く、竜の臭いも無い。

まるで僕のために作られたように、身体に馴染んだ。

セルジン王は胸甲に印された、指輪に絡んだ竜の紋章を見ながら、無表情に呟く。

「これは、フィンゼル家の紋章だな。同じものをエドウィンが身に付けていた」

僕はショックを受け、テオフィルスの大胆さに脅威を覚えた。

「脱ぎます、こんなもの！」

「いや、良い。あの竜はレクーマの子と聞いた。これが必要なだろう」

「でも……」

「アルマレーク共和国の特使が各国に派遣されたそうだ。これで避難民達の引き上げが容易に行われるだろう。本来なら彼等を歓待すべきなのだが、それとアルマレーク人のエステラーン滞在は別問題だ」

「……」

王は一瞬遠くを見ると共に、深い溜息を吐く。

自分の記憶の中に入り込んでいるように、僕には見えた。

王の次の言葉をしばらく待つ。

長い沈黙の後で、王は何かを決意するように重々しく告げた。

「オリアーナ、私は七竜リンクルと話した」

「え？」

一瞬、王が何を言ったのか理解出来なかった。

なぜ、竜騎士でもないセルジン王が、七竜リンクルと話せるのか。

王の深刻そうな顔に僕は不安を覚える。

「七竜レクターマの指輪を捜し出さなければ、竜がエステラーン王国に攻め入る」  
「ええっ?」

王は指を口に当て、他に聞かれないように小声で話す。

「エドウィンの行方は、知っているのか?」

「父はブライデインの《聖なる泉》で、僕を待っています」

「リンクルの推測通りだな。だが、あそこは消滅している」

僕は真っ青になる。

「そんな……、父は?」

僕は父の言葉を思い出していた。

《私は君を助けるために、レントの泉、メイダールの泉、トレヴダールの泉、デイスカールの泉にそれぞれ導<sup>しるべ</sup>を残す予定だ。導は君を守る泉の精の魔力だ。全て受け取ってブライデインの泉へ来てほしい》

その言葉は十一年前に語られたものだ。

そして泉の精の言葉。

《行くのです、エドウィンの待つ《聖なるブライデインの泉》へ。会えば、全てを理解出来るでしょう》



「でも泉の精は、父は《聖なるブライデインの泉》にいと云つていました。僕は、その言葉信じます！」

毅然と言う僕の頬を、セルジン王は優しく触れた。

「そう信じるのなら、きつとエドウインは生きているのだ。そなたが行けば、《聖なる泉》は復活するのかもしれない。場所は判るか？」

僕は王の腕の中で、首を横に振った。

「王都の城壁の少し離れた西側に、イルーの大河が流れ込んでいる。その中洲にブライデインの《聖なる泉》があつたが、今は中洲自体が無い」

「どうやって見つければ……」

「判らぬ」

僕は不安に王を見つめた。

彼は安心させるように微笑み、周りを見回した。

広い天幕の中で、僕の鎧の装着を手伝つていた騎士の従者達、近衛騎士、数名のモラスの騎士、そして忙しく立ち働く侍女達がいる。

「《聖なる泉》への道は存在している。場所が判らない訳ではない。ブライデインへ着いた時に辿り着けるよう、皆に手配しておこう。問題はそなただな」

「僕？」

王はからかうように、にっこり笑う。

「泳げるのか？ おそらく船が無いだろう」

僕は顔を引き攣らせた。

泳ぎは大の苦手だ、過保護な領主の方針で城壁の外に出る事が出来ず、城壁の外堀で泳ぎの訓練を受ける事が出来なかった。

中洲を探して、泳がなければならぬ事を思うと泣きそうになる。

「泳げません。どうしよう……」

「船を見つけ出し、漕ぎ手も確保するしかないな」

「セルジンは、一緒に中洲へは？」

王は悲しむような表情で、首を横に傾けた。

長い黒髪が流れるように揺れる。

「私の身が持てば共に行けるが、あまり期待はしない方がいい。私は影だ、何の理由で消えるか判らぬ」

「セルジン……」

王の腕の中で、僕は不安に怯える。

王は微笑みながら、優しく言った。

「それより今やるべき事がある。アルマレーク人の竜は王国に長く留まれば、正気を

失っていくだろう」

「あ……」

僕はマルシオン王の言葉を思い出した。

《我が国はもはや修復の出来ない程の被害を受けた。山系の竜は王都メイダールを焼き尽くし、私は水晶玉の中で暗黒の王として国中を破壊した》

山系の竜によって古のエステラーン王国は一度滅ぼされかけた。

マルシオン王が〈へありえざる者〉と取引して、竜の牙を抜いたのだ。

つまり七竜が竜を支配して、大人しくさせている。

その支配が王国に竜が長く留まると、及ばなくなる。

「そなたに懐いている竜……、イリだったか。あの竜も含めて、アルマレーク人と竜を共に和国へ帰らせるのだ。判ったな」

「は……」

イリとのせつかくの再会も、水晶玉の魔力のせいで阻まれる。

僕の腰に提げた《ソムレキアの宝剣》を見つめた。

テオフィルスの残酷な言葉が、刺さった棘となり心に痛みを与える。

《イリがこうなったのは、お前のせいだ！ お前がイリの背中であの宝剣を光らせてから、竜騎士の言葉を受け付けなくなつた！》

僕は王に抱かれながら、引き裂かれるような胸の痛みを耐えていた。

天幕の外では、竜イリが人の出入りを阻むように居座って、僕が現れるのを待っていた。

イリを取り囲んでいた竜騎士達は配置を解き、それぞれが出立の準備をしている。

天幕の外に出た僕は、イリが動き出すのを見ていた。

細い瞳孔が徐々に丸みを帯び、可愛らしく僕を見ている。

「イリ」

僕が籠手をした手でイリの顔に当てようとした時、鋭い低い声がそれを止めた。

「前に言ったはずだ、顔に触るな、ヘタレ小竜！ 大火傷をしたいのか」

僕は動きを止め振り返ると、不機嫌に睨むテオフィルスが立っていた。

「竜に触れたい時は、停止している時の前足を叩け。動いている時は近づくな」

彼が近づき、護衛達が一齐に緊張するのを僕は感じた。

テオフィルスは一定の距離を置いて止まる。

「お前は今から竜騎士見習いだ。覚悟しろ」

「……イリに命じるだけじゃダメなのか？」

「当然だ！ 竜は空を飛ぶ。お前も一人で竜に乗れるようにならないと、完全に制御は

出来ない」

僕は驚き、周りの護衛達は異議を唱えた。

一人で竜に乗る等、考えられない事だ。

「お前なら出来る。既にイリの心を掴んでいるからな」

僕はイリを見上げた。

竜は撫でて欲しいとまた顔を近づけてくる。

テオフィルスの指示に従い、イリの前足を叩いた。

するとイリが喜びの唸り声を出す。

その姿は可愛らしく、僕は微笑んだ。

「テオフィルス、竜はエステラーン王国に近づかない方がいい」

「……何の事だ？」

視線を彼に戻し、冷静に説得を試みた。

「エステラーン王国の水晶玉に近づくと、竜は狂暴になる。古いにしえの争い事に、イリを巻き

込みたくない」

テオフィルスはハツとして、僕を見つめた。

「お前はあの時……、〈ありえざる者〉の言葉を聞いていたのか？」

「え？ 〈ありえざる者〉を知っているのか？」

「……」

少し嫌そうな顔をしている彼は、そのまま何も言わない。

あの時が何時の事なのか判らないが、彼の口から〈ありえざる者〉の言葉が出てきたのは二度目だ。

あきらかに何か知っている。

「とにかく僕がイリに、君の言う事を聞くように、言うだけじゃ駄目なのかな？」

「それは……、そうなれば一番問題は少ない」

僕はイリを見上げた。

竜は僕を見下ろし、可愛らしく首を傾げる。

「イリ！ お願いだ、僕の言う事を聞いてくれ。」

イリは返事をするように、小さく鳴く。

「テオフィルスの言う事を聞くんだ！ 僕は君を連れていけない。君のためなんだ。君を狂暴な竜にしたくない！」

竜は抗議するように鳴いた。

「お願いだよ、イリ。困らせないでくれ。テオフィルスの言う事を聞いてくれ！ そうでないで、僕は君を嫌いになるよ！」

イリは落ち込んだように、首を胸に付けて悲しげに鳴いた。

その悲しみに、僕の心が痛む。

「ごめんよ、イリ。君と一緒にいたいけど、それが許されないんだ。解つてくれ」  
僕はイリの前足に抱きついた。

テオフィルスはそんな僕を、もの言いたげにじつと見つめている。

イリは首を胴から離し、嫌そうに顔をへ七竜の王へに向けた。

そして抗議するように、再び鳴く。

彼は微笑んだ。

「怖がらせて、すまなかつた、イリ。俺はお前を、本当は殺したくない」  
彼はイリに近づく。

イリは警戒し少し後退り、僕はイリの足元から飛び退いた。

「イリ、怖がらないで！ テオフィルスを信じるんだ」

イリは僕にも抗議した。

怒っているように少し翼を広げ、首を振った。

僕の周りの護衛達が警戒し、竜に立ち向かう。

「イリ！」

テオフィルスの低い声が、竜を制した。

「へ七竜の王」として命じる。俺に従え！」

その言葉にイリの動きを止め、あきらめて首をテオフィルスの前の地面に降ろした。彼から、安堵のため息が漏れる。

僕はイリが〈七竜の王〉を受け入れた事を悟った。

緊張が解けると同時に、言い知れぬ悲しみに涙が出そうになった。

「これでイリは帰れる。アルマレークで幸せに暮らすんだ」

竜は別れを惜しみ、僕に向けて鳴いた。

僕はイリの前足を叩き、別れの挨拶をする。

テオフィルスがイリに近づいたが、竜は抵抗する事はなかった。

彼はイリに飛び乗り、僕に振り返る。

「感謝する。エステラーン王国の王太子殿」

珍しい程の素直な礼に、僕は狼狽えた。

「い、いや、……どうって事はない。イリを頼む」

テオフィルスは微笑み、頷く。

「その竜騎士の装備一式は、今回の礼だ。どんな鎧よりもお前を守る。常に身に付けて

いろ」

僕は嫌そうな顔をした。

テオフィルスは声を出して笑った。



「全員、騎乗！」

彼の号令に、竜騎士全員が騎乗した。

ルギーは、レクーマオピオンの竜騎士の前に騎乗する。

テオフィルスの荷物を、マシーナが慌てて運び竜エーダに括り付ける。

セルジン王が僕の天幕から姿を現した。

竜の説得に成功した事を、王の伝令が逐一報告していたのだ。

「セルジン国王陛下と国王軍の、御武運をお祈りする。協力が必要な時は、アルマレーク共和国はいつでも馳せ参じる用意がある事を、どうか忘れないでもらいたい」

王は深く頷き、右手を上げて答えた。

「出立！」

テオフィルスの合図に、先発の竜が一騎、翼を広げ飛び上がった。

凄まじい風圧と舞い上がる砂塵に、国王軍の兵達は身を屈める。

一騎が完全に飛び立ったのを見計らい、次の一騎が飛び上がる。

その壮観さに、僕の心が踊った。

僕の中に眠る竜騎士の血が、逆流するように主張するのを必死に抑えた。

テオフィルスとイリが飛び上がる。

僕の瞳から、自然に涙が溢れた。

なぜ泣くのか、自分でも解らなかつた。

## 第五話 モラスの騎士エラン

アルマレークの竜騎士達がいなくなつてすぐに、僕はテオフィルスがくれた竜騎士の鎧を脱ごうとした。

セルジン王に僕の半分がアルマレーク人だと、言われたくなかつたからだ。

王の心が離れていくように思えて、身に着けていたくなかつた。

ところが、王が止める。

「それはしばらく装備していた方がいい。イリが気を変える事もありうる。何が起こるか判らないからな」

屍食鬼が覆う空の境界線に、竜の後姿が遠く見えた。

引き返してくる様子はないが、確かに用心に越した事はない。

僕は少し困つた顔をして、王を見つめた。

知りたいのは、いつも彼の心だ。

王は周りの近衛騎士と話をしていたが、まるで僕の心の動きを読んでいるように振り返る。

緑色の優しい瞳に、僕が映るのを意識した。

「これで邪魔者は、いなくなつたな」  
王はそう言つて、僕を抱き寄せる。

アルマレークの竜騎士達と別れてから半日、国王軍はトレヴダールの《聖なる泉》に到着しようとしていた。

暗雲のように空を覆う屍食鬼の群れのせいで、地上は薄暗く、木々は立ち枯れ、点在する村も街も無人の廃墟ばかり。

このトレヴダールは領主の館のすぐ側に、《聖なる泉》が存在する珍しい場所だ。

アルマレーク共和国があるトルカンディラ山脈の端がエステライン王国に入り込み、長年の浸食とイルーの大河によって削られた切り立った崖の先端に、トレヴダール城は建っていた。

辺境の城塞でもないのに、難攻不落の山城と呼ばれ、エステライン王国中域防衛の拠点とされた。

その麓に《聖なる泉》が存在した。

見上げる山城の向こうに、蠢く屍食鬼の姿が目に入る。

王の魔力のお陰で国王軍が屍食鬼に襲われる事はない。

それは解つてはいても、僕の心に不安が沸き起こる。

まるで見透かすように、横を並走していたルディーナ・モラスが、可愛い声で話かけてきた。

「エランがオーリン様の事を気にかけていましたよ。せつかく王の婚約者に戻れたのに、反抗ばかりしているんじゃないかって」

僕はその言葉に、大いに狼狽えた。

エランとは、しばらく会っていない。

王と僕が再度婚約した事を、彼はどう受け止めただろう。

僕を含めた周り中が、彼の心を踏みにじっていて、胸が痛んだ。

「エランは……、元氣？」

僕には、そう聞く事が精一杯だ。

「ええ、彼の上達ぶりは、群を抜いていますね。元々の素養が、幸いしているんじゃないかしら」

「エランは、武人になるのかと思っていた……」

「彼は呪いを跳ね返して、私の後を継ぐそうですよ」

僕は目を見開き、ルディーナを見つめた。

彼女は人形だと王は言っていたが、とてもそうは思えない。

「彼はモラス騎士の長になる。完全なる、魔法使いになりうる存在です」

僕の知らないエランの未来が語られた事で、彼に置いて行かれた気がしてショックを受けた。

「エランが、魔法使いに？ 考えた事なかった」

「《王族》を守る、一番の存在です。不自然な事ではないと思いますわ」

ルディーナは安心させるように微笑む。

「まもなく《聖なる泉》です、オーリン様。泉の〈門番〉は暗黒に吞まれている可能性が強いですわ。どうか、十分お気をつけて」

僕は頷き、国王軍の進行方向を見た。

上空を覆う屍食鬼達とは別に、向かう先に何か渦巻いて見える。

暗いそれは、まるでハラルドの放つ黒い渦のように、僕の気分を打ちのめす。

「嫌な、場所がある」

「判りますか？ 《聖なる泉》が暗黒に吞まれると、聖域は魔界域の入り口になる」

「魔界域？」

「本当に戦うべき相手は、魔王ではなく彼等なのかもしれません」

「……」

魔界域……、《聖なる泉》の精も言っていた。

そんな所に近づきたくないと僕は思う。

「あの中で泉の精を見つければ、導しるべを受けとる」

そう口に出しただけで気が滅入り、進める馬足が落ちる。

「……オーリン様、お急ぎを。魔王が来ます！」

上空の屍食鬼達が激しく蠢うごめくのが、地上からも確認出来た。

何かが墜落する轟音ごうおんと、振動が不安を煽あおる。

「竜だ！ 竜が墜落したぞ！」

僕は青ざめた。竜騎士達はまだ近くにいたので。

「なぜ、帰らない？」

「帰れないのでしょうか。おそらく、魔王の操る水晶玉の魔力に閉じ込められた」

「そんな……」

竜が水晶玉の魔力の中に長く留まる事は、危険極まりない。

「お急ぎ下さい！ オーリン様は導を手に入れる事だけを考えるのです。それがこの状

況を打ち破る！」

僕は半信半疑にルディーナを見つめた。

「泉を復活させるのです！ 暗黒を寄せ付けなければ、魔王の魔力が強まる事はないはず、彼等も帰れます」

僕は領き、馬に拍車をかけてルディーナと共に前方にいるセルジン国王の元へ向かった。

気が付くと上空に何騎もの竜と竜騎士が、屍食鬼と戦っていた。

果敢に火を吐く竜に、燃え上がり墜落する屍食鬼達、だか圧倒的な数に竜がおされているのが見て取れる。

不安が過ぎる中、王の元へ辿り着いた。

「セルジン！」

「アドランが来る！早く泉へ。竜騎士に降りるように指示を出した」

王の言葉の直後に、上空で発光する物体が大きな音と共に打ち上げられた。

「指示に気がつくの良いが……。オリアンナ、泉の精は《王族》を否定している、気をつけよ。抑制の腕輪を外すのだ」

「あ……」

腕輪は竜騎士の鎧の中にある。

僕は馬を降り、王の指示で左手の鎧が外され、腕輪をなんとか自分で外した。

その途端、僕の周りに旋風が巻き起こり、王の長い黒髪をなびかせる。

僕の周りに人が近づけなくなったため、自分で何とか左手の鎧を装着する。

上空で竜騎士が、着陸する場所を探しているのが見て取れた。



王は急ぎ状況を読み、指示を出す。

「エネス、彼等の被害状況を確認し、手当てが必要な者には薬師を向かわせよ。アレイン、トキ、〈七竜の王〉に対する指示はこれまでと変わらぬ。だが、殺すな」

二人の王の臣下は礼を取る。

僕はセルジン王が変わってきている事を感じ取った。

以前はテオフィルスが少しでも僕を連れ去る素振りを見せれば、排除する命令を出していたのだ。

これで彼等の命の危険は、多少軽減される。

僕は王に微笑んだ。

「あの男はエステラーン王国を助ける一因を担っている。それが解つただけだ」

王は僕の微笑みに、冷静にそう答えた。

あちこちに燃え上がる屍食鬼が落ちてくる中、竜が地上すれすれに飛び去る。

王と僕は馬に乗り、モラスの騎士がそれに続く。

「アルマレーク人を頼んだぞ、アレイン」

「は！」

アレインは王の一行から離れ、持ち場へと帰って行く。

上空の竜が着陸し始めた。

王は《聖なる泉》へと、馬脚を急がせる。

泉に渦巻く暗黒に、僕の恐怖は増した。

近づくにつれ気分が悪くなり、馬にしがみ付きたくなる。

僕の魔力に馬が影響されないのが不思議だが、自然に馬脚は乱れ遅れがちになった。

「相変わらず、騎乗が下手だな」

聞き慣れた声が、後ろから聞こえた。

「エラン！」

僕は振り向き、声の主を確認した。

赤い髪は短く切られ、王から賜った銀色の額飾りが煌めき映えた。

ニヤニヤ笑いながら、いつも通りのエランがいた。

僕の気分の悪さが、吹き飛ぶ。

馬を彼の馬に横付けさせようとしたが、エランは前方を指差した。

「早く進め、オーリン。陛下に置いて行かれるぞ！」

どことなく男らしくなったと思った。

そういえば、彼の誕生日が近い。

「もうすぐ成人だね、エラン。お祝いしよう」

「ああ、全部終わったら、そうしよう」

エランは僕の馬を追い立てるように、ぴったり後ろに付いた。

彼が歌うように何かを口ずさんだ途端、僕の気分の悪さが消えた。

「オーリン、ここの〈門番〉は暗黒に吞まれている。〈門番〉が入場を拒否しても、入場しろよ。泉の精を見つげ出すんだ」

エランの周りから、黒い渦のようなものが吹き出している。

それは気分を悪くするものではなく、むしろ僕に襲いくる暗黒の渦を、中和する役割を果たしている。

「エランは……、モラスの騎士なんだね」

彼は微笑む。

「驚くだろ？ 僕にこんな能力があるって。つい昨日だよ、モラスの騎士に認められたの。異例の早さだって」

そう言つて嬉しそうに笑い、僕も嬉しくなった。

「かっこいいな、僕もモラスの騎士になりたい！」

「ふふ……、何言つてるんだよ、君は王妃になるんだろ。ほら、陛下が待つてるよ」

エランの言つた通り、セルジン王が馬を下りて待つていた。

僕達を見つめる王の目は優しい。

「オーリン、〈門番〉に対応するのだ。拒否されても、そのまま入場せよ。後は我等が引

き受ける」

王の前に《聖なる泉》の〈門番〉が、全身に異様な濃さの黒い渦を身に纏い、彫像のように立っていた。

僕は馬を下り、王の前に顔を強張らせながら立つ。

あの〈門番〉に近づきたくない。

恐怖感に身体が震え、足がすくむ。

王はそんな僕に、優しく言う。

「〈門番〉は任せよ。問題はその後だ、魔界域に入り込んでならぬ。泉の精を見つけ、導くを受け取る事だけを考えよ、そなたなら出来る」

「……はい」

僕の周りに旋風が巻き起こり、二人の接触を阻んだ。

それでも王が側にいるだけで、僕の心は安心感に満たされる。

僕は微笑んだ。

「セルジン。僕は……、何があっても、あなたを見失わない。たとえば、離ればなれになっても……」

「何を言う。私がそなたを離すと思っっているのか？ さあ、行って帰って来るのだ。ここで待っているぞ！」

王はエランに気遣い必要以上の会話を避け、僕に先に進むよう促した。

僕の旋風に巻き込まれないぐらいの近くに、トキとその部下が配置に付く。

ルディーナとエランが、僕の後ろについた。

周りをモラスの騎士達が固める。

僕は覚悟を決めて、〈門番〉に近づく。

〈門番〉が恐ろしい大声で言った。

『名を告げよ』

「オリアンナ・ルーネ・ブライデイン」

『入場を拒否する！』

そう言った瞬間〈門番〉は剣を抜き、トキが素早く剣で受け流す。

僕は横を通り抜けようとしたが、〈門番〉は思いの外素早く、是が非でも僕を通そうとはしなかった。

はしなかった。

トキとその部下が激しく攻撃し、〈門番〉の動きを封じる。

その隙に、僕はなんとか入り口と思える場所までたどり着く。

〈門番〉が黒い渦を増幅させたように感じた、許可なく入り込もうとする者に怒っているのだ。

るのだ。

モラスの騎士達が、その黒い渦の増幅を抑えていた。

僕は振り返り、セルジン王を見た。

王が頷く。

黒い渦と光が混在する門へと、僕は足を向けた。

## 第六話 《聖なるトレヴダールの泉》

揺らめく門の前で僕は、再度セルジン王の姿を見ようと振り返る。

だが、周りは薄く暗く揺らめき、その姿を確認する事は出来なかつた。

《聖なる泉》の圏内に入ったという事だ。

先へ進もうとした時、門の端に人影があつた。

誰もいないと思つていた僕は、その姿に思わず大声で呼びかける。

「マールさんー！」

緩やかな金髪を揺らしながら、その男は琥珀色の瞳を無表情に僕に向けている。

顔の輪郭を簿<sup>ぼ</sup>かす髭<sup>ひげ</sup>は綺麗に剃り落とされ、鋭角的な顎<sup>あご</sup>のラインがそれまでのマール

の優しい雰囲気<sup>ふんいき</sup>を打ち消していた。

柔らかな色合いの服装を好んで着ていたマールと違い、今はセルジン王のように、ま

るで喪に服した服装だ。

金色の髪が黒服に映える。

「やあ、ブライデイン」

その呼び掛けに、僕はハツとした。

彼は古のエステラーン王、マルシオン・テイエム・ベイデル。

王の薬師マール・サイレスとして存在する事を辞めたのだ。

「マルシオン王……」

僕は怯えた。

強力な魔力を隠す事なく、彼は僕を威嚇し睨み付けてくる。

「ブライデイン、そなたに頼みがある」

「……頼み？」

頼む姿勢ではなく、完全な命令だと感じる。

古の王は長い時間を経ても、なお王として存在しているのだ。

「妻に、会いたい」

僕は目を見開き、マルシオン王を凝視する。

泉の精と取り引きして望みを叶えると同時に、《聖なる泉》を構成する一員となった口レアーヌ妃。

自由がなくなった存在に会う事が可能なのか、僕には判断がつかない。

「それは……、僕には判らない。〈門番〉に許可された者しか入れない」

「そなたも〈門番〉に許可されてない」

「あ……」



〈門番〉が暗黒に呑まれた時点で、《聖なる泉》の常識は崩れている。

「僕は構いません。でも、なぜ？ そんな強力な魔力をお持ちなら、自分で入場出来るんじゃない……」

「ロレアーヌはそなたの前に現れた。私の前ではなく」

「……」

どうしても、会いたいんだ。

そう思うとマルシオン王に、少しだけ親近感が湧いた。

僕がセルジン王の側にいたい気持ちと、同じだと思つたからだ。

僕は暗黒に歪む門を見た。

彼はこの門の前で、どれだけロレアーヌ妃を待ち続けていたのだろう。

門の楔石くさびいしを探す。

メイダールの《聖なる泉》で、楔石はマルシオン王を呼んでいた。

上部は歪みがひどく、楔石を確認する事は出来ない。

「ロレアーヌ妃が現れるか、判りませんよ」

「構わぬ」

彼は門の中を見ている。

そこから暗黒が噴き出し、渦巻いている。

「魔界域に踏み込めば、恐らく帰る事は叶わなくなる。そなたの護衛として、私は適任だろっ？」

そう言って振り返った彼は、何かを決意しているように、僕に手を差し伸べる。

「覚悟を決めろ、ブライデイン」

この古の王を、信用して良いのか？

「……条件を出して良いですか？」

「条件、私にか？ 生意気なブライデイン、場合によつては許さぬぞー！」

古の王は怒ったように、僕に迫る。

泉の精の魔力〈堅固の風〉が、マルシオン王の髪を激しくなぶる。

彼は僕の持つ魔力を、恐れる様子がない。

僕は恐怖に顔を強張らせながら叫んだ。

「マールさんに戻って下さい！ それが条件です！」

マルシオン王は、その瞬間に姿を変えた。

「これで宜しいですか、オリアンナ姫？」

彼はマール・サイレスの優しい顔立ちに戻り、僕に微笑む。

僕はホツとして、地面に座り込んだ。

「あんまり怖がらせないで下さいよ、マールさん」

「外見とは案外、当てにはならないものですよ、姫君」

そう言つて彼は、門の前を指差した。

僕は不承不承、立ち上がる。

「それでも、マールさんの方がいいです」

「分かりました。しばらくこの姿でいましょう」

外見は優しいマールに戻つたものの、マルシオン王の溢れる魔力は変わらず、僕の恐怖心は治まらない。

二人で、門へ向かった。

「魔界域に踏み込まないで、泉の精を呼びだすにはどうしたらいい？」

「あなたが一番ご存じでしょう？」

「僕が？」

メイダールの《聖なる泉》で、廃墟の荒涼とした幾重にも連なる景色の中、泉の精を呼んだ時を思い出す。

「……水？」

僕は腰に提げた水袋を手にした。

あの時、荒涼とした世界から出られない恐怖を味わつて、必死に泉の精に呼びかけた。今、横にマルシオン王がいる状況で、あの時の必死な精神状態になれるのか不安にな

る。

「出来ないのですか？」

マールは物腰柔らかく、僕に聞く。

微笑む優しい外見なのに、その中身はマルシオン王そのものだ。

逃げ出したい気分になる。

「……マールさん、もう少し魔力を出さなくてもらえますか？」

「ふふ、こんな危険な状況で？ それは無理だな」

僕はマルシオン王に、マールを望む事を諦めた。

そして、前から気になっていた事を口にする。

「《王族》は泉の精に嫌われている。どうして？」

彼は声を上げて笑った。

「私やセルジン王の事を、怖いと感じた事はないのか？」

「あなたの事は怖いと思います。でも陛下の事は……」

強力な魔力を操るセルジン王は、魔王にもなりうると存在だと思いう時がある。

それでも、怖いとは感じなかった。

「《王族》は怖い存在だよ。天界人の能力を秘めているのだからな。そしていつの間にか

入り込んだ、魔界域の住人の能力も……」

「え？」

彼は目の前に広がる魔界域から、溢れる黒い渦に顔を顰める。

「我等は水晶玉に捕らわれた、人間でない者。泉の精が好む訳がない」

「それじゃあ、なぜロレアーヌ妃は、取引に応じてもらえた？」

「解らぬか、制御の腕輪のせいだ！」

怒ったように僕を睨み付け、彼は腕輪のはまった位置を見た。

「外してきたのだな。あの男が取り上げたか？ あれは泉の精の魔力を制御すると同時に、《王族》の魔力も制御した。ロレアーヌは天界人の罠にはまったのだ」

「あれは、天界の物？ 泉の精はどうして腕輪に気付かない？」

「彼女の命の光となった〈ありえざる者〉が、天界の気配を消したせいだ」

「……」

状況は僕と似たようなものだろう、〈ありえざる者〉がそこまで干渉している事に恐怖

を覚える。

を覚える。

「ロレアーヌを助け出す。《聖なる泉》が完全に魔界域に吞まれる前に、彼女を解放する。

「ここまで来て、嫌とは言わせぬぞ！」

「嫌じゃない。彼女が反応したのは、あの腕輪を所有している僕だからだ！ それで

解ったよ、あの警告の意味が……」

メイダールの《聖なる泉》で彼女が姿を現したのは、天界人に対する警告を伝えたかったからだ。

「マールさん、ロレアーヌ妃を解放するって、天界人の意思に反するんじゃないや……？」  
「私の半分は、天界人ではない！」

そう言いながらも、マルシオン王の背からは光輝く大きな翼が現れた。

その姿を見て、何かが心に引つかかる。

天界の罫？

ロレアーヌ妃が警告したのは、自分と同じ罫にはまるなという事だ。

天界人は僕を、どんな罫にはめるつもりだ？

彼の姿が〈へありえざる者〉オーリンの姿と重なった。

警戒心と緊張がいや増す。

オーリンと一心同体の状態では、逃げ出す事も出来ない。

「さあ、無駄話はここまでだ。泉の精を呼びだしてもらおうか！」

あきらめの気持ちを抱えながら、僕は腰に下げた水袋を取り出し、栓を外した。

「トレヴダールの聖なる泉の精！ 導を受け取りに来た、出て来てくれ！」

そう言つて門柱の地面の両側に水を垂らす。

すると門柱が輝き始め、水が光輝き一ヶ所に集まり人形を取る。

小柄なその人形は長く濃い金色の髪をなびかせて、細い腕には銀色に輝く制御の腕輪がはまっている。

「ロレアーヌ！」

マルシオン王が彼女に近寄ろうとした時、声が聞こえた。

『彼女を返して欲しければ、近寄ってはなりません！』

ロレアーヌ妃の背後の暗闇が蠢く。

『魔界域に入り込みたくなければ、〈管理者〉よ』

マルシオン王は、寸でのところで踏み留まる。

『時間が限られています。オリアンナ姫、父上の伝言は、自身の魔力に溺れるなど伝えていません。あなたを心配しての言葉です』

僕は頷いた。

《聖なる泉》に父の姿を映すだけの余力がない事が見て取れる。

『導しるべを受け取りなさい。トレヴダールの《聖なる泉》の導、〈祥華の炎〉』

ロレアーヌ妃の光輝く身体から、清らかな炎が現れた。

それは真つ直ぐ僕に向かい、包み込む。

導は熱のない状態で、僕の左手に凝縮し……、やがて消えた。

僕はもはや、導に違和感を覚える事もない。

『〈祥華の炎〉はあなたを助け、ブライデインへ導く』

炎が僕の中に消えたと同時に、ロレアーヌ妃の姿は空中に浮かぶ光の玉となる。

「ロレアーヌ！」

「待つて！　どうかロレアーヌさんを返してあげて！」

僕は消えゆく泉の精に願ひ、必死に叫んだ！

『あなたの中に、既に彼女はいるでしょう？』

マルシオン王はハツとして、自分の胸元を見る。

そこには、彼の中に入り込もうとする小さな球体があつた。

「ロレアーヌ……」

彼の顔に歓喜の表情が浮かび上がる。

球体は彼の胸の中に消えかけた。

『〈管理者〉よ。あなたのこれ以上の干渉を、我等は拒否する！』

泉の精は、そう言い残し消えた。

その瞬間、《聖なる泉》の門が崩壊した。

門を支える楔石だったロレアーヌ妃が消えたせいだ。

石が僕に向けて落ちてくる。

マルシオン王が咄嗟に僕を庇おうとした時、その手は弾かれた。



「何？」

僕の身体を、美しく煌めく炎が包み込む。

降り注ぐ石は炎に焼かれ、僕に当たる前に焼失した。

「なるほど、新たな魔力に守られているという事か」

その魔力を忌み嫌うように、彼は顔を顰めた。

「マールさん、暗黒が！」

門が崩壊したと同時に、魔界域の黒い渦が二人に押し寄せた。

黒い渦は触手を伸ばし二人を絡めとり、魔界域へ引き摺り込もうとする。

触手は僕に触れそうになった途端、激しく燃え上がりあつという間に焼失した。

マルシオン王は光を纏い、暗黒をはね除ける。

「オリアンナ姫！ここに長居は無用だ」

「マールさん、暗黒が外に出る！」

二人の間をすり抜け黒い渦が、《聖なる泉》の〈門番〉目掛けて押し寄せた。

「……！」

マルシオン王の胸元から、光輝く人物が現れる。

「ロレアーヌ！」

『私は門を構成する楔石。この世が暗黒に呑まれる事はありません』

「私は望んでないぞ！　そなたは、いつも……、私を置いていく」  
『マルシオン……』

ロレアーヌ妃は優しく微笑み、やがて光の球体となり、門の頂上部分があつた場所へ飛び立った。

彼女が所定の位置に戻つた途端、壊れた門石が元の場所へ戻り、《聖なる泉》の門は再構築された。

暗黒は門内に閉じ込められ、流出は止まる。

彼女は《聖なる泉》を構成する一員に戻る事で、最悪の事態を防いだのだ。

『あなたと……、共……に……』

ロレアーヌ妃の声が聞こえた。

永遠に生きる彼に彼女だけが寄り添う、たとえ会う事が叶わなくとも。

マルシオン王は暫く門を睨んでいた。

花のような、獣のような、人の顔のような楔石は、ただ無機質な門の飾りと化し、彼の怒りをはね除けている。

「帰るぞ、オリアンナ姫。流れ出た暗黒を排除しよう」

彼は何事も無かつたように、踵を返し《聖なる泉》の〈門番〉の元へ向かつた。

僕は何度も楔石を振り返り、引き裂かれるマルシオン王とロレアーヌ妃の悲しみに、

涙が出そうになるのを必死に堪えていた。

## 第七話 エランの戦い

《聖なる泉》の〈門番〉の周りに突然、膨大な量の暗黒が取り巻き始めた。

国王セルジンは魔王アドランと対峙し、空は一面屍食鬼に覆われ、無数の矢が飛び交い、至る所で戦闘のものものしい轟音と悲鳴が上がる中、それは国王軍に絶望感を与えるように襲いかかる。

《聖なる泉》の〈門番〉が、国王軍の兵士達を切りつけ始めたのだ。

兵士には見えない黒い渦の影響で彼等の動きは鈍り、反撃する暇もなく切り殺されていく。

絶命の悲鳴、肉体が断ち切られ、飛び散る血しぶきが、枯れ果てた大地を赤く染めてゆく。

「モラスの騎士第二隊、第五隊、〈門番〉の暗黒を抑えよ」

国王セルジンの指示に、モラスの騎士第二隊と第五隊が〈門番〉を取り囲む。

その第二隊の中に、エランはいたのだ。

国王軍に参加して以来、何度かの屍食鬼との戦闘と、オリアンナの側を離れてからの訓練で、自分でも感じる程戦闘に慣れてきた。

異例の早さでのモラスの騎士としての叙任も、元はレント領騎士隊での訓練の賜物たまものだ。

そして、心の中ではこう思う。

陛下がオリアンナを、愛し始めたからだ。

この異例の叙任は、陛下の贖罪しよくざい。

セルジン王から直接、オリアンナ姫の死が迫っている事を聞かされた時は、絶望感に打ちのめされた。

王が必ず助けると約束をしたが、希望は見えない。

オリアンナの望みは、影であるセルジン王を普通の人間に戻す事だ。

彼女の死と引き換えに、陛下は永遠に生きる。

死までのわずかな時間を、オリアンナは陛下の腕の中で幸せに生きるんだ。

それで良いと思う。

心の闇のコントロールは、簡単に出来た。

元々、《王族》に逆らう事など出来ないのだ。

僕は彼女の、最高の友になろう。

それが彼の出した答えだ。

エランは王から与えられた赤く輝くモラスの騎士の剣を手に、《聖なる泉》の〈門番〉

と対峙した。

膨大な量の黒い渦が、まるで意思のある生き物の如く蠢く。

その暗黒は《王族》の血をひく者にしか見えない事を、彼は最近まで認識していなかった。

ただ嫌な感じがしていただけだ。

僕もこれを放出して、オリアンナを苦しめていた。

そう思うと不思議な事に、黒い渦への嫌悪感が消えた。

〈門番〉を取り囲んでいた兵士達が、モラスの騎士の到着にホツとしたのをエランは感じ取る。

モラスの騎士によって黒い渦の広がりはいく止められた。

あとは黒い渦の境界を徐々に縮め、《聖なる泉》の〈門番〉と対峙する。

問題は〈門番〉の強さだ。

いくら訓練を積んでも、勝てない相手がいる。

《聖なる泉》の〈門番〉には、歴戦の戦士である王の近衛騎士トキ・メリマンでさえ、勝てる保証はないと言われていた。

境界は徐々にその範囲を縮めていく。

突然エランの前に、黒い渦が人型を取る。

それは自分と同じぐらいの背丈で、背には翼を生やしていた。  
ハラルド？

エランの中で、どうにもならない憤りが沸き起こった。

「エラン！」

彼の隣にいたモラスの騎士の一人が警告する。

境界を構成する、精神の環が乱れたからだ。

その隙について、〈門番〉がエラン目掛けて躍り出る。

エランは自分の剣で〈門番〉の重く素早い剣を受け止めたが、彼の剣は呆気ない程簡単に跳ね飛ばされた。

〈門番〉の剣が彼の首に迫り、瞬時に死を覚悟したその時、剣はピタリと触れる直前で止まる。

『お前はまだ殺さない。もっと苦しんで死ぬんだ』

そのかすれ声には聞き覚えがあった。

やっぱり、ハラルドの声だ！

彼を嘲っているように聞こえた。

〈門番〉は剣を、エランの隣の騎士に向ける。

先程、警告してくれた騎士だ。

「危ない！」

警告も虚しく騎士は、〈門番〉の刃に倒れた。

エランは騎士の血を浴びる。

暗黒を中和する環が、完全に崩れた。

〈門番〉が開けた穴から黒い渦が漏れ出ようとした時、それを跳ね返す強力な魔力の波がエランを通り過ぎた。

《聖なる泉》の〈門番〉が怯み、魔力の源に目を向ける。

ルディーナ・モラスがその小柄な身体から信じられない程の魔力を繰り出し、黒い渦を圧したのだ。

その隙にエランは跳ね飛ばされた剣を拾い上げ、切り殺された騎士の分も含めた魔力を繰り出す。

暗黒が再び閉じ始めた時、横に来たルディーナが命じた。

「エラン！ 黒い渦の中にハラルドがいるわ。〈門番〉は私が抑える。だからハラルドを見つけて討ちなさい」

「……はい」

「怖がる事はないわ。あなたは黒い渦に馴染んでいる、中に入っても影響はないはずよ。ただハラルドを討つ事だけを考えて」



強力な魔力を繰り出しながら、ルディーナは華やかに微笑みかけてくる。

エランは頷き、中和の境界をルディーナに委ね、暗黒の中に一步踏み出した。

暗闇に視界は閉ざされる。

闇が液体のように呼吸を奪う。

危機感にエランの鼓動は激しく脈打つ。

彼はオリアンナを思った。

好奇心旺盛な灰色の瞳で、自分に笑いかける。

特徴的な肢体が、彼の目を惹き付けて放さない。

王の愛を得て、彼女はますます綺麗になった。

オリアンナがよく通る声が、自分の名を呼ぶ。

《エラン。 エラン……。 エラン！》

彼の中に冷静さが戻る。

楽に呼吸が出来、視界が徐々に開ける。

横に剣を持ったまま立ち尽くす《聖なる泉》の〈門番〉がいた。

ルディーナの魔力のせいで身動き出来ずにいる。

今なら〈門番〉を倒せる。

そう思った時、ルディーナの声が聞こえた。

「〈門番〉を殺してはいけない！ ハラルドだけを狙うのよ」

その言葉に、彼は〈門番〉の横を通り過ぎる。

黒い渦の中は異空間のように上下の区別も無く、エランの感覚を麻痺させる。

足は動かしているのに進んでいるのか止まっているのか、まるで分からない。

《ハラルドを討つ事だけを考えるのよ》

ルディーナの声が、ただエランを突き動かした。

ハラルドとは同じ年だ。

同じ教師の元で学んだが、彼の嫌がらせは熾烈だった。

座る席のない状況にされ立ったまま授業を受けるのは日常茶飯事、蠟板を割られた

り、先生も誰もハラルドに逆らえない状況で、集団で暴行を受けたり。

一度ハラルドを殴り倒した時は、君主先ロイ・ベルン指揮長官が降格させられそうに

なった。

冷静な領主の判断で大事には至らなかつたが、あれ以来ハラルドの嫌がらせは陰湿で

遠回しなものになった。

久しぶりに直接対決だ！

エランの中に、信じられない程の闘志が沸き起こる。

それと同時に黒い渦が変化し始めた。

彼の少し前方で、黒い渦が凝縮し、黒い翼の生えたハラルドが姿を現したのだ。

『よお、エラン。僕の従僕』

「君の家来になつた記憶はないよ、ハラルド」

二人は睨みあつた。

エランに掛けられたハラルドの呪は、彼を自分の手で殺さなければ解く事は出来ない。

王から賜つた銀の額飾りのお蔭で、何とか屍食鬼に変化する事を抑えられている状態だ。

彼は手にした赤く輝く剣を、ハラルドに向けた。

「君を殺す！」

ハラルドは声を上げて笑う。

『僕は死ぬ事はない、この姿は永遠だ。くだらない事に振り回されてないで、君もこんなればいい』

「君と同じなんて、冗談じゃない！ 生憎、僕はまだ人間だよ」

『そうかな？』

ハラルドがそう言った途端、暗闇がエランを取り囲む。まわりつづく闇は、屍食鬼としての彼を形作る。

目の前に、魔獣のようにせり出した鼻先が見えた。

腕は醜く変形し、歪んだ指先から尖った刃物のような爪が、血肉に餓える凶器と化した。

尾骨の重みに振り向くと、尻の上部から太く長い尾が大蛇のように揺らぎながら空を切っていた。

そして視界の一部を遮る黒い翼。

『その姿の方が似合う』

ハラルドが真顔で言った。

エランは大きく息を吸い込み、そして吐く。

すると屍食鬼の姿は、埃を振り払う如く消え去った。

「あいにく、僕は今の姿が気に入っているんだ。勝手に変えないでほしいな」  
彼はハラルドに斬りかかる。

赤く輝く剣の切っ先がハラルドを捉え、弧を描いて切り裂く。

確かな手応えを感じた。

これで呪いから解放される。

そう思った時、目の前のハラルドが消え去り、少し離れた前方に現れた。

『ここだ、従僕』

ハラルドは顔を醜く歪ませながら、エランを挑発するように笑う。

畏だ！

エランの首筋の毛が逆立ち、心の片隅が警告を発する。

だが、彼は一步踏み込んだ。

呪いを解くために、対峙出来る機会を逃す気にはなれなかったのだ。

踏み込んだ右足が、まるで溶け出すように何の手応えも無く黒い渦の中に吸い込まれ、バランスを崩し黒い渦に絡め獲られるように転倒した。

不気味な笑い声が、この異質な空間に木霊する。

『お前は永遠に、僕の従僕だ、《王族》の血を引く者。魔界域に引き摺り込んでやる』

エランの身体の半分が黒い渦に呑み込まれ、足掻けば足掻く程、呑み込まれる速度を増す。

『諦めろ！ あの女は王を選んだ。王はお前を殺すためにモラスの騎士にした。邪魔な存在を消すためだ』

「勘違いするなよ！ 僕は元々、王配なんて望んでない！」

『は！ 優等生は、頭の中まで優等生か？ 素直になれよ、あの女が欲しいくせに！』

「ああ、欲しいさ！でもそれは、お前達のいない世界で、幸せに笑う彼女の姿を見てからだ！」

エランの額飾りが赤く輝き始め、周りの黒い渦が消えた。彼は立ち上がり、剣を構える。

セルジン王の魔力が自分に力を与えてくれるのを感じる。

「王は僕を裏切らない。僕も王を裏切らない。お前達とは、違う！」

その言葉に呼応するように、ハラルドの身体から憎しみの炎のように黒い渦が吹き出した。

『ふん、生意気なエラン！お前を今すぐ屍食鬼に変えてやる！』

ハラルドがエランに向けて黒い渦を放出しようとしたその時、彼の背後から声が聞こえた。

「そこまでだ。〈契約者〉ハラルド」

冷静な声が、彼の動きを止める。

振り向いたハラルドは、驚愕した。

黒い渦を消し去るように輝く翼を大きく広げ、水晶玉の〈管理者〉マルシオン王が立っている。

天界の光に目が焼かれるのを感じ、腕を上げて光を遮った。

一瞬垣間見た〈管理者〉の横に、不思議な炎を揺らめかせた義弟の姿があった。  
『オーリン！』

ハラルドの憎しみが増幅した。

## 第八話 国王と魔王

《聖なる泉》の領域を出る直前に、マルシオン王は急に立ち止り、僕に振り返った。

「マール姿の優しい外見も、彼の鋭角的な性質を和らげる事はない。」

「水晶玉が二つある事は知っているか？ オリアンナ姫」

「……もちろん。セルジン陛下と魔王アドランがそれぞれの所有者だって知っているます」

マルシオン王は鼻で笑った。

「正確に言えば、彼等は水晶玉に取り込まれただけだ。特に魔王アドランがいる水晶玉は、私が管理している」

「え？」

僕は茫然とマルシオン王を見つめた。

彼は皮肉に笑う。

「ふん、魔王を気取る輩の好きにはさせぬぞ」

「……」

僕は不満を口にした。



「だったら、なぜ《王族狩り》を許した？ あなたが〈管理者〉なら、止められたはずだ！」

マルシオン王は憎しみを込めた目で僕を見ている。

エステラーン王国の古の《王族》いじしえベイデルは、マルシオン王を最後に《王族》としての地位を奪われ、生き残ったベイデルの侯爵家も、ブライデインの《王族》であるアドランによって皆殺しにされた。

「なぜ止めねばならぬ？ ブライデインがどうなろうと、私には関係ない」

「そんな……、あなただつて自分の子孫を救おうとしたじゃないのか！」

「……奴が水晶玉に入る前に、魔族に支配されたせいだ。私の存在に気が付き、ベイデルを全滅させた！」

マルシオン王は今や恐ろしい程の憎悪と強烈な魔力を身に纏まとい、僕の意味を挫くじく。

マールの外見でマルシオン王の意思を見せつけられると、シヨックが大きい事に僕は気付いた。

察した彼は笑い、蔑むように告げる。

「言つたはずだ。外見等当てにはならないと」

僕は悲しくなった。

優しいマールが、心の中から完全に消えたのだ。

「姿を元に戻してよろしいかな？　オリアンナ姫」

「……はい」

あつという間に冷たい印象のマルシオン王に変わった。

「私は女神の意志に逆らえぬ。姫君、エステラーン王国はセルジン王が水晶玉の〈管理者〉になった時点で消滅する」

つまり僕の死と同時に、王国は消滅するという事だ。

「そんなに早く？　……どうして？」

「水晶玉の記録を残さぬためだ。《王族》の血も消し去る」

僕は真っ青になった。

僕は元々死ぬ運命だ。

セルジン王を水晶玉から解放した時点で、死を受け入れる覚悟はある。

王が急に僕を妃にすると公言したのも、生きる希望を失わせなためだ。

セルジン王の心の中には、今も別の女性が住みついている。

〈ありえざる者〉オーリンの母、アミール・エスペンダ。

王は時々、僕を見ながら遠くの誰かを思い浮かべている。

そう感じて、僕は悲しくなる。

エランの顔が浮かんだ。

サファイーナの顔も、アレイン、エネス……、その他の《王族》の血を引く者達の顔。彼等全員が死んでしまう。

絶望に打ちのめされ、僕の目から涙が流れ落ちる。

マルシオン王は冷静な目でそれを見ていた。

「そなた達はまだいい。死が叶うのだからな」

水晶玉と共に永遠を生きてきた彼は、冷酷に言い放つ。

「エランだけでも、助けて！」

わがままな言葉だと判つてはいても、泣きながら僕は叫ばずにはいられなかった。

マルシオン王は大声で笑う。

「他の者はどうでも良いのか？ 愚かな姫君。そんな事は叶わぬ！ 《王族》の血を残す

のは、後々の災いになる。あきらめろ！」

「だったら、僕はブライデインへ行かない！」

彼は馬鹿にするように、剣を抜く。

「魔法でそなたの意思を操つてやりたいが、泉の精の魔力が邪魔をするな。この魔剣で

はどうだ？」

マルシオン王は剣を振りかざし、僕を切りつける。

殺される恐怖に耐えながら、僕は彼を睨み付けた。

魔剣は呆気なく泉の精の魔力に弾き飛ばされ、音を立てて落ちた。彼は舌打ちする。

「厄介な姫君。エランは呪いをかけられ、いずれ魔界域へ落ちるのに」  
「エランを助けて！」

「……」

二人はしばらく睨み合う。

やがてマルシオン王が、盛大な溜め息を付きながら折れた。

「判った。エランを助ければいいのだな」

オリアンナはホツとして微笑む。

「ありがとう、マールさん」

「マルシオンだ、オリアンナ姫」

面白くなさそうに、彼は音を立てて剣をしまう。

そうして、二人は現実の戦場へ戻っていった。

セルジン王は魔王アドランと対峙していた。

屍食鬼が空を覆い尽くし、地上は暗さを増す。

王の魔力の圏内に、屍食鬼は入り込めない。

その境界の空域にテオフィルスの率いる竜騎士隊が、屍食鬼達と戦っていた。

上空で吹き出される炎に焼かれた屍食鬼が、燃えながら地上に墮ちてくる。

それを回避しながら兵達は、他の屍食鬼に火矢を放つ。

《聖なる泉》の〈門番〉が放つ黒い渦の影響で、王の魔力の境界が歪み、屍食鬼達が黒い渦に到達しようとしていた。

魔界域からの黒い渦を取り込むと、屍食鬼は勢いを増し、その身体がより大きくなる。

それは国王軍には脅威だった。

モラスの騎士が黒い渦の拡大を食い止めていたが、溢れ出る勢いまで止める事は出来ない。

負傷した竜と竜騎士は地上に降りて国王軍の加勢をし、迫りくる屍食鬼に地上から炎を浴びせる。

燃え上がる炎と焼け焦げた者達の臭い。

兵士達から流れ出た血の臭い。

戦場に転がる死体を跨ぎ、足場の悪い状況での戦いに、国王軍は自ずと消耗してゆく。「上空にアドランがいる」

セルジン王は自身の魔力を増強する。

すると彼の周りから白い霧が発生し、それらは上空に幕を張るように拡散した。その白い霧の中から、幻の兵士達が現れ、屍食鬼に向けて火矢を打ち始める。暗黒と白い霧が相まって、空は壮絶な模様を繰り広げた。

上空の竜騎士達は霧で視界を奪われたため、テオフィルスは全員に地上に降りる指示を出す。

何より先ほど墜落した竜と竜騎士の安否が心配だった。

彼はイリを、墜落し負傷したレクーマの竜の側に舞い降りさせた。

弱点の目を負傷した竜は、墜落の衝撃で横たわったまま動かずにいた。

普段から、そのように訓練されている。

暴れて乗っている竜騎士と周りに被害を出さないためだ。

騎乗している竜騎士はベテランだった。

視力を失いパニックになった竜を懸命になだめ、被害を出さない墜落場所まで誘導し、緩やかに墜落させた。

だが衝撃は避けられない。

竜の触手の保護は墜落の衝撃で外れ、鞍に装備された安全帯のみで衝撃に耐えなければ

ばならない。

竜騎士は、鞍にしがみつく状態で意識を失っていた。

被害を最小限に食い止める体勢で、ベテランの竜騎士は生きていた。

テオフィルスはホツとして、彼を他の竜騎士に託した。

乗っていた、もう一人を探すためだ。

「ルギー！ 何処にいる？ 返事をしろ！」

それが無理な事は、彼自身が一番承知している。

竜に振り落とされ、助かるのは奇跡に等しい。

エステラーン王国のレント領で、イリと王太子と自分が墜落して助かったのは、へあり

えざる者〉の加護があつたからだ。

ルギーは見習い竜騎士で、竜に乗って日が浅い。

絶望的な状態でも、安否を確認しなければならぬ。

テオフィルスは屍食鬼と国王軍に気を付けながら、他の竜騎士と共にルギーを探す。

少年は竜から投げ出され、醜く歪んだ枯れ木に引つ掛かった状態で発見された。

全身傷だらけだが、辛うじて生きている。

奇跡だ……。

テオフィルスは安堵した。

身の軽さが幸いしたのだ。

ルギーはそつと木から下ろされ応急処置が施された。

意識は戻らないが、安定した息がある。

しばらくは動かせないな。

あの王が竜騎士隊の滞在を、許可してくれるだろうか？

是が非でも頼み込む、彼はそう決意していた。

国王セルジンは黒い渦の中から、魔王アドランが現れるのを見ていた。

黒い渦が人の形を取り、やがて色付き、完全に兄の姿が現れた。

『やあ、愚弟セルジン』

「相変わらずですね。アドラン兄上」

国王セルジンは冷静に魔王を出迎えた。

モラスの騎士隊は、黒い渦の包囲をより強化した。

『そなたはまだ、そのような者達と共にいるのか？ いい加減、自分の魔力を自分のため

に使ったらどうだ？』

「私は昔から自分のために、水晶玉の魔力を使っていますよ、兄上」



『お前はどこまでいっても国王なのだ、面白くない』

「そのように生まれ育つております。あなたの廃太子が決まった時から」

二人はしばらく睨みあった。

『水晶玉は私が貰う。そなたには渡さぬ』

「何度も申し上げております、兄上。両方を手に入れるのは不可能です」

天界の意思が働いている事を知ってしまった今、セルジン王は兄の勢力の背後に、魔界の存在が強力に働いている事を認識した。

何時から、彼等のものになった？

自分が生まれた時から天界の眼を知らずに引き付け、へありえざる者」と知らずに接触してしまったように、兄にも忍び寄る異質な意思との接触があつたはずだ。

「我々は違う意思によつて幼い頃から引き裂かれている……、そう思いませんか？ 兄上」

『だったら、何だと言うのだ？ 愚弟よ。我等はそなたが生まれ落ちた時から敵同士だ。今更相容れぬ！』

「……そうだったかもしれません。ですが、今は違うように思えます」

『どう思う？』

「我等は生まれながらにして、大抵的な存在に操られているとは思いませんか？」

魔王アドランは笑った。

『なにを、甘い事を……。だとしたら何だと言うのだ？ 相反する我等が手でも組もうと言うのか？』

「お互い目を覚ます時かもしれません。自分達が何に操られているのかを確かめるべきです」

『ふふん、良いだろう。ではまずそなたの張った障壁を取り外してもらおうか』

「それは出来ない。……黙っていい相手がいます」

王は振り返って、彼を見た。

宰相エネス・ライアスが、セルジン王の後ろに控えている。

白髪の宰相は、じつとかつての友アドランを睨み付けていた。

「障壁を取り外す等、言語道断。私が味わった恐怖を、兵士達に味あわせたくない！」

『やあ、裏切り者のエネス・ライアス。今でもお前の悲鳴が、耳に心地よく残っているよ』  
エネスは最高に不快な顔をした。

目の前で親族を皆殺しにされ、自身も死にかけて状態でセルジン王に助けられた。

全ての原因は、自分がアドランを裏切った事にある。

「陛下、彼に呼び掛けても無駄です。もはや人ではない」

「私もそうだよ、エネス。だから呼び掛けた。我等は個人の意識を持たぬ、ただの集合体

になりかけている。兄上、兄上の意識は何処にありますか？」

『これが私の意志だ！』

「……違うと思います」

『黙れ！』

魔王はモラスの騎士の包囲を破り、セルジン王に襲い掛かろうとした。

王は兄の意識を迎え入れるように、両腕を広げた。

「陛下！ 危ないっ」

周りの騎士隊は王の側に駆け付けようとしたが、身体が動かない。

王が彼等を征していた。

魔王アドランがセルジン王に触れようとした時、何かが爆発し辺りが塵にまみれ、人々は意識を失った。

## 第九話 イリの望み

先程現れたオリアンナと見知らぬ男のせいで、ハラルドの魔力はてきめんに衰えたようにエランには見えた。

黒い渦はハラルドの姿を覆い隠し、明らかに背後の男を恐れ委縮している。

オリアンナは不思議な光に包まれて、エランに近づいて来る。

「エラン、呪いを解くんだ！」

なぜ、いきなり黒い渦の中に彼女が現れたのか見当も付かないが、揺らめく炎のようなものに守られているのは感じ取れる。

事情の解らないエランは、戸惑いながらもハラルドに斬りかかる。

動きの鈍いハラルドを、難なく追い込んで行く。

元々、剣技は彼の方が得意なのだ。

あと一步踏み込んでハラルドに止めを刺そうとした時、それは突如起こった。

周りを包む黒い渦が爆風で吹き飛ばされたのだ。

ハラルドの姿は黒い渦と共に掻き消え、エランも飛ばされ意識を失った。

突然現れた光の爆風の中で、僕は身を屈め《聖なる泉》の魔力のおかげで、何とか意識を保っていた。

マルシオン王は強力な輝きを放ち、怒りを滲ませて叫ぶ。

「何を考えている、セルジン王！ この世を滅ぼすつもりか！」

僕達から遠い位置で、光に包まれたセルジン王が立っていた。

周りの臣下や近衛騎士達は、王を中心とした爆風に吹き飛ばされ、王から少し離れた先に円を描くように倒れていた。

王はやつれた表情で、マルシオン王と僕を呆然と見ている。

「……確かに、水晶玉は兵器だな。周りの人間を守るだけで手一杯だった」

僕は倒れたエランを助け起こそうとしたが、僕を覆う炎が彼にどう影響するのかを思うと躊躇ちゆうちゆうした。

「安心しろ、片方の魔力は私が抑えていた。この程度の被害なら、問題はない」

マルシオン王が顔を顰しかめながら、周りを見回して言った。

僕は吹き飛ばされた木々や、大地の荒廃ぶりに固唾かたずを飲む。

セルジン王が何をしたのか伺い知れないが、何かを試したのは確かだ。

「それで、何が掴めた？」

「アドランの意識は、魔界域の雁字搦めがんにがらの闇の中にある」

「助けようとしても無駄だ。我等に出来るのは、せいぜい水晶玉から切り放す事。それだけだ」

マルシオン王は厳しい顔で、国王に忠告する。

「一度異界に囚われた意識は、この世には戻れぬ」

僕には、彼の言いたい事がすぐに理解出来た。

ロレアーヌ妃は彼より、《聖なる泉》の楔石となる事を選んだのだ。

そうした事で黒い渦の流出を食い止めたが、《聖なる泉》の役目から、逃れる事が出来なかったのだ。

セルジン王は頷きながら、少し悲しい顔で言った。

「助け出したい訳ではない。たとえ今、水晶玉から切り離したとしても、魔界にあるアドランの意思は永遠に残る。それはいずれ、この世に再び現れると私には思える。今なら、滅ぼせないのか？」

「無理だな。そなたはまだ水晶玉の〈管理者〉ではない。今はせいぜい彼を水晶玉から切り放す事だけだ」

「……マール」

「マルシオンだ。セルジン王」

「……」

セルジン王は戸惑いながらも、古の王マルシオンを心に刻み込むように見詰めていた。

王が彼の存在に慣れるまで少し時間がかかりそうな事に、僕は同情を覚える。

彼の薬師マールに対する信頼は、僕の比ではなかったからだ。

王は僕に気付き、微笑む。

「新しい導しるべを手に入れたな。美しい炎だ」

そう言いながら、制御の腕輪を取り出した。

僕はその腕輪に恐怖を覚える。

マルシオン王の妻、ロレアーヌ妃が天界人の罠に落ちたのは、その腕輪のせいだ。

「姫君、天界の罠に堕ちたくなければ、嵌めるべきではない」

「マルシオン王、女神の意思に逆らえないんじゃないんですか？」

「私は妻を人質に捕られたようなものだ。そう仕向けたのは、他ならぬ女神！」

マルシオン王から憎しみにも似た感情が滲み出る。

長い年月を生きても人間らしさを失わないのは、ロレアーヌ妃がいるからではないかと僕には思えた。

セルジン王は制御の腕輪を見て訝いぶかしむ。

「この腕輪に何かあるのか？」

王は僕に触れようとしたが、〈祥華の炎〉に弾かれた。

僕は驚き炎を制御しようとしたが、どうしても出来ない。

このままでは、王と触れ合う事も出来ないのだ。

「セルジン、腕輪を下さい！」

「……」

王は躊躇しながらも、僕に腕輪を投げる。

腕輪は弾かれる事なく、僕の手にとまった。

なんとか竜騎士の腕甲を外し、腕輪を嵌める。

そうして僕を取り巻いていた炎は、姿を消した。

「セルジン！」

僕はセルジン王の、腕の中に飛び込む。

「愚かな姫君、後悔するぞ！」

マルシオン王は、そう言い残して背を向けた。

セルジン王は僕を抱きしめながら、立ち去ろうとする異質な存在に声をかける。

「マルシオン王！ 貴殿は誰の味方だ？」

「……誰の味方でもない。私は水晶玉の〈管理者〉。今は……、新たな〈管理者〉の誕生



を待ち望む」

そう言つてマルシオン王は振り返つた。

新たな水晶玉の〈管理者〉、即ちセルジン王の事だ。

二人は睨みあう。

僕を抱きしめる腕に力が入り、王が珍しく緊張しているのを感じた。

「セルジン……」

マルシオン王が立ち去り、王が腕の力を弛めた。

「私は本当に、水晶玉の〈管理者〉になるのだな」

青ざめた王の顔に、僕は手を添えた。

「どうぞ陛下の、ご意志のままに」

王は驚いたように僕を見つめ、そして激しくくちづけした。

水晶玉の魔力がぶつかり合ったせいで、《聖なる泉》の〈門番〉を取り巻いていた黒い渦は消えた。

〈門番〉は意思を失つた大きな騎士人形のように、ただ立ち尽くしている。

泉の門は僕のいる位置からは見えないが、《聖なる泉》の〈門番〉の後ろに存在してい

るのだろうか。

先ほどの王が放った何かで、《聖なる泉》は正常に戻ったのだろうか。

少なくとも泉の〈門番〉に、黒い渦は見えなくなった。

〈門番〉の鎧が、煌めく赤である事に、僕は驚きを感じる。

まるで僕がもらった導しるべに、呼応している。

「これでしばらく屍食鬼は近寄れない」

王は周りを見渡しながら、自分の張った魔法の障壁が完全に機能している事を確認し、《聖なる泉》を取り囲む歪んだ木々の森の向こうにある、切り立った断崖に立つトレヴダール城を見つめた。

屍食鬼が支配する薄暗い空を背に、その異様な廃墟の城は、国王軍を暗黒に引きずり込む迷宮の入口のように見える。

マルシオン王は先にあの廃墟へ行っただろうか。

女神が待つ山城へ。

先ほどから兵士達が、慌ただしく行軍の準備に取りかかっていた。

僕も行軍の用意をしようとしたが、王が歩み寄る。

「あの男が来る。気をつけるのだ」

僕はハツとした。

セルジン王の見ている方向をわざと見ない事にして、王太子である事を意識する。

青い目の竜騎士は、足早に歩み寄り、王の前で膝を折った。

「国王陛下、先程の衝撃の影響で負傷者が出ました。出来れば暫し、国王軍に滞在を願えないでしょうか？」

「負傷者が出たとあつては致し方ない。滞在は許可しよう。しかし、竜が我が国に留まる事は許さぬ」

テオフィルスは解っている素振りで頷き、セルジン王の意思に従う旨を伝えた。

竜が水晶玉の魔力の圏内に留まる危険は、彼もイリの変化を目の当たりにして実感していた。

「もとより、そのつもりです」

僕は彼が危険を承知しても留まる事に、戸惑いを感じた。

イリもこの危険な場所に留まるという事だ。

「僕は反対です！」

テオフィルスは冷たい青い目を僕に向ける。

「イリがアルマレークへ帰れない！ 君が連れて行くんだらう」

「動かせない、怪我人がある。それに視力を失い、死にかけている竜も」

「……」

「イリは、俺より君を選ぶ。何とか制御してくれ」  
僕は真つ青になった。

イリが留まるという事は、竜騎士の訓練をするという事だ。

王は僕の肩に手を置き、落ち着くように促した。

「今は戦時故、命の保証は出来ぬ。また、戦いは避けられぬし、客人としての扱いは出来ぬ」

「承知しております、国王陛下。私共は必ず国王軍のお役に立つ事を、約束致します」  
テオフィルスは毅然と王の前で宣言する。

これじゃあ、この男の行軍参加の望みを、叶える事になるじゃないか！

僕は慥然としながら彼を睨みつけ、その視線に気付き彼は口角を上げる。

僕の中で憤りが沸き起こる。

彼は王との仲を、完全に邪魔する存在でしかない。

王はその心を察したように声がけた。

「オーリン、アレイン大将を呼んで参れ」

「は……、はい！」

僕は戸惑いながら王の命令に従った。

人を呼びに行くのは、王太子の仕事ではない。

何か意図があつて、アレインの元へ向かわせるのだ。  
僕は竜騎士を見る事なく、王の側を後にした。

アレインの居場所は、同行する近衛騎士が教えてくれた。

「アルマレークの竜騎士が来たのですね」

大将アレインは僕が伝える前にそう告げ、僕は領き、不思議そうに彼を見る。

「陛下と事前に決めていたのです。アルマレークの竜騎士は、私が引き受けます。オリアンナ様は安心して王のお側にいらして下さい」

「……はい」

僕は微笑みながらも、どことなく釈然としなないものを感じる。

アレインが引き受けるという事は、彼等は最前戦に配備されるのが、決定している事になる。

父の国人を、そんな危険な場所へ配備していいのだろうか。

ふんつ、自分から好きで飛び込んで来たんだ。

心配なんてするものか！

そう思えば思う程、心の中で何か引掛かる。

アレインと共に王の元へ行くこうと歩き出した時、後方から兵達の大騒ぎする声が聞こえた。

振り返った僕は、地響きに気付く。

大きな何かが、こちらに駆けてくる。

近衛騎士達が警戒し剣を抜き、兵達がその前進をくい止めようとするが、勢いに負け慌てて飛び退く。

僕の前まで来たそれは、瞳孔を真ん丸にさせて可愛い金属的な声を上げた。

そして頭を地面まで下げ、服従の姿勢を取る。

かわいい……。

僕は溜息を吐いた。

これでは拒否出来ない。

「分かったよ、イリ。君の竜騎士は、僕なんだね」

僕は、頭を抱えた。

## 第十話 竜の葬列（一）

夜の帳とほりが下りた。

屍食鬼に覆われた荒廃した大地に、暗闇が訪れる。

エステラーン王国の国王軍は、戦闘で崩れた行軍体制を立て直し、死者を弔いの火で見送る。

王が祈りを唱えると、死者の炎の中から小さな光が無数現れ、上空の屍食鬼の暗黒を切り裂くように、シモルグ・アンカが夕陽色の美しい翼を羽ばたかせ姿を現し、死者の魂を導く。

渦を巻くように屍食鬼の空を突き破り、シモルグと共に天へ昇って行った。

僕はその光を、悲しい気持ちで見送る。

母を見送った時の事を、思い出したからだ。

やがて見送りの儀式が終わると、各々が持ち場へと引き上げて行く。

僕は王と共に天幕へと向かった。

途中、僕の装着している竜騎士の鎧と、似た物を装着している見知らぬ人物とすれ違  
う。

王の一行に礼を取りながらも、目は明らかに僕を見つめ何かを訴えていたが、気付かないふりをして通り過た。

王の目の前でアルマレーク人と接触を取る気にならない。

気になりながらも王の後姿を見つめ、アルマレーク人を心の中から追い出した。

僕は王と共に会議に出る事になっていたが、会議の場である王の天幕まで来た時、急に思い出し立ち止まる。

「どうした？」

「イリの様子を見てきても良いでしょうか？ 戦闘で傷付いてないか、確認してないの  
で」

「構わぬ、あれにはそなたしか近づけぬ。怪我が原因で暴れられても困るからな」

竜イリは僕の天幕の前で待機させてある。

僕は王から離れ、王は天幕へと姿を消した。

イリは昼と違って元気そうに、松明に近寄る大きな元は虫だった魔物を、素早く長い舌で捕らえていた。

竜は本来夜行性なのだ。



あれじゃ、お腹が膨れないだろうに。

イリって何を食べるんだろう？

僕は急に心配になった。

イリが勝手に僕を竜騎士に選んだが、僕は竜の事を何も知らない。

お腹を空かせて人間を食べたりしたら、大変な事になる。

「イリ！」

竜は僕に気づいて、翼を立てて可愛く駆けて来る。

同行した近衛騎士達がその迫力に、思わず剣を抜きそうになったのを僕は止めた。

彼等を後退させて、僕はイリに動かないように命じ、松明を持ちながら竜の周りを

回って、怪我の確認をする。

イリは僕の動きに合わせて、大きな目をクリクリ動かす。

下から見上げるところにも、お腹の下の方も異常はない。

上からも確認した方がいいのかな？

でも、一人で登れる？

以前、イリに乗った時はテオフィルスの指示通りに登った。

あの時は屍食鬼からレント領を守るために必死で、どう登ったかまるで覚えていない。

足場になりそうな鱗を探した。

機嫌の良いイリの身体は薄茶色をしている。

僕の記憶の中のイリは黒っぽい。

機嫌によつて身体が変色するのは、他の生き物で知っていたので驚かないが、ますます足場を判らなくさせていた。

よく見ると前足付近の足の鱗上部に、青い何かが付いている。

何だ…、汚れ？

他の箇所も、点々と青が付いている。

僕は思い出した。

そうだ、前足に足をかけて登ったんだ。

僕はイリの前足の、丁度青い汚れの付いた鱗に、右足をかけ体重を乗せた。

イリが補助するように、ゆっくり足を上げる。

すると左足のかけられる部分に、また青の印があつた。

僕は迷わず左足をかける。

誰が、これを付けたんだろう？

前から、付いていた？

僕の脳裏に、先程の見知らぬ竜騎士の姿が浮かんだ。

まさか、さっきの、あの男ひとが？

イリに近づける騎士がいるんなら、僕じゃなくてもいいじゃないか！  
これって、あの男の罨ひじゃないよね？

テオフィルスの皮肉っぽい青い目が浮かんだ。

軽い憤りを感じながらも、足は自然に印を求めて動く。

やがて騎乗用の鞍に辿り着いた時、イリが可愛い声を上げて僕に振り返る。

まるで乗れと言っているように見えた。

「違うよ、イリ。君に怪我がないか、点検しているんだ。動くなよ」

僕はそう言つて松明をイリの背に向け、怪我がないか確認する。

背せびれに掴まりながら、長い身体を移動するのは危険を伴い、僕は慎重に尾の辺りまで

移動し、背せびれを跨いで反対側も確認した。

特に怪我はない。

「良かった、大丈夫だね」

竜騎士の鞍に手をかけてホツとした時、足に何かが触っている事に気付く。

見るとイリの触手が、しっかりと僕の右足に絡みついている。

「イリ、勘違いするなよ。乗る訳じゃないんだ」

竜は僕に声掛けて、ゆっくり翼を広げた。

「えっ？　ちよつ……、イリ！　飛ぶな！」

僕は慌てて制止するも、竜は構わず翼をバタつかせる。

振り落とされそうになった僕は、たまらず鞍またがに跨る。

すると左足にも触手が絡みつく。

これでは身動きが出来ない。

「イリ、飛ぶんじゃない！」

どんなに命じてもイリは浮き上がり、僕は慌てて腰の安全帯を鞍に取り付け、肩甲から耳栓を取り出しはめ、鞍に掛けてあつた不思議な色合いの兜を被つた。

思い出せる範囲での安全策を取る。

竜に一人で乗るのは初めてで、僕の心臓は、危機感から激しく脈打つ。

鞍の前面にある取手にしがみ付いて、恐怖から自然に叫び声を上げた。

「飛ぶな——！」

一番驚いたのは、地上にいる僕の近衛騎士達だ。

点検だと聞いていたのに、飛ぶ事までは想定していなかった。

飛び立つ竜の羽ばたきに吹き飛ばされないように、体勢を保ちながら呆然と見送る。

「オーリン様！」

いつの間にか竜は、あらぬ方向へ姿を消した。

「これは……、不味い！」

青ざめた顔で近衛騎士達は、慌てて王の元へと走った。

イリは僕を乗せたまま、すぐに地上に下りる。

初めての単独飛行に、僕は鞍にしがみ付いたまま気を失っていた。

イリが心配そうに鳴いている。

誰かが肩を持ち上げ、激しく揺する。

「しつかりしろ、ヘタレ小竜！ このくらいで、気を失ってどうする！」

「う……、き、気分悪……」

罵声を浴びせた人物が、僕の兜を取り払い、耳栓を取って口に何かを当てた。

「これを口に入れろ！ 気分が悪さが吹き飛ぶ」

僕はおずおずと口を開けた。

口に何かが入れられ、爽やかだが苦みのあるそれに、僕は現実に引き戻された。

「う……、ぐつ、苦い！」

「ふ、どうだ、目が覚めただろう。さあ、降りろ！」

僕は口に入れた物……、小さな木の葉を吐き出した。

それを捨てながら、テオフィルスを睨みつける。

「どういう事だ？ 僕をまた誘拐すると、どうなるか分かっているのか？」

「イリが勝手に連れてきたんだ。俺達のせいにされても困る」

言い訳するように、イリが鳴いた。

テオフィルスは先に降りながら、僕に足をかける鱗の位置を指示する。

言われた通りの位置に足を置き、地上に降りた時には、腰が抜けたように座り込んだ。彼は呆れながら見下ろす。

「このくらいでへこたれるとは、情けない奴！ 立てよ、イリがお前を連れてきた意味を知りたくないのか？」

僕は疲れた顔で、嫌そうに彼を見上げる。

青い目の竜騎士は、僕の目線の位置まで身を屈め、とある一点を指差した。

松明の薄灯りに浮かび上がるのは黒い大きな影、竜が何かを取り囲み大きな円状に集まっている。

地上に降りる事の出来ない竜は、上空をゆっくり旋回し中心部へ近づこうとする。

その中心に横たわる竜の姿。

僕は墜落した竜がいた事を思い出した。

「あ……」

「竜の葬儀だ。お前も出席する義務がある」

「え、義務？」

意味が解らず、横にいるテオフィルスに問いかける。

彼は何もかも見通す青い目で、真実を突く。

「フィンゼル家の血を引く者は、レクーマの竜の子の死を、見送る義務がある！」

僕は驚愕し、彼から遠ざかろうとした。

彼は咄嗟に、僕の腕を掴む。

「放せっ！ 何を言っているのか、意味が解らない！」

「ふん、だつたらなぜ逃げようとする？ 死にかけているのは、イリと同じレクーマの竜

だ！」

「関係ない！」

テオフィルスは蔑んだ目で、怒りを露わにする。

「死にかけている竜の前で、そんな事が言えるのか？ 来いっ！」

彼は僕を無理やり立たせ引きずるように、横たわる竜に向けて歩き出す。

僕は恐怖を感じた。

見たくないものが、目の前に横たわっている。

見てしまったら引き返せない状態になるのが解るから、必死に抵抗する。

「嫌だ！ 放せ、見たくない！ そんなもの、見せるな！」

テオフィルスは容赦なく引きずり、暴れる僕を抱え込んで進む。

抵抗が激しいため、彼は勢い余って横たわる竜の前に、僕を放り出す。

地面に腹ばいになる体勢で僕は、目の前に弱い熱を放って息も絶え絶えになっている物体に、否応なく意識を向ける羽目になった。

顔を上げた僕の前に、両目から赤い血を流す竜の顔があつた。

僕は恐怖に、叫び声を上げて起き上がる。

死にかけている竜は僕の叫び声に気付き、ゆっくり頭を持ち上げようとする。

少し持ち上がった頭は、すぐに力尽きて地面に落ちる。

僕は自分の身体が、震えている事に気付いた。

弱った竜の熱は徐々に下がっていく。

微かに金属的な声が聞こえる。

誰かに向けて、呼びかけている。

「オーリン、その竜の名は、カイリだ！ 呼んでやれ」

テオフィルスの大声が、遠くに聞こえた。

僕は魅入られたように、死にかけて竜の声に意識を集中させていた。

金属的な声が徐々に消えようとしている。



震える手を、傷付いた竜の目蓋に置いた。

「竜がピクリと反応を返す。」

甘える声で、竜が鳴いた。

僕の心に、その声の流れ込んでくる。

《……お母さん……ん……》

その声は明確なイメージを、僕の中に送り込んでくる。

銀色の美しい竜の身体に、大きな透き通る翼。

優しい金色の目は、僕を理知的に見つめる。

僕の瞳から、自然に涙が流れ落ちた。

その竜こそが、七竜レクーマ。

僕が受け継ぐ七竜レクーマである事を、自然と認識出来た。

会いたい……。

その想いが死にかけている竜の意識なのか、僕の意識なのか、どうでもよい事だった。僕は死にかけている竜を抱きしめ、その頭に身を預ける。

「ごめんね、カイリ。会いたいよね、お母さんに……。レクーマに会いたい……。」

竜カイリは甘えるような声を発した後、息絶えた。

他の竜達が、悲しみの声を上げる。

上空の竜が列を成し、カイリを中心に円を描き、悲しみに鳴く。

その声を聞きながら、僕は涙を止める事が出来なかった。

## 第十話 竜の葬列（二）

竜達の悲しげな声が止んだ時、死を迎えたばかりの竜カイリが急速に冷たくなるのを僕は感じた。

竜の体内で沸き出す炎が、完全に消えてしまったのだ。

ただの物体と化した竜の屍しかばねに、松明の灯りがゆらゆらと揺らめき、暗い夜の中、視覚だけでは死んでいるようには見えない。

生きているみたいだ。

そう思うと、悲しみが増した。

「そろそろ、カイリを送ろう」

「……」

後ろにいるテオフィルスが、死んだ竜から離れようとしないう僕を即した。意図的に彼を見ないようにする。

竜カイリがどんな影響を僕に与えたのか、知られたくない。

七竜レクターマの銀色の姿が、心に焼き付いて離れず、カイリの意識が消えてしまった今も、僕の心の中で竜の意識が息づいている。

会いたい、七竜レクーマに……。

それが完全に僕の意思である事に、戸惑いを覚える。

心の中の渴望に気付かずにはいたのは、セルジン王が心を満たしていたからだろうか。気付いてしまった今は、もう後戻り出来ない。

「七竜レクーマは銀色をしているのか？」

「……今は銀色じゃない。死にかけて黒い。竜の指輪が戻らない限り、レクーマは元の銀色には戻れないだろう」

死にかけている！

その言葉に、目の前で死んだカイリと七竜レクーマが重なった。

僕の胸が剣で切り付けられたように、激しい痛みを覚えた。

「……竜の指輪が戻れば、死なずに済むのか？」

テオフィルスは僕に近づいた。

「そうだ！」

彼は僕の腕を取り、無理やり振り向かせる。

涙を流す僕に、嘲るように言い放つ。

「泣いている場合か、ヘタレ小竜。しっかりしろっ！ 竜の指輪はブライデインの《聖なる泉》にあるんじゃないのか？ 知っているだろう？」

乱暴な彼に憤りを感じながら、印象的な青い目を睨みつける。

その瞬間、彼の存在の大きさに気が付き圧倒された。

テオフィルス・ルーザ・アルレイド

彼は全ての竜を従える「七竜の王」として異彩を放っている事を、僕はたった今日の当たりにしたのだ。

そして僕の婚約者である事も……。

心が否応なく彼に惹きつけられている事に気付き、心の片隅から反抗心がメラメラと沸き起こる。

僕は、彼の手を振り払う。

「知らない！ 知っていたとしても、君には言わない！」

テオフィルスは無表情でありながら、口角を上げて笑う。

その青い瞳は、優しく僕を捕えていた。

「やはり、知っているんだな」

僕の心臓が跳ね上がった。

彼の魅惑的な波動は、強烈に僕を絡め取ろうとする。

彼の手が逃れようとする僕の手を捕え、彼の口元まで誘う。

籠手越しのくちづけに、僕は真っ赤になりながら首を振って抵抗した。

求める彼は、僕を抱き寄せる。

そして嬉しそうに微笑む。

「安心しろ、無理強いはしない。いずれお前から話す事を、俺は待つ。そのくらいの余裕はあるさ」

彼の腕の中で、僕の激しい鼓動は治まらない。

抵抗できない事に心の片隅が抗議を發したが、すぐに喜びの波にかき消される。

信じられない程の歓喜が、僕を支配していたのだ。

一対の竜がようやく巡り合えたように、お互いを求めている。

父の言葉を思い出した。

《七竜の定めた一対は、運命そのものだ。君達は国を越えて、結ばれる。私は君を、セルジン王に渡す気はない》

逆らえない事に絶望感を感じながら、それすらも甘味な要因になった。

僕はテオフィルスを見上げる。

彼は優しく僕を放し、左手に嵌る七竜の指輪はまを見せた。

「リンクルの指輪にお前の意志で手を添える。カイリを送る」

僕は言われた通り、恐る恐るゆっくり、リンクルの指輪に手を添える。

指輪は熱く息づいている。

「リンクル、出でよー！」

指輪から、何かが躍り出る。

驚きに手を離しそうになった時、彼の右手が僕の手を抑えた。

「まだだ、恐れるな。リンクルは今のお前を、敵とは見なさない」

「え？」

テオフィルスは夢見るように、僕を見つめる。

「お前の中に、七竜を感じる」

「な、何を……」

狼狽える僕を安心させるように彼は微笑み、視線を上空に現れたリンクルに移した。

「どの竜とは、今は言わない。お前の立場を守るために……」

全てを理解している彼の口ぶりに、僕は呆然と彼を見つめる。

何度か聞いた言葉だ、僕の立場を守るって。

全部知ったうえで、黙っていると……。

握られた手はしっかりと僕を捕えていた。

反抗心は感じない、むしろ安心感が湧き起る。

信頼していいのか？

この男ひとの事を……。

テオフィルスは視線を下ろし、少し照れたような表情を見せた。僕の中に、彼への信頼感が自然に生まれる。

「さあ、リンクルに願え。本来はレクーマがやるべき葬礼だ。願いながらリンクルに唱えるんだ。「カイリを、天に還せ!」

「……」

僕はリンクルを見上げた。

七竜の影は暗黒の空に、薄ら光を放っている。

それが本当の光なのか、僕が七竜レクーマの意識と共鳴しているから、そう見えるのか解らない。

「リンクル、お願いだ。……カイリを、天に還せ!」

七竜リンクルは翼をゆっくり羽ばたかせながら、じっと僕を見ている。

その目に敵意はない。

僕を見ながら、悲しみの声を上げた。

するとカイリを取り囲む他の竜達が、呼応するように再び声を上げる。

テオフィルスは僕を竜の輪の外へと導く。

次の瞬間、上空のリンクルがカイリに向けて炎を吐いた。

カイリに炎が触れた途端、竜の軀むくろは消え失せた。



あまりの突然の消失に僕は悲しむ暇もなく、ただ茫然とカイリのいたはずの地面を見ていた。

竜達が鳴き止み、静寂が暗闇と共に訪れた。

葬礼が終わったのだ。

がつくり項垂れる僕に、テオフィルスはただ黙って寄り添う。

七竜リンクルの影が、僕の横に舞い降りた。

他の竜達が平伏す中、僕は項垂れながらもリンクルを労い竜の足を叩く。

「ありがとう、リンクル」

七竜リンクルは何か言いたげに、じつと僕を見つめている。

僕はセルジン王がリンクルの影と話をした事を思い出した。

「レクーマの指輪を、見つけ出せばいいんだね」

リンクルは少し凶暴な目をして、敵意を剥き出しにする。

『へありえざる者』よ、邪魔をするな！』

僕は恐怖を感じ、リンクルから飛び退いた。

テオフィルスには今のリンクルの声は聞こえなかった。

僕の様子に驚き、慌てて竜の指輪を突き出す。

「戻れ！ リンクル」

七竜リンクルは瞬時に指輪の中へ消えた。

テオフィルスは僕の肩に手を置き、青ざめた顔を覗き込む。

「大丈夫か？ 何か言われたのか？」

僕は首を振りながら混乱した。

〈へありえざる者〉——それは僕の命の光をなつた、オーリン・トゥール・ブライディン。

メイダールの大学図書館で僕の前に現れて以来、まったく姿も意思も見せなくなつた。

七竜リンクルはそのオーリンに向つて、邪魔をするなど警告したのだ。

オーリンが僕にどう影響を与えるのか、不安で周りが見えなくなる。

そんな僕を安心させようと、テオフィルスは軽く僕を抱きしめた。

「約束しただろう？ 俺はお前に協力するって、何かあつたら隠さず行つてくれ、お前のためなら何でもする」

竜の指輪の約束を思い出し、僕はハツとして彼の腕から飛び退く。

《俺達は手を組む。お前はオリアンナ姫を捜し、俺はお前に協力する》

僕がオリアンナ姫を捜すというのは、彼に僕の口から回答として、「オリアンナは僕だ」と告げる事ではないのか。

それがとんでもない約束である事に、今頃気が付いた。

あの時はレント城塞に屍食鬼が迫っていて、深く考える余裕を欠いていた。

「気安く、触るな！」

僕はまるで七竜の呪縛から解放されたように、王太子としての僕に戻っていた。

混乱のあまり、敵意を持って彼を睨みつける。

その変貌ぶりに、テオフィルスは眉根を寄せた。

「お前……」

「僕に近づくな！ 無用な争いを起こしたくなければ！」

僕はテオフィルスの後ろに、灯る松明に気が付いた。

竜の葬儀を囲む灯りは、大勢の兵士達を照らしている。

彼等は矢を弓に番え、今にも解き放ちそうだ。

狙うのは竜とアルマレーク人。

セルジン王がその列の中から進み出た。

明確な怒りを宿した彼の緑の瞳は、一体何時から僕達を映していたのか、僕の背から

冷や汗が流れ出た。

僕はセルジン王に走り寄り、その腕の中に飛び込む。

「セルジン！」

王は僕を抱きしめ、彼の長いマントに隠し覆った。

王のマントに包まれながら、次に起こる事柄に、僕は恐怖を覚える。

「アルマレーク人を捕えよ！ 抵抗する者は、討つて構わぬ！」

王の冷たい命令の直後、多くの兵が動く騒音が聞こえた。

僕は苦しみのあまり、耳を塞ぐ。

悪いのはアルマレーク人ではない、僕はただイリの意味で運ばれただけだ。

それを解つていながら、王を止める事が出来ない。

彼の怒りを鎮めるためには、こうするしかないのだ。

捕えられ苦しむテオフィルスの姿が心に浮かび、僕の胸を傷つけた。

絶望感にただ王に縋すがる事しか、今の僕には出来なかった。

## 第十一話 王の怒り

寧猛な竜達の怒声が、トレヴダールに響き渡る。

竜達の慕う竜騎士達が引き倒され捕らえられていくのだ。

その乱暴振りに憤る。

それを制したのは、七竜リンクルの影だ。

テオフィルスが国王軍に捕えられる直前に、リンクルの影を呼び出し命じた。

「竜を抑えろ」

国王軍に逆らわない事は、事前に竜騎士達に知らせてあった。

誇り高い竜騎士達は屈辱に耐えながら、地に倒され無抵抗なまま捕らえられ縛り上げられてゆく。

それはテオフィルスも同様で、地に倒れ後ろ手に縛られた後、七竜に命じる事が出来ないように猿轡さるくつわを咬まされた。

その状態で今度は引きずられるように起こされ、王の天幕までバランスの悪い状態で歩かされる。

竜達は竜騎士の後を追おうとしたが、リンクルがその場を離れる事を許さなかった。

僕は王に抱き抱えられ、足早に王の歩調に合わせて歩いた。

王が怒っているのは確かだ。

僕とテオフィルスのやり取りをどう受け止めたのか、恐怖を感じながら僕は王を見ていた。

やがて王は歩調を緩める。

「すまなかつた。そなたに氣遣わすに歩いたな」

僕は少しホツとした。

王が冷静さを取り戻したのが分かったからだ。

「僕の方こそ、申し訳ありません。うかつにイリに乗ってしまつて……、あんな風に飛び立つなんて思わなかつたんです」

「……彼等の策略だろう。そなたを拐さうつもりだったのだ」

「それは……、多分違ちがうと思います」

王はゆっくり歩きながら、僕を見つめた。

「どう違ちがうのだ？」

「イリは僕を死にかけた竜の元に運びました。多分、僕に最期を看取らせるために」

「なぜ、そなたに看取らせる？ そんな必要はない！」

「死んだのは、レクーマの竜だからです」

「レクーマの竜だから、何だと言うのだ？ そなたに何の関係がある？」

僕は戸惑った。

死に逝くカイリの七竜レクーマへの思慕が、僕の中の眠っていた意識を呼び覚ました。

カイリは最期に甘える声を上げた。

あれは母親に甘える子の声。

僕の中に七竜レクーマの意志を感じて、発せられた声だろう。

おそらく僕は、七竜レクーマの替わりに呼ばれた。

でも、こんな不確定な推測を王に説明して、解ってもらえる？

「僕は多分、七竜レクーマの替わりです」

王は意味が解らないと言うように、僕を睨む。

「そなたはそれを受け止めたのか？」

「……僕は、判りません。ただ竜が甘える声を上げて死んだんです」

僕の目から再び涙が流れた。

王は苛立ちを覚え、僕の両肩を掴み、顔を近付けた。

「死んだものへの憐憫れんぴんに引きずられているだけだ。しつかりするのだ！ アルマレーク人に付け入られるぞ！」

もう付け入られたのかもしれない。

カイリのレクーママへの思慕に触れてしまった段階で……。

戸惑う僕に、王は探るように問い質す。

「あの男と、何かあつたのか？」

僕はハツとして王を見た。

「あつたのだな？」

「何もありません！ でも僕は……、彼は信用出来る存在だと思います」

「……そなたは、惑わされている」

セルジン王が冷静に、僕を分析した。

「違います、聞いて下さい！ 七竜リンクルが僕の事を、へありえざる者へありえざる者」  
「……そなたの中に、オーリンを見ているという事か？」  
「そうです」

「何？」

「『へありえざる者』よ、邪魔をするな！』って、僕に言ったんです！」

「……そなたの中に、オーリンを見ているという事か？」

「そうです」



王は考え込むように、七竜リンクルのいる方角を見る。

「七竜はそなたを、敵と見なしているという事だな」

「多分……、だからテオフィルスも僕がオリアンナである事に気づいてないと思います」

半分真実であり、半分嘘だ。

真実を見抜く王にどこまで通用するのか、僕は気付かれないように、嘘の部分に意識を向けない事にした。

王は溜め息を吐いて、僕から離れる。

「そなたが言うのなら、そうであろう」

「……」

「だか、あの男は信用出来ない。なぜ彼を庇う？ そなた……、好いているのではあるまい？」

僕は青ざめ、首を横に振った。

「違います！」

「そなたは我が妃になる身、うかつな真似は絶対に許さぬ！」

「セルジン！」

王の怒りは止められない。

自分の対応の失敗を呪い、この先テオフィルスに降りかかる禍わざわいを案じた。

「暫くそなたが天幕から出る事を禁じる！」

「陛下！」

王に近付こうとする僕を、王の近衛騎士達が取り抑える。

トキ・メリマンが僕の前に進み出る。

「エステテラン王国の王太子であられる事を、もう少し自覚するべきだ、姫君」

トキは鞆から小さい何かを取り出し、僕の前で潰す。

「失礼！」

細かい粒子の液体が僕の前に飛び散り、それを吸い込んだ途端、意識を失った。急激に失われる意識の中で、トキの言葉に疑問を感じる。

王太子？

僕は……、王の妃になる……んじゃ…… な……。

抱き抱え天幕まで運ばれるオリアンナを、王は冷たい目で見ている。そしてもう一人、彼女を見守るエランがいた。

王の天幕は国王軍の野營の中心に位置する。

広い王の天幕の周りを側近達の天幕が囲む中に、開放された場所がある。

国王軍の各指揮官たちが集まる場所だ。

そこにテオフィルスを含む、捕らえられたアルマレークの竜騎士達が集められた。

彼等の周りを兵士達が取り囲む。

猿轡を嵌められたテオフィルスの側にマシーナが近寄ろうとするが、兵士に咎められる。

苦しい姿勢を強要され命の危険に晒されている彼等は、それでも「七竜の王」の命令を徹底して守り、いっさい抵抗はしていない。

王が天幕から姿を現した。

優美な若き王の姿は、一見ただけでは優しげに見える。

だが彼から滲み出る壮絶なまでの魔力が、強者揃いの竜騎士達に恐怖感を抱かせた。

俺達はいつたい、誰を怒らせた？

初めて王の姿を見た者が大半の状況で、当然の反応を示す。

王は無表情に彼等を見て微笑んだ。

「我が国の王太子が、竜によって連れ去られた。貴殿の意図を聞きたい」

王はトキに頷く。

「首謀者の猿轡を解け！」

兵士がテオフィルスの猿轡を解く。

苦しい状態から解放され、彼は大きく息を吸い、そして吐いた。

「連れ去る意図はありません。竜イリが勝手に取った行動です」

テオフィルスはしらを切る。

本当はオリアンナがイリに乗るように、目印を付ける指示を出した。

七竜レクーマの子カイリを心安らかに送るためには、どうしてもオリアンナが必要だった。

同じレクーマの竜イリが彼女に懐き心の拠り所にしたように、死にかけてカイリにも心の安らぎを与える領主家の人間が必要だったからだ。

七竜の代理を務めるのが、七領主家の当主とその一族の役目。

カイリと接した事で彼女の心の中に、レクーマの魂が宿ったはずだ。

誰よりもその事を感じ取れたのは、テオフィルス自身。

七竜の定めた婚約者の目覚めを、彼は歓喜を持って受け止めた。

「では、そのような危険な竜を、王太子の側に置く事は出来ぬ。国へ連れ帰るか、処分してもらおう」

「……イリは王太子殿の竜です。私の一存で、それは出来ません」

「彼は今、眠らせてある。私の意志には、逆らえぬ」

テオフィルスは驚き、まるで不快な者を見るように王を睨んだ。

「オーリンの中に流れるわずかな異国人の血を、我らは受け入れている。だが貴殿達はどうなのだ？ 彼がエステラーン王国を担う大事な存在である事を、貴殿達はどうか心でている？」

「……」

「彼はエステラーン王国の、《王族》であるぞ！」

王の怒りがテオフィルスを叩きのめすように発せられ、強力な魔力が彼を絡め取る。息の詰まるような苦痛に、彼は前のめりに倒れた。

「若君！」

マシーナの叫びと他の竜騎士達の声が、気の遠くなるような苦痛の中で遠く聞こえる。

意識を失う事が出来ない状態で、無限とも思える苦痛が彼を責苛む。

声を上げる事も出来ず、硬直した身体では痛みを逃す事も出来ない。

苦痛の中で思い浮かべるのは、七竜リンクルの姿でも仲間の竜騎士の姿でもない。

思い浮かんだのは、オリアンナ姫の姿だ。

戸惑いがちに彼を見つめる灰色の瞳、愛のハンカチを手渡した時の真っ赤に驚いた表

情、そして初めてイリと心を通わせた時の嬉しそうな微笑み。

それらが彼の苦痛を和らげた。

「止めて下さい、国王陛下！ 彼は我が国にとって、最も重要な立場にあるお方です。どうか両国のために……、どうかお許しを、国王陛下！」

テオフィルスの元に駆け付けようとする竜騎士達は、兵士達の剣によつて動きを阻まれた。

マシーナの必死の訴えも、怒りに吞まれた王には届かない。

テオフィルスが痙攣を起こし身体が震え始めた時、大地を揺るがすような大音響が全てを呑み込んだ。

七竜リンクルの咆哮だ。

騎士達も兵士達も、耳を押さえ注意を削がれる。

咆哮に慣れている竜騎士達は、隙を突いて縛られた状態のままテオフィルスの元に駆け付け、まるで王の魔力の盾になるように彼を守る。

セルジン王は目が覚めたように、テオフィルスへの攻撃を止め、空を見上げる。

七竜リンクルの姿は、どこにもない。

「……〈へありえざる者〉よ、邪魔をするな！」

王は七竜リンクルが、オリアンナに向けて言った言葉を思い出し、それを呟く。

自分がへありえざる者へオーリンの罠にはまっているかもしれない可能性を、リンクルに指摘された気がした。

竜騎士達が必死になって守っているテオフィルスは、魔力の攻撃が解けた事で意識を失っていた。

「薬師を呼べ、彼の手当てを……。正気に戻れば良いがな」

王は立ち去ろうとした。

トキが、竜の咆哮でおかしくなりかけている耳を押さえながら呼び止める。

「お待ちください、国王陛下。彼等の処遇は如何致しますか？」

王は振り返り、疲れたようにテオフィルスを見る。

「竜と竜騎士の即時退去を命じる。動けぬ者は我等に任せ、全員即時退去。意見は聞かぬ」

王はマントを翻し、自身の天幕の中へと消えた。

トキは部下に薬師を呼ぶ指示を出し、他の竜騎士達に即時退去を命じる。

マシーナはテオフィルスと残る事を希望したが、意見は聞き入れられなかった。

セルジン王は天幕に入り、頭を押さえる。

〈ありえざる者〉オーリンの罨に掛かっているとすれば、オリアンナが存在自体が罨と  
いう事になる。

混乱する意識の中で、必死に冷静になろうとした。

「国王陛下、大丈夫ですか？」

天幕に呼び寄せておいたアレイン・グレンフィードが、心配し王に近寄って来る。

セルジン王は暗い表情で、彼に呟いた。

「〈七竜の王〉を、殺せ」



## 第十二話 魔力の流れ

セルジン王の天幕の中でアレインは、一人冷静に王に近づき静かに進言した。

〈七竜の王〉を殺せと王が命じたからだ。

「それは……、我が国での彼の死は、無用な争いを招きませんか？ 彼の部下達が、そう報告しますよ」

「我が国は戦時故、その心配はいらぬ。あの男は承知の上で入り込んだ、屍食鬼に喰われれば何の証拠も残らぬ」

「七竜リンクルが黙っていないのでは？」

「彼の意識が無いうちは、リンクルの影は現れぬ。レント領の戦いで、彼の父がそう申したいと聞いた。殺るなら、他の竜騎士達が去った直後が好機だ。その後、屍食鬼に喰らわせる」

「なるほど、承知致しました。ですが七竜リンクルは、陛下に心を開いています。信頼を裏切る事になるのでは？」

「構わぬ、王国を守るためだ。異国の婚約者は、必要ない」

冷酷な王の瞳に、武将アレインは頷き微笑みかけた。

オリアンナが意識を失った時、エランはモラスの騎士の一員としてセルジン王の近くにいた。

トキが彼女の顔の前で潰したのは、眠りの果実と呼ばれるスイの実で、二日間は眠り続ける。

スイの実には副作用があつて、目覚めた後しばらく気分の悪さが続く。

解毒剤が必要だな。

薬師の誰かに頼むか。

エランはそう思いながらも、自分の考えに呆れた。

王様が心配するだろう？

僕がやらなくても……。

彼女の世話が出来ない事に不満を覚えながら、天幕まで運ばれていくのを見送った。彼女は厳重な監視下に置かれるだろう、面会を申し出てもきつと許可は下りない。

オリアンナ姫はセルジン王の婚約者なのだから。

王が指示を出すために側近達を集め天幕へ入り、しばらくした後アルマレーク人達が広場へと引き立てられて来る。

テオフィルスは猿轡さるくつわを噛かまされ惨めな扱いを受けながらも、いたって冷静に現状を受け止めている風に見えた。

エランには、それが気に入らない。

オリアンナが竜に拐われた知らせを受け、王と共に竜の集まる場所に辿り着いた時、抱き合う彼女とテオフィルスの姿を見た。

抵抗している様子はなく、それが不可解で不愉快だった。

彼に対する憤りは、例えようもなく膨れ上がる。

それは自尊心の強い王も同じ……、いやエラン以上に激しいものだろう。

王の怒りが彼女に向く事を、エランは恐れた。だから余計に、テオフィルスが許せない。

王が天幕から現れ彼を裁き始めた時、テオフィルスが苦しむ姿を見ながら、エランは残酷な気持ちになった。

このまま、死んでしまえばいい！

オリアンナに異国の婚約者なんかいららない！

心の奥底から沸き起こる、どす黒い感情がエランを支配した、王の魔力と同調し、まるで自分がテオフィルスに苦痛を与えているように。

苦しめ！

苦しめ、苦しめ……。

遮断したのは、可愛らしい声だ。

「エラン、ダメよー！」

冷静なその声は清らかな鐘の音のように、エランの頭の中に響き渡る。

モラスの騎士の総隊長ルディーナ・モラスの声だ。

いつの間にか彼の後ろにいたルディーナは、まるで何かから彼を守るように魔力を放っている。

それは王の放つ魔力とは、まるで対照的なものだ。

「総隊長……」

自分のかけた呪縛から解き放たれ、エランの意識は現実に戻る。

今の状況に似つかわしくない程の可愛い笑顔を振りまきながら、その口から出る言葉は冷静そのものだ。

「あなたはオリアンナ姫を守りたいのでしよう？　だったら、暗い感情に吞まれてはいけないわ。彼は敵じゃない。王も、いざれ解る」

「敵じゃない？　オリアンナを連れ去るかもしれないのに？」

「姫君は本来アルマレーク人じゃなくて？　私には七竜の魔力を感じる。七竜が、姫君を守り始めているわ」

「え？」

エランはオリアンナの天幕を見たが、何も見えず感じ取る事も出来ない。

ルディーナの目は何を見て、何を感じ取っているのだろうか。

彼女には全ての魔力の流れが、見えているのではないか。

自分はルディーナの後を継ぐ存在と見なされているが、遠く及ばないのではないのか。

ルディーナのように物事の大局を把握する事が出来ない自分を、エランは恥じた。

そして王の魔力による攻撃に、苦しむテオフィルスを見る。

彼には七竜リンクルが守りについてはいるはずだ。

なぜ、竜を呼ばない？

レント領で七竜リンクルがテオフィルスを守るために、強烈な魔力を吐いた事を思い出した。

なぜ、反撃しない？

セルジン王と争う気がないのか？

テオフィルスの身体が痙攣を起こし始めた時、竜の大咆哮が王に抗議するように響き渡った。

エランは耳を塞いだ。

そして気が付いたのだ、争いの原因が、竜イリにある事に。

あの竜がオリアンナに付きまとわなければ、アルマレーク人がエステラーン王国に来る事もない。

彼女とテオフィルスが近づく事もない。

あの竜を遠ざけるには、どうしたらいい？

王が毒気を抜かれたように攻撃を止め、テオフィルスは意識を失った。

彼を守るために、竜騎士達が駆け寄る。

竜イリを追い出す方法を、彼等は知っているはずだ。

アルマレーク人に、聞けばいい。

エランは即座に行動した。

七竜リンクルの影が消えた、テオフィルスが意識を失ったせいだ。

竜達の動きを見張る国王軍の兵士達は、竜達を仕切っていた存在が突然消えた事に、戸惑いと恐怖を感じる。

「おい、ヤバいんじゃないか？ この状況……」

兵達は身の危険を感じて、じりじりと後退する。

竜達はその場を動きはしなかったものの、怒りの矛先を探すように長い首を荒々しく振り、足を踏み鳴らす。

自分達の大事な竜騎士が危険な状態にあるのに、その場を動かなくと七竜リンクルに命令されているからだ。

一頭だけ大きく翼をバタつかせ、今にも飛び立とうとしている竜がいた。

他の竜より幾分小柄な竜イリだ。

先程からオリアンナの意識が感じられず、イリは彼女会いたさに飛び立とうとするが、七竜の命令には逆らえない。

思い留まり翼をたたみ、不満に足踏みして、周りの枯れ木に火を吐いた。

たちまち枯れ木が燃え上がる。

「風がある、燃え広がるぞ！ 火を消さないと……」

「本隊に伝令だ！ 消火隊を、早く！」

兵士達は火に巻き込まれないように後退し、竜が暴れ火災が起きている事を、本隊へ報告するべく早馬で伝令を送った。

竜達のいる方角から炎が上がっているのを、竜騎士マシーナが気づいた。

意識を失ったテオフィルスから引き離され、強制的に竜のいる方向へ歩かされている時の事だ。

竜騎士達は全員後ろ手に嚴重に縛られ、兵達から逃れるには余程の好機がないと不可能に思える。

七竜リンクルの影が消えたせいだ。

竜のどれかが火を吐いた、これはチャンスだ！

人質のようにへ七竜の王へテオフィルスをセルジン王に奪われ、竜騎士達は全員強制退去を命じられた。

今、エステラーン王国を離れば、テオフィルスは二度もオーリン王太子を誘拐した罪で、どんな目に遭うか判らない。

アルマレーク共和国に再度莫大な身代金を要求するか、最悪の場合あの狭量なセルジン王に、殺される可能性がある。

若君を、殺されてなるものか！

道沿いに松明が掲げられ暗闇でも人々の行き来が分かる中、前方から襲歩しゅうほで駆けつける馬の足音が聞こえた。

兵達は道を空けるために、二手に分かれる。

マシーナは近くにいる竜騎士達と目を見合わせ頷く。



同行した竜騎士達の大半が、リンクルクランで鍛え上げた強者だ。

今の状況でテオフィルス救出が最優先される事は、伝えなくても判る。

早馬が駆け抜けた瞬間、マシーナは近くの兵士に体当たりし、倒れた兵士の顔面を足で容赦なく蹴りつけ一撃で意識を失わせた。

他の兵達が戦斧で切付けて来たが、素早い身のこなしでかわし相手を足払いして倒し、他の竜騎士の餌食とさせた。

その戦斧を取り上げ、仲間の縄を切り自分も剣が使える状態になった。

兵達の武器を取り上げ、仲間の救出に向かう。

「誰も殺すな」というテオフィルスの指示は、竜騎士全員に徹底して守られた。

兵達に死者は出ていない。

意識を失った兵士達を全員縛り上げ、猿轡を咬ませ道から外れた暗闇に放置する。

竜騎士の護送にあたった兵士達は、竜騎士達の戦闘能力を甘く見ていたのだ。

ずば抜けた運動神経と戦闘能力の高さが無いと、竜騎士にはなれない。

その頂点を極めているのが、精鋭マシーナ・ルーザだ。

「第二隊、第三隊は起点まで戻り、国王軍を引き付けろ。第一隊は若君の救出に当たる。各々、遂行！」

彼の命令に竜騎士達は道を外れ、松明の届かない暗い森の中に消えた。

第二隊と第三隊は竜の待機する起点へ、そしてマシーナ直属の部下である第一隊は、暗闇に紛れ来た道沿いにテオフィルス救出へと戻った。

モラスの騎士達の守る対象であるオリアンナが、意識を失い身動き取れない状況で天幕の中にいる。

彼等の任務は、その天幕を守る障壁を張る事だ。

新人であるエランは、近くの騎士に嘘の理由を言つて、さり気なくその任務から離脱した。

先程、立ち枯れた森の片隅に、目立たないように着替えの服を置いてきた。

モラスの騎士の赤い制服では、あまりにも目立ちすぎる。

着替えるために森に分け入ろうとした時、ルディーナの声が彼の足を止めた。

「うまく立ち回るのよ」

エランはギョツとして、振り返る。

彼女の可愛らしく笑った顔が、全てを見透かすように彼に向けられていた。

緊張に心臓は鼓動を早め、こみ上げる唾を、音を立てて飲んだ。

「あなたは私の後を継ぐ者よ、忘れないで」

「……はい」

ルディーナの真意が掴めないまま、エランは答えた。

魔力の流れは、今どこを向いているのだろうか。

大局の見えない自分の行動を、モラスの騎士総隊長は許すと言っているのだろうか。

「行きなさい、姫君を取り戻すのよ」

エランは一瞬、頬を染めた。

彼女に嘘は通じない。

彼は頷き、踵を返した。

オリアンナを取り戻すために……。

## 第十三話 幻惑の罨

暗く木々の立ち枯れた森の中を、エランは進んだ。

遠くに松明に照らされた、兵士達が多くいる道が見える。

そこを慌ただしく、早馬が通り過ぎて行く。

何か、あつたのか？

気になりながらも道を目印に、アルマレーク人達が連れて行かれた、竜達のいる場所へ足を進める。

踏み抜いた枯れ枝が折れる音がしても、この場所なら兵士達に気づかれる事はない。

森の木々は皆枯れている。

屍食鬼がエステラーン王国の上空を埋め尽くして、十五年が経つのであるから当然の事なのだ。

それでも込み入った枯れ枝は、エランを傷つけ服を裂いた。

あつ、ローランドに怒られる。

立ち止まって服の避けた箇所を確認した。

自分についていた掠り傷かすより、服が避けた事の方が気になる。

服にうるさいエランの随行者、ローランドの怒った顔が思い浮かぶ。後でこつそり縫ってしまおう。

そんな時間があるか、分からないけど。

暗闇の中で苦笑いした。

暗がりを歩くのは危険なので、もう少し道に近づこうと思った矢先、自分の近くに人の気配があった。

次の瞬間、彼は口を塞がれ、強い腕力を持つ人物に羽交い絞めにされた。

こんな時のために習った防衛魔法を、エランは実践する。

身体から微かな光が浮き出る。

羽交い絞めにして彼の口を押えていた大人の男が、魔法で弾き飛ばされた。

「なんだ？ この男、おかしな術を使うぞ、気をつけろ！」

警告はアルマレーク語で発せられた。

とっさにエランは、魔法の光を解く。

「僕は……、敵じゃない」

エランは片言のアルマレーク語で答えた。

《王族》のオリアンナのように、家庭教師に習った訳ではない。

レント領主ハルビンは、オリアンナを極力エランから引き離そうとしたために、彼

は他の子供達と共に学んだ。

家庭教師が少ないせいもある。

だからアルマレーク語は独学で、彼女ほど堪能ではない。

「敵でない？ では、何者だ！」

流暢なエステラーン語で問いかける、男の声がする。

暗闇の中、お互いの姿が見えない状況で、敵対する勢力が話し合うのは難しい。

エランは迷った。

正直に身分を証して人質にされてしまったら、国王軍に迷惑がかかる。

「テオフィルスの友達だ」

彼は嘘をついた。

本当は殺してやりたいほど、憎しみを抱いている。

「……若君の友達？ 嘘を吐くな、あの方は簡単に他人に心を許す方ではない！」

「正確にはオーリンを通しての友達だ。二人を助けたい」

「……」

この沈黙は、明らかに疑っている。

エランの額に汗が浮かんだ。

いきなり剣で切付けられても、不思議でない状況。

「若君はどこにいる?」

「言うには、条件がある」

「ふっ、条件? 友達を助けるのに、条件を付けるのか?」

「僕も国王軍に黙って来ている、命がけだ。聞きたい事がある」

「残念だが、条件が言えるのは、互いの状況が対等な時にのみ成立するものだ。お前はたった一人で、竜騎士の精鋭達に囲まれているのだぞ!」

「あ……」

彼のすぐ近くで、血と金属の臭いがした。

顔面近くに血の付いた剣先がある。

殺される恐怖と戦いながら、エランは再度防護のための魔力を放ち、薄ら身体を光らせる。

四人の竜騎士が、自分を取り囲んでいる。

「このまま僕が光を強めれば、お前達の居場所が、国王軍に知れ渡るな」

「その前に切り捨てる。若君はどこにいる? 言え!」

「案内が欲しければ、僕の条件を呑め!」

「……偉そうに、お前は何者だ?」

男が先程と同じ質問をする。

「僕はエステラーン王国の魔法使いだよ。お前達の竜と、同じに魔法を使う！」  
「……」

アルマレーク人達に動揺が走るのを、エランは感じた。人が魔力を持つ事に、アルマレーク人は馴染みがない。

領主家の竜の指輪所有者も、指輪を嵌めていなければ、竜の魔法は使えない。彼等はエランを、脅威に感じた。

「条件は何だ？ 何が聞きたい、魔法使い？」

まだまだ、見習いなんだけどね。

エランは不敵に微笑んだ。

先程から緊急事態を知らせるラツパが、南の方角から吹き鳴らされ、セルジン王の天幕へ、急を知らせる伝令が飛び込んでくる。

「竜が炎を放ち、南側の森が燃えています！」

王と側近達が、顔を見合わせ頷いた。

「予想通りですね。兵達に犠牲者が出ないと良いのですが」

白髪の宰相エネス・ライアスが、王に向けて冷たく言い放つ。



彼はセルジン王の意見に反対だった。

「竜騎士達の連行を急がせろ。〈七竜の王〉が我が手にある限り、竜騎士達は攻撃出来ない」

王は後ろを振り返った。

彼の天幕内の簡易ベッドに〈七竜の王〉テオフィルスが、死んだように横たわっている。

セルジン王の魔力により、彼の意識は戻らない。

そして目に見えない魔法の結界が、彼の周りに張り巡らされ、牢獄に監禁されている状態だ。

魔法の牢獄を破れるのは《王族》のみ、即ちオリアンナ姫のみという事になる。

「竜を追い払うだけなら、もう少し別の手段を講じた方が賢明に思えますが」

「どんな手段があるというのだ、エネス？ 相手は言葉が通じぬ、危険な生き物だぞ」

「……私には〈七竜の王〉を懐柔した方が、良策に思えます」

「彼はオーリンがオリアンナ姫である事に気づいたのだぞ。懐柔するという事は、王太子がアルマレークに奪われるという事だ。そうではないのか？」

セルジン王に反対意見を言えるのは、宰相エネスだけだ。

彼のみが王と対等に渡り合える。

「……このままでは、いずれアルマレークと戦争になります。我が国に勝ち目はありません」

「竜が正気を失い、我が国を滅ぼすのと、どちらがいい？　オリアンナが白亜の塔に辿り着く前にそれが起きれば、暗黒はこの世に広がってしまうのだぞ！」

「姫君に付きまとう竜を、説得出来るのは彼だけです。オリアンナ姫が王の婚約者である事を、彼に告げ諦めさせ、竜と共に国へ帰すのが、一番の良策に思えます！」

「諦めると思うのか？　彼の目的はレクーマオピオンの竜の指輪と、その継承者にある。それがなければ、アルマレークが危機に陥る」

「では、共倒れという事です。両国共協調しあう事無く、共に滅びる！　今のままでは、そうなります」

「……」

王と宰相は、睨み合った。

今までも何度も意見の対立はあったが、宰相エネスがここまで強固に、王に反対したのは初めてだ。

「へ七竜の王」を、殺すべきではありません！」

「……控えろ、エネス」

「へありえざる者」の罠に落ちかけているのが判りませんか、国王陛下？」

王は心の中に引つかかっている事をエネスに言い当てられ、まるで逃げるようにその場を離れた。

側近達は黙って、彼の後姿を見送る。

王が天幕の入り口を抜けて外へ出た後を、近衛騎士隊長のトキ・メリマンが付き従う。

見上げる暗闇の空の一角が、朱に染まっていた。

竜の放った炎が、まるで戦いの始まりに出た、最初の犠牲者の血飛沫のように見えた。

「始まったな」

「国王軍は竜に打ち勝ちます」

トキの自信に満ちた言葉に、王は振り返った。

「トキ、オーリンをどう思う?」

「姫君ですか? ……正直に申します。オリアンナ姫は出会った時から、アルマレーク人だと思っております」

その言葉に、セルジン王は驚く。

「トキ……」

「申し訳ございません。確かに《王族》としての魔力は陛下と変わりなく、素晴らしいも

のをお持ちです。王太子としても、意志の強さがあり周りを惹きつける」  
「……」

「ですが時々、どうしても感じるのです、異国の血を。なぜ、このような状況下にお生まれになられたのかを、いつも思い巡らせておりました」

王は深い溜息を吐いた。

「そなたも、エネスと同意見か？」

「はい。オリアンナ姫は、両国をつなぐ架け橋になられるお方と、心得ております」

「あの男に、やれと言いたいのだなー」

王の怒りを湛えた瞳に、トキは緊張し即座に否定した。

「そこまでは申しません。姫君はエステラーン王国の王太子です。国が消滅の危機にある今、他国との協調が必要と思えるだけです」

「……」

「……陛下はどうお考えですか？ オリアンナ姫の事を」

王は額に手を置き、苦しみを露わにした。

「我妻になる存在だ。だが、時々オーリン……、へありえざる者」の意志が垣間見える。まるで幻惑の乙女に捕えられているように感じる」

「……今なら、その呪縛から逃れられるのではありませんか？」

「ふんっ、もう遅い。私は指示を撤回する気はない！」

そう言つて、用意させてあつた馬に乗つた。

トキは無表情でいながら、軽い失望感を覚えた。

「陛下、どちらへ？」

「火消しだ、私にしか出来ぬ。ここはアレインとモラスの騎士に任せ、そなた達は私の後を追つて来い」

「お待ち下さい、お一人では危険です！ 陛下！」

セルジン王はトキの制止も聞かず、馬を勢いよく走らせた。

トキは大声で周りに指示を出す。

「近衛騎士、全員陛下の後を追え！ 何があつても、陛下を守護しろ」

近衛騎士達が慌ただしく騎乗の準備を始める中、トキは王の意図に心を痛めた。

〈七竜の王〉の殺害をアレインに任せた王は、思惑に反する者をテオフィルスから遠ざける気ではないのか。

彼を守らせないために……。

全員の騎乗が終わり自分も騎乗しようとしたその時、視界の隅で何か映つた。

松明の薄明りの中、暗闇をわざと選んで移動しているその者達は、手足の長いシルエットをしていた。

アルマレーク人？

今すぐ王の後を追わなければならないが、アルマレーク人だった場合、囚人が逃げた事になる。

戦士としての意識が、警報を発していた。

近くの兵士に指示を出そうとしたその時、彼の視界に見慣れた青年が映った。

辺りを警戒し走る姿は、大人より細身で繊細だ。

……エラン？

トキは近衛騎士達に先に王を追うよう指示を出し、馬を従者に預け、何気ない素振りで天幕の影に隠れた。

近衛騎士達が土埃をたてて派手に移動する中、トキは一人暗闇に紛れて侵入者達の後を追う。

薄明りの中に垣間見えた人物の顔に、松明の炎の灯りが揺らいで見えた。

それは、エラン・クリスペインの顔を照らし出していたのだ。

## 第十四話 障壁

普段、自分が守っているオリアンナの天幕に入り込むのが、いかに難しいかをエランは痛感していた。

どうあつても彼女を、起こさなくてはならない。

「魔法使い、本当に王太子が必要なのか？ 唯でさえ王の怒りを買っているのに、また無理やり連れ出したら大変な事になる」

「テオフィルスに近づけるのは、オーリンだけだよ。王の魔法を解けるのは、《王族》だけなんだ」

「お前の魔力で何とかならないのか？」

エランは内心、苦笑いしながら首を横に振った。

見習いの彼にそんな事、出来る訳がない。

「残念だけど、《王族》の魔力は別格だからね」

厳しい顔つきをしたマシーナ・ルーザが、得体の知れないエステラーン人に困り果て、大きな溜息を吐く。

百年前、一部の強硬派の竜騎士隊がエステラーン王国に攻め入り、大敗を喫した理由

が嫌という程理解出来た。

ここは魔法王国だ、関わるべきじゃない。

若君を助け出して、すぐに帰ろう。

レクーマの指輪は、我々だけで探せばいい。

屍食鬼がいるというだけで十分脅威なのに、その上魔法を扱う人間がいる。

そんな者達を相手に戦えるのは、七竜ぐらいだろう。

目の前にいる少年が竜騎士の手に余る存在に見え、マシーナは行動を共にして良いのか疑問を持ち始めていた。

まるで罠にでも、はめられている感じがする。

「……お前を信用して、良いのだろうか？」

「僕はイリって竜を追い出したいだけだ。困っているんだよ、オーリンだつて。勝手に懐かれても、彼に竜は扱えないんだから！」

「……」

「こんな事態を引き起こしたのも、あの竜なんだ！ 責任ぐらい取れよ、アルマレーク人！」

確かにその通りで、マシーナに反論の余地はなかった。

竜イリやカイリが懐いたのは、王太子がレクーマオピオンの領主家、フィンゼル家の



血をひいているからだ。

テオフィルスは何も話さない。

だが、彼は王太子を抱きしめた、まるで恋人のように。

王太子は実は女性で、オリアンナ姫なのではないのか？

そうなると事態は、もつと大変な事になる。

「判った。お前を信じよう、名無しの魔法使い」

エランは竜騎士にお互い名乗らない事を提案していた。何かあつた時にお互い害を被らないためだ。

オリアンナにつきまとう竜イリを、アルマレークに追い払えるのはテオフィルスだけと聞いた時、エランは嫌な気持ちになった。

本当は二人を遠ざけておきたい。

だが、問題を解決するには、彼女の魔力がいる。

オリアンナを気分良く起こすための解毒剤は、アルマレーク人が持っていた。

竜が時々スイの実を大量に食べて寝てしまうので、解毒剤を持ち歩くそうだ。

それを水で薄めれば、人間にも使える。

エランは自分の水袋に分量を確認して入れ、解毒剤を作った。

後はオリアンナに飲ませるだけだ。

問題は彼女の天幕を覆う、モラスの騎士が打ち出す魔法の障壁だ。隠れられる場所から、障壁を破らなければならない。

暗闇に隠れるエランの目の前に、一人のモラスの騎士が立っていた。

エランが所属する第二隊の中で、一番親しい人物メルゼだ。

どうして……、間の悪い。

メルゼを傷付けるのは嫌だよ。

そう思っていた時、年上のモラスの騎士が彼を連れ去った。

オリアンナの天幕を守る障壁の一部が薄れる。

これならエランでも突破出来る薄さだ。

ルディーナの声を思い出した。

《うまく、立ち回るのよ》

総隊長が自分に力を貸してくれているのを感じる。

エランは周りの様子を探りながら、マシーナに言う。

「竜騎士二人だけ、僕について来い！ 絶対に側に離れるな！ 障壁に触れると死ぬよ」

マシーナともう一人の竜騎士が頷く。

残りの竜騎士は周りを警戒しながら、暗闇に待機する。

エランと竜騎士二人は、松明の灯りがギリギリ届く薄明りの中に躍り出た。

両側の少し離れた場所にモラスの騎士二人が立っていたが、障壁の魔力に集中しているせいか、こちらの動きには気が付いていない。

エランは障壁の魔力を放ち、他のモラスの騎士の障壁と融合させた。

モラスの騎士達にはエランがいるのは当然なので、違和感は覚えなはずだ。

ただ彼が今不在である事に気づいている人間、そして何度も障壁に接触する事を不可解に思う人間がいれば、疑われるだろう。

彼は緊張しながらも、自分の作った障壁の中に、大人の男が二人通れるくらいのトンネルを開けた。

竜騎士達は障壁に触れないように気をつけながら、トンネルをくぐり天幕に近づく。

二人が通り過ぎたのを確認してから、エランも障壁の内側に入った。

緊張に汗が額から流れ出る。

両側にいるモラスの騎士を見ながら、いきなり障壁から離脱した事に気づいてないか確認した。

二人は相変わらず内面に籠るように、無反応で動きが無い。

エランはホツとした。

竜騎士二人は、天幕の薄暗がりに隠れ待機していた。

「スイの枝を持っているんだろう？ 僕に渡してくれ」

竜騎士は腰のベルトに下げている鞆から、細長い乾いた枝を何本か取り出す。

スイの実は潰すと強力な睡眠効果の液が霧状に拡散するが、スイの枝にも燃やすと煙が睡眠効果をもたらす。

「僕が枝に火をつけたら、天幕の端を持ち上げてくれ」

竜騎士達は頷いた。

エランは自分の指先に魔法の炎を灯し、息を止めて何本かの乾いた枝に火を点ける。枝は白煙を上げ、竜騎士達が持ち上げた天幕の中に放り込まれた。

暗闇に吸い込まれるような深い眠りの中で、僕は一人ではなかった。

銀色に煌めく何かが、僕に寄り添ったのだ。

それは希望をもたらすように、僕の絶望的な心に光を灯す。

最初、それは僕の命の光となったオーリンなのかと思っていが、優しく歌うような声は女性的で、誰かに呼び掛けている。

『大丈夫です、絶望しないで。もうすぐオリアンナがやって来ます、エドウィン……』

僕は眼を覚ます。

素晴らしい夢を見たと思った。

まるで僕のすぐ側に、父と七竜レクレーマが存在している夢。  
なんて、いい夢。

微笑みながら僕は、再び眠ろうとした。

どうしようもない睡魔が、意識を掴んで放さない。

暗闇が押し寄せて来た時、誰かが僕を抱き起こし、唇に何かを触れさせた。

僕の口に、何かが流し込まれる。

少し苦い少量の液体を、僕は飲み込んだ。

エランだ……。

そう思つて眠い目を開ける。

意識が眠ろうとするのを、彼の一言が引き止めた。

「起きろ、あいつが殺される」

耳元で小さく囁かれた言葉に、僕の意識は現実に取り戻された。

最後に見たセルジン王の冷たい緑の目を思い出す。

悲しみが胸を貫き、目の前の現実を見る事が出来た。

緊迫したエランの顔がある。

「エラン……」

「静かにしろ。身を低くしてここを脱け出すんだよ。時間がない、もう少し解毒剤を飲

むんだ」

僕はエランに言われた通り、解毒剤を飲んだ。

次第に意識がはつきりしてくる。

そして身を低くしてベッドから降りた。

「頭を上げるな。煙を吸い込むと眠ってしまう」

「僕は、十分眠いよ」

「解毒剤が足りないのか？ もっと飲めよ」

「もう、いいよ。美味しくないから」

文句を言う僕の頭を低く押さえ付けたエランは、中腰になって前へ進んだ。

彼の真似をしながら前へ進んだ僕は、床に横たわるミアの姿にギョツとした。

「大丈夫、この人達はすぐに目を覚ます。その前に助け出すんだ」

助け出すというエランの言葉に疑問を感じながら、言われた通り急いで後に続いた。

エランが入り口とは反対側の天幕を叩くと、外側から誰かが重い幕を持ち上げた。

少し空いた隙間から、外の冷たい風が吹き込んでくる。

エランは腹這いになって隙間から外に出る。

僕も、それに続いた。

冷たい風に身震いしながら、僕は肌着一枚しか身に着けていない事に狼狽えた。

出来れば服かマントを取りに戻りたい。

このままでは、性別を知られてしまう。

だがエランに腕を掴まれ、引っぱり出されてしまった。

肌着一枚の僕に、彼は自分のフード付きマントを渡した。

「君は目立つ。フードを被って、顔を隠すんだ」

僕は言われた通りにする。

マントは冷たい風を遮断し、温かく身体を包んだ。

外には二人の大人がいたが、天幕と違い薄闇が支配していて目の慣れない僕には、誰がいるのか判らない。

一人の男がマントのフードを被ったばかりの僕に声をかけた。

「お願いです、王太子殿下。若君を助けて下さいー」

「マシーナさん？ エラン、これはどういう事だ？」

エランとテオフィルスの随行者マシーナが一緒にいる等、あり得ない事だ。

彼は竜騎士に名を知られた事に、軽く顔を顰めた。

「詳しい説明は後だ。あいつとイリつて竜を、君から遠ざけたい。だから手を組んだ」

「……」

それがどんなに危険な事か。

エランはセルジン王の意思に反する行動を取っているのだ。

僕は無意識に薄闇の中で、エランの手を探し出し掴んだ。

彼はその手を、握り返す。

「行こう」

薄闇の向こう側に見慣れたモラスの騎士達が放つ、僕の天幕を守る魔法の障壁が見えた。

エランがその障壁と融和するように、同じ魔法の障壁を生み出し、そこに大人が通れる位のトンネルを作る。

「障壁に触れるなよ」

彼は優しく囁く。

僕は気を付けながら、トンネルを抜けた。

先に隠れるため暗闇に向かった竜騎士の一人が、突然立ち止まる。僕は先に行こうとした。

「こんな所で止まると、見つかるよ」

「待て、誰かいる！」

竜騎士の制止に振り向いた僕は、突然誰かに口を塞がれ暗闇に引きずり込まれた。

恐怖に暴れる僕に、逞しい男が呼びかける。



「暴れるな、オーリン様」

その低い声はセルジン王と僕を守る、近衛騎士隊長トキ・メリマンのものだった。

## 第十五話 分裂の兆し

僕は抵抗するのを止めた。

トキ・メリマンに捕まったという事は、セルジン王に捕まったのと同じ事だ。

計画は失敗に終わり、テオフィルスは殺され、アルマレーク人と手を組んだエランは、確実に罪に問われる。

僕は彼を助ける方法を、必死になって思い巡らせていた。

「エラン、ここに来い！」

エランは事態が飲み込めていない。

障壁からの離脱に意識を集中していたせいで、二人のアルマレーク人達が別の場所に隠れた事にも気づかず、突然のトキの呼びかけに呆然となっている。

「早く来い！ 見つかるぞ」

エランは戸惑いながら、声のする方向へ足を運んだ。

暗闇に目が慣れている彼は、トキの足元に竜騎士達が倒れている事に気づき、計画が頓挫とんざした事に気が付いた。

「意識を失わせたただけだ。殺してはいない」

「……」

「どういふ了見だ、エラン？ アルマレーク人と手を組む等」

暗闇に目が慣れてきた僕は、エランの動揺を見て冷静さが戻った。

「僕が頼んだんだ！ イリをブライデインまで連れて行く事は出来ない。だからテオ  
ファイルスが連れ帰る事を、アルマレーク人に説得してくれて頼んだ」

「……この事態が起きる前に？」

「そうだよ」

トキは明らかに、僕の言葉に疑いを持っている。

僕がセルジン王の側を離れたのは、王に言われアレイン大将と呼びに行つた時と、イ  
リの様子を見に行つた時以外になく、誰かに伝言も渡してもいない。

近衛騎士隊長はそれを知っているはずだ。

それでも嘘を貫き通さなければ、エランは罪に問われる。

僕は毅然と、トキを見つめた。

「すべては僕の責任で、行動してもらつた事だ。イリを僕から引き離せば、アルマレーク  
人が国王軍に関わる事もなくなる」

「……」

「怪我人だけ国王軍が引き取り、動ける者達は竜と共に帰つてもらう。一番の平和的な

解決だと思わないか？」

「……オーリン様、それは《王族》としての言葉か？」

「もちろんだ！ 戦う相手は魔王であり、アルマレーク人じゃない！」

トキは真偽を確かめるように、じつと僕を見つめ、そして頷いた。

「では、その言葉を、今の陛下に伝えてほしい」

トキの言葉に僕は動揺した。

セルジン王が怒っているのは、テオフィルスにオリアンナである事を悟られたと、知ってしまったからだ。

王は彼を殺そうとするだろう、異国の婚約者など、この国にはあつてはならないのだから。

王の怒りを鎮めるには、どうしたらいいのか……、僕には想像もつかない。

二度とテオフィルスと会わないために、彼を逃すしかない。

七竜が与えた心の痛みを、僕は無視した。

「わ……、分かった。必ず、陛下を説得する」

トキは再度頷き、後ろに振り返る。

「隠れてないで出てこい、アルマレーク人。話を聞いていただろう！」

立ち枯れた木々の影から、二人のアルマレーク人が姿を現した。

竜騎士を倒した男を警戒しながら、エランの方にさり気なく近づく。

「エラン、オーリン様の側へ来い。人質に取る気だ」

エランは驚き、僕の横へ移動した。

アルマレーク二人は立ち止まり、トキに剣を向ける。

「止めておけ。騒ぎになれば、〈七竜の王〉の救出は出来ない」

「……それは、我々に協力するという事か？」

「違うな。私はオーリン王太子殿下の、意志に従うまで」

僕とエランは、トキの言葉に驚き顔を見合わせ、手を取り合つて喜んだ。

彼が味方になってくれれば、これほど心強い事はない。

だが反面、トキが王に逆らうという事になる。

それが何を意味するのか、僕には嫌という程理解出来る。

《王族》二人の意志が別々の方向を向けば、自然と臣下の間で争いが生まれる。

王の冷たい瞳を思い出し、僕の心を引き裂いた。

セルジンに逆らつちやダメだ。

今、ほんの少し別の行動を取るだけ……、すぐに仲直りするから。

僕は泣きたくなる気持ちを抑えて、アルマレーク人に向き直る。

「テオフィルスを助ける。彼にイリを連れ帰るよう言つてくれ。そして二度と、僕と陛

下の前に現れないと約束してほしい」

「それは、若君にしか決められない。……でも、分りました、王太子殿下。必ず説得します、二度とエステラーン王国には関わらない！」

マシーナの真剣な言葉を聞いて、僕は頷く。

「エラン、テオフィルスはどこにいる？」

「陛下の天幕だよ、オーリン。結界の中で、陛下の魔力に苦しんでいる。だから君の助けがいるんだ」

僕は顔を顰めた。

テオフィルスの救出がどれほど困難か、嫌という程理解出来た。

エランの言葉に、トキが驚きの声を上げる。

「王の天幕を覗いたのか？ 〈七竜の王〉の状態は、側近以外知らないはずだ」

「モラスの騎士になってから、陛下の魔力を身近に感じるんです。なぜかは知りませんが……」

「そうか……、モラスの騎士は、陛下の直属だからな」

トキは考え込むように、エランの額飾りを見ていた。

「でもどうやって陛下の天幕に入り込む？ 僕の天幕以上に警護は万全、モラスの騎士の守りと兵達の守りをどう崩す？」

「天幕の中には、アレイン大将とその部下達もおります。私が囹おとりになりましょう」

「危険だよ、トキさんばかりに、負担がかかり過ぎる！」

「もちろん、アルマレーク人達にも手伝ってもらおう」

トキは恐ろしい顔でアルマレーク人を睨みつけた。

マシーナはにつこり笑って提案する。

「仲間達を起こしてよろしいですか？ 手伝うには人手不足ですから、皆で協力します。暴れ足りないはずですから」

セルジン王の天幕を守るモラスの騎士が、近衛騎士隊長を通すために、障壁に入り口を作った。

魔法とは無縁のトキはその障壁を潜くぐる時、いつも少し不快を覚える。

彼の中にほんの微かに流れる、《王族》の血が反応するのだろうか。

男爵家の遠縁の末弟が、王の近衛騎士等、本来なれるものではない。

だがトキは幼少の頃から、持ち前の運動神経で頭角を現し、たまたまトルエルド公爵家次期領主だった、エランの父エラスの目に留まった。

運が良かったただけだ。

こんな乱世でなければ、畑仕事の毎日だ。

天幕の入り口の幕を、兵士が持ち上げる。

いや、畑仕事か……、それも楽しいのかもしれないな。

ミアは嫌がりそうだが。

苦笑いをしながら、王の天幕に入った。

アレイン大将の部下達が、トキの前に立ちふさがる。

現実はいつも過酷だ、彼の強さに挑戦者は絶えない。

「これは近衛騎士隊長殿、王の警護は宜しいのですか？」

アレイン・グレンフィードが椅子から立ち上がり、彼の元まで歩いてくる。

その足元や円卓には宰相エネス・ライアス含む側近達、そして召使達の意識を失い倒れた姿があった。

トキは顔を擧めてアレインを睨む。

「ご安心を。陛下の命令を遂行するまで、少し眠らせておいただけです。それで、ご用向きは？　陛下から、何かご伝言でも？」

「以前から貴殿に申し込まれていた挑戦を、今受けようと思つて来た」

王の近衛騎士には、高位貴族と同等の地位が与えられている。

命がけて王を守る者のみに、与えられた特権だ。



「それは嬉しい限りですが、今はお互い任務遂行中ではありませんか？ 私の挑戦試合は、お暇な時で良いのですよ」

「私は今、暇だね。火消しは消火隊と陛下にしか出来ない。私の出番はない」

アレインは鼻で笑った。

「私は、任務中です」

「まあ、いいではないか。竜騎士を追い出すまで、まだ時間がある。天幕の警備なら、部下にやらせておけばいい。こんな機会もあるまい？」

「……怪しいですね、何をお考えですか？」

そう言いながら彼は、嬉しそうに腰ベルトから吊るした剣に触れた。

自分より十歳程年上の剣豪に、アレインは以前から親しみをもち、何度も挑戦話を持ちかけていた。

トキの言うとおり、王も側近達もいない、今が好機ではある。

「では、少しの間、お手合わせ願います」

僕とエランは王の天幕に一番近い茂みの影に隠れ、トキと竜騎士達の動きを見ていた。

トキは先程、颯爽と王の天幕に入り込んだ。

王の近衛騎士隊長だから、当然警戒される事はない。

そして僕達とは反対の方向に竜騎士四人と、少し離れた風上方向二箇所に、各々三人の竜騎士が待機していた。

王の天幕の周りには、分厚い障壁が存在している。

《王族》の僕にはモラスの騎士達が発する分厚い魔法の壁が、目に見えて分かる。

「エラン……、ごめん」

「え、何が？」

「君はモラスの騎士を裏切っているだろ、こんな事態を招いたのは僕の責任だ」

エランは天幕の外の様子を窺いながらも、小声で憮然と呟いた。

「君……、あいつが好きなの？」

僕は呆然とエランを見つめた。

「どうして？」

「まるで恋人同士みたいだった。あいつに抱きしめられていた時、抵抗してなかっただろ」

「それは……」

説明しても、きっと理解するのは難しい。

竜に意識を飲み込まれていた、それをどう伝えればいいのか解らない。

エランが見たという事は、セルジン王も見ているはずだ。

僕は青ざめた。

「あれは、僕じゃない。竜の意識だ」

「竜？ ……あいつの竜？」

「違うよ、僕が……、僕が受け継ぐ竜レクーマだ」

「君が？」

エランは、僕が涙を流している事に驚いた。

「僕は意識の半分を奪われた……。あの時、七竜レクーマが僕の中に宿ったんだ。今も

僕の中にいる」

「……大丈夫？ 君、泣いている」

そう言われて僕は、慌てて涙を拭った。

なぜ泣くのか、自分でも解らない。

「君は、どうしたい？ エステラインとアルマレークの、どちらを選ぶ？」

「もちろんエステラインだ！ アルマレークへは、行かない」

「……だったら、泣くな！ いつものように、陛下の側にいるんだ」

僕は領きながらも、それが不可能な事を感じていた。

七竜レクーマを求める気持ちは、徐々に強くなる。

それをどう制御していいのか、方法が解らない。

彼は……、テオフィルスは知っているのかな？

この感覚を拭い去る方法を。

会わなければならぬ、どうあつてもテオフィルスに。

涙を振り払うために、激しく首を横に振った。

そうしている内にトキとアレインが天幕から出て来て、剣を構えお互いに戦いの距離を詰め始めた。

やがて激しく、その剣はぶつかり合う。

国王軍同士が戦い合っている、響き渡る剣技の音。

僕は耳を塞ぎたい衝動に駆られた。

それが国王軍の分裂の、始まりの音に聞こえたからだ。

「始まったな……。僕は陛下を裏切るんだ。今だけ、国王軍を裏切る」  
僕達は領き合い、お互いの手を取りながら、ゆつくりと移動を始めた。  
この事態を、終結させるために……。

## 第十六話 魔法使いの意思

アレインの鋭い突きを、トキは軽くかわした。

隙を突いて今度は剣を繰り出すが、彼の剣にかわされ弾かれる。

さすがに大将だ、簡単に先を読む。

では、これはどうだ？

身を低くして、剣を低い位置で流す。

アレインは咄嗟に後退し、自然と隙が生まれる。

トキは剣を逆手に切り上げ、アレインは辛うじて剣で防いだ。

周りに騎士達が集まってくる。

剣豪同士の珍しい戦いだ。

皆、真剣に二人の動きを見、魅了され、感嘆の声を上げる。

二人は剣を交え、互いの顔を近づけた。

「どこでその剣捌きけんさばを身に付けたのです？ トルエルド公爵家直伝ですか？」

「さてね、習った覚えはないな」

「独学ですか、やりにくいな！」

トキは笑いながらも、お互いの剣を離した。力量に差がない、あとは経験がものを言う。そろそろだ。

試合を長引かせ人を集め、時間を稼ぐ。

もう試合を終わらせる時だ。

突然のトキの猛攻に、アレインの剣は弾き飛ばされる。

トキの剣先が彼の喉元に当てられ、アレインは降参の姿勢を取った。

「参った。凄いな！ 噂以上だ」

トキは無表情に、彼を覗きこむ。

「その若さで私と互角にやり合えるとは、さすが大将だ。アレイン・グレンフィード殿」

お互いが剣をしまったその時、数頭の竜の咆哮が轟とどろいた。

皆が一齐に耳を塞ぐ。

それと同時に天幕のすぐ近くの森の二ヶ所から、火の手が上がった。

「竜が近くにいる！ アレイン、この場の指揮は任せろ！ モラスの騎士、火の手を消

せ。王の天幕の入り口は、私に任せろ！」

上空から矢が地上めがけてうち放たれる。

アレインは咄嗟にその場の指揮を取り始め、兵も騎士達もその指示に従った。

彼は知らず知らずのうちに、王の天幕の入り口から遠く離されていたのだ。

トキが天幕の入り口にたどり着いた時、そこにはモラスの騎士隊総隊長ルディーナ・モラスが立っていた。

「近衛騎士隊長殿、貴方の戦略に、便乗して差し上げますわ」

まるで全てを見抜いているように、ルディーナは彼の前に立ち塞がる。

トキは得体の知れない彼女が苦手であり、理解出来る存在ではないと感じていた。

「戦略とは何の事だ？」

ルディーナは人形のように微笑み、トキの真実を言い当てる。

「エランを守りたいのでしょうか？ オリアンナ様ではなく」

「……」

「私もそうだが、大事な後継者ですもの。《王族》は許されるけど、他は許されない。あなたも許されないわ」

「だから何だ？」

「ここは私が、全責任を取ります」

「女は引つ込んでいろ！」

「ふふ、あなたも頭の固い男ね。私は罰せられないわ、なぜなら死人ですもの」

トキには意味が解らない。

ルディーナに関してには謎が多く、彼女自身も王以外に心を許さない。ただ行く手を阻まれているとしか、彼には捉えられなかった。

「……冗談に付き合う暇はない」

天幕の入り口を無理に通り返けようとしたが、障壁に阻まれる。

「ここを通れるのは、オーリン様とエラン、それから数人のアルマレーク人だけよ」

ルディーナはにっこり笑う。

トキは舌打ちしながら、得体の知れない彼女を睨みつけた。

剣で立ち向かうには、相手が悪すぎる。

「では、計画変更だな」

立ち枯れた森の広場に、いくつもの天幕が立ち並ぶ。

僕とエランは、目の前にある天幕の影に、素早く移動した。

王の天幕に近づくためには、側近や近衛騎士達の天幕を通りすぎなければならない。

トキがアレインを引き付け竜が咆哮した事で、竜騎士達が矢を国王軍に向けて放ち、天幕から少し離れた所で火を放ち、モラスの騎士を消火の魔法のため呼び寄せる作戦だ。



實際、竜騎士達が攻撃してきたと勘違いした国王軍は、天幕への警備が手薄になった。マシーナが持っている音が出ない笛を吹くと竜が咆哮し、吹きかたによつては竜を呼び寄せる事も出来る。

彼から渡された耳栓のおかげで、僕達は耳を痛める事はない。

松明灯りの薄闇の中、茂みの中から抜け出し身を低くして、天幕の間を走り抜けた。

警備の兵達が戦鬪に気を取られている間に、天幕の入り口まで駆けつけトキと合流する手はずになっている。

あと一つの天幕を超えれば、王の天幕に辿り着ける所で、一人の兵士に見つかつてしまつた。

「何者だー！」

天幕の影に隠れた僕達に、警備兵が近づく。

息を殺して暗闇の中で身を固くする。

兵士が手を伸ばしかけた時、誰かが彼の口を塞ぎ、意識を失わせた。

そして兵を暗闇に引きずり込む。

僕とエランは、松明灯りに浮かび上がった人物に驚き、耳栓を外した。

「マシーナさん、どうしてここに？」

「殿下、そこにおいでですか？」

そう小声で呼びかけたのは、テオフィルスの随行者マシーナだ。僕は警戒を解いた。

「良かった。間に合わなかったら、どうしようかと思いましたよ」  
「何かあったのか？」

顔をしかめてエランが聞く。

彼はアルマレーク人と親しくするつもりはないようだ。

「トキ殿から計画変更と言われました。魔法使いが加わったと……」  
「計画変更？　魔法使いって、どういう事だ？」

王の天幕に入り込んだ後は、トキが天幕内にいる者達を倒し、僕が王の結界を破り、テオフィルスを救出する手筈になっている。

僕達は顔を見合わせた。

「とにかく行きましょう。トキ殿は、ご自分は王の天幕には入れないと言っていました。だから私に頼むと……」

「入れないって、どういう意味だろう？」

「行けば解るよ。正面から入り込む事は出来ないんだ。とにかく障壁を破ろう」

三人は身を潜めながら、今いる天幕の暗闇から抜け出した。

それぞれの天幕には、最低でも一人の歩哨が立っている。

天幕を持つ貴族達の、荷を守る役目があるからだ。

ここまで辿り着けたのは奇跡のように思えたが、マシーナという大人が混ざれば自然と人目を引く。

見つかる危険性が増えたと感じていた時、彼は率先して歩哨に近づき、何かを嗅がせて意識を失わせた。

「殺したんじゃないだろうな？」

アルマレーク人に対して懐疑的なエランが、小声で問い詰める。

倒れた歩哨を肩に担いで、暗闇まで運びながら、マシーナは困った顔で答えた。

「王太子様が眠らされたのと同じ木の実ですよ。いい加減、私の事を信じて頂けませんか、魔法使いエラン？」

「名前を呼ぶな！」

マシーナは溜息まじりに、歩哨を暗闇に下ろした。

「アルマレーク人が嫌いですか？」

「好きだって人間を、探す方が難しいよ、この国ではね」

「エラン！」

実際にその通りだから、僕にも止めようがない。

百年以上前の戦いでも交流がなければ敵国のままだ、いわば元敵国の真ん中に彼等は

いる。

「判りました」

王太子がいる手前か、低姿勢で優しく接していたマシーナ・ルーザが黙り込んだ。

僕はどこことなく居心地の悪さを感じた。

テオフィルスに接している時の態度からも、マシーナが悪い人間でないのは感じている。

「僕は好きだよ、アルマレーク人」

「オーリン！」

エランが怒ったように、僕の手を取る。

「だって、何度も助けられているんだ、嫌いにはなれないさ。そんな事より、早く行こうよ。魔法使いが誰なのか、確かめたくないのか？」

「……」

エランは無言で僕の手を離し、警戒しながら足早に天幕の入り口付近まで移動した。

その後を僕とマシーナが追う。

彼を怒らせたのは確かだ。

父の国人を、嫌いになれる訳がないじゃないか。

別にアルマレークへ行く気はないけど。

いや、僕は死ぬかもしれないから、そんな未来はないんだけど……。

エランの後姿を見ながら僕の中に、未来のエステラーン王国が思い浮かんだ。

国が消滅の危機を迎えているのに、何を呑気な事を考えているのだろうかと苦笑いしながらも、思い浮かべずにはいられない。

もつと交流出来ないのかな、他国とエステラーン王国は。

水晶玉に〈管理者〉がそろふのなら、王国はもう水晶玉から解放されるのに……。

何かが脳裏を掠める。

解放……？

僕は急に立ち止まった。

セルジンは〈管理者〉になったら、どうするんだろう？

僕を妃にするって言うていたけど、水晶玉が消滅する日まで、永遠に生き続けるって

……。

永遠に生きる人間が、王に等なるだろうか？

セルジンは、エステラーン王国から解放される？

足元が消えるような不安が、僕を包んだ。

立ち尽くす僕に、マシーナが声をかける。

「どうなさいました？　こんな所で立ち止まるのは、危険ですよ」

「あ……、ごめん」

僕は前も見ずに駆け出し、前にいたエランにぶつかる。

彼は天幕の前で、呆然と立ち尽くしていたのだ。

僕は彼の肩に、思いつきり顔をぶつけた。

「痛っ、何で止まる？」

「見ろ、障壁が……」

僕はエランの後ろから、モラスの騎士達が放つ王の天幕の障壁を見た。

僕達が一番近い位置に、ぽっかりトンネルが開いていたのだ。

エランと僕は顔を見合わせる。

目に見える範囲のモラスの騎士達は、トンネルが開いている事に気付いた様子もなく、障壁を作る事に集中している。

「潜くぐれって、事かな？」

「……魔法使いが、味方してくれている」

「誰？」

「早く、行きましょう！ 兵士がこっちに来る！」

少し向こうに、戦いの場から離脱してきた兵士の一人が、こちらに向かって歩いて来る。

竜騎士達はアレイン達とモラスの騎士を、徐々に王の天幕から引き離す役割を担っていた。

こちらに来る兵士は負傷したのだろう、足を引きずっている。

「行こう、早く！」

三人は周りを警戒する余裕もなく、障壁に開いたトンネルに飛び込んだ。

次の瞬間、障壁は元に戻り、三人は障壁内のわずかな隙間に閉じ込められた状態になる。

「絶対、障壁に触るな。モラスの騎士達に、気づかれるぞ」

狭い隙間で身を縮めて移動するのは大変で、僕は息が詰まりそうになった。

マントの端が障壁に触れないように、手で身体に絡みつける。

王の広い天幕の外周を、入り口に向かって移動する。

長い時間がかかった気がした。

「入り口だ！」

先頭を行くエランが、他の二人を励ますように言った。

光の出口に飛び出し、三人は松明の灯りが眩しくて目がくらんだ。

戦士であるマシーナは、すぐに体勢を立て直し、状況を確認する。

障壁の出入り口に一人の人物が、こちらを向いて立っていた。

目が慣れてきたエランは、その人物に声をかける。

「やっぱり、魔法使いは総隊長の事だったんですね」

ルディーナ・モラスは人形のように微笑み、天幕の中を指差した。

「行きなさい、エラン。この無意味な戦いを終わらせるのよ」

エランは頷いた。

長い色素の薄い髪を風になびかせながら、ルディーナは衝撃的な事実を告げた。

「明日、私は消滅するの。だからモラスの騎士達を、あなたに託すわ、エラン・クリスベイン」



## 第十七話 救出

「明日、私は消滅するの」

そう言いながらルディーナ・モラスは、愛らしい微笑みをエランに向けた。

彼は呆然と総隊長ルディーナを見つめ、この二十日あまりで彼の境遇を大きく変えた人物が、いなくなる事に衝撃を受けていた。

「……消滅？」

「そう、この世界からやつと解放されるのよ」

まるでそれが長年の望みであるように、嬉しそうに頷く。

そして彼女のモラスの騎士の剣を、彼の前に突き出した。

「だから私の魂が消滅した時にエラン、あなたは私の剣と自分の剣をすり替えるのよ」

「え……？」

「これには私の全ての魔力が込められている。私と同じ一度死にかけて闇の魔力を操るあなた以外、これを扱える者はいないわ。たとえセルジン様でも、無理なの」

「……」

エランがルディーナの後継者と見なされている事を、僕はセルジン王から聞いてい

た。

モラスの騎士隊に組み入れられ、異例の早さで騎士として叙任されたのも、今ルディーナから伝えられた事が理由なのだ。

「僕は本当に……、闇の魔法を使えるのでしょうか？ そんなの、教わっていません」  
不安にエランは動揺している。

「この剣を、持てば解るわ。」

「でも、総隊長はもう……」

「あなたの魔力は、私とセルジン様のその額飾りが封じているの。私がいなくなれば、半分制御を失う。でも、この剣はあなたを導くわ。たとえ、その額飾りが役目を果たさなくなつたとしても」

「……」

ルディーナの剣は、王から賜つたモラスの騎士の剣と同じ形をしていた。  
すり替えても誰も判らないだろう。

エランは自分の剣を手にした。

「陛下にこの剣で、ハラルドを葬るように言われました。この剣で……」

「同じものよ。剣を鍛え上げるのは、モラスの騎士が持つ魔力なの。私の剣を使いこなせれば、倒せるのはハラルドだけじゃない。魔界域で魔王の意識の消滅も可能よ」

「え？」

魔界域へ行けという事なのか？

そんな危険な事を、エランに？

僕はマルシオン王の言葉を思い出した。

《エランは呪いをかけられ、いずれ魔界域へ墮ちるのに》

絶望感に、エランの左手を握る。

「重責を担うのは、オーリン様だけじゃない。エラン、あなたもその一人なのよ」

「……総隊長」

「この剣を受け取るのよ。いいわね」

「……」

エランに断る事は出来ないのだ。

呪いを解くためには、ハラルドを殺さなくてはならない。

ハラルドは魔界域の住人。

いつからこんな運命になった？

ハラルドの事を考えると、僕の心に自然と怒りが沸き起こる。

不意にエランが繋いだ手に力を込めた。

彼がじつと僕を見つめている。

「僕も、魔界域へ行くよ。エラン一人じゃない！」

「ダメだよ。君は陛下を助けるんだろう？ これは僕の役割だ」

彼は何かを決意したように微笑んだ。

「総隊長、僕は……、必ず剣を受け取ります！」

まっすぐルディーナを見つめるエランの瞳に、彼女は満足し微笑み領いた。

「これで安心して逝ける。オーリン様、陛下を頼みます」

「ルディーナさん、僕は……」

心の一部が竜に捉えられている状態で、セルジン王を助ける事が可能なのか疑問を感じながらも、ルディーナの意思を思うと答えずにはいれなかった。

「解っているよ。必ず陛下をお救いします！」

ルディーナは天幕の中を指差す。

「では、お進み下さい。〈七竜の王〉は敵ではない、オーリン様には判断出来るはずですよ」

僕は戸惑いながら領いた。

エランの手を離し天幕の中へ向かう。

入り口付近で歩哨が立っているが、まるで時が止まったように動かず、アルマレーク人が近づいても反応が無い。

警戒を弛めたマシーナは、不思議そうに歩哨を突いてみせた。

「生きているのに、人形みたいだ。これも魔法つてやつなのか？」

そう言いながら答えを求めて、エランを振り返る。

エランは慚然とマシーナに頷く。

僕はセルジン王の魔力が、天幕の外に漏れていない事に違和感を覚えた。

先程エランは王の魔力を感じるとトキに言っていたが、それが《王族》の僕に感じ取れないのは変だ。

エランの額飾りを見る。

あの額飾りが、王とエランを繋いでいる？

まさか……ね。

僕は突飛とっぴな考えを振り払い、天幕の中に足を踏み入れた。

王の側近達があちこちで倒れ、アレインの部下達が今にも動き出しそうな姿勢で人形のように固まっていた。

僕は顔を顰しかめながら、彼らの横を通り過ぎる。

これらが皆ルディーナの魔力だというのなら、彼女がいなくなった時の損失は計り知れない。

モラスの騎士達とそれを束ねていかねばならない、エランの大変さが思い遣られる。

彼はまるで気にしてないように、真つ直ぐ天幕の奥へと進んだ。

「エラン、僕には王の結界が解らない」

「え？ 目の前だよ、なぜ解らない？」

本来結界とは、そういうものだ。

立ち入れない事を無意識に感じ取らせ、足が止まる。

存在している事を主張せず、何かを隠すために侵入を回避させる。

メイダール大学図書館の三階での結界は逆で、《王族》を呼び寄せるためのものだった。

結界を張る者によって、意図は違ってくる。

「陛下は、僕を近寄せたくないんだ」

「ふーん、気持ちちは解るけどね」

「目の前、ハハハ？」

僕は目の前を指差した。

「そうだよ」

エランが答えた直後に、僕は針で布に穴を開けるイメージを強く思いながら、意識を指先に集中させた。

大きな雷が鳴る音が、天幕中に響き渡る。

その瞬間、僕の目の前にセルジン王が現れ……、消えた。

セルジンに、気づかれた！

僕は青ざめながら、目の前に現れた簡易ベッドに横たわるテオフィルスを見た。

まるで強烈な邪気に包まれているように、彼は王の魔力に捕えられている。

この魔力からどうやって解放すれば良いのか、僕は絶望的な気持ちで考えた。

「今の音……、外にも聞こえたんじゃないかな。アレインさんが戻ってきたら厄介だよ。早くするんだ」

「邪魔者が来たら、私が対応します。早く若君を！」

二人に急かされて僕は、左上腕に嵌る腕輪を触った。

泉の精の魔力で何とかならないかと考えたのだ。

テオフィルスに影響があるかもしれないが、王の魔力を僕に取り込むには、〈生命の水〉の助けが必要に思える。

他の魔力〈堅固の風〉と〈祥華の炎〉を操る方法も分からないのに、腕輪を外す事に危険を感じながら、僕は腕輪を外した。

僕の身体からゆらりと虹色に輝く炎が現れ、風に煽られて僕を包みながら燃え上がる。

エランとマシーナは、度肝を抜かれたように、その美しい炎に魅入っている。

僕は必死に二つの魔法を鎮めようとした。

「く堅固の風く祥華の炎く、静かにしてくれ！ 僕のいう事を聞いてくれ！」

その言葉にして魔力を制御出来るとは思わなかったのに、風と炎はみるみる勢いを弱め、僕の中へと消えた。

「あ……、エラン、僕、魔法を制御出来たよ！」

「それって、何の魔法？ どう考えても、君の方が魔法使いだよ」

僕は微笑み、ゆっくり視線をエランからテオフィルスに移した。

今にも死んでしまいそうな顔で横たわる彼に、手を伸ばすとセルジン王の魔法が絡み付き、生気を吸い取られるように感じた。

これでは七竜の加護があっても生き続けるのは難しい。

たとえ誰かが手を下さなくても、早晚彼は死を迎える。

「く生命の水く、僕を完全に守れ！」

すると身体の中から徐々に熱が湧き起こり、全身に活力が漲る。

僕は王の魔力に恐怖を感じながらも、テオフィルスの顔に自分の顔を近づける。

魔力が顔に触れ、そこから急速に熱を奪われる不快な感覚に襲われながら、彼の唇に僕の唇を重ねた。

《王族》の魔力で、彼を蝕む王の魔力を吸い取る。

口から体内に入る王の魔力は強烈で、苦しきのあまりテオフィルスから離れよろめい



た。

エランが僕を支える。

「大丈夫か？ 真つ青だ。少し休んだ方がいい！」

「ダメだ……、時間が無い」

＜生命の水＞が僕を急速に回復させる。

テオフィルスに纏わりつく王の魔力は、まだ半分以上残っている。

僕はエランの腕を逃れ、テオフィルスの手に触れた。

冷たい手は死人のように青ざめ、脈は弱々しい。

「しつかりしろ、テオフィルス！ リンクルを目覚めさせるんだ！」

声が届かない事は百も承知で、あえて呼びかける。

彼の頬に手を当て、彫像のようなその頬に口づけた。

僕の無意識での行為にエランは驚き、憤りを覚え視線を逸らす。

マシーナは抜きなく天幕内を見張っているため、僕の行動を知らずにいた。

どんな方法でテオフィルスを目覚めさせるのか、魔法とは無縁の彼には関心が無かつ

たのだ。

天幕内は新たな国王軍が来る訳でもなく、凍り付いたように静かだ。

僕はテオフィルスの口を少し開け、深く口づけた。

王の魔力が僕の中に侵入し、蝕み始める。

＜生命の水＞が王の魔力と戦い、僕の身体を消耗させる。

意識が遠退きそうになるのを何とか堪え、祈るように心の中でリンクルに呼びかける。

七竜、あなた達の王が死にかけているぞ！

何とかしろ！

すると不思議な事に、心の中に銀色に輝く竜が突然現れた。

銀色の竜は僕に向けて頷くように何度も頭を振り、やがて咆哮するために大きく息を吸い、そして吐き出した。

朦朧もうろうとした意識の中で、竜レクーマの咆哮が聞こえたように思えた。

すると今まで何の反応も示さなかったテオフィルスが、息を吹き返し身じろぎする。

僕は彼からよろけて離れ、王の魔力が突如吹き飛ばされ消えた事を確認した。

彼は目を開け、その瞬間に口走る。

「リンクル、セルジン王と竜達の争いを止めろ！」

僕は弱々しく微笑みながら、彼の目の前で意識を失った。

## 第十八話 本当の名前

全身を巨大な毒蛇に絡みつかれ噛みつかれている感覚に、テオフィルスは苦しみ足掻いていた。

常に彼を守るはずの七竜リンクルの姿がどこにもなく、呼び出すために竜の指輪に意識を向けようにも、毒蛇の毒に朦朧もうろうとし呼吸をするのがやつとで、何かに集中する事が出来ない。

身体が毒蛇に締め上げられ、骨が折れる音が聞こえた。

身体中の痛み悲鳴を上げたが、口から出たのは大量の血だ。

折られた骨が内臓を突き刺す。

このままでは全身の骨を折られ、人の形を留めぬただの肉片となる。

いつそ、殺せ！

血にまみれ、ぼろぼろになった意識で、彼は死を願った。

『安心しろ、すぐにお前は死ぬ』

聞き覚えのある声が、毒蛇から聞こえた。

セルジン王の声だ。彼の怒りを買って、こうして死の淵を漂っている。

オリアンナ姫を無理やり連れ出した罰だ。

彼女の事を考えると、苦しみが増した。

テオフィルスは血反吐を吐き、涙を流しながら、意識は絶望の奈落へと向かう。

〈七竜の王〉が……、無様な終わり方だな。

アルマレークの危機を救うどころか、自分さえ救う事が出来ない。

故国は七竜を失い、竜は制御を失う。

人間にとつての敵に変わり、国は竜の炎に焼き払われる。

最悪だ。

竜が敵になるなんて……、見たくない。

もはや肉塊と化した彼は、最後に残った意識も手放そうとした。

——その時、間近で竜の咆哮を聞いた。

咆哮は彼に絡みつく巨大な毒蛇を吹き飛ばし、身体を人の形に戻す。

五感を取り戻したテオフィルスは、すぐ側に七竜リンクルがいるのを感じ取る。

そして……、他の竜達の怒りの声を聞く。

彼は目を覚ました。

「リンクル、セルジン王と竜達の争いを止めろ！」

七竜リンクルが竜達の元へと消えた時、彼の上に何かか押し掛かってくる。上体を起こし、危険を回避するために身構える。

彼の体力は目覚めた瞬間に、リンクルが回復させていたのだ。

自分の上に倒れ意識を失っているのが、オリアンナである事に驚いた。

肌蹴はだけたマントの下から薄い肌着を通して、柔らかかそうに膨らんだ彼女の胸が、彼の心を乱した。

ゆつくりと彼女の身体の線を目で確かめる。

オーリン王太子がオリアンナ姫であると解つてはいたが、彼女の姿は男子を装い、女性である事を拒否していた。

それが今、目の前に倒れ、彼女の本来の姿を彼に見せつけていた。

青ざめた顔は生気を失い、死んでいるように見える。

テオフィルスは彼女に手を伸ばそうとしたが、ある事に気が付いた。

すぐ傍にある蠟燭の灯りが、揺らめきながら彼女の首筋に照らし出す。

赤い痕。

瞬時にそれが、くちづけの痕である事を悟る。

そしてセルジン王の、強烈な怒りの理由が解つた。

オリアンナ姫は……、王の女だ！

力が抜けるような感覚に襲われた。

七竜の定めた婚約者は、既に他の男に愛されている。

男子の姿に惑わされ、どこかで安心して自分の愚かさに気が付いた。

エアリス姫として彼の前に現れた彼女は、確かにセルジン王の婚約者だったのに、それは自分を欺くための嘘だと思ひ込んでいた。

一国の王の婚約者を、どう奪い取れば良いのだろう。

彼女を得る事の困難さに打ちのめされ、伸ばした手は彼女に触れる事も出来ない。

そして、その手を激しく払い除ける者がいた。

「イリを連れて、王国を出ていけ！ アルマレーク人！」

テオフィルスを激しい憎悪の目で睨むエランが、罵声を浴びせる。

エランは意識を失っている彼女を抱き起し、自分に寄り掛からせ立たせた状態で抱きしめた。

まるでテオフィルスに見せつけるように。

こいつが、相手じゃない。

やはり、セルジン王だ……。

彼の鋭い勘が、エランを否定する。

「ふん、王太子の腰巾着か。お前は彼女の相手じゃないだろ」

蔑んだその言葉にエランは憤り、オリアンナを離してテオフィルスに掴みかかった。彼を殴ろうとしたエランの手はマシーナによって取り押さえられ、身動き出来ないように羽交い絞めにされる。

「今のは、若君が悪い！ 謝りなさいっ！ 彼は命懸けで、協力してくれているんですよ！」

「頼んだ覚えはない。そいつは俺とイリを、追い出したいだけだ」

「それでも、協力者です！ 謝りなさいっ！」

マシーナの劍幕に、テオフィルスは浅く溜息を吐いた。

「悪かったな、女をめぐる争いに慣れてないんだ。誰も俺に立ち向かわないからな」

「それが、謝っている態度ですかっ！」

「ふんっ」

テオフィルスはベッドから立ち上がり片膝を折って、あくまで儀礼的に頭を下げた。

「すまなかつた。引き続き、協力を頼む」

マシーナから解放されたエランは、凄い形相でテオフィルスを睨みつけながら警告した。

「今すぐ、王国から出て行け！ お前が彼女の立場を、危なくしているんだ！」

「彼女じゃない！」

「甲高い声が、全てを否定した。」

エランの後ろに身繕いを済ませたオリアンナが、怒りに顔を真っ赤にして立っていた。

意識を取り戻した僕は、テオフィルスの寝ていたベッドの上で、マントを肌蹴させた状態で横になっていた。

薄い肌着で完全に体型が露わになっており、慌てて飛び起きマントを身体に絡ませる。

見られた。

テオフィルスに、女だつて……。

困惑する意識の中で、エランが駄目押しのように女を肯定した。

僕の中で、激しい怒りが沸き起こる。

「何が、彼女だ！ 僕はオーリン、この国の王太子だ！ それ以外の何者でもない！」  
今さら否定しても手遅れなのは分かっていたが、言わずにはいられない。

肯定してしまえば、それまでの僕が全て崩壊してしまうからだ。

それだけは、避けなければならない。

虚勢を張る僕にテオフィルスは苛立ち、皮肉を込めて笑いながら断言する。



「は！ だつたらお前のその貧弱な身体を晒すな。もつと豊満になってから見せに來い、ヘタレ小竜」

「わつ、若君！ 何という事を……」

マシーナが慌てて遮ろうとするが、発せられた言葉を回収するのは不可能だ。

その言葉は僕の心を、酷く傷つけた。

嫌味や罵声を浴びせられる事には、幼い頃からハラルドで慣れている。

いつもはそんな言葉は、気にもならない。

それなのに……。

僕の中から、大粒の涙が零れ落ちた。

止めようとしても、涙は次から次へと溢れ出て、止める事が出来ない。

なぜ泣いているのか自分でも意味が解らず、もどかしかった。

止まらない涙に、下を向いて他人に見せないようにする。

その様子にエランは逆上し、テオフィルスに飛びかかり顔を殴りつける。

テオフィルスも苛立ちが頂点に達し、捌け口をエランとの格闘に求めた。

体格差では圧倒的にエランの方が不利だ。

長身のテオフィルスから繰り出される蹴りの威力は凄まじく、エランは何度も蹴り飛ばされる。

それでも剣も魔法も使わず果敢に素手で立ち向かうのは、彼の中に眠る武人の血が騒ぐからだろう。

激しく掴み合い殴り合う若者達の喧嘩に、巻き込まれるのは御免だと、マシーナは大きな溜息を吐くだけで今度は止めようとしめない。

「もう、いい！ 二人とも、止めろっ」

何とか涙を止めて格闘の中に割って入ろうとした時、マシーナが僕の行動を抑えた。

「私にお任せを、殿下」

彼はそう言うのと、殴り合う男二人を引き剥がし、それぞれの鳩尾みぞおちに軽く蹴りと拳を素早く繰り出す。

二人はそれぞれ吹き飛ばされて倒れ、鳩尾を押えて蹲うずくまった。

「喧嘩なんかしている場合ですか？ あなたを連れて脱出出来なかつたら、ここにいるアルマレーク人は全員殺されますよ、若君！」

マシーナはエランにも分かるように、エステラーン語でテオフィルスに警告する。

「リンクルクランで精鋭といわれる私を怒らせると、どうなるか解りますか？」

いつも低姿勢でよく喋るマシーナが、殺気を漲らせて黙り込む。

テオフィルスに脅しをかける姿は、普段の彼とは別人に見えた。

エランに殴られ口の中を切ったテオフィルスは、血を床に吐きながら切れた口元を押

えた。

「ああ、解っているよ。感情的になった……。悪かったよ、オーリン」  
苛立ちは性別を認めない僕に対してのもので、エランに八つ当たっても意味のない事だ。

対照的に、エランの憎しみは消えない。

僕があんな事ぐらいで涙を流したから、テオフィルスに特別な感情があると見做し怒りを覚えているのだ。

憎しみは殴られた痛みと共により増幅し、モラスの騎士隊での訓練で得た自己制御の限界を超えそうになって見える。

エランがまた黒い渦を纏わりつかせるのを恐れて僕は、抑制の腕輪を持って彼の側でひびます跪いた。

「エラン！ 抑制の腕輪を付けてくれ」

「え？」

僕は彼の前でマントを捲めくりあげ、薄い肌着の左の袖を捲り細い腕を出した。

エランは受け取った腕輪を見ながら、戸惑ったように僕を見る。

「君……、こんな物をはめて大丈夫なのか？ 凄い、手が痺れるみたいだ。これ、何だろう？」

その腕輪はまるで意思を持つように、エランをあからさまに拒否している。

テオフィルスに対する怒りと憤りが、別のものにすり替えられた。

「これは危険だよ、オーリン。はめない方がいい！」

「解っているけど、仕方がないんだ。僕はまだ泉の精の魔力を制御しきれてないから」

「……どこで、手に入れた？」

「マールさんに、もらった」

「薬師が？ なぜこんな危険な魔法具を……？」

マールが古の王だとは、エランには知らされていない。

マルシオン王に会っていても、マールと結び付けていないのだ。

「エラン、時間がない。結界を解いた時、陛下に知られている。早くここを出ないと、大

変な事になる。早くはめてくれ」

「……分かったよ」

彼は注意深く腕に抑制の腕輪をはめ、僕から滲み出していた泉の精の魔力が姿を消した。

そんな僕達を、テオフィルスは不機嫌そうに見つめていたが、はつとしたように視線を天幕の入り口に向ける。

「マシーナ、ここを出よう。王が来る前に」

「え？ はい」

「待て、テオフィルス。聞きたい事がある！」

僕が入り口に向かう彼を追いかけ、行く手を阻む。テオフィルスはなぜか優しい目を向けた。

「竜が僕を呼ぶんだ。心を奪われているみたいで、落ち着かない。どうしたらいいんだ？ この感覚を消す方法を、教えてくれ！」

「……それはお前が、七竜レクーマの指輪をはめれば落ち着くだろう、オリアンナ姫」  
「え？」

僕は耳を疑った。

彼の真つ青な瞳が、少し拗ねたように僕を見つめる。

テオフィルスは明確に、僕を本当の名前で呼びかけたのだ、オリアンナ姫と……。

## 第十九話 王の姿

「無駄な努力は止めよ。それより、私と共に竜騎士に立ち向かえ！」

セルジン王の大きな声が響き渡った。

森の中の兵士達は、消火のために枯れ木を切り倒す手を止め、声の主を探し道に視線を向ける。

誰も王が単独でその場にいる等、思いもしなかった。

長い黒髪を涼やかになびかせ、黒紫に銀糸の豪華な刺繍のある長衣を纏った騎士が、毛並みの良い黒馬に跨がり兵達に視線を向けていた。

「……、国王陛下下！」

王はおもむろに手を挙げ、下ろした。

次の瞬間、前方を覆っていた炎が消え、暗闇が戻ってくる。

松明の灯りまで消してしまったのだ。

「やり過ぎだな」

そう呟いた途端、松明の灯りが復活した。

兵達が跪こうとした時、ようやく王の近衛騎士達の騎馬隊が到着する。

「敬礼は後だ。炎は消えた。竜の炎は私が抑える、弓兵は竜の目を狙え。他の者は竜騎士を打て！」

「はっ！」

兵達は消火のための道具を、武器に持ちかえ隊列を組む。

その様子を確認しながら、王は後方の近衛騎士に問いかけた。

「トキがない」

「隊長は拠点本部に残られました」

「……」

王は即座に指示を出す。

「前進せよ！ 竜を恐れるな、エステラーン国王軍よ」

兵は竜の駐留する場所へ、前進を開始する。

「そなた達は我が天幕の守りを固めよ。私が到着するまで、何人たりとも天幕の外へ出してはならぬ！」

「しかし、陛下の守りは？」

「私は影だ、本来守り等要らぬ。早く行け！ トキの命令より、我が命令に従え！」

それが何を意味するのか、近衛騎士達は戸惑いながらも王の命令に従い、全員来た道を引き返す。

兵達が王の横を通りすぎる中、セルジン王は目を瞑り意識をエランの額飾りに集中した。

するとエランの見える景色が見えてくる。

トキ・メリマンと二人のアルマレーク人、そしてオリアンナ姫。

「なるほど、助け出すつもりか。だが、そうはさせぬ」

王は人差し指の先で、空中に弧を描いた。

その指先から小さな蛇が現れる。

「七竜の王」を、縊り殺せ！」

その蛇は王の天幕へ飛び去った。

「小賢しい者、人の心を惹き付け操る。それが出来るのは《王族》のみ！ それ以外の存在は、断じて認めぬ！」

王は冷たい緑色の瞳で、自分の生み出した死の蛇を見送った。

竜騎士の到着に竜達は喜び、炎が燃え盛る中で、翼を広げ炎を煽った。

「竜達が暴れているぞ、上空へ退避させよう！」

なんとか国王軍と炎を避けながら、竜の元へ辿り着いた竜騎士達も、これには驚き、慌



てて騎乗し上空へと舞い上がった。

これ以上燃え広がると、テオフィルスを救出に向かった者達に悪影響が出る。

竜騎士達はマシーナの指示通りに、国王軍を引き付ける役割を担い、低空飛行で飛び交った。

国王軍が消火のために、必死に枯れ木を切り倒そうとしていたが、次の瞬間、何かが起こり炎が消え辺りが暗闇に包まれる。

少しすると松明の灯りだけが点き、地上に少しの明るさが戻る。

竜の炎が、一瞬で消えた？

竜騎士の一人が事態の確認をするために、国王軍のいる上空へ接近した時、地上から無数の矢が放たれた。

矢が竜の目に当たれば、失速し墜落する。

竜騎士は冷静に竜の目を守りつつ、上空へ退避させた。

マシーナの竜エーダや、他に救出に向かった者達の竜、そしてイリが地上に残り自分達の竜騎士を待っていた。

イリは苛立ちながらも、オリアーナを待っている。

本当は彼女の元へすぐにも駆け付けたいが、七竜の規制を破る事は出来ない。

炎が消えたせいで、自分の場所が判らないのだとイリは思い、再び燃え残った枯れ木

に炎を吐く。

ところが炎は何か跳ね返され、イリめがけて戻ってくる。

「そなたの炎は、私には無意味だ。イリ」

煙が充満する燃え残った木々の影から、馬に乗った人間が現れた。

「そなたは全ての火種、生かしておく訳にはいかぬ！」

国王セルジンが魔力を揺らめかせながら、イリの前に立つ。

長剣を馬上で抜き放ち、剣から強烈な赤い光が長く伸び、イリを突き刺すくらいの大  
きさになった。

イリは殺気を感じて憤り、首を高くし翼を大きく広げ、威嚇の姿勢を取る。

そして息を吸い、金属的な咆哮を王に浴びせかける。

「無駄だ、それは効かぬ。私は影だ」

国王軍は予め後方に待機させている。

竜の咆哮に対する対策も講じての事だ。

王の剣から出る赤い光は、馬上からイリに届く長さまでに達していた。

剣でゆっくりイリの目に狙いを定めた、その時——赤い光の切っ先にオリアナが  
現れ……、消えた。

王は彼女が消えた切っ先を見つめながら、眉根を寄せた。

「結界を破ったか……、オリアンナ」

憤りより深い悲しみに似た感情に捕らわれた。

オリアンナが自分を裏切り、テオフィルスを救おうとしている。

アルマレーク人なのだ、オリアンナ姫の半分は……。

深い溜息が漏れた。

王は気を取り直し、剣で真つ直ぐイリの目を狙い、竜目掛けて突進した。

すると、まるで横槍を入れるように、マシーナの竜エーダが目の前に炎を噴いた。

リンクルの子竜であるエーダは、イリを助けた訳ではない。

ただ王の放つ魔法の剣に、怒りを覚えただけだ。

他のリンクルクランの竜達も同様に憤り、王に向けて炎を吐いた。

「それは効かぬと言ったはずだ」

炎に吞まれ前方が見えない状態で、王はイリの目と考える位置に剣を突き刺す。

するとそこから膨大な光が現れ、影である王の姿をかき消した。

炎だけが揺らめく中に、輝く光が七竜リンクルの姿を取り実体化した。

リンクルは辺りを見回しながら、変わった調子で一声鳴く。

するとリンクルクランの竜達は、一斉に炎の噴出を止めた。

真黒く焼け焦げた地面の真ん中に、セルジン王が馬に乗り、何事もなかったように

立っている。

「七竜リンクル……、死の蛇が仕留め損ねたな」

『我等が眷属の死はまだ先だ、水晶玉の〈管理者〉よ。戦う相手が違うのではないのか？』  
「私はまだ、〈管理者〉ではない！」

王は七竜リンクルの、金色の目を睨みつけた。

リンクルは興味深いものを見るように、その凶暴な顔を王に近づける。

『人間とは面白いものよ。なぜそんな些細な感情で動く？ 我が眷属もそうだ。今は貴殿に対する嫉妬心を制御すら出来ない』

その言葉に、オリアンナが完全に性別を悟られ、王の婚約者である事に、テオフィルスが気づいたのだと解る。

絶対に生かして帰さぬ！

王は剣を握りしめた。

リンクルは面白がるように目を細める。

『殺気に満ちているな、我らが眷属は貴殿には打てぬ。貴殿はまもなく、エステラーン王国から解放される』

「何？ どういう意味だ？」

『王としての意識から、〈管理者〉としての意識に変えられるからだ』

「……意味が解らぬ。動揺させようと思つて言つていたのであれば、無駄だ！」

王は劍を七竜リンクルに向けた。

劍から伸びる赤い閃光が、リンクルの首を貫く。

『無駄だ、水晶玉の魔力と七竜は、お互い不可侵。我らは《神族》、他の竜とは違うぞ！』  
王の放つた赤い閃光はリンクルに吸収され、王の魔劍はただの劍と化した。

セルジン王は愕然と、その劍を見つめる。

水晶玉の魔力は七竜には効かず、《王族》はただの人と化す。

それは即ち、これから出会う女神に対しても、同様という事だろう。

『解つたであろう？ 貴殿はまだ唯の人間。水晶玉の〈管理者〉とならねば、我らと渡り

合う事は出来ぬ』

「……私はエステラーン王国の王だ。国を守る責務がある！ 王太子をあつた男に、渡す

訳にはいかぬっ！」

『エステラーン王国は貴殿が完全なる〈管理者〉となつた段階で、《王族》と共に滅びる。

王国の存続等、ありえない！ 女神が許さないだろう』

「……」

セルジン王は憤り、齒噛みした。

《神族》の決めた事に、人間が太刀打ち等出来ないのだ。

「私は《王族》の存続を望む！」

『……』

七竜リンクルは黙り込み、観察するように王を見つめる。

しばらく時間が経った頃、悠然とリンクルが伝えた。

『へありえざる者』がああ娘の命の光である限り、我々には手は出せぬ。へありえざる者』が離れた直後が肝心だ』

「何の事だ？」

『元々ああ娘は、七竜レクーマの眷属となるべく生まれた者、それをへありえざる者』が奪い取った』

『……』

それを招いたのは王自身だ、彼女が《王族狩り》の犠牲になった幼い頃に。

『七竜レクーマは弱っていた。眷属エドウインを助けるために、全てを費やしていたから、オリアンナ姫に行き着く前に奪われた、女神に……』

「女神……？ オリアンナ姫は今、女神の手の中にあるという事か？」

『そうだ。だが、奪い返せる。それが我等と貴殿を救う、敷いてはエステラーン王国を救う鍵となる』

「……ああ男に、委ねるといふ事か？」

『違う、委ねるのは我等七竜とアルマレーク共和国。《王族》と王国を、我等と国が女神から隠し通す』

王の背に、戦慄が走った。

そして……、悲しみが王を支配した。

手放さなければならぬ——、オリアンナと王国を生かすために。

王の瞳から、一筋の涙が流れた。

「それは取引か、七竜リンクル？」

『取引？ それは人間の尺度だ。我等は本来あるものを守るだけ。オリアンナ姫はアルマレーク人で、七竜レクーマの眷属。たまたま国が付いて来るだけだ』

「ふっ……」

王は笑った。

救いが訪れたのだ……、悲しい救いが。

彼女を救い出す方法が見つかったのに、王は脱力し心が傷ついた。

「それ以外の方法はないのか？」

『貴殿も女神に会えば判るだろう。神の残酷さが……』

「貴殿も、神ではないのか？」

リンクルは顔を上に向け、軽く炎を吐いた。

不思議そうにセルジン王は見ていたが、やがてそれが竜の笑いである事に気付く。

「何が可笑しい？」

『そう、我等は神だ。だが、女神のように残酷ではない。なぜなら、この地上を住処にしているからだ』

「……？」

『我等は天界の住人ではないという事だ。地上の生き物と共生してゆく、それが我等だ』  
「共生……、なるほど」

王は暗闇に包まれた地平を見た。

荒れ果てた大地に、人の灯した灯りは見えない。

空は屍食鬼に覆われ、月も星も見えず暗黒が広がっているだけだ。

「共生か、良い響きだ」

国王軍のいる森の向こうの灯りを見た。

大地にしがみ付いて、何とか生きている彼らの灯した光だ。

王は目の前にいる七竜リンクルの、金色の瞳を見つめた。

そこに自分の姿が映っている。

エステラーン王国の、王としての姿だ。

「取引に、応じよう。七竜リンクル」



## 第二十話 七竜の目

王の天幕を出て障壁の裏側に入ろうとした時、僕は違和感を覚え、ルディーナ・モラスを探した。

モラスの騎士の総隊長がいないのだ。

「どうしたんだろう？ ルディーナさんがいない」

「本当だ、障壁の外にいるのかな？ とりあえず最初に入った場所に行ってみよう」

エランと狭い障壁の裏側を、障壁に触れないように気を付けながら進んだが、当初空いていたトンネルはどこにもない。

「どういう事だろう、これじゃあ閉じ込められたみたいだ」

「魔法使い、君の魔力で何とかならないのか？」

マシーナが焦りを感じてエランに聞く。

これ以上時間がかかれば、王太子の天幕にいる者達が目を覚まし、アルマレーク人により一層の嫌疑がかかる。

「無理だ。この障壁は破れない。破れるとしたら、出入口だけだ」

広い天幕の周りを一周したが、トンネルはどこにも存在せず、正式な出入口である元

の場所に戻ってしまった。

「ここから出るしかなさそうだな」

そう言つてテオフィルスが入口に近寄ろうとしたが、マシーナに止められる。

「若君、その壁に魔法使い意外が触ると、周りに気付かれる」

「退けよ、僕が空ける！」

エランはテオフィルスを押し退けた。

いがみ合っている二人は、互いを睨みながら場所を交代する。

「出ると完全に気付かれる。あなた達とはもう別行動だ。先に出て王国を出て行つてくれ。捕まっても、僕達の事は言うなよ！」

「分かっている、魔法使い。最初から、そういう約束だ」

マシーナはテオフィルスが文句を言う前に、素早く答えた。

僕はテオフィルスが見つめている事に気付き、思わずエランの後ろに隠れた。

彼は迷う事なく僕に近づいたが、エランが彼の前に立ちはだかる。

「何のつもりだ？ 僕達に、これ以上関わるな！」

「退け、お前に用はない！」

テオフィルスは押し退けようとするエランを押しさえ付けながら、僕を見つめて言った。

「レクローマを追え。指輪はそこにある。必ず嵌めろ！」

「僕は……、アルマレーク人じゃないし、君の婚約者じゃない！」

先程彼が本当の名前を呼んでから、どう接して良いのか僕には分からない。

テオフィルスは優しく笑う。

「そんな事はどうでもいい。お前が誰を選ぼうと俺は……、レクローマが助かればそれで満足だ」

僕は驚き、目を瞠った。

それは「エステラーン王国から連れ去る気はない」と言う意味に聞こえたからだ。

僕はテオフィルスと見つめ合った。

エランは彼の手を振り払い、急いで出入口を空けた。

「早く出ろ！」

僕の様子に苛立ち、早く引き離れたかったのだ。

急ぐマシーナに引き摺られ、テオフィルスは入口を通り抜けた。

エランは一旦入口を閉め、振り返り僕を抱きしめた。

「あいつの言う事なんか、聞くなよ。もう会う事もないんだ！」

「分かっているよ、エラン」

なぜか、胸が傷んだ。

「ここから出たら、君は悟られないように天幕まで戻るんだ。兵士や騎士達は、僕が引き受ける。フードを被るんだ」

「うん」

「陛下に逆らうなよ、何があっても。それが一番大事な事だ」

僕は頷いた。

これ以上、王を裏切る事は出来ない。

僕が再び連れ出されたと知られると、周りが迷惑を被る、それだけは避けなければならぬ。

エランが再び出入口を開けようとした時、制止する声が出た。

「開けては駄目よ、エラン！」

ルディーナ声だ。

彼女はいつの間にか、僕達の後ろに姿を現していたのだ。

「障壁の中を移動するのよ、その方が安全だわ」

「総隊長？」

「エランは障壁を出たら、王太子の天幕を守る一員に加わりなさい。オーリン様は私が送ります！」

僕とエランは顔を見合せ、ホッとした。

ルディーナがいるだけで、これ程心強い事はない。

「ルディーナさん、外で一体何が起こっている?」

「陛下の近衛騎士達が天幕を包囲したのです。アルマレーク人が竜を呼び寄せて、天幕の周りで戦いが起きています」

僕は青ざめた。

計画は失敗に終わったのかもしれない。

そう思うと外に飛び出したい衝動に駆られ、それを抑えるために目を瞑る。

銀色の竜が、見えた。

竜は穏やかに僕を見ている。

彼は大丈夫だと、不思議とそう思えた。

「天幕まで誘導します。オーリン様に関わった事は、絶対に知られてはなりません」

「もう知られている。境界を破った時に、陛下が現れた」

「それでも、知らないと言って下さい! 後の責任は、私がかかります」

「ルディーナさん……」

「早く、行きますよ」

ルディーナは率先して、障壁と天幕の間を進み始め、僕達も後に続く。

長く感じられた狭い道程の終わりに、丁度入口との対面と思われた辺りで、ルディー

ナが止まった。

「エラン、ここがオーリン様の天幕の障壁よ」

「え？」

王の天幕の障壁と置いていたのに、そこはもう僕の天幕だと言う。

どんな魔法を使うとそうなるのか、僕達には想像もつかない。

「障壁を閉じて、そのまま第二隊の一員として待機！」

「はい！」

ルディーナの空けたトンネルを、エランが外側から閉め彼と別れた。

トンネルの先はまた天幕だ。

王の天幕より幾分小さい。

廻り込んだ入口でルディーナは中を確かめた。

床に倒れた人々は、まだ目覚めていない。

「まだ、大丈夫です。エランのマントを」

僕は急いでマントを外した。

「早くベッドへ、陛下が来る」

僕は急いで天幕内へ入った。

スイの木の燃えた微かな臭さが、鼻腔をくすぐ擦り目眩を覚え、まるで何かの結界に

入ったような感覚に捕らわれた。

進んだ先に誰かの姿が見え、僕は朦朧とする意識の中で、その人物が手を差し伸べるのを見た。

「おいで」

僕の瞳から涙が流れた。まるで倒れ込むように、その人物に抱き着く。

「セルジン」

王は優しく、僕を抱きしめた。

「申し訳ありません、僕は……」

ルディーナの制止も、王を前にしては意味をなさない。

「そなたの半分はアルマレーク人だ。それをもう少し尊重すべきなのかもしれぬ」

「陛下……」

意識が猛烈な睡魔に支配された。

王が優しく、僕の額にくちづけを落とし、僕は意識を手離れた。

いつもの優しいミアの呼び掛けが、酷く切迫して聞こえる。

「オリアンナ様、お起きになって下さい！ 大変です」

ミアはいつも大袈裟だと、僕は思う。

僕を起こしたいのなら、優しく額にくちづけしてくれればいいのに……、半分男子の意識でそんな事を考えていると、本当に額にくちづけをする者がいた。

寝ぼけ眼で片目を開ける。

「おはよう、オリアンナ。休んでいるところを、すまぬ」

目の前に国王セルジンの顔があつた。

「うわあああ……！」

僕は毛布を抱き締めながらベッドの端まで飛び退き、真つ赤になって固まった。

驚いた王はベッドから立ち上がり、礼を取るように胸に手を当て、頭を軽く下げる。

「失礼、姫君のベッドに、勝手に入り込んでしまったな」

頭の中が真つ白になった状態で、僕は激しく首を横に振った。

「そなたに助けてほしい事がある」

そう言つて王は僕に手を差し伸べる。

その動作に、寝ぼけた頭で既視感を覚えた。

昨日、同じ事があつた。

セルジンに手を差し伸べられて……。

僕は全てを思い出し、恐怖の表情を浮かべながら王を見つめた。



王は察して、安心させるように微笑む。

「アルマレーク人なら大丈夫だ。捕えてはいないが、若干名の怪我人は出た。こちらの意図を理解するには、まだ時間がかかるな」

「意図？」

王はテオフィルスを殺そうとしていた、だから戦闘が起きたのだ。

時間がかかるとは、どういう意味だろう。

少なくともその戦闘は止んだ、王の言葉からそれだけは汲取れる。

「早く着替えて外に出れば、意味が分かる。そなたにも手伝ってもらいたい」

そう言い残して、王は天幕から出て行つた。

「ミア、何がどうなっているんだ？」

「分かりません、私共も眠っていましたから。ただアルマレーク人を、陛下が全て解放したみたいです」

「え？ それって和解したって事？」

「多分……」

あんなに怒っていた王がどうして考えを変えたのか、僕には理解出来ない。

素早く王太子の服に着替えて、天幕の入り口を抜けた。

障壁の向こうを、何かが塞いでいるように見える。

最近見慣れたそれは、熱い息を吐いている。

「イリ？」

外に出た僕は、相変わらずイリが天幕の入り口に居座つて、動かない状況に溜息を吐く。

いったい昨日の必死の行動は、何のためだったんだ？

竜は僕の声を上げ、可愛い声で鳴いた。

「おはよう、イリ。動かない方がいいよ、周りが大変だから」

イリはおそらく理解したのだろう、蜷局を巻いた胴の上に頭を乗せ、大人しく僕を見つめていた。

すぐ側に王の姿を見つけ足を一步踏み出した時、王の影から長身の人物が姿を現し、僕は足を止めた。

その人物は王と対等に、何かを話している。

テオフィルス・ルーザ・アルレイド

気分が悪くなつた。

僕を惑わすこの男を生きて追い出したくて、昨日は行動したのだ。

殺される寸前だった彼を、必死の思いで助けた。

それなのに今は殺そうとしたセルジン王を、まるで懐柔したように平然と会話してい

る。

僕の心に、無性に怒りが沸き起こる。

彼等の元へ行つて文句の一つも言つてやろうとした時、王の天幕の影に大きな黒い物体が見えた。

それも影——七竜リンクルの影が鋭い金色の目で、僕を見つめている。

僕はそこから動けなくなった。

《へえざる者》よ、邪魔をするな！》

竜カイリを見送つた時、リンクルはそう言つた。

僕は七竜の敵なのか？

心に住み着いた七竜レクーマは、あんな目で僕を見ていない。

同じ七竜なのに、僕には訳が判らなくなる。

セルジン王が僕に気付き、微笑みながら近付く。

「竜と竜騎士達をアルマレークへ帰還させる。そなたにはイリを説得してほしい」

「……テオフィルス殿も、帰るんですね？」

それなら話は分かる。

「残念だが、彼には残つてもらおう。私はもう少し、アルマレーク共和国の事を知るべきだ」

「それは……、どういう意味ですか？」

「テオフィルス殿には、私の側にいてもらう。協力者として彼が相応しいか、見極めるために」

僕は目の前が真つ暗になった。

「僕は反対です！　彼も、帰らせるべきです！」

「俺は構わない、王太子殿」

テオフィルスは無表情に僕を見つめる。

その背後に七竜リンクルが、面白がるように金色の目を細めていた。

まるでセルジン王とテオフィルスを操っているように思えた。

僕を苦しめるために……。

「僕は嫌です！　彼の同行は……、絶対に嫌です！」

王にそう伝えるのが精一杯で、そのまま僕は自分の天幕へと踵を返した。

天幕へ入り、怒りに首に巻いたストールをベッドに投げつけた。

「どうなさいましたか、オリアンナ様？」

ミアの言葉も耳に入らない程の、怒りに涙が頬を伝う。

七竜リンクルの思惑に負けてしまった事に、テオフィルスがこの先も、セルジン王と僕の側に居続ける事に、そして僕自身が、どうしようもなく彼に惹かれてしまっている

事に。

僕はベッドの上で丸くなり、頭を抱えて泣いた。

## 第二十一話 解放

しばらくして僕はようやく冷静さを取り戻し、心配するミアをおいて再び天幕から出て王の元へ向かう。

泣き顔を見られないようにマントのフードを深く被つて顔を隠し、少し不貞腐れ気味にセルジン王の前に立った。

「気に入らない事をしたようだな。怒りは当然だろう、私が突然、勝手に考えを変えたのだから」

「……どうぞ、陛下のお心のままに」

テオフィルスが王の側にいる限り、気安く王の名を呼ぶ事も出来ない。

彼に正体を見破られた事を、王に悟られてはいけないのだ。

王の前で男子を装うのが辛く思っていた矢先に、逆戻りを強いられる。

僕は……、誰を守っているんだろう？

フードの陰から、テオフィルスを睨みつける。

彼は無表情を装いながら、真青な瞳を僕に向けていた。

その瞳に心を奪われそうになる自分を、心の中で叱責しっせきする。

七竜に操られているだけだ、彼を好きな訳じゃない！  
しつかりしろ！

王は僕の言葉を汲取り、次の指示を出す。

「そうか。では、そうさせてもらう。トキ・メリマン！」  
僕の心が凍り付きそうになった。

トキが王を裏切る行動を起こした制裁が、今行われるのではないのか。  
僕はフードの影から緊張しながら、事態の成り行きを見つめていた。

「御前に、国王陛下」

近衛騎士隊長トキは元より裁きを受ける覚悟で、王の前にひざまず跪いた。

「ルディーナ・モラス」

「はい、セルジン様」

王の後ろからちよこんと、モラスの騎士の総隊長が姿を現し跪いた。

緊張したその場にまったく不釣り合いな彼女は、人形のように華やかで、愛らしく微笑む。

「そなた達の私への、警護の任を解く」

二人は静かに王の裁きを受け止めたが、僕は衝撃を受け王に詰め寄った。

「待つて下さい！ 二人は僕を助けてくれただけです。陛下に逆らった訳ではありません

ん！」

マントから覗く僕の顔は、目が少し赤くなっている。

驚いた王は、僕のマントのフードを外し、顔に手を添え上向させた。

「そなた、泣いていたのか？」

僕は怯み王の手を逃れようとしたが、王は屈み込んで僕を抱き上げ、自分の腕に座らせた。

「わあっ………！ 陛下？」

突然の視界の高さと、バランスの悪さに恐怖を感じ、僕は思わず王の首に抱き付く。

「陛下！ 降ろして下さい！」

僕は真つ赤になつて抗議した。

王はそれを無視して、次の指示を出す。

「エラン・クリスベイン、ここへ！」

モラスの騎士隊の後方にいたエランは、突然の呼び出しに狼狽える。

昨夜の行動を王は全て見抜いている、関わった誰もがそう思った。

「セルジン様、詳細は先程お伝えした通りですわ」

エランの呼び出しに、ルディーナも黙っていられない。

斜め後ろに控えるエランを庇うように立ち、王から隠す。



王が怒りを継続させていると誰もが考え、辺りに緊張が漂う。

「陛下、彼等は関係ありません！ お願いです、降ろして下さい！」

こんな時に他の誰より高い位置にいる事に、僕は困り果て助けを求めよう周囲を見渡した。

王の隣にいるテオフィルスと目が合う。

昨夜のエランとの喧嘩けんかのせいで、彼の頬と唇は赤黒く腫れ上がり痛々しい。

それはエランも同じで、明らかに彼等が殴り合つた事を証明していた。

テオフィルスは呆れ顔で僕を見上げている。

呆れているのは王の大らかな行動に対してか、困つてあたふたしている僕に対してか。

僕はあからさまに視線を逸らしたが、そんな様子を気にもせず、王は声を張り上げた。

「そなた達三人とその部下は、今からこの王太子専任の近衛とする。私に何があろうと、必ず王太子を支え守り抜く事を私に誓え！」

王を取り巻く者達から、安堵あんどの息遣いが聞こえた。

僕は驚き、降ろそうとしない王を見下ろした。

「陛下？」

「トキ・メリマン、ルディーナ・モラス、エラン・クリスベイン、私に誓いを！」

王は真剣な眼差しで、三人を見つめていた。

「もとより、オーリン王太子殿下をこの命に代えてもお守りする所存で御座います。陛下に誓います」

「私も、当然ですわ。誓います」

「陛下の御意志に従います。微力ですが、必ずお守りする事を誓います！」

三人はそれぞれの意思を王に告げ、セルジン王は領き、微笑みながら僕を見上げる。

「そなたは国のために命を懸ける者達を守るのだ、それが《王族》の務め。出来るか？」  
「はい、僕は彼等を……、国王軍を守ります。陛下に誓います！……でも、陛下は誰がお守りするのですか？」

僕は王の顔を、心配そうに上から覗き込む。

王は僕を支えながら、優しく唇にくちづけた。

アルマレーク人が大勢いる中で王の大胆な行為に、僕は思い知った。

テオフィルスに完全に気付かれた事を、セルジンは知っているんだ。

だから、彼を手元に置いた！

その事に戸惑いながらも、僕の意識は王の行為に呑まれ何も考えられなくなった。やがて脱力した僕は、王に抱きしめられながら地面に足を降ろす。

「セルジン……」

「そなたは、誰にも渡さぬ」

王は僕の耳元で囁く。

僕は微笑みながら、彼にしがみ付いた。

「離さないで下さい。僕はあなたと一緒にいたい。ずっと……、あなたの側にいさせて下さい」

答えるように王は、抱きしめた腕に力を込める。

王の長い黒髪が、優しく流れ僕を包む。

少し苦しい状態で僕は、今まで経験した事のない幸せに自然と涙が溢れた。

王がアルマレーク人の前で、僕を一人の女性として扱ったのだ。

それは長年課せられた男子としての頸木を、解放つものだった。

王太子オーリンではなく、王の婚約者オリアンナ姫を印象付ける。

僕の無意識の望みを、セルジン王は叶えたのだ。

王は腕の力を弛め僕を少し離し、指で優しく涙を拭った。

「私は影だ。本来護衛等、必要ない」

僕を見つめながら、王は優しく微笑んだ。

王の手を取り、僕はその手の平にくちづける。

「では……、私がお守りします」

「私」という言葉を自然と口に出来たのは、オーリンとしての呪縛から解放されたせいだろうか。

それと同時に、周りの者達が息を呑む。

オリアンナの姿が不思議な事に、どこから見ても、誰の目からも女性として映り始めたのだ。

一人の姫君として、本来の愛らしさが滲み出る。

それは魔法が生み出す作用とはまったく関係のない、恋という自然の感情が作用させた劇的な変化だった。

「オリアンナ姫？」

王は驚き、僕に見入った。

そして少し困った顔で微笑む。

「そなたは……、私を惹きつけ過ぎる。困った姫君だ」

僕はその言葉に、頬を赤く染める。

王は再び僕を抱き寄せ、テオフィルスとアルマレーク人達に向き直った。

「今さら隠し立てしても、貴殿達は気付いているであろう。このオーリン・トゥール・ブライデインが、貴殿達が探し求めるオリアンナ・ルーネ・フィンゼルである事に」

フィンゼルの姓で呼ばれた時、僕は王に強くしがみ付いた。

アルマレーク人達に攫さらわれるように思えたからだ。

竜騎士達は事前にテオフィルスからその事を聞かされていたため、驚きはなかった。

「王に逆らわない」それは〈七竜の王〉の絶対的な命令だ。

隠し立てしていたエステラーン王国の人間に対して、抗議する者は誰もいない。

「初めて出会った時から、薄々気が付いておりました。アルマレーク人の体型と、領主家の血脈は隠す事は出来ません」

テオフィルスは胸に手を当て、頭こゝろを垂れ礼を取った。

「フィンゼル家の血族を健やかに育てて頂き、エステラーン王国に対し、我等は感謝の念しか御座いませぬ」

「勘違いされても困る。彼女はオリアンナ・ルーネ・ブライデインでもある。我が国で唯一生き残った《王族》であり、私の婚約者だ。貴殿達に渡す訳にはいかぬ！」

テオフィルスは頭を上げ、僕を見た。

その青い瞳には憂いが浮かび、悲しげな微笑みを浮かべている。

「連れ去りは致しません。エドウィン殿に何かあつた時に、オリアンナ姫にレクーマの指輪をはめて頂くだけで、我が国は救われます。他に望みは御座いませぬ」

竜騎士達がテオフィルスの意思に従うように一斉に跪く。

それはまるで〈七竜の王〉の言葉を、僕に懇願して見えた。

「そなたはどうしたい、オリアンナ姫？」

僕はセルジン王の深い緑色の瞳を見つめた。

「選択権は僕にあるの？」

「僕」と言う言葉に戻った事に、王は苦笑しながら頷いた。

僕は王の腕から離れ、テオフィルスの前に立つ。

長身の彼は、優しい瞳で僕を見下ろした。

「僕は……、セルジンを愛している」

本人にも告げた事のない言葉を、なぜ異国の彼の前で素直に言えるのか不思議に思った。

テオフィルスは無表情で、その言葉を受け止める。

「そう……だろうな」

「本当にレクーマの指輪をはめるだけで良いのか？」

彼は静かに頷く。

僕は満面の笑みで、残酷な言葉を口にした。

「それじゃあ、父に何かあった時は、竜の指輪をはめると約束するよ。でも親同士が決めた君との婚約は、解消してもいいよね？」

「……そういう事になるな」

七竜の決めたとは言わず、親同士の約束という事にしておく。

その方が解消出来る。

テオフィルスの顔が、一瞬強張った。

婚約解消はしたくはないのだ。

僕は勝ち誇った笑みで、彼に手を差し出す。

「君との婚約は解消する。同意するなら、握手を！」

しばらく躊躇ためらっていたテオフィルスは、渋々その大きな手を僕に差し出した。

二人が握手を交わした事により、婚約は解消された。

「君とは友達だ。これからよろしく頼む」

微笑みながら手を離れた僕は、七竜レクーマの意思が感じられない事を不思議に思った。

七竜リンクルの気配も、感じない。

セルジンが僕を守っているのか？

単純にそう思いながら、王の元に駆け寄り抱き付いた。

七竜の加護が僕から消えた事に、まだ誰も気が付いていなかった——。

## 第二十二話　イリの脅威

爆風で吹き飛ばされた枯れ木が、波を打つように丈高く横たわっている。

竜の葬儀が行われた場所は、夜には暗闇で見えなかつたがそんな場所だつた。

王が野営地を、わずかに残つた森にした理由は明白だ。

ここじやあ、屍食鬼達から丸見えだ。

竜の羽ばたきで巻き起こる大きな風を浴びながら、僕は一騎ずつ空へと飛び立つ竜騎士達を見ていた。

上空は屍食鬼の群れで覆い尽くされているが、地上との距離は遠い。

アルマレーク人達が帰還出来る、絶好のタイミングだ。

「今日は屍食鬼達が遠いですね。陛下のご配慮ですか？」

セルジン王の横に来た宰相エネス・ライアスが、上空を見上げながら訊ねる。

「私も不思議に思っていた、こんなに空が広いのは初めてだな。まるで竜を帰還させた意志でも働いているようだ」

王と宰相は顔を見合わせた。

「女神でしようか？」



「そうかもしれない。水晶玉の魔力がぶつかり合つて、アドランは吹き消えたのに、なぜ私にはダメージが無い？」

「マルシオン王が陛下を助けられたのでは？」

「分からね。彼が現れたのは、あの爆風の直後だ。瞬時に私を守る事等、出来るのか？」

王は森の後ろ、断崖絶壁の上にそびえる廃墟を見つめた。

トレヴダール城——、そこに女神が待っている。

セルジン王の横にいた僕は、マルシオン王の冷たい琥珀色の瞳を思い出した。

《愚かな姫君、後悔するぞ》

僕は左腕にはまる腕輪のある位置の腕甲に触れる。

《天界の罠に落ちたくなければ、はめるべきではない》

すぐにでも、腕輪を取り除きたい衝動に駆られる。

テオフィルスを手助けた時は制御出来たが、普段の状態で魔法制御出来る自信は、まったくくない。

焦りにも似た気持ちで、次の竜が飛び立つ様子を見ていた。

風が巻き起こり、僕の金色の短い髪がなびく。

竜が飛び立った場所に、羽ばたきが巻き起こす風に、身を屈めるテオフィルスの姿が現れた。

七竜の決めた婚約を、解消したばかりで気まずい気持ちと、彼の姿がまだ心を動揺させる事に僕は苛立ちを覚えた。

不意に視界を遮るように、目の前に人が立つ。

「エラン」

「風除け。これも護衛の務め」

そう言つて、にやにや笑う。

王に僕の近衛を命じられてからのエランは、時々レント城塞にいる時のような、悪戯っぽい笑顔を僕に向ける。

人数の増えた近衛騎士隊に囲まれて、トキとルディーナに挟まれ緊張感が漂う中、彼の笑顔が僕には救いだ。

「オリアンナ、そろそろイリを」

「はい！」

王の呼びかけで僕は、イリが待つ自分の天幕に行くため騎乗した。

この場所へ移動する際、イリについて来るように呼びかけたが、眠ったまま動く事もなかった、まるで声が聞こえてないみたい。

「護衛は途中までいいよ、イリが威嚇して暴れても困るから」

「判りました。ではオーリン様が見える範囲で待機致します」

トキが答えルディーナと共にそれぞれの馬に騎乗し、各隊の騎士達も移動のために用意を始めた。

王は黙って彼等の様子を見ている。

横にはエネス・ライアスとアレイン・グレンフィードが、王を守り待機していた。

昨夜まったく対極の行動を取った二人は、その事が蟠りわだかまとなったりしないか、僕はどことなく不安を覚えた。

セルジン王が微笑みながら近より、騎乗した僕に手を差し伸べる。

王と手が重なり、不思議な安心感が生まれた。

「イリに近寄る時は、竜騎士の鎧を着用する事を忘れるな」

「はい。でもセルジンは？」

「私はテオフィルス殿と話がある。すぐに天幕へ戻るが、出立の準備をしておくように皆に伝えてほしい」

「判りました」

王は僕の手にくちづけし、微笑みながら別れた。

その場を離れる前に僕は、頭数が少なくなつた竜と、一人残るテオフィルスを見る。空を見上げる彼は、竜騎士達を見送っている。

屍食鬼に覆われた薄暗い空に、竜の吐く薄赤い炎の吐息が、印のように柵引く。

竜が一頭、また一頭遠ざかって行く。

一緒に、帰ればいいのに……。

婚約を破棄して、もう関係ないはずなのに、なぜか胸が痛んだ。

イリは相変わらず、僕の天幕の前に居座って眠っている。

竜を起こさないようにそつと近づき、横を通り過ぎて天幕に入った。

「オリアンナ様、そろそろあの竜を、どかして頂けませんか？」

ミアは顔を引き攣らせて入り口を指差した。

「どうやら竜が怖いらしい。」

「分かってるよ、そのために戻ったんだ。竜騎士の鎧の装着を手伝ってくれるかな」

「はい！」

ホツとしたように急ぎ鎧の用意を始める。

何度か身に着けているうちに、ミアも他の侍女達も、異国の鎧の装着に慣れてきた。

「そんなに、竜が怖い？」

「まあ！ オリアンナ様は、怖くありませんの？」

「うん。怒ると怖いけど、普段はかわいいよ」

「そ、そうですか……」

納得いかないように、ミアが首を傾げる。

僕は微笑みながら、イリに出会ったからだと思う。

あの真ん丸の目を見た時から、可愛いと思いい心が通じ合った。

突然僕を連れ去ったり、周りを蹴散らして突進したり、厄介な面はあるけど、僕を慕ってくる姿を見ると邪険には出来ない。

鎧を装着し箒手の内側を見て、侍女達が怖がる理由も解る。

素手で竜に触れないなんて、人間とはまったく違う生き物なんだ。

あんなに可愛いのに……。

天幕を出て、イリから少し離れた所で立ち止まる。

トキと近衛騎士隊は竜を刺激しないように、立ち枯れた森の木の陰に待機していた。

ルディーナが指揮するモラスの騎士は、魔力の届く範囲で僕を囲む円陣を組む。

エランもその中にいた。

早くこの状況にも慣れなきゃ。

大勢の人間に護衛される事に戸惑い、彼等の視線に自由を奪われる。

溜息を吐きながらイリを振り返ると、竜は緩やかに首を上げ、何かを探して辺りを見回していた。

「イリ！」

僕が近づこうとしたその時、イリが鎌首をもたげ、身体を膨らませ翼を大きく広げて、口を開けて威嚇する。

暗い口の中から、赤い炎が揺らめく。

「え？」

「オーリン様、危ない！」

ルディーナの悲鳴にも似た警告は、イリの大音量の咆哮で消えた。

僕は耳を押えてうずくまり、意識を失いそうになり地面に倒れる。

それはモラスの騎士達も同様で、唯一影響を受けなかったルディーナが、僕の側に駆け寄り障壁を作る。

「大丈夫ですか、オーリン様？」

抱き起こされた僕は、耳が完全に聞こえなかった。

朦朧とする意識の中で、何が起ったのか必死に思い出そうとする。

身体に大きな振動が伝わり、それが竜の近づく地を揺るがす振動だと気付いた時、僕は恐怖のあまり目を見開く。

イリは怒りに棘状鱗を逆立て、大きな口を開けながら僕に向けて突進してくる。

ルディーナの作り出す障壁に触れ、金属的な悲鳴を上げながらも、その障壁を突き破る勢いで、何度もぶつかった。

僕の耳が、＜生命の水＞の魔力で、徐々に回復する。

「ダメだ、イリ！ 暴れるな！」

イリの鱗は障壁に触れて傷つき、端から割れ始めていた。

「イリ！」

僕がイリに駆け寄ろうとするのを、ルディーナが必死に押さえつける。

「いけません！ イリはオーリン様を攻撃するつもりです」

「どうして？ そんな事はしないよ！」

「オーリン様の声が、聞こえていない、分かりませんか？」

言われて僕は、呆然とイリを見つめた。

怒りで鱗は黒く変色し、目は興奮して尖り、大きな口の中から今にも炎を吹き出しそうになっている。

炎を吐かれたら、大勢の人間が焼け死ぬだろう。

「ゆっくり、後退しましょう。刺激しては、ダメです」

僕達は後退を始めた。

モラスの騎士達の中には、まだ意識を失って倒れている者達もいる。エランが逸早く回復し、意識のある者達に障壁を作るよう呼びかけた。

トキと近衛騎士隊も意識のある者達は仲間を助け起こし、イリを刺激しない場所まで移動を始める。

イリはその動きに反応し、翼をバタつかせ大きな風を巻き起こす。

少し空中に浮きあがったイリは、上体を大きく反らし口の中の炎を周りに吐き出そうとした。

「火を吐くぞー！」

トキの警告に意識のある者達は、木立の陰に隠れ身を低くする。

イリが炎を吐き出した！

「イリ！ 止めろ——！！」

僕が叫んだその時、上空に大きな羽ばたき音と、不思議な鳴き声が聞こえた。

イリは炎を吐くののを止め、その声に答えるように鳴き始める。

イリの鳴き声は、どこか物悲しく聞こえた。

羽ばたきが近付く、そしてイリより大きな竜が、地上に舞い降りた。

「リンクル、火を消せ！」

竜の背から命令が聞こえると同時に、周りを焼き尽くそうとした炎が消えた。



声の主は竜から飛び降り、イリの目の前に立つ。

テオフィルスは同情するように、イリに呼びかけた。

「お前の竜騎士は、いなくなった訳じゃない。今はお前に、心を開く事が出来ないだけだ。イリ、〈七竜の王〉として命じる、レクターマオピオンへ帰れ！」

イリは抗議して鳴いたが、七竜リンクルが一喝する唸りを発した事から、項垂れ従う素振りを見せた。

テオフィルスはアルマレークの方向を指差し、イリに飛び立つ命令を出す。

イリはまだ自分の竜騎士である僕を待っていた。

目の前にいる事に気付かず、僕が呼びかけるのを待っている。

「イリ！ 帰れ！」

イリは僕を呼び、可愛い声を上げる。

だが、答えは返ってこない。

悲しい叫びを残しながら、イリは飛び立った。

風が巻き起こる中、僕はイリに向かって必死に呼びかけた。

「イリ、イリ！ 僕はここにいるんだ、どうして分らないんだよ！ イリ——！」

「無駄だ！ お前は七竜の加護を捨てた。ただの領主家血縁の扱いになったんだ」

「どういう事だよ？ イリは、僕の竜だ」

僕は怒りから、テオフィルスに掴みかかる。

彼は溜息を吐きながら、冷ややかな目で僕を見下ろした。

「お前、七竜レクーマの声が聞こえないだろう？」

「あ……」

言われてみれば、そうだ。

レクーマの声も、身近にあつた存在感もなくなっている。

「へ七竜の王」との婚約を破棄したお前がイリに乗るには、何年もかけて一から竜騎士の修行に励むか、レクーマの指輪を嵌めるしかない」

僕は呆然と、彼を見つめた。

「馬鹿な、へタレ小竜。お前は竜騎士、失格だ！」

冷たく僕の手を振り払い、テオフィルスは元婚約者に背を向け立ち去った。

僕はただ、その姿を見送るしかなかった。

イリに失つた悲しみに、一筋の涙を流しながら……。

## 第二十三話 天界の幻都（一）

僕は怒っていた。

国王軍がトレヴダール城に向かって出発した時、セルジン王の横にテオフィルスが並んでいたからだ。

まるで彼一人が王の近衛騎士を務めているように。

《馬鹿な、ヘタレ小竜。お前は竜騎士、失格だ！》

イリがいなくなった悲しみが収まっても、あの一言はどうしても許せない。

僕はイリと友達になっただけだ。

もともと竜騎士じゃない！

彼の態度が僕を馬鹿にしているようで、思い出すだけで頭に血が上る。

こんな奴、大嫌いだ！

「……オーリン様？」

ルディーナの呼びかけが聞こえたが、頭に血の上っている僕は周りが見えない。

大嫌い……。

「おい、ヘタレ小竜！」

「……………」

テオフィルスの低い大声が、僕の周りにいる人間を凍り付かせた。

王太子をヘタレ呼ばわりした不屈き者は、今は王の横に並ぶ特別な存在と見なされている。

僕は驚きに大きく口を開けたまま、呆然と彼を見た。

セルジン王の前で、絶対に呼ばれたくない言葉だ。

ヘタレ小竜！

「陛下がお呼びだ、早く来い！」

僕の怒りは、頂点に達した。

テオフィルスの横に馬を進め、僕は腰を浮かして彼の横を通りすぎりに、甲冑からわずかに覗く膝裏を、甲冑の靴で思いつき蹴り上げた。

「うっ！ ……く……っ……」

「陛下の前で、ヘタレ小竜と呼ぶな！ ふんっ！」

僕は真っ赤になって、ぶりぶり怒りながら勝手に馬を前に進める。

僕の近衛になったエランは、馬の上で蹲うつすまるテオフィルスを横目で見ながら、悪魔のような笑みを浮かべた。

僕の蹴りの痛さを、一番知っているのはエランだ。

テオフィルスに同情の視線を投げながらも、セルジン王は無言で笑う。

「オリアーナ、私の横へ」

王の呼びかけに僕は振り返り、天使のように微笑んだ。

「はい、セルジン」

断崖絶壁の上に建つトレヴダル城の周りには、大きな城下街が横たわる。

そこを抜けなければ、城への道に辿り着けない。

枯れた森を抜けて行く先は徐々に傾斜し、大地にしがみ付く朽ち果てた建物が現れる。

崩れた壁に焼け落ちた屋根、枯れた枝が道を埋め尽くし、十五年間放置された城下街は、まるで国王軍の到着を拒否しているように見える。

死んだ者達の呻き声が聞こえそうに思える。

嫌だな、こんな大きな街に誰もいないなんて。

旅の間にも廃墟は何度も目にしてきたが、今回は規模が違い、城下街の道はまるで迷路のように込み合っている。

「先兵隊を送れ！ いつもの通り、目的地までの通れる道を見つけ出すんだ！」

前衛隊を指揮する隊長が、大将アレイン・グレンフィードの指示に礼を取り立ち去った。

廃墟に大量の人間が入り込むのは危険だ。

いつ建物が崩れるか分からない状況で、魔物と遭遇する危険があるからだ。

先発隊が安全を確認しながら、障害物を取り除く。国王軍は少しずつ城下街へ移動する。

「エネス、変だとは思わぬか？」

「……陛下もお気づきですか」

そう言つて二人は街を囲むように建つ、丈高い台座の上の球体を見つめた。

「あんな物、以前はなかった」

「ええ、ここが壊滅した時にもありませんでした。誰か支配者がいる証拠でしょう」

「……女神だな。では好都合だ」

セルジン王は水晶玉の〈管理者〉になる事と引き換えに、僕を生かす約束を、女神にさせるつもりでいた。

僕は〈ありえざる者〉オーリンの、命の光によって生かされている。

王が水晶玉から切り離された時、命の光は僕を離れセルジン王に移り、水晶玉の〈管理者〉となる。

僕はその段階で死を迎えると、オーリンは言っていた。

僕はセルジンを助けるためなら、死んでもいい。

でも……。

そう思つて王を見ると、彼は微笑みながら僕に手を差し伸べている。

馬上で王と手を繋いだ。

「さあ、参ろう」

王の笑顔が、僕の不安をかき消し、心に明るさが舞い戻る。

王の側にいると、心は満たされる。

僕は微笑み、頷いた。

生きたい、あなたの側で……。

儚い願いを女神は聞き届けてくれるのか、それを確かめるために二人は進んだ。

国王軍はゆつくりと進む。

前衛部隊が先発隊の連絡を待つて、城下街に広がって行く。

先発隊が切り開いた道を、障害物をさらに取り除き、道幅を新たに大きくし、前衛部隊が完全に城下街に入り、セルジン王を囲む本隊が、廃墟の街へと入り始めた。

「……………こは、変だ」

テオフィルスが何かを感じ取り、ぼそりと呟いた。

廃墟独特の打ち捨てられた埃っぽい風が吹き付ける中、何かが存在している気配がしてならない。

それは僕も同じで、王と手を取り合っていないければ、何もかも捨てて逃げ出したい程の、恐ろしい気配を感じ取っていた。

本隊の半分が入りかけた頃、誰かが異変に気付く。

「光っているぞー」

その声に僕は振り返る。

廃墟を囲む球体の石像が、光を帯び透明に見え、中に何か<sup>うごめ</sup>が蠢いていた。

車軸の無い歯車が幾重にも連なり機械じみたそれは、球体の殻を割り、廃墟の乾燥した空気を貫く強烈な閃光を放った。

人々は一斉に目を覆い、しゃがみ込む。

何が起こったのか判らないまま、僕は馬上で王に守られ抱きしめられた。

「大丈夫か？」

「は、はい。いったい、何が……？」

光はいつの間にか消え、石像の球体は消えていた。



台座のある上空に緩やかな光を放ちながら、機械のような球体が浮かび、その周りから透明な光の幕が広がり始める。

機械は一機ではなく、確認するだけでも八機の物体から、廃墟の街を囲むように光の幕が伸びていた。

国王軍の本隊は、王に従う者達が幕の中に大急ぎで駆け込み、後衛部隊の大部分が幕の外に取り残される。

光の幕に身体が触れた人間は、瞬時に一切の原形を留めず消滅した。

国王軍に、恐怖と混乱が広がる。

「陛下をお守りしろ！ 前衛部隊、第三隊から第五隊は後衛へ」

大将アレインの冷静な大声が、混乱を鎮める。

大勢の兵士達が後衛に回り、王を守り光の壁から本隊を遠ざける。

外に残された後衛部隊は光の幕を打ち破ろうと、投石器で破壊を試みたが、打ち付けられた石は幕に触れた瞬間に消失し、何の役にも立たない。

「弓兵、あの機械を撃ち落とせ！」

後衛部隊の指揮官が、上空の機械を指差した。

弩弓の射手は光の幕に近寄り、上空の機械に矢を放つ。

投石器でも同じく機械に狙いを定め、石を放ったが当たる事は無く、逆に国王軍に跳

ね返った。

後衛部隊に死傷者が出た事で、攻撃は一旦取り止めとなる。

得体の知れない機械は、まるで嘲笑うように空中で上下に漂っている。

「おい、幕が伸びているぞ」

「え？」

その異変に気が付いた者は、自分達が丈高い円柱の中と外にいる事に呆然とした。

円柱の先は間もなく、屍食鬼達へ達する。

屍食鬼が降りてくるかもしれない、誰もがそう思った時、円柱の内側に入った屍食鬼が徐々に消滅し、日の光が差し込んでくる。

屍食鬼の覆い尽くす暗黒の天空に、一か所だけ穴が開き青空が覗いた。

僕は王の腕の中で、それがとても美しいと思えた。

だが……。

「何だ、あれは？」

最初、それは青空に光る一つの星と思えた。

それはやがて線となり、円柱に螺旋を描きながら降りてくる。

近づいて来たそれは、美しい天馬に乗った光り輝く兵士達……、天界の軍勢だった。

しかも人も馬も、通常の人間の倍くらいに大きい。

国王軍はその迫力と美しさに、度肝を抜かれ戦意を喪失した。

今まで戦ってきたのは知性の無い醜い屍食鬼ばかりだったが、この軍勢は神々しいばかりの叡智を携えている。

天馬は廃墟を踏み潰しながら、国王軍を囲む。

「セルジン……?」

王が抱きしめる腕に力を込めた事で、緊張が僕に伝わる。

「……天界の領域だ。私の魔力が効かない」

「え?」

僕は青ざめた。

王は厳しい顔付きで僕を離し、辺りを見回しながら叫んだ。

「マルシオン王! 私を迎える準備は出来たのであろう。姿を見せたらどうだ!」

天界の軍勢は身動き一つせず、ただ黙ってセルジン王を見つめていた。

廃墟の空気は、痛いほど張りつめている。

笑い声が聞こえた。

廃墟の丈高い鐘楼から、その声は響き渡る。

「天界の兵士達、貴殿達は大き過ぎるようだ。人間の大きさに合わせてはくれないか?

私の姿が、目立たないだろう?」

その傲慢な命令に、天界の軍勢は従った。

みるみる彼等の大きさが縮み、人間とほぼ同じ大きさに変わったが、神々しさは消える事はない。

視界を遮る兵達が縮んだ後、王は声の方向を見る。

すると鐘楼から輝く翼を持った人間が飛び降り、滑空して兵達の頭上を飛び、王の前で羽ばたきながら、金色の髪をなびかせ降り立った。

「遅かったな、セルジン・レティアス・ブライティン。臆したのかと思ったぞ」

挑発的に微笑むマルシオン王に、かつてセルジン王の薬師として仕えていたマール・サイレスの姿はない。

昨日出会った時の黒い服装は、煌びやかな金糸の刺繍が施された白い、まるで戴冠式にでも出るような服装に変わっていた。

「ふ、女神に会うための正装か？ 時間の放浪者が、そんな服装をどこで手に入れた？」

「あいにく私は、貴殿を上回る魔力の持ち主だね。服装等どうにでもなる。それより、彼女は美しいものを好む。気を付けた方がいい」

王は呆れたように、周りを見渡す。

「美しいもの、こんな廃墟で？」

マルシオンは馬鹿にしたように笑った。

「まだ、廃墟に見えているのか？」

その一言で、辺りの景色は一変する。

廃墟は消え去り、壮麗な白亜の都が姿を現した。

それは王都ブライデインにも似て、斜面に巨大な建造物が十分な広さと間隔を持って建ち並んだ大都市だ。

斜面の頂上には、優美な宮殿が聳え立つ。

「ようこそ、天界の都へ」

マルシオンがそう言つて微笑んだ時、聞き慣れた鳴き声が聞こえ、僕は驚き振り返る。

光の幕の向こうに、煌めく夕陽色の炎が見えた。

それは凄いスピードで、光の幕に突っ込んでくる。

「来ちゃ、駄目だ。危ないつ、シモルグ・アンカー！」

四枚の燃える炎のような翼は勢いを失わず、そのまま光の幕に飛び込んだ。

「シモルグ！」

僕の心配をよそに、聖鳥は光の幕を突き破り無事に円柱の中に侵入した。

僕はホツとし、聖鳥が降り立つのを待った。

だがシモルグは真つ直ぐ、天界の宮殿へと向かう。

夕陽色の聖鳥が宮殿の中へと消えた。

セルジン王は顔を顰<sup>しか</sup>め、警戒してマルシオンを睨む。

「さあ、役者は揃<sup>い</sup>った。ご案内しよう」

古のエステラーン王は、大きな翼を長い豪華なマントに変えて、行く手を指し示した。宮殿へと続く大きな一本道が、僕達を迎えていた。

## 第二十三話 天界の幻都（二）

美しい音色が聞こえた。

豎琴かと思えたが少し違う、まるでシモルグ・アンカの声を聞いているような、頭に直接響く音。

それは人々の緊張を和らげた。

街を囲む円柱が消え、空に屍食鬼の姿はなく、一面柔らかな光に満ちた天空に、一本の巨大樹が爽やかに立つ。

煌めく風にさやめく枝葉の奏でる音色は、巨大な木から出る梢の葉擦れの音だ。

あの木の根元で眠れたら、気持ちいいだろうな。

セルジンが横にいて、シモルグが優雅に空を飛んで。

僕はそんな想像をしながら、共に馬を進めるセルジン王を見る。

王は前を歩くマルシオン王を、警戒しながら見つめていた。

得体の知れない古のエステラーン王マルシオンは、振り返る事なく颯爽と皆を導く。まるで守護者のようだ。

でも……、彼の本当の目的は、ロレアーヌ妃の救出なんじゃないか？

先程の彼の素振りには、どう見ても天界人に見えて、僕の心に疑念が渦巻く。

《彼女は嫉妬深い、気を付けた方がいい》

メイダール大学図書館で出会ったウロボロスの、地から響くような唸れしゃが声を思い出す。

女神……。

今から会いに行くのは、どの女神だろう？

数が多すぎて分からないよ。

この世には地に住まう神と、天に住まう神がいる。

地に住まう神は直接人々に影響を与え、天に住まう神は地上には無関心。

必然的に地に住まう神々が、多く人々に崇められている。

天に住まう神は、遠い古の神話いじえの中に存在する。

主神ラーデイスを中心に様々な神々が、竜神イルシユーと戦い勝利する。

負けた竜神は八つに切り裂かれ、七つは地上に一つは魔界へ落とされたという。

僕は子供の頃に神話を面白い読み物として読んだが、女神の名前をそんなには記憶し

てはいない。

一番好きだったのは……、知恵の女神エイアだったかな？

怖かったのが戦いの女神……、あれ？



名前覚えてない、なんだっけ？

ふと視線を感じて横を向くと、王の横にいるテオフィルスがじつと僕を見ている。目が合った瞬間、お互いそっぽを向く。

なぜ彼を、側に置くんだろう？

王が何を考えているのか、僕には推測する事も出来ない。

婚約を解消して以来、テオフィルスに対するイライラが募った。

それがどうしてなのか、考える気にもなれない。

一行は急な坂道を、歩兵の速度に合わせてゆっくり馬で上る。

急坂の割に、息が乱れる事はない。

不思議な浮遊感が国王軍の警戒心を解き、皆の気分が高揚し自然と微笑みがこぼれた。

天馬に乗った美しい天界の兵士達が、楽しげに並走する。

道の両側には頂点の宮殿を囲むように、丈高い白亜の建物が建ち並ぶ。

不思議な材質で出来ているその建物は、広い雲の敷地に建ちそれぞれが独立した領土を占めているように見えた。

こんな綺麗な場所は見た事がない。

「この辺で良いだろう」

突然、前を歩いていたマルシオンが立ち止まり振り返る。

セルジン王は手を上げ大将アレインが指示を出し、伝令達が国王軍に止まるように大声で指示を伝えた。

国王軍の長い列が乱れる事なく、急坂の途中で止まる。

「マルシオン王、まだ目的地は先に見えるが？」

「いや、ここに良い。前衛部隊をここに置いて行け」

マルシオンの言葉と同時に、まるで雲が広がるように道が変化し広場が現れた。

国王軍の気分の高揚は、一気に吹き飛ぶ。

先程後衛部隊と引き裂かれ、離れ離れになったばかりである。

前衛部隊とこの未知の天界で別れ、本隊のみで女神と対する事になる。

「それは出来ぬ！ 前衛部隊の身の安全の保障が無い限り……」

「それは貴殿次第だ、セルジン王。いずれにせよ宮殿に入れるのは、一握りの人間のみの。貴殿はせいぜい女神の機嫌を取るのだな」

マルシオンは歪んだ笑いを王に向ける。

「私は、誰の機嫌も取らぬ！」

「強がっていられるのも、今のうちだ。行くぞ」

マルシオンは一人背を向け、先へと進んだ。

セルジン王は憤りを感じながらも、冷静に指示を出す。

「アレイン、そなたは前衛部隊を守れ」

「しかし、陛下……」

「国王軍を統率出来る人間は限られている。私に何があつた時には、兵を退け。天界の兵士と戦うのは無意味だ」

「判りました。陛下、どうぞご無事で……」

アレインは王に一礼し、前衛部隊の元へ行き待機を命じた。

「セルジン……」

僕は不安から、王の腕に触れた。

王は微笑みながら、その手を取りくちづける。

「大丈夫だ。何があつても、そなただけは守り通す」

「僕は……、あなたの方が心配です！」

王がまるで死を覚悟しているように見えたからだ。

僕の手を取る王の手に、力が込められた。

ここでは魔力が使えないと言っていた王の手から、安心感が伝わり、僕の心に沁み渡

る。

「陛下……、魔力が？」

「そうではない。だが、これは別の魔法だな」

そう言つて王は優しく微笑みながら、馬上で僕を抱き寄せくちづけた。

急坂を上る国王軍本隊の足取りは、前衛部隊と別れた辺りから次第に重くなる。

まるで頂上にある宮殿が意志を持ち、僕達の来訪を拒否しているように感じた。

周りを囲む天界の兵士達は、先程とは打つて変わつて冷たく敵意に満ちている。

それは異常なまでの緊張感を生み出し、国王軍の足取りはさらに重く苦しくなる。

どんなに歩いてもあの宮殿には辿り着けない、そんな錯覚が宮殿をさらに遠く見せていた。

どれだけ進んだのか分からなくなった頃、マルシオンが立ち止まり振り返る。

「人間の割に根性のある軍だ、普通は途中で挫折するぞ。褒めてつかわす！」

まるでこの世の支配者のような口振りに、疲れ果てた国王軍は憤りを覚えた。

「我等を試してもいるのか、何のために？」

セルジン王はあからさまに不快感を示す。

マルシオンは嘲り声で笑った。

「ここは天界。本来、人間の立ち入りは許されぬ。貴殿は女神が招いているが、他はどうでもいい」

「我が軍には、指一本たりとも触れさせぬ！ 女神にそう伝えよ」

「そんな事は、自分で伝えろ」

マルシオンがそう言った瞬間に、目の前に宮殿が現れた。

光り輝くその神々の宮殿は、確かに人間を拒否している。

あまりの荘厳さに人々は後退り、中には跪く者もいた。

「本隊はここで待機しろ。中に入る者は、生きて帰れると思うな！」

マルシオンの非情な言葉に、一同は騒然となる。

招かれているのはセルジン国王唯一人、他の人間が宮殿内に入れば死んでしまうかもしれないのだ。

国王は一人、前へ進んだ。

「本隊はここで待機！ マルシオン王、案内を願おう」

「待つて下さい、僕も行きます！」

僕は王に抱き付いた。

「危険だ、そなたはここで待機していなさい」

「嫌です！ 僕はオーリンの命の光で生かされている、だからきっと平気です」

「そなたが行けば、近衛騎士達も行く事になる」

「あ……」

僕は自分を守る者達を振り返った。

トキモルディーナもエランも、僕を守るために付き従ってくるだろう。

彼等を死なせる訳にはいかない。

「僕は……」

「私は元より、一度死んだ身ですわ。お供します」

昨夜ルディーナは自分の死を予言した。

僕は首を横に振る。

涙が出そうになった。

「僕もそうだよ、君に助けられた。だから、付いて行く」

エランの発言に、僕は顔を下に向け、涙を見られないようにする。

「私は死等、怖くはない！」

トキは一人慥然と言う。

そして、意外な人物が名乗り出た。

「ふん、神の宮殿か。覗いてみるのも、悪くない」

テオフィルスが平然と言つてのける。

僕は顔を上げ抗議しようとした時、ルディーナとトキに従う者達が続々と前へ進んだ。

「どうやら止めても、無駄なようだな」

セルジン王は溜息を吐きながら、マルシオンに顔を向けた。

「案内願おうか？」

「竜の眷属と何時から仲良しになった？ 女神がかつての敵を、許すと思うか！」

マルシオンはテオフィルスを睨みつけながら、王に問質す。

「彼は我が国に必要な人間と判断した。それだけの事だ」

「……知らぬぞ！」

古の王は顔を歪ませながら、皆に背を向け宮殿の扉に近付く。

すると大きな扉は、音もなく開いた。

外から中を窺う事は出来ない。

それはまるで《聖なる泉》の門に似て、不思議な空間へとつながっている。

「エネス・ライアス。後を頼んだぞ」

「承知致しました！ 陛下のご帰還を、お待ち申し上げております」

宰相エネスは厳しい顔付きで、セルジン王に付き従う者達を見送った。

宮殿の扉の中は、まったくの異空間だ。

宮殿内の建物は存在せず、有るのは蒼穹。

そして雲の道の先に存在する、巨大樹のみ。

その大きさに皆は圧倒され、言葉も出ない。

太い幹の下の根元は雲に隠れ、いったいどこから木が生えているのか想像も出来ない。

空に浮かぶ巨大樹の周りに、シモルグ・アンカが優雅に飛び、歌うように鳴いている。

四枚の燃えるような翼は蒼穹に映え、長い孔雀の尾羽は流れる風の如く空になびく。

やがてシモルグの灰色の女人の顔は、国王セルジンを捉えた。

優雅な聖鳥は、国王の元に舞い降りる。

『会いたい?』

不思議な頭に響く声で、王に訊ねる。

「そのために、ここにまで来た」

聖鳥は微笑み再び飛び立ち、巨大樹の根元に降り立つ。

そして虹色に輝く息を吹き出す。



息は虹色の霧が固まったように次第に大きくなり、一人の人間を作り出した。

王は聖鳥が飛び立つと同時に後を追い、雲の道を巨大樹に向けて進んだが、途中で立ち止まる。

「セルジン？」

僕は王に追いつき、呆然と正面を見ている彼の顔を覗き込んだ。

彼はシモルグが吐き出した、人物を見つめている。

その女性は長い真つ直ぐな黒髪に、真つ白な美しく長いドレスを着ていた。

美女と呼ぶに相応しい目鼻立ち、そして珍しい紫色の瞳。

微笑み頷くしぐさに、上品な色気が漂う。

なんて、綺麗な女ひと。

僕は素直にそう思った。

そして、王の呟いた一言に愕然となる。

「アミール・エスペンダ……」

セルジン王の最愛の女性が、そこにいた。

## 第二十四話 戦いの女神（一）

「アミール……、どうして？」

セルジン王の最愛の女性が目の前に現れた事で、僕の鼓動は激しく高鳴った。

王を奪われてしまう、そんな恐怖に怯えた。

僕はまだどうしようもなく子供で、目の前に立つ女性はかつて王の愛を独占し、死んだ後も彼の心に長く生き続けていた存在。

今も……、そうだ。

王が完全に狼狽うろたえているのが、僕には手に取るように解る。

震える手で、彼の手を握りしめる。

はつとした王は僕に振り向き、顔を歪める。

「私が会いたかったのは女神だ。彼女じゃない……！」

そう言いながらも彼の目は、アミールに捕えられ抗う事が出来ない。

僕はただ手を強く握りしめる事しか出来ない。

聖鳥シモルグ・アンカは死者の魂を運ぶ、セルジン王の心の奥底の願いを、叶える事も出来る。

『セルジン』

アミールは彼に微笑みながら、優雅に手を差し伸べた。その手をセルジン王が取る事が、当然のように。

王はまるで操られるように、一步踏み出そうとする。

僕は耐えられなくなって、王の身体に抱き付き阻んだ。

そうして王の鼓動の激しさを知り、絶望感に打ちひしがれる。

涙で何も見えなくなった。

「セルジン……」

苦痛に満ちた僕の声に、王は我に返った。

僕を抱きしめ、アミールを冷静に見つめる。

「君は、誰だ？」

王はアミールに呼びかける時の、言葉で訊ねる。

「そなた」ではなく、「君」という親しみを込めて。

『アミール・エスペンダですわ、私のセルジン』

懐かしい声……、微睡みまどろみの中で聞いた愛しい声。

王は優しい微笑みを返しながらも、僕を強く抱きしめた。

「それは、知っている。私は女神に会いに来た……、君ではなく」

『女神は、私です』

王は驚きで、目を見開いた。

「女神……、君が？ ……何の冗談だ？」

アミールは面白がるように微笑む。

『神が人と交わる事がないとでもお思いですか？ そうやってあなた達エステラーン王

国の《王族》は、誕生したのではなくて？』

「……」

『人間は薄情極まりない。天空の神々の慈悲も忘れ、地上に堕ちた者達を崇める。我等を忘れるから、こんな混乱が生じるのです！』

「女神……アミール？」

アミールはゆつくり首を横に振り、その身は薄ら光を帯び始める。

『我が名はアースティル、天界の守護者。あなた達の世では「戦いの女神」と言えば判るのかしら？』

その瞬間、凄まじい光が女神を光源として放たれた。

王は僕を庇いながら、身を屈める。

皆が王と僕を守るため、何も見えない状況ながら必死に前に出た。

人の盾が完了した頃、光の波は止む。

巨大樹の下に光り輝く戦衣を身に纏い、長い槍を携えた戦いの女神アーステイルが、神々しい姿で現れた。

「それが君の本来の姿か……、アミール」

王は初めて彼女と出会った時の事を思い出す。

アドランとの小競り合いで窮地に陥った時に、見知らぬ凄腕の女騎士に助けられた、それが彼女だった。

あの時も、戦衣を身に付けていた。

戦いの女神だったのか……、強い訳だ。

正体も判らないまま二度目に出会った時、完全に心を奪われていた。

最初から〈管理者〉にする目的で、私に近付いたのか？

女神と判った今、心の中のアミールが消えかけている事を、セルジン王は悲しく思う。

「女神アーステイル……、恐ろしい存在だ」

『私をお嫌いになれました？』

「それは、これからの対応次第だな」

王の腕の中で僕は、徐々に冷静さを取り戻しつつあった。

彼が肩を軽く叩いていたからだ。

「オリアンナ、しっかりするのだ！」

王の囁きが聞こえ、僕は顔を上げる。

彼が僕を見ている事に気付いた。

王から腕を放し、アーステイルに振り返る。

彼女が神々しく輝いている事から、女神だったと分かり驚く。

「私に近付いたのは、水晶玉の〈管理者〉にするためか？」

王は不快感を滲ませながら問質した。

『あなたは誕生した時から私達を惹きつけたわ。だから水晶玉の〈管理者〉にする事を提案したの。我等と同じ永遠を生きるに相応しい』

「断る！」

王の態度に、女神は微笑んだ。

『あなたに断る権限は無いの、これは決定事項よ』

「権限が無いのであれば、余計に断るな。私は貴殿達と生きる気はない！」

女神は困った顔をした。

『お怒りですか？』

「当然だ。私の心を踏みにじった。女神といえども、許さぬ！」

女神は声を上げて笑った。

『面白い男。私を困らせて、何を要求したいのかしら？』

そうやって、王の横にいる僕を見つめた。

あまりの威圧感に、僕は恐怖を感じる。

『オーリン、何時まで隠れているつもり？』

その問い掛けに、僕はギョツとなった。

いつの間にか横にへありえざる者へオーリンが立っていたからだ。

オッドアイの彼の横顔は緑の瞳の方を向けているため、まるで若いセルジン王が横にいるのかと思う程、王にそっくりだ。

美しい翼が、今は身を隠すように、彼の身体に巻き付いている。

『母上はきつと、怒るから』

オーリンは完全に怯えている。

『私が怒る？ どうして？』

『父上が……、オリアンナ姫を選んだから』

『あら、そうなの？』

女神は微笑みながら、王を見つめた。

セルジン王は顔色一つ変えず、無表情に女神の視線を受け止める。

オーリンは僕の後ろに隠れた。

『言っただはずよ。その娘の性別を、男に変えるように！』

『仕方がないよ、父上が邪魔したんだ。小さい頃から、シモルグを使って会いに来ていたから。僕だって、父上に会いたかったし……』

突然、僕の横に光が降り、側にいた近衛騎士三人を直撃する。

騎士達はその場に倒れ、即死した。

あまりの突然の出来事に、皆何が起こったのか判らない。

「し……、死んでいる」

助け起こそうとした他の騎士が叫ぶ。

女神は何の素振りも見せず瞬時に人間を殺せる、その事に誰もが恐怖を感じた。

オーリンはますます僕の影に隠れ、王は二人を庇いながら抗議した。

「我が騎士を討つとは、許さぬぞ！」

『私を敵に回したら、どうなるかお解かり？』

激しい緊張が辺りを支配した。

セルジン王に庇われながら、僕はこの窮地を切り抜ける方法を探して辺りを見回す。

国王軍から離れた雲の道の端に、一人マルシオン王が女神を見つめて立っている。

彼の妃ロレアーナは、《聖なる泉》を構成する一員として囚われたまま。

マルシオン王の望みは、妃を《聖なる泉》から解放する事だ。

僕は《ソムレキアの宝剣の主》、重要な役割から、女神も手が出せないのではないかと



思えた。

だから聞いてみたのだ。

「あの……、女神アースティルさん」

突然、拍子抜けする声で、緊張する国王軍の真ん中から発せられた。

一同は哑然としながら、僕を見る。

僕はセルジン王の後ろから顔を覗かせ、女神を見つめた。

『宝剣の主オリアンナ、命乞いなら無駄よ。エステラーン王国は滅びるのだから』

「そうじゃなくて……、マルシオン王のお姫様を《聖なる泉》から解放するには、どうしたら良いのですか？　女神様ならご存知なのでは？」

マルシオン王は呆れたように目を見開く。

女神の罠に落ちた者を救い出す方法を、女神に聞く僕に呆れた。

そんな事は考えた事もないようだ。

女神は鼻白むように、僕を見つめた。

『私が怖くないの？』

「怖いですが、でも、それ以上に知りたい！

僕は役割を担って死ぬ身です、教えてください

たつていいでしょ？」

「オリアンナ！」

セルジン王は僕の大胆さに肝を冷やしながら、なおも女神から隠そうとする。女神は声を上げて笑った。

『面白い娘。私の愛する男を奪っておきながら、私に頼る？ 答えるとお思い？』

「水晶玉の〈管理者〉は、あなた方と生きる者じゃないんですか？ マルシオン王は、お妃様の解放を願っておられます！」

「オリアンナ姫！ 止せっ」

マルシオン王は怒りを感じ、国王軍に近付く。

『マルシオン、本当か？』

「……あなたが答えるとは、思えない」

『見限られたものだ。簡単な事、宝剣の主がはめている〈抑制の腕輪〉を、あなたがはめて迎えに行けば良いだけよ。今は駄目でも、平和な時は泉の構成員はいくらでもいる』

マルシオン王は信じられないように、女神アーステイルを見つめた。

『ただし、解放するという事は、彼女に死を与える事。二度と会えなくなるが、それで良いのか？』

「……………」

『良く考えなさい』

マルシオン王は項垂れた。

水晶玉の〈管理者〉は永遠に時の放浪者となる。

彼にとって妃が心の支えではないのか。

女神の罨に堕ちたと言っていた彼に、ロレアーヌ妃は恩情として残された者ではないのか。

僕の心に、なぜか女神アーステイルに対して親しみが湧いた。

「陛下、戦いの女神にも、情が通じるのですね」

国王セルジンは呆れて、頭を抱えた。

「そなたは良い意味で、まだ子供なのだ、オリアンナ」

「え？」

「あれは今、我が軍の騎士を三人も殺した、戦いの女神だぞ。気を許すな！」

「は……、はい」

僕のあまりの緊張感の無さに、周りは呆れ苦笑する。

緊張が緩んだ事から、王は女神に切り出した。

「この姫君は大切な《ソムレキアの宝剣の主》だ。それは貴殿も同じだろう、女神アーステイル」

『あなたを水晶玉の〈管理者〉に出来る唯一の存在ですもの、当然ですわ』

「マルシオン王は水晶玉の〈管理者〉になる事と引き換えに、アルマレークの竜を大人し

くさせた。私も条件を出したい」

『……その娘の延命なら、不可能よ!』

氣勢を殺がれた王は、呆然となる。

『当然でしょう? その娘は死者、オーリンの命の光が宿っているだけの死者なのです』

「……では、水晶玉の〈管理者〉にはならぬ!」

女神は再び声を上げて笑った。

『あなたはその娘に感化されて、子供にでもおなりになったの? 無理難題を言われても、出来ない事もあるのです。それよりもっと、望む事があるのではなくて?』

セルジン王は悔しさに顔を顰める。

「何か、方法はないのか……?」

「方法なら、ある!」

国王軍の後方から、低い大声が響き渡る。

テオフィルスが、女神を睨みつけながら立っていた。

『竜の眷属? マルシオン、どういう事です!』

「……知らぬ! セルジン王に聞け」

女神がテオフィルスに向けて、槍を向けた。

矢のような光が迸り、彼に届こうとした瞬間に、七竜リンクルの影が現れた。

『我が宮殿に竜など、汚らわしい！』

戦いの女神は、その本性を現した。

竜の血を求め、残虐な殺戮を求め、その容貌は殺気が集約するように変化した。

戦う為に！

「セルジン王、本当の望みを言ったらどうです！」

テオフィルスもまた、女神と戦う意志をむき出しに叫んだ。

「エステラーン王国を、存続させたいんじゃないのか！」

## 第二十四話 戦いの女神（二）

『竜の眷属がエステライン王国の存続を求めろ？ 邪竜イルシユーの分身は我等とまた

戦いたくなつたか！』

戦いの女神アーステイルはその美しい容貌のまま、まるで鋭利な刃物のように戦意を浮かべ微笑んだ。

対する七竜リンクルはその翼を動かすことなく、冷静に昔の敵と対峙した。

天界の宮殿に入り込んだ人間達は、女神と竜との戦いの兆しに身を寄せ合つて警戒する。

巻き込まれては、一溜まりもない。

『七竜は地上に降りた神、いまさら天界の神と争う気はない』

七竜リンクルの女神への呼びかけが、僕とセルジン王の耳には届いていた。

戦う意志をむき出しにして、女神は手にした槍を竜に突き出す。

『ならばなぜ、ここまで舞い戻つたの？』

『さて、私も我が眷属に聞きたいのだが、まだ満足に会話が出来ぬのだ』

『情けない神だわ！』

リンクルを睨み付けながら、その槍はテオフィルスに向けられた。

『この宮殿へ、何をしに来たの？ 要件によっては、この槍がお前を貫くわ。覚悟なさい！』

テオフィルスはその真青な瞳で、平然と女神を見ながら答える。

「俺の婚約者を返してもらいに来た！へありえざる者」の勝手で、オリアンナ姫を死なせるなんて許さない！」

彼の堂々とした口調に、僕は飛び上がらんばかりに驚いた。

婚約は解消したはずだ。

もう関係ない人間に、命懸けでついて来たという事になる。

馬鹿じゃないのか？

女神相手に、何血迷った事を！

だいたい僕はセルジンの婚約者だぞ、忘れたのか？

女神の高笑いが聞こえた。

『その娘は死人なのよ。天界の命の光で生かされているだけの、唯の入れ物よ』

「俺は、そうは思わない！」

テオフィルスはそう言って、僕に視線を向ける。

その瞳は真剣そのもの、僕を守る意志に満ち溢れている。

僕は狼狽えながら真つ赤になって、セルジン王の後ろへ隠れた。

王はその様子に、へありえざる者〱オーリンが外に出た状態の、ただの一人の少女を見た気がした。

「それが、そなたか……、オリアンナ姫」

「え？」

振り向いたセルジン王の顔を、僕は首を傾げながら覗き込んだ。

王は悲しげな顔で見つめ返す。

僕の取った行動が王を傷つけたように思えて、ますます狼狽える。

「僕は……」

『あいつのせいだ！ オリアンナに近付かないって約束をしたのに、ここまでついて来た。あいつは母上を怒らせる！』

「……約束？ テオフィルスと？」

「いつの話だ、オーリン？」

僕の後ろにいたオーリンは、いらぬ事を口走った事に気付き顔を背けた。

「オーリン、答えよ！」

父王の命令に大きな翼で身を隠しながら、オッドアイの片側——紫色の左目でチラと僕を見た。



無感動に見せながら、本当は父の怒りを買う事に怯え、助けを求めているように見える。

『レント領でオリアンナが、初めて竜に乗った時だよ。父上の指示で《ソムレキアの宝剣》を輝かせた時、竜が制御不能になったんだ』

「……そんな事、覚えてない」

『天界の光が現れてオリアンナ姫が眠り、僕が表に出たんだ。あいつはその事に気が付いた。だから二人と竜を助ける代わりに警告したんだ』

「オリアンナ姫に近付くなど？ 女だと教えたのか？」

『違う！ 光が現れる前にあいつが呟いたんだよ。彼女を見ながら「オリアンナ・ルネ・フィンゼル」って』

セルジン王と僕は顔を見合わせる。

「……出会った時から、薄々気付いていたとは申していたな」

テオフィルスに気付かれているのは解ってはいたが、オーリンがそれを知っている事に、僕は驚き狼狽えた。

僕の心のすべてを、彼は知っているのではないのか。

王は僕の動揺は気にせず、テオフィルスを注視していた。

「彼は〈七竜の王〉だ。国を救うために、そなたを救う」

「え？」

女神に立ち向かおうとするテオフィルスの後姿を、王は考えを新たに見直していた。初めて彼と会った時の、謁見の場を思い出す。

《私はへ七竜の王》と呼ばれる者です。アルマレークに危機が訪れる時に現れる、七竜の魔力を扱い、国を救う宿命を持って生まれた者……》

国を救う宿命……、それは私も同じだ。

《竜の指輪は領主となるフィンゼル家の人間を引き寄せる。私が欠けた指輪に引き寄せられ、エステラーン王国まで来たように！》

……私が彼の立場だったら、単独でここまで来ただろうか？

天界という危険な場所で女神と対峙している彼の姿は、ただの青年にしか見えない。

「オーリン、オリアンナを守るか？」

『当然だよ。僕達は運命共同体なんだから』

王は彼に笑いかけた。

「良い子だ、オーリン」

オーリンは驚き、呆然と父王の後姿を見送った。

そんな事を言われた経験がない。

天界人の彼にくすぐったい感情が湧き起こり、頬を赤らめた。

王はテオフィルスの側に立ち、女神を振り返る。

「攻撃は止めてもらおう、女神アースティル！」

『私に命令出来ると思いい？』

「思う！ 私を〈管理者〉にしたいのだろうか？ アミール・エスペンダ」

『……………<sup>す</sup>狡い男だわ！』

女神は槍を退いた。

それを確認した後、セルジン王はテオフィルスに向き直る。

「オリアンナ姫を救う方法があると聞いたな。どういう事か、聞かせてもらおう」

テオフィルスは少し視線を逸らし口籠る。

「それは……………」

「私には聞かせたくない事か？」

〈七竜の王〉は溜息を吐き、ぼつが悪そうに答えた。

「さつきまで彼女は守られていた、七竜レクーマと他の七竜達に。でも俺と婚約解消して、その加護が消えた……………」

「つまり貴殿と婚約すれば、死は免れるという事か？」

「指輪を嵌めて俺の側にいれば……………、完全に守られる。エステラインで守れないのなら、アルマレークが守る！」

テオフィルスの青い目が、毅然と王の瞳を見据えた。  
セルジン王の心には、希望と絶望が<sup>ないま</sup>絢交ぜに訪れていた。

「……七竜リンクルが同じ事を言っていた」

《《王族》と王国を、我等と国が女神から隠し通す》

それを聞いた時のような衝撃は訪れなかった。

心の片隅で覚悟を決めていたのかもしれない。

「オリアンナ姫が、承諾すると思うか？」

「思いません！」

惘然とテオフィルスは答え、セルジン王を睨んだ。

まるで他人事のように、王は笑う。

「ふふ、貴殿も大変だな」

「と……、ともかくあの女神に聞いても答えはない。早くここを出た方がいい。俺が囹  
になります！」

話を逸らすようにそう言つて、リンクルを呼び寄せる。

「何を言っている！ 今の話では、貴殿に死なれて困るのは我等ではないか」

「死にはしません！」

テオフィルスは微笑み、リンクルに飛び乗り飛び立つた。

竜が飛び立った事に女神は警戒し、再び槍をテオフィルスに向ける。戦いが始まる！

セルジン王は急いで皆の待つ場所へと戻った。

「陛下、ご無事で何よりです」

トキを始め王の元近衛騎士達は、王の単独行動を内心不安気に見守っていた。

その彼等に領きながら前を通り過ぎ、王は真つ直ぐ僕の元へ足を進め、その勢いで僕を抱きしめた。

「セ……、セルジン？」

突然の王の抱擁に僕は驚き、いつも以上に狼狽える。

「あ……、あの……」

「そなたは生き残るのだ。何があっても」

王がテオフィルスと何を話したのか分からないが、まるで別れの言葉のような口振りに不安を覚える。

苦しい程の抱擁に、僕はただしがみ付くしか出来ない。

やがて力が加減された時、今度は僕が抱き付いた。

「行かないで下さい！ 僕の側にいて！」

女神の元へ行ってしまふ予感に、涙が溢れ子供のように駄々をこねる。

王は僕を引き剥がし、頬にくちづけた。

「私はいつも、そなたと共にいる」

王が優しく微笑んだのに、僕には彼の顔が涙でぼやけてはつきりと見えない。

彼は再び僕を抱きしめたが、その顔はトキに向けられ目で命令を伝えた。

トキは頷き、無表情に二人に近付く。

「私の愛する、オリアンナ姫」

そう言いながら、王はトキに僕を渡す。

「生き延びよ！ 必ず！」

王が踵を返し、皆に命じた。

「守りを固めよ！ 戦いに巻き込まれる前に、ここから出るのだ」

僕はトキに腕を掴まれ、王の元へ行く事が出来ない。

「セルジン……、セルジン！」

天界の宮殿内に、強烈な閃光が溢れた。

女神アーステイルが七竜リンクルに乗るテオフィルスに向け、光の槍を放ったのだ。

光の渦が、凶器のように人々を襲い、触れた者は一瞬でその命を奪われる。

先程三人の騎士を殺されてから、モラスの騎士による移動しながらの障壁が張り巡ら

されていた。

「ルディーナ、障壁はどのくらい持つ？」

「分かりません！　ここは魔力が強すぎて、あまり持たないと思います」

セルジン王は天界に入ってから、魔力を使えないでいた。

その王に魔力を鍛え上げられたモラスの騎士達も、同様に魔力を使えない者が現れる。

ルディーナを含む数人のみが辛うじて障壁を張る事が出来、その中にはエランも含まれていた。

「ルディーナ、無理にそなたをこの世に繋ぎ止めた事を、今も後悔している」

「あら、陛下らしくないですわ。私はセルジン様の側にいる事が、楽しかったのに」

二人は微笑んだ。

「感謝する！　迷わず、本当の君主の元へ辿り着け」

ルディーナは愛らしい笑顔で、嬉しそうに頷いた。

その笑顔を見届けてから、セルジン王は障壁の外へ出る。

僕の呼び止める声に振り返る事もなく、真っ直ぐに女神アースティルの元へ、雲の道を進む。

皆は王の命令に従い、出口に向かって移動を始めた。

僕はますますセルジン王と引き離される事に怒り、トキの手を剥がそうともがく。

「オーリン様、陛下の命令に従うんだ！」

「嫌だ、離せ！」

突然、僕の身体から炎が現れ、トキは咄嗟に手を離す。

『駄目だよ、父上の命令に逆らっちゃ！』

オーリンが僕を制止するが、その声は届かない。

周りから溢れ出る炎を恐れ、近衛騎士達も手が出せず、僕は障壁の淵まで来た。

「ルディーナさん、空けて下さい！」

「だったら、皆で行けば良いわ。ご覧なさい、出入り口を」

ルディーナが指差した出入り口には、天界の兵士達がいつの間にか現れ、行く手を阻む隊列が組まれていた。

皆が息を呑む。

「逃げ場は無いみたいだから、陛下の後を追いましょう」

ルディーナの可愛い声が、場違いに響いた。



## 第二十四話 戦いの女神（三）

天馬に乗った天界の兵士達が、隊列を組んで雲の道を駆け上ってくる。

僕を守る近衛騎士達が、剣を手にしながら急ぎ後退する。

光り輝く天界の兵士達は近付くにつれその大きさを増し、天馬の足の一踏みで人間など簡単に殺せそうだ。

為す術もなくモラスの騎士達の張る障壁に守られながら、皆は巨大樹の方向へ雲の坂道を駆け上る。

「オーリン様、障壁に触れると怪我をしますわ。あまり近付かないで下さい」

「平気だよ。それより早く陛下の元へ行こう！」

僕は気が気ではなかった。

セルジン王はもう間もなく、女神アースティルのいる巨大樹の下へ辿り着こうとしている。

女神に王を連れ去られる危機感に、僕の心が悲鳴を上げていた。

上空から見ると、天界の宮殿の入り口と巨大樹へと続く雲の道以外は蒼天で、外見の

建物とはまるで違う異空間の中を、テオフィルスの乗る七竜リンクルが急降下した。

女神の放つ死の閃光が、竜を撃ち落とそうとする。

「リンクル、入り口にいる天界の兵士を止めろ！」

オリアンナ達の脱出を兵士達が阻んでいる事に気が付き、テオフィルスは彼等に攻撃を始めた。

リンクルは兵士達の頭上すれすれに飛び、テオフィルスは無意味な事を知りながら兵士に矢を射る。

天界の兵士達は七竜の後を追うように、一斉に天馬で飛び立った。

兵士達がいなくなった事で、出口が見えた。

「出口だ、早くここから脱出するんだ！」

トキが厳しい顔で、僕に近付く。

再び捕えられる事を恐れた僕は、障壁に近付く。

「嫌だ！ 僕は陛下の元へ行く！」

「オーリン様、危ない！」

突然、障壁の外に強烈な光がぶつかった。

人々は咄嗟に身を屈める。

女神の放った死の閃光が障壁に当たり、ゆらゆらと揺らぎ消失した。

「障壁が消えたわ！ モラスの騎士達、張り直すのよ！」

トキは僕を捕まえようと手を伸ばしたが、一步遅かった。

僕は皆から離れ、一人雲の坂道を登る。

「オーリン様、駄目だ！ 皆、オーリン様を守れ！」

トキの指示に、皆は僕の後を追う。

モラスの騎士達もルディーナの指示に従い、僕を保護するために走り出す。

もはや障壁を張る余裕等なく、人々は激しい戦闘の合間を駆け抜ける。

女神の放つ死の閃光と天界の兵士の放つ光の矢、そして兵士達に反撃の炎を吐く七竜リンクルの攻撃の間を掻潜り、視界の悪さに進む先を見失いそうになる。

一本道でありながら、雲の道はどこことなく不安定で、皆はなかなか前に進めない。

「オーリン様、お待ちください！」

ルディーナの声が、戦いの轟音ごうおんにかき消えた。

雲の坂道を上る事は僕には優しかった、まるで女神の元へ招かれているように。

遅れてへありえざる者」オーリンが、翼を羽ばたかせ僕に追いつき立ち塞がる。

『ねえ、オリアンナ姫。行かない方がいいよ、ただでさえ母上は、気が立っているんだから逆撫でしないでよ』

「でも、セルジンが捕まってしまおう！ 助けなきや」

オーリンは僕を捕え、女神から隠すように自分の翼に包み込んだ。

『これはね、もう昔から決まっていた事なんだ。君はブライデインで父上を水晶玉から解放するだけでいいんだよ』

「嫌だ！ 君はいつたいたい誰の味方なんだよ、オーリン？」

『父上がオリアナ姫を守れて言っただろ、だから君の味方さ』

「だったら、そこを退け！」

翼から逃れようとした僕は、柔らかそうな翼が実は堅牢な檻のように、自分を捕えている事に愕然とする。

オーリンはオッドアイの目を細めて、妖しく微笑んだ。

『ここの方が安全だよ。我が儘は、許さないからね！』

テオフィルスは天界の空に脅威を感じていた。

もともとここは天界にある宮殿の中で、本来の空という空間ではないはず。

異空間の空はまるで粘着質な液体の中に沈んでいるように、動きづらく呼吸さえ苦しい。

「リンクル、なんとかならないのか？」

返事は返ってこない。

リンクルが彼の要求に最善の対応をしている事は、今までの経験から感じ取れる、きつと息が出来るだけマシなのだ。

早く決着を付けないと、殺される！

四方八方から天界の兵士達が、光の矢を射ってくる。

何度も掠め<sup>かす</sup>中り<sup>あた</sup>りそうになるのを、リンクルが炎で焼き尽くし射た者を追い落とす。

七竜に中つた矢は弾き飛ばされるが、テオフィルスは確実に死を迎える。

上空の戦闘を何度も経験してきている彼でも、死をこれほど間近に感じるのは初めてだ。

突然、リンクルの正面に強烈な光が出現した。

女神の放つ死の閃光が迫りくる。

リンクルは炎を自分の進む方向へ吐き出し、テオフィルスは猛烈な熱に晒され身を縮める。

何かが焼ける臭いがした。

彼の体毛か皮膚か、灼熱の痛みに彼は悲鳴を上げた瞬間、熱と痛みが消えた。

俺は、死んだのか？

意識を失いそうになりながら、そう思う。

リンクルは炎の中を潜り抜け、彼の傷をすばやく治したのだ。かすむ目で捉えたのは、女神アースティルの動き。

槍を手に優雅な動きで死の閃光を繰出す、まるでそれは美しい死の舞踏、嬉々とした戦いの女神はその舞踏に恍惚の表情を浮かべながら、声を上げて笑っている。

テオフィルスの背筋に、恐怖が這い登る。

「リンクル、女神を攻撃しろ！」

彼の本能がそう叫ばせた。

ところがその瞬間、七竜リンクルは失速し消えた。

「リンクル！ うわあああ……………」

彼は緩い弧を描いて墜落する。

禁忌に触れたのか？

七竜は女神と争えない……………。

自分の失策を呪いながら、テオフィルスは雲の道に墜落し意識を失った。

ドサツという何かが落ちた音が、すぐ近くで聞こえた。

僕はオーリンの翼に阻まれ、周りで何が起っているのか知る事も出来ない。

早くセルジン王の側に行きたいのに、〈へありえざる者〉の魔力に捕らわれ身動きも出来

ない。

「いい加減、放せ！」

彼の足を蹴る。

『残念だけど君の得意技は、通用しないよ。僕は聖霊だからね』

「怒るぞ！ 霊体なら、僕の中に大人しく収まってる！」

『ここは天界で、余所者は君の方さ！ それはこっちのセリフだよ』

僕達は睨み合う。

「せめて外を見せてくれ！ 羽で見えないよ！」

『もつと女の子らしく頼んだら、見せてあげるよ』

「この非常時に、ふざけるな！」

『その非常時に皆を置き去りにして、迷惑かけているのは誰だ？』

「……」

オーリンの言う通りだ。

王の後を追う事が頭を占めて、後先考えずに皆を置き去りにした。

彼等はどうしただろう、自分の身勝手さと不安に、俯うつむき小さく呟く。

「お願いです、外を見せて下さい」

『ふふん、もつと女の子らしい方が好みなんだけどな。ま、いつか』

そう言った途端、翼が消えた。

最初にセルジン王を探す。

彼はもう間もなく、女神アースティルの元に辿り着こうとしている。

僕は思わず彼の元へ走ろうと身体を動かしたが、まだ堅い翼に囲まれている事に気付く。

『透明になっただけだからね』

オーリンはにっこり笑いながら、僕の両手を掴んだ。

『放さないよ』

僕は顔を顰めながら、反対方向を向いた。

天界の兵士達の姿が上空を動き回り、光の矢を一点に集中して攻撃していた。

その標的は国王軍だ。

まだ障壁が形成されていないうちに、光の矢に次々と人が倒れていく。

「攻撃を止めろ！」

『仕方ないだろ、竜の眷属がこの宮殿に入り込んだんだ。昔の敵だよ、君だってアルマ

レーク人に警戒していたじゃないか』

「僕達は殺してない！」

『父上は何度も、殺す命令を出していた』



「エランがあの中にいるんだぞ！ 君にとつても幼馴染みだろう！」

『……………』

オーリンは珍しく困った顔をして、溜息を吐く。

『エランは大事だよ。……………困った姫君だ』

その瞬間に攻撃が止んだ。

「君、兵士達に命令出来るの？」

『一応、女神の息子だからね。でも、母上には通用しないよ』

僕はエランの姿を探した。

彼はルディーナや他のモラスの騎士達と共に、新たな障壁を張ろうと必死になってい

る。

「良かった、生きている」

『うん』

障壁を作る円陣の中に、怪我で倒れた者達が多く收容されていた。

天界の兵士達の放つ矢は、女神の放つ死の閃光を違つて、瞬殺の魔力はないように見える。

『殺したいのは、竜の眷属だけさ。僕が父上を使つて、あの馬鹿な眷属を殺させようとしたのに、七竜が邪魔をしたんだ。君もね……………』

オーリンが不快そうにボソツと呟く。

今の彼の言葉を深く考える暇もなく、円陣の一角に僕の目は釘付けになる。血を流し横たわっているテオフィルスの姿を発見したからだ。身体中の力が抜けるような感覚に襲われた。

「テオフィルス……、死んだのか？」

『残念ながら生きてはいるけど、時間の問題だよ。あんな奴に巻き込まれて、エランも死ななきゃ良いけど』

「え？」

次の瞬間、強烈な光の束が張られたばかりの障壁をめがけ突き進んできた。

女神アースティルが竜の眷属を抹殺するため、死の閃光を放ったのだ。

「止める！ オーリン、助ける！」

強烈な光の中で、すばやく剣を抜くルディーナの姿が見えた。

障壁を出た彼女の周りから、大量の黒い渦が湧きおこる。

それは光の束めがけて突き進み死の閃光を、障壁に到達する前に切り裂き消滅させた。

『汚らわしいな！ この宮殿で闇の魔法を使うなんて……、許せない！』

オーリンが叫ぶ。

光が消えたその時、皆に振り向き障壁の中に入ろうとしたルディーナの身体が弾け飛ぶ。

魔法で生きた人間を装っていたルディーナ・モラスの身体は、バラバラに壊れた人形と化し障壁の周りに飛び散った。

「ルディーナ！」

僕は叫んで彼女の元に駆け寄ろうとしたが、当然のようにオーリンの翼が阻む。

僕はオーリンの身体に何度も拳を打付けながら、怒りに身を任せて泣きながら叫んだ。

「君がやったのか！」

『落ち着け、違うよ、母上だよ！ それより見ろ、エランを……』

「……」

僕は涙を拭いながら、障壁の中のエランを見た。

ルディーナの剣が障壁に飛び込み、エランの足元にまるで意思を持つ物のようになっている。

エランはルディーナの死に呆然としながらも、約束に従い魔剣を取り上げた。

強力な魔力に翻弄されている、彼の様子はそんな風に見える。

『あーあ、これでエランは魔界域に行っちゃあ。僕じゃ、これ以上守れないよ！』

「なんだって？」

オーリンの悔しがる言葉に、僕は真っ青になった。

## 第二十四話 戦いの女神（四）

天界の宮殿の中、セルジン王は女神アーステイルのいる巨大樹への、雲の坂道を上る。巨大樹に近付くごとに、その神聖さに足が竦みそうになり、なかなか近付く事が出来ない。

まるで創世の力を凝縮したような、壮大な樹木の生命力に心が慄いた。

これには魔力も何も通用しない。

吸い込まれてしまいそうだ。

上空ではいつの間にか現れた天界の兵士達と、七竜リンクルに乗るテオフィルスが戦闘を始めている。

多勢に無勢、圧倒的にテオフィルスには分が悪い。

急がなければ、あれでは持たない！

巨大樹に心を奪われないようにしながら、先を急ぐ。

戦いの女神は戦衣に身を包みながら、美しい死の閃光を優雅に繰出していた。

かつて心を許し愛し合った美しい女性は、今は戦いに酔い痴れ狂喜の笑みを満面に浮かべ、舞う如く優雅に殺戮のために動く。

その姿を美しいとは、もはや思えない。

おおよそ姫君らしくない少女が、自分を完全に変えてしまった事に心の中で苦笑した。

王の私にしては珍しい程、幼い恋だ。

相手がオリアンだからか？

……いや、私が影のせいだ。

知らず知らずに笑みがこぼれた。

最期の相手としては、悪くない。

こんな非常時に不釣合いな思いに囚われながら、目の前で槍を振るう戦いの女神に近づく。

一瞬で間合いを詰め、槍を掴みその動きを制する。

「攻撃を止めろ！」

女神アースティルは美しく微笑みながら、彼の腕を掴んだ。

「待っていたわ、私のセルジン」

「どういう事だよ？ エランがああ剣を手にしたら魔界域へ行くって……」

〈へありえざる者〉オーリンの翼の檻の中で、僕は彼に掴みかかった。

オーリンは見下すように僕を見つめている。

『君は本当にルディーナ・モラスが死んだと思ってるの？』

「そうじゃないのか？ どういう事だよ！」

『彼女はアドラン・ディラス・ブライディンに、強烈な恨みを抱いて死んだんだ。目の前で恋人だった君主を惨殺されたからね』

「……まさか！　なんでそんな事知ってる？」

『ふん、僕を誰だと思ってる？』

女神アースティルの息子オーリンは、不敵に笑う。

『父上や君の前では微塵も見せなかった、皆あの人形の可愛さに騙されたんだ。彼女の中の闇が、あの剣に凝縮されている事に誰も気付かない』

「そんな！　だったら自分で魔界域へ行けばいいじゃないか！」

『父上の魔法で生かされていたの？』

「それじゃあ、エランをモラスの騎士にしたのは、最初から魔界域へ行かせるつもりで？」

『だろうね。エランは屍食鬼になれば、簡単にあちらへ行けるから』

「そんな……。そんな事、絶対させないっ！」

『させないって、あの剣はもう離れないよ』

意気込む僕に皮肉っぽい視線を投げつけながら、エランを指差す。

エランはまるで魅入られたように、剥き身の魔剣を見つめていた。

『剣に残ったルディーナの遺志と交信している。あれじゃあ、屍食鬼になるのも時間の問題だね』

「屍食鬼にならなければ、魔界域には行かないんだな？」

『……そうだけど、止めるのは無理だよ。ルディーナの遺志は、そのうちエランの意志に変わるから』

「やってみないと、分からないじゃないか！」

『……………』

何か物言いたげにオーリンは、厳しい顔をした。

『ふーん。前から思っていたけど、君って残酷だよね』

「え？」

『もう、いい。父上が母上に捕まった、僕達も行くよ。君を守るのは父上の頼みだけど、僕は母上には逆らえないからね』

オーリンはまるで無かった事のように、嬉々として翼を広げ、全身から光を放出した。翼の檻が解かれ、僕は彼から逃れようとしたが、身体が凍り付いたように動かない。

それは他の者達も同じで、天界の兵士達に囲まれ恐怖を感じながらも、どうする事も



出来なかった。

そして全てが光に包まれ、何も判らなくなった。

—— 気付いた時、目の前に巨大な樹木が立ち塞がっていた。

そのあまりの大きさに圧倒され、誰もが魂を抜かれたように、呆然と樹木を見上げる。どのくらいの時を生きれば、こんな大きな樹木になるのだろうか。

太古の生命の息吹が辺りに満ち溢れ、あらゆる生き物がそこに集っている。

人も動物も昆虫も……、楽園という言葉が僕の心に浮かんだ。

何の苦しみも無く幸せに生きられる場所。

屍食鬼との長い戦いで疲れ果てた国王軍の戦士達は、まるで全てを忘れたように、その仲間に入ろうと足を運んだ。

誰も気が付かなかったのだ、自分達がどんな危険に晒されているか。

最初に異変に気付いたのは、全身の強烈な痛みので、意識を取り戻したテオフィルスだ。

「ううっ、くそっ。こっちは……、なんだ？」

アルマレーク語で呟かれた一言に、まるで魔法が解けたように僕はハツとした。

目の前に水で出来た境界線があり、間もなく全員それに飲み込まれようとしている。それは巨大樹から溢れ出る、大量の樹液に見えた。

「皆、目を覚ませ！ 飲み込まれるぞ！」

しかし僕の言葉は他の者達に届かない。

楽園を求めて、既に樹液の中に足を踏み入れた者もいる。

僕は近くにいたトキ・メリマンとエランにしがみ付き、彼等の歩みを止めようとした。

「トキさん、エラン、駄目だ！ 目を覚ませ！」

トキに反応は無かったが、エランは自分の意志を取り戻す。

「オリアンナ？ あれ、僕はどうして……？」

「エラン、皆を止めるんだ！」

不思議な事にエランがトキを止めると、彼は意識を取り戻した。

「エラン、あとを頼む！」

「うん。でも、君は？」

「陛下を探す！」

そう言つて僕は進もうとしたが、足元に血に塗れたテオフィルスが横たわっていた。

先程意識を取り戻したのは、彼のアルマレーク語の呟きのおかげだ。

僕は戸惑いながら、声をかけた。

「テオフィルス、大丈夫か？」

「あ……、ああ。リン……クル、俺の傷……を、癒せ……」

弱々しいテオフィルスの声と同時に、彼の周りに一瞬柔らかい光が現れた。

リンクルの魔力により傷は塞がれたが、ダメージは残るようだ。

血まみれのテオフィルスは顔を顰めながら、ゆっくり起き上がる。

僕は無意識に、彼を支えた。

「立って、大丈夫なのか？ 寝ていた方がいいよ」

「この状況で？ あの樹液に飲まれたら、ここから出られないだろ。俺は、それは嫌だ」

「……た、立って動けるなら、もういいよ。僕は陛下の元へ行く」

「セルジン王なら、そこにいる」

テオフィルスの指差した方向に、王が女神アースティルに捕えられたように立ち、こちらを見ている。

「セルジン！」

「来るな、オリアンナ！」

セルジン王の制止も聞かず、僕は王の元へ駆け寄ろうとした。

そして、左腕上腕に突如、激痛が走る。

「あ……、あああ……」

僕は左腕を押えて倒れ込み、あまりの激痛に動く事が出来なくなつた。それは〈抑制の腕輪〉のはめてある箇所。

《愚かな姫君、後悔するぞ》

マルシオン王の言葉が、頭の中で木霊する。

この腕輪が天界の魔道具なら、これを操るのは女神アーステイルだ。

意識を取り戻した近衛騎士達が、僕に駆け寄る。

ダメージに顔を顰めながらテオフィルスは、僕の押える左腕の肩防具を外し、上腕の腕防具を素早く外した。

アルマレークの竜騎士専用の鎧のため、彼が一番扱い慣れている。

現れた鎧下着を引き千切ると、妖しく光る魔道具の腕輪が現れた。

そのあまりの妖気に、テオフィルスは顔を歪める。

「なぜ、こんな物を……」

腕輪に触ろうとした彼の手が、魔力で弾かれる。

誰もその腕輪を、取り除く事が出来ない。

「オリアンナを苦しめるのは、止めろ！」

セルジン王が憤りながら女神アーステイルに詰め寄る。

女神は微笑みながら、首を横に振つた。

『愚かな姫君。死人の分際で、あなたの心を奪おうなんて……。大人しくオーリンを運ぶただの器でいれば、苦しむ事もなからうに』

そう言いながら、声を上げて笑った。

セルジン王と近くにいたマルシオン王は、そろって不快な表情で女神を睨みつける。

「……彼女を、助けてほしい」

『それが管理人になる条件なの？ 些末な願いだわ、あなたらしくない。あの娘は役目を終えれば死ぬのよ、国王軍を救う方が重要ではないの？』

「……………」

『ブライデインへ近づく毎に、屍食鬼の数は増えるのよ。より凶悪な魔王の〈契約者〉達が王都を仕切っているわ』

「それは……………」

『あなたが魔王に屈すれば、地上と魔界域が繋がるの。邪竜が目を覚ますわ。天界としても、それは面白くないわね』

「……国王軍を、天界が守ると？」

『少なくとも、屍食鬼からはね。魔王や〈契約者〉のような魔界域の住人には手が出せないけど、国王軍には少しは役に立つのではない？』

「私は……………」

セルジン王は苦しむ僕を見つめ、トキや近衛騎士達を見つめた。

「私は……、王だ」

『うふふ、そうよ。あなたはエステラーン王国の国王なの。たとえ王国が滅びようと、最後まであなたには責任がある』

「オリアンナ姫のあの苦しみは、この先も続くのか?」

『……あなたが条件をのめば、腕輪の魔法は解ける』

「卑怯だな。……天界人はもつと清らかなのかと思っていた」

『ふふ、私を誰だと思いい?』

目的のためには手段を択ばない残酷な戦いの女神は、挑発的に胸を張り王の瞳を見つめた。

セルジン王は僕に向きなおし、何かを囁く。

〈抑制の腕輪〉から放出される痛みの魔法に苦しめられながら、僕は王の唇の動きを読んだ。

そなたを、助ける。

僕の瞳から、涙が流れた。

王はテオフィルスを見つめ、何かを振り切るように叫ぶ。

「テオフィルス・ルーザ・アルレイド殿、貴殿にオリアンナ・ルーネ・ブライデインを託

す！」

その場に居合わせた者は、王の言葉に愕然とした。

それはエステラーン王国を、アルマレーク共和国へ明け渡す事を意味する。

「陛下！」

皆が反対の意志を表明する中、血塗れのテオフィルスは立ち上がり胸に手を当て、礼を取る。

「<sup>しか</sup>確と承った！ 安心して行かれよ！」

セルジン王が水晶玉の（管理者）となってしまう事、最悪消えてしまう可能性も含め、事前にテオフィルスには打ち明けてあった。

王は彼に頷き、女神の腕を取った。

「国王軍への、天界の加勢が条件だ！」

『保護ではなく加勢？』

「そうだ、絶対に見殺しにしない。それが条件だ！」

『……良いでしょう。地上が大事になるかもしれないけど』

「既に大事になっている！」

『ふふふ、私を巻き込めば、もっと大事になるわよ』

「何を今さら！ これは貴殿が仕組んだのではないのか？」

『あははは……』

王は女神に、激しい憤りを感じた。

「さあ、急げ！ 連れて行け、どこへなりとも！」

その瞬間、女神は極上の笑みを浮かべながら、セルジン王と共に消えた。巨大樹も雲の道も、一瞬で消えてしまったのだ。

気が付くと皆はただ呆然と、廃墟であるトレヴダール城の、騎士の大広間に立ち尽くしていた。

荒廃した現実が薄暗闇の瓦礫の中に、埃と共にある。

僕の腕の痛みは、綺麗に消えていた。

ただ、セルジン王を失った心の痛みは、消す事が出来ない。

あまりの出来事に、涙も出ない程に……。



## 番外編 残念な男

「お前は、本当に残念な男だな、マシーナ」

〈七竜の王〉テオフィルスの天幕で、若君が低い声でボソツと呟いた。落ち込むルギーを出入り口から追い出し、私は怪訝な顔で振り向く。

「はい？ 今なんておっしゃいました？」

「残念な男だ！」

「つて……、私の事ですか？」

「お前以外、いないだろ」

思い当たる節がない。

顔はまあまあ良い方だと思っている。

スタイルも人気の竜騎士体型で、そこそこ女にモテてきた。性格だって、かなり良いと自負している。

その上、長年の努力の結果、竜騎士隊の精鋭とまで言われ、もはや非の打ちどころがない！

それなのに、……残念な男？

私より四歳年下の〈七竜の王〉に仕えるようになってから、こんな事ばかりだ。早いうちに口の悪さにも慣れ、腹も立たなくなつた。

「私のどこが残念なのでしょうか、若君？」

若君はいつもの無表情で、懐からサツと手紙を取り出した。

「リーサからの、手紙だ。出立前に、預かつた」

私の心に突然、火花が打ち上がった。

リーサ！

愛しのリーサ！

喜びながら若君に詰め寄る。

「下さいー！」

「ほらね、そこだよ。まるで懐いたばかりの竜だ」

「いいから、下さいー！」

「そんなにリーサが大事なら、お前も帰ればいいじゃないか！」

「……………いいんですか？」

「ああ、いいよー！」

そんな事を言われると、すべて放り出して帰りたくなる。

若君から手紙を奪い取り、わくわくしながら開けてみる。

『お仕事、頑張つてね！ リーサより』

それだけ……………。

それだけくっ？

…………これじゃあ、帰れないじゃないですか！

泣きたくなってきた。横から若君が覗き込み呆れる。

「はっ、相変わらず淡泊だな。愛妻家の旦那に、仕事に集中しろって言っているんだ」

「私はいつも…………、仕事に集中しております！」

「ふふん。それじゃあ、帰らないのか？」

「帰りません！」

「あ、そ。じゃあ、ついて来い！」

がっかりしながら、天幕を出た。

それでも、手紙は大切に懐に入れる。

リーサは〈七竜の王〉テオフィルス・ルーザ・アルレイドの元「親衛隊」隊長…………いや、会長だった。

親衛隊と言つても、身近にいて警護する親衛隊ではない、いわゆる〈七竜の王〉ファンクラブ「親衛隊」の会長だったのだ。

「親衛隊」は領主家血縁のご令嬢ばかりが集う、我々竜騎士隊にとってそれは恐ろしい集団だ。

若君が少しでも怪我しようものなら、竜騎士隊は責任を糾弾され、倍返し目に遭う。反撃しようものなら、共和国議会に裏で手を回し、竜騎士の資格を一時的に剥奪される。

当時の若君は今と同じ、無表情で無関心。

「放っておけ！」

まったく気にもしない。

部下達が何人か被害に遭い、堪り兼ねて会長リーサの屋敷に直談判するべく忍び込み……、ミイラ取りが完全にミイラになった。

《テオフィルス様を、お守りする気はありますか？》

出会って一目惚れして、口説いて、口説いて、口説き落としたり。

親が決めたお互いの婚約者も、身分も、家も……、何もかも捨てて駆け落ち同然の結婚をした。

結局、若君に連れ戻されたけどね。

あれから三年、いろいろな事が……。

「なにポーっとしている！ イリを見張るぞ」

「はい。」

王太子の天幕の前に、大きな塊とくろが蟄局とくろを巻いて寝ている。

イリはオーリン王太子の指示以外、受け付ける気はないようだ。

数人の竜騎士がイリを取り囲んで見張っていたが、若君が来ると領き交代した。彼等も急ぎ出立の準備をしなければならぬ。

イリは石のように固まって、動く気配がまるでない。

若君と場所を離れて見張る事になっていたが、気になる事があつた。

少しぐらいの会話なら、出来そうな間がある。

リーサは以前、若君と結婚の口約束をしていたらしい。

本当に幼い頃の話で、当の若君はすっかり忘れていたが……。

いや、忘れたふりをしているだけかもしれない、だから聴いてみた。

「若君は、どんな女性がお好みですか？」

「なんだ、それ？」

「いえないえ、残念な男ついでに、聴いてみました」

若君は無表情に、私をチラ見した。

「……短い金髪で目は大きくて灰色、細くて折れそうなのに、ヘタレ小竜のように、ク

ソ生意気な子供」

なんとなく、顔が笑っている。

リーサとは、かなりタイプが違う令嬢だ。

「子供ガキですか……？　短い金髪……？　どこの、ご令嬢ですか？」

その時、イリが動いた。

二人は咄嗟に緊張し、制御不能の竜が周りに危害を加えないように気を配った。

イリは天幕の出入り口に向かって、甘えた声を出す。

竜の身体が邪魔で見えないが、オーリン王太子が出てきたのだろう。

若君は出入り口を確認するために移動したが、私は彼が見える範囲での移動に留めた。

竜の動きを周りに警告するためだ。

若君が立ち止まり、不意に極上の笑顔を見せた。

珍しい！

若君も、あんな顔するんですねえ。

何を見ているのか気になり、イリがそれ以上動く様子がないのを見極め、彼の元に移動する。

「前に言っただ、顔に触るな、ヘタレ小竜！　大火傷をしたいのか」

真顔に戻った若君は、大きな声で警告する。

入り口にオーリン王太子が立っていた。

フィンゼル家の竜騎士の正装をしたオーリン王太子は、それは初々しいアルマレークの領主家の子息に見えた。

レクーマの残した竜の抜け殻から作った銀色の鎧に、彼の金髪が映え、神々しくさえ見える。

灰色の大きな瞳が、若君に向けて見開かれていた。

へタレ小竜のように、クソ生意気な子供ガキには見えない。

え？

私は今、なんて思いました？

啞然としながら、若君とオーリン王太子を交互に何度も見た。

若君……、王太子は男子ですよ。

男好き……だったんですかあ？

思い当たる節がないではない。

リンクルクランの竜騎士隊には、他の領地の竜騎士隊に比べ、女子の数が少ない。

人選は領主と若君が受け持っている。

……だから私は、残念な男なのですかあ？

リーサに夢中な男だから？

若君は私の様子に、不思議そうな顔をしながら呟いた。

「なに一人で、百面相しているんだ？」

私は顔色を青くしたり赤くしたりしながら、激しく首を振った。

「な……、何でもありません！」

それからしばらく、私の若君を見る目が、変わったのは言うまでもない。

マシーナ・ルーザ —— 精鋭と言われるこの男は、弱腰でよく喋り、変なところ鈍感な良い男である。



## 第三章の登場人物

〔★は生存者 ☆は死者 ●は人間以外〕

★オリアンナ・ルーネ・ブライデイン……主人公 エステライン王国の最後の《王族》  
《ソムレキアの宝剣》の主 男子として育てられたので名前が多い

オーリン・ボガード（養子名）

オーリン・トゥール・ブライデイン（王子名）

オリアンナ・ルーネ・フィンゼル（アルマレーク人としての名前）

エアリス・ユーリア・ブライデイン（オリアンナの偽名）

★セルジン・レティアス・ブライデイン……エステライン王国の国王 水晶玉に命を  
囚われ、歳を取る事が出来ない 水晶玉の《管理者》にさせられる

★エラン・クリスベイン……トルエルド公爵家の次期公爵 オリアンナの幼なじみ王  
配候補 モラスの騎士 ハラルドから呪いを受けている

★テオフィルス・ルーザ・アルレイド……アルマレーク共和国リンクルクラン領の次  
期領主 《七竜の王》 オリアンナのアルマレーク共和国での婚約者 オリアンナをへ  
タレ小竜と呼ぶ

★アドラン・デイラス・ブライデイン……セルジン国王の腹違いの兄 魔王  
水晶玉に命を囚われ、セルジン同様歳を取れない

★エドウィン・ルーザ・フィンゼル……オリアンナの父 アルマレーク人 レクーマ  
オピオン領の次期領主 娘のオリアンナを守るため、《聖なる泉の精》と取引する 王都  
ブライデインの《聖なる泉》で、オリアンナを待つ

★マルシオン・ティエム・ベイデル……古のエステラーン王国の第十四代国王 水晶  
玉の〈管理者〉 マール・サイレスとして王の薬師を務めていた

★ハルビイン・ボガード……レント領辺境伯ボガード家第五代領主 オリアンナ姫の  
養父

★サフィーナ・ボガード……レント領主の妻 オリアンナ姫の養母 王族の遠縁にあ  
たる者

★ハラルド・ボガード……レント領主の息子 魔王アドランの〈契約者〉となる

★トキ・メリマン……セルジン国王の近衛騎士隊長

★アレイン・グレンフィード……ノルダイン公爵 国王軍大将 王配候補の一人

★エネス・ライアス……デイスカール公爵 宰相 魔王アドランとは幼馴染だった

が、今は敵対している

★☆ルディーナ・モラス……モラス騎士隊の総隊長 強力な魔力の持ち主 人形に魂

を封じ、セルジン王の魔力により生きている

★モラスの騎士隊……対魔防戦士達 主に〈契約者〉と対峙

★マシーナ・ルーザ……テオフィルスの随行者 アルマレーク人 リンクルクランの竜騎士

★リーサ……マシーナの妻 テオフィルスのファンクラブ「親衛隊」の元会長

★ルギー……アルマレーク人の少年 レクーマオピオンの竜騎士見習い

★老トムニ……アルマレーク人 レクーマオピオン領の元竜騎士

★ローランド……トルエルド公爵家の騎士 エランの随行者

★ロイ・ベルン指揮長官……エランの元主君 レント領騎士隊の武将

★ミア・メリマン……オリアンナの侍女 トキ・メリマンの妻

★メルゼ……モラスの騎士 エランの友達

☆アルス国王……前エステラーン国王 セルジン・オアイーヴ・アドラン・ドウラス等の父

☆エルザ……セルジン・オアイーヴの母

☆イーリア……アルス前国王の正妃 アドランの母

☆オアイーヴ姫……オリアンナ姫の母 エドウインの妻 セルジン王の同母の妹《王族狩り》で犠牲となる

☆セイエン・ローウエル・ベイデル……古のエステラーン王国第十三代エステラーン国王　ベイデルの《王族》　マルシオン王の兄

☆ロレアーナ……マルシオンの正妃　セイエン王の娘　ベイデルの《王族》

《聖なる泉の精》と取引し、《聖なる泉》の門の楔石となる

☆ドウラス王子……セルジンの腹違いの弟　王がもつとも信頼していた《王族》

●シモルグ・アンカ……魂を運ぶ聖鳥　天界の巨大樹に巣を持つ不死の鳥

☆●アミール・エスペンダ……セルジン王の最愛の女性　戦いの女神アースティル

☆●オーリン・トウール・ブライデイン……セルジン王とアミールの子供　オリアン

ナの命の光　《ありえざる者》

●《ありえざる者達》……天界の使者　光る球体で現れる事が多い

●リンクル……七竜　テオフィルスの竜の影　アルマレーク、リンクル克蘭領の守

護竜

●レクーマ……七竜　エドウインの竜の影　アルマレーク、レクーマオピオン領の守

護竜

●イリ……七竜レクーマの子　老トムニの竜　オリアンナを自分の竜騎士に選ぶ

●エーダ……七竜リンクルの子　マシーナの竜

●カイリ……七竜レクーマの子

● 《聖なる泉》の〈門番〉……豪華な鎧を装着した、最強の騎士 謎の存在  
● 《聖なる泉》の精霊……魔力を持つ水の精霊 オリアンナに魔力を与える  
● 屍食鬼……翼な生えた屍肉を喰らう魔物 魔界域から発生 〈契約者〉が呼び寄せ  
る

● 半変化……屍食鬼になりかけの人間 契約者の呪で発生  
● ウロボロス……尾を相食む二匹の蛇 不死な存在 神代の時代からこの世界に住  
まう

● ラーデイス……主神

● イルシユー……竜神

● エイア……知恵の女神

## 第四章 デイスカール公爵領

### 第一話 夢の中の王

煌めく天界の空を、聖鳥シモルグ・アンカが優雅に飛んで行く。

六枚の燃えるような翼を羽ばたかせて、向かう先には巨大な一本の樹木。

その巨大樹に生る<sup>な</sup>実を食べると、永遠の命が手に入るといふ。

シモルグは美しい灰色の人間の女の顔で、小さな木の実を一つ口にくわえむしり取った。

止めろ！

叫んでもシモルグには届かない。

まるで僕が存在していないように、物事が進んで行く。

聖鳥は巨大樹の周辺をゆっくり旋回しながら降下し、雲に覆われた地上にいる二人の人物に近付いた。

セルジン！

二人とも長い黒い髪をしている。

一人は長身の男セルジン・レティアス・ブライデイン、もう一人は華やかな鎧を装着

した美しい戦いの女神アースティル。

僕の胸は、引き裂かれるようにきりきりと痛んだ。

止めろ……。

シモルグが女神の横に舞い降りた。

美しい女神は微笑みながら、シモルグの口から巨大樹の木の實を受け取る。

虹色に輝く木の実は、神の妙薬の如く魔力に満ちていた。

女神は優しい表情で、木の実をセルジン王の口元に押し当てた。

駄目だ、セルジン！

食べないで！

王は一瞬ためらった後、ゆっくり口を開けた。

綺麗な指先が唇を撫でるように、木の実を滑り込ませる。

止めろ——！

王の喉が動き、永遠の生命をもたらす木の実を飲み込んだ。

光り輝く闇の中で、もがき苦しむ王の姿が遠退いた——。

「セルジン！ セルジン……」

「オリアンナ様！」

僕の叫びとミアの大きな呼び声が重なり、ようやく目が覚めた。

あの日から何度も見る夢に、冷汗と荒い息遣いで飛び起きる。

夢と現実が、セルジン王がいけない苦しみを見せつける。

ミアが優しく僕を抱きしめた。

「大丈夫です。陛下は必ず戻られます！」

天界の城で起きた事は、王の側近以外誰も知らない。

無用な混乱を避けるため、皆には一時的な不在とだけ伝えられている。

戻らない可能性が高い事は、宰相エネス・ライアスによって、決して悟らせないように

に厳命されていた。

「本当に……、戻ってくる？」

「はい！ 今までもそうでした。必ずオリアンナ様の元へ戻られますわ」

「そう……だね」

皆の前で、悲しみ苦しむ姿を見せてはいけないのだ。

天幕に出入りする者達の手前、たとえ事情を知るミアの前でも……。

「さ、お着替えください。皆さま、お待ちですよ」

「うん」



無感動に微笑む。

王が代償とした国王軍の貴重な平穩を、僕の苦しみで乱したくはなかった。

セルジンが望んだ事だ。

僕は……、それを維持させる。

着替えるために鎧の下に着る肌着を受け取った時、左上腕にはまる〈抑制の腕輪〉が目に留まる。

それは今も天界の女神に支配される証のように、取り除く事も出来ずに存在していた。

どうして取れなくなつた？

こんな忌々いまいましい物！

無理を承知で、引つ張つてみる。

まるで肌に吸い付いているように、腕輪はピクとも動かない。

怒りをぶつけるように、叩いても引つ搔いても外れる気配もない。

これさえなければ、セルジンが連れ去られる事はなかった……。

マルシオン王の警告を聞かずに、セルジン王に触れてもらいたいだけで、簡単に天界の罠にかかった自分が許せなかつた。

何度も繰り返し取り除こうとしたために、腕輪の周りの傷口が再び血を滲ませる。

まるで自傷行為のように肌を傷つけ、ミアに止められた。

「お止め下さい！ 傷を作るだけですわ」

両手をつちり掴まれ、それ以上怒りをぶつける事が出来なくなった。

再びミアに抱きしめられる。

「落ち着いて……、信じるんです。陛下は必ずお戻りになる。その時にそんな傷を作っていたら、私が怒られますわ」

「……………うん。ごめん」

次に王が戻った時は水晶玉の〈管理者〉となり、不死の人間としての帰還だ。

きつと影の方がマシだ……、《ソムレキアの宝剣》で断ち切れる。

〈管理者〉は水晶玉が消滅するまで、死を迎える事は出来ない。

永遠に時間を彷徨<sup>さまよ</sup>うのだ。

ふと、誰かの声が心に浮かんだ。

《真実を知った時に王がどんな風に変わるかを、循環する運命の輪にしがみ付きながら見届けるのが、娘さんの役割のようにわし等には思えるがのお》

メイダール大学図書館に住みつく、ウロボロスの言葉だ。

セルジンが変わる？

水晶玉の〈管理者〉として、どんな風に…………？

〈管理者〉としての王の姿を想像してみた。

見届けるって……、僕にはもうそんな時間は残されていないのに。

王を水晶玉から解放した段階で、僕の命の光である〈ありえざる者〉オーリンが王に移り、僕は死を迎える。

……セルジンはきつと、僕の事を忘れてしまう。

そう思うと、悲しかった。

僕の生きた時間が、王のこれからの長い一生の中で、ほんの一瞬にすぎない事がとても嫌だった。

「やいつ、くそ王太子オーリン！ 俺のイリを、勝手に返しただと？ どうしてくれるんだよっ！」

「別に……、僕がやった訳じゃない。文句なら、テオフィルスに言え！」  
悲しみに暮れている暇などない。

いなくなつたセルジン王の代わりを、王の天幕で務めなければならぬ。

今一番の問題が目の前で大騒ぎしているアルマレーク人のルギーを含む、怪我をして同行する事になつた竜騎士達と、彼等に反感を覚えている国王軍の一部の者達との対立

だ。

「王太子殿下に対して、その口の利き方は何だっ！」

慌てて駆け付けたマシーナ・ルーザが、ルギーの頭にげんこつを食らわせた。

彼は国王軍の傭兵部隊にいつの間にか紛れ込み、テオフィルスについて来ていたのだ。

「大変申し訳ありません、オーリン殿下！ 私が忍び込んだ上に、怪我人が元気になる問題ばかり起こして……」

「いいんだ、マシーナさんがいてくれて本当に助かってるよ。僕達だけじゃ、対応しきれないから」

言葉の壁と習慣の違いから、摩擦は深まるばかりだ。

竜騎士達全員がエステルン語を堪能な訳ではなく、国王軍にアルマレーク語が解る人間も少ない。

通訳に駆り出される事は平気だが、竜騎士と国王軍の騎士との溝を埋めるのは、本当に大変だった。

「王の天幕の警備はどうなっているんですか？ こんな小僧が入り込むなど……」

「アレインさん、僕が許可したんだ」

「嫌な奴が来た！」

「ルギーー！」

天幕に入ってきた国王軍の大將アレイン・グレンフィールドに、ルギーが顔を顰めた。事ある毎に行動の規制を言い渡すアレインに、アルマレーク人達の不満は募る。

若い大將は、容赦がない。

「殿下、いくら天界人に守られていると言っても、人間の敵に対しては我等で防衛するしかありません」

「アルマレーク人は敵じゃないよ。陛下が認めている」

何度も天界の城での出来事を説明しても、アレインは聞き入れる気がない。

王配候補の一人でもあつた彼は、王がテオフィルスに僕を預けた事を認めたくないのだ。

気持ちは解るよ。

僕だって、認めたくない。

王の意図がまるで解らない。

このままではエステラーン王国は、アルマレーク共和国に吸収される。

神々に滅ぼされるのは現実感がないが、アルマレークは過去に敵対した国、エステラーン人として当然反感を覚える。

僕の半分は、アルマレーク人なのに……。

一番困惑しているのは、僕自身だ。

アレインが吐き捨てるように言った。

「奴は陛下に取り入ったのです。王国を乗っ取るために……」

「エステラーン王国等、いらん！」

突然、低い声が天幕中に響き渡った。

出来れば目の前に現れて欲しくない人物……、テオフィルス・ルーザ・アルレイドが無表情に入り口に立っている。

「こんな荒廃した王国を押し付けられても、共和国にとっては迷惑なだけだ！」

「若君、言い過ぎです！」

慌てて止めるマシーナを尻目に、テオフィルスは挑発するようにアレインを見て笑った。

アレインが怒りの目を向け、今にも剣を抜きそうになる。

「もう、いいっ！ 皆、天幕を出て出立の準備をしろ、時間だ！」

執務のための椅子から立ち上がり、入り口を指差した。

年下の女子が、年上の男達相手に命令を下す……、自分でも意味の解らない光景だと思ふ。

天幕にいる者達は慣れた様子で、移動の準備に取り掛かる。

「決闘は厳禁！ 協力しあえない者達は、行軍から去ってもらおう。これは命令だ！」

どう見ても子供が真っ赤になって、ただ喚いているようにしか見えない命令の仕方。それでも気力を振り絞って、この場を収めなければならぬ。

アレインは渋々命令に従う素振りを見せたが、テオフィルスは馬鹿にしたように鼻で笑う。

「ふんっ、ヘタレ小竜のくせに、俺に命令をするな！」

「若君っ！」

思いつき蔑んだ目で睨んだ後、さっさと天幕から出て行った。

マシーナが平謝りしながら、ルギーを連れて後を追う。

アレインも憤りを隠せない様子で、天幕を後にした。

一番の問題は、テオフィルスのあの態度だ。

僕を預かる事を承諾した彼は、極端な程冷たくなった。

僕を預かりたくないんじゃないのか、そう思うとどう対応して良いのか全然分からず、彼を避け続けた。

暗い屍食鬼の空が、エステラーン王国に届く光を奪っている。

王の天幕から外に出た僕は、朝でも常にうす暗い王国の空を見つめて重い吐息を漏らした。

セルジン王が身を犠牲にした戦いで、女神アーステイルとの契約が国王軍を守っている。

上空には天界の兵士達が守りを固め、その上にいる屍食鬼が襲ってくる気配はない。

セルジン、戻ってきて……。

古のエステラーン王国の王マルシオンは姿を消し、ありえざる者オーリンも僕の中で眠ったまま、天界に関わる者の姿は、星のように輝く天界の兵士のみ。

セルジン王の行方の手がかりは、手を伸ばしても届かず知る事が出来ない。

「出立の準備が整いました」

近衛騎士隊長トキ・メリマンの低い声に、物思いから否応なく現実を引き戻される。

デイスカール領の南西にあたる今の夜営地は、近くにイルーの大河が流れるかつての大都市サージ近くに設営されていた。

薄明りに浮かび上がる堅牢なサージ城塞は、そのままレント城塞を思い出させる。

見張りの塔が少ない違いはあるが、城塞内に温かい宿屋があるように見える。

何もかも投げ出して帰りたくなった。

「城塞に入ればいいのに……」



廃墟の都市に入らないのは、屍食鬼を警戒しての国王軍の規則だ。

解ってはいいるが、すっかりした建物での日常が恋しかった。

「在るのは人のいない廃墟だけです。何が潜んでいるか分かりませんし、建物が倒壊する危険もあります。広い場所での夜営の方が安全ですよ」

待ちわびていた宰相エネス・ライアスが、迎え答えた。

「うん……」

がっかりしながらサージ城塞を眺めた。

そこはレント城塞ではないのだ。

セルジン王の隣にいる間は幸せで見えなかった現実が、今は冷ややかに幾度となく訪れる。

まるで屍食鬼に覆われた空が、そのまま僕の心に入り込んだように、気力を萎えさせていた。

## 第二話 呼び名の降格と優しさの昇格

宰相エネスが懐かしむように、サージ城塞を眺めて呟いた。

「ここには私のかつての居城がありますよ」

「え？ エネスさんって、デイスカール公爵じゃないの？」

公爵家のデイスカール城は、もっと王都に近い。

「兄の亡き後に継いだのです。その直後に私の家族が殺され、王都も滅びた。幸せな思い出は、サージ城の方が多いのです」

サージ城塞に入りたいのは、エネスの方だ。

「そう……。戦いが終わったら、この城塞をデイスカール領の中心にするといいよ」

悲しく微笑む白髪の宰相は、酷く年老いて見えた。

王が消えた後、国王軍を取り仕切っているのは彼だ。

その重責に、疲れているように見える。

「エネスさん、少し休んだ方がいい。無理してるんじゃないの？」

「ありがとうございます、殿下。でも後少しで《聖なる泉》、殿下の魔力が完全になるのが近い時に、休んでいられませんよ」

「……………」

その言葉に、僕は不安になる。

泉の精の魔力を、操る自信がないのだ。

完全になったらどうなるんだろう？

泉の精の魔力つて、魔法使い達の魔力と何か違う。

僕自身に魔法を使う感覚がないせいなのか？

左腕に嵌まる〈抑制の腕輪〉を触った。

これのせいか？

天界の魔導具に振り回されているのを、情けなく感じた。

マールさんなら、これを取り除く事が出来るのかな？

マールシオン王をマールと呼んでしまうのは、彼を憎む事が出来ないからだろう。

古の王とセルジン王が重なって見えるせいもある。

共に永遠に生きる、水晶玉の〈管理者〉にさせられてしまったのだから。

「この《聖なる泉》も、魔界域に通じている可能性が大きい。テオフィルス殿に、殿下の護衛を頼みました」

「えっ？」

おもいつきり嫌な顔をしてみせた。

先ほど僕を馬鹿にした、彼の顔を思い出す。

「陛下やマルシオン王がいけない状況では、七竜の魔力が一番の頼りですよ。天界の兵士が、魔界域の者達と戦いを交えるとは私には思えません」

確かに天界と魔界の争いになれば、人間界は簡単に滅びてしまうだろう。

戦いの女神は二つの水晶玉の〈管理者〉を、人間界に求めた。

少なくとも天界は、人間界を必要と判断しているのだ。

「あの男は、協力なんてしないよ。僕の事、嫌いなんだから」

「おや？ 私にはそうは思えません……、むしろ逆なのでは？」

なんだか無性に腹が立ってきた。

「嫌いなんだよ！ 絶対に、そうだよ!!」

感情的になってる事に苛立ちながら、エネスの側を離れた。

セルジン王との仲が壊れかけたのは、あの男のせいだ。

違うと解つていても、この事態を引き起こしたのは彼だと思いたかった。

やりきれない感情を、ぶつける存在が欲しかったのだ。

イルー大河の支流沿いにある《デイスカールの聖なる泉》を目指し、国王軍はゆっく

り進む。

屍食鬼に覆われた空は暗く、倒木に道はふさがれ、それらを除きながら進むので遅くなるのは当然。

王都ブライディンに近づく程、国の荒廃は目に見えて酷くなる。

《エステラーン王国等いらん！》

先程のテオフィルスの言葉が、嫌になるほど実感できる。

これでは魔王を倒せても、国の復興は程遠い。

だいたい天空の女神は、エステラーン王国を滅ぼすと断言している。

このまま本当に、滅びてしまうのかもしれない……。

テオフィルスが《王族》の受け入れを承知して、アルマレークの七竜は、女神の意志に反旗を翻す事になる。

七竜は堕ちた神、元は神々と戦った悪竜神の、権威を剥ぎ取られ、八つに分散された内の七つの姿だ。

八つ目は魔界域に堕ちたという。

七竜に、天界の意志に背く力が、まだあるのか？

「おい、落ちるぞ」

「え？」

テオフィルスの低い声が、左横で聞こえ顔を向けた途端、僕の身体が裸馬からずり落ちた。

「うわっ！」

落下する感覚に、恐怖の汗が出るのは何度目だろう。

その度に横で補助してくれる、マシーナ・ルーザに受け止められる。

「大丈夫ですよ、何度でも受け止めますから。安心して訓練して下さい」

長身のマシーナが優しい笑顔で囁き、軽々と裸馬の背に僕の身体を持ち上げ、騎乗し直してくれた。

セルジン王がいなくなった直後から、僕はテオフィルスに裸馬に乗る訓練を、強制的にさせられている。

どんなに抵抗しても、「万が一、制御不能なイリが、戻ってきた時のための訓練」という名目で、馬から鞍を取り外され、乗るのを強要される。

そのうち手綱も取り外すらしいから、僕の気分はどん底にある。

度重なる恥ずかしい思いに、無様に裸馬の首にしがみ付きたくなるが、それをすると馬が暴れる。

幸い手綱はアルマレーク人が持つてくれているので、今のところ暴れた事はない。

反対側のテオフィルスが同じく裸馬に乗りながら、面白くなさそうに鼻を鳴らす。

「ヘタレ小竜、落ちるな！ 裸馬の上でぼうつとするからだ。まぬけ小竜に降格してやろうか？」

「若君！」

皮肉たつぷりの言葉は、彼のかっこ良さを台無しにしている。

マシーナが怖い顔で、テオフィルスを睨み付ける。

そんな様子を見ながら、反抗する気力もなく呟いた。

「べつに、いいよ。まぬけ小竜でも……」

セルジン王を失った僕は、まぬけに違いない。

あの日から自分を責め続けているので、その言葉は的確に思えた。

テオフィルスが面白くなさそうに、再び鼻を鳴らす。

「じゃあ、まぬけ小竜。裸馬に乗る時は、それを外せ」

《ソムレキアの宝剣》を指差した。

「重くないのか、その宝剣？ 前々から思っていたが、その周りの空気が歪んで見えるぜ」

「別に……、重くない」

魔力は感じるが、重さなど感じた事もなく、存在を忘れるくらい僕に馴染んでいて、訓練の剣より軽い。

セルジン王を水晶玉から解放するための大事な宝剣を、外す事を考えると王との接点を失いそうで、ますます気が滅入った。

「外すのは出来ないよ。大事な物なんだ」

「……………」

不満そうに宝剣を睨みつける彼は、それ以上その事には触れなかった。

裸馬の体温と歩く動きが、足から伝わる。

馬の鬣をつかみ過ぎないように軽く持って、真つ直ぐ進行方向を見ながら下半身でバランスを取る。

少しでも気を弛めると落ちそうになる。

先方隊から本隊へ、道の整備のため止まる知らせが届き、行軍が前方からゆっくり停止してゆく。

手にした鬣を少し引き、足の扶助で乗り手の意志を伝え、馬は停止した。

もうすぐ《聖なる泉》に着きそうなのに、また足止めだ。

「オーリン殿下、そろそろ裸馬から降りていただけますか？ 《聖なる泉》が魔界域に通



じている可能性もあります」

トキ・メリマンがアルマレーク人を説得するように、わざと大きな低い声で丁寧に伝えた。

《トレヴダールの聖なる泉》では泉の門が、完全に魔界域の出入口になりかけていた。《聖なる泉》の〈門番〉が黒い渦を出していたから、今回も危険が予想される。

あの時はマルシオン王に助けられたが、今、彼はいない。

テオフィルスに頼んだと宰相エネス・ライアスが言っていたが、冷たい彼にこれ以上関わる気にもなれない。

馬を降りようとした時、突然テオフィルスが警告を発した。

「馬から降りるな！ 魔物がいるぞ！」

「え？」

バランスに気を付けながら見回すと、立ち枯れた木立の隙間から、暗闇を這い出るように何か<sup>うごめ</sup>が蠢いている。

それは偶然とは思えないほど真上にあり、大きな蛇のように狙いを定めてゆつくり落ちて来る。

粘液状の魔物は黒い身体の中で、気味の悪い赤い発光点を幾つも光らせていた。

「こつちへ来い！」

テオフィルスが馬を近付け手を伸ばすが、裸馬に二人乗りはどう考えても無理だ。  
躊躇ためらつていると、無理やり自分の馬に乗せようとした。

「早くー！」

気圧されて仕方なく彼に抱き付き、馬を移動する。

僕の乗っていた馬の腹をテオフィルスが蹴り、手綱を持つアルマレーク人が手を放し、馬を逃がした。

上から落ちてくる予想以上に大きな魔物に、皆が警戒し大きな円を書くように場を移動し、戦闘の態勢を取る。

テオフィルスに抱えられながら、僕達の乗る馬だけが移動しない。

このままでは粘液状の魔物に押し潰される。

「テオフィルス？」

「リンクル、元の姿に！」

アルマレーク語で彼が命じた途端、二人の乗る馬は大きな七竜リンクルの姿に変わった。

驚きと乗る生き物の変形に、振り落とされないように必死にテオフィルスにしがみ付いた。

竜の身体から熱気が上昇し、焼き尽くされる恐怖を感じる。

「落ち着け、お前を焼いたりしない。ただ怒っている、領地以外の人間を乗せている事に」

「そんな……」

不可抗力で乗せられたのに、七竜の怒りを買うのは理不尽だ。

「安心しろ、俺が乗せたんだ。リンクルは従う」

〈七竜の王〉であるテオフィルスの言う事にリンクルは従い、上昇した熱気が元の温度に下がり、怒りを鎮めた。

どこことなくセルジン王が僕を彼に預けた理由が、少し解った気がした。

理屈では女神に対抗するのは不可能に思えても、こうして七竜を操るテオフィルスと接すると、不可能な事も可能に思えてくる。

「リンクル、あいつを焼き払えー」

落ちてきた大きな魔物に向けて、竜が炎を吹く。

真上に吹き上がる灼熱の恐怖と、暗闇を追い払う美しい紅蓮の炎。

人々は一斉に背を低くし、熱から逃れた。

明るく照らし出される荒廃した森は、簡単に焼け落ち熱に揺らめく

〔終息〕

ゴソツとテオフィルスが呟くと、今までの炎が嘘のように熱を失い消えた。細かな灰がゆつくりと舞い落ちる。

魔物の物か立ち枯れた木々の物か判別がつかないが、焦げ臭い臭いが辺りに充満した。

「お前、また痩せたな。すっかり食べてるのか？」

テオフィルスが無表情に、僕を見下ろしている。

「もちろん食べているよ。痩せる体質だから、気にしないでくれ」

不貞腐れ気味に横を向く、食欲等ある訳がない。

セルジン王を失った痛手に、身も心も倒木のように朽ち果てるのを、心のどこかで望んでいる。

「口を開けろ」

彼に顎を持ち上げられ、上向かされた。

「何を……」

「いいから、口を開けろ」

「嫌だ！」

手を払い除け、横向きに乗せられている竜の鞍から下りようとしたが、彼に肩を掴まれる。

「口を開けないなら、俺が口移しで食べさせてやろうか？」

そう言いながら、何かを頬張った。

その先の事を想像すると、嫌さのあまり口が開く。

彼がにやりと笑い、何かを手で口に放り込んだ。

「……………うぐっ」

噛みしめた瞬間、甘い果物の香りが口中に広がり、「美味しい」と心がつがや呟く。

彼が顎から手を放すと、僕は無言で何度も噛みしめた。

飢えている事を、嫌というほど思い知らされる。

「レクーマオピオンの特産品だ。ナツの実の干したものだよ。これを作ったのは、お前

の祖母さんだ」

僕は目を大きく見開き、皮肉っぽく微笑む彼を見た。

会った事もない祖母が作った干し果物、それを知った途端、僕の中から何かがかぼれ

落ちる。

しばらく枯れ果てていたものだ。

ぶつきらばうなテオフィルスの優しさが引き出した、セルジン王を失って以来、初め

て流した涙だった。

### 第三話 親密さの距離

「何を食べさせた？」

聞き慣れた声が、七竜リンクルの下方から聞こえた。

竜の鞍に横向きに座り、テオフィルスの側で涙に咽むせぶ僕は、その声に冷静さを取り戻した。

「エラン？」

リンクルのすぐ横に、朱色の長いマントを着たエランが立っていた。

つい最近までルディーナ・モラスが、同じ様相のマントをまとっていたのだ。

モラスの騎士全員が総隊長と認められた者以外、羽織る事が許されないマント。

ルディーナ・モラスの死と同時に、彼女の魔力を全て収めた魔剣と、その地位を譲り受けた彼は、モラスの騎士全員に認められるまで、僕に会わない誓いを立て去った。

成人年齢に達したばかりのエランに、大人の魔法使い達を取りまとめる事が出来るのか、彼の状況は僕と似ていた。

あれから、ひと月あまり。

「認められたんだね、エラン」

「ああ。君に早く会いたくて、頑張ったんだ」

彼の体型に合わせて作られた長い幅広のマントは、モラスの騎士全体のイメージを力強く見せ、ルディーナとは一線を画す。

新しいモラスの騎士隊が、彼を総隊長とした新体制で出来上がったのだ。

久しぶりに見るエランは、また背が伸び男らしさが増していた。

「降りなよ、受け止めるからさ」

エランが両手を差し伸べてくる。

嬉しくなつて彼に抱き付くように竜から飛び降り、首に腕を回してしばらく抱き合つた。

幼い頃から兄弟のように育つた僕達は、無意識にお互いが必要としている。

足が地面に着かず、宙に浮いたまま抱きしめられ、今までとは違う感覚とほんの少し抗議も交えて、彼の顔をまじまじと見入った。

「久しぶりだ、オリアンナ」

「……背が、凄く伸びた？」

にやにや笑いながら頷き、ゆっくり僕を地面に下ろす。

抱きしめる腕の力はそのままだに、彼はテオフィルスを睨み付けた。

「言え、アルマレーク人、何を食べさせた？」

「ナツの實の干した物だ。元氣が出るし、栄養がある。文句があるなら、そいつにもっと食わせろ！ それから、俺の名はアルマレーク人じゃない、テオフィルスだ」

面白くなさそうに二人を見下ろす彼は、殴り合いの喧嘩をして以来、エランに対して心の蟠りわだかまを消す事が出来ずにいる。

エランは安心したように頷く。

「嘘はついてないようだな、ありがとう。言われなくても、今後は僕が食事に付き合うさ、毎回ね」

そう言つて僕にいきなり顔を近付け、くちづけを浴びせてくる。

王がいなくなつて、彼が一番身近な存在になつた。

戻つてくれた安心感から抵抗せず受け入れ、人の温もりに飢えている自分を見つけ出す。

「リンクル、馬に戻れ！」

テオフィルスが不機嫌そうに、わざと大声で言った。

「尻軽なまぬけ小竜、早く馬に乗れ、置いて行くぞ！ エラン、今のそいつを甘やかすのは止めろ！」

怒つたように言い捨て、マシーナに指示を出す。

マシーナは困つて溜息を吐きながら、申し訳なさそうにエランと僕を引き離す。



「甘やかすって何の事さ？ 君の言葉にオリアンナがどれだけ傷付いているか、解っているのか！ 無礼にも程があるぞ！」

「……そりや、失礼した。でも本当の事だ。そいつは女王として、一人で立たなきやならない、今のお前は、邪魔なだけだ」

「支える事ぐらい出来る！」

「呪われた身で、偉そうにほざくな！」

「……………」

テオフィルスは以前、メイダール大学街でエランを殺そうとした。

〈契約者〉ハラルドが掛けた呪いによって、エランはいずれ屍食鬼になる。

そうなる前に、殺そうと判断したのだ。

セルジン王から賜った銀の額飾りの効果と、ルディーナと出会い魔力を高めた事で、ある程度先延ばし出来たとしても、いずれそれはやって来る。

避ける事は出来ない。

「なぜ、君が知っている？」

エランの身体から今にも黒い渦が吹き出そう、僕は思わず彼の手を取った。

「セルジン王から王太子に関する事は、すべて聞いている。呪いが解ければ、お前は王配候補に戻る事も知っているさ」

触れられたくない事を指摘され、エランの表情は暗く沈んだ。

「ハラルドを殺し、呪いを解く、必ず！ 彼女を君には渡さない！」

対立が激化していくようで、僕は思わず二人の間にわざと立ち、テオフィルスを見上げた。

「そんな事まで、セルジンが君に教えたのか？ ……どうして？」

「……」

余計な事を言ってしまったのだろう、彼は口を押え、目を瞑った。

しばらくの沈黙の後、いつもの無表情さが戻ってくる。

「王国の未来はお前に掛っているが、共和国は王制を受け入れない」

「え？」

「お前が退位して、レクーマオピオンの領主となれば話は別だ。エステラーン人はアルマレーク人に受け入れられるだろう」

「……《王族》を、捨てるという事か？」

「そうだ。その判断を下すために、まずお前自身が女王として立たねばならない」

共和国——全てを議会で決定し、国王のように一人が国を支配する事を拒む国。

アルマレークは七竜の意志を聞ける七領主家の者が、共和国政府の高官となる貴族制

共和国だ。

エステラーン王国とは全く違う政治体制。

セルジン王はなぜ彼に《王族》を預ける気になったのか、いつもの疑問が湧き起こる。

「僕は……、セルジンを水晶玉から解放したら、死ぬんだよ。女王には、なれない」

「……それは、お前次第だろう」

そう言っただけを求めよう、彼の青い瞳が僕を見つめてくる。

僕の心の片隅で、何か「思い出せ！」と訴えていた。

それをセルジン王への思いが、完全に否定する。

苦しみの中に浸って、目の前の現実を拒否し続けている。

僕はセルジンを解放して終わる、それが役割だ。

「お前の生存を望んだのは、王だ。お前を助けたいの、セルジン王だよ！」

その言葉に、涙が頬を伝った。

先程泣いてから、涙腺が壊れたように簡単に涙が出る。

どうかしている……。

止めようとして涙を拭いても、次から次へと溢れ出て止まらない。

王が生きる事を望んでいる。

それは天界の意志に反する事であり、堕ちた神である七竜のいるアルマレークへ託し

た理由は、そういう事なのだ。と解った。

僕は……、生きる事を望めない。

王が戻つて来ない限り、苦しみが大きすぎて希望を見出せないでいる。

エランが近付こうとしてマシーナに止められた。

解っているんだ、これは僕自身の問題。

誰にも僕を助けられない。

テオフィルスの横に、鞍を置かれた僕の馬が牽かれて来た。

「早く乗れ、もうすぐ道が開通する」

「……」

涙を振り払い、重い足取りでテオフィルスの側に近付く。

ふと疑問が湧き起こった。

テオフィルスはなぜ、セルジンの提案を呑んだのだろうか？

婚約を解消して、僕には関心が無いはずだ。

レクーマオピオンを助けるためか？

じつと彼を見つめた。

青い綺麗な瞳が、今はとても冷たく感じ、投げかける酷い言葉も、心に憤りすら覚え  
ない。

関心が無いのに、なぜ構う？

なぜ、王の言いなりになる？

「僕のこと……、構わないでほしい」

「ふん、まぬけ小竜。お前は、抜け殻にでもなるつもりか？」

テオフィルスはリンクルの化けた裸馬を降りた。

目の前に来た彼の背は高く、まるで壁に阻まれた気分になる。

「お前自身の問題で、国王軍を危険に陥れるなよ。王が望んだのは、お前の生存だけじゃない！」

「それは……、解っているよ。ただ、君に関わるのは嫌だ」

「なぜ？ セルジン王を、心から追い出されそうだからか？」

蔑んだ目で見下ろす彼は、心の奥底の感情を引きずり出す。

恐怖に首を横に振りながら後退り、見たくない感情を必死に抑え込もうとする。

「セルジンを追い出すなんて、君に出来るものか！ そんな事、僕は許さない！」

「だったら、馬に乗れ！ 俺に関わる以外の選択肢が、お前にあると思うな！」

「……どういう事だ？」

テオフィルスは顔をしかめた。

本当は言いたくない事なのだろう。

自然に気が付く事を、待ちたかったのかもしれない。

「まだ解らないのか？ お前はへ七竜の王の婚約者に返り咲くんだ。それ以外、お前を救う方法は無い！」

僕の周りの全てが、消滅したように思えた。

親密さの距離を測れない相手に、どう向き合えと言うのだ？

## 第四話 約束の記憶

テオフィルスとの婚約を復活させる事を、セルジン王は承知の上で彼に託したというのか？

僕は絶望的な気持ちで、ただ首を横に振り否定するしか出来ない。

見下ろすテオフィルスの目は、冷たい苦悩に満ちている。

マシーナが頭を抱えながら、彼に近付き忠告をした。

「感情的になる若君も珍しいですが……、もっと別の伝え方があるでしょう？ それじゃあ、嫌われるだけですよ」

「ふんっ、嫌いたければ、嫌え！ こいつを見てみると、本当にイライラする！」

「お気持ちをよく解りますが……、もっと優しく。あなたが大人にならなければ、物事は進みませんよ」

「そんな事は、判っている！」

テオフィルスは背を向け、必死に落ち着こうと努力している。

理不尽な状況に追い込まれているのは、僕だけではないのだ。

王やエランとの仲を知られているし、今も彼の目の前でエランとくちづけをした。

この男は、僕が嫌いなんだ……。  
当然だよな。

彼の様子を見てみると、そう思える。

「王国のために……。僕は生き残らなきゃならない。陛下は本当にそう望んだのか、トキさん？」

しばらく話し合いを避けていた近衛騎士隊長のトキ・メリマンが、重い口を開いた。

「王国のためでもあり、陛下自身のためでもある」

「え？」

「陛下はこれから永遠と思える時を、水晶玉の〈管理者〉として生きていかねばならない。

《王族》のいない状況で、それが可能に思えるか？」

「あ……」

たった一人で生き残る孤独は、嫌という程理解出来る。

まして長い時間を生きていかなければならないセルジン王には、守るべき何かが必要に思えた。

「このままでは天界の意思で《王族》とその血を引く者達は滅ぼされてしまう。七竜の庇護下でなら《王族》は守られ、陛下に守るべき者達を残せるのです」

「……」



水晶玉から王を解放した先の未来を、考えた事はない。

僕に未来はなく、王には永遠の未来がある……、そう思っていた。未来。

僕の未来……。

暗い夜が明けるように、見えなかった未来の輪郭が、闇の中からぼんやり浮かび上がり、形を取り始める。

それはまだはつきりとは見えないが、確かに存在しているのだ。

解らない。

まだ……、解りたくない。

涙が頬を伝った。

僕の感情は未来という存在の前に握り潰される。

それは誰にでも起こり、誰もが経験する失恋という言葉で終わらせる出来事だ。

涙が心の傷を洗い流すように、止め処もなく流れた。

見兼ねたエランが近付こうとしてトキに止められ、その怒りは自然とテオフィルスへ向かう。

「君を認めない！ 多くのエステラーン人は、そう思うさ」

「……それはお前の考えだろう？ 別に、お前に認めてほしいとは思わない！」

「若君！」

不貞腐れたように言い捨てるテオフィルスに、マシーナが彼の肩を捕えて言い放った。

「あなたを助け出した二人に認めてもらわないで、いったい誰に認めてもらうと言うんです？」

「……」

「若君、姫君を名前でお呼び下さい！」

「……ヘタレ小竜って呼び名が、気に入っている」

「駄目です！　まず、その態度から改めましょう。お名前以外で呼んだら、承知しませんよー！」

「……………」

竜騎士の中でも精鋭と呼ばれる、マシーナ・ルーザを怒らせるのは得策ではない。戦えば負けるのは目に見えているし、親し過ぎて魔力で防御する気にもなれない。テオフィルスはあきらめの溜息を吐いて、涙に暮れる僕に振り返った。

「いい加減に、泣き止め。……エアリス姫」

「若君。その名前じゃないでしょう！」

「ふん、どっちも同じだ」

いきなり偽名で呼びかけられ、涙に濡れた顔をおずおずと上げた。

涙のせいで周りがほとんど見えず、拭おうとして上げた手は彼に掴まれた。

「ハンカチを使え。お前に渡したはずだ、持っているだろう？ 手で擦ると目が腫れる、顔が醜くなるぜ」

悲しみに満ちた心に、彼のぶっきらぼうな気遣いは伝わらない。

手を掴まれたまま、ぼうっと考える。

ハンカチ……？

そういえば、エアリス宛てにもらった。

あれはどこへ行った？

覚えがない……。

遠い昔の事に感じる、セルジン王を失ってから全てがそんな感覚だ。

僕は何か大切なものを置き忘れてきている。

(思い出せ)

心の奥底で声がする。

それを悲しみが覆い隠し聞こえなくなる。

……あとでミアに聞いてみよう。

止めようとしても涙が止まらず、首を横に振りながら無くしたかもしれない事を伝え

た。

黙って見つめていたテオフィルスは、徐おもむろに掴んだ僕の手を口に寄せ、屈み込むように指にくちづけをした。

普段であれば払い除ける行為なのに、今はその気力もない。

彼は顔を曇らせた。

「おい、らしくないぜ。やっぱり、ヘタレ小竜の方が良いか？」

「若君！」

マシーナが怖い顔で、彼を睨みつける。

「エアリス姫、俺を利用しろ」

「……」

「アルマレークを利用して、エステラーン王国を生き残らせろ」

悲しみの意識が、辛うじて彼の言葉を救い上げる。

泣きすぎて頭が重く痛く、意味を汲取るのに少し時間がかかる。

「僕は……………、《王族》を捨てるんじゃないのか？」

「形だけだ。レクーマオピオンの領主家は、エステラーン王国の《王族》の血を継承する。

俺が共和国議会から、お前を守る！」

意外な言葉に、涙が止まった。

ゆっくり疑念を込めて、彼を見上げる。

いつもの皮肉っぽい青い瞳が、今は冷静な執政者の瞳をしている。

「セルジン王を、助けたくないのか？ それが出るのはお前しかいないのだろうか？

泣いている場合か！」

「助けて、セルジンを。でも……」

「だったら、毅然としていろ！ お前にしか出来ない事は、お前がやるんだ」

「でも、君との婚約は……。……。考えられないんだ、今は……」

苦痛に顔が歪んでいるのが、嫌でも解る。

彼が悪い訳でないとは解っていても、全身で否定している僕がいる。

選ぶ権利も自由も残されていないのに、心はどうしてもセルジン王を追い求める。

「だったら、考えるな！ ブライデインへ行くまで、まだ時間はある。……。苦しむ気持ち

は、理解出来る。俺の事は気にするな」

「……。……。本当に？ それで良いのか？」

「ああ、元より覚悟の上だ」

「……」

その言葉で、気持ちはほんの少し落ち着いたが、頭が混乱をし始める。

この人は、何が目的で僕を引き受けた？

レクーマオピオンの領地のためか？

それとも七竜の定めた婚約者だから？

じつと彼を見つめた。

今は執政者の顔ではなく、背の高い普通の男の顔をしている。

彼は先程から捉えている僕の手を、自分の左手の竜の指輪の上に置いた。

「お前はオリアンナ姫を捜し、俺はお前に協力する」

その言葉には、覚えがあつた。

レント城塞で交わした、「竜の指輪の約束」だ。

あの時はアルマレーク語で約束し、今はエステラーン語で彼が告げた。

驚きに涙で曇っていた目が、ようやく鮮明に見え始めた。

彼は、優しく微笑んでいる。

「約束だ。お前は、お前自身を捜し出せ、エアリス姫」

そう言つて掴んでいた手を放し、背を向けた。

僕自身を捜し出すつて……、どういふ事だろう？

ぼうつと見送つてしていると、前衛隊から道が開通した合図のラツパが吹き鳴らされ、周りが慌ただしく動き始めた。

エランがトキの許しを得て近付く。

「大丈夫か、あいつに何か嫌な事を言われたんだろう？ あいつの言う事なんか、聞くな

！」

「エラン……、僕は何か魔法をかけられてないか？」

「え？」

エランがモラス騎士隊の総隊長の目で見つめてくる。

「別に、君の泉の精の魔力と、『王族』の魔力以外は感じない」

「そうか……。それなら良いんだ、ありがとう」

心配するエランを残し、テオフィルスの乗る馬の横にいる、僕の馬の元に向かう。

まるで魔法をかけられたのかと思うほど、意識がスツキリしている。

僕はセルジンを助け出す、それ以外は考えない。

見えない未来に、僕の心を明け渡したりしない！

テオフィルスの横で馬に乗り、進行方向を見つめる。

松明たいまつに照らされた薄暗い道の向こうには、『ティスカールの聖なる泉』が待っていた。

## 第五話 天界の意志

立ち枯れた木々の隙間から、屍食鬼の支配する暗黒の空が覗き見える。

そこに浮かぶ大きな星のような光は、天界の兵士達が天馬に乗る姿。

セルジン王が女神アーステイルと果した約束は、違わず実行されている。

国王軍の食料供給と軍資金は、王がいた頃と同じく減る事がない。

天界の魔力がもたらす事なのだろう、僕は空を見上げながら、感謝の気持ちと同等の不信感を抱く。

僕達は魔法に騙されて、本当は霞を食べて生きているんじゃないのか？

ぼうつと空を見上げる僕の横で、エランが警告する。

「よそ見していると、馬から落ちるよ」

「大丈夫だよ。普通の騎乗は、出来るようになったから」

裸馬ではなく鞍付きの馬に乗っている僕は、馬上から周りを見渡す余裕が持てるようになった。

テオフィルスの半強制的な裸馬に乗る訓練のお陰だ。

エランは面白くなさそうに、前を行くテオフィルスの背を睨みながら、わざと聞こえ



るように吐き捨てる。

「あんな危険な訓練をしていれば、嫌でも乗れるようになるよ」

テオフィルスは僕達に背を向け、まったく聞こえていない振りをしている。

エランの挑発には、乗らない事に決めたのだ。

先発隊が《テイスカールの聖なる泉》に辿り着いたという、合図のラツパが響き渡った。

この先は止まる事なくスムーズに進める、誰もがそう思っていた時。

「全員、止まれ！」

エランの大声が響き渡った。

「エラン？」

突然の号令に僕は驚き、横を並走していたはずの彼を探す。

エランは馬を止め、僕の後ろから前を行くテオフィルスを睨みつけていた。

「殿下、ご指示を」

「あ……、ああ、止まってくれ」

トキの問いかけに、訳も分からず僕は停止の指示を出す。

行軍の隊列全体に、停止の合図のラツパが吹き鳴らされる。

「テオフィルス、先発隊に何か異変が起きているようだ。君の竜で見てきてくれないか

「？」

「……自分で行ったらどうだ。お前だって、魔法が使えらんだらう？」

エランの要請に、テオフィルスは訝いぶかしみながら振り返る。

珍しい程の微笑みで、エランは彼に答えた。

「君の竜が一番早く辿り着ける、様子を見てきてくれないか？ 他の竜騎士達には、竜が

いないから、君にしか頼めないよ」

「……では、俺が不在の間、エアリス姫を守れるか？」

「当然だよ。僕以外には守らせない」

テオフィルスは、その言葉にまるで疑いを持つようにエランを睨み付け、何かを探ろ

うとしている。

「……そうか。では、しばらく待て」

「手短に頼む」

馬から下りたテオフィルスは、マシーナに何かを話している。

僕はエランを見つめながら、どこことなく感じが変わって見えて不安を覚えた。

モラスの総騎士隊長になったせいなのか？

それともルディーナの魔剣が、エランを変えてしまったのか？

思い切って尋ねる。

「エラン、先発隊に何かあったら、アレインさんから連絡が入るはずだ。わざわざテオフィルスを、見に行かせる必要があるのか？」

「オリアンナ、これは君を守るためだ」

「え？」

次の瞬間、竜リンクルの影が変身を解き、威圧感のある姿を現した、テオフィルスが指示をしたのだ。

竜はエランを威嚇し唸り声を上げるが、彼は微笑みながら竜に向かって呟く。

「無駄だよ。モラスの騎士の魔力は陛下が鍛え上げた、水晶玉の魔力に由来するものだ。七竜の魔法も脅しも、僕には通じない」

エランの周りから、今まで見た事もない光の渦が薄つすらと浮かび上がる。

リンクルは翼を広げ、今にも炎を吐きそうに大きく息を吸い込む。

周りのモラスの騎士達は、総隊長を守るべく七竜に向けて障壁を作り出す。

争いが始まりかけた時、テオフィルスが冷静に七竜の前に立つ。

「リンクル、止め！」

「エラン、お前も竜を挑発するな！俺達は共通の敵と戦う協力者だ、竜の嫌いな水晶玉の魔力を、わざとチラつかせるのは止めろ！」

テオフィルスはリンクルとエランを引き離すために、竜の背の鞍に身軽に這い登る。

「すぐに戻る」

彼は一瞬、何かを訴えるように僕を見つめ、次の瞬間凄まじい風を巻き起こして、竜と共に上空へ飛び立つ。

僕はエランの態度の意味が理解出来ずにいた。

テオフィルス一人を厄介払いして、エランの周りにいるモラスの騎士達は、竜騎士達を僕から遠ざける。

トキを含む近衛騎士達は、エランの言動に警戒し僕の周りを囲む。

殺伐とした空気に、その原因を作り出したエランに対し、僕は少し腹が立った。

「エラン、どういう事か説明してくれ！」

「君から感じ取れる魔法は、泉の精の魔力と、《王族》の魔力以外は感じないって、さっき言っただろう」

「……何か関係があるのか？」

エランは馬から飛び降り、近衛騎士越しに馬に乗る僕を見上げる。

「本当は違う。君から感じ取れる一番強い魔法は、その《抑制の腕輪》と《ソムレキアの宝剣》。つまり天界の魔力が、一番強く君を支配しているって事だよ」

僕は顔をしかめた。

セルジン王を連れ去った女神に支配されていると、エランが指摘した事で、再び苦し

みが呼び起こされる。

「あいつにこれ以上、君の苦しみに付け入る事をさせたくなかつたから言わなかつたけど、《王族》とその血を引く者達は、少なからず天界の意志の影響を受ける」

「え？」

「エステラーン王国がアルマレーク共和国に吸収される事に反発する者は、君や陛下が思っている以上に多くいるって事だよ」

赤い髪をしたエランは挑戦的に微笑む。

モラスの騎士の総隊長の朱色のマントが、まるで威光のように翻り、その周りに護衛する年長のモラスの騎士達が寄り添う。

それは近衛騎士達と対峙して見えた。

エランが宣言するように、声を張り上げる。

「モラスの騎士は、天界の意志に従う！」

王の側近達に、衝撃が走った。

セルジン王の一番の守り刀であるモラスの騎士が、王の意志に背いたのだ。

「エラン！ 陛下のご意志に、反旗を翻すつもりか！」

トキが怒声を上げながら剣を抜く、それと同時に近衛騎士達も抜剣した。

国王軍の兵達に混乱が沸き起こる。

セルジン王の不在中に、反乱が起きようとしているのだ。

王が戻らない事も、エステラーン王国がアルマレーク共和国に吸収されるかもしれない事も、側近達によつて隠されているため、エランの言葉の意味を兵達には汲み取れずにいる。

今、起きようとしている争いは、モラスの騎士による反乱としか映らない。

兵は上官に従う、この時点では王の近衛騎士であつたトキ・メリマンに従うべきと誰もが判断した時、行軍の進行方向から多くの兵の移動する物音が響いた。

トキが一步エランに近寄ろうと動かした足元に、狙いを定めた矢が突き刺さる。

瞬時に足を退いたトキは、矢を射た人物を睨み付ける。

アレイン・グレンフィード大將が馬上で微笑みながら、次の矢を弓に番えトキに狙いを定めている、まるで狩りでも楽しむように。

「アレイン殿、酔狂が過ぎるのではないか？ 王太子殿下の御前であるぞ！」

「王太子殿下は我等がお預かりする。貴殿はアルマレーク共和国に寄り過ぎているぞ、トキ・メリマン。本当に王のご意志なのか？ 殿下をアルマレーク人に預ける等、陛下の御言葉とは思えない！ 貴殿が画策した事ではないのか？」

天界の宮殿で起きた出来事は、同行したトキとその部下、エランとルディーナ、そしてテオフィルスと僕だけが知る。

ルディーナは死に、エランは天界の意志に、意識を取られている。

その場にいなかったアレインにどのように伝わっているのか解らないが、アルマレーク人に反感を持つ者には、認めたくない事柄であるのは確かだ。

「馬鹿な……、陛下が望まれたのは《王族》の存続だ。七竜でなければ、それが出来ないからアルマレーク共和国に預けられたのだ！ エランや貴殿の考えのままでは、エステラーン王国は天界に滅ぼされるぞ！」

「どのみちアルマレーク共和国に吸収され、滅ぶではないか！ それ以外の道を我等は選ぶ！」

アレインがトキ目掛けて矢を放ち、トキは剣でそれを薙ぎ払う。

矢を断ち割る音が合図となり、アレインの前衛部隊が本隊目掛けて雪崩れ込んだ。

「本隊兵士諸君、前衛部隊を迎え撃て！ オーリン殿下を、お守りしろ！」

本隊の兵達は混乱の中でも、冷静にトキの命令に従う。

同じ国王軍同士の剣が火花を散らす。

味方同士の剣のぶつかり合う音が、自滅への警鐘のように鳴り響く。

「後衛部隊へ連絡しろ！ 殿下を後衛にお連れする」

トキの命令に伝令が走ろうとするも、モラスの騎士が前に立ちふさがる。

エランの率いるモラスの騎士達が、僕と近衛騎士達に迫り来る。

駄目だ！

このままではセルジンを助け出す前に、エステラーン王国は滅ぶ！

セルジン王がいなくなり国王軍を統率するべき僕が、争いの原因になっているのだ。解決策を、僕は必死に考える。

どうしたらいい？

どうしたら……。

セルジンなら、こんな時はどうする？

自分の未熟さに歯噛みしながら、この争いの中心人物であるエランを睨み付ける。戦いの女神アーステイルの笑い声が、聞こえた気がした。



## 第六話 反乱者の望み

劍と劍のぶつかり合う音が、荒廃した森に響き渡る。

味方同士の戦いに怒号が飛び交う中、最初の犠牲者が出たのは、アレイン率いる前衛部隊の年若い兵士だった。

「うあああああ……」

魂の抜け出る悲鳴に、突き殺した本隊の兵士は我に返り、茫然と血の付いた劍を下す。同じ国王軍兵士を殺してしまった事に戦意を無くした兵士を、戦闘中の仲間が底い自然と隙が生じる。

そこへ前衛部隊が突き込んでくる。

「油断するな、奴等は本気だ。殿下を奪いに来るぞ！ 本気で戦え！」

トキが士気を鼓舞する。

近衛騎士隊に囲まれ馬に乗る僕は、すぐ側にいるエランに向けて叫ぶ。

「エラン、こんな争いは止めてくれ！ 味方同士で殺し合つて、どうするんだよ！」

彼は微笑みを向ける。

「君が僕の元へ来れば、争いは止むよ」

「陛下の命令に背く者が、どうなるか分かっているのか、エラン！」  
トキが彼に剣を向ける。

エランはまったく意に介していないように、僕を見つめ手を差し伸べてくる。  
「こつちへ来るんだよ、オリアンナ」

僕は首を横に振る。

セルジン王が命がけで僕をテオフィルスに託した。

それはエステラーン王国の存続を、アルマレーク共和国に託したという事だ。

滅びではない、生存をかけた選択。

「僕はエステラーン王国を滅ぼす気は無いんだ、エラン。今ならまだ、君達を罰する事はしない。だから、お願いだから、こんな事は止めてくれ！」

エランの顔が暗く沈む。

「君をあいっつに渡すくらいなら、僕は……、君に殺される方を選ぶ」  
「エラン！」

僕は苦しみに押し潰されそうになるのを、必死に堪える。

彼をここまで追い込んだのは僕自身だ。

一度は彼の心を受け入れたのに、僕はセルジン王を選んでしまった。

そして今度は国の存続のために、テオフィルスを選ばなければならぬ。

エランの心を傷付けているのは、僕という存在自体だ。

俯いた目線の先に、腰に吊り下げた短剣が見えた。

僕は無意識に、それを手にする。

「殿下、なりません！」

短剣を鞘から抜いた事に気付いた近衛騎士の一人が、大声で制止する。

それを無視して、切っ先を自分の喉元に当てる。

「オーリン様！」

トキの制止も、僕の耳には届かない。

「剣を退け。陛下を助けられなくなってもいいのか？」

僕がいなければセルジン王と魔王を、水晶玉から解放する事が出来ない。

《聖なる泉の精》の魔力で守られている僕は、死ぬ事が出来ないが、しばらくはダメージを受け、その間行軍が止まる。

側近達の中でも分裂を画策するアレインとエランには、僕を奪い取ったとしても不利になる。

僕の意図を汲み取り、トキがすかさず大声で休戦を呼び掛ける。

「剣を退け！ 殿下が傷付いても良いのか？ アレイン！」

反乱の指揮を取るアレインは、様子を窺いながら無表情に休戦の指示を出した。

戦いの喧騒が止み、僕はエランに向き直る。

「エラン、君の望むオリアンナは、陛下と一緒にいなくなつた。今の僕は王太子としての務めを果たすためだけにここにいる、ただの抜け殻だ」

「……………」

「君には抜け殻の僕が必要な？　せつかくモラスの騎士の総隊長になつたのに、君にはもつとやるべき事があるんじゃないの？」

「君を守る以外の務めはない！」

僕の目から、涙がこぼれ落ちる。

「だつたら、なぜこんな事をするんだよう？　僕は国王軍の分裂なんて、望んでないよ！」

エランは不自然な物でも見る表情で、手を差し伸べるのを止めた。

なんとか説得出来ないか、僕は必死に彼を見つめる。

「陛下とルディーナは、君が呪いを解く事を望んでいた。僕だつてそうだよ！　君が呪いを解いて戻ってきてくれれば、きっと僕も自分を保つ事が出来る気がするんだ。どんな状況に陥つたとしても……」

考えの浅い言葉だと、解つてはいる。

見えない未来に、今以上にエランを巻き込む、それが余計に彼を傷付けるかもしれない事も承知している。

「僕には、君が必要なんだ」

掛け値なしにそう思う。

エランが微笑む。

「それなら、一緒に来ればいいよ。最期の時まで」

彼の朱色のマントが、誘うように風に揺れる。

彼が再び僕に手を差し伸べてくる。

「最期」という言葉に、エランへの違和感が沸き起こる。

「君はエステラーン王国を滅ぼす事に賛成なのか？ 天界の意志に従うって、そういう

事だろ？ 僕が同意すると思うの？」

「……」

「セルジンを連れ去ったあの女神の意志に、僕が同意すると思うのか！ そんな事になるくらいなら、今ここで死んだ方がましだ！」

セルジン王を失ったシヨックで、心の中に隠れていた女神に対する憤りが、まるでエランへの八つ当たりのように噴き出す。

首筋に当てた短剣の切っ先が微妙に首を擦り、僕の首筋から血が滲み、痛みに顔が歪む。

それを見たエランが顔をしかめる。

「止めろ！　それはただの脅しだ。君が陛下を解放するまで死ねない事ぐらい、僕も知っているさ。傷を受けても、すぐに回復するだろう？　泣き落としも、僕には通用しないな」

僕の事を知り尽くしている幼馴染みのエランを、説得するのは難しい。

僕は表情を曇らせながら、それでも首に当てた短剣は離さない。

浅い首筋の傷は、あつという間にふさがった。

「僕は天界の意志には従わない！」

僕の言葉に反応して、彼が一步近付こうとしたが近衛騎士達に阻まれる。

「これは君が望んだ事だよ、なぜいまさら否定する？」

「えっ？」

エランが何を言っているのか、理解できない。

天界の意志に従う事を、僕が望んでいると思っているのだ。

「何の事だよ？」

エランの周りから目に見えない何かが出現し、騎士達が弾き飛ばされてゆく。

馬に乗り僕を護衛している近衛騎士達も、エランを恐れる馬を制御出来ずに落馬し、

同ように弾き飛ばされる。

トキが一人僕の前で踏み止まっていたが、魔力に屈したのか、膝を折り意識を失った。

ある範囲を境に、兵達は僕に近付く事も出来ない。

今やエランと僕を隔てるのは、恐怖に震え足踏みする僕の馬だけ、エランはその手綱を取った。

不思議な事に馬は、恐怖が去ったように震えが止まり、彼に従う素振りを見せる。

「君が言っただよ、天界の意志に従うって。陛下を助け出した後、君は天界人になるって。その時、《王族》の血を引く者達も、共に天界人になるって」

僕は驚愕した。

「そんな事は言っていないし、考えた事も……」

何かの記憶が僕の頭の隅に甦る。

清らかな、若い男の声。

《君は僕を運ぶ役割を終えたら、可哀そうだから仲間に頼んで天界の一員にしてもらおうよ。地上にいるより、幸せだと思うよ》

〈ありえざる者〉オーリンの声！

メイダールの大学図書館の四階、秘密の部屋で初めて姿を現したオーリンが、僕の役

割を伝えた後に言った言葉だ。

僕を天界人にするなんて、オーリン以外に誰も言わない。

まさか……、オーリンが僕の知らないところで、僕の身体を乗っ取っているのか？

あまりの衝撃に茫然となる。

〈ありえざる者〉が僕の命を担になっている限り、これは抵抗出来ない事態だ。

非難したくても、オーリンは特殊な状況下でないと姿を現さない。

話したくても、その機会がめつたにないのだ。

「それは……、僕じゃない。エラン、天界の罫だ。君は騙だまされているよー」

必死に訴えても、エランは聞く気がない。

僕の馬の手綱を引いて、アレインの元へ向かおうとしている。

「君が僕を騙しているのか？ あの日……、総隊長になるまで君に会わないって誓った

日、君がこのマントを持って、また会いに来てくれたじゃないか。あれは嘘だつて言う

のか？」

エランは嬉しそうに振り向いた。

「天界人になるのも、悪くないと思えるよ。君と一緒になら」

僕は激しく首を横に振る。

「僕は君に会いに行ったりしていい。僕じゃないんだ！ そのマントの事も……」



彼を包む朱色のマントは、僕の言葉を跳ね返すように、彼の心と全身を掴んで見えた。  
〈ありえざる者〉が彼に与えた、モラスの騎士総隊長のマント。

「エラン、そのマントは……」

その時、何かが空を切る音が聞こえ、僕の馬の手綱が断ち切れた。

馬は突然エランの魔力から解放され、恐怖に棹立ちになる。

僕はバランスを何とか保ち、馬の鬣を掴みながら制御しようと試みる。

裸馬の訓練を共に熟してきた馬は、すぐに僕の指示に従い、落ち着きを取り戻す。

地面に突き刺さる、レント騎士隊の矢。

僕は後衛部隊のいる方へ振り向き、そこにいる人物を見て軽い衝撃を受けた。

「エラン・クリスベイン！ お前はいつから王命に逆らう事を覚えた？」

レント領騎士隊ロイ・ベルン指揮長官、エランの元主君が怒りを漲らせながら、馬上

で弓を構えている。

その矢は確実に、エランへと向けられていた。

## 第七話 二つの魔劍

矢を番え<sup>つが</sup>エランに狙いを定めるロイ・ベルン指揮長官の後方に、レント騎士隊の騎士達が戸惑いと不信感を浮かべながら、劍を手に戦鬪の陣形を取る。

後衛部隊から逸早く駆け付けたのは、エランと親しい者達ばかり。

その姿をエランは懐かしむように眺めている、死の危険が差し迫っているのに、まるで他人事であるかのように。

危機感に慌てているのは、僕一人に思えた。

「待って下さい、ベルン長官。エランは騙されているだけだ、討たないで！」

僕は馬上でバランスを取りながら、必死にベルン長官に訴える。

「僕が必ず、エランを説得するから！」

ベルン長官はエランを睨み付けながら浅く頷くが、矢はエランに向けられたままだ。

僕は素早く馬を下り、ベルン長官の射程を阻むように、エランの前に立つ。

「君は〈へありえざる者〉に騙されているんだよ。そのマントを渡したのは、僕じゃない」  
「……あれは確かに君だ。言ってくれたじゃないか、絶対に僕を魔界域なんかへ行かせないって」

「それは……、僕の意志じゃないんだ」

〈へありえざる者〉オーリンにとつても、エランは大切な幼馴染だ、助けたいと思うのも当然だろう。

「じゃあ、誰の意志だよ？」

「天界人だ。信じないかもしれないけど……」

エランが鼻で笑った。

僕の中にいる〈へありえざる者〉オーリンの事を、いくら幼馴染みに説明しても解つてはもらえないだろう。

彼には僕しか映らないのだから。

オーリンはエランを、魔界域へ行かせたくないんだ。

僕だって、そう思うよ。

エランが受け継いだルディーナの魔剣は、彼を魔界域へ導く。

魔界域に囚われている、魔王アドランの魂の一部を、消滅させるのが目的だ。

水晶玉から僕が魔王を解放しても、魔界域に魔王の魂の一部が繋がれている限り、完全に消滅出来ない、ルディーナは考えたのだろう。

ハラルドによつて屍食鬼になる呪いを掛けられたエランは、彼女にとつて目的を果たす重要な存在となった。

屍食鬼になれば魔界域へ簡単に入れる、魔王アドランの完全なる消滅を、彼女は望んでいたのだ。

恋人を目の前で惨殺されて、復讐を遂げたいルディーナの気持ちはよく解る。

僕がもう少し大人で、彼女のように強力な魔力を持っていたら、僕もそう考える、きつと……。

僕はエランの腰に下がるルディーナの魔剣を見つめた。

魔力は感じる事が出来ず、ただのモラスの騎士が持つ剣に見える。

エランは僕の視線に気付き、溜息を吐いた。

「この魔剣の魔力が、君には解るのか？ 僕にとってこれは、とても重いんだ。総隊長の剣だからじゃない、魔力が絡めとるみたいに僕を引き摺る。魔界域へ連れて行こうとする」

エランの表情が暗く、苦痛に歪んでいる。

「僕を屍食鬼にして、魔界域へ行こうとするんだ！」

彼が魔剣に苦しめられている事に、初めて気が付いた。

ルディーナの魔力と意志が、エランを操ろうとして、彼はその事に必死に抵抗しているのだ。

僕は彼にしがみ付き、苦しみに俯く顔うつむを覗き込む。

「エラン、エラン！ そんな物、捨ててしまえ！」

エランは激しく首を横に振る。

「出来ないんだ！ 何度捨てても、僕の前に戻ってくる。折ろうとしても折れない、火にくべても燃えないんだ。どうにもならない！」

こんなに苦しんでいる幼馴染みの姿を、今まで見た事がない。

ルディーナの魔力が、如何に強力が窺い知れた。

「君なら解つてくれるだろう？ 君だつてその宝剣の魔力に、支配されているんだから」

「え？」

「そんな事はない、宝剣の魔力は全く感じない」そう言おうとして、ある事を思い出した。

レント領にある父の館で、魔王アドランと対峙した時、《ソムレキアの宝剣》を抜いた僕は、確かに何かの意志に支配されていた。

自分の意志なのか分からなくなる程自然に、宝剣を抜き魔王に切り付けた。

あの時、確かに誰かの意志を感じたんだ。

オーリンなのか？

それとも天界の誰かの意志？

そう思うと急に、《ソムレキアの宝剣》が重く感じる。

僕は怖い物でも見るように、ゆっくり自分の腰に下がる剣を見る。

魔王アドランが以前所有者だった宝剣。

宝剣の主だけが、水晶玉に囚われた《王族》を解放出来る。

宝剣の主は、宝剣が選ぶ。

まるで宝剣に、意志があるみたいだ。

今までなぜ疑問に思わなかったのだろう。

セルジン王に心を奪われて、宝剣を魔王から守る事ばかり考えていた。

これだって天界の魔道具に違いはないんだ、僕の腕にはまる〈抑制の腕輪〉みたいに

……。

そう思うと女神に支配されているようで、拒否感が心に沸き起こる。

エランはこれより、もっと強烈に支配されそうになっているのだ。

「その宝剣、凄い魔力を発しているよ。君、よく平気でいられるね」

僕には見えない魔力を、エランは見ている。

見えなくて、良かった。

見えていたらエランのように苦しむ事になる。

彼の苦しみは、僕の想像を上回る。

それでも、僕は天界の意志に従う事は出来ない。

「……………エラン、僕はこの王国を滅ぼしたいとは思わない。たとえ僕が《ソムレキアの宝剣》に…………、天界の意志に支配されていたとしても、それだけは絶対に思わない！」  
「オリアンナ？」

僕はエランにしがみ付いたまま、彼の心を突き放す。

「《王族》と王族の血を引く者だけが、天界人として迎え入れられる？ それがどういう事か分かっているのか？ 僕がそんな事を、天界人に願い出ると思っているのか？」

「……………」

「僕が陛下を解放した段階でエステラーン王国は滅ぼされる。おそらく二つの水晶玉の魔力の範囲内が消滅するんだ。その中にいる人間は国王軍だけだ。共に戦い守り抜いてきた人達を、君は見捨てるのか？」

僕は怒りを込めて、エランを睨み付ける。

エランは無表情に僕を見つめている、まるで心を閉ざしているように。

周りの兵、特に王族の血とは無縁の前衛部隊の兵達に、僕の言葉は動揺を与えた。

指揮官の命令に従い行動はしている、反乱する意志のない者達は、この争いの本当の意味を理解出来ずにいる。

「国王軍は魔王アドランを倒し、国を取り戻すために存在する。王国を滅ぼそうとする天界の意志は、国王軍にとって敵に等しい！ 僕はそんな意志に、従う事は出来ない！」

エランが顔をしかめる、周りの兵達の動揺が、手に取るように分るからだ。僕は優しく彼に問い掛ける。

「《王族》とその血を引く者達以外は、どうなつても良いのか？ そんなの、君らしくないよね。いくら魔剣から逃れたいからつて、まるで誰かに操られているみたいだ！」  
言葉と同時に、僕は彼のモラスの騎士総隊長のマントを剥ぎ取つた。

その時、僕達の上空に何か舞い降りる羽ばたきの音、そして誰かが僕達の真横に降り立つ。

「いいタイミングで魔法を解いてくれた。たまにはやるじゃないか、ヘタレ小竜」  
テオフィルスが僕をエランから引き剥がし、間に割り込む。

先程マシーナにした名前と呼ぶ約束は、彼がいない時は有効ではないようだ。

僕が手にした総隊長のマントは、突然テオフィルスが現れた事で、僕の手を離れた。

エランが剥がされたマントを手に取りろうとするが、テオフィルスがそれを踏み付け阻止する。

「お前、天界人に弄もてあそばれている暇があるのか？ それを羽織れば、呪いを解く機会が遠のくぜ」

「君に何が分かる！」

エランが怒りを滲ませながら、彼に飛び掛かろうとする。



テオフィルスは僕を後ろに庇いながら、それを避ける。

彼なりに、エランを説得しようとしているのがよく解る。

「ああ、お前の事情は知らん。でも、お前との勝負は、まだ決着が付いていないんだ。早く呪いを解いて戻って来い！ いつまでも待てないぜ。俺がこいつを奪い取る前に、早く戻れ！ 遊んでいる暇はないぜ！」

僕はエランのマントを取ろうと、テオフィルスに腕を掴まれながらも必死に手を伸ばす。

だが、エランの方が早かった。

テオフィルスに飛び掛かった直後に、エランは素早くマントを手にする。

「エラン、それは天界人の罠だ、羽織らないで！」

「……これを身に着けている時だけ、僕は魔剣の影響を受けずにいられる」

マントを脇に抱えながら、彼はテオフィルスごと僕を捉えようと、魔法で出来た網を繰り出す。

テオフィルスは僕を抱えて、その網から逃れた。

次の瞬間、左手をエラン含む前衛部隊に向けて突き出し、七竜リンクルを呼び出す。

「リンクル、出でよ！」

圧倒的な破壊力を持つ竜の影の出現に、前衛部隊もモラスの騎士も成す術もなく後退

する。

「退け！ 《聖なる泉》まで、退却！」

アレインの呼びかけにエランも従い、マントを羽織りながら踵を返す。

僕はテオフィルスに腕を掴まれながら、必死にエランの元へ行こうとした。

「元の君に戻れ、エラン！ 君の苦しみを、僕は受け止めるから。お願いだから、戻ってくれ。エラン、エラン——！」

エランは後ろを振り返る事なく、朱色のマントを翻しながら僕の前から去ってゆく。

僕の声は、もう彼には届かない。

テオフィルスは無情にも僕とエランを引き離し、本隊と後衛部隊が僕達を守り、エランとの間に壁を作る。

僕は幼馴染みを失った悲しみに打ちのめされ、しばらく声を出す事も出来なかった。

## 第八話 王国の行方

『なにを嘆いているの？ 君が望んだ事だよ』

浅い眠りの中、美しい光に包まれて清らかな声が、残酷な言葉を僕に投げかける。

輝く翼をゆつくり羽ばたかせ、オッドアイの瞳でセルジン王そっくりの顔立ちなのに、王とは対照的な冷たさを持つ、〈ありえざる者〉オーリン。

セルジン王と女神アースティルの間に生まれた天界人、そして僕の命の光となった存在。

夢の中に彼が現れたのは、初めての事だ。

僕の心が、オーリンを拒絶する。

「僕はそんな事、望んでない！」

『忘れたの？ 母上の宮殿で、君がエランを魔界域へ行かせないって言ったんだよ。僕は「君って残酷だね」って言った。だって、こういう事だろ？』

僕は、オーリンに掴みかかる。

「違う！ 君に助けを求めて言った訳じゃない。エランに寄り添うって意味で言ったんだよ！ 君は彼に託<sup>かたく</sup>けて、エステラーン王国を滅ぼそうとしているだろう？」

『ふふ、どちらにしても滅びるんだよ。天界の意志は曲げられない、たとえ七竜でもね。それなら君とエランだけでも、助かる方法を僕は考える』

「僕とエランだけ、彼にはどう言った？ 国王軍は助けがないなんて言っていないだろう、君はエランを騙しているんだ！ お陰で僕は、エランを罰しなければならなくなつた！」  
あまりの憤りに僕は涙を流しながら、拳を握りしめ彼の顔を殴ろうとする。

それを避けながら、オーリンは美しく微笑む。

『君がエランと僕の考えに従えば、罰するなんてしなくて済むだろう？ 僕には君達が大事なんだ。他は、どうだっていいよ』

呆れ返る気持ちと、オーリンなりの友情の示し方に、複雑な気持ちになり、握りしめた拳は彼の胸を叩くに留めた。

永遠に生きる天界人にとって、一瞬と思える時間で消えていく人間の価値など、無いに等しいのではないか。

それなのにオーリンは、僕とエランを大事に思ってくれている。  
考えてみると彼は、僕達と近い年齢の天界人だ。

天界と地上の時間が同じに流れていればの話だが、彼は天界にいるより僕の命の光となつて、地上にいる時間の方が長いのではないか。

僕は顔を引き攣らせながら、まるで子供を説得するように、必死に冷静になろうと努

力した。

「僕には国王軍が大事だ、君の父上もそうだろうか？ 君は父上の……、セルジン王の大切なものを、滅ぼそうっていうの？」

『だって、仕方がないじゃないか、僕は母上には逆らえない』

僕は彼を突き飛ばす。

「だからって僕の身体を乗っ取って、余計な事をするな！ セルジンに嫌われても良いのか？ 僕だって君を、嫌いになるぞ！」

『……………』

オーリンは悲しい表情で僕を見つめ、失望したように光の中に紛れ消えていった。

眩しい程の光の夢から、まるで暗闇がやって来たように、低い男の声が僕を目覚めさせる。

「おい！ 起きろ、ヘタレ……」

「若君！ 約束をお忘れですか？ 姫君の名前でお呼び下さい！」

アルマレーク語のマシーナの怒声が、テオフィルスの言葉を遮る。

僕の天幕にテオフィルスが入り込んでいる事に溜息を吐きながら、毛布を頭から被り

直し、拒否の意志を無言で伝える。

現実と向き合いたくないのは、エランの処分を決めなければならないからだ。

反乱を起こした者の処分は、当然死罪となる。

その決定を僕がしなければならぬから、不貞腐れて天幕へ逃げ込んだ。

エランを殺すなんて、そんな事出来る訳ないだろう！

僕は毛布の中で、身を縮めて丸くなる。

「現実逃避すれば事態は悪化していくだけだぜ、お前は本当にそれで、エステラーン国王軍の最高司令官か？ このヘタレ小竜！」

「若君！ それが姫君に対する態度ですか？」

マシーナの怒鳴り声と同時に、僕を覆っていた毛布が剥ぎ取られた。

僕は意固地に、ますます丸く固まる。

「ヘタレなお前に、忠告してやる」

テオフィルスの低い声が耳元で聞こえ、僕は耳を手で塞ぐ。

「反乱者を、許してやれ」

「……え？」

塞いだ耳にくぐもって聞こえた意外な言葉に、僕の意識が現実を引き戻された。

耳から手を離し、恐る恐る声の主に顔を向ける。

すぐ目の前に浅黒く整った顔付きの男が、青い瞳に優しさを湛えて僕を見つめていた。

あまりの近さに、僕の心臓の鼓動が、勝手に跳ね上がる。

この男、黙ひとつていれば、かっこいいのに……。

真つ赤になりながら彼の胸を押しして遠ざけ、慌ててベッドから起き立ち上がる。

テオフィルスの前で無防備に寝ていたくない。

何をされるか分からない、本能的な恐怖心が湧き起こる。

僕は彼を信用していない。

婚約者と認めた訳じゃないけど、彼はそのつもりなんだから……。

幸い不貞腐れて着替えもしないで寝ていたので、普通に服は着ていた。

乱れた髪を撫でつけ、簡単な身繕いをする。

テオフィルスは口角を上げ、腕組みをしてその様子を見ている。

「いいんだぜ、寝ていても。俺もお前のベッドに、仲間入りさせてもらおうかと思つていたところだ」

「若君……」

マシーナが頭を抱え、呆れ顔で首を横に振る、おおよそ姫君に言う言葉ではない。

テオフィルスの言動とふざけた態度に、少し慣れてきた僕は、挑発には乗らず、必要

な事だけを伝える。

「そんな事は断る！ それより、許すつてどういう事だよ？ 戦つて傷付いた兵達は、傷を付けた彼等を許すのか？ 死んだ者もいるんだぞ！」

「兵達に本当の意味で、味方同士の戦いを望む者がいると思うか？」

「……………」

確かに皆が戸惑いながら戦闘に突入した。

上官の命令に逆らえないため、味方同士が剣を交え、友人だったかもしれない相手を傷付けた。

「でも、軍の規律が保たれなくてはならないか？ この先も、反乱を許す事にならないか？」

僕の声が暗く沈む。

「何のためにお前がいるんだ？ 規律も規則も状況による。間違つていると思えば、お前が正せば良いんだ！」

前に同じ事をセルジン王に言われた。

テオフィルスの言葉が、王の言葉と重なる。

《言つたはずだ、判断するのはそなただ。どう対応する、王太子は？》

思い悩み苦しんでいた事に、救いの手が差し伸べられた気がした。



それでも迷いと不安に心が苛まれる。

「僕はエランを助けたい。でも、それは僕とエランが幼馴染みだからだ。知らない人だったら、僕はきつと……、規律に従うかもしれない」

そう思うと自分の判断に自信がなくなり、また打ちひしがれる。

頭垂れた頭に何かに触り、整えた僕の髪をくしゃくしゃにした。

テオフィルスの手が、僕の頭を撫でている。

子供扱いされたようで、僕はその手を払い除けた。

彼が苦笑いしながら、僕の顔を覗き込む。

「お前は真面目だなー、天界人の意志に踊らされるなよ。エランだろうが、誰であろうと関係ない。反乱者を肅清しゅくせいすれば、それこそ奴等の思う壺だ。今は一人でも多く国王軍を救う事、それがお前の務めだろう？」

「国王軍を……、救う事？」

「そうだ、一人も死なせない。エステラーン人の数自体減っているんだ、これ以上減ると、国として成り立たなくなる。本当に滅亡するぜ」

「君は……、王国をアルマレーク内で、本気で存続させる気なのか？」

テオフィルスは、怪訝な顔で僕を睨む。

「当たり前だ。エステラーン王国の辺境は生き残っているし、これからも生き残るだろ

う？ 誰がそこを統治すると思ってる？ 《王族》のお前以外、いないだろう？」  
「……………」

「アルマレーク共和国はその後押しをする、それだけだ！ 他国に攻め込まれないように、しっかりと見張ってやるぜ！」

僕は、王国はすぐにもアルマレークに吸収されると思い込んでいた。

歴史という長い時間の尺度で見れば、確実に吸収されてしまっただろう。

それでも、今を生きている僕達には、エステラーン王国という意識を捨てさせない。

〈七竜の王〉テオフィルスは、そう言っているのだ。

僕の瞳から涙が溢れ出た。

王国は存続する。

そのために、僕は生き残る。

「しっかりとしろ！ ヘタレなお前が一番、天界人に踊らされているんだ、この馬鹿！」

「馬鹿は若君です！ 名前でお呼びするように、言っただけです！」

マシーナが素早くテオフィルスの腕を捻り、背の方に引っ張りながら僕から遠ざける。

「痛つ……、痛い、マシーナ！」

「ふんっ、約束を破った罰です！ これ以上、〈七竜の王〉の品位を落とすのは、許しま

せんよ！　では殿下、会議の席でお待ちしております」

「うん、ありがとうマシーナさん」

「礼を言う相手が違うだろ、俺に言え！　放せ、マシーナ……」

「黙りなさい」

「俺に言え——」

テオフィルスは痛みに顔を歪め大騒ぎしながら、マシーナに引き摺られ天幕を出て行った。

まるで嵐が去った後のように、天幕に静けさが戻った。

品位なんてあるのか？

そう思うと可笑しくなつて、僕はクスクスと笑った。

久しぶりに笑つた気がする。

「ミア、彼はどうやって天幕に入った？」

天幕の奥に控えていた侍女のミアが、微笑みながら答える。

「宰相に連れられてですわ。ライアス様はすぐに会議に戻られましたけど」

「そうか……」

宰相エネス・ライアスは反乱者を許す事に賛成して、ここに彼を連れて来たのだろう。

苦しんでいる僕を、助けるために。

ミアが着替えを持って来た時、僕は受け取ろうとして、ある事を思い出した。「ねえ、ハンカチを知らないかな？ その……、竜の刺繍があるの……」どこことなく頬が染まる。

それがテオフィルスのハンカチである事に、ミアも気付いているはずだ。隠しておいたはずの場所から、いつの間にか無くなっている。

ミアは答えにくそうに、少し顔を顰める。

「……あれでしたら、陛下がお持ちになりましたわ」

「セルジンが？」

意外な答えに、僕は狼狽えた。

王は愛のハンカチの存在に、気付いていたのだ。

## 第九話 モラスの騎士の代行者

「大丈夫か？」

王の天幕へ戻った僕に、迎えたレント領主ハルビイン・ボガードが、心配した様子で声をかけてきた。

僕とエランの事を一番よく知っている、僕の養父だ。

息子ハラルドが魔王アドランに取り込まれ、〈契約者〉として国王軍を苦しめる存在となつた事で、国王軍の中では肩身の狭い思いをしている彼は、少しやつれて見えた。

「大丈夫だよ、ちちうえ義父上」

久しぶりにちちうえ義父上と呼ぶ。

セルジン王に禁止された呼び方だが、今の僕には必要に思えた。

セルジン王を奪われ、エランまでいなくなると、肉親に近い存在が恋しくなる。僕は彼の手を取り、気がかりな事を打ち明ける。

「ベルン長官に、エランを責めないように言つてほしいんだ。エランは騙されているし、苦しんでいる。長官に責められるのは、辛いと思うんだ」

「解っている。ハラルドが掛けた呪いのせいだろうか？ベルンも理解しているはずだ、

驚いただけだよ。私の方から伝えておこう」

僕は頷き、彼の手を放して会議の席に着いた。

「では、反乱者二名の罪は問わないという事でよろしいですか、殿下？」

宰相エネス・ライアスが、優しく同意を促し問い掛け、僕は無表情に頷く。

会議の場では極力無用な発言は控え、表情も崩さないようにしていた。

セルジン王の代行を務める都合上、迂闊な発言は極力控えている。

水晶玉に取り込まれ絶大な魔力を持つセルジン王は、自分の感覚が人の感覚からずれる事を避けるために会議を好んだ。

その王のように皆の意見を微笑みながら聞く余裕等、僕にはまったくできない。

大人達を前に、気後れした素振りだけは見せないように、必死に取り繕う事しかできない。

「言葉で答えろ、エアリス姫。書記官が困っている」

テオフィルスの低い声が、先程とは打って変わって冷たく聞こえる。

きつと偽名で呼ばれているからだろう。

彼の言っている事は的確で、僕を見つめる書記官が戸惑いがちに僕に頷く。

会議の席で知らぬ素振りを見せながらも、国王軍の一員として発言しているテオフィ

ルスは、反発も感じさせないほど、自然に解け込んでいる。

アレインさんの気持ちも解らなくもない。

いつの間にか人を惹き付けているところなんて、気後れしている僕より、よほど《王族》に見えるよ。

軽い嫉妬心を覚えながら、僕は言葉を選び発言する。

「二人の罪は問わない。問題はどうかやって説得し、仲間に引き戻すかだ」  
皆が頷き、それぞれの意見を口にする。

「和睦の使者を送りましょう。私で良ければ、いつでも参ります」

アレインと親交の深い騎士が、名乗りを上げる。

「その前に、前衛部隊の様子は？」

僕の問いかけに、別の騎士が答える。

「今のところ《聖なる泉》の前に陣営を構えてから、大きな動きはないとの偵察隊からの報告です」

「そうか。では、和睦の内容を……」

エネスが僕の指示を、手を上げて制した。

「殿下、その前に皆に確認しておく事があります。宜しいですか？」

僕は頷き「構わない」と伝える。

四十代の白髪の宰相は、セルジン王不在の状況で、国王軍の中核を担っている。

「反乱者の目的は、殿下を奪い天界の意志に従わせる事にあるようですが、目的が漠然としていて、あまりにも唐突に見える。アルマレーク共和国に、反旗を翻す行動とも取れますが……」

テオフィルスが静かに頷く。

「だが、我々の知るアレイン・グレンフィードは、そんな半端な行動を取る男ではない」「その通りだ。このくらいの人数のアルマレーク人なら軍は動かさずに、難癖付けて決闘に持ち込み、自らの手で一人ずつ倒す。彼はそれを楽しみながら実行する男だ」

トキの言葉に、テオフィルスが鼻で笑った。

「俺達はそんな挑発には乗らないし、決闘には発展させない」

テオフィルスが如何にアルマレーク人達を統率しているかが窺い知れる。

彼の後ろに立つマシーナが頷く。エネスが微笑みながら、先を続けた。

「反乱者二名は、天界人に踊らされているように見えますが、本当にそうかを突き止める必要があるでしょう。アレインは王命に背く男ではないし、陛下に一番忠実な存在でもある」

皆が頷く。

「我々のこの地での本来の目的は、『聖なる泉』に辿り着き、殿下が泉の精から導を受け



取る事にあります。それを阻止したい意志が働いていると、私には思える」

僕はエランの事ばかりに気を取られ、肝心の目的の事をすっかり忘れていた。

そしてエネスの洞察力に感心しながらも、疑問が湧き起こる。

「魔王アドランの畏つていう事？　でも、エランは完全に天界人の意志に、ほんろう翻弄ほんろうされているんだよ。それは確かなんだ」

夢に現れた〈ありえざる者〉オーリンは、僕とエランを天界人にする意志を伝えてきた。

その夢が、魔王の見せた夢とは到底思えない。

「アレインに限つて言えば、そのように見えるのです。誰か、ここ最近の彼に不自然さを覚えた者は？　私が確認したいのはその事です」

皆が一様に首を傾げた。

思い当たる節が無いのだ。

僕には最近のアレインは、アルマレーク人に苛立っているように見えた。

でも、それは決闘に導くための演技かもしれない。

「……《聖なる泉》で何かあったのかもしれない。エランと以前から打ち合わせしての反乱だろうが、彼等が接触していた形跡はない。ただエランのいるモラスの騎士に関して、調べられなかった。当人達が不在だからな」

トキが顔をしかめながら、唸るように報告する。

アレインは本隊にいる事が多かったため、彼の情報を得る事は容易いが、エランは僕を守るモラスの騎士達から離れ、後衛部隊の最後尾で魔力の高いモラスの騎士達と修行に励んでいた。

故にエランに関する情報は乏しい。

トキはエラン率いるモラスの騎士の造反が、余程気にいらぬのだ。

セルジン王に僕を守るように言い渡された者達の中で、モラスの騎士の守りが無くなるのは痛手だ。

トキの率いる近衛騎士だけで、魔界域の住人に対抗しなければならない。

「じゃあ、反乱を宣言したアレインさんは、別人の可能性があるって事？ それじゃあ、エランは……、二重に騙されているって事なのか？」

アレインに化けた誰かが、エランを共謀者を選んだ。

その誰かは魔界域の住人かもしれないし、魔王本人かもしれない。

「その可能性もある」

トキの答えに、僕は会議の椅子から立ち上がった。

「エランが危ない！ 早く《聖なる泉》へ……」

話し合う暇など無いように思え、天幕の入口に駆け出そうとしたが、低い声に一喝さ

れる。

「慌てるな！ 今の話は、推測に過ぎない。それより早く和睦の使者を出し、回答を一時待って、《聖なる泉》へ軍を動かす。モラスの騎士の代わりは、俺が務める！」

テオフィルスの言葉に、誰もが息を呑んだ。

アルマレーク人が会議を仕切ってしまったのだ。

立ち上がり移動しかけた僕は、凍り付いたように動けなくなった。

皆の視線が集中する中、彼は微笑みながら青い瞳を僕に向け問い掛ける。

「それで良ければ、すぐに行動に移すべきだ。そうだろう、王太子殿下？」

和睦の使者は、なかなか帰って来ない。

僕は苛立ちを募らせながら、騎乗し横にいるトキに顔を向けたまま、もう片側は見ない事にしていた。

その片側から低い声が、僕を罵る。

「おい、真直ぐ前を見ろ。また、落馬したいのか？ そろそろ出発の時間だ」

「……………君に仕切られる覚えはない。モラスの騎士の代わり等いらさない！」

会議の席でエネスがテオフィルスの意見に賛同し、僕に強く薦めたため、モラスの騎

士の代わりを彼が務める事になった。

若い《王族》がいくら反対しても、宰相の意見に敵う訳がない。

僕は仕方なく折れたが、テオフィルスに対する反発は必然的に増大した。

トキが大きな溜息を吐く。

「残念だが殿下、モラスの騎士の代わりは必要だ。近衛騎士だけでは魔王の魔力に対抗出来ないし、狙われているのは殿下だ」

「そんな事は、解っている！　けど、僕の天幕に彼が居座るのを、なんとかしてほしいんだ！」

勝手に馬を走らせて、テオフィルスから逃げ出したい衝動に駆られる。

会議の後から、彼が必要以上に僕から離れない、僕の天幕にまで、ずうずうしく入り込む。

「モラスの騎士の代わりだからな」

「天幕の中までは、許可していない！」

「俺の事は、気にするな。空気だと思え」

「そんな事、無理だろう！　だいたい、エランが怒る！」

「モラスの騎士を連れて行った、あいつが悪い。文句なら、あいつに言え」

テオフィルスの言葉に、僕の苛立ちが頂点に達しかけたその時、後衛部隊から知らせ

が届く。

「殿下、ロイ・ベルンをお見掛けしなかったかと、レント領主からの問い合わせです」  
「ベルン長官？ エランがいなくなつてから、見てないけど……」

丁度同じ時に、テオフィルスの元にマシーナが急ぎ駆け付け問い掛ける。

「若君、ルギーを知りませんか？ 何処を探してもいないんです」

「知らん……。おい、タイミングが合いませんか？」

僕達は緊張しながら、顔を見合させた。

国王軍から一人また一人と人がいなくなつていく事に、僕達はようやく気が付いたのだ。

## 第十話 最強の騎士の脅威

まもなく《デイスカールの聖なる泉》へ辿り着く。

道の端を兵達が剣を抜き警戒する中を、僕は近衛騎士達とテオフィルスに守られながら本隊の先頭へと進む。

辺りは静まり返り、行軍の物音と馬の嘶いみなきが異様に響き渡る。

風もない荒れ果てた森の道は、前衛部隊が整備したので楽に通る事が出来た。

その前衛部隊は、誰一人いない。

偵察隊の報告では、《聖なる泉》の前に陣を張っているはずだが、戦った形跡もなく忽然と消えていた。

知らせを受けた僕達は、急ぎ《聖なる泉》の前に駆け付けたのだ。

「どこへ行ったんだろう？ まさか、全員消されちゃったんじゃない……」

僕は馬上から、エランの姿を求めて必死に辺りを見回した。

彼の安否が心配で、居ても立っても居られない。

「落ち着け！ 天界の連中にセルジン王は加勢を求めたんだ。エステラーン王国が滅ぼされるのは、王が水晶玉の〈管理者〉になった時だ。少なくとも今の段階では、俺達を

消したりしない」

「僕の馬の横を並走しているテオフィルスは、緊張しながらも落ち着いた様子で辺りを窺<sup>うかが</sup>っている。

彼が率いるアルマレーク人の竜騎士隊でも、最年少の竜騎士見習いルギーが姿を消していた。

本隊と後衛部隊でも、十数名の兵が削り取られるようにいなくなっている。

その中にはエランがレント領にいた時の主君である、ロイ・ベルン長官も含まれている。

いなくなった者達がどんな方法で連れ去られたのか、誰にも分からない。

一足ごとに緊迫感が高まる中、前衛部隊とモラスの騎士の失踪は、よりいっそう恐怖を煽った。

国王軍のほぼ四分の一を、失ったに等しいからだ。

彼等はいったい、どうなったのか？

「やはり魔王が仕掛けてきたって事か？ 上空に天界の兵士がいるのにな？」

魔界域の軍勢ともいえる屍食鬼は、天界の兵達によつて遙か上空に追いやられ、僕達には近付けない。

魔王アドランと〈契約者〉達が、直接仕掛けてくる可能性が高い。

「ふん、当然仕掛けてくるさ、お前の持つ宝剣を奪い、殺すために。奴等にとって、お前は唯一邪魔な存在だから、魔力を身に着けるのを阻止したいのさ」

僕は立ち枯れた木々越しに空を見上げた。

屍食鬼が作り出す暗黒の空に、ゆつくりと輝く星が動く、それらはすべて天界の兵士達だ。

地上の異変に気付いている様子はない。

僕は天界に拘り過ぎている。

セルジンを奪われたから……？

導を受けた左手を見つめた。

最後の導を受け取ったら、僕はどうなるのだろうか？

魔力をもらっても、扱う事すら出来ないのに……。

ますます不安になり、僕は腰に嚴重な装備で吊るしてある、《ソムレキアの宝剣》に手を置く。

紫水晶で作られた宝剣は、冷たく心地良い。

それは緊張を解す不思議な安心感を僕にもたらし、心を落ち着かせた。

この安心感は、セルジンに触れている時と同じだ。

《王族》の魔力に近い。



……これも天界の魔道具なのに、なぜこんなに優しい？

同じ天界の魔道具でも、〈抑制の腕輪〉とは正反対な感覚だ。

これを奪われると、セルジン王を、水晶玉から助け出す事が出来なくなる。

絶対に奪われてなるものか！

僕の中に、魔王と戦う気構えが、ようやく湧き起こる。

王を失ってから、しばらく見失っていた事だ。

いつの間にか、平常な状態の自分に戻りつつあるのを意識する。

「お前はその宝剣を守れ、俺がお前を守ってやる。だから絶対に俺の側を離れるな！」

「え？」

その言葉と同時にテオフィルスが突如、僕の馬に飛び移り、手綱を奪い取る。

突然の加重に馬は驚き暴れ、僕は振り落とされそうになった。

「どけ！ お前に二人乗りの操作は無理だ。鞍の前で鬣たてかみを掴み、あぶみ 鐙を外せ。早く！」

有無を言わせない気迫に押され、なんとかバランスを取りながら移動する。

彼の見事な手綱捌さばきで、馬はすぐに落ち着きを取り戻した。

抗議しようとした僕は、ようやく異変に気付く。

前方に嫌な空気を感じ取り、息苦しさに喉を詰まらせる。

「リンクル、元の姿に！」

テオフィルスの言葉に、アルマレーク人達が周りに警告を出す。

周りの騎士達も竜の影の出現に慣れてきたのか、巻き添えを食わないように、恐怖に逃げようとする馬達を制御し、急いで移動する。

テオフィルスの馬は膨れ上がり、三倍くらいの大きさになったところで、大きな翼を広げ長い尾を振り、立ち枯れた木々を薙ぎ倒す、凶暴な外見の七竜リンクルの姿になった。

竜から強烈だが、心地良い熱気が溢れ出る。

それは前方から来る邪気押し退け、僕の気分の悪さを元に戻す。

竜の出現と同時に、前方から叫び声が上がった。

《聖なる泉》のある場所から、黒い渦が爆発的に湧き起こり、本隊を先導していた兵達が苦しみ倒れてゆく。

「あの瘴気しようきを吹き飛ばせ！」

テオフィルスの指示に、竜は空中へ舞い上がり翼を前方に羽ばたかせ、強風を湧き起こす。

人々を苦しめる黒い渦が吹き飛ばされる。

テオフィルスに抱き抱えられたまま、吹き飛ばされないように、僕も必死に馬の鬣を握りしめ、強風の中で薄目を開けて周りを見回した。

身を屈める人々の後ろ、《聖なる泉》のある方向に、全身に豪華な黒い鎧を装着した〈門番〉が立っていた。

怒りを漲みなぎらせ、黒い渦を撒き散らしながら近付いてくる。

黒い渦は吹き飛ばされても、〈門番〉は強風等関係なく、剣を抜き今にも国王軍に襲い掛かろうとしている。

「危ない、逃げろ！」

僕の声は、風に阻まれ兵士達には聞こえない。

この世で最強の騎士と言われる〈門番〉に、立ち向かう間もなく切り殺される兵達。

「〈門番〉から離れろ！」

トキの怒声に彼等はいよいよやく危険に気付き、強風の中を必死に後退するが、〈門番〉の素早い動きに次々と倒されてゆく。

テオフィルスが僕を抱き抱えながら、上空の竜に向かって低い声で指示を出す。

「リンクル、おとり囿おとりになれ！」

聞こえそうもないその声を、リンクルはしっかりと受け止め、羽ばたきを止め〈門番〉に向け急降下する。

竜の鋭い爪を、〈門番〉の剣が受け止める。

〈門番〉は防戦に転じ、国王軍は難を逃れた。

テオフィルスが前進する指示を身振りで伝え、トキが指示を出す。

「本隊騎士隊全員、歩兵を守りながら、泉へ進め！ 後衛部隊はその場で待機！」

後衛部隊への、待機合図のラッパが吹き鳴らされた。

馬車や大きな荷物を運ぶ役割もある後衛部隊は、道から逸れる事が出来ないため、〈門番〉を迂回する事が出来ない。

一定の距離を保てば、〈門番〉は人を襲う事はしないはず。

危険を承知でも、その場で待機するしかない。

本隊の騎士達は歩兵達を守る陣形で、枯れた森を突き抜け、戦う〈門番〉を迂回しながら前進した。

〈門番〉の横を通り過ぎた時、地の底から響くような声が聞こえた。

『全ての入場を、拒否する！』

黒い渦を盛大に振り撒きながら、剣を振るい国王軍を阻止しようとする〈門番〉を、竜が阻む。

〈門番〉としての意識が残っている事に、僕は一縷の希望を見つけ出す。

完全に、魔界域に吞まれている訳じゃない。

泉の精も、きつと生きている。

〈門番〉を迂回した後、足場の悪い枯れ森から、枯れ木の散乱する道らしき場所へ戻る。

ここまでは前衛部隊が辿り着いてないため、森よりは幾分ましな状態の悪路。枯れ枝と倒木のせいで、人も馬も身体に小傷を負いながら、〈門番〉から逃れるために必死で疾走した。

どこまで行っても、《聖なる泉》の門は現れない。

皆が不安を感じ始めた頃、二人乗りの僕の馬が、疲れのため速度を落とす。

テオフィルスが手綱を引き、馬速を常足まで落とす。

「おい、ヘタレ小竜、俺は下りるぞ。手綱を取れ！」

「え？ そんな、急に……」

「今のお前なら出来る。裸馬の訓練を信じろ」

そう言い残して、彼は走る馬から飛び下りた。

一瞬、指示を失った馬は止まりかけたが、僕がどうにか鎧に足をかけ、鞍に移動した事で再び走り始める。

裸馬の訓練は、思った以上に僕の平衡感覚を鍛え、騎乗操作を上達させていた事に驚きを感じる。

馬の横を走り始めたテオフィルスが、僕を見上げて嬉しそうに微笑む。

僕は自分でも不思議に思うほど、彼に微笑みを返していた、まるで心が通じ合ったか

のように。

ラツパの音が、後方から鳴り響く。

本隊の最後尾が、〈門番〉から安全な距離まで離れた合図だ。

トキが停止の指示を出し、テオファイルスは七竜リンクルを呼び戻す。

いつの間にか森の前方に霧が立ち込め、停止したばかりの本隊に、霧魔を警戒して松明の数が増えた。

僕は後ろを振り返る。

後衛部隊を仕切る、レント領主ハルビインが気になったのだ。

(義父<sup>ちちうえ</sup>上、どうかご無事で……)

未踏の森に迷い込んだように、在るべきはずの《聖なる泉》と前衛部隊の姿を、僕達は必死に捜し求めた。

## 第十一話 かつての友

「(ハハ)は、どこだ？」

辺りを警戒しながらトキ・メリマンが、エネス・ライアスに問い掛ける。

馬を休めるため、しばらく休憩を取った国王軍の本隊は、見知らぬ枯れ森で完全に道に迷っていた。

荒れた道の先は、濃い霧が渦巻き、視界が利かない。

デイスカール領主のエネスは困った顔付きで、見えない《聖なる泉》を見出そうとしていた。

「サージ城から続く街道が近くにあるはずだが、ここは分からない……。《聖なる泉》以外はないはずだ。街道の場合、馬で半日の距離でイルー河畔の砦があるが、まだ先のはず……」

霧は今や濃霧となり、完全に行く先を閉ざしている。

霧魔が出ないといいいけど……。

僕の不安を察したように、テオフィルスが左手を高く掲げ、声を張り上げる。

「リンクル、霧を吹き飛ばせ！」

左手の竜の指輪から七竜リンクルの影が飛び出し、再び上空で風を起こす。霧は吹き飛ばされたが、現れたのはどこへ通じるとも知れぬ荒れ果てた道のみ、皆が失望の溜息を吐く。

トキが皆の気持ちを代弁するように、ボソツと呟く。

「やはり〈門番〉の許可が無いと、門すら現れないという事か」

「そんな事はないよ、トレヴダールでは、許可が無くても門は現れたよ」

僕の反論に、トキが指摘する。

「あの時はマール……、いや、マルシオン王がいたから、門が現れたのではないか？」

彼の妃が楔石として門を守っていると、殿下に聞いたが」

「それは、そうだけど……」

マルシオン王に会うために門が現れたのだとしたら、彼がいない今は現れない。

絶望的な考えが、心に浮かぶ。

〈門番〉に許可を取るしかないという事か？

どうしたら許可が取れる？

近付く事さえ叶わない〈門番〉を説得するのが不可能だと思えた時、トレヴダールで泉の精を呼び出した方法を思い出した。

「そうだ、水だ！ 悪いけど皆、僕の周りから少し離れて！」



近衛騎士達とテオフィルスが少し距離を置いたのを確認して、僕は水袋を持ち、心中で強く願う。

姿を現せ、泉の精！

そうして水袋の水を、地面に垂らす。

細く滴したたった水から霧が湧き起こり、吹き飛ばされたはずの霧も意志を持つように、僕の前に寄り集まってくる。

近衛騎士達は警戒し、劍柄に手を置いた。

目の前の霧は凝縮し、やがて人とも魚ともつかない姿を一瞬現す。それは最後に見た時より、かなり小さく苦しそうに見える泉の精。

『助けて……』

泉の精は道の向こうを指差し、すぐに消えた。

僕は泉の精が指し示す方向へ顔を向け、驚きの声を上げる。

「あれは？」

道の向こうに、閉ざされた門が見える。

それは《聖なる泉》の門ではなく、武骨な城門で、その上に聖鳥と船を重ねた紋章が刻まれている。

「そんなはずはない！ サージ城がこんな場所に……」

いつも冷静なエネスが、狼狽うろたえていた。

突然現れたかつての居城が、彼にとって幸せな時間と、その幸せが残酷に奪われた記憶を思い出させた。

「これは明らかにアドランの罠です。入るべきではありません！」

「でも、この中に泉の精がいる。助けを求めているんだ」

僕にはあの姿が本物と解る、ここ以外に《聖なる泉》へ辿り着けない事も。

エネスは青褪めた顔付きで、城門に刻印された紋章を見つめていた。

彼の葛藤が目に見えて分かる。

魔王アドランへの憎悪を、一番抱えているのは彼だ。

かつての友アドランが、彼の目の前で家族を惨殺した。

絶対に魔王を、許しはしないだろう。

一見冷静なエネスは、深い溜息を吐いた。

「では入場する前に、天界の兵士達に、危険を知らせる合図を出しましょう」  
トキが割って入る。

「それは危険だ、奴等は信用出来ない。天界の兵士の参戦は、地上が大変な事になると女神が言っていたではないか。それを承知の上で言っているのか？」

セルジン王が、天界人の国王軍への加勢を条件に、女神の意志に従った。

彼が去つてから今まで、天界への助けを求めた事はないし、僕もそれはしたくはない。王を連れ去つた天界人を信じる気にはなれないからだ。

エネスは厳しい顔つきで頷く。

「当然、承知の上だ。陛下が不在の状態で、モラスの騎士隊もない。魔王相手に七竜一神の影の加勢だけでは、戦えない！」

テオフィルスが頷いた事に、僕は驚きを覚えた。

彼はもつと自尊心の強い人間だと思つていたので、意外に思える。

「……それは、そうだが、危険すぎる！」

「いや、宰相殿の言う通りだ。今の七竜は一神弱つた状態で、本来の魔力は出しきれていない。不本意だが天界の連中に、助けを借りた方がいい」

テオフィルスの言葉に、トキが皮肉な笑いを浮かべながら挑発する。

「ふん、弱腰だな。それを分かつていながら、陛下から殿下を引き受けたのか？ 王国が欲しかったから？」

「止める、仲違いしている場合か！ 彼にどれだけ助けられているか、トキさんだつてわかつているだろう？」

僕が止めた事で、トキは顔を顰め視線を逸らす。

彼の苛立ちも理解出来る。

魔王は武力だけで勝てる相手ではなく、実際に今、僕を守っているのはテオフィルスと七竜リンクルなのだ。

近衛騎士隊長として、面白い訳がない。

「レクターマの竜の指輪と、次期領主さえ戻れば七竜の魔力は元に戻る。それに今の状態でも、王太子は守れる。ただ、国王軍全体を守るのは不可能だ。……お前は どうしたい、エアリス姫？」

テオフィルスが僕に、偽名で呼びかける。

国王軍の一員として、冷静な判断を要求する時は、その名を呼ぶ。

僕の心に、訳の解らない不満が湧き起こる。

僕は、エアリスじゃない……。

僕は俯いて、彼の顔を見ないようにした。

天界に助けを求めるべきだと理性では解るが、セルジン王を連れ去る時の女神アースティルの笑い声が、僕を苦しめて判断を鈍らせる。

僕は、天界人を信用出来ない！

強くそう思った時、腰に下げている《ソムレキアの宝剣》が不意に光を放った。

その光は紫水晶の宝剣の形のままだに、宝剣を離れ僕の目の前に浮かび上がる。

テオフィルスが宝剣の光から、僕を守るように前に立つ。

「宝剣に何を願った？ 言え！」

「別に……、何も願ってないよ。ただ、天界人は信用出来ないって……」

「それだけか？」

僕は頷く。

宝剣の光は今や枯れ森の上空高く上がり、やがて強い光を放って消えた。

「何の合図だろう？」

僕は不安から、無意識にテオフィルスの腕を掴む。

《ソムレキアの宝剣》が勝手に動くのは、初めての事だ。

緊張に皆が警戒し、トキの指示で弓兵が上空に向け矢を番<sup>つが</sup>える。

やがて上空から、大きな翼の羽ばたく音が聞こえた。

近衛騎士達が剣を抜き、僕とテオフィルスを守り囲む。

羽ばたきは大きくなり、枯れ木を吹き飛ばしながら、彼は地上に舞い降りた。

大きな美しい翼は、地に足を着けた段階で彼の背から消え、いつもの冷たい威圧的な

金色の瞳が僕を睨み付ける。

「呼んだか？」

マルシオン・テイエム・ベイデル。

エステラーン王国で過去に葬られたベイデル王家の、最後の王が現れたのだ。

「ぼ……、僕は呼んでない！」

「そなたに言ったのではない、ブライデインの《王族》。《ソムレキアの宝剣》に、言ったのだ」

《ソムレキアの宝剣》が答えるように、薄っすらと光を放つ。

マルシオン王は黙り込んで、僕の聞き取れない何かを、聞いているように見えた。

そして威圧的な金色の瞳で、僕を睨み付ける。

「そなた達はここまで追い込まれて、なぜ天界に助けを求めない？ 前衛部隊と後衛部隊が、窮地に陥っているぞ」

「えっ？」

僕の鳩尾みぞおちが、緊張でキリキリと痛む。

最後に見たレント領主とエランの姿が、血に塗れている姿を想像して、泣き叫びそうになるのを必死に堪こらえた。

横にいるテオフィルスが、僕をマルシオンから隠すように肩を抱きしめる。

「セルジン王の出した条件を、活用も出来ない愚か者め。そなたはそれで、国王軍を仕切っているつもりか、ブライデイン！ 七竜の眷属に頼るなど、言語道断！ そなたが

宝剣の主でなければ、その首を刎はねているところだ」

「無礼者！　いくら古いにしえの王といえ、殿下に対する侮辱は、俺が許さんぞ！」

かつての友に怒りを露わにしたトキが、剣を構えてマルシオンに近付こうとしたのを、僕は必死に止めた。

「いいんだ、トキさん。マルシオン王の言う通りだよ。僕は私怨で動いて、国王軍を窮地に落としている。女神の仲間を、どうしても信用出来ないから……」

「あの女神は、信用しなくて良いですよ」

突然、マルシオンの声と口調が変わった。

振り向いた僕の目に、優しい外見のマール・サイレスが映る。

マルシオン王が変身した姿は、彼に対する恐怖を打ち消している。

「外見など当てにならないですが、私が国王軍に参戦するには、この姿の方が良いでしょう？」

微笑むマールに、僕は顔を引き攣ひきこらせて頷く。

未知の魔力ちからを有する者に近付く恐怖は、暗闇に一步踏み込む恐怖と似ている。

これも天界の罠かもしれない。

それでもセルジン王が、身を挺たてして国王軍に残していった援軍なのだ。

「受け入れるよ、天界の加勢を」

## 第十二話 告白

霧の中に見え隠れする荒れ果てた城壁は、押し寄せてきた国王軍を拒絶するように高く聳<sup>そび</sup>えているが、堀の水は干上がり、跳ね橋は下りたまま朽ち果て、容易に中に入れそうに見える。

堅く閉ざされた鉄の落とし格子は、長年の錆<sup>さび</sup>に覆い尽くされ、その向こうは黒い幕でも張つてあるように暗闇だ。

突如現れたサージ城塞の前で、僕は突然現れたマルシオン王を協力者として受け入れた。

セルジン王を天界の罠に追い込んだ、敵に等しい存在なのに手を借りざるを得ない、それほど国王軍は追い込まれている。

僕は不安を振り払いたくて、縋<sup>すが</sup>るように問いかけた。

「それで、前衛部隊と後衛部隊は？ 窮地に陥っているって……、皆は無事なのか？」

「後衛部隊は天界の兵士達が助けましたが、前衛部隊とモラスの騎士隊はこの中です。中までは見通せず、安否は不明のままですわね」

マルシオン王が変身した姿のマルは、そう言つてサージ城塞の城門を指差す。



エランの事が心配で、胸が痛みを訴える。

無事でいてくれ、エラン……。

僕は恐る恐るマールに近付こうとしたが、近衛騎士隊長のトキに止められた。

彼はかつての友を、信用出来ずにいる。

「マルシオン王、貴殿が本当に我等に加勢する気があるのか、証を見せてもらおう」

マールが呆れ顔で、トキを見据える。

「相変わらず現実的な男だな、トキ・メリマン。……証か」

そう言つてテオフィルスに目を向ける。

マルシオン王がアルマレーク人を毛嫌いするのは、彼の王家が竜の襲来によつて滅ぼされたからだ。

七竜の魔力によつて地上にいる竜は大人しくなったが、彼の中では今も竜は憎しみの対象、水晶玉の〈管理者〉として永遠に生きていても、その憎しみは変わらないように見える。

七竜を崇めるアルマレーク人が、まして〈七竜の王〉であるテオフィルスは、宿敵にも思える存在だろう。

琥珀色のマールの目から、冷たい憎しみの色が消えた。

「テオフィルス殿、私は過去には囚われない。今は共に国王軍のために協力しよう」

マールが手を差し出す。テオフィルスは無表情にその手を見つめた。

「お妃も、この中か？」

「……………」

「目的は妃の救出だ、そうだろう、マルシオン王？」

マールは皮肉な笑みを浮かべる。

「貴殿もそうではないのか？ 婚約者を取り戻したいだけだ。王国も国王軍も、本当はどうでもいいのではないのか？」

テオフィルスは一瞬、眉をしかめ、その後静かに笑い始めた。

「俺がそうでも、こいつが許さない」

そう言つて、僕を指差した。

テオフィルスが否定しない事に、僕は内心狼狽えながら、二人の勝手な会話に怒りを隠さず声を上げた。

「当たり前だ！ 僕には国と国王軍を守る責任がある。個人の理由はなんでもいい、あなた貴男方は僕に協力してくれるのか？」

「なんでもいい」の一言に、テオフィルスは少し非難するような視線を、僕に投げた。命がけで僕を守ってきたのに、彼の意識に目を向けない言い方だ。

僕は失言を恥じながら、彼から視線を逸らした。

「すまない。なんでもいいという言い方は、少し乱暴だ。個人の意思は自由だと言いたかったんだ」

嫌な予感に僕は、彼からジリジリと後退する。

テオフィルスは構わず僕に近付き、腕を掴み引き寄せた。

彼が屈み込んで、僕の耳元で囁く。

「お前が好きだ。俺の理由は、それだけだ」

いつものからかいではない甘い囁き。

彼の表情はとて真剣で、少しせつなげに僕を見つめている。

僕は真つ赤になつて彼の手を振り払い、トキの後ろに隠れた。

テオフィルスの真つ青な瞳に魅入られたように、心臓が勝手に暴走する。

また、竜の魔法にかけられたんだ。

簡単に思い通りにされて、たまるものか！

……セルジン。

セルジン、助けて！

僕は必死にセルジン王を思い浮かべて、抵抗を試みる。

僕の盾にされたトキは盛大な溜息を吐いて、苛立ち露わにテオフィルスを睨み付ける。

「早くしろ。霧が濃さを増している、夢魔が来る！ それに〈門番〉も……」  
彼がそう言った途端に、本隊後方から叫び声上がる。

「追つて来たぞ、〈門番〉だ！」

皆が一斉に剣を抜き、戦いに備える。

城壁に退路を断たれ、倒木だらけの深い荒れ森に分け入るか、最強の騎士〈門番〉と無謀に戦うかしかない。

テオフィルスは即座に、左腕を空に突き出し叫ぶ。

「リンクル、〈門番〉を追い払え！」

彼の竜の指輪から、再び七竜の影が上空高く飛び立ち、その勢いで霧が払われ視界が少し広くなった。

リンクルは後方へ飛び去る。

テオフィルスは急ぎマールの元へ戻り、無理やり彼の手を取り握手した。

「マルシオン王、今は手を組もう。絶対に裏切るなよ！」

マールは優しい微笑みを浮かべて頷く。

マルシオン王の表情とは、ずいぶん対照的だ。

「約束する！」

僕はテオフィルスを警戒しながら、マールに近付いた。

今度はトキも口を出さず、僕の後について来る。

「少しは信用する気になったか、トキ？」

マールの問いかけに仏頂面で頷くトキは、城門を見ながらボソツと呟く。

「前衛部隊はどうやって、この錆びた鉄格子を開けた？」

「上空から見ていた限りでは、門を通る事に難儀していた様子はなかったぞ」

「では、あの鉄格子は、幻覚か？」

マールは首を傾げながら、腰に下げた鞆から小袋と極めて細い短剣を取り出した。

トキは呆れ返って、表情を崩す。

「まだそれに、拘こたわっているのか！」

「まあ、見ていろ」

そう言つて小袋を鉄格子に投げ、それが当たる直前に、短剣が投げられ突き刺さる。

爆発的な発火を予想していたが、何事も起きず小袋と短剣は、鉄格子の中に消えた。

「また貴重品を無駄にした。お前の予想通り、あれは幻だ」

「鉄格子の穴を通り抜けただけじゃないのか？」

「その場合は炎が見えるはずだ、石畳に短剣が落ちた音さえしない。あの門は変だ。中に何が待ち構えているかは分からん、気をつけろ！」

本隊の後方からの声は、まだ収まらない。

リンクルが〈門番〉を追い払うのに苦戦しているのだ。

「サージ城塞へ入ろう、早くしないと後方の兵が〈門番〉に殺されてしまう。エネスさん、良いね？」

エネス・ライアスが治めていた城塞に、立ち入る許可を求めた。

彼の言う通り、これは魔王の罠だと僕にも思えるが、前衛部隊とモラスの騎士を助けるには、罠に飛び込んでみるしかない。

エネスは厳しい顔つきで、マールに問い質す。

「マルシオン王、天界の兵達は貴殿に従うのか？」

「この姿の時は、マールとお呼び下さい、宰相殿。女神アースティルが介入しない限り、私に従うでしょう。あの中の状況は解りませんが、《ソムレキアの宝剣》がある限り、天界の加護はあるとお思い下さい」

マールの言葉に僕は驚き、腰に下がる《ソムレキアの宝剣》を見た。

マルシオン王を呼び寄せたのは、この宝剣だ。

今は光を放つてはいないが、確実に意志を感じる。

「殿下の宝剣には、天界のどなたの意志が介在しているのですか？」

エネスの鋭い質問に、マールはやんわりと皆の意識を現実に戻す。

「それは殿下にしか知らされない。それより急いだ方が良いでしょう、天界の兵達は、

〈門番〉には不介入です。本隊の兵達が、無謀な応戦を始めている。見殺しにしたいですか?」

エネスは顔を顰<sup>しか</sup>め、深い溜息を吐いた。

「致し方ありません。急ぎましょう」

その言葉にトキが指示を出し、僕を守るように隊列が組み直された。

先頭の勇氣ある騎士が警戒しながら鉄格子の中に入り、すぐに戻ってくる。

「中は普通に城門内で、外郭<sup>そとぐるわ</sup>の原と立ち並ぶ家が見えますが、人の姿も屍食鬼の姿もありません」

僕はトキと顔を見合わせた。

前衛部隊とモラスの騎士は、サージ城塞の奥深くに、危険を承知で分け入ったという事だろうか。

後方の騒ぎがより大きくなり、迷う暇はないと僕を責め立てる。

「急ぎ、サージ城塞へ進め!」

僕は指示を出し、本隊がようやく動き始めた。

テオフィルスとアルマレークの竜騎士達が、僕の馬の横にピタリと寄り添うように走り始める。

七竜リンクルが〈門番〉と戦っているので、テオフィルスは馬を失っている状態だ。

僕は彼を意識しないようにしながら、城門を通り抜けた。鼓動の騒ぎは緊張感のせいだと、自分に思い込ませる。

城門内に本隊が、ほぼ入り終えた。

国王軍の喧騒以外、何の気配もない。

屍食鬼に滅ぼされたはずの城塞の内部は、驚くほど荒れ果てた様子もなく、つい先ほどまで人が管理していた状態に近い。

「ここは壊滅した城塞です。十五年前、私の目の前で、屍食鬼に覆われた、死の都です。幻覚に騙されないで下さい」

懐かしさと苦しみを滲ませ、エネスが僕に警告する。

テオフィルスが、左腕を高く掲げる。

「リンクル、戻れ！」

城門の上空は、不思議なほどの青空で、澄み渡っていた。

そこにも屍食鬼の姿はない。

「リンクル！」

テオフィルスの低い声が、大きく響く。



しばらくして彼は左手を下し、竜の指輪を見つめた。

マシーナが心配そうに空を見上げて、不安を口にする。

「若君。七竜が、戻ってきませんね……」

「ああ、リンクルと隔絶された」

彼の顔は、青褪<sup>あおざ</sup>めていた。

## 第十三話 魔法制御

突き抜けるような青空は、久しぶりに見る景色だ。

でも爽やかに見えるそれは、明らかに作り物の青空。

そして不安を倍増させるテオフィルスの言葉。

「リンクルと隔絶された」

アルマレーク語の言葉を、僕は聞き逃さなかった。

それから、他の二人も。

「七竜と隔絶されたとは？」

「魔法が使えなくなつたという事でしょうか？」

エネスとマールが同時にアルマレーク語で問い詰める。

二人共違和感のない流暢りゆうちやうな話しぶりだ。

皆に不安を与えないよう配慮しての異国語だが、トキが低い声で一喝する。

「エステラーン語で話せ、隠し事はなしだ！」

もつともな意見に、テオフィルスが頷くうなづ。

皆が注目する中、彼は冷静に話し始めた。

「この空間は、俺たちの世界とは違うようだ。七竜リンクルの影と切り離され、俺は……、魔法が使えなくなった」

皆が動揺し、騒ぎが徐々に大きくなった。

魔王に対抗できる強力な手段が、この未知の城塞で国王軍から消えたのだ。

騒ぎを抑えるように、彼の低い声が響く。

「魔法が無くても、王太子は必ず守る！ それは約束する」

彼を囲む竜騎士達が、力強く頷く。

トキが顔を顰<sup>しか</sup>めながら、マールを睨む。

「魔法が使えるのは、マルシオン王だけという事か……」

「いや、もう一人いる。そうですね、殿下？」

マールは僕に微笑みかけながら、無理な要求をしてくる。

マルシオン王の怖さは無いが、強引な意志の強さは王そのものだ。

「僕は……、制御できないよ」

「そう思い込んでいるだけですよ。〈抑制の腕輪〉を外しましょう」

僕は恐怖を感じ後退りながら、腕甲の上から腕輪を押さえた。

「これは、外れないんだ」

「そんな事はありません。殿下が本当に望めば、簡単に取り外せますよ。魔力を怖がる

気持ちは解りますが、扱えなければこの状況は打破出来ない。解りますか、殿下？」

「……………」

マールは人懐っこい笑顔で近付き、阻もうとした近衛騎士を押し退け、僕の腕に触れた。

「失礼します、オーリン様」

次の瞬間、僕の腕から腕甲と〈抑制の腕輪〉が取れ落ち、周りから緩やかに炎を含んだ風が湧き起こる。

テオフィルスとアルマレーク人達、近衛騎士達は危険を回避するため、素早く僕から離れた。

魔力は僕の周りの小さい範囲になぜか留まっている。

水晶玉の〈管理者〉であるマールだけが、まったく魔力に影響されずに僕の横に立っていた。

地面から〈抑制の腕輪〉を拾い上げ、彼はそれを腰から下げた鞆に押し込む。

「どうして？ トレヴダールでは近寄れなかったのに、今は僕の魔力が効かないの？」

「ソムレキアの宝剣が、私の味方をしているからですよ」

僕は複雑な思いで宝剣を見つめた。

明らかに天界の意思が宿る宝剣なのに、聖なる泉の精の魔力を制御している。

両者は対極に存在し、お互いの魔力の制御は出来ないと思いつ込んでいた。

「マールさん、これじゃあ周りに迷惑をかけるだけだ。腕輪を返して下さい!」

「殿下は一度、魔力を制御した事がありますね。宝剣が私にそう伝えています」

「え?」

言われて初めて、忘れていた記憶が甦る。

確かに僕は一度、泉の精の魔力を制御した。

あの時は切迫した状況下で、無我夢中だったため記憶に残らなかった。

トレヴダールで女神アースティルと対峙する前、テオファイルをセルジン王の魔力から救い出す時に、ほんの短時間だけ魔力を制御したのだ。

「でも、あの時は七竜の声が聞こえていた。彼を助けるために、七竜が力を貸してくれたんじゃないのか? 今は声なんて聞こえないよ」

「七竜の影響ばかりではなく、宝剣も力を貸していたのですよ。ですが殿下の意志の方が強い。制御して下さい、殿下には出来ます!」

制御しなければならぬと思っただけで、苦しさに息が詰まってくる。

それが外れた〈抑制の腕輪〉の影響なのか、ただの僕の思い込みなのかは、まったく解らない。

「……無理だよ。僕には出来ない」

恐々マールを見上げると、彼は微笑みながら誰かを見つめていた。

「では、殿下に必要な者を呼びましょう。テオフィルス殿、殿下の横にてお力添えを」  
「マ、マールさん！」

僕は青褪めた顔で、マールにしがみつく。

「止めてくれ！ 彼は今、魔法が使えないんだ。焼け死んでしまう！」

「では、殿下が制御するのです。彼を殺したくはないでしょう？」

マルシオン王の残酷さは、外見が物腰の柔らかいマールに変わっても、その本質は変わる事がない。

僕は憎しみを込めて、古の王を睨み付けた。  
いにしえ

「あなたもやつぱり天界人だ。彼が死んだら、エステラーン王国も、アルマレーク共和国も共に滅ぶ。それが目的なのか？」

「さて、私も王国の一員のつもりですが、まだ天界人に見えますか？ 心外ですね。別に嫌なら、トキでも構わないのですよ」

それを聞いて、トキが無表情にマールを睨む。

横にいるテオフィルスが、面白がるように一歩前に踏み出した。

「俺の方が炎に馴れている、適役は俺だろう。エアリス姫、制御しろよ」

「止めろ、近付くな！」

「若君！」

僕の叫びにマシーナが止めようとしたが、テオフィルスは振りきり僕に近付いて来る。

僕の周りに渦巻く炎が、彼の皮膚に被さり顔を歪める。

髪がちりちりと焦げる。

「制御しろ！」

彼の低い声が、僕に強要する。

彼の存在が僕の魔力に大きく作用するのは、婚約解消でイリを失った事で嫌というほど思い知った。

僕の目に炎に包まれた彼の姿だけが、焼き付く。

「止めろ！」

僕が叫んだ瞬間に炎が消え、テオフィルスの周りに霧状の膜が出現し、やがて消えた。膝をつき倒れかけた彼を、駆け寄ったマシーナが支える。

手当てをしようとは靴から塗り薬を取り出したが、それは使われる事はなかった。

傷は〈生命の水〉によって、回復していたのだ。

「お見事です、殿下」

マールが僕に微笑んでいる。

いつの間にか風も炎も消え、僕の周りは静けさに満ちていた。反対に僕の心は荒れ狂っている。

テオフィルスに支配されている気がして、反抗心がメラメラと沸き起こる。どうして、彼なんだ！

僕は落ちた腕甲を拾い上げ、憤りながらトキに言う。

「僕はマールさんを信用出来ない」

「ふふ、だろうな」

妙に楽しそうに笑いながら、トキが腕甲の取り付け方を教え、僕は一人でなんとか取り付けた。

「魔力を扱えるのは、悪い事じゃない。殿下は陛下のように王国のために、それを扱えるようになればいい」

「……うん。努力してみよう」

扱いはなんとなく解った気はする。

でも、思い通りに使える自信はまったくくない。

僕は倒れたテオフィルスを見つめた。

マシーナが意識を取り戻させようと、あの苦い葉を口に入れた。

途端、テオフィルスは飛び起きて葉を吐き出す。



「苦っ！」

馴れているはずの彼でも、あんな風に反応するんだと思うと、先程の苛立ちが消え面白く思えた。

笑ったつもりはないのに、彼が僕を見て微笑んでいて、咄嗟に視線を逸らし、関わらない振りをした。

テオフィルスは構わず近付いて来る。

「俺が生きているって事は、お前が魔法制御出来たって事だ。お前の中にいるあいつは、俺を殺したがるはずだから……。よく制御してくれた、ありがとう」

「べ……、別に。君のために制御した訳じゃないよ」

テオフィルスの素直な感謝の言葉に、また鼓動が騒ぎ始める。

彼の顔を見ないようしながら、別の疑問に意識を向けた。

彼が僕の中に、〈へありえざる者〉オーリンを見ている。

僕の命の光であるオーリンは、彼に感じ取れるほど、表面に現れているのか？

ひよっとして、テオフィルスには見えているのか？

僕は恐る恐る、彼を振り返った。

いつも皮肉っぽい笑みで僕を見下す彼は、今は優しいけど少し悲しい表情をしている。

僕の言動が彼を傷付けているようで、気まずさに横を向いた。

「このまま、リンクルの影と離れていると、竜の指輪はいずれ俺の指から消える。竜の影が俺を見失って、死んだ事にされ、次期領主の資格を失うんだ」

それは彼にとつて、辛い事なのだろう。

いつもの無表情なのに、慣れてくるとその中に、微妙な表情の変化を読み取れる。

彼は苦しんで見える。

「……………君は〈七竜の王〉じゃないのか？ それでも指輪が消えて、資格を失うなんてあるのか？」

「〈七竜の王〉は伝説じみっていて、俺が生まれて初めて実在した事が分かったらしい。もう何百年も現れてなかったからな」

「じゃあ、資格を失った後の事は、誰にも解らないって事か？」

「そうだ。でもお前と王国の事は必ず守る、俺に次期領主資格が無くても、そのくらいは出来るはずだ。一応、〈七竜の王〉権限」

そう言つて笑いながら、彼はぼんやりと左手中指にはまる竜の指輪を見つめていた。

その姿は、とても寂しそうだ。

僕は無意識に、彼の指輪に左手を置く。

なぜそうしたのか、なぜそう思ったのか全然分からないけど、そうするのがとても自

然な事に思えた。

「この竜の指輪は、消えたりしないよ。だから早くエラント、泉の精を捜そうよ」

僕のアルマレーク語での言葉に、テオフィルスは一瞬驚きに大きく目を見開き、やがて極上の笑みを浮かべた。

「ああ、そうしよう！」

そう言つて、僕の重ねた左手にくちづけをする。

「うわあああ！」

僕は我に返つて彼の手を振り払い、真つ赤になりながら飛び跳ねるように、彼の横にいるトキの後ろへ逃げた。

トキが魔法の炎を避けながら、呆れてボソツと呟く。

「だから、エステラーン語で話せつて！」

## 第十四話 竜騎士の呼び笛

なぜ僕は、テオフィルスの竜の指輪に手を置いたのだろうか？

確信もない言葉を、なぜ口に出来たのだろうか？

——この竜の指輪は、消えたりしないよ——

僕とテオフィルスの間には、何かしら共感出来る不思議な事柄がある。

それは感情とは関係なく、精神の一部に自然と備わっている感覚。

僕の中に流れるアルマレークの領主家の血が及ぼす影響、それとも竜の魔法に翻弄されているのか。

一番の問題点は、この鼓動の騒ぎ。

僕の気持ちとは関係なしに、彼の言動に勝手に身体が反応する。

テオフィルスが「七竜の王」だから？

僕は操られているのか？

反抗心が高じて、彼を遠ざけるようセルジン王の側近達に要求したが、天界から舞い降りたマルシオン王——マール・サイレスに反対された。

「まだお分かりになってない。彼は殿下に必要な存在ですよ、遠ざけてどうするのです

「？」

「あれが近くにいと、調子が狂うんだ！　お願いだから、少しでいいから遠ざけてくれ」

「彼が殿下を、姫君扱いし始めたからですか？」

マールが意味深に微笑む。

思つてもいかなかった言葉に、僕は眉根を寄せて呆然と彼を睨み付けた。

姫君扱い！

テオフィルスが僕を、姫君扱いしているだつて？

憤りが沸々と沸き上がり、怒りで身体が震え始める。

「止めさせてくれ！」

「トキの後ろに隠れたりしないので、ご自分で頼んでみたらどうです？　案外、素直に応じてくれるかもしれませんよ」

マールが優しく微笑んで、彼の元へ行くよう道を譲った。

テオフィルスは今、少し離れた場所で竜騎士達を集め、何か指示を出している。

僕は彼から視線を外し、不貞腐れたようにマールに抗議した。

「何時から竜騎士の味方になった？　古の王は、アルマレーク人を毛嫌いにしえいしていたんじゃないのか？」

マルシオン王に対して、不敬な態度で言葉を投げつける。彼の怖さは嫌と言うほど知っているが、憤りの方が上回った。

優しい外見のマール・サイレスに変身しているが、僕に対して怒りを向けてくると思っていた。

暗に反して彼は少し悲しい表情を見せたただけだ。

「遙か昔、私がブライデインを《王族》に仕立て挙げたのです。それ以来、影でエステラーン王国を支えてきたつもりです。私も王国を滅ぼすのは忍びないのですよ。陛下と同じように、《王族》を失う事に恐怖を感じるのです、姫君」

意外な言葉に、僕は怪訝な顔で彼を見つめた。

「マールさんに変身すると、性格まで変わるのか？　僕はマルシオン王には、嫌われていると思っていたけど」

彼は肩を竦めて、笑い始めた。

「さて、どうでしょう。殿下の対応次第では、また恐ろしい存在にもなり得ますよ」  
そう言つて、テオフィルスの元に行くように優しい微笑みで強要する。

結局、古の王には、僕の意思など関係無いのだ。

諦めの深い溜め息を付きながら、僕はマールの横を通り過ぎ、竜騎士達に近付いた。

緊張感で鼓動が騒ぎ始める。

テオフィルスは僕の要求を聞き入れてくれるだろうか。

変に口説かれたりしたら、どう対応して良いのか分からなくなる。

それを止めてほしいが、上手く伝えられる自信は無い。

彼の姿を見ないように少し下を向きながら、精一杯の虚勢を張って、彼の前に進み出る。

どう切り出すか迷う間もなく、彼の方から話しかけてきた。

「良い時に来た、お前に頼みたい事がある。急ぎだ。その鎧の腰に、小さな鞆が付けてあるだろ。その中から呼び笛を取り出してみろ」

「……呼び笛？」

竜騎士の鎧に馴れてない僕は、腰鞆の中身を確認した事がない。

身支度はミアに任せっきりで、ここ暫くはセルジン王を失った苦しみに溺れていたからだ。

今初めて鞆を開け、中を確認する。

小さな鞆には取り出すのが大変なくらい、多くの物が収納されていて、どれが呼び笛なのか戸惑う。

「左端に立ててある。収納出来る輪の中だ。いつもそこへ入れておけ」

言われた場所に細い短い笛が立っていて、他の物が飛び出ないように気を付けて取り出してみた。

笛の表面に竜が絡み付いた浮き彫りが施され、とても綺麗に見える。

「イリの事を想いながら、それを鼻ふくろうになつたつもりで、一・二・一・三の調子で吹いてみる。音は人間には聞こえないが、竜には聴こえる。間違えずにやれ」

「……リンクルも入れないこの場所から、アルマレークにいるイリを呼び出すのか？ 聞こえないだろう、どう考えても不可能だよ」

テオフィルスが、イタズラを画策しているように笑った。

「イリは今、他の竜騎士達と一緒に、イミル王国の魔法使い達と戦士達を連れながら、国王軍の後を追っているんだ」

「ええっ！ そんな大事な事、会議の場で一言も……」

テオフィルスが秘密の素振りや、唇に指を当てる。

他に知らせたくないのだ。

僕の横にいるトキが、黙って聞けと伝えてくる。

「セルジン王がお前を俺に託す前に、指示を出した。俺達への国王軍の反発も考慮して、お前にも知らせないように配慮された。知っているのは宰相殿だけだ。王は賢い。自分がいなくなった時に、グレンフィード大将が反旗を翻す事を予測していたんだ」



トキが無表情に頷く。

彼も予測はしていたのだろう。

アレインは国王軍を取り仕切ってきた、能力のある人物だ。

セルジン王を見失った時、彼なりに王国を守る気でいたはず。

反乱を起こす前に僕が冷静に話せていれば、事態は変わっていたかもしれない。

そう思うと自分の不甲斐なさに、涙が出そうになり頭を抱えた。

「……………僕に、《王族》としての能力が足りないからだ」

「そうじゃない、お前の半分がアルマレーク人だから、混乱を招くんだ。《王族》としての能力は、十分に足りているさ。でも、アルマレーク寄りと思われするのは、仕方のない事だ。だからこそ大將はお前を自分のものにしようとして、何度も俺に阻まれた。憤りはお前ではなく俺に向いて、暗殺計画も全て阻んでやった！」

まるで勝者のように、彼は不敵に笑う。

一番突かれたくない点を突かれ、僕は顔をしかめた。

半分敵国人である僕は、たとえ《王族》でも国王軍の信用を勝ち得るのにふさわしくはないのだ。

テオフィルスがあの日から僕に冷たく当たったのは、反乱への警戒からだ。

怒りが僕に向かわないよう、彼等の憤りをわざと引き受けた。

王を失った苦しみに、周りに気を配れないでいる僕を、突き放しながら守っていたのだ。

涙が、頬を伝った。

「でも……、反乱は起きてしまったよ、エランまで……。僕のせいだ」

「ああ、気にするな。王が予想していたという事は、起こるべくして起きた事、誰にも止められないさ。でも、ここに導いたのは、彼等じゃない。こんな空間は、彼等には造れない。反乱だつて魔王絡みなら、大将の意志だけとは限らないさ。これは緊急事態だ。リンクルも呼べない異常な空間で、七竜の加護は今の俺にもお前にもない。竜達に聞かせる保証もないが……、それでも、何もしないよりはいい！ 泣いている暇はないぞ。早く笛を吹いて、イリを呼べ」

テオフィルスの真剣な要求に、僕は涙を振り払った。

周りの竜騎士達は、偽物の青空を見上げながら、音の鳴らない笛を吹き鳴らしている。僕も笛の吹き口に唇を当て、イリを想う。

竜の狂暴な顔が僕を見た途端、瞳孔が丸く真つ黒になり、可愛らしく甘えた声を上げるイリ。

あんなに大きな生き物を、小動物のように愛らしく感じ取れるのは、僕が彼女の竜騎士だからなのだろう。

イリに会いたい。

そう思いながら、教えられた吹き方で笛に息を吹き込む。

鳴っているのかも、イリに届いているのかも、まったく分からない。

それでも、必死に強く願う。

僕はここにいるよ、イリ。

君に会いたい！

竜の鳴き声は、聞こえない。

不安に思つて、もう一度吹こうとして、テオフィルスに止められた。

「一度でいい。しはらくしてから、もう一度吹け。それより、何か用があつたんじゃない

のか？」

問いかける彼の瞳は、優しさを湛えている。

魔力を使えなくなったせいかな、いつもの傲慢な態度が消えているように見える。

僕が彼を見詰めていると、不意にいやらしいほど傲慢な表情で笑つた。

「なんだ？ 愛の告白なら、いつでも歓迎するぜ」

「……………誰がするか！ そういう態度を止めると言いに来たんだ。女扱いするのは、

止めてくれ！」

前言は撤回する。

まったく変わってない。

憤りのあまり、彼に掴みかかりそうになった時、突然それまでの青空が消え去り、周りの景色が真つ暗闇に変わった。

目の前が見えない中、テオフィルスが僕の真横に立ったのを感じた。

誰かの手が、僕の腕を掴み取り引き寄せる。

「竜を呼ぼうとしても、無駄だよ。ここは魔界域だ。七竜の魔力は届かないし、天界の兵達も、ここまで降りては来られない」

「エラン?」

耳元に聞こえるのは、幼馴染みの優しい声。

でも、言っている言葉は、彼のものとは思えない。

僕は身を守るために、心の中で〈祥華の炎〉を呼び出す。

僕の周りに薄つすらと炎が揺らめき、その明りは僕の腕を掴む人物を照らし出す。確かにエランには違いがないが、彼の背には醜い屍食鬼の翼が、悪事を求めるように

怪しく蠢うごめいていた。

## 第十五話 人質

「エラン？ 君は……、本当にエランなのか？」

「当たり前だろ、他の誰に見える？」

黒い翼を背に持つ彼は、モラスの騎士の服装ではあるものの、総隊長のマントは羽織っておらず、何よりセルジン王から賜った銀の額飾りが外されている。

僕と天界の住人になる事を希望していたエランとは、あまりにもかけ離れて見える。

「嘘だ！ 君は、違う。何者だよ？ その姿は、止める！」

屍食鬼の暗黒の翼が、暗闇の中で羽ばたき音を立てる。

彼は暗い微笑みを見せながら、僕を抱き寄せる。

僕はその腕を振り払おうとしたが、がっしりと掴んだ手は吸いついたように離れず、

〈祥華の炎〉はまったく役に立たない。

「放せ！」

テオフィルスとトキが剣でエランに切りかかるが、幻を切るように何の傷も負わせる事が出来ない。

「何だ、手応えが無いぞ」

「魔法だ、本物じゃない！」

僕を掴んだ手は力を増し、引き摺られてエランに捕らえられる。

僕は〈祥華の炎〉を彼に放ったが、やはり何の効果も無かった。

どうして？

泉の精の魔法が、役に立たないなんて……。

僕は助けを求めて、周りを見回した。

暗闇の中に国王軍の灯す松明が、上空を埋め尽くす屍食鬼を照らし出す。

咄嗟に僕は、炎が屍食鬼と人々の間に壁を作るのを思い描いた。

すると炎は勢いを増し、僕の周りの人達を犠牲にする事なく壁を作る。

屍食鬼には、泉の精の魔力は有効なようだ。

上空の屍食鬼は阻めたが、地上の屍食鬼との戦いは阻めず、激しい戦闘が至る所で始

まった。

屍食鬼の鋭い爪が国王軍の兵を切り裂く。

不思議な事に倒れた兵に向けて、屍食鬼が火矢を放ったのだ。

身体が乾いているので燃えやすい屍食鬼は、火を恐れる、火を扱うのは異例な事だ。

トキが激を飛ばす。

「火矢を放つぞ、気を付けろ！ 屍食鬼を殲滅しろ！ マール、殿下を守れ！」

「解っている」

優しい外見のマール・サイレスは、微笑みながら僕を静観している。

「殿下、いったい誰と、いつまで遊んでいるのです?」

「え?」

その瞬間、エランの姿がかき消えて、僕の腕に絡み付く醜い植物の蠢く蔓が見えた。

蔓には黒い渦が絡み付き、毒素を撒き散らしながら僕を引き摺る。

その毒気に恐怖を感じるのは、気分が悪くなり身動き出来なくなるのを知っているからだ。

泉の精の魔力のせいで、僕に人々が近付けない時に、その状況では国王軍が不利に陥る。

ところが不思議な事に、いつもの気分が悪さが感じられず、普通に動けるのだ。

〈抑制の腕輪〉を、外しているからなのか?

蔓を持つ植物には、多くの屍食鬼の口と思しき醜い牙が、茎の中から涎を垂らしながら、僕を食い尽くそうと待ち構えていた。

「放せ!」

右手と足に蔓が絡み付き、僕の身体が浮き上がる。

必死で空いている左手で、右腰に下げた短剣を取り出し、腕に絡む蔓を何度も切り付けて離し、足に絡む蔓はテオフィルスが飛び上がりざま切付け、落下した僕を素早く抱き抱えて、暴れる植物から救出する。

「大丈夫か？」

切り離された蔓が僕の手足に絡んでまだ蠢いているのを、彼が冷静に取り外して顔を覗き込む。

心配している彼の真つ青な瞳に、僕は頷きながらも狼狽えた。

「だ……、大丈夫だよ」

泉の精の魔力はテオフィルスを弾かず、逆に彼の周りをうつつすらと水の幕が被い、へ生命の水が守っているように見える。

どうして？

テオフィルスは泉の精に好かれているのか？

七竜の加護が無い状態でも、彼が特別な存在に思えて、僕はなんだか無性に腹が立つた。

彼から慌てて離れ、八つ当たりのように、不機嫌に文句を呟く。

「マールさん、判ってるんなら、もっと早く魔法を解いてくれても……」



「マールは微笑みながら、背から輝く翼を出現させ、次の瞬間に切り裂くような魔力を纏まとったマルシオン王に戻った。

「そのくらい単純な魔法も見抜けないで、泉の精までたどり着けるのか、ブライデン？  
この先は魔界域の入り口だぞ」

外見も対応も鋭角的な古の王に、僕は顔をひきつらせながら疑問をぶつける。

蔓を切られ暴れる植物が、僕を狙って突進して来るのを、国王軍が必死に戦い止めている。

「魔界域って、あの植物は魔界域のものなのか？ でも、泉の精の魔法が通じないよ？」  
マルシオン王から微笑みが消えた。

「あれは魔界域に飲み込まれた聖なる泉の構成員だ、泉の精の魔法が通じないのは当然だ。我が妃も飲み込まれようとしている」

マルシオン王の周りから冷たい怒りの炎が溢れ出て、僕が恐怖に逃げ出したくなった時、テオフィルスが緊迫した様子で割り込んだ。

「マルシオン王、この屍食鬼達も幻なのか？ 何かがおかしい、味方が圧されているぞ！  
なんとか出来ないのか」

「ふふん、竜がいなくても、貴殿の目は節穴ではないようだ。その通り、上空の屍食鬼は本物だが、地上の者は偽者。こんな術は簡単に破れる」

彼はそう言つて片手を上げ、皮肉な笑いを浮かべながら指を鳴らした。

古の王の周りから、辺り一面に何かが拡がっていく。

激しい戦闘を繰り広げていた国王軍の兵達は、一瞬で屍食鬼を見失い、目の前に現れた前衛部隊に度肝を抜く。

屍食鬼との戦いと双方とも思い込まされ、味方同士で殺し合っていたのだ。

地に倒れ屍食鬼のように扱われた遺体は、誰であるか見分けもつかない。

皆がその残酷さに、茫然と立ち尽くす。

笑い声が聞こえた。

前衛部隊の中心部、アレイン・グレンフィードの上空、そして中心を取り巻く数人のモラスの騎士の上空、それから部隊の前面に立つ総隊長の朱色のマントを纏ったエラン・クリスベインの上空。

〈祥華の炎〉を突き抜けて降りてくる、黒い翼を生やした五人の〈契約者〉達。

エランの上空にいるのはハラルド・ボガード。彼は卑下した笑いを浮かべながら、僕達を指差し命じた。

「目の前の屍食鬼を、全滅させろ！」

するとエランが操り人形のように、同じ言葉と動作を繰り返す。

中央にいるアレインも同じ指示を出した。

彼等には僕達が、まだ屍食鬼に見えている。

マルシオン王の魔法が効いていないのだ。

前衛部隊から火矢が飛び、エランとモラスの騎士達が魔法防御の壁を作り、触れた者を弾き飛ばす。

味方の攻撃を防ぎながら、本隊の兵達はじりじりと後退する。

「エラン、正氣に戻れ！ 僕達が解らないのか！」

僕は無駄と解つていても、彼に呼び掛けずにはいられなかった。

エランの元に走ろうとして、テオフィルスに止められる。

彼は冷静に古の王いにしえに問い質す。

「マルシオン王、彼等を助けられないのか？」

「ふん、小賢しい。私を誰だと思っている？」

マルシオン王は輝く翼を大きく広げ、〈祥華の炎〉を気にもせず上空に舞い上がる。『汚らわしき〈契約者〉よ、水晶玉の〈管理者〉を侮るな！ お前達の魔法は無効だ』

マルシオン王の身体から、強烈な光が放たれ辺りを満たした。

上空の屍食鬼達が恐れをなして逃げ惑う。

〈契約者達〉が身を縮めて前衛部隊の中に墜落する。

エランもアレインも、目が覚めたように辺りを見回し、魔法防御の壁は消滅した。

僕はテオフィルスの手を振り払い、エランの元に駆け出しながら叫ぶ。

「エラン、気を付けろ！ 〈契約者〉が側にいるぞ！」

「オリアンナ」

僕の移動に、本隊が前衛部隊に迫り、落ちた〈契約者〉を捜そうとする。

エランは人波にもまれながら、モラスの騎士に指示を出そうと赤い魔剣を掲げた瞬間、動きを止めた。

「お前は、僕の下僕だ」

姿の見えないハラルドの声だけが、彼に絡み付く闇黒の呪縛のように思考を奪い、動きを止めてゆく。

エランの首を被うように、長い鍵爪が現れた。

側面が鋭い刃物のようにエランの皮膚を薄く裂く。

短い傷口から赤い糸のような血が流れ、朱色のマントに吸い込まれてゆく。

「エランー！」

彼に絡み付く爪から先の醜い手が、腕が、身体と頭が、いやらしい程彼を抱え込む醜い形をした翼が姿を現し、〈契約者〉ハラルドが、どれだけエランに執着しているかを如実に見せ付けた。

「誰も動くな。僕の命令に従わなければ、こいつを八つ裂きにしてやる」

動けないエランは成す術もなく、ハラルドの人質に取られる。

他の四人の〈契約者〉も、アレインと周りの騎士達を捕らえた。

僕は助けを求めマルシオン王に視線を送るが、彼は呆れたように首を傾げる。

「あれに魔力が使われていると思うのか？ 奴等を動けなくしたとしても、あの爪から助け出すのは無理だ。私の魔力で奴等を消し去る事は、この界域では出来ない」

捕らわれた者達は全員、〈契約者〉の爪に今にも切り裂かれそうに見えた。

彼等の身体がふわりと浮き上がる。

その動作だけで、エランの首の傷が広がり、血が朱色のマントに、赤さを増して広がり始める。

「エランー！」

ハラルドの笑い声が響き渡る。

「ついて来い、魔界域へ」

五人の〈契約者〉は人質と共に国王軍の頭上を飛び、サージ城塞の奥、暗闇が支配する魔界域の入り口へと飲み込まれて行った。

## 第十六話 聖なる泉の門

《オリアンナ》

マルシオン王の魔力で、〈契約者〉の魔力から解き放れたエランは、すぐに僕の姿を見つけて出した。

優しい水色の瞳は苦悩からも解放された、いつもの幼馴染みの様相で僕に微笑みかけた。

それなのに、エランとアレインを含む五人が、〈契約者〉によって人質として連れ去られたのだ。

サージ城塞都市の外城壁の異様な堅牢さに阻まれ、天界と七竜の助けも届かない閉ざされた空間で、僕達は敵の後を追った。

上空の屍食鬼たちは僕の放った〈祥華の炎〉に阻まれ、国王軍を襲撃出来ない。僕たちは〈祥華の炎〉の明るさで、〈契約者〉たちを見失わずに済んだ。

僕を取り囲む〈祥華の炎〉と〈堅固の風〉は、《聖なる泉の精》からもらい受けた魔力

だ。

まだ、満足に扱う事は出来ないせいで、僕の護衛たちも遠巻きにしか役目を果たせないでいる。

〈契約者〉たちが内城壁の一か所で消え、そこまで辿り着いて僕は愕然とした。

そこには崩れかけた《聖なる泉》の門が、内城壁に組み込まれて、人が屈んでようやく通れるくらいの小ささで存在していた。

敵はこの小さな門を、人質を抱えて通り抜けたのだろうか？

レント領で僕が初めて見たこの門は、大きく高く荘厳な美しさを湛たえていた。

今は貧弱で崩れかけ、亀裂の入った楔石くさびいしは、今にも消失しそうに見える。

《聖なる泉》を構成するのは、泉の精と契約を交わした者達の魂。

トレヴダールの《聖なる泉》で、魔界域の黒い渦の流出をくい止めたのは、この門を構成するマルシオン王の妃ロレアーナの意識だ。

「ロレアーナ」

マルシオン王が門の前で跪ひざまずき、花とも人とも獣とも思える楔石に触れる。

今にも崩れそうな石は、彼が触れると弱々しい光を放ち、一瞬間に戻ろうとする。

その様子に僕の心は救出の焦りと、マルシオン王の心情の間で揺れ動いていた。

この門は長く持たない。

重い武具に身を包む大勢の国王軍が通れば、すぐに崩壊してしまうように見える。多く見積もっても、十人ぐらいが通れるかどうかだ。

敵の目的は《ソムレキアの宝剣》を奪い、僕を殺す事。

今まで何度も襲撃され、奇跡的に魔手から逃れてきた。

でも、今度は逃れられないかもしれない。

最後の泉の精の導を手にする事を、魔王アドランは徹底して阻むだろう。

不意に僕の脳裏に、セルジン王の横顔が思い浮かんだ。

天界の城に入る時の彼は、危険を承知で、一人で城に入ろうとした。

招かれているのが、自分一人と解っていたからだ。

《ソムレキアの宝剣》が奪われれば、全てが終わってしまう。

僕一人で、宝剣を守るのか？

無意識に宝剣に触れた。

すると、まるでセルジン王に触れているような安心感が、僕の心に流れ込む。

この宝剣に守られている。

そう思うと、勇気が湧き起こる。



僕は、普段は威圧感を怖れて近付かない、マルシオン王の横に立った。

「お妃様の、この門を守れますか？」

「私を誰だと思ってる？ 当然、守る」

マルシオン王の毅然とした様子に、僕はにつこり微笑んだ。

「では、僕がこの門を通った後、国王軍も屍食鬼から守ってください。お願いします！」

僕は門に入ろうとして、彼に腕を掴まれ止められた。

「待て！ どういうつもりだ？ 勝手な行動は、許さん！」

「でも、僕が行かないと目的は果たせないし、エランを助けられるのは僕しかいないんです。お願いします、行かせてください」

「……………本気か？」

「はい！」

躊躇ためらいのない僕の答えに、マルシオン王は無表情に頷くと、突如翼を広げ、周りの兵達たちが驚くのも構わず、天界の清らかな翼を羽ばたかせた。

すると十枚の光る小さな羽が、僕の目の前に降りてくる。

「行くのは、五人までだ。その羽を身に着ければ、魔界域の住人からは見えない。残りの

五枚は、連れ去られた者達に渡せ」

僕は十枚の羽を受け取り、そのうちの一枚を、竜騎士の甲冑の腰鞆に入れた。

「ありがとうございます、マルシオン王。でも、他に連れ去られた者達がいた時は？ 十人以上だと足りなくなりますが」

今、連れ去られた五人以外にも、行方不明になっている者達がいる。

その者達がいた場合は、危険に晒される事になるのだ。

「私に出来るのは、ここまでだ。後は自力で、困難を乗り越えよ。私は国王軍と竜騎士を指揮し、この魔界域の城壁に風穴を空ける。さあ、同行する者を選べ」

僕は九枚の小さな羽を見詰め、その後、周りの人々を見た。

皆が手を上げそうに身を乗り出し、僕を見つめる中、真つ先にテオフィルスが僕に近づき、羽を四枚取り去った。

「お前に近付けるのは、俺だけだ。周りとの橋渡しをする役割だから、当然俺も行く。他に行くのは、誰か？」

「待て、君は残れ！　ここで七竜を呼んでくれ」

テオフィルスはにつこり微笑んで屈み、顔を近付け青い優しい瞳で、僕の視線を釘付けにする。

「心配してくれるのか？」

僕の鼓動は跳ね上がり、身体が熱を帯びる。

こんな非常時だと思うと耐えられなくなつて、近付き過ぎる彼の顔を、手で押し遠ざ

けた。

「そうじゃない。他国の重要人物を、危険に巻き込む訳にはいかないだろう」

「何を今更。俺はお前に、今よりもっと、思いっきり巻き込まれたい」

僕は激しく狼狽うろたえて、思わず大声で叫んだ。

「巻き込まれなくていい!」

その言葉と同時に、彼に向かって〈堅固の風〉を無意識に吹き付け、マシーナ・ルザの元まで吹き飛ばした。

「あ……」

感情的になって魔法を使ってしまった事に、僕は呆然とし不安を感じた。

見境なく感情のままに魔力を使うとどうなるのか、想像するだけで恐怖に身が縮む。

「うわっ」

吹き飛ばされたテオフィルスは、マシーナが受け止めた。

「大丈夫ですか、若君? また殿下に無礼な事を言つたでしょう? まったく口が

悪いんだから。はい、一枚もらいますよ」

マシーナはそう言つて、テオフィルスの手から羽を一枚取り、腰鞘に入れた。

テオフィルスは立ち上がり、泥汚れを払いながら不服そうに口を尖らせる。

長年仕えてくれるマシーナに対しては、素直に心の内を明かす事が出来るようだ。

「ふん、至極全うに口説いただけき。まったく、魔法使いは厄介だな」

「〈七竜の王〉が、それ言います？」

面白がつてケラケラ笑うマシーナを、テオフィルスは怪訝な顔で睨みつけながら、羽を掲げた。

「他に行く者は？」

宰相エネス・ライアスが進み出て、僕に《王族》に対する礼を取った。

「この先が魔界域であったとしても、サージ城塞の形を取るのであれば、此処に一番詳しいのは私しかありません。どうぞお連れ下さい」

宰相エネスは、国王軍に必要な存在なので、出来れば残ってほしいと僕は思っていた。でも、このサージ城塞はエネスの元居城でもある。

中に入りたいと希望するのは、当然だろう。

「これは魔王の罠だよ、エネスさんへの」

「解っております」

エネスの覚悟を決めた様子に、僕は困った顔で下を向いた。

彼を守る自信がない。

トキ・メリマンが安心させるように、助け船を出す。

「私は殿下の護衛だが、魔法のせいで近寄れない。ライアス宰相を守るとしよう。宜し

いかな、殿下？」

冷酷な決断を下さなければならぬ僕に、大人達は優しい。

僕は感情を押し殺し、顔を上げた。

「分かった。行くのは、この五人だ。もし、一日以上経って、誰も戻って来なかった場合は、国王軍は速やかにマルシオン王の指示に従い、ここから脱出するんだ。僕達を待つ必要はない」

残る高官達が冷静に、命令に従う礼を取った。

脱出できる保証は無い。

行くも残るも、命がけである事に変わりはないのだ。

トキが伝令に向け、皆に聞こえるように指示を出す。

「マールの指示に従い、この閉ざされた空間を必ず打ち破れ！」

マールという指定に、マルシオン王は口角を上げて少し笑った。

そして、背の翼の間に腕を挙げ、何かを取り出すように掴んだ。

その手には、拳ほどの大きさの皮袋が握りしめられている。

「これをお前にやろう、トキ」

「何だ、また火炎石か？」

「違う。天界にある巨大樹の、樹液が固まった魔石だ。人には害は無いが、魔界域の住人

には脅威となろう。窮地に陥った時に、紐を緩めて袋ごと敵に投げ、すぐ逃げろ」

トキは顔を顰めながら、薄気味悪そうに袋を受け取り、ベルトに吊るした。

巨大樹の樹液の脅威を、思い出したのだろう。

あれに呑まれたら、人としての自我を失うように思えるのだ。

「……………承知した。後を頼む」

「任せろ」

トキが魔石を手にした事で、僕の心の重荷が少し和らいだ。

「ありがとうございます、マルシオン王。では、行きます」

マルシオン王が厳しい顔付きで頷く。

僕が《聖なる泉》の門に入りかけた時、テオフィルスが阻んだ。

「先頭は俺、お前は真ん中だ」

「若君は私がお守りしますので、ご安心ください」

マシーナの微笑みに、僕の緊張が解れる。

一つ深呼吸をして、狭い門に、足を踏み入れた。

門に入った途端、暗闇が戻ってきた。

僕の放つ〈祥華の炎〉は、漆黒の水に押し込められたように輝きは拡散せず、前を行

くはずのマシーナの後ろ姿さえ映さない。

〈堅固の風〉も同様に押し留められて、《聖なる泉の精》の魔力はまったく役に立たない。

そんな状況で、暗闇の中に大勢の呻き声が聞こえた。

男の声、女の声、獣の声。

苦しみと絶望、憎しみと怒り、そして狂気染みた笑い声。

聞いているだけで、恐怖に身が縮み、僕の足が進まなくなる。

後ろにいるはずの、エネスとトキは気配すらない。

僕一人だけが、暗闇に取り残されている事に、ようやく気が付いたのだ。

暗闇が心を蝕むのに、どのくらい時間が掛かるのだろう。

次第に絶望感が増し身動きも出来ず、身体が震え、声さえ出す事が出来なくなつた。

## 第十七話 生き残った仲間たち

僕の身体に暗闇が染み込んできて、《聖なる泉》の魔力が抵抗し始める。

〈生命の水〉が僕を守ろうと熱を発し、〈堅固の風〉が暗闇を吹き飛ばそうと僕の周りを旋回する。

そして〈祥華の炎〉が最大限の勢いで、暗闇を焼き払おうと炎を放出する。

だが、いずれも漆黒の闇に吸収され、暗黒が僕を蝕み始める。

《聖なる泉》の精から貰い受けた魔力が、糸を紡ぎ出すように僕の身体と精神から抜き取られる。

そのあまりの苦しみに、僕は悲鳴を上げ続けた。

あああああ——。

暗闇の中で聞こえた声は、皆《聖なる泉》と契約を交わした者達の苦しみの叫び。

その一つに僕も加わったのだ。

身体中の力が抜け、《ソムレキアの宝剣》に触る事も出来ない。

蹲うずくまる事も苦痛で、そのまま倒れ込み、僕は完全に闇に飲まれた。

こんな所で死んでたまるか、僕はセルジンを助け出すんだ。



セルジンを……。

必死にセルジン王の姿を思い出そうとするが、そのどれもが女神アースティルと結び付き、僕の苦しみを増す思い出ばかりだった。

セルジン。

セルジン！

セルジン——！

細やかな幸福の記憶がすべて剥ぎ取られ、不幸な記憶が浮き彫りにされる。

王の記憶が遠ざかり、古い記憶の中にある母の最期の悲鳴が、僕の悲鳴と重なり、母を殺した魔王アドランの笑い声が、僕の中に狂気染みた苦痛と憎しみを引き摺り出す。

許さない、許すものか！

母上を奪ったあいつを、絶対に許さない！

魔界域の果てまで追いかけて、必ず消滅させてやる！

『君には、無理だよ』

突然、冷や水を浴びせられたように涼やかな声が、僕の狂気を遮り、心の中に響き渡る。

悲鳴を続けている僕には、誰の声か思い出す事も出来ない、ただの不快な雑音。

『いつまで騒いでも、君は魔界域の住人にはなれないよ。君の命の源は、僕なんだからね、オリアンナ。君は天界の住人だよ、いいかげん正気に戻れよ』

僕の周りに薄らと光が現れて、抜き取られる《聖なる泉の精》の魔力の流出が止まった。

苦痛から解放された僕を包む、光輝く翼。

ああ、なんて綺麗なんだ。

僕はそのまま、意識を失った。

「おい、起きろ。へたれ小竜、起きろ！ 寝ている暇は無いぞ」

低い柔らかな声が、僕の耳元で声をひそめ呼びかけている。

起きる気力も回復しないまま、僕は重い目蓋を開けた。

目の前にテオフィルスの整った顔が、心配そうに真つ青な瞳で僕を覗き込んでいる。

僕は彼に横抱きに抱き抱えられ、何処かへ移動しているようだ。

「大丈夫か？ いきなり倒れて、お前の泉の精の魔力が、一瞬消えた。何があった？ 心配したぞ」

彼の言葉に狼狽えながら、暗闇での嫌な記憶を思い出し、また苦しみに取り憑かれそうになる。

涙が頬に伝った。

「分からない……。暗闇が襲ってきたんだ。僕の周りに、泉の精と契約を交わした☒達  
がいて……。魔力を奪われて苦しみに叫んでいた。たぶん、あのまま魔界域に、吸収さ  
れていくのかもしれない。僕も……。同じ目に……」

身体が震え、涙が止めどなく流れる。

テオフィルスは顔をしかめ、同情するように僕を抱きしめ、頬にくちづけをした。

歩きながらの抱擁に、彼の荒い息に、抱き上げ急ぐ負担を思い知る。

「下ろしてくれ。もう、歩けるよ」

「駄目だ。お前の身体の冷たさは、まだ回復してない証拠だ。このまま、抱かれていろ」  
回復してないのは確かだ。

僕は泣きながら、優しい彼に抱き付き左肩に顔を寄せ、苦しみの記憶から逃れるよう  
に甘えた。

今はそうするのが、一番自然に思えたからだ。

彼は黙って、僕が回復するのを待っている。

身を任せているテオフィルスの息遣いが、力強い身のこなしが、竜の鎧の隙間から放出される体温が、僕の身体を温め鼓動が少しずつ高鳴り始める。

彼の顔がすぐ目の前にある事に狼狽える。

なぜか恥ずかしさを覚え、僕は視線を逸らした。

そして……、ようやく気が付いたのだ、嫌な風が吹いている事に。

「なんだ、此処は？」

テオフィルス越しに見る周りの景色は、まるで激しい灼熱の嵐が四六時中吹き荒ぶ、異様な世界だ。

炎といつても竜の吐くものとはまったく対照的に、醜く邪悪な意思を秘めた炎。

それが強烈な暴風に乗って、建物も樹木も跡形もなく焼き付くし、瞬く間に強風の中に飛び去る。

そうかと思うと、飛び去った塵芥は戻って来て、歪んだ形状に再構成され、再び荒廃した世界を作り出す。

その異様さを、永遠に繰り返しているのだ。

「こんな汚れた炎は、見た事がない。これが魔界域の中つて訳だ」

彼は顔をしかめながら、吐き捨てるように呟く。

「下ろしてくれ、テオファイルス」

「やつと正気に戻ったか、へたれ小竜。よし、下りろ。重い！」

言葉とは裏腹に、彼は優しく僕を下ろした。

地に足が着き、感謝を伝えようと上を向いた瞬間、彼が唇を奪う。

その行為があまりに自然で僕は抵抗する間もなく、驚きに目を開けたまま、ただ呆然と受け入れた。

「こんな時に……」

「こんな時だから。思い出せ、お前は誰か？」

アルマレーク語で囁く彼の言葉は、まるで呪文のように僕の心に浸透する。

彼の少し困ったような優しい瞳は、僕に何かを求めている。

彼の求める何かは、いつも僕の心に湧き起こる言葉だ。

思い出せ。

それが何を意味するか、僕は知っている。

でも、その度にセルジン王を思い出し、心を塞ぐ。

「思い出したくない、今はまだ……」

彼の傷付いた眼差しを受けとめ、僕は必死に見つめ返した。

厳しい顔をしたテオファイルスは、僕を強引に抱きしめ小声で囁いた。

「俺達に何かあっても、お前だけは絶対に生き延びなければならぬ。だから……、セルジン王を助け出すためも、思い出すんだ」

それだけ言うと僕を突き放し、先へと歩き出した。

彼が死を覚悟している事に激しく狼狽えながら、僕は呆然と立ち尽くす。

思い出せ！

心の中で、何かがかんがっている。

それが僕の感情を逆撫でする。

解っている！

僕がオリアンナ・ルーゼ・フィンゼルとして、テオフィルスの婚約者である事を受け

入れれば、七竜の加護を得られる。

そうすれば、この不利な状況を打破出来るかもしれないのだ。

そんな事は、解っている！

涙が出そうになるのを振り払い、セルジン王への想いにしがみ付こうと必死に姿を思い浮かべる。

それなのに、思い浮かべる事が出来ない。

それくらい僕の動揺は酷かった。

テオフィルスの悲しい瞳の残像が、僕の心を焼き尽くす。

「殿下、横を見ろ！ 冷静になれ！」

トキの警告に、僕は我に帰った。

破壊と奇異な再生を繰り返す嵐の中で、僕は言われた通り横を見て驚愕した。視界の悪さを無視するように、それはくつきりと浮かび上がる。

エランを抱えて移動する、《契約者》ハラルドの姿だ。

長い爪を押し付けられ、エランの首から真っ赤な血が流れ滴り落ちている。

その血を目掛け醜い屍食鬼達が、彼の死を待ち構え死体を食いつくさんと群がり、後を移動して行くのだ。

僕達に気付く様子はない。

マルシオン王が授けた魔法の羽が、僕達を守っているのだ。

僕は冷静さを取り戻し、テオフィルスの後を追った。

「テオフィルス！ エランが……」

彼もハラルドの姿を、警戒しながら見ていた。

「落ち着け、あれはお前が意識を失っている間も、何度か通った。俺達を誘き寄せせるための幻だ、害はない。それより、人らしき気配がある」

彼の指さす方向に目を凝らすと、吹き荒ぶ異様な嵐に耐えるよう固まる、人影が見え

た。

「捕らえられた人達？」

「かもしれない。マシーナが偵察に向かった、俺達も後を追おう」

僕は後ろを振り返り、トキと宰相エネスが領くのを確認した。

「行くこう」

どうやって逃げ延びていたのだろう？

罨かもしれないが、一縷いちるの望みを、捨て去る事は出来ない。

僕達は時々立ち止まり、辺りの様子を伺いながら先に行くマシーナに、徐々に近付いた。

強風は僕達に影響しない、これも魔法の羽の効力か。

「マシーナ、人か？」

少し前に行くマシーナが、振り向きざま叫んだ。

「はい、国王軍です」

マシーナが少し残念そうに頷くのは、竜騎士の姿がないからだ。

赤い国王軍の長衣の中に、レント領騎士隊の黄褐色の長衣が見えた。

どこことなく見覚えのある背中に向けて、僕は思い切り大声で叫んだ。

「ベルン長官？ ロイ・ベルン指揮長官ですか？」



その人物は少し顔を上げ、分かるように頷いた。

顔は疲れ切り年を取って見えるが、間違いなくエランの元主君だった。

彼もいなくなった者達の一人だ。

トキが走り寄り彼に触れようとしたが、ベルン長官が制止する。

「駄目だ！俺達がここを動かすと、中にいるアルマレーク人が死んでしまう。触らないでくれ」

テオフィルスがベルン長官に近付き問い質す。

「どういう事だ？アルマレーク人を守っているのか？」

「そうだ。俺達は陛下から賜った護符に守られているが、アルマレーク人には……、護符が効かない！もう、何人も死んだ」

テオフィルスは顔を顰め、項垂れた。

僕は護符をもらっていない。

それは魔法を使えない者達がセルジン王から賜る、小さい不思議な模様の描かれた金属製の護符。

普段は特別な効力もないが、この魔界域では効力があるのだ。

僕は慌ててマルシオン王の羽を取り出した。

「アルマレーク人は、何人いる？」

「二人です、殿下」

長官の言葉に、今度はマシーナが頭を抱えた。

行方不明のアルマレーク人はもつと多かつたはずだ。

僕の魔力は復活しつつあり、迂闊に長官に近づく事が出来ない。

羽をテオフィルスに二枚渡し、彼等が守るアルマレーク人に身に着けるよう伝えた。

しばらくして囲いは解かれ、中から竜騎士一人と少年が姿を現した。

「ルギー！」

奇跡のように生き残った少年は、恐怖と驚きに呆然としていたが、やがて大粒の涙を流し、テオフィルスに抱き付いて大声で泣き始めた。

〈七竜の王〉は、優しく彼を抱きしめる。

「もう嫌だ、こんな所……。嫌だよお」

「ああ、ルギー。もう大丈夫だ、必ず脱出しよう。必ず！」

そう言い聞かせる彼の顔は、暗く沈む。

僕達が入り込んだ出入口は、異様な嵐の中で跡形もなく消えていた。